
勇者タイム

森田 ミヤジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者タイム

【Nコード】

N1174L

【作者名】

森田 ミヤジ

【あらすじ】

ある日突然、異世界に召喚されてしまった高校生、神 健一。彼はいきなりの絶体絶命を迎えるが、その窮地を美少女魔法使いに救われる。

彼女は告げた。

「あなたは勇者よ」と……。

勇者ケンイチの冒険が、今、始まる！

主要人物紹介（前書き）

今頃ですが、とりあえず主要な登場人物をまとめました。

「お、俺のイメージと違い過ぎる……！」

という方はこの設定は忘れて自由に楽しんでいただければと思います。

主要人物紹介

> i 2 4 1 5 1 — 3 1 8 5 <

ジン・ケンイチ（神 健一）

この物語の主人公である。

学業、容姿、運動能力、どれをとっても平均並みかそれよりも少し上、といった器用貧乏の感も漂う高校二年生。

友達が多いが彼女はいない、という悲しい事実が彼の性格を物語る。

年相応にその精神面にはやや未熟な点もあるが、環境への順応性が異常に高く、意外と『やる時はやる』男である。

『不死身』という能力以外には、近年の勇者には珍しく、チートなスキルを持っていない。

何故か一昔前のアニメに詳しくったりする。

（本人には内緒で）各キャラクターから一言

ブルミエル「うーん……ま、特になし」

メイヘレン「なかなか見どころのある少年だと思うよ」

アレイシャ「すっごくいい人だよねっ！」

エステイ「ワシは戦慄した……アレは思春期の欲情を持て余した

ビーストじゃよ」

> i 2 4 1 4 7 — 3 1 8 5 <

プルミエル・ミスmanaガン

異世界に飛ばされてきたケンイチを助けた、通りすがりの美少女。しかしてその正体は、火を司る魔道貴族の長、『ミスmanaガン』家の当主である。

言動が妙に達観しているため、無愛想な人間に思われがちだが、実は結構、面倒見が良い。

学術的探究心が強く、生きた個体としては珍しい『異世界の勇者』であるケンイチを、研究対象として観察するために彼の旅に同行する。

(本人には内緒で)各キャラクターから一言

ケンイチ「あっさりとしていて、しつこくない……そんな子かな。俺の嫁」

メイヘレン「外見からは想像もつかない剛毅な娘だ。非常に魅力的だね」

アライシャ「すつごく可愛いよねえ。ボク、ちよつと羨ましいかも」

エステイ「バアカ!ワシの嫁じゃーい!」(ケンイチの回答に対して)

> i 2 4 1 4 8 — 3 1 8 5 <

メイヘレン・ブランシユール

ルジエの港町で出会う、妖艶な美女。

しかしてその正体は、水を司る魔道貴族の長、『ブランシユール』家の当主である。

その蠱惑的な肢体と物憂げな視線は、男の心を翻弄してやまない。勇者として、セクシャルな欲望を制御しなければならぬケンイチにとつてはジョーカーともいえる存在である。

『面白そうだから』という理由でケンイチの旅に同行するが、実際は他に目的があるとも……？

（本人には内緒で）各キャラクターから一言

ケンイチ「この人といるとマジで寿命が縮みそうッス。でも、俺の嫁」

プルミエル「性格合わない」

アライシャ「すつごく綺麗な人！胸も……あうー（泣）」

エステイ「思わず前屈みじゃて。はあん？ナニが？くだらん事を聞くでない！」

> i 2 4 1 4 9 — 3 1 8 5 <

アライシャ・アルナーチャラム

貿易都市ベデヴィアにおいて、生命の危機に陥ったケンイチを救う、健康的美少女。

その性格は天真爛漫で快活。

他人を疑うことをせず、どんなところに行ってもすぐに友達をつくる事が出来る。

古代魔法の使い手だが、かなり高い運動能力を有しており、格闘術が得意。

現在は武術修行という名目で世界各地を放浪して回っている最中

だが、ひよんなことからケンイチの旅に同行することになる。

（本人には内緒で）各キャラクターから一言

ケンイチ「理想の妹キャラって感じかな？まあ、俺の嫁だよな」

プルミエル「良い子」

メイヘレン「可愛らしい娘だね。毒が無さすぎて私はつまらないが」

エステイ「アリイシャちゃん！マジらぶりい。ワシヤ、もう、駄目になっちまうよオ……」

> i24150 — 3185 <

エステイアンドリウス

プルミエルの別荘に居候している博識の老人。

本名が長いので、皆、『エステイ』と呼んでいる。

ケンイチに『勇者タイム』のシステムを解説し、旅立つきっかけを与えた重要人物である。

一見すると『森の賢者』と呼ばれるに相応しい偉容を持っているが、その内面には非常に年甲斐の無い、子供っぽい部分がある。

おまけに異常にスケベ　つまり、女性に対する執着が強い。

そのせいか、男に対しては非常に厳しい一面をのぞかせ、冷たい態度をとることもしばしばである。

（本人には内緒で）各キャラクターから一言

ケンイチ「スケベジジイ。それ以上にこの人を表す言葉が思いつかねッス」

プルミエル「助平」

メイヘレン「欲望に忠実な　まあ、スケベなんだな」
アリイシャ「スケベ？うーん、そうだなあ……スケベ、だよねえ
……」

> i 2 5 2 7 8 — 3 1 8 5 <

ラーズ・ホールデン

ケンイチと同じ世界より召喚された魔王。

勿論、勇者と対になる存在である。

恐るべき出自を持っており、格闘術も暗殺術もお手の物。

慈悲や情愛といった感情が欠落しており、どんなに陰惨な所業で

あっても常に微笑を絶やさずに、やすやすとやってのけるといって、

まさに魔王向きの人材と言えるだろう。

主要人物紹介（後書き）

こちらは登場人物が増え次第（あと、こっちの気分次第）、随時更新の予定です。

異世界の勇者

よう、皆、元気？

誰だお前、って声が聞こえてきそうだな。

自己紹介しよう。

俺は神じんけんいち健一。青春真っ盛りの高校二年生だ。

学力は中の上くらい。

スポーツは得意だけど成績表はいつも「4」がつく程度かな。

決して優等生ではなく、かといって不良でもない……まあ、あんまりパツとしない感じだ。ちなみに陸上部。

顔はそこそこイケてると思うんだが、女の子にそう言われたことは無い。

だけど俺は決してナルシスではない。はずだ。鏡だつて朝しか見ないぜ。

あとは……あー、友達は結構いるかな、うん。

そりゃあ、世界一社交的というわけでもないがクラスの全員ともそこそこ仲良くやってるし。

休みの日なんかは四、五人でよく遊びに行く。

今ハマってるのは釣り堀だ。シブいだろう？

この間なんてめちゃくちゃでかいマス釣ったんだぜ。

いやあ、楽しかったなあ。

ん？

気になる女子？

ばーか、教えてたまるかつ。

あ、そうそう。

ちなみに今、俺、異世界にいる。

今日も健やかに登校中つてところで、突然目の前が真っ白になって、気がついたら蒸し暑い森の中に倒れてたつてわけ。

驚いちゃうね。

で、何でここが異世界とわかるかというと、今までどんなテレビでも見たこと無いような、大きなブタの化け物に、今、まさにとり囲まれてるからだ。

いや、大きいだけのブタなら俺だって驚かないけど、そいつらは華麗に二本足で立っている。

目が真っ赤にきらきら光つてて、いかにもモンスターってな感じのヤツだ。

おまけにブヒブヒと鼻息を荒くしながら、じりじりとこっちに近づいてきてる。

つまりは俺、絶対絶命の真っ最中にあるわけ。

一番前にいる奴の口の端から、大量の涎が糸を引いて垂れた。わーお、汚えなあ。

どうやらこのままだと、俺は順調にこいつらの胃袋の中に収まっちゃまいそうだ。

「よせ、話せばわかる……」

命乞いのお約束、そうは言ってみたけど、何の反応もない。うーむ、こいつらに言葉は通じないようだ。

予想通りではあるが、状況としてはかなりマズいぞ。

冷や汗が額に浮かんできた。

話すのも無理となると、戦うか？

肉体言語ってやつだ。

しかし、こいつら、ヒグマみたいに身体がデカイ。

おまけに、俺は人生において一度も殴り合いの喧嘩はしたことが無いときてる。

異世界のモンスターVS草食系男子

一対一でも到底勝てる気がしない。

頭の中に、あの言葉がよぎる。

『万事休す』

うまいこと言うよね、昔の人って。この状況にびったりだ。

なんてことを考えているうちに、ブタどもはもう目の前まで接近してきていた。

生温い鼻息が顔にかかる。

おお、臭え。

膝が震えてきた。

無様に失禁だけはしないように、ケツに力を入れる。

ああ……せめて、痛みを感じないように頭から食べてくれ。

俺は、おそらく危機に瀕した全ての生物がそうするように、目を瞑った。

完全に観念した、その時だった。

「聞け、アグネイ！汝は太陽の子、灼熱の炎を司る者！我は欲す、その力の顕現たる炎の矢！」

突然、後ろから女の子の喚き声が聞こえたかと思うと、ビュン！と燃え盛る火の玉が飛んできて、それに貫かれた目の前のブタが、一瞬で火だるまになった。

甲高い悲鳴を上げて、そいつは地面をのたうち回る。

「うお!？」

俺が驚いているうちに、左右の奴も背後の奴も、それらを取り囲んでいた奴らも、とにかくその場にいたブタ全部が、飛来した文字通りの『炎の矢』によって刺し貫かれて、炎に包まれ、一匹残らず火だるまになっていく。

その光景はブタの丸焼……なんていう可愛らしいものではなく、凄惨な地獄絵図だった。

走り回る奴、転げ回る奴、体中をかきむしる奴……。

生きながらにして焼かれる動物を見るのは生理的に耐えられないものがある。

うっぷ。

思わず胃液が逆流してきた。

やがて、モンスター全てが消炭のようになり、香ばしい匂いをさせたまま動かなくなると、炎はその役目を終えたかのようにしゅんと消えた。

俺はというと、呆然とその真ん中に突っ立っていることしかできなかった。

だって、他に何ができる？

自分を蚊帳の外に置いたままの、めまぐるしい状況の変化。

順応しろといっても無理がある。

「呆れた。オークの巢に丸腰で来るなんて」

後ろから女の声がした。

さつき、呪文を叫んでいたのと同じ声だ。

恐る恐る振り返ってみると、ワオ！そこには異世界で出会うのが何とも惜しまれるほどの美少女が腕を組んで立っていた。

ひとときわ目立つのは大きな、黒い帽子だ。ハロウィン・パーティーでよく子供たちがかぶるような、アレ。

そこから覗く、綺麗な金色の髪はくるくるの縦ロールにしている、色とりどりのリボンがいくつもそれに巻きついている。

古い西洋人形のような、ごちゃごちゃとフリルのたくさんついた黒いドレスは、本やゲームなんかでよく見る格好だ。

つまりはそのまんま、ファンタジー風ってこと。

「怪我は無かった？」

おおっ、心配しているぞ。

やったぜ、こいつはロマンスの予感！

おまけに俺の知っている言葉で話してくれるのはなかなかポイント高し。

『意思の疎通』という異世界におけるところの大きな問題の一つが解消されたわけだ。

俺はほっと一安心したが、相手はどうやら少し機嫌が悪いらしい。

帽子の下の、こぼれそうなほど大きな青い瞳がこっちを訝しげに睨みつけている。

「あなた、何者かしら？見ない顔だわ」

おおっと、いきなり核心を突いてきたな。

聞きたいことはこっちのほうが多いんだけどね。

俺は何から話すべきか当惑した。

うーむ、とりあえず無難に名乗っておこう。

「あー、えーと、俺はジン・ケンイチ」

「どっちが名前？」

「ケンイチのほう」

「ケンイチ……変な名前」

失礼な！とは思ったが、ここが異世界であれば已む無しといった感想だ。

「君は？」

「私はプルミエル」

そっちだって変な名前だろ。とは思ったが口には出さない。俺の細やかな気遣いときたら英国紳士も真っ青だ。

プルミエルは怪訝な表情で、頭からつま先まで俺を見た。

「あなた、もしかして異世界から召喚された人？」

正解！

俺は何度も頷いた。

なかなか物分かりのいい女の子だ。

それは今の俺にとっては凄く有難い。

「はぁ……また『勇者』が召喚されてしまったわけね」

プルミエルが、困ったように額を抑えた。
ん？

今、なんて言った？

「勇者？」

「そ」

「俺？」

「他に誰がいるのよ」

「ふーん……」

俺は女の子の手前、クールぶって大して興味が無いフリをしたが、心の中では力強いガッツポーズを決めていた。

『イヤッホー……ウー！テンション上がってきたぜええええッ……！』

と叫びそうになるのをぐっところえる。

勇者は軽薄じゃあいけないからな。

しかし、ヤバい、顔が思わずニヤけてしまう。

俺は顔に力を入れて、そうとは悟られないようにつとめた。

「どうしたの？怖い顔して」

「いや、何でもない」

「変なの」

おやおや、勇者様に対してずいぶんと風当たりの強い娘だね。照れ隠しかな？

「それじゃあ、私は行くから。せいぜい長生きしてね」

「え？」

プルミエルは手をひらひらさせて立ち去ろうとした。

おいおい、そりゃないぜ。

もうちよっと勇者にかまってくれてもいいんでない？

「ま、待ってくれよ」

「何よ。私も暇じゃないんだけど」

「……勇者って何すればいいんだ？」

そいつが大事なところだ。

「さあ？知らない」

「へ？」

おっと、予想外の展開だ。

「ま、魔王を倒すとか、伝説の剣とか……」

「この世界に魔王なんていないわよ。伝説の剣は探せばあるかもね」

「あるかもって……」

「知らないんだもん」

「……戦乱の絶えない世界に平和をもたらすような……」

「今のところ、世界は平和よ。さっきみたいなモンスターはいるけど」

「そ、それじゃあ、俺、何のために召喚されたんだ？」

「さあね」

こ、こんなことってあるのか？

勇者が、いきなりアイデンティティに悩む急展開。

落ち込む俺に、プルミエルが淡々と語る。

「異世界から召喚されてしまう人間は年に二、三人いるの」

結構いるな……。

「何でかは分からないけど、私たちの世界ではそういう人たちを『勇者』と呼んでるの。それだけ」

何だ、それ。

「あ、あと、一個だけ教えてあげる」

彼女がこっちに寄ってきた。

ああ、やっぱり可愛いなあ。

おまけに口は少し悪いが親切な女の子だ。命の恩人でもある。

「それ」

そう言つて、彼女は俺の左手首を指した。

おや？

そこには腕時計が巻かれていた。

シルバーフレームのちよつと高級そうなやつで、デジタル使用だ。外見は超クールだが、妙なのは、そこに出てる『42:12』という時間。

12、11、10……と、何かのカウントダウンのように数字が減つていく。

どうやら時計としての機能を持っているわけではないらしい。

しかし、これ、俺のじゃないぞ？

「いつの間」……」

「それはこっちの世界に来た人が全員つけてるわ」

「へえ」

「で、その数字がゼロになったら死ぬから」

「あー、そうなんだ……」

ん？

今、さらっと衝撃的なことを言わなかったか？

「ええっ！？死ぬの！？」

「ちよつと、いきなり大きな声出さないでよ」

「し、死ぬって？」

「命が無くなること。土に還ることよ」

「俺、死ぬの！？」

「そつよ」

「何で！？」

「知らないわよ。もー、うるさいわね」

俺は慌てて腕時計を外そうとした。

しかし、これ、腕にぴったりとはまってやがる。

留め金も無ければ、指を入れる隙間も無かった。

思い切り引つ張ったり、地面に叩きつけたりしたが、自分の手首が痛くなるだけだった。

「無駄よ。たぶん取れないようになってるの」

「な、何で？」

「知らないつてば」

「い、いやすぎる………なんとかならないか………」

「そう言われてもねえ」

俺はひどくパニックっていた。

普通、そうだろう？

異世界に召喚された途端に死の宣告をされて、平気でいられる奴がいるわけがない。

「ど、どんなふうに………」

「え？」

「どんなふうに死ぬ………」

「時間がきたら、糸が切れたみたいにはったりと」

「マジか……」

「その前に頭がおかしくなっちゃうような人もいるけどね」

その気持ち、分からんでもない。

「そんなに動揺する？さっきだって、あなた、死にそうになってたでしょ」

「あの時はあまりにも現実感が無かったから……」

「同じよ。痛い思いをしなくて済んだだけ良かったじゃない」

残酷なことを言う娘だ！

俺はもう一度、時計に目をやった。

『39：41』

「おおあ、減ってる……!!」

「当たり前でしょ。じゃ、頑張ってるね」

「ま、待った!」

「何よ、もー。ジタバタせずに穏やかな死を迎えなさい」

「も、元の世界に還る方法とかは無いのか？」

「知らない」

彼女はどこまでも冷淡そのものだ。

再び、あの言葉が頭に甦る。

『万事休す』

ネバーギブアップ勇者

「もー、ついてこないでよ」

ブルミエルがこっちを振り返って不機嫌な声を上げた。

「目の前で死なれたら寝覚めが悪くなるでしょ」

「そう言われても、俺は他に行くところが無いんだ」

「じっくり待つてれば、イイところに逝けるわ」

おう、痛烈な……。

今時流行りのツンデレラってやつか？

「一人で死にたくないんだ」

おまけに異世界で。

「せめて最期を看取ってくれると、ありがたい」

「やだ」

「冷たい子だね」

俺は少々、というよりかなり捨て鉢になっていた。

端的に言うならば、死への恐怖を乗り越して『諦めモード』だ。
腕時計を見る。

『15:23』

ぐは。あと十五分しかない。

だが、死ぬならせめてこのファンタジック美少女と一秒でも話して

いたいというのが本音だ。

もしかしたら最後の一分でキスぐらいしてくれるかも？

なんてことを考えていると、プルミエルが何かを思いついたようにポン、と手を叩いた。

おおっ、このタイミングでの名案は大歓迎だぞっ！

「穴掘って時間がくるまで横になってたら？」

「……………」

「覚えてたら今度ここを通った時に土くらいかけてあげる」

……………駄目だ。

ロマンスの気配無し。

しかし、俺……………本当に死ぬのかな？

五体ともしつかり動くし、今のところ眩暈も動悸も息切れも無い。健康な青年男子そのもの。

全然、あと十五分で死ぬ気がしないんだが……………

「どうにも信じられん……………」

「あと少しで分かるわよ」

気がつくと、プルミエルはずんずんと先へ進んでいた。

ま、人の死に目になんか居合わせたくないよな。

俺だってそうだ。

赤の他人から「今から死ぬから傍にいて」なんて言われても断固拒否の姿勢を貫くだろう。

(しょうがないか……………)

彼女を追うのを諦めようとした時だった。

(何だ、あれ?)

森の奥に、大きな影が見えた。
あれは……さっきのブタだ!

息を潜めて、デカイ図体を茂みに隠している。

一、二、三……なんと、三匹もいる!

「お、おい!」

俺がプルミエルに注意を促そうと声を上げようとした瞬間だった。
そいつらが茂みからものすごい勢いで飛び出てきたのだ。
そのまま、少女の背中に向かって目を血走らせながら殺到する。

(まずいぞ!)

プルミエルはここでやっと、背後に気付いた。

「あら?」

おい、もっと慌てるよ!

さっきの魔法は大した威力だったが、あの長ったらしい呪文を唱えるのには結構時間が必要なはずだ。

だが、あのブタどもの勢い。

くそ、絶対に間に合わないぞ!

俺は反射神経と運動神経を総動員して、必死に身体を動かした。
陸上部の脚力の見せ所だ。

しかしここで、俺の頭の中にある『冷静』という名の俺がしたり顔で話しかけてきた。

(追いついてからどうするんだ?)

相手は三匹。

タイムアップを待たずして俺は挽肉にされちまうだろう。
だが……

(そんなこと知るか！)

俺の中の『熱血』が言う。

女の子を守って死ぬなら格好いいじゃないか。

どうせ死ぬならそっちにしよう。

俺は覚悟を決めて、一番後ろを走っていたブタに突っ込んでいった。

「おおおらあああああつー!!」

姿勢を低くして、その背中に猛烈なタツクルをかましてやった。

「プギイ！」

そいつは情けない悲鳴を上げながら、前を走っていた二匹を巻き込んでぶつ倒れた。

三匹と一人が、将棋倒しになった形だ。

おおっ、グツジョブ、俺！

ブタどもの注意さえ引ければいいと思っただが、光速タツクルは予想以上の効果を上げたようだった。

俺は急いで立ち上がり、プルミエルのほうへアイコンタクトを送る。

今の雄姿、見てたかい？さ、俺のことは気にせず……

しかし、彼女は冷淡な表情で顎をしゃくって見せた。

その意味するところは明白だ。

『退け』

え、俺、邪魔者……？

とりあえず、素早く脇へよける。

すると、ようやく立ち上がったブタどもめがけて、炎の矢が降り注いだ。

あー、呪文無しでも出せるのね、コレ……。

目の前に、つい先ほどと同じ地獄絵図が展開された。

生きながらに焼かれる三匹のブタ。

……うつぶ。

やっぱりこの図は何度見ても胃にクするぜ。

プスプスと煙を上げているブタの死骸を、ブルミエルは何の感慨も無いようにまたいで、俺のほうに歩いてきた。
わーお、怖え女の子だ。

「余計なことするわね」

しかもメチャクチャ不機嫌そう！

「す、すみません……」

俺はその庄に押されて、反射的に謝ってしまった。
助けたつもりだったんだけどね……。

「どうせあと五分くらいで死ぬんだから、他人の心配なんかしなく

「ていいでしょ」

「そう言われてもな……」

あと何分だ？

俺は腕時計を見た。

『58:24』

「……？」

おや？

「時間、増えてる……」

「はぁ？」

プルミエルが、時計を覗きこむ。

「ホント……増えてるわね……」

「何で？」

「……」

プルミエルは腕組みして、考え込んでしまった。

どうやら彼女にも分からないことらしい。

しかし、どうやら俺はまた一時間くらい、生き延びることができたようだ。

それだけでもラッキー……なのか？

しかし、プルミエルは納得がいてないようだった。

「どこかいじったの？」

「いや、全然」

「ひよつとすると何かの条件を満たすと死のカウントダウンがリセットされるとか？」

「かも」

「はつきりしないわね、もうー！」

「おいおい、むしろ条件があつたらこつちが教えてほしいくらいだぞ！」

「しかし……これは」

プルミエルが腕組みを解いて、ニヤリと笑った。
うーむ、少し悪意を感じる笑顔だ。

「面白いわね」

「面白い？」

「そ」

プルミエルが俺の腕をつかんだ。

「ちょうどよかったわ。この森の奥に『エスティアンドリウス』っていう物知り魔道師がいるから、そこへ行きましょう」

「えすてい……？」

「さ、行くわよ」

暗黒の異世界ライフにおける、一筋の光明だと思っただろうか？

ま、ジタバタしてもしょうがない。

なるようになる、と思うことにしよう。

それよりも、俺にとってはプルミエルに腕を掴まれている今の状況のほうが重要だ。

女の子にここまで接近を許したのは初めてかも。

おおお、すごくだキドキする……。

おまけに、近くに寄るとすごく良い匂いがした。

出た、森の賢者

森は奥地へ進むほど薄暗くなっていき、漂う空気にもどんよりとした湿っぽさが含まれている。

樹海……そんな言葉が俺の脳裏をよぎった。

地面には太い木の根が複雑に入り組んでいて、俺は何度も足を取られて転びそうになる。

「もー、だらしないわね」

プルミエルがよろめく俺を一瞥して、冷たい言葉をくれた。

うーむ、この娘、ツンなんていうレベルじゃないぞ。

見下げ果てたヤツ、と言わんばかりの冷たい視線が心に突き刺さって痛い。

「もう少しマシに歩けないの？」

たしかに彼女はヒラヒラの、いかにも歩きづらそうなドレスを着こんでいるのに、スイスイと滑るように地面を歩いていた。

しかし、俺は地元民じゃないんだから仕方ないだろう？

おまけに色々なことがいっぺんに起こりすぎて、疲労感も半端ない。もう歩きたくないヨ！

「なあ……少し……休憩しないか？」

俺は肩で息をしながら、勇気を出して言ってみた。

ええい、軽蔑するならしろ。

「そっね……」

プルミエルは肩をすくめた。

「そうする？」

おおっ、意外と話せばわかる娘だ！
好きになりそう！

「あなたに無限に時間があるならそうしてあげるけど」
「……………」

俺は時計を見る。

『21:18』

さっきから三十分も歩いていた。

「なあ…………そのエステイなんとかって人の家にあと20分くらいで着けるかな？」

「しっかり歩けばギリギリでね」

ギリギリ20分じゃマズいだろう！
残り一分で何ができる？
カップ麺だって食べやしないぞ。

「で、休んでく？」

プルミエルはいたって冷静で、無表情だった。
そこには焦りも不安も見受けられない。

泰然自若。

俺が生きてても死んでもどつちでもいいような感じだ。
くそ、なおさら死んでたまるか！

「……いや、行くこつ」

俺は覚悟を決めた。
前進あるのみだ。

「なあに、君が疲れてると思ったのさ……」

とりあえず、英国紳士風の格好をつけた言い訳を試してみる。
これは男の悲しいサガだ。

ロマンシング・サガ。

いえーい、もうワケわからんぜ。

頭がぼんやりして何も考えられなくなってきた。

「じゃあ、行きましょ」

「おう。慌てず、焦らず、しかし急いで行くこつ」

再び行進が開始された。

今度は少し、早足で。

そして、そこからつまづいたり転んだり罵られたりしながら歩くこつと、10分。

「あ、着いた」

ブルミエルの言葉に、俺は顔を上げる。

森がそこで切れていて、光が見えた。
おお、良かった！命がけの過酷なウォーキングもここで終わりだ。
思ったよりも早く着いて、何よりだった。

それは古びた家だった。

いや、古びた、というのはちょっと過大評価だ。
正確には廃屋に近い。

壁の漆喰は半分以上が剥がれ落ちていて、屋根には蔓植物がびっしりと絡みついている。

暗い森の中でここだけ周囲に樹が無いので、上方には丸天井のように見える空があつて、そこから注ぐ日の光がまるでスポットライトのようにその廃屋を照らしている。

いかにも、魔法使いが住んでいそうな家だ。
雰囲気は抜群。

俺は時計を確認する。

『08:09』

「よかった、間に合った！」

「そうね」

ブルミエルは俺の感動に同調せずに、すぐにその家のドアをノックした。

迅速な行動、恐れ入る。

ちなみにその古びた木製のドアにもびっしりと蔦が絡まっていた。

「エステイ！いる？」

ブルミエルの声に応えるように、軋む音を立てながらドアがひとりでに開いた。

おお、すっげえ魔法使いの家っぽい。

「入っていいわ」

「あいよ、おじゃましまーす……」

促されるままに、俺はブルミエルの先に立ってドアをくぐった。室内は非常に暗い。

目が慣れるまでにずいぶん時間がかかったが、やがて、うっすらと部屋の輪郭が見えてきた。

そこは本の楽園だった。

四方の壁は全部本棚になっていて、そこにはぎっしりと本が詰まっている。

わーお、まるで図書館だ。

「ほら、立ち止まってないで、もう一つ奥の部屋よ」

ブルミエルに背後からつつかれて、俺は部屋を横切り、その奥の扉を開いた。

「おおわっ!」

間抜けな声を上げたのは俺だ。

前の間と違ってその部屋には四隅に燭台が立っていたので、室内は明るかった。

この部屋も四方が本棚に囲まれていたが、その中央に机がある。そして、そこには頭からローブを被った老人が座っていた。

声が出てしまったのは、いきなりそいつと鉢合わせてしまったからだ。

しかし、これは……

(魔法使いだ……本物だ！)

異世界初心者の俺にでもすぐに分かった。干したプルーンみたいな皺だらけの顔。腰に届くほど長い白髪。

そして、それと同じくらい白く、長い髭。悲しげに細められたその目は、それだけで強い魔力を放っているように見えた。

その姿は漫画やゲームに出てくる魔法使いそのものだ。

「プルミエルか」

しわがれた声。

それは生半可ではない威厳を感じさせる。

「誰かを連れてくるとは珍しいのう……」

「エステイ、聞きたいことがあるの」

プルミエルは積み重なっている本の上に腰を下ろした。

おいおい、そんなに無遠慮でいいのかよ。

できれば相手の方のご機嫌を損ねない様にしていただきたいんだけど、しかし、当の老魔法使いからはお咎めの声が上がらなかったの、俺は少し安心した。

一方のプルミエルはそんな俺の内憂を気にも留めていない様子だった。

「この男ね」

「ふむ」

「『勇者』なのよ」
「ほう！」

エステイ老師の目が、俺へ向けられる。

俺はとりあえず愛想笑いを浮かべてそれに応えた。

「おう、生きている勇者を見るのは三年ぶりじゃな」
「でも、妙なことが」
「妙？」

「彼、今頃はタイムアップで死んでもおかしくないの」

確かに。

まあ、今も死につつあるわけだが。

「ところが……」
「時間がリセットされたのじゃな」
「そう！初めて見たわ。エステイ、何か知ってるのね？」
「うむ」

老人は俺を手招きした。

俺は一步前へ出る。

「君。名前は何と？」
「は、はいっ、ケンイチです」
「ケンイチ、私の肩を揉みなさい」
「……は？」

俺の頭の上に、『？』マークが出た。

エステイ老師が何を言ってるのか、全く理解できなかつた。
肩を揉めって言ったのか？

聞き間違ったのかな。

「今、なんと？」

「私の肩を揉みなさい。生き延びたいんじゃない？」

うーむ、ワケわからん。

どういうことだろう？

ボケているようにも見えないし、何よりも老師の目は真剣そのものだった。

こいつは断れる雰囲気じゃない。

「それでは……失礼します」

俺はとりあえずエステイ老師の背後に回って、肩を揉み始めた。

おお、固い。結構凝ってるね、老師。

「ふい〜……………」

老師がため息を吐いた。

「あ、そこ、もう少し上……………そうそう、そこね」

エステイ老師の言われるがままに俺は指を動かした。

この奉仕活動にはきつと何か深い意味があるに違いない、と自分に言い聞かせながら。

「もう少し力入れて。あ〜、そう！いい、いいぞ……………」

「……………」

……………五分くらい揉み続けて、俺はだんだん焦ってきた。

ヤバい、もう時間が無い。
気が気ではなくなってきた。
頼む、そろそろ教えてくれ老師イ！

「…………そろそろ説明してくれない？」

おおっ！良くぞ言ってくれたプルミエル！好きだ！

「慌てるでない…………」

「や、老師、その…………自分にはもうあまり時間が無いんですけど…

…」

「時間？何の時間じゃ？」

「だからこの…………」

時計を見る。

『55:22』

お？

おおっ！

「また戻ってるウ！」

俺は思わず天を仰いだ。

プルミエルも、俺の時計を覗き込んできた。

「あ、戻ってる」

「ふふふ…………そうじゃろう」

「どういうこと？」

「『勇者タイム』じゃよ」

老師はほぐれた肩を回しながら、ゆっくりと語りだした。

『勇者タイム』の何たるか

「勇者がこの世界では一時間しか生きられないのは知っておるな？」

俺もプルミエルも頷いた。

もつとも、俺にとってはイマイチ実感が湧かないのだが、この世界の人間が口をそろえて同じことを言うのなら、きっとその通りなんだろう。

「これを『勇者タイム』と呼ぶ」

ダサイネーミング！

だが、ここでは黙っておこう。

「『勇者タイム』は、異世界に召喚された者の宿命……ルールじゃ」「それは知ってるわ」

プルミエルが長くなりそうな話をバツサリと切り捨てた。
いいぞ、その調子！

「でも、その『勇者タイム』が延長されたなんて聞いたことがないわ」

「いいや、延長はできる」

「どうやって？」

肩を揉むとか？

いいや、その前はブタに体当たりをかました時だった。

「勇者にふさわしき行動をとることじゃ」

「勇者にふさわしい行動……?」
「分かりやすく言うならば、『誰かの為になることをする』ということじゃ」

なるほど、これは分かりやすかった。

俺は今までの自分の行動を反芻してみる。

『勇者タイム』がリセットされたのはどんな時だったか?

プルミエルを助けようとしてモンスターにタックルをかました時。

エステイ老師の肩を揉んでやった時。

……確かに、『誰かのために何かをした』時に、俺の勇者タイムがリセットされている。

「おおっ!」

俺は思わず叫んでしまった。

「生き延びる道が見えてきたんじゃないか?」

勇者タイムの原理が分かっただけでも、すごいことだ。

「……そう?」

「フーム……」

あり?

俺の喜びに対して、二人の反応は淡泊だ。

プルミエルが呆れたように口を開いた。

「これって逆に言えば、あなたは一時間おきに、それこそ寝る間も惜しんで、良いことをし続けないと生き延びられないってことよ」

「う……」

そつだ、一時間おきではおちおち寝てもいられない。

「さらに悪いお知らせじゃ」

わーお、このタイミングでそんなの聞きたくない！

「二つほどな」

二つも！

「一つは、『同じ人間に同じ善行を二度行っても、カウントされない』ということじゃ。もしもお前さんがもう一度ワシの肩を揉んでくれても、勇者タイムは巻き戻らん」

「……ってことは？」

「一時間おきに新しい『誰かの為になる』ことを考えなきゃいけないってことね」

「そついつことじゃな」

おいおい、それってかなり難しいぞ……

「二つ目は……」

もう充分だ、やめてくれ老師イ！

「『勇者にあるまじき行いをした場合、勇者タイムにペナルティがかかる』ということじゃ」

「あるまじき行為？」

「あらゆる不道德。殺し、強奪、覗き、万引き、カンニング、立ち小便……無論、異性への不純なボディタッチも厳禁じゃ。それを犯

した場合、勇者タイムは減算され、より死が早く訪れる」

「超厳しい！」

「勇者とは常に人の見本にならなければならん。清廉潔白、品行方正、公明正大な聖人君子であらねばならんのじゃ。二十四時間、常にな」

「……そんな」

俺はそのルールのシビアさに言葉を失った。

どう考えても、身体が持たないだろう。

疲労に負けて一時間も眠りこけたら即アウト。

くそっ、俺の異世界勇者ライフはお先真っ暗だ。

ちらりと脇に目を走らせ、プルミエルを見る。

彼女は鋭い目つきで、エステイ老師の講義に熱心に聞き入っているようだった。

少しは同情してくれるかい？

「結構厳しいルールね」

「いかにも。『千万苦悶の行』と呼ばれておる」

「ふーん……」

「な、なんて恐ろしいタイトルなんだ……」

「ちなみにワシの知っている勇者タイム最長記録は66時間じゃった」

三日も生き延びられなかったってことか……

しかし逆に考えれば、65個も人の為になることを見つけて、それを実践したということだ。

それだけでも気の遠くなるような数字ではある。

俺に出来るだろうか？

近所のボランティア活動にさえ参加したこと無いぞ。

(…………無理な気がする…………)

不安という名の沼地に沈む俺を見て、エスティ老師は陰鬱そうな顔にニヤリと笑みを浮かべた。

「ケンイチ、勇者には『特典』もある」

そう言うと、老師は立ち上がり、部屋の隅に立てかけてあった一振りの剣を手にした。

え？くれるの？

それって、もしかして勇者の剣？

ファンタジーっぽい展開に少しテンションが上がってくる。

老師は剣を鞘から抜いて、俺の前にかざした。

美しい刀身が蠟燭の光に照らされて、きらりと輝く。

そうとう切れ味が良さそうだ。

「これは剣じゃ。見れば分かるな？」

「はい」

これをお前に授けよう…………なんて言葉を期待していたが、そうはいかなかった。

老師はそれを振りかぶると、

「せいやっ!」

なんと、俺の脳天に向けて振りおろした!

「わあああッ!?!」

斬られる!

何で！？俺、なんか悪いこと言った！？

超予想外の展開！

俺は思わず目をつぶった。

だが、予想外の展開は続く。

ガチン、と金属同士がぶつかるとような音が鳴った。

それは肉を切り裂く音ではない。

鉄の扉にハンマーをぶち当てたような、そんな硬質な響きだった。

「あああああつ……あ？」

あれ？

何か変だぞ？

斬られたときに必ず感じるであろうもの……痛み。

痛みをまるで感じなかった。

何かが頭に当たったのは分かったが、それはまるでプラスチックの棒で優しく撫でられたような感触だった。

（痛覚がマヒしてしまったのかもしれない……）

俺は恐る恐る、目を開いた。

エステイ老師はしたり顔で剣を眺めている。

その刀身は、ぐにやりとひん曲がっていた。

あんなになるほど力一杯振り下ろしやがって！

続いて、俺は自分の頭を触って、感触を確かめる。

今頃はバツクリ割れて血まみれになっているだろう。

「……あれ？」

しかし、悲惨な予想に反して、血は一滴も出ていない。まさぐってみるが、俺の頭にはタンコブさえできていなかった。

「俺、生きてる……」

「それが勇者の特典じゃ」

エステイ老師は剣を傍らに放り投げて言った。

「異世界より召喚された勇者には、この世界の力は一切通用せん。外部からの攻撃に対しては、文字通り『不死身』になるのじゃ」

おおっ、そいつは凄いいんじゃないか？

ブルミエルも少し感心したように小さく口笛を吹いた。

「魔法は？」

「魔法もきかな。重力や引力といったこの世界の物理法則はすべて適用されるが、大砲で撃たれても丸めたチリ紙をぶつけられたようにさえ感じないじゃろうし、塔のてっぺんから落ちても大地に穴が開くだけじゃ」

「それは厄介ね」

「そのかわり、何もしなければ寿命は一時間じゃ」

「でも、無敵……」

「ケインチよ、『無敵』と『不死身』は同義ではない」

「へ？」

「さきほども言ったが、お前を取り巻く物理法則はそのままじゃ。お前の持ち合わせている身体能力以上のことはできん。山を持ちあげられるわけでも空を飛べるわけでもなく、単純に『攻撃されても死なない』というだけのこと」

「え、そうなの？」

「そうじゃ。おまけに不死身といっても、あくまでも『この世界

の外的な力からは』ということ覚えておくがよい」

「？」

「お前さんが自分を殴れば鼻血は出るし、自分の手で首を締めれば死ねるじゃろう。腹が空けば飢え死にもする」

なんとも中途半端な不死身ぶりだ。

「興味深いわね」

「まだ勇者に関しては研究がそれほど進んでおらんのが実情じゃ。今までの知識も『ジャパテイ寺院跡』から発掘された『勇者典範』からの引用じゃ」

「ふーん……」

「……」

ちよつとした沈黙が訪れた。

聞けば聞くほど、こっちにとってはあまりメリットの無い話ばかりだ。

いや、むしろデメリットばかりと言っていていい。

(なんで、俺が勇者に選ばれたんだろう?)

そんなことばかりが頭をよぎる。

大体、勇者って言えばもつと華々しい活躍が用意されてるもんだろう。

それが、このザマだ。

制限時間にビクビク怯えながら、仙人のように私利私欲を捨てて生きなければならぬとは！

俺はイメージの中の勇者と、現実とのギャップにかなりヘコまされていた。

時計をちらりと見る。

『20:03』

おおっと、ちょっと心許なくなってきたぞ。

俺が顔を上げると、老師と目が合う。

彼は俺の心情を理解しているようにゆっくりと頷いた。

「ケンイチ、外に出るとしよう」

「？」

俺は、エステイ老師に誘われるまま、外に出た。

きた、試練

「おおっ……」

俺は思わず唖ってしまった。

暗い室内から急に日差しの下に出たもんだから、外の世界の眩しさに驚いたのだ。

ミミズやモグラの気分つてのはこんなもんならろう。

しかし、ずっとその暗所に籠っていたはずの老人は明暗のギャップなんてものを全く異にも解していないようだった。さすがだね。

「こつちへ来い、ケンイチ」

老師は漆喰のほとんどが剥がれかかった壁際に立つと、そこに空いている無数の穴を見て溜息をつく。

「これをどう見る？」

「へ？」

「古い建物じゃろう。老朽化が進んできておる」

「はあ……そうですね」

「冬にはこういう穴から隙間風が入り、凍えるほど寒い。ほとんど困っておるのよ」

「へえ……」

少しの間、沈黙が流れる。

老師がチラリとこちらを見た。

俺はその言葉の意味を量りかねて、間抜けのような相槌を打ちながら次の言葉を待つしかなかった。

老師はきつと、何か哲学的なことを俺に伝えようとしているに違いない。

この穴だらけの壁が、何かの隠喩になっているのだろうか？

「……この壁を修繕することができれば……さぞ快適になるじゃろうて」

老師はもう一度こっちを見た。

なんか、少し苛立っているように見えるんだが、気のせいかな？

俺はまだ、老師が何を言わんとしているのがピンとこなかった。

出来ない勇者でゴメンね、老師。

もう少し分かりやすい例えにしてくれると助かるんだが……

老師は大きな溜息を吐いた。

「誰かがこの壁を修繕してくれたらのお……」

「おや？」

なんだか雲行きが怪しくなってきたぞ？

いや、まさか、そんなはずはない。

「この壁を修繕しようという『勇者』はおらんかのオ」

老師はしれっとした様子で畳みかけてきた。

俺は啞然とする。

(……「」の……！)

ようやく、その魂胆が分かった。

この御老体、人の弱みにつけこんで俺にリフォームをさせようとし

てやがる！

「左官仕事に従事しようという『死にかけの勇者』でもおればのオ！むしろ自発的な感じで！」

オの、ジジイ！

かなり表現が露骨になってきやがった！

もはや恥も外聞も無いといったザマだ。

チクシヨウ、こんな理不尽な要求に屈してたまるか！と思いつつ、腕時計を確認してみる。

『14:22』

ぬ、くう……

「ところでケンイチよ、勇者タイムはあとどれくらい残っておる？」

超白々しい！

「おんやあ？15分を切ったか……このままではヤバいのう」

ヤバいのうと言いつつもにんまり微笑むその顔。

ああっ、思い切り壁に叩きつけてやりたい！

だが、勇者タイムが残り少ないのは事実だ。
背に腹は代えられない。

(くそっ、おぼえてる……！)

俺は涙を呑んで、口を開いた。

「お、俺が……やりましょうか……？」

思わず、語尾が震えた。

何たる屈辱！

「あ、そ。じゃあ、裏の納屋に道具があるから」

何だ、その態度。超ムカツク！

「ケンイチよ、これはまさに試練。それに耐えてこそ真の勇者になるのじゃ」

今頃、偉そうな言いやがって！

「ふあゝあ……」

黙って今までのやり取りを見ていたブルミエルは、大きなアクビをした。

俺と老師のやり取りに呆れているようだ。

頼む、幻滅しないでくれ。

俺にとってもサプライズなんだぜ、こんな茶番は。

「エステイ、私、お風呂入ってるから」

「うむ」

「え、風呂？」

「そ」

ワーオ！ドキドキイベント到来！

しかし目の前にいる老人がキツと俺を睨みつけた。

「お前さんは左官仕事じゃ」

このジジイ、喧嘩を売ってるのか？

「なーに？いやらしいこと考えた？」

はい。

「ま、しつかり頑張んなさい」

プルミエルが俺にウインクを投げてよこした。

そんな仕草だけでもすごく嬉しいもんだ。

しかしこの娘、人の家でいきなり風呂に入るとはかなりの剛の者だ。そもそも、この老人との関係は一体？

まさか、親子なんてことはないだろうな。

「……なあ」

「うん？」

「この、じ…… エステイさんとはどういう関係？」

「はあ？何よ、急に」

「いや、ちよっと気になったから」

「んー…… 『居候の物知り爺さんとその家主』ってところかしら」

「へ？家主？」

「ここは私の別荘の一つなの」

「プルミエルは魔術の名門『ミスmanaガン』の正統継承者じゃ。世界中の至る所に別荘を持っておる」

「わーお、お嬢様なの？」

「そんなお気楽なものじゃないわ」

プルミエルは少し不機嫌そうに肩をすくめた。

「ま、いいでしょ、そんな話は。長生きしたければ、雑談よりも仕事をしたら？」

「そうじゃ、ちやきちやき働けい」

老人が俺の背中を小突く。

ぶっ殺すぞ、ジジイ！

冷静さを取り戻すために、時計を見る。

『10:01』

(おわあ、急がないと……)

俺は急いで納屋へと走った。

現時点での勇者タイム残り時間

『52:11』

ブルミエルは風呂、じじいもいそいそと自室に戻った。
薄気味悪い森の中に一人で残された俺は、ぺたぺたと壁に漆喰を塗っている。

(何だ？この状況……)

何度も言うが、ここは異世界。

そして俺は勇者。

勇者は今、『盛ん』に『左官』をしていますよ、はい、面白いですね。

(笑えねえ……)

ひととき大きな溜息が出た。

こうして一人きりになると、思い出されてくるのは自分のいた世界のことだ。

父、母、兄、じいちゃん、ばあちゃん、多くの級友達……
もう、何もかもが懐かしい。

(皆、心配しているだろうなあ……)

手を動かしながら、ぼんやりと思い出に浸る。

現実逃避？いいや、違う。

せめて頭の中だけは自由でいさせてくれ。

おお、そうだ、明るい未来の為に、元の世界に戻った時の予定を立てよう。

その一、『彼女を作る』

連れて歩けば全員がうらやましがるような、とびきり可愛い彼女だ。そうだ、プルミエルみたいな。

その二、『もつと勉強をする』

元の世界にいたころはイヤでしようがなかったが、できなくなると恋しくなるもんだ。

その三、『親孝行をする』

たまには肩の一つでも揉んでやろう。勇者タイムも関係無しに労わってやるぜ。

その四、『兄貴とゲームでもする』

しばらく一緒に遊んでなかったなあ。たまには兄弟水入らずで何かするのもいいだろう。

その五、『友達と温泉旅行に行く』

これはかねてからの野望。皆で少しずつ金を溜めて、三泊四日くらいで楽しむ予定だ。

(その六……)

真面目に考えてる途中だったが、俺は目の前の窓から見える光景に思わずニヤけた。

その六、『プルミエルの入浴を覗く』

……ワオ、この大きな窓は風呂の窓だったのか！

この家、外側はボロツちいのに、浴室だけはものすごく豪華だ。

バロックだかゴシックだか分からんが、立派な装飾の施された柱、染み一つない真っ白い壁と床。

家主のこだわりだろうか？

そして、その家主であるプルミエルは、残念ながらまだドレスを着ていたが、綺麗な白磁の大きな浴槽に手を入れてお湯の温度を確かめている。

フンフンと聞こえてくる呑気な鼻歌も可愛らしい。

もちろん、こちらには気づいていないだろう。

(これから、入るんだよな……？)

鼓動が速くなる。

異世界に来て、おそらく初めてのラッキーサプライズだ。

俺はべたべたと同じところに漆喰を塗りたくりながら、その時を待っていた。

プルミエルが浴槽から手を引き上げて……おおっ！

ドレスの肩に手をかけた！

んおおおおっ！

俺の興奮度エキサイターが有頂天に達する、その時だ。

脳裏にあのじじいの忌々しい声が甦ってきた。

『あらゆる不道徳……』

……やめろ……

『殺人、強奪、覗き……』

今、いいところなのに！

『勇者タイムにペナルティ……より死が早く訪れる……』

俺はハツとして、慌てて腕時計に目をやった。

『39:48』

のおおっ……！

10秒も覗いてないのに10分ちかく減ってるウ！

(ヤバい！)

こいつはヤバいぞ！

俺は急いで窓際から離れた。

断腸の思い、とはこういうことを言うんだろう。

くそっ、勇者なんて、もう、うんざりだア！

くたびれたジジイならまだしも思春期真っただ中の青少年にこの仕打ちは酷すぎる！

男がスケベじゃないと生物は繁栄しないんだぞ！そうだろう？

(神様の意地悪！イケズ！おたんこなす……！)

散々に心の奥で神を罵倒したあとで、気を取り直して隣の壁を塗ることにする。

何せ、こっちも命がけだ。

生き残るためには、邪な考えを断ち切るしかない。

壁と一緒に、心も白く埋めるんだ。

(煩惱よ消えろ！)

俺は機械的に手を動かしながら、浴室の隣にある窓の前に立った。何の気なしに、窓から中を覗いてみる。さっきの浴室に比べると、随分と薄暗い。

(んん？)

少し目を凝らしてみると、その部屋には三角フラスコや試験管のようなものが大量に陳列されていた。

何かの実験室だろうか？

アルコールランプと人体模型でもあれば理科室そのものだな、これは。

(おおっと……)

あのジジイがいるぞ。

俺は反射的に屈みこんで、そつとその様子を覗き見た。

まあ、別に隠れる必要なんて無いんだが。

しかし、ジジイの立ち位置が妙に不自然だ。

壁際に張り付いて、しっかりと目を閉じている。

瞑想？

とにかく、何かに集中しているのだ。

時折、老人特有の嗚咽まじりの息使いが漏れる。

あれ？もしかして……

「……ハアツ……ハアツ……」

(……)

「……オウ……今、脱いだ……」

(……ま、間違いねえ！このジジイ！)

隣の浴室の音を聞いてやがるんだ！

やがてゆっくりと眼を開くと、壁に貼ってある黄ばんだメモ紙を慎重に剥がして、そこへ目を寄せた。

ぬおおおつ、覗きだあ！きつと、あそこに覗き穴が！

チクシヨウ！何て野郎だ！

テメエだけに美味しい思いをさせてなるものか！

「……くそ、湯気でよう見えん……」

「老師！」

俺は大声を出しながら窓を開けて部屋に飛び込んだ。

「ひい！」

老人は情けない悲鳴と一緒に飛び上がった。

「な、何じゃ、お前さんか。さつさと仕事をせい。中途半端な仕事ぶりでは勇者失格じゃぞ」

「……そのことですが、老師」

「あん？」

「僕は完璧主義なので、外壁だけではどうにも我慢なりません。この部屋も修繕させてください」

「何っ!？」

その忌々しい覗き穴を塞いでやるぜ！

ジジイの顔色が、さつと変わった。

「ならん！」

ジジイは大声で叫んだ。

「断じてならん！お前は間違ったことをしようとしておる！」

芝居じみた物言いで威厳たっぷりにどやしつけてきたが、俺はその魂胆が分かりきっているので全く揺らがなかった。

「いいえ！やらせてください！」

「死ぬぞ！」

ほー、そうきたか。

「死ぬ？」

「うむ、溶けて死ぬ！」

「……それも本望！」

「なっ、何故じゃ！何故お前がっ……！お前に何の得がっ！？」

「これは勇者の運命……そう、悲しき運命っ！」

「おのれええええっ！」

俺たちがワケのわからん事を喚きながら取っ組み合いを始めた時だ。

「こらあ、うるさい」

隣の部屋から、プルミエルの呆れたような声が届いた。

良い感じにエコーがかかって、おう、エロス……

しかし、少し無防備すぎるんじゃないか？

あの娘、もしかして結構ガード甘いのかな？

「それ見い、怒られたじやろうが」

「……おおりゃ、隙あり！」

俺は素早くじじいを押しつけて、覗き穴にたっぷりと漆喰を塗りこんでやった。
どうだ！

「アーーーーアッ!」

じじいの凄まじい悲鳴をよそに、俺の勇者タイムは再びリセットされた。

動き出す宿命と老師の罖

夜になった。

俺はその間、炊事、洗濯、便所掃除と散々にジジイにこき使われた。

「試練じゃ」

馬鹿の一つ覚えみたいに言いやがって！

俺は全員が夕食を終えた後、食器を洗いながら、なんとか仕返しできないかと考えていた。

食い物に得体の知れないキノコを入れるとか。

真つ暗なトイレに閉じ込めるとか。

だが、何かしら小細工をして他人を困らせるような結果になったら、それこそ勇者タイムにどんなペナルティがかかるか知れたもんじゃない。

うっかりあの御老体が心臓麻痺でも起こしたらエライことになるだろう。

まったく、とんでもない时限装置だ！

「で」

ブルミエルが食後の紅茶（それも俺が淹れた）に口をつけてから、一息ついて言った。

「どっつするの？」

「へあ？」

俺は鍋の底についている煤を擦り落とすことに必死になっていて、

そこへ急に声をかけられたもんだから、うっかり間の抜けた声をあげてしまった。

「どつて？」

「これから」

「……」

これからどうするか？

俺はその問いを、頭の中で咀嚼する。

シンプルだが、大事な問題だ。

だが、それに対する明確な答えは頭の中に浮かんでこなかった。

(どうすればいいんだろう?)

この世界で何をすればいい？

俺は一応『勇者』だが、それはあくまでも記号的な呼び名であって、何の意味もない。

魔王もない。

伝説の剣もない。

今のところ、この世界に『勇者』は必要ないんだ。

それとも、俺が気付いていないだけで、何か隠された使命があるんだろうか？

……何も無いよなあ。

「元の世界に戻る……ってのは？」

「どう、エステイ？」

「フム……勇者が元の世界に帰還したという話は聞いたことがない」

アウチ。

「じゃが、一方通行かと言うとそれも疑問じゃな。前にも言った通り、勇者についてはまだ知られていないことが多いのじゃ」
「おおっ、じゃあ、『できないわけでもない』?」
「フム、『できないとはいえない』という程度じゃな」
「はつきりしないなあ……」
「ふーん」

ブルミエルがニヤリと微笑む。

お、その小悪魔的な笑みは前にも見たぞ。

「手掛かりがあるとすれば、やっぱり……」
「『ジャパテイ寺院跡』じゃろう」
「決まりね」
「?」

あの一、当事者が蚊帳の外なんですけども?

「と、いうわけで『ジャパテイ寺院跡』があなたの次の目的地ね」
「え?」
「なによー、今の話、聞いてなかったの?」
「いや、聞いてたけど……」
「あなたが自分の世界に帰る手掛かりは、そこにあるかも知れない
つてことよ」
「おおっ！新展開!」

俺は思わずガッツポーズを作った。

この世界に来て、初めてと違っていいほど希望の持てる情報だ。

「で、それってここから近いの?」
「海を一つと山を三つ越えたくらいの場所じゃ」

「国境で言つと四つ」

「ふうん……って、メツチャ遠くね!？」

「もー、うるさいわね」

ブルミエルは俺の絶叫に顔をしかめた。

おおっと、いかんいかん、少し冷静になろう。

「でも、そんな遠距離移動に俺の寿命が保つかな……?」

「気合じゃ」

「はあん!？」

俺はKYな発言をしたジジイを思いきり睨みつけた。
相手は俺の鬼気迫る圧力に少しビビったようだ。

「う……そう興奮するでない」

「頼むぜ。こっちは命がけなんだ」

「まー、とにかく距離がどうのと言ってる場合じゃないでしょ。行くの?行かないの?」

選択肢は二つ、か。

だが、答えは一つしかない。

「行く」

このままここにいても、ジジイにいいようにパシらされて終わりだ。
元の世界に帰る望みがあるなら何だってやってやる。

ブルミエルは俺の答えを聞いて、満足そうに微笑んだ。

「んふふっ、面白くなってきたわねー」

「そう?」

「そ。エステイ、『術戦車』を使うわ。出しといて」
「ほう、この小僧と一緒に行くのか？」
「稀に見る研究対象でしょ」

『研究対象』、か。

この娘らしいといえはそうだが、もう少しこっちに気を遣った言い方をしてくれればいいのに。

(でも、一人旅よりはずっと楽しくなりそうだな……)

もつとも、『誰かの為に何かをする』というのが前提の勇者タイム。俺一人ではそれを稼ぎようもないから、プルミエルの申し出はまさに渡りに船だ。

旅を続ける中で『研究対象』から『気になる異性』に格上げされる可能性も無いわけじゃないしな。

おおっと、ニヤけてはいかん。クールに行こうぜ、ケンイチ。

「いいのか？」

「駄目なの？」

プルミエルの大きな瞳が、まっすぐにこちらを見つめてくる。

うう……また、鼓動が速くなった。

その宝石をも霞ませるような輝きは、類まれな何かを秘めているようだ。

何というか、即座に相手の心に入り込んできて、情熱の炎をパツと燃え上がらせるというか。

いや、ここはあえて正直に、率直に言おう。

つまり……『萌える』！

イエス、ウィ、キャン！（訳：はい、私たちはそれができます）

「全然、駄目なこと、ない……」

俺は内心のハイテンションを必死に押し殺しつつ、プルミエルにぎこちない微笑みを送る。

それを見たジジイが、ヒゲをさすりながら不機嫌そうに咳払いをした。

「気をつけることじゃ、プルミエル。そやつ、稀に見るエロス・ボーイ……」

こ・の・や・ろ・う。

今すぐ棺桶に詰め込んでやるぜ、ジジイ。

「そうなの？」

「はっ！」

「……エロス？」

「うつつ……！」

「エロス・ボーイなの？」

「うつつ……！いや、そんなことはないっ……」

俺は狼狽した。

そんな風は無垢な表情で聞かれると、逆にこっちのほう气恥かしい！

だが、完全に否定できないところも悲しい！

「俺は……それほどエロス・ボーイじゃないっ！」

「まー、どうでもいいけどネ」

……俺、遊ばれてるのかな？

「じゃ、ケンイチが次に勇者タイムをチャージした時に出発ね。そ
ちのほうが良いから」

「お、おう」

「最後はお風呂掃除、お願いね」

「風呂……」

俺はぼんやりと昼間のことを思い浮かべる。

ブルミエルの入った風呂か……

(……残り湯！)

ワアアアオ！

なんだか知らんがテンションが上がってきたぜ！

勇者の辿る道

喜び勇んで浴室に向かった俺だが、残念ながら浴槽には残り湯が一滴も残されていないかった。

一体、どうやったのだらう？

毛の一本も落ちていないのだ。

いや、別にそれが落ちてたからどうするということでもないんだが。

(うーむ、掃除の必要があるんだろうか……)

だが、一つだけ、彼女が確かにここの風呂を使っていたという痕跡が残っていた。

匂いだ。

清潔感のある、石鹸の芳香。

(こ、これが、プルミエルの……っ)

なんとという興奮！

俺はそれをスンスンと肺一杯に取り入れながら、手際良く床をブラシがけして回る。

うーむ、我ながらアブナイ奴だ。

よもや自分にこういったフェチシズムがあるうとは！

だが、誰が俺を責められる？

覗きもボディタッチも禁じられた俺に許されたのは、こういった間接的な手掛かりによって頭の中で妄想を膨らませることだけなのだ。そう、俺は変態でもエロス・ボーイでもない！

ただ、神の定めたシステムに翻弄されている、哀れな被害者……生贄なのだ！

「終わった？」
「おわあっ!？」

いつの間にか、背後にプルミエルが立っていた。

「もー、そんなに驚くことないでしょ」

「お、驚くだろうよ、いきなり後ろに立ってんだから」

「で、終わったの？」

「まだ。でも、あとは水で流すだけ」

「じゃあ、早くしてね。外で待つてるから」

プルミエルは手をヒラヒラさせながら出ていった。

その後ろ姿を見ながら、俺はぼんやりと考える。

うーむ……あの絶妙な『アツサリ感』は天性のものだろうか？

俺のように女の子に対してほとんど免疫の無い青少年にとっては、あの小悪魔的ともいえる『アツサリ感』は思わず恋に落ちてしまう要因の一つだ。

あんまりベタベタされるのも照れくさいし、冷たくされすぎるのも心が痛む。

でも、あれくらい向こうがアツサリしていてくれると、かえって色々と話しやすいもんだ。

ただでさえ女の子と話すのって緊張するしね。

（……おおっと、そんなこと考えてる場合か。さっさと終わらせよう）

俺は慌ててブラシを放り投げて、バケツの水を床に撒いて、流した。

俺が慌てて外に出ると、もう辺りは真っ暗だった。

ホーホー、リリリ……といった、動物や昆虫の穏やかな鳴き声も聞こえる。

夜の森、そのもの。

しかし、俺はこの森の中で昼間のような気味悪さや心細さは感じなかった。

なぜだろう？

空だ。

丸天井のように見える空に、無数の星の明かりが輝いていたからだ。それは俺のいた世界のものよりも強い光を放っているように見える。そりゃそうか。

大気中にスモッグやら排気ガスが充満していれば、星の光が弱くなるのは当たり前だ。

だが、この世界にはそんなものは無いだろう。

ここには俺たちの知らない、ありのままの自然の姿が残っているんだ。

そうか……星空って、こんなに綺麗だったんだなあ……

「何をニヤニヤしてるの？」

おおっと、いけねえ。

ロマンチスト・健一が現れてしまったぜ。

俺が感傷を振り払って地上に視線を移すと、家の前には粗末な机が出してあって、その上には一本の燭台とプルミエルがのっかっていた。

「遅い！」

プルミエルは腕組みをして、不機嫌そうに言った。

地に着かない足がブラブラと揺れている。

小柄な女の子がこういふ風につんと威張りくさっているのは本当に

ヤバい。
うっかり萌えてしまつてしょ！

「ジジ……エステイ老師は？」

「裏」

「裏？」

「物置よ。ほれ、あなたはこっちに集中なさい」

ブルミエルは机から降りると、ばん、と茶褐色に色褪せた紙を広げて見せた。

地図だ。それもかなり年代物の。
彼女はその上に指を滑らせた。

「現在地がここね、『キナの森』。平野を抜けて『ルジエ』。海を渡って『パルミネ』。次の山を超えると『ベデヴィア』。もう一つ山を越えると『チャペ・アイン』よ。で、『チャペ・アイン』の南端にある熱帯雨林の中に『ジャパティ寺院跡』があるの。そこが目的地」

しなやかな白い指が、地図の三分の二ほどの距離を横断した。

「ここ、目的地。わかった？」

わからん。

「チャペ……何だっけ？」

「もー、いいわ」

ブルミエルは呆れたように溜息をついた。
おう、頼む、がっかりしないでくれ。

「うっつ……すまん」

「あー、べつに謝ることないわ。異世界から来た人に地名を説明しても分からないだろうし」

「おいおい、なら、何で説明したんだよ？」

「どれくらい距離があるかっていうのを確認してもらいたかっただけ」

「あー……すっげえ遠いつていうのは分かった……」

「覚悟が必要ってこと。目的地にたどり着くまでに、あなたが勇者タイムを何回チャージしなければいけないか……少なくとも、記録を塗り替える程度じゃ駄目ね」

「記録……って、67時間だったっけ？」

「『ジャパテイ寺院跡』までは最短でも一週間はかかるわ」

一週間……えーと、24×7だから……

(ひゃ、168時間！)

なんて気の遠くなる数字だ！

生き延びるためには最低でも168回の善行を積みねばならないのだ。

それも、一つもカブらないように。

そして不眠不休で一時間刻みに、だ。

改めて思うが、なんてシビアなルールだ。

(……だが、やってやるぜ！)

死なないためには、生き延びるしかない！当り前か。

「……俺は負けん！」

「おー、ナイスガッツ」

プルミエルがパチパチと薄っぺらい拍手をくれた。
だが、重要な疑問もある。

「でも、これって一週間でいけるような距離か？山やら海を越えるんだろ？」

昼間。

この森を歩きまわっていただけでも相当に疲れたのと、エライこと時間がかかったのを思いだす。

勇者が不死身とはいってもそれはあくまでも攻撃された時だけなんだろう？

24時間耐久登山なんて過労死のコースだぞ。

「『最短で』って言ったでしょ。聞いてた？」

「聞いてたよ。そりゃあ、俺だって最短でいけるルートがあるならそっちを使いたいんだが……」

「だから、それを使うの」

「？」

なんだか、会話が噛み合っていない気もするが？

俺が首をかしげた、ちょうどその時だ。

裏手からジジイの声が上がった。

「おおーい、準備完了じゃ」

おおっ、老師。

あなたの存在そのものをすっかり忘れてたぜ。

それにしても準備って？

弁当とか？

「来て」

「お、おう」

俺はプルミエルに誘われるままに、家の裏手へ回った。

ミスmanaガンの術戦車

家の裏手に回った俺は、そこにあっただものを見て顎が外れるほど驚いた。

(こ、これはっ……！)

その、黒光りする鋼鉄の胴体。

牛の角のように天を衝くハンドル。

磨き上げられた光沢を放つ二輪のホイール。

おいおい、こいつは俺の世界にもあるぞ！

それは大型二輪……すなわち、バイクだったのだ。

(おまけに超シブいアメリカンタイプ……)

分かりやすく言うとターミネーターなんかが乗ってそんなゴツッいやつだ。

「ワーオ、すげえ」

阿呆のように口を開けたままの俺に、エステイ老人がニヤリと笑いかける。

「驚いたか？」

「ああ……」

「クフフ、このような乗り物は見たこともあるまいて」

いや、見たことはあるんだが。

問題はなぜ、こんなものがこっちの世界にあるかということだ。

「『術戦車』じゃ」

「術、戦車？」

「運のいい男よな、ケンイチ。『術戦車』は魔道貴族にのみ所有を許された世界最速の乗り物じゃ。一般人は目にするこすら稀な超レアな代物……」

このバイクが？

「『ブオナパルト』よ」

「へ？」

「この子の名前」

「おお、クール」

俺は思わず近寄って、車体をくまなく眺める。

実は高校卒業までに大型二輪の免許を取ろうと心に決めていた俺だ。こんな魅力的なバイクを目の前にしてじっとしていられるわけがない！

俺はハンドルを握ってみたり、マフラーの中を覗いたり、黒革のシートをさすったりした。

わお！排気筒が六本だ！

「やっぱ、いいなあ……」

「スケベな触り方するわねー」

「排気量はどんくらい？馬力は？」

「は？」

「あれ！？」

ここで俺は大きな違和感に気付いた。

「おいおい、タイヤ履いてないじゃない！」
「タイヤ？」

なんと、ホイールにタイヤを履いていなかったのだ。

「こんなじゃ走らんだろ。走っても、お尻痛くなっちゃうよ？」
「…………？」

プルミエルと老人は俺の言葉の意味を量りかねたように、顔を見合
わせて首を傾げた。

「これじゃ、プルミエル」

ジジイは自分の頭を指さし、素早くぐるっと回す。
いかれちまった、というジェスチャーだ。

言いたいことは山ほどあるが、そろそろこの御老体ともおさらばだ。
今回は見逃してやるぜ。

「…………乗ってみてもいいかな？」

この世界には運転免許がどうか言う奴はいないはずだ。
エンジンをかけて少し走るくらいなら俺にもできるだろう。

「無理」

「ええっ!?!」

「それ、魔力を流さないと動かないし」

「なんと…………」

うーむ、その辺はファンタジーならではだな。

「ちえ、残念」

「そうね。さ、早く出発しましょ」

プルミエルはにべも無くそう言うと、俺を押しつけて、その小柄な身体とは全く不釣り合いなゴツいバイクに軽やかに跨った。

おお、格好いいな。

ん？

待てよ。

じゃ、じゃあ、俺はプルミエルの腰にしがみついて乗るわけか？

(や、やべえ！ドキドキしてきた……)

俺がモジモジしていると、プルミエルが振り返った。

「何してるの？行くわよ」

「お、おう。じゃあ、失礼して、よっこらしょ……」

緊張感丸出しの俺が、プルミエルの座席の後ろに跨ろうとした時だ。

「待て待てィ、何をしておる！」

突然、ジジイががなりたてた。

うるせえなあ。邪魔するなよ。

「何って、乗るんだけど？」

「馬鹿もの、術戦車は一人乗りじゃ」

「へ？でも、じゃあ、俺はどうすんの？」

「あなたはこっち」

プルミエルは、座席の下から、黒光りする鎖をジャラリと引きだし

た。

「右手、ケンイチ」

「？」

俺は言われるままに右手を差し出す。

すると、プルミエルは奇妙な輪っかを俺の手首に引っ掛けて、ガチンとしっかりはめる。

おいおい、これってまさか……

「手錠！？」

「そ」

「なんで！？」

「走ってる最中に手を離しちゃったら面倒でしょ」

……、
手を離すだって？

俺が言葉の意味を理解する前に、プルミエルは手錠のもう一つの輪を鎖の先端にはめた。

つまり、俺はバイクに鎖で繋がれた状態になったわけだ。

「待て……待て待て待て待てツ！嘘だろ！？」

「フフフ……」

エステイが不敵に笑った。

「先代のミスmanaガンはこうして罪人を一晩中引き摺り回したそうじゃ」

「俺は罪人じゃねエヨ！俺、勇者だよね！？」

「いーじゃない、不死身なんだし」

「全然よくないッ！」

「もー、おだまり」

俺の言葉を軽くすかして、プルミエルは胸元をゴソゴソと探って、ペンダントを取り出した。トップに大きくて真つ赤な宝石が付いている、いかにも高そうなヤツだ。

彼女はそれを術戦車に挿しこんだ。

あ、あれがキーなんだな。

「アグネイ、汝は太陽の子、灼熱の炎を司る者。我は欲す、その力宿せし炎の車輪……」

プルミエルはブツブツと口の中で呪文を呟いた後、キーを回した。その瞬間だ。

ドカン！という大きな爆発音とともに、天に向かう6本の排気筒から、盛大な炎が噴きあがった！

「うわあああああつ！すつげえええええ！」

俺は思わず叫んでいた。

何コレ、超カツコイイんだけど！

ドルンドルンと豪快な音を立ててアイドリングをしている『ブオナパルト』を、俺は再び贅美の眼差しで見つめる。

いい！

こういうの、欲しい！

自分の世界に戻ったら絶対バイク買おう！

「やっ」

プルミエルが振り返った。

「準備はいいわね？」

でた、小悪魔スマイル……

彼女は俺の言葉を待たずに、右グリップを握りこみ、アクセルを開いた。

再び、排気筒から盛大に炎が噴きあがる。

するとホイールからも、まるで燃え上がるタイヤのように、真っ赤な炎が噴き出した。

それが超高速で回転し、ふわり、と鋼鉄のバイクが宙に浮く。
ワオ！

「え！飛ぶの！？」

「そ。ブツ飛ばすわよ」

「バイクって走るもんだぞ！？」

「何それ。知らない」

ブルミエルはそう言うと、さらに強くグリップを握りこんだ。

「待て！心の準備が……」

しかし俺が悲鳴を上げる前に、『ブオナパルト』は凄まじいスピードで夜の空へと飛翔していった。

俺が地上で最後の瞬間に見たのは、ジジイが手を振る姿だ。

「生きておればまた会おう。よい旅を、勇者ケンイチ」

最後の最後で、ちよいと優しい言葉を掛けやがって！

俺はなんだか照れくさくなった。

だが、まあ、世話になったのは確かだ。

ありがとう、老師。

きつと、また会おうぜ！

何か言おうと思ったが、右手がグーン！と引っ張られて、俺の体は夜空へとブツ飛んでいった。

チェーン・リアクション

「うおおああああああああああああああああああああッ！！」

術戦車『ブオナパルト』は、地上から大体30メートルくらいまで一気に駆け上がってから、その高度を維持したまま、凄まじいスピードで夜空を疾走した。

……速い！

超速いッ！

鎖で繋がれた俺の体は完全に真横になっている。

時速100kmくらい？

いや、もつと出てるんじゃないだろうか。

燃え盛る車輪が、宙に炎の轍を残していく。

魔法で動くだけに原理は分らんが、とにかく凄い乗り物だ。

「ぬおおおおおおおおおおおッ！わああああおッ！！」

そして、俺は悲鳴をあげ続けていた。

速度に比例する、凄まじい風圧、身体にかかる凄まじい『G』……飛行機が飛びあがるときに身体にかかつてくるアレだ。

かつて経験したことの無い強さのそれが、今、俺の臓物を身体からハミ出させようとしている。

うえーっ！胃や腸がひっくり返ってるみたいで気持ち悪い。

俺、本当に不死身なんだろうか？

「ひええおおおおわあああああああああッ！！」

だいたい、魔女の空飛ぶ乗り物ってなホウキと決まったもんだらう。

それがこの世界では、炎に包まれた超格好いアメリカンバイクだ。なんとも斬新だね。ハリウッドで映画化するべきだ。

「のわああああおおっおおおわわわおおああッ!」

ちなみに俺、勇者。

異世界の勇者が、そのバイクに鎖で繋がれて夜空を引き摺り回されてるのも新感覚だろ？

まったく、酷い扱いだ。

どうかしてるぜ!

「んぐわあああああつおわわおおおおお!」

さっきから悲鳴ばかりあげて、情けないヤツだと思っか？

この恐怖は一度、猛スピードで疾走するバイクに引き摺られてみれば分かってもらえるだろう。

おまけにここは空の上なんだぜ!

「いえああああつおおおええああああわあつ!」

叫び続けて二十分くらい経った時だろうか。

俺は急に落下感を覚えた。

いや、気のせいではない。

実際に、『ブオナパルト』がスピードはそのままに、少しずつ高度を下げていた。

森の木々が少ないところを見つけて、着陸するんだろう。地面に戻るのありがたい。

(……だが、着陸、だとお?)

ぬわあ、激しく嫌な予感がするぜ。
夢ならここで覚めてくれエ！

「ひ……わあっ… あああああああああおおおおっ！」

術戦車それ自体は綺麗に着陸した。

だが、鎖につながれている俺は、当然そうはいかない。
慣性の法則そのままに、地面に勢いよく叩きつけられた。

「げはあああっ！」

さらに二回、三回と地面を大きくバウンドする。
最後には大岩の上に頭を打ちつけて止まった。

「ごふあっ……！」

「大げさね」

ブルミエルが、ブオナパルトから降りてきて言った。

俺は地面に寝そべったまま、とりあえず生きていることを彼女に知らせるために手を挙げた。

オウ、叫びすぎて喉が痛い。

「……大げさなもんかよ。普通だったら今頃は肉片になってるぜ、俺」

「不死身なんだから、もっと自信持ちなさいよ」

不死身に自信持つってどんな奴だよ……

だが、皮肉なことに五体はしっかりと動くようだ。

「……ああ、本当にそうみたいだ……」

俺はゆっくりと起き上った。

恐怖で涙はしこたま出ていたが、血は一滴も出ていない。

あれだけの勢いで地面に叩きつけられたのに、骨折どころか痛みさえなかった。

すげえ！不死身万歳。

だが、この調子じゃ俺の心がもたないぞ……？

目的地に着くころには完全に白髪になってそうだ。

「……あー、一ついいかな？」

「ん？」

「できれば今度からはもう少しソフトに着陸してくれないか？」

「なんで」

「不死身初心者に、あの着陸はツライんだ」

「ふーん」

「な、頼む」

「検討するわ。前向きに」

はい、絶対に嘘だとわかるよ、このアツサリ加減。

彼女の優しさに期待するより、俺の心を強くするしかないようだ。

「ケンイチ」

「ヘイヘイ、何？」

「見て……」

そう言うと、プルミエルはスカートの裾を少しだけ、捲りあげた。

「……」

思考、一瞬停止。

(…………なにイ!?)

こっ、こっ、これは、ど、ど、ど、どうしたことだ?

「ええっ!?!」

俺は狼狽した。

『見て』って、えええっ!?!

そ、そういうことなのか?

いいのか!?!

「見るって?…………えっ?…………マジで?」

「いいから」

「お、おう…………」

俺は、プルミエルの足元を見る。

もちろん、頭の中は妄想で一杯になっていた。

「見て、ブーツの紐」

「…………へ?」

「あたしのブーツの紐が解けちゃったの」

「紐?」

確かに、スカートの下のごつい編み上げブーツは、紐が解けていた。
おいおい、そんなの自分で…………

「困ったわ。ねえ、勇者様、結んでいただけないかしら?」

鼻にかかるような甘い声で、プルミエルが言う。

「も、もちろん……結ぶ、結ぶよ……」

おう、ヤバいぜ……

これってどんなプレイだ……？

俺、初めてなんだ。

いきなりこんな上級者向けのは……困るぜ。

(とりあえずは彼女のリードに任せろ、ケンイチ……)

俺は心の中で指令を出した。

とりあえず、いそいそとしゃがみこんで、彼女の靴ひもを結んでやる。

うう、指が震えるぜ。

おまけに、鎖が邪魔。

くそっ、えい、さあ、どうだ！

「……で、できました……」

思わず、敬語になってしまう俺。

「次は……？」

期待に胸を高鳴らせて、俺は次の言葉を待った。

「じゃあ、勇者タイムを確認して」

「は、はい……」

俺は言われた通りにする。

あれ？

「結構、余裕がある……」

「あら」

「リセットされたみたいだ」

「よかったわね」

そう言うと、プルミエルはぐるりと背を向けて、再びブオナパルトに跨った。

「そんじゃ、行くわよ」

「はあ……」

ここで、俺は気付いた。

(……もしかして、俺の為に?)

そうか、これは勇者タイムを稼ぐための小休止だったんだ。俺は、なんだか胸の奥が熱くなった。

(うつつ、意外と俺のことも考えてくれてるのか……)

「プル……」

感謝の言葉を告げようと思ったが、その前に、再び爆音をあげてブオナパルトが飛翔した。

「ううあああああああああッ……ッ！」

そして、俺も、再び夜空に向けてブツ飛んでいった。

完徹勇者

「いいお知らせよ。聞きたい？」

「……ぜひ、聞きたいね」

「そろそろ森を抜けるわ」

「そうか……」

俺はプルミエルの言葉を、逆さまに木に引っかかった状態で聞いていた。

「次は、どこだっけ？」

「平野を抜ければ『ルジエ』ね」

「いいところ？」

「普通」

「……」

「……」

会・話・終・了。

「えーっと……」

「？」

「どれくらいでそこに着くんだけ？」

「二時間くらいかしら」

二時間……結構、いいペースじゃないか？

「よし、じゃあ、さっさと勇者タイムをチャージして行こうぜ」

俺が木から下りようとして体の向きを変えると、プルミエルはぐん

！と鎖を引っ張った。

「ヒィッ！」

俺は見事に頭で地面に着地した。

「うっあー！」

「こっちのほうの手っ取り早いでしょ」

「うっっ……俺、勇者なのに」

「ほれほれ、勇者タイム」

おっ、忘れてたぜ。

『07:21』

くそ、結構少ないな。

「な、何すればいい？」

「これ」

プルミエルは、俺の前に逆さにした麦わら帽子のようなものを差し出した。

何だ、これ？

あ、卵が入ってる！

「鳥の巣？」

「着地の衝撃で落としちゃったみたい。もとの場所に戻してあげて」

そう言っつて、彼女は木の上を指さした。
登っつて、降りて、また登る、か。

(勇者も大変だな……)

俺はプルミエルから巣を受け取って、木を登り始めた。
おっと、卵を落とさないようにしないと。

慎重に枝を選んで登って行って、ようやく安定感のありそうな場所
を見つけたので、そこに巣を置く。

「これでよし、と。ゴメンな。ちゃんと産まれてくれよ」
「ダイジョーブウ？」

プルミエルが木の下から声をかけてきた。
俺はそれに親指を上げて応えてやる。

「おっけい」

すると、再びグーン！と鎖が引っ張られて、俺は無様に地面に墜落し
た。

「いじぶはあー！」

「いちいち叫ばないでよ、もー。そろそろ慣れなさい」

「もう少し優しくしてくれ！泣くぞー！」

「泣けば」

そう言ってプルミエルは俺の左手首をねじり上げ、勇者タイムを確
認する。

「うん、リセットされてる」

彼女はそう言って、何やら小さなノートにペンを走らせた。

「何それ？」

「これ？『勇者研究ノート』」

「ははあ、俺をモルモットにして資料を作っているわけだ」

「そうよ」

やさぐれモードの俺の皮肉をサラリとかわす。

くうっ、小悪魔め！

「せいぜい、俺をいたぶるがいいさー！」

「でも、あなたの役にも立つでしょ」

ブルミエルが俺の前にしゃがみこんで、優しげな笑顔を見せる。

うう、だまされないぞ！

「私たちは共同研究者よ。まだまだ研究の進んでいない勇者の生態がこの旅によって明らかになっていくの。勇者タイムの効率良い稼ぎ方も分かるかもしれないし」

「しかし……」

「見て」

そう言っつて、彼女はノートを開いて見せた。

あー……この世界、言葉は通じるが、文字は読めん。

なんて書いてあるかは、全然分からなかった。

「すまん、読めない」

「今、書いたのはここね。『勇者タイムは人間以外の生き物を対象とする善行でもチャージされる』ってところ」

「おー……そう」

「あら、この発見は凄いことなのよ。『人間でなくてもいい』って

「でも、あなたは眠りこけてしまったら、死んじゃうのよね？」
「そうだ！」
「そこで、これです」

ブルミエルは俺の前に紙とペンを出した。

「今から言うことをちゃんと書いておいて。忘れないように」
「お、おう」
「いい？私は今からきっかり『3時間』、寝るわ。だから、あなたが勇者タイムを稼ぐためのアドバイスを今のうちに四つ、出しておいてあげる」
「おおっ！ありがたい！」

ブルミエルは歌うように語りだした。

- 一、森の動物に襲われないように、火をおこすこと。
- 二、ブオナパルトの車体を綺麗に磨き上げておくこと。
- 三、この先にある川から水を汲んでくること。
- 四、朝御飯の支度をしておくこと。

「以上。大丈夫？」
「ああ……よし、書いた」
「いい？分かってると思うけど、勇者タイムが切れるギリギリで、一つずつ、実行すること」
「ああ、わかった」
「寝ちゃダメよ」
「頑張る」
「よし」

ブルミエルはブオナパルトの脇に括りつけてあった荷物の中から、

上等そうな毛布を引き出すと、それにくるまって、すぐに横になっ
た。

「おやすみ、ケンイチ」

「ああ、おやすみ、プルミエル」

彼女はすぐに喋らなくなった。

随分と寝付きが良いなあ。

ひよっとしてエラく疲れていたのかもしれない。

なんだかんだ言っても、彼女は一日中、俺の為に動いてくれた
のだ。

そう考えると、モルモット扱いも些細なことに感じられる。

（そうだな、ケンイチ……そろそろ覚悟を決める時じゃないか？）

俺は天を仰いだ。

（自分の為に、彼女の為に……勇者を続けよう）

この世界で見つけた、唯一の目標。

漠然としてはいるが、何も無いよりは遥かにマシだ。

俺の決意を祝福してくれているかのように、星が綺麗に輝いていた。

アレ……？

何か忘れてるような……

「あ……プルミエルッ！手錠外してくれッ！」

海が見えた

異世界生活は二日目に入った。

『ブオナパルト』はキナの森を抜け、平野を走っている。
どこまでも続く地平線……

(朝……朝だ……)

俺は地平線の先の丘陵から朝日が昇るのを、朦朧とする意識の中で見ていた。

ここまで来るともう慣れたもので、俺は鎖で宙を引き摺られている現状に恐怖すら感じなくなっていた。

いや、むしろ眼下に広がる大草原を、風を切って走ることが、この上なく気持ちよく感じられるのだ。

『心が麻痺する』というのはこういうことを言うんだらうか。

(いや、正確には心が磨り減ったという感じだ……)

色々なことがありすぎて、心の整理も追いつかない。

そんな状況でも一睡も許されないとあつては、廃人になるのも無理はないだろう。

疲労感とそれがもたらす倦怠感。

極度の睡眠不足……

(うお……つらいぜ……)

眠りこけてしまわないように、しっかりと目を開いて、太陽を直視

する。

(ああ……)

俺はその輝きに目を細める。

(なんて光だ……)

自分のいた世界と、なんら変わらない力強い輝き。

二つの世界は実は繋がっているんじゃないかとさえ思えてくる。

その光線を凝視しているうちに夢と現実の境があやふやになってきて、俺は気がつくとも目を閉じてしまっていた。

(おおっと、いかん……)

覚醒と昏睡。

それを繰り返しながら、俺の頭は、次第に真っ白になっていった。

(駄目だ……何も……考えられなく……)

俺が意識を失いかけた時だ。

再び、落下感を覚える。

ああ……『ブオナパルト』が。

(着陸するんだな……)

少し、目を開く。

「……おおっ
」

思わず声をもらしたのは、眼下に、今までとは違う風景が見えたからだ。

青く輝く、途方もなく雄大な水溜まり。

海だ。

そこに面した、大きな町。

港町だ。

あれが、プルミエルの言っていた……えーと、忘れた。

とにかく、俺にとって初めての、異世界の町だ。

「着地は相変わらずうまくいかないわねー」

俺はプルミエルの呆れたような声を、上半身が完全に土中に埋まった状態で聞いていた。

彼女は鎖を引っ張って俺を引き摺りだすと、白目を剥きかけている俺の頬を三発ほど軽く往復ビンタした。

「あつ……」

「痛みを感じないってのも不便ね。ほらほら、しっかりしなさい。」

「おつ……」

「ルジエに着いたわよ。分かるわね？私はこれから船の手配をしてくるから、あなたは街をブラブラしてテキトーに勇者タイムを稼いでおくこと。いい？」

「分かった……」

「じゃ、よろしく」

プルミエルは一方的にまくしたてると、まだ意識朦朧としている俺を残して、さっさと町の中へと歩み去っていく。

そのピンと背筋の伸びた後ろ姿をぼんやりと見送って、俺はつくづ

く感心していた。

(昨日は3時間しか寝ていないはずだよな……)

それでも彼女はきつかり3時間で起きだしてきて、すぐに身支度をする、再び空に炎の術戦車を走らせたのだ。

(ブオナパルトを走らせるのにも『すごく魔力を使う』っていつたのに……)

それがどうだ。

俺は疲労と睡眠不足で完全にグロッキー状態だったのに、彼女は随分とシャキシャキしている。

あの小さい体のどこにあんな馬力があるんだろう？

思えば、こつちの世界に来てからずっと、プルミエルの世話になりっぱなしだ。

(そんで、この旅に付き合ってくれている……)

そんな状況で、俺が「眠い」だの「疲れた」だの、彼女の前で言うていいものかどうか……？

いいや、言えるはずがない……！

(……あの子の期待には応えたいぜ)

その為には、生き延びることだ。

「……よし、行こう……」

いつまでもぼーっとしてはられない。

俺はふらつきながらも、ルジエの港町へと歩いて行った。

火事場の勇者タイム

まだ夜が明けたばかりだっていうのに、ルジエの町はもう活発に動き出していた。

海のほうに目をやると、帆船がいくつも帆を上げて岸に向かってく
るのが見える。

ああ、港町だから、朝が早いわけだ。

俺はとりあえず、ふらふらと活気のありそうな港のほうへ歩いて行
った。

漁場ならではの、魚の生臭さと潮の香りが鼻に入ってくる。

市場の一角で山積みになっているカゴの中を覗いてみると、小魚が
たっぷりと入っていた。

その姿かたちは俺のいた世界のものと全く変わらない。

やっぱり、世界観が多少違っただけで、どっちの世界でも生態系は大
差無いようだ。

「小僧、魚泥棒か？」

不意に、俺の背後から男が声をかけてきた。

振り返ると、筋肉ムキムキで真っ黒に日焼けした、いかにも海の男
といった大男が立っていて、不機嫌そうにこっちを睨みつけている。
おおっと、対応を誤ると拳が飛んでくるパターンと見た。

「いい度胸だ」

「ち、ち、違います、えーと……」

俺は完全にテンパってしまった。

何と言ったものだろう？

睡眠不足の頭では、上手い言い訳も思いつかない。

うーむ……まあ、いいや。
出たところ勝負だ。

「俺……勇者なんです」

「……」

「えー……で、ですね。困った人の手助けをしなければならぬんですよ」

「……」

「なので、何かお困りのことでもあれば、と思ひまして……」

「困ったことはあるぜ」

「おおっ！何でも言ってくださいヨ！」

「どっちの拳でテメエを黙らせようか、困ってるぜ」

「ヒイツ！」

一応、不死身の俺ではあるが、男の体から溢れ出てきた殺気に、思わず短い悲鳴を上げてしまった。

「いや、いやいやいや、本当に勇者なんです！」

「おー、信じてやるぜ」

そう言いながら、男は拳をバキバキ鳴らして近づいてくる。

「マドセン！」

突然、後ろから他の男が声をかけてきたので、大男は振り返った。

ほっ、逃げるチャンス！

俺が慌てて走り出そうとした時、二人の会話が耳に飛び込んできた。

「大変だ！お前の家、燃えてるぞ！」

「な、何っ！？ハンナは！？」

「分からん！とにかく、すぐに来い！」

二人は血相を変えて走っていった。

（火事……か？）

逃げるつもりだったはずなのに。

俺は、何故か彼らのあとを追って走り出していた。

男の家は激しく燃えていた。

窓からはもうもうと黒い煙が立ち昇り、一階部分は完全に炎に包まれていた。

何人もの男たちがバケツリレーで水をかけているが、全く効果は無いようだ。

「ハンナ！」

男が叫ぶ。

「ハンナ！ハンナア！！！」

「駄目だ！マドセン！」

家に飛び込もうとする男を、何人もの仲間が必死で押しとどめた。

「離せ！畜生！ハンナアアアアアッ！！！」

その時、窓からヒョイと女の人が顔を出した。

煤で顔は黒く汚れているが、はっきりした眉が気の強そうなおとななことをうかがわせる美人だ。

彼女が『ハンナ』だろうということは俺にも分かった。

「マドセン！」

「ハンナ！無事か！」

「受け取って！」

そう言っつて、ハンナさんは窓から頑丈そうな箱を二つ、放り投げた。

「うちのヘソクリと、大事な漁師道具。もう一つのほうは着替えだよ！」

「ハンナ！そんなもんでもいい！飛び降りられるか！？」

「あー、ちよいと無理だね。お腹の中の子供のことを考えるとね…

…足も挫いちゃって……」

「ああ、ハンナ！畜生！ハシゴ、ハシゴはどこだ！？」

「駄目だ！ここにあるハシゴじゃあ届かない！」

「くそつたれ！やっぱ俺が行く！」

一連の会話の流れは、俺に状況をしっかりと説明してくれた。

つまり、燃える家の中に妊婦さんが取り残されているわけだ。

つてことは………そうだ。

勇者の出番だな！

（お前は不死身だ、不死身なんだぞ）

自分にしつこく言い聞かせて、一つだけ深呼吸をする。

……よし！

「おおらああああああ！」

「小僧！？」

覚悟を決めた俺は、観衆を押しつけて燃え盛る家の中に飛び込んでいた。

やったぜ！全然熱くない！

ちよつとムワツとした熱気を感じたくらいだ。

一階部分は盛大に燃え上がっていた。

その中で、俺は急いで二階への階段を探す。

俺は不死身だからいいが、あんまりまごついているとハンナさんが蒸し焼きになっちまう。

煙を吸うのも決して体に良くないだろう。

居間を抜けて、扉を開けると、階段があつたので、俺は急いでそれを駆け上がる。

後ろでバキバキと何かが崩れ落ちる音が聞こえた。

くそっ、急がないと！

「ハンナさん！」

俺が二階の部屋の扉を蹴り開けると、お腹の大きな女性がびっくりした顔でこっちを向いた。

「あら！あんた、誰？」

「助けに来ました！」

「ええ？どうやって……」

「それは後で。とにかく、今は早くここを出ましよう」

「どうやって？」

どうやって？

どうしよう？

考える！

階段はもう使えないだろう。

俺は部屋中に目を走らせる。

何か無いか？何か……

窓のカーテンを見たとき、ふと、頭に閃くものがあつた。

「よし、カーテンを使いましょう」

そう言つて俺は窓からカーテンを一枚引っぺがすと、それをさらに二枚に裂いて、端を結んだ。

もちろん玉結びだ！

それはつなぎ合わせると5mくらいになった。

ここは二階だから、大体これくらいの長さがあれば大丈夫だろう。

ハンナさんは俺のしていることをじつと見ていた。

「ロープ？」

「そうです。これであなたを降ろします」

俺は出来上がった即席のロープをぴんと引っ張つて強度を確かめる。

よし、大丈夫そうだ。

俺は窓から顔を出して、窓の真下は火の手が弱いことを確認する。そうして、外の観衆に向かつて叫んだ。

「今からハンナさんを降ろします！」

「何っ！」

「下で水の準備を！」

「わ、わかった！」

今度はハンナさんを見る。

「これをしっかり掴んでいてください。なるべくゆっくり降ろします。一階はかなり燃えていますから、気をつけてください」

そう言つて、近くにあつた花瓶から花を抜いて、中の水を頭からハンナさんにかける。

文字通りの焼け石に水、だが、何も無いよりはマシなはずだ。

そこうしているうちに、後ろで扉が焼け落ちて、炎が室内にも燃え広がってきた。

「うお、急ぎましょう!」

「でも、あんたは?」

「俺は平気です」

「そんな!」

「本当です。燃えない体質なんですよ。さあ、急いで!三人でここから出るんです!」

「……ええ、そうね。わかった」

ハンナさんはしっかりとロープを手首に巻きつけるようにして掴んだ。

「いいわ」

「よし、行きます」

俺は窓に足をかけ、しっかりと腰に体重を据えて、ハンナさんを少しずつ降ろしていった。

うおお、さすがに少し重たい!

俺はバランスを崩して、前のめりになってしまった。

すると、ぶら下がっているハンナさんの体も左右に大きく振られてしまつて、観衆から悲鳴が上がる。

(くそ、落ち着け!)

俺は窓の棧に足をかけて、重心を後ろに倒し、バランスをとった。

炎は、今や完全に部屋の中を支配している。
室内が赤一色に染まっていた。
窓の外で観衆の声が聞こえる。

「いいぞ！」

「もう少しだ！」

「気をつける！」

「あと少し！」

「いいぞ！……よし、やった！」

ふっと、ロープが軽くなると、窓の外から歓声が上がった。
よし！成功したようだ！

俺は確認しようと窓から顔を出した。

「大丈夫ですか！？」

「大丈夫、大丈夫だ！お前も早く飛び降りろ！受け止めてやる！」

全員がこちらに向かって一斉に手を伸ばす。

俺は、窓から身を投げ出して、宙にダイブした。

「おおおっ……！」

落下している最中に、建物の中が見えた。

自分がさっきまで立っていた場所が、完全に業火に包まれている。

よくもまあ、無事だったもんだ。

やっぱり不死身ってのは便利な能力だね。

なんて思っていると、何本もの手が、落下する俺の体を優しく受け止めた。

地面に降ろされると、頭から何度も水をかけられる。

「おぼつ、だ、大丈夫っス、燃えてないから……」
「お前……お前ってやつは！スゲエ奴だぜ！」

一斉に歓声が上がった。

「おお、よくやったぜ、ボウズ！」

「まったく、大した奴め！」

あちこちから丸太のような腕が伸びてきて俺をもみくちやにした。ケツを叩かれたり、背中を小突かれたり、頭をワシワシ撫でられたり。

ひとしきり祝福を受けた後、大騒ぎしている観衆をかき分けて、さきほどの大男が俺の前に立った。

「……小僧、名前を聞かせてくれ」

「えーっと、神 健一です」

「ジン・ケンイチ……俺はマドセンだ」

マドセンさんが、大きな手を俺に差し出してきた。

俺はそれを握った。

相手が、力強く握り返してきた。

「ありがとう、ケンイチ……ありがとう……」

マドセンさんは、両目から流れる涙を隠そうともしないで、ひたすら強く俺の手を握っていた。

遠くから、ハンナさんが何人かの奥さんたちに介抱されながら、満足そうにこちらに微笑みを送ってくる。

俺はどうしていいか分からなくて、少しうろたえてしまった。

照れくさいような、恥ずかしいような……

だが、その一方でこうも感じていた。

（勇者って……何かイイ！）

寿司屋志願者

「勇者ケンイチに乾杯！」

「乾杯！」

一斉に杯が上がった。

当然、俺は未成年なので水。

「うーい、うめえ！」

「さあさあ、心おきなく飲んで食ってくれ」

さきほどの救出劇で一躍人気者になった俺は、町の衆に誘われて大きな食堂に連れてこられた。

そして、目の前には豪華な海の幸が。

ワオ！この世界に来て、初めての御馳走だ。

「おおっ、いただきます！」

ちょうど空腹だったので、俺は遠慮なしに焼き魚やら煮魚やらを口に次々と放り込んでいった。

マドセンさんは酒をぐいぐいと飲みながら、それを面白そうに見ている。

「うまっ！」

「これも食えよ」

「…うまっ！」

「これも美味いぜ」

「……うまっ！」

「わはははー、いい食べっぷりだ！気に入ったぜ、ケンイチ！」

「ちよいと、あんた」

ハンナさんが呆れた顔で水差しを運んできて、俺の空いた杯に水を注いでくれた。

「まったく、仕事も放り出して朝っぱらから飲んだくれるなんて！」
「いいじゃねえか。家は焼けちまったが、お前も無事、子供も無事、ついでにヘソクリも漁師道具もパンツも無事ときたもんだ。こいつは祝わずにはいらんぜ、なあ？」

マドセンさんは仲間たちに同意を求める。

男たちは一斉に頷いた。

「そうだけ、ハンナさん。こいつはめでてえ席だ」

「そうそう。それに真の勇者を祝福しねえことにはこのルジエの港町の、末代までの恥だぜ」

「もう！あんたたちときたら。この調子じゃあ、これから毎日どこかで火の手が上がりそうだよ」

「それも悪くねえな！わはははー」

全員がどつと笑い転げた。

いやー、平和だなあ。

それだけでも、意を決して炎の中に飛び込んだ価値は十分にあるだろう。

『情けは人の為ならず』なんて言葉があるけど、こつこつ光景を見ていると本当にその通りだと思う。
昔の人は本当に上手いこと言うね。

「おう、そういえばケンイチ」

マドセンさんがごつちを振り返った。

「俺はちよいと信じかけてるぜ。お前が最初に言っていた、あの…

…」

「？」

「お前さんが、勇者だつて話さ」

「あー、いや、自分で言うのもアレでしたよね……」

「いやいや、もう笑ったりはしないぜ。よかったら詳しく聞かせてくれ」

「話すと少し長くなるんですけども……」

俺は自分の置かれている状況と勇者タイムについてを、なるだけ分かりやすいように全員に語って聞かせた。

「……ふーん、そいつは厄介なことに巻き込まれちまったな」

「うつつ、この世界に来て初めてそんな同情的な言葉を頂いた気がしますよ」

「で、今は『勇者タイム』は大丈夫なのかい？」

「おおつと」

ハンナさんの言葉で、俺は慌てて『勇者タイマー』を見た。

『12:17』

おつと、危なかったな。

「あと12分くらいですね」

「よしー」

マドセンさんが立ち上がった。

「ケンイチ、ここは協力させてもらうぜ。ようは誰かの手伝いをし
てりゃあ、お前は死なずに済むんだな？」

「まあ、そうですね」

「おい、ベント。たしかポウルのところの若いのが一人、風邪で寝
込んでしまったよな？」

「あー、そうだな。一家総出で休みなしだと嘆いてたぜ」

「よし、酒盛りは一時中断だ。ケンイチ、ついてきな」

そう言って、マドセンさんは俺の手を引いて席を立った。

連れてこられたのは港のほど近く、こじんまりとした出店の前で、
男たちがせつせと包丁をふるって魚をさばいている。

開きになった魚が大量に吊るしてあるところを見ると、どうやら干
物を作っているようだ。

「ポウル！」

「あん？やー、マドセン」

顔を上げたのは、真っ黒に日焼けした老人だった。

「お前の家、燃えちまったんだってな。気の毒に」

「なあに、女房も子供も無事だったんだ。なんてことはねえよ」

「そいつは何よりだ」

マドセンさんはその老人ポウルさんにここまでの経緯について話し
てくれた。

「ほう、こんな若造がねえ。見上げたもんだ」

「で、こいつの『勇者タイム』のチャージに協力してやってくれな
いか？」

「それはこっちにとっちゃありがたいが……」

老人の目がこっちを見る。

「いえいえ、何でもやりますよ。言ってください」

「お前さん、包丁を握ったことはあるのかい？」

「えーと、あんまり、無いですね」

「やれやれ、こっちに来な」

俺がまな板の前に立つと、ポウルさんは包丁を渡してきた。

「エラの下に包丁を差し込んで、腹側に向かって引くんだ。そうそ
う……」

俺は指示に従って包丁を動かして、5分ほどかかってようやく魚を
半分にした。

「うーむ、ちょっと遅いな。もう少しスピーディにやってくれ」

「分かりました」

そこから、俺は作業に没頭した。

最初の10分は完全に要領が悪くて、ヨレヨレと魚がまな板の上で
踊った。

次の10分はポウルさんのアドバイスのおかげで少しだけ早く魚を
さばくことができた。

次の10分で、俺は完全にコツをつかんだ。

何よりも、手を怪我する心配がない分、包丁を扱うことに関してか
なり大胆になれるからだ。

「ほう！筋が良いぞ、ケンイチ！」
「あざっす」

包丁を入れて、引いて、開いて、骨を切り離して……
今の俺は職人そのものだ。

やってるうちに楽しくもなってきた。

もとの世界に帰ったら寿司屋になるのもいいかも。

食通は卵焼きの味で寿司屋の腕が分かるっていうから、気をつけようぜ。

「……ンイチ、ケンイチ！」

「えあ？」

熱中していた俺はポウルさんの声で我に返った。

「ほれ、時間は？」

「あ、ああ」

『15:51』

「まだ、少し余裕があるッス」

「そんじゃあ、もう少ししたら、次の仕事に行こう。漁網の繕いを頼むよ」

「ウス」

結構、人の為になることってその辺に転がってるもんだな。

この調子だと、ここで暮らしてるだけでも生きていけそうな気がする。

俺にとっては異世界で初めての町。

だが、勇者としてのやりがいを確かに掴んだ気分だ。

長距離の船旅では毎度のことだけれど、航路の確認はなかなか時間のかかるものだ。

物資の積み込み手順、中継点の指定、日程の調整、風向きの確認。陸の上だけでもすることは山のようにある。

それでもいくつかの提案と意見を交わしあって、ようやく全ての段取りがまとまったところで、船長がコンパスをたたみながら笑顔を見せた。

「では、今回は片道三日の日程で調整させていただきます」

「うん、お願いね」

「へい」

船長は金貨を受け取ると、数えもせずに番頭に渡した。

「あら、確かめなくていいの？」

「何を仰います。『ミスmanaガン』の金貨が不渡りをおこしますかね？」

「まー、分からないわよ」

「その時は請求書を別に送りますよ」

「ふふ……」

この『クイバー客船』は小さいながらも誠実で安全な船旅がモットー。

『ミスmanaガン』の名前を出しても、値段をつり上げたりしないし、奇異の目で見たりもしない。

船長をはじめとして、船員達の対応も丁寧なので、好感を持って普段から乗員にしているところだ。

「じゃあ、術戦車の積み込みはお願いね。私はもう一つの荷物を拾ってくるわ」

「分かりました。出港は南中の時刻でよろしいですかね？」

「ええ。よろしく」

「では、お待ちしております」

ピシッと敬礼を送る船長に、私も軽く敬礼を返して、背中を向けた。潮風が、すうっと私の髪を揺らして抜けていく。

長くそれを身体に浴びすぎると、べつとりと気持ち悪くなるけれど、こうしてたまに吹かれるくらいは気持ちいいものだわ。普段はあまりやらないけれど、大きく伸びを試してみる。

「んーっ……」

背骨がバキバキと音を立てる。

あらあら、意外と疲れてたのかしら？

今度は肩を大きく振りまわしてみる。

同じように、ペキペキと骨が鳴った。

(やーね。昔は三日三晩もブオナパルトを走らせても疲れなかったのに……)

何らかの衰えを実感してガツカリしかけた、その時。

沖合のほうでカモメがひとときわ高く鳴きだした。

「ん？」

振り返って、見る。

「…………あちゃー」

水平線を遮るその巨体がこちらの否応なしに目に入ってきて、私は思わず大きな溜息を洩らしてしまった。

（『メイベル・ルイズ』…………）

富豪貴族の持ち物ならではの、悪趣味な装飾を散々に散りばめた超巨大な豪華客船だ。

黒塗りの重厚な船体と、帆先の黄金色に輝く女神像がトレードマーク。

オールや風の力を使わない最新設計で、十人からなる水の法術師が魔道の力を注いで動かしているらしい。

言うなれば、特大の術戦車といったところかしら。

しかし、どうして人間というものは少し財を持つと、とかくああいう大きな物を作りたがるのだろうか？

醜い自己顕示欲、薄っぺらい見栄、厚塗りの虚飾。

そんなモノが、この大海を我が物顔で走る様は到底美しいとは言えないわ。

風を受けて、自然のままに走る帆船のほうが私は好きだ。

『メイベル・ルイズ号』はまるで凱旋でもするかのようにゆっくりと『ルジエ観光地区』のほうへ着岸した。

それも海のリゾートを楽しむ貴族向けに再開発された、悪趣味な美観地区だ。

（…………ま、いやか。別にあっちには用は無いら）

私はとりあえずケンイチを探すために、朝市のほうへ足を向けた。

（彼が馬鹿でなければ、人混みの多い所へ行くはずだけど…………）

いや、彼が馬鹿でないとはい切れぬ。

(……死体置き場から探したほうがいいかしら?)

でも、その考えはするりと頭の片隅に引っこんでいった。

別段、特別な感情を持っていないわけではないけれど、あの、ジン・ケインチという青年にはどことなく普通の人間とは違うものがあると思う。

知力でも体力でもなく、何よりも運の強さ。

ここまで生き延びているだけでも、それは実証済みと言えるだろう。

(思い切りの良さもあるわね……)

それは、勇者が不死身であるということと合わせて考えると、大きな強みになる。

あれこれと思い悩んでいるうちにタイムアップ、という勇者も今までに星の数ほどいただろう。

引っ込み思案や臆病者には、勇者は務まらないということかしら? 誰が考えたシステムかは分からないけれど、『勇者タイム』は実に巧緻に富んだ『勇者の選別方法』だ。

(じゃあ、その旅の先には何があるのかしら?)

このままの状況が続けば、ケインチはただの『国民的な便利屋』^{パシリ}というポジションに定着するしかない。

このゲームにはゴールがあるのだろうか?

彼が本物の勇者だとして、それが世界に及ぼす影響は何か?

『勇者タイム』の存在そのものが理屈でない以上、全く予想がつかない。

巻き込まれたケンイチには申し訳ないけれど、非常に興味深いテーマだ。

(ふふ、面白いわね……)

そんなことを考えて笑った時、前の通りに、真っ黒に全焼した家を見つけた。

それだけならば、大して気にも留めなかっただろうけれども、通りに立っていた若い男女の会話が、私の注意を引いた。

「マドセンさんも災難だったなあ。火元は分からないのかな？」

「ハンナさんは台所仕事もしていないのに急に燃え広がったっていつてたわね」

「げ、放火？」

「まさか！」

「でも、みんな無事でよかったよなあ」

「そうね。あのケンイチって子が飛び込んでいかなかったら大惨事だったわ」

「あの子もよく無事だったな。火傷一つしてなかったらしいぜ」

私は聞き慣れた固有名詞を耳にしたので、二人に歩み寄っていった。

「失礼、お二人さん」

「？」

「火事がありましたの？」

「ええ、朝一番だね。でも、死傷者が出なかったのは不幸中の幸いですよ」

「それは……幸運でしたこと」

「一人の青年が危険を顧みずに飛び込んで行って、中で逃げ遅れていた妊婦さんを助け出したんですよ」

「まあ！」

とりあえず、大げさに驚いて見せる。

ほー、随分と派手な活躍をなさったようね。

「ぜひ、その青年にお会いしたいわ。どちらにいらっしやるのかしら？」

「えー、マドセンさんと漁師仲間がこの先の『メド・ブルウ』っていう食堂に連れていきましたよ」

「そうそう、今頃は大騒ぎでしょうね」

「御親切に、ありがとう」

私は二人に頭を下げて、その食堂へ向かうことにした。

ふーん、なかなかうまくやっているじゃない？

若干の満足感を覚えながら、朝市で賑わう通りを抜けると、難なく『メド・ブルウ』の看板を見つけた。

お世辞にも小奇麗とは言えないけれど、いかにも大衆食堂、といった趣の店構え。

扉をくぐると、ムツとした熱気とお酒の匂いが身体を包んだ。

大勢の男たちが、テーブルの上で肩を抱き合ったり、言い争ったりと盛り上がっている。

「わはははー、お前は本当にいい奴だぜ」

「俺もそう思ってたよ」

「おい、てめえ、今、なんて言った？」

「タマナシって言ったんだよ」

「てめえ！」

「おおっ、いいぞ！」

うーん、平和だわねえ。

しかし、店内を見回してみても喧騒の中にケンイチの姿は無い。この一団の中にいれば、目立つはずだけど……とりあえず手近なテーブルで酔いつぶれている男の肩を揺すって、起こした。

「ちょっと、ケンイチは？」

「おうん？……誰だつて？」

「火事場で活躍した人はどこですかー？」

「ああー……マドセンが連れてつたよ」

「どこに？」

「ポウルのところだ」

「どっちのほう？」

「右……」

「ここを出て、右？」

「右だ……」

「右ね」

「あんた……綺麗な人だ……なあ、俺がもう少し若かったら結婚してくれるかね……？」

「考えとく。じゃあね」

私は『メド・ブルウ』を後にして、右の通りを歩いて『ポウル』のところを探す。

しばらく歩くと、『シーフード・ポウル』の看板が見えた。

店の前では威勢のいい男たちが、声を張り上げて呼び込みをしている。

「へい、らっしやい！らっしやいよー！」

「お尋ねしますが」

「へい、お嬢さん、毎度！」

「ここに、ケンイチっていう男の子が来ませんでしたか？」

「へい、ケンイチ一丁!……っ、あー、あの男の子ね。彼ならここを手伝ってくれたあとに、マドセンさんに連れて行かれたよ」
「どちらへ?」

「『観光地区』のほうだったかな?この通りをまっすぐ進んだところだ」

「はあー……」

よりによって、面倒なところに……
思わずため息が出た。

「何?お嬢さん、もしかしてあいつの彼女なの?」

「かもね」

「ぬぐぐっ……あの野郎、こんなに可愛い子とッ!」

「きげんよう」

ぐぎぎ、と齒噛みしている男に別れを告げて、私は観光地区へ向かう。

まったく、とんだタイ回しだわねえ。

あらかじめ待ち合わせの場所を指定しておくべきだったかしら?でも、それだと行動に制限が生まれてしまう。

『勇者タイム』が思うように稼げなくなってしまっただけだと思っただけだ……

(うーん、気を回しすぎたかも)

ちょっとだけ反省。

もう少し、彼を信用してもいいのかもしれない。

そういえば、ニワトリも放し飼いにするより狭い鳥かごに入れておいたほうが効率よく卵を産むそうだ。

何事も放任は良くないということね。

(『生かさず殺さず』が丁度いいのかも……)

そんなことを考えているうちに、観光地区の目の前だ。

『ルジエ歴史美観地区』と書かれた大仰な鉄製のアーチから先は、綺麗に石畳が舗装されていて、白塗りの真新しい建築物は、日の光を反射して目を焼かんばかりに眩く輝いている。

先ほどまでの港町とはまるで別の国のようだ。

(わざわざ、こんなところにね……)

これも、富豪連中の道楽。

最近は海沿いの別荘というものが流行っているらしい。

そして、『メイベル・ルイズ』で悠々自適な遊覧旅行。

まったく、あの連中にはお金を使うこと以外の趣味は無いのかしら？

「小僧！面白い！」

(んー……?)

突然聞こえてきた怒声。

私はそちらへ目を向けた。

オープンカフェの店先で、屈強そうな騎士風の男が、一、二、三人……と、それに囲まれてるケンイチ。

(意外とすぐ見つかったわね……)

いきり立つ男たちに対して、ケンイチは両手を広げて、まあまあとなだめすかしているようだった。

よく見ると、その後ろには女の姿が。

ははあ、あれを庇っているワケね。

「……げ」

しばらく眺めていようと思ったけれど、あることに気付いて、私は
思わず頭を抱えてしまった。

もう、あのバカ！

よほど、トラブルに巻き込まれる体質なのね。

(よりによって、あんな厄介なものにつかまるなんて……)

航海の前に、早くも波風が立った。

三人の騎士の凄味

仕込みの仕事が一段落したポウルさんのところを後にして、今度は港の清掃作業を手伝おうとマドセンさんに案内されていた時のことだ。

鉄製の立派なアーチの向こうで、怒声を聞いた気がした。

「ん？今、何か聞こえませんでした？向こうから……」

「うーむ、聞こえたとしても無視するべきだろうな。あの門から向こうはロクデナシの溜まり場さ。関わり合いにならないのが一番だと思っぞ」

マドセンさんは実に面白くなさそうに、むっつりとした様子で言った。

「はぁ……そうツスカ」

俺は、ひよいとそちらを覗いてみる。

わーお、綺麗な石畳の路地はまるで別世界だ。

その通りに、日傘が何本か立っていて、その下には木製の上等そうなテーブルとアームチェアが。

オープンカフェだろうか？

そこに、身なりの立派な三人の男が立って、何やら互いに言葉を交わし合っている。

ここからは見えないが、椅子に座っている人物に対して、何やら因縁をつけているようだった。

「なんだか、厄介なことになってそうですよ」

「首を突っ込むともっと厄介なことになるぞ。さ、行こうぜ」

「いやー、しかし、俺、一応勇者なんで、止めに行ってきます」

「さてさて、あの連中はどう見ても出来そこないの騎士だ。そのへんのゴロツキよりもタチが悪いんだぞ」

「まあ、何とかなるでしょう。ここで待っていてください」

不死身であることをはっきりと自覚した俺にとっては、ゴロツキなんか可愛いもんだ。

『義を見てせざるは勇無きなり』という言葉もある。

もちろん、勇者タイムを稼ぎたいという欲もあることはあるが、それよりも勇者としての正義感が前に立って俺の体を動かした。

おお、なんか俺、徐々に勇者っぽくなってきてる気がする！

集団に近寄るにつれて、会話が聞こえてきた。

「レディ、何を嫌がっておられるのか？ 私たちは素性もはっきりとした清廉潔白な騎士そのものですよ」

「でしょうけれども、わたくし……」

「我が名は『疾風のクエルテス』」

「我が名は『迅雷のシクラム』」

「そして、我が名は『寸断のレバリアン』。これらの名を耳にしたことはお有りか？」

「申し訳ございません。存じませんわ……」

「な、なんと！」

「信じられん……」

「待て待て、クエルテス、シクラム。相手は御婦人。我らの武勇を知らぬといえども無理からぬこと」

「そう、そうですね……私、世事には疎くて……」

「なればこそ、ですぞ、レディ。我々のことをよく貴女様に御理解いただく機会を得たいものですな」

「でも、そう仰られましても……私、困ってしまいますわ……」

ははあ、格好つけて喋ってはいるが、質の悪いナンパと見た。
いるんだよね、『俺は昔悪かった』みたいな、しょーもない武勇伝
で女の子の気を引こうとするヤツ。
それで、意外にモテたりするんだよね、そういうヤツが！
なおさら、勇者としては許せん。
いや、別にひがみではない。
決して、そうではない。
……とにかく、許せん！女性は困ってるじゃないか！
俺は、ゆったりとした歩みで、三人に近寄っていった。
一つ、咳払いをして注意を引く。

「もし」

声をかけると、いかにも屈強そうな男たちが、こちらを向いた。
わーお、どれも強そうだ。
だが、俺も怯むわけにはいかない。

「何だ、小僧？」

「あー……あの、女性が困ってるじゃないツスカ」

「なに？」

「こんなに大勢で女性を取り囲むなんて格好悪いツスよ」

「ほほう」

三人は、今度は俺を取り囲むように展開した。
正面に一人、左右に一人ずつ。
その動きのスムーズなこと。
はーん、コイツラ、喧嘩慣れしてやがる。
だが、今日の俺は倒れねえぜ！
俺は女性のほうを見た。

「……………」

「ワオ！知的な眼鏡美女だ。」

しかも、『超』のつく美女だぞ？

真っ白な肌を一層引き立てるような、つややかな黒髪。

それをアップにして、長い櫛一本で留めている。

レンズの向こうの切れ長の瞳は赤銅色で、長い睫毛が物憂げに揺れている。

真っ白のブラウスの上に、黒のロングコート。

ぴったりとした黒革のパンツは実に色つぼく曲線を描いていて、もう、思わず涎を垂らしてしまいそうなほどグラマラスなボディを連想させるには十分だった。

俺よりもいくつか年上だろうが、全然ど真ん中ストライクですヨ！
うーむ、これならナンパする気持ちも分かる。

ブルミエルといい、こっちの世界は粒ぞろいだが、ヤッホーイ！

「あの……………」

女性が、おずおずと口を開く。

おおっと、いかん、テンションが上がりすぎてしまった。

儂げな雰囲気、また、保護欲をそそる。

うおお……………萌えーッ！

抑えようとしても上がり続けるテンションに為す術も無い。

「大丈夫、俺に任せてください」

「え……………」

「大口を叩いたな、小僧」

「騎士の恐ろしさを知らぬと見える、小僧」

「敬意と畏怖という言葉も同様にな、小僧」

コゾーコゾーと偉そうな奴らだネ。

『和紙の原料は?』

コウゾー! 正解。なんちゃって。

「そうツスねえ……そうだ! 一つ、賭けをしませんか」

俺は閃くものがあったて、ポンと手を叩いた。

「賭けだと?」

「これから五分間、あんた達は俺を好きなようにボコボコにしていっす。得物も自由。それで、五分後に俺が生きてたら、あんた達はナンパを諦める。どうっすか?」

俺の提案に、その場にいた全員が呆気にとられたようだった。

男どもは顔を見合わせて、互いに状況が理解できないといった様子で小首を傾げていたが、やがて、その顔に残忍な笑みを浮かべてこちらに振りむいた。

おおっと、ヤル気満々だな、この血に飢えたケダモノどもめ!

「小僧! 面白い!」

「はい、それじゃあ、どうぞ。五分間だよ、お客さん」

「我が名は『疾風のクエルテス』」

「我が名は『迅雷のシクラム』」

「そして、我が名は『寸断のレバリアン』」

「俺の名前は……ごあ!」

つられて名乗ろうとした時、いきなり後頭部に何かを当てられた感触があった。

ちよ、おま、不意打ちかよ! くそっ、セコい野郎どもだ。

俺がそちらを振り向くと、今度は右から拳が飛んできて、俺のこめ

かみに綺麗にぶち当たった。

「うお」

「そらそら、まだ五秒も経っておらんぞ」

今度は左からみぞおちを突き上げるようにヒザが入った。

「わあ」

「ふはははは」

口火を切ったように、俺を囲む三方向から拳や蹴りが波のように押し寄せてきた。

背中、腹、頭、大事なトコロに至るまで、あらゆる個所を絶え間なく打ちのめしてくる。

「そらっ、そらっ、このっ！」

「ふんっ！せいっ！」

「どうだ、こいつめ！」

「あーれー」

だが、俺に向かってくる攻撃は身体をぐらつかせはしても、ダメージを与えるには至っていない。

「イエーイ、不死身サイコー！」

それでも額に汗を浮かべて必死に様々な技を繰り出してくる三人。ふ、ちよつと笑える光景だ。

「そら」

「おおっ！？」

と、そこで誰かが足を引っ掛けて、俺を地面に引き摺り倒した。

俺はちよつと不意を突かれて、四つん這いになる格好で地面に手をつく。

そこへ、上から容赦の無い踏みつけが襲いかかってきた。

「はははっ、いいザマだぞ！小僧」

くそ。

土下座しているような姿勢のまま、頭を小突かれたり、地面に打ちつけられたりしているうちに俺はだんだん腹が立ってきた。

(図に乗りやがって……)

五分だ。

約束通り五分経ったら、すつくと立ち上がって奴らを驚かしてやる。そんでもってカツコイイ台詞を一つ。

『蚊でも刺したか？』

コ・レ・だ。

うおお、楽しみ！

奴らのビビる顔が目に見えかぶぜ。

俺が、思わずニンマリとした時だった。

(ん？)

さっきまでは日差しが照っていて暑いくらいだったのに、突然、なんだか肌寒くなってきた。

(何だ、この寒気……？)

それと同時に、男たちの攻撃がピタリとやんだ。

（んん？）

妙だ。

まだ三分も経っていない。

奴らが途中で仏心を出す、なんてのも到底考えられない。

俺は顔をあげてみた。

「……………」

目の前に、靴があった。

デカイ靴だ。

それが、振り下ろされる直前という位置でピタッと止まっていた。

俺はそれをくぐって、立ち上がる。

なんと、驚いたことに三人ともがまるで時間が止まってしまったかのように身動き一つしていなかった。

顔に浮かべた残忍そうな笑いもそのままだ。

「え……………一体、何が？」

よく見ると、疾風のナントカの鼻から垂れ下がっているものがある。

（鼻水？）

ではなくて、それはツララだった。

身体からは、白い湯気のような冷気も漂っている。

なんと、驚いたことにこいつら全員、カチンコチンに凍りついているのだ！

「おおっ！？なんで？」

「まったく……余計なことを」

俺は、声の方向に振り返った。

すると、さっきまで成り行きに怯えていたあの眼鏡美女が、実に落ち着いた様子で紅茶を啜っていた。

おやおや？

なんだか……まるで雰囲気が違う？

「えーっと……コレは……？」

「死んではいない。この陽気だ、しばらくすれば溶けるだろう」

「ええーと……？」

「ん？魔法を見たのは初めてかな？」

「魔法！」

こ、このお姉さまも魔法使ってこと？

「……スゲエ……」

「『スゲエ』ではないよ、君。私の娯楽を邪魔した罪は重いぞ？」

「娯楽？」

俺の問いに、女性は顎をしゃくって冷凍騎士たちを示した。

「好きなんだよ、私は。こっとう手合いをからかうのがね」

おおっと、この人、俗に言う『悪い女』じゃないか？

先程の儂げな印象とは打って変わって、口元には妖艶な微笑が浮かぶ。

(うお……)

プリティーなプルミエルとは違った、実にアダルティーなその魅力。うーむ、これを見せられたら、世界中の男たちはこの女性の前にひれ伏してしまうだろう。

『女帝』……

そんな言葉が俺の脳裏をよぎった。

ナイス・ボディ

「しかし、君も無茶をする……」

女性が俺に席を勧めてくれたので、俺は向かい合うようにして座った。

うっ、なんだか緊張するなあ。

彼女の見た目のせいだろうか、担任の先生に個別指導されてる生徒な気分だ。

もちろん、俺の実際の担任は禿げたオッサン（あだ名は『ザビエル』）だし、こんな美人の女教師には一度もめぐり合ったことは無いが、妙な背徳感と期待感がごちゃ混ぜになって、得体の知れない照れくささを感じる。

あ、ちなみに氷漬けになったゴロツキどもは店の前に転がしたままだ。

「自己紹介がまだだったな。私は『メイヘレン』。メイヘレン・ブランシユール」

「俺、ジン・ケインイチです」

「怪我は無かったか？」

「あー……はい。俺、不死身なんで……」

「不死身……？」

「まあ、簡単に言うと、勇者なわけですが……」

うっむ、言えば言うほど胡散臭いぜ。

そのうち『勇者タイム』を上手に説明できるカンペでも作るところ。

「……よければ、詳しく教えてもらおうか？」

乞われて、俺は女性に『勇者タイム』のあらましを説明した。
彼女は実に興味深そうに時に首を傾げたり、時には頷いたりして聞
いていた。

「フーム、なるほど、なるほど……だから、変わった格好をしてい
るわけだ」

俺は自分の学生服を見た。

俺にとっては見慣れた、何の変哲もないブレザーなんだが、確かに
この世界では珍しいだろう。

「しかし、実に面白いね。『勇者タイム』か……」

ニヤリと赤い唇が笑う。

(うーむ、この笑いはつい最近見たことがあるぞ……)

悪い予感がする。

と、女性は大きくこちらに身を乗り出してきた。
白いブラウスの隙間から、豊かな胸の谷間が見えて、俺はもう、な
んていうか、駄目になりそうだった。

「なあ、勇者くん。君は……」

「ストップ!」

「おお!?!」

振り向くと、プルミエルが不機嫌そうに腕を組んで仁王立ちしてい
た。

「プルミエル!」

らね」

おっと、一部始終に近いな、それは。

「ミスマナガン、どうだね、君もお茶でも」

「いえいえ、先を急ぎますの。お邪魔したわね、ブランシユールさん。こいつは私の連れで、虚言癖があるから気になさらないように」
「フフフ……」

メイヘレンの、眼鏡の奥の瞳が、実に悩ましくこちらを見つめてくる。

ワオ、や・ば・い。

命令されたら靴まで舐めてしまいそうだッ！

「さ、行きましょ」

「お、おう……」

「まあ、待てよ、『プルミエル』」

「馴れ馴れしく呼ばないで下さるかしら？」

「あつは、気の強い娘だね、相変わらず」

「お互いさまだわ」

「まあ、聞きたまえよ、プルミエル。君たちの次の目的地を当ててやるうか？」

「へーえ」

「『ジャパテイ寺院跡』……『勇者の聖地』とも呼ばれている場所だからね」

「さーね」

「フフ、間違っていないだろう、ケンイチくん？」
「……」

プルミエルのじっとりとした視線が、背後から『何も言っな』とい

う淒まじい圧力をかけてくる。
気がつくと、俺はケツの谷間に汗をかいていた。
うーむ、とりあえずここはごまかしとけ。

「さー、どうでしょう……？」

ナガシマかよ！と心の中でセルフツッコミする。

「君は嘘が下手だな。不随意反応、目が逃げたぞ」

アウチ。

後ろから、プルミエルが肘で俺の背中を小突いた。

「ばか」

「ううっ、無念だ」

と、メイヘレンがすくと立ち上がった。

おおっ、結構背が高いな。

小柄なプルミエルの前に立つと、その差は歴然だ。

「どうだ？プルミエル。このメイヘレンが君たちを向こうの大陸まで連れて行ってあげようじゃないか」

「あら、お世話さま。でも、必要無いわ」

プルミエルは身長差を全く気にせず、つんと胸を張った。

「もう船は用意してあるから」

よほど相手のことを嫌っているのか、にべもない。
しかし、メイヘレンも引き下がらなかった。

「まあ、そう言うなよ。快適な船旅をお約束しよう。私の『メイベル・ルイーズ』号ならば、目的地に着くまで君たちを一秒も退屈させはしないよ」

「私には必要無いわ」

「やれやれ……そうだ、ケンイチ、君はどうだ？」

「俺？」

「楽しい旅になるぞ。毎晩繰り広げられるダンスパーティー、楽団の生演奏、一流の料理、一流の美酒……」

「ワーオ！」

それって、夢にまで見たセレブ体験ってやつ？

今すぐにでもイエス！……と言いたいところだが、俺はちらりとプルミエルを見る。

「……………(じゅっ)」

目え怖っ！

彼女は相変わらずジト目でこちらを睨んでいた。

オーケイ、もちろん君の言いたいことは分かっている。

「えーっと……申し訳ないが、俺、プルミエルの船に乗るよ」

「当然」

「……………そうか」

メイヘレンは、実に悲しそうな顔をして、うなだれた。

おう、そんな顔をしないでくれ。俺だって断腸の思いなんだ。

「ケンイチ……………」

だが、メイヘレンの手はがっちり俺の手を掴んでいて、離しそうにない。

俺はというと、初めて実感する女体の柔らかさやその神秘に、完全に我を失ってしまった。

「ムヒョオーーーーーーイあッ！」

「ケンイチ！『勇者タイム』！」

ブルミエルが叫んだ。

「これは『異性への不純なボディタッチ』よ、ケンイチ！」

「はっ！」

俺は慌てて勇者タイマーを見た。

すると、まるでストップウォッチを押したかのような超高速で勇者タイムが減っていくではないか！

や、や、やばいッ！！

「ひい！ちよ、ちよつと！メイヘレンさん！！！」

「メイヘレン、と呼んでくれよ。親しみをこめて」

「メイヘレン！ヤバいんだ、『勇者タイム』は女体に触れると減っていくんだ！」

「ああ、『勇者タイム』の仕組みはさっき君から聞いたよ」

「今！まさに！死にかけてるんですけどッ！？」

「そのようだね」

こ、この女、か、か、確信犯だア！

「は、離してくれッ！」

「駄・目・よ」

「お願い！た、頼む……ッ！」

「うづくん？」

「し、死ぬウウウツッ……！！！」

語尾がほとんど悲鳴のような叫び声になる。

メイヘレンは慌てふためく俺の懇願を聞いて、再びニヤツと笑った。

「では、私の頼みを聞いてくれる？」

「聞く聞く！」

「私も君の旅に同行させてくれないだろうか？」

「おう！ヨシ行こう！」

「絶対？」

俺はヘビーメタル信者のように、頭を何度も激しく縦に振った。

「絶対！」

「よし、決まりだな」

そう言うと、パツとメイヘレンの手が俺の右手を解放した。

「おわあぁっ……！！！」

俺は慌てて彼女から離れ、勇者タイムを確認する。

『04:07』

ヒイイイイ……！！！！！！！！！！

さつき稼いだばかりなのに……！！

なんとかしないと、なんとか……！！

俺は転がったままの冷凍騎士三人を見て、閃いた。

「では」

俺の横を、メイヘレンが通り抜けて行った。

「私はあちらの棧橋で待っているよ」

黒革のロングコートを翻して颯爽と歩き去る後ろ姿は、女性とはいえ見惚れるほど凛々しい。

最初の弱々しくて儂げなイメージが全て作りものだったと思うと、なんとも恐ろしい女だ。

「ケーニーイーチャーくん」

その時、背後で、地獄の底から響くようなドスの利いた声が……はーん！そういえばもう一人恐ろしい女がいるのを忘れてたよん！

「うつつ、すまん」

「もおー、このっ……エロスボーイ！」

ブルミエルが、ばしっばしっとな軽パンチを俺の脇腹に三発ほど叩きこんだ。

「エロスボーイ！」

「こっちだつて生きるか死ぬかの瀬戸際だったんだ！今回はノー・エロス……ノー・エロスだ！」

「はあー、もお……先が思いやられるわねー。面倒なことになっちゃったわ」

「そうだ、ドタキャンしちまおう！今すぐ君が予約した船で出発するってのは？」

「駄目」
「え？」

てつきり、俺はプルミエルが賛成するものだと思っていたので、驚いた。

「何で？」

「あの女は『ブランシユール』っていう代々『水』を司る名門の魔道貴族の頭領なの」

プルミエルが、苦々しげに言う。

「だから、港町みたいな水の恩恵を受けている土地ではすごく強い発言力を持つているわけ。あの女が出港停止を命じたら全ての船舶は操業を停止しなければいけないし、機嫌が悪かったら、業者に営業停止を命じることもできる」

「うーむ、そいつはおそろしいなあ」

「クイーバーのところに迷惑かけたくないし……あー、もう！最悪！」

「重ね重ね、すまん」

「ちゃんと反省しなさいよ！これからは誰彼なしに勇者タイムを解説しないこと！いいわね？」

「ああ、肝に銘じておく」

「肝だけじゃ駄目よ。五臓六腑にしっかり浸透させておきなさい」
「わ、わかった……」

「じゃー、私は船をキャンセルしてくるから、ウロウロしないで待ってなさいよ」

そう言うと、プルミエルはクルリと反転して波止場のほうへ歩いて行った。

「もう、オタンコナスなんだから！あーあ、面倒くさいことになっちゃった……」

うつつ、でけえ独り言だなあ……もちろん聞こえるように言っているんだろうけど。

散々へこまされたところで、俺は『観光地区』のアーチの前に立っているマドセンさんと目が合った。
おおっと、いけねえ、すっかり忘れてた。

「マドセンさん、どうやら厄介なことになっちゃいましたよ」

彼はそら見る、という風に肩をすくめた。

「よりによってブランシユールの御令嬢を助けたりするからさ」

「面目ない……正義の血が騒いだんですよ」

「貴族なんてのはロクデナシどもさ。ああいう連中と付き合っつてのがどういふことが、お前さんが分かっていれればいいんだがね」

「うーむ……」

その言葉には100%賛同はできない。

なんだかんだ言っつて、プルミエルは俺の命の恩人なんだ。

「ま、なるようになるでしょう」

「もう行っちまうのか？」

マドセンさんが、泣き出しそうな顔をした。

「……はい。本当に、お世話になりました。ハンナさんとポウルさんと、その他大勢の皆によろしく」

「ケンイチ……」

マドセンさんは、俺を引き寄せると、ひときわ強く抱きしめた。

「いつでも戻ってきていいんだぞ。ここがお前の『第二の故郷』くらいに思っていてくれ」

「マドセンさん……」

「短い間だったが……俺たちはいい友達だったよな？」

「これからも、ずっと、そうツスよ」

それから、二人はがっちりと固い握手を交わした。

お互いの目には、涙が浮かんでいる。

うう、いけねえ、こんなのじゃあプルミエルに笑われちゃう。

だが、俺たちはしばらくの間、そうしていた。

「いい旅をな、ケンイチ」

「あざツス！」

このままじゃあキリがないということ、俺はクルリと背を向けてメイヘレンの向かった棧橋のほうへ歩き出した。

「ジン・ケンイチ！」

俺の背中に、マドセンさんが再び声をかける。

「俺はもう完全に信じてるぜ！お前は勇者だ！」

俺は……

俺は、振り返ることができなくて、歩き続けた。

振り向かないでも、マドセンさんがずっと俺を見送っているのが分

かる。

今まで生きてきた中で、ここまで他人に励まされたり、信用されたりしたことがあっただろうか？

『悲しくもないのに出てくる熱い涙』がこぼれないように、俺は上を向いて歩き続けた。

プールサイド勇者

巨大客船『メイベル・ルイーズ』号の船内は実に豪華だった。まず、船室の並ぶ廊下の広いこと。

床はお決まりの赤絨毯。

メインラウンジには超巨大なシャンデリアが吊り下がっていて、とんでもない圧迫感だ。

おまけに、至る所に飾られた彫刻の数々……

文字通り、『豪華』客船だ。

『タイタニック』とか、そういう映画で見たことはあるが、実際にお目にかかるのは当然初めて。

俺は馬鹿みたいに口を開けっぱなしだった。

「ワーオ……」

「気に入ったかな？」

俺の前を歩くメイヘレンが得意げに言う。

俺の横を歩くプルミエルはというと、大して興味も無さそうに、仏頂面のままで廊下を歩いていく。

「基本的には貴族や豪商、財力のある騎士といった富裕層だけが利用できる船だね。身元のしっかりしている人間ばかりだから安心して乗船できるという強みもある。まあ、彼らにとってはバカンスでもあり、社交場でもあるわけだな」

「はー、金持ちの道楽そのものね」

「それが彼らにとっては必要不可欠なものなのさ」

そのまま長い船室棟を抜けて、ひときわ大きな扉を開けると、甲板に出た。

「ワーーーーオ、すっげえ……」

俺はまたしても唸る。

とてつもなく広い甲板の上には真っ青な水がなみなみと張られたプールが。

そして、そのプールサイドでは、ピッチリとした水着に身を包んだ老若男女が、日光浴をしたり、フルーツのトッピングされたドリンクを啜っていたりと、それぞれが実に悠々自適にくつろいでいた。蝶ネクタイのウェイターだけが、グラスを銀の盆の上に載せてせわしなく動きまわっている。

そのうちの一人で、金髪を綺麗に後ろに撫でつけたハンサムな青年が、こちらの視線に気付いてにっこりと愛想笑いを向けてきた。

「……」

俺は完全に呆気にとられていた。

知れば知るほどこの世界、奥が深い。

俺の想像していたファンタジー世界とはまるでイメージが違う。

もっと、こう、異世界っていえば、剣と魔法の世界で、村ありの、城ありの、質素な中世風の生活というような路線かと思いきや……誰が異世界に来て、こんな現代的な豪華クルージングを想像できるだろう？

俺は再び唸った。

「うーむ……」

「何をさっきからウンウン唸ってるのよ」

プルミエルが訝しげに覗き込んでくる。

「いや、色々と思うところが……」

「あー、水着ギャルを見てやらしーことを考えてたわけね」

「ち、違うつ！邪な気持など微塵も無いっ！」

「おい、こつちだ」

メイヘレンに促されて、甲板を通り過ぎて、再びキャビンへ。

わーお、こつちはさらに豪華だ。

再び巨大なシャンデリアと、彫刻群。

さっきとは違って、広いスペースに三つしかない客室の扉には、金細工の東洋的な意匠が施されている。

「うおお……」

「ここはこの船に三部屋しかない、VIPルームだ。私以外にはこ

こへは誰も宿泊していないよ」

「びっふるーむ……」

ああ、その甘美な響き！

まさか俺が……俺がVIPルームに泊まる日が来るとわッ……！

「プルミエル、君はどちらの部屋を使う？」

「どっちでもいーわよ。大して変りないんでしょ？」

「そうだな……こつちの『ロクサーヌの部屋』はオーシャンビューが自慢だ。こつちの『アレシャンドレの部屋』は広い浴室が……」

「お風呂。お風呂が綺麗なほう」

即答だ。

そういえばエステイ老人の小屋でも風呂に入ってたっけ。

よっぽどの風呂好きだな、さては！

「では、『アレシャンドレの部屋』だな」

「うつひょう、じゃあ、俺はオーシャンビューの楽しめる部屋とい
うことだー!」

「は?」

浮足立つ俺に、二人の美女が冷めた目線を寄こす。

へ?

「……(じゅっ)」

「……(じゅっ)」

うお……超イヤな予感がする……

やめろお、俺をそんな目で見るなッ!

「……残念ながら、君は別だ」

「は?」

「こっちへ」

俺はメイヘレンに手招きされるまま、扉を抜け、甲板に戻った。

何だよ!俺だけ普通の客室かYO!

とは思ったが、金持ちばかりが乗る船だ、まあ、一般の船室でも悪いことはないだろう。

そういえば、二人とも年頃(?)の女性だしね。

俺のようなナイスガイが隣の部屋にいるというだけで不眠症になっ
てしまうかもしれないしな。

罪な男だぜ、健一よ!

「おいおい、そっちじゃない、こっちだ」

「……って、アレ?」

メイヘレンはプールサイドの脇にある小さな階段を下りていった。

(……うむむ)

イヤな予感、パート2……

こんなにも早く第二弾が出るとは思いもよらなかつたぜ。

先ほどの大廊下とは打って変わって、まるで蛇の巣穴のように細い廊下を進むと、その先には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉が。

(これは……まさか……)

メイヘレンが扉をノックすると、中から、先程見かけたハンサムなブルボーイが姿を現した。

彼はメイヘレンを見るなり顔を真っ赤にして、慌てて身なりを正し、びしっと敬礼をする。

「ブ、ブランシユール様！」

「ジャン、敬礼はやめてくれ。海軍ではあるまいし」

「も、申し訳ありません！……こ、このようなどころへどういった御用でしょうか？」

「うむ。彼……」

メイヘレンが俺を親指で指す。

俺はこの次の展開が読めてしまった。

頼む、外れてくれ、この予想！

「新入りだ」

はーん！やっぱり！

「人の為に働くのが趣味、という今時珍しいナイスガイだな。思うさま、コキ使ってやってくれ」

「はあ……まあ、自分は構いませんが……」

「ただ、彼はかなり飽きっぽくてな。必ず一時間おきに新しい仕事をやらせるようにしてくれ」

「ちよ、ちよっと待った！」

俺は慌てて割って入った。

「どづいつことだよ!？」

「次の目的地『パルミネ』の港町まで、この航海は三泊四日を予定している。その間にいかにして効率よく『勇者タイム』を稼ぐか? ということだ」

メイヘレンはしれつと言う。

「プ、プルミエル! 何とか言ってくれ!」

「悲しいけど、これが現実というものよ、ケンイチ」

プルミエルが、シブい顔で相槌を打った。

き、君も敵なのか?……!

「まー、給仕室に放り込んでおけば矢継ぎ早に仕事があるものね」

「待て待て待てっ! そんな話、聞いてないぞ!」

「当然だ。さつき、私たち二人だけで決めたんだからな」

「いつの間にそんなガールズトークをッ!？」

「うるさいわねー、諦めてプールボーイになりなさい」

「豪華クルージングは……」

「また次回、ということだ」

「……」

魔女たちの夜会

夜になった。

月光が照らす海は、日光によってきらついていた昼間とは違って、驚くほどの静けさと美しさがあった。

ああ……オーシャンビューよ……

幻のセレブ体験よ……

「お前さん、どこから連れてこられただ？」

俺が涙を我慢して甲板のモップがけをしていると、同僚の掃除夫であるマンドー老人が親しげに話し掛けてきた。

「……異世界」

虫の居所の悪い俺はぶっきらぼうに答える。

「へ、へへ……そうか」

マンドー氏は気分を害した様子も無く、苦笑いを浮かべた。

「分かるで……ここに比べりゃ、どこだって異世界だもんな」

老人は完全に勘違いしているようだったが、いちいち訂正するのも面倒くさいので、俺は黙って頷いた。

「黙って働いてりゃあ三食ちゃあんと喰わしてくれるし、金払いも良い。金持ちどもに愛想笑いを浮かべてるだけでチップももらえるで」

なんと！

この老人はここがパラダイスだとも思っているのだろうか？

オーウ、残念ながら俺のとは違うぜ。

本来なら、俺は『ロクサーヌの間』でオーシャンビューを目の前にしてニヤニヤしてるはずだったんだ。

「ブランシユールの御令嬢はえれえ美人だしな。へ、へへ……ああ見えて、わっしらにもお優しい方だ」

「優しい？」

「んだ。風邪をひきやあ医者を呼んでくださるし、船員の一人一人をしつかり覚えていなすつて、廊下で会えば声をかけてくださる。わっしらをゴミくらいにしか思つたらん貴族連中とは大違いだよ」

そいつは意外な話だ。

港町で騎士ども相手にスリルゲームを楽しんでいたあの魔性の女ぶりをこの老人に話したら、いったいどんな顔をするだろうか？

「おい、ケンイチ！」

給仕長のジャンさんが、背後から俺に声をかけてきた。

話を聞いたら、年は俺の1個上だそうだ。

「へいよ」

「そこはもういい。パーティ会場に人手が足りないんだ」

「パーティ……」

「一般客室倉の二階のダンスホールだ。行くぞ」

「ダンスホール……」

なかなか聞き慣れない言葉に、俺は妙な期待感を持ってしまつ。

所詮はしがらない小間使いである俺にとっては、おそらくは何の楽しみも無い展開になるんだろうが、そういう上流階級の社交場を覗けるだけでも滅多に無い経験というものだ。
待て、チャチャチャなら俺が踊る！

……いかん、変なテンションになってきた。
妙なヤツだと笑うがいい。

だが、徹夜明けのテンションってこんなもんだろ？

「ほれ、駆け足で行くぞ」

「はい……うお」

しかし、駆け出そうとした足がもつれて、俺は前のめりに倒れてしまった。

こ、コレは一体？

足の筋肉に、全然力が入らなかった。

「おい、何やってるんだ。さあ、行くぞ」

「あ、スイマセン」

俺は慌てて起き上がったが、やはり、筋肉に力が入らない。
身体全体にガタがきているようだった。

（コレは間違いなく……）

限界が近い証拠だ。

俺の体が悲鳴を上げている。

精神的、肉体的疲労、寝不足……今はなんとかアドレナリンだけで動いてるような状態なんだろう。

（やべえーなあ。このままじゃあ、廃人になっちまう……）

さりとて寝不足の我が脳髓に良き知恵も無し。

このまま過労死しちまったほうが楽かもしれないとさえ考えるほど、俺は憔悴しきっていた。

だが、考えてみれば、この世界に来てから、まだ二日も経っていない。

色々なことがありすぎて、相当に消耗しているようだ。

(生き延びるために働きっぱなしだもんなあ……)

俺は自分がとても可哀そうに思えた。

ダンスホールには大勢の金持ち連中が集まっていた。

豪華なシャンデリアの下で、立食を愉しむ者、楽団の生演奏に合わせて身体を揺らす者、雑談に夢中になっている者。

そのどれもがピッチリとした夜会服に身を包んでいて、たいそうゴージャスだ。

俺も蝶ネクタイの給仕服に着替えさせられて、どこから見てもウエイターそのもの。

バイトだったことは無いんだが。

(わーお、憧れのセレブライフ……)

目の前の威容をぼんやりと見つめつつ立っていると、目の前にいた初老の紳士が、指をクイクイと動かして俺を呼んだ。

「君、『オシユタフ』のおかわりを。妻には『シー・キャラン』を

ね

そう言うと、その客は俺の持ってた銀の盆の上に二つの空いたグラスとチップと思われる紙幣を一枚載せた。

その紙きれの価値は、異世界出身の俺にはよく分からない。とりあえずはそいつを胸のポケットに押し込んで、紳士に頭を下げた。

「へい、おかわりー丁……」

俺はフラフラと、バーカウンターでカクテルを作っているジャンさんのもとへ向かう。

「おいおい、大丈夫かい、ケンイチ？顔が真っ青だ」

「ジャンさん、『おひたし』と『しおから』のおかわり……」

「はあ？何だい、それ」

「おつまみツスよ……こつちの世界にもあるとは思いませんでしたよ、ははは……」

そうこう言っていると、突然、後ろでざわめきが起こった。

「うん？」

振り向くと、人だかりの中心に、豊かなボデーラインをこれでもかと強調した浅葱色のドレスに身を包んだメイヘレンがいた。昼間はアップにしていた髪を下ろして、右の肩に流している。眼鏡も掛けていない。

（ワーオ！スツゲエ！）

ぱっくりと大胆に開いたドレスの肩口と、そこから覗く真っ白な肌、そして、谷間。

そうか、これがタニマ・スピリチア……
なんていうギャグが浮かんできたが、しょうもないな。

女というのは化けるもんだというが、もともと美人だった女性が着飾ると、化けるどころか、この世の奇蹟といっても良いほどの妖艶さを放つというわけだ。

俺がアホみたいにあんぐり口を開けて彼女の肢体に見入っていると、その視線を感じたのか、メイヘレンはカツカツとヒールを鳴らしながら、こちらに歩み寄ってきた。

「楽しんでるか？ケンイチ」

「あー……ご覧のとおりですよ、ブランシユールさん。異世界から来た僕に素敵なお仕事を紹介していただいて、感謝してマス。チツプまで頂いてしまいましたよ、ホラ」

「おやおや、君には皮肉を言う才覚もあるのか？」

真っ赤なルージユを引いた唇が、意地悪そうにクスリと笑う。

「たった三日ほどの辛抱だろう？」

「……その間に俺は駄目になるかも知れない」

「やれやれ、弱気だな」

「正直言つて、ここまで死期を間近に感じたことは無いナリ……」

「麗しのメイヘレン……」

「うん？」

背後からの突然の呼びかけに、メイヘレンが振り返った。

声の主は、妙にヒラヒラした服で着飾ったキザったらしい金髪の口ン毛野郎だ。

「ああ、何という美しさだろう……貴女をダンスにお誘いしても？」
「まあ……リシエル皇太子様のお誘いを断る女性が、この世におりますかしら？」
「では……」

メイヘレンはうつとりしたような顔で、差し出された手を取った。
ロン毛野郎はフン、と鼻を鳴らし、俺に挑戦的な流し目を送ってくる。

くそ、当てつけかよ、この野郎め！

俺の放つ、ストレス混じりの凄まじい殺気にはまるで気付かない様子で、二人はダンスホールを中心へ消えていった。

「……驚いたなあ」

俺の後ろで、カウンターに頬杖をつきながらジャンさんが言った。

「へ？何スか？」

「君、ブランシユール様とどういう関係なの？」

「さあ……それが、自分にもさっぱり……」

「なんだい、それ」

すると、またまた背後で、歓声が起こった。

何だよ、今度は。

振り向くと、人だかりの中心には、今度は真っ赤なドレスに身を包んだ美少女が……プルミエルがいた。

ワアアアオ！！

先程の量感抜群なメイヘレンのボディに比べれば貧相なことこの上ないが、もう、イイ！

イイよ！凄くイイ！

金の巻き毛は後ろで一つに束ね、花飾りで綺麗にまとめあげている。

メイヘレンとは違って胸元は白いファーで隠しているが、それでもやはり美少女ならではの健康的な色気がある。

メイヘレンはビューティ、プルミエルはプリティーといった感じ。ううむ、こいつはどちらも甲乙つけがたいぞ！

プルミエルはあつという間に取り巻きどもに囲まれてしまった。

「なんとなんと、まさか『水』のブランシユールの所有する船で『火』のミスmanaガンの御令嬢にお目見えしようとは……」

「そうですね。メイヘレン様とは妙な御縁がありますの」

「しかし、お美しい……」

「ありがとうございます。恐縮ですわ」

適当に挨拶を交わしながら、プルミエルの目が電光の如く左右にさつと動いて、俺の姿をとらえる。

俺はというと、さつきからずっとアホみたいにあんぐりしていた。プルミエルはちょっと失礼、と周囲に断りを入れてから、俺のもとにつかつかと歩み寄ってきた。

おっと、何だ？

靴を舐めろというなら舐めるぜ？

「ちゃんと生きてたわね」

「おー……さつきから睡魔とハードコア・ファイトをしてる最中だな」

「あらあら、だいぶ参ってるみたいねー」

「このままだと疲労と睡魔と死神を相手にハンディ・キャップ戦に突入さ。あいつらときたら、俺をコーナーに釘付けにした状態で右から左からチョップの嵐を……」

「はいはい、もう限界が近いってわけね」

彼女の、桜色のルージユが引かれた唇が微笑んだ。

その様子に、俺のハートは激しく揺さぶられた。
やめろお！萌え死んじまう！

「ね、ちよい、耳貸して」
「ん？」

俺は言われるがままに、耳を寄せた。
彼女の吐息が耳にかかるだけで、俺は昇天しそうだ。
弱りきった心臓にこいつはキツイ。

「……パーティの片づけが終わったらね……」
「……おう……」
「……誰にも見つからないようにね……」
「……おう……」
「……私の部屋に来て……」
「……」

……オーケイ、冷静になろうぜ、ケンイチ。
これは、きつと、アレだ。
これからの日程を確認するとか、注意事項の伝達とか……
そういう実にビジネスライクな展開になるに決まっているんだ。
お前の期待しているような×××なことや なことは決して……
そう、決して起こり得ない！

（そつだ……そんなバカなことが……あるはずがない……）
歩み去っていくプルミエルの、左右に揺れる美しい金の巻き毛を見ながら、俺は自制心を保つよう、自分自身に言い聞かせていた。

「あー、ケンイチ……」

「へ？何です、ジャンさん」

「俺さ……両方の鼻の穴から鼻血流している人間を初めて見たよ」

張り裂けんばかりの期待

力強く一歩。

静かに一歩。

素早く一歩。

俺はNYPDのポリスマンも真つ青な、実に慎重な足取りで、ブルミエルの部屋に向かっていた。

長い廊下を通りぬけると、壁に張り付いて、他人の視線が無いか周囲を見回す。

……異常なし。

俺は前進を再開した。

そう、誰にも見られてはいけない。

これは極秘任務なのだ。

(しかし、こんな夜更けに一体、何の用だ……?)

そんな疑問ばかりが頭に浮かぶが、パーティ会場で見た艶やかなドレス姿と、あの意味深な囁き……

その二つが、俺に正常な思考を失わせていた。

『誰にも見られないようにね……』

『私の部屋に……』

ん、のおおおおおおおおお……!!!!

罪悪感か？背徳感か？

いや、これは未知への挑戦に対する恐怖……

(……くっ)

思わず生唾を吞んでしまった。

またデカいんだ、この音が！

船全体に響き渡ったんじゃないかなろうか。

額を拭くと、びっしょりと汗をかいていた。

わーお、なんて緊張感だ……！

この扉の先に、一体、何が！？

(……なあ、引き返さないか？)

ここに来て、『弱気な俺』がおどおどしながら頭の中で囁いてきた。
くそっ、お前に用は無い！

(これから起こる出来事がお前の期待通りだったとしても……それは『異性への不純なボディタッチ』になるんじゃないのか？)

おやっ、うっむ、お前の言うことにも一理あるか……？

(そつだ。死んじまうかもしれないんだぞ……？ここはひとつ、あのお誘いは無かったことにして……)

(オイオイ、とんだボクちゃんだな……！)

おおっ！

ここで、『大胆な俺』の登場だ。

(いつ死んじまうか分からないお前にとっては千載一遇の大チャン

スだぜ……？しかも、あんな美少女と……)

そうだ！お前の言うとおりだ！

今までで一番説得力のある言葉だ！

(でも、『勇者タイム』は……)

(相手に求められたならば、それに応えてやるのも人助けと言えるんじゃないのか……？逆に、勇者タイムがリセットされると思うがね、俺は……)

おおつ、その案に100万パーセントイエス！

俺は勇者タイムを確認する。

『21:44』

よし。

まあ、まだゆとりはある。

「ストレートにGO」という結論で、第一回ケンイチ脳内サミットは閉幕した。

やれやれ、決議には逆らえないぜ。

俺は大きく深呼吸をした。

オーライ、ケンイチ。

ユーカー・ソー・クール。

アメイジング・ベイベ！

思い出してみる、ケンイチ。

昔、こんなことを言っていた人間がいた。

『人間はそれをしたという後悔よりも、それをしなかったという後

悔のほうがはるかに大きい』

うーむ、名言だ。

俺はその言葉を励みにして、震える手で豪華な扉を静かにノックした。

「はいー？」

扉の向こうで、プルミエルの声が聞こえる。
うおう。

「あー……俺、ケンイチ……」

「遅かったじゃん。いいよ、入って」

言葉と同時に、ガチャリと扉から解錠の音が聞こえた。

ワオ！

いよいよだ。

お楽しみが待っているのか？

それとも無明の闇か？

「お、お邪魔します……」

「早く入って。誰かに見られちゃう」

「お、おお……」

俺は素早く室内に侵入し、すぐに扉を閉めた。
そして、振り返る。

「うおおおおおっ……」

何っ、この部屋っ、超広い！

金銀の刺繍が入った豪華な絨毯、三人は寝れそうな大きなベッド、高い天井には大きなシャンデリア。

俺の世界ではテレビでしか見たことの無い、スイートルームってやつか？

いいや、こいつはロイヤルスイートだぜ！

おまけに、何かの香だるうか？

花の咲いたような、甘い、とてもいい匂いがする。

「どしたの？」

「いやあ、広いなあ……さっきまで俺の押し込まれてたタコ部屋とは大違いだよ」

「広くたってあんまり落ち着かないわよ」

「いいや、これこそが……あー……」

「何？」

「……」

思考停止。

ブルミエルのほうに目を移した俺は、会話の途中で言葉を失った。なぜなら……彼女は白のバスローブ一枚だったんだぜ！？

つきゃー……っ！

おまけに、あの金色の巻き毛をわしわしとタオルで拭いている。

あー、お風呂上がりなんだね。

(「、これは……やはり、そういうことなのかッ!?)

「をう……」

「ちよつと、何よ」

「……」

「もしもーし？」

「……はっ……」

「もー、しっかりしなさいよー」

「おう、スマンススマン」

「ま、いいわ。ねえ、その時計止まってるわ。ネジを巻いてくれない？」

ブルミエルが、テーブルの上の小ぶりな置時計を指さして言った。
おっと、こりゃあ、上等そうな年代物だ。

「ウイ、マダム」

俺は早速その準備に取り掛かろうとする。

「あれ？」

だが、すでに本体にはゼンマイが指してあった。
あとはこいつを回すだけ、という状態のようだ。

(……?)

とりあえず、俺はそれを回して、壁にかかっているほうの金時計を見ながら、時間も合わせる。

すると、カチカチと軽快な音を立てて、その時計は再び時を刻みだした。

「ほい」

「ありがとう」

「しかし、あそこまでやったんだったら、自分でやればいいのに……」

「悲しいわね、ケンイチ。『勇者タイム』を稼がせてあげようという、この海よりも深い慈悲が伝わらないとはネ」

「お？おおっ！」

『59…36』

なっ、なんていい女なんだ、プルミエル！

「スマン、君の慈悲に気付かないとは、俺はダメダメ野郎だった」

「ダメダメ野郎ね。ダメダメ野郎以外の何者でもないわね」

「うっっ！」

「さて、ダメダメ太郎の勇者タイムがチャージされたところで、じやあ、こっち来て」

いつの間にか太郎になってるが、まあ、いいや。

プルミエルはちょいちょいと指を動かしながら、俺をベッドの前まで導いていった。

べ、ベッド、だと……？

「……………」

時は来た。

ああ……

もう……

父さん、母さん、俺……大人になります……

「はい、じゃあ、寝て」

「ね、寝る、のか。お、おう。寝る。寝るよ、ほら、寝たよ」

俺は靴を脱いで、ベッドの上に仰向けに寝転んだ。

シーツは上等なシルクのように滑らかで、身体を包み込むような心地よさだった。

うお、心臓が胸を突き破って飛び出しそうなほど、動悸が早い。

「あ、ふ、服はどうしよう……?」

「脱ぎたければ、脱げば?」

「ふ、普通はどうなのかな……」

「さーね、人それぞれじゃない?」

「わ、わかった。必要に応じて、脱ごう」

「変なの」

「スマン。お、俺……は、初めてなんだ……優しくしてくれ、頼む……」

「はいはい」

恥ずかしさのあまり、両手で顔を覆った俺に、プルミエルがばさつと上から何かをかぶせた。

ん?

なんだ、これ?

目を開けてみると、それは手触りのいい、毛布だった。

「……じゃ、おやすみ」

プルミエルは、つれない態度で俺からさっさと離れると、傍にあったソファにもたれこんで、分厚い本を開いた。

え?

ここで読書モード?

なんで?

「プ、プルミエル?」

「んー?何?早く寝なさいよ」

「こ、コレはどういうことですか?」

「あなた、昨日からずっと寝てないでしょ。朝まで寝てていいわよ」

「え……」

「五十分おきに起こしてあげる。そのたびに簡単な仕事を用意しとくから。まー、熟睡とまではいかないにしても、ある程度は疲れがとれるでしょ」

「でも、それじゃあ君が寝不足に……」

「私はさつき、夜になるまで寝てたから大丈夫」

「プルミエル……」

「ほらほら、寝る時間が無くなるわよ。あ、それとも明るいと寝られないデリケート・ボーイ？」

「いや、大丈夫……」

俺は、途端に胸が一杯になった。

何だかんだで、彼女はちゃんと俺のことを考えていてくれたんだ。期待とは全く違う展開にはなったが、すごく嬉しかった。

いや、むしろ、さつきまでエロイことばかり考えていた自分が恥ずかしい。

「プルミエル……」

「んー？」

「俺……いや、ありがとう……」

「タダじゃないわよ。これから身体で返してもらうんだからね」

「……おやすみ」

「おやすみ」

こんなに気持ちが高ぶったまま寝られるもんか、と思ったが、俺は安心感と満足感に包まれて、あつという間に眠りに落ちていった。

早朝バズーカ

七回の昏睡。

七回の覚醒。

目を覚ますその度に、俺の枕もとは美しい金髪の少女がいた。

「はい、コレ」

彼女の手渡してくる物を使って、彼女の要求に応える。

ペンの穂先の取り換え。

封筒の糊づけ。

靴墨の塗りつけ、等々……

それらはどれも、ベッドの上でほとんど身体を動かさなくてもできるもので、なおかつ、二、三分で終わるような簡単なものばかりだった。

すでに用意されている道具を使って、ほんの少し手を動かすだけでいいのだ。

そのおかげで、眠気を妨げられる不快さをまるで感じることは無く、むしろ、それらの作業はまるで夢の延長線上にあるかのように現実味が無かった。

それを終えると、俺はまた深い眠りに落ちる。

そんなことを繰り返していった、自発的に目が覚めたころには、体育館の緞帳のように立派なカーテンの隙間から、朝の光が差し込んでいた。

(朝……朝だ……)

しばらくボンヤリしてから、ベッドの上で上半身を起して、大きく伸びをする。

「……………っ！……………あー……………よく寝た……………」

ああ、気持ちのいい朝だ！

いったい、何時間ぶりに寝ただろう？

この満足感たるや、どんな快樂にも勝ると言ってもいい。

俺は勇者タイムを確認する。

『20:11』

どうやら39分49秒ほど前にも起こされて、勇者タイムをチャージしていたようだが、自分が何をしたのか、まるで記憶が無い。

それも、プルミエルが簡単な仕事ばかり用意してくれていたおかげだ。

(……………おお、そうだ、プルミエルは？)

辺りを見回してみたが、彼女の姿は無い。

薄暗い部屋の中は、朝ならではの静寂に包まれている。

(あれ？)

俺が首を傾げると、ちょうどそのタイミングで、音が聞こえてきた。

これは……………シャワーの音だ。

どうやら、向かいの部屋が浴室になっているようだ。

(……………駄目だぜ、ケンイチ。ここまで借りを作っておいて、今更エロイことを考えるんじゃない)

俺はもう一度、ベッドに上半身を倒した。
ばふっと、柔らかい感触に包まれる。

俺は真つ白な天井を見つめながら、再びぼんやりと安眠の余韻に浸った。

(……あー、あと半日は寝られるなあ)

だが、そいつは贅沢というものだ。

今の状態でも、かなり疲れがとれた気がする。

(いつまでも彼女に頼るわけにもいかんなあ。なんとか、セルフ快眠方法を発見しないと……)

理想としては、勇者タイマーに目覚まし機能でもついていてくれれば便利なんだが。

左手首についている、そのシルバーボディのイカしたアイテムを、もう一度よく見てみる。

うーむ、目覚ましどころかボタンの一つすらついてない……
相変わらず、無情にも俺の命の残り時間を明示してくれているだけだ。

(やれやれ……クールにもほどがあるぜ)

俺が大きな溜息を吐いたところで、向かいのドアが開いた。

(おおっと……)

「あー、サッパリしたー」

中から、いつもの黒服に着替えたプルミエルが、髪をタオルで拭き

ながら出てきた。
俺は上体を起こした。

「……おはよう、プルミエル」
「あら」

プルミエルは、少し驚いたように眉を上げた。

「あらあら、おはよう。もういいの？あと二時間くらい寝させてあげてもよかったのに」

「いや、もう大丈夫だ。本当にありがとう」

「よく眠れた？」

「おう、朝までグツスリだ」

「あ、そ。じゃあ、朝食でも食べに行く？」

「おっ、いいね！」

俺は飛び起きた。

おお、なんと体の軽いことか！

「顔くらい洗ってきたら？ついでに洗面所の掃除もして勇者タイムを稼いでらっしゃい」

「ラジャ」

俺は足取りも軽く、洗面所へ向かった。

朝食はビュッフェ形式になっていて、会場は昨夜のダンスホールだった。

俺とプルミエルは、オーシャンビューが見渡せる窓辺に席をとる。

昨日は気付かなかったが、うーん、いい眺めだ。
と、そこで、隣のテーブルに紅茶を運んできたボーイと目が合っ
てしまった。
ジャンさんだ。

「おい、ケンイチ……何を……………しているんだ？」

うおう、超不機嫌そう！

「あー…………えーと…………」

「朝のテーブルセットイングを放っておいて、なんでそこに座っ
てるんだ？うん？」

「ひい！」

無理はない。

一生懸命働いてる最中に、この『オーシャンビューの見渡せる窓辺』
で金持ち連中に混じって、優雅に朝飯を食ってるサボリを見かけた
ら、俺だってキレルだろう。

「ス、スイマセン…………こ、これには深い理由が…………」

「ほー、ぜひ聞きたいねえ。聞かせてもらおうか？」

「私が誘ったの」

ブルミエルが、助け船を出してくれた。

「ええつ、ミスマナガン様が…………！？」

「ごめんなさいネ、人手を奪うようなことをしてしまって」

「と、とんでもございません！し、失礼いたしました…………！」

「あ、紅茶のお代わりを持ってきてくださる？」

「はい、ただいま…………！」

ジャンさんは慌てて頭を下げて、引っこんでいった。
ああ、ジャンさんには気の毒なことしまったなあ。
ミスマナガン家の御威光にすぎる形になってしまったのは、何とも
後味が悪い。

「俺、後でちゃんと謝っとくよ」

「それがいいわね。私も少し配慮が足りなかったわ」

ブルミエルは山盛りのサラダをぱくつきながら言った。

「……野菜好きなのか？」

「普通」

「そうは見えないけどな」

「あなたもトースト食べてるけど、パン好き？」

「うーん、まあ、好きっちゃ好きだが、すっげえ好き！ってわけ
もないな……」

「それと同じ」

分かりやすい。

でも、その山盛り加減は尋常じゃないぞ……

とは思ったが、レディに対して食い物の量をどうこう言うのは失礼
な気がしたので、黙っていることにした。

話題を変えよう。

二人つきりでゆっくり話すというのも、初めてのような気がするし
な。

「……なあ、この機会だから色々なこの世界について質問しても良い
かな？」

「どつぞ」

「魔道貴族って何人くらいいるの？」

「さあねえ……増えたり減ったりで……。大なり小なり合わせて五十はいるんじゃない？」

「結構いるなあ」

「でも、有力なのは六つよ。『火のミスmanaガン』、『水のブランシユール』、『風のイラヒータ』、『土のビエルサ』、『光のスタレーン』、『闇のエルナンデス』」

「おおっ、ファンタジーっばい！」

「あ、なんか気に食わない言い方ね。私から見ればあなたの存在のほうがよくばどファンタジーよ」

まあ、確かにそうだな。

「その六つの当主はみんな女性なのか？」

「風と光のところは男の当主ね。まー、言われれば女のほうが多いわね」

「ふむふむ、興味深いな」

「あー、『女当主』でエロイこと考えてるのね。朝から、もう「ち、違っッ！」

俺が思わず叫ぶと、朝食中の紳士淑女の視線がこちらに集まった。うお、超恥ずかしい！

俺は思わず、顔を伏せた。

「もー、大声出さないでよね」

「スマン……次の質問なんだけど」

「どうぞ」

「俺たちが行こうとしてる場所……えーっと、ジャ……」

「『ジャパテイ寺院跡』」

「そこだ。何で、そこに行くことになったんだっけ？」

「『勇者典範』が見つかった場所だからよ」

「なんだい、それ？」

「その寺院跡から発掘された石板。詳しく内容は知らないけど、『勇者典範』の中には異世界から召喚されてくる勇者のことが色々と書いてあるそうよ。エステイが言うには、『勇者タイム』のことも書いてあったみたい」

「へえ、そんな場所に……」

「まあ、勇者といえばココ！っていう場所よ。あなたがもとの世界に戻るための方法も、ひよっとしたら見つかるかもね」

「おお、それは助かる！俺は死ぬまで君をリスケット」

彼女の慈悲深い御厚意に対して手を合わせたときだった。

背後が騒がしくなったかと思うと、突然、何者かにシャツの襟首を掴まれて、俺は床に引き摺り倒された！

「うへあ……ッ！」

俺は車に轢き潰されたカエルのように、無様な格好で地べたに突っ伏した。

最初は何が起きたのかさっぱりわからなかったが、どうやら不意打ちを食らったようだ。

「だ、だ、誰だ……！？」

とりあえず上体を起こして、視線を上げる。

すると、俺の座っていた席にもう誰かが座っていた。
んん？この金髪ロン毛、どこかで見覚えが……

……ああっ！

昨夜、メイヘレンをダンスに誘った嫌味野郎だ！

「プルミエル……相変わらず、美しいな君は……」

「まあ、リシエル皇太子様」

だ、騙されちゃダメだアーツ！

そいつは昨日も同じことを違う女に言っていたゾ！

「朝食を一緒にどうだい？」

断われ！断るんだ！

「まあ、光栄ですわ……でも、申し訳ありません、連れがおりますの」

イヤツホウ！それは僕デース。

俺はゆっくり立ち上がって、埃を払った。

「そこ、俺が座ってたんすけど」

威厳たつぷりに、挑発的に言ってる。

「？」

ロン毛野郎はこちらをジロリと見て、何を言ってるんだコイツわ、
というような怪訝な表情を浮かべた。

しかし、そのあとすぐに、こらえきれないといった様子でププツと
吹き出す。

なんだ？

何がおかしいんだ、この野郎。

「フハハ、プルミエル……変わった格好の下僕を連れてくるじゃな

いか」

「はあん!？」

げ、下僕だと!？」

「だがね、プルミエル。従者と同じ席で朝食をとるのは感心しないよ。貴族には然るべき格というものがある。それは下等の者達の上に立ってこそ価値のある物なんだ」

誰かは知らんが、今の言い回しを聞くだけでコイツが最低だということには分かった。

と、ここで野郎がこちらを向いた。

「おい、お前」

「は？」

「『は?』じゃない。気の利かない下僕め。さっさと私の分のフォークとナイフを用意したまえ」

こゝこの野郎……!

一言物申すぜ!

「あのなあ……」

「リシエル皇太子様」

俺が文句を言ってやろうとしたとき、プルミエルがいち早く割って入った。

「うん?なんだね?」

「彼は従者ではありません。私の連れを侮辱するのはおよしになって」

そのスパっとした物言い、毅然とした口調に、俺もリシエル皇太子も目を見開いた。

「プ、プルミエル……」

俺は彼女の名前を叫びながら、全裸になって、つま先立ちで狂ったように旋回しながら歌を歌ってもいいとさえ思った。いや、やらないけどね。それくらい、深く感動したってことだ。

「……従者でないなら、彼は一体、何者だね？」

皇太子が不機嫌そうに言った。

プルミエルは少しの間、俺のほうを見つめてから、

「彼氏」

と言った。

「……」

「……」

再び、俺と皇太子は驚きに目を見張った。

だがな、ケンイチ。

これは作り話だ。

実際にそうだったというわけではないから気をつける！
ああ、それでもニヤけてしまう、この顔……

「馬鹿な……」

おっと、あきらめの悪い野郎だ。

「馬鹿な！私という婚約者がいながら！」

「な、何イツ！？」

こ、婚約者だとオ！？

そいつは初耳だぞ！？

「それは親同士が決めたことですわ」

ホッ、そ、そうか、そうだよな。

「ケンイチ」

プルミエルがこっちを向く。

「ケンイチ、皇太子様に何か言ってて差し上げて」

そう言うと、彼女は軽くウインクを飛ばしてきた。

……ははーん、何となく読めてきたぞ。

俺はその意図を理解して、やや呆然としている皇太子に向かって中指を立ててやった。

「ケツでも洗え、ヘチマ野郎」

ワオ！痛快！

相手はしばらくの間、自分が何を言われたのかを理解できない様子だったが、やがて、額に血管が浮かび、顔を真っ赤にして立ちあがった。

「な、なんだと、下郎……」

俺はプルミエルのほうを見た。

彼女は人差し指をクルクル動かして、『もっと言えば』というジェスチャーを送っている。

よし、やってやるぜ！

「もう一回聞きてえの？おたく、耳にサクランボでも詰まってるわけ？……分かった、あんたみたいなのでも理解できるように、ゆっくり丁寧に発音してやるよ。いいかい？へ・チ・マ・ヤ・ロ・ウって言ったんだよ」

「貴様！」

相手はバン！と机を叩いた。

「決闘だ！！」

「ハイ、のった！！」

答えたのはプルミエルだった。
なんで？

「何をお賭けになりますの？」

「我が永遠の愛！」

皇太子がそう答えたとき、プルミエルは小さくガッツポーズを決めた。

やっぱり、そういうことか……

「貴様。貴様は何を賭ける」

「え、俺？」

「私からの愛を……」

プルミエルが、胸に手を当てて、乙女らしい、しおらしいポーズをとって見せた。

「よし！では、行くぞ！ついて来い！」

そう言うと、皇太子はズンズンと大股で歩いて行った。

俺は、楽しそうにその後ろ姿を見ているプルミエルに、そっと話しかけた。

「おいおい、急展開だな？」

「んもう、上出来よ。グツジョブよ。こつも都合良く婚約破棄の口実が手に入るとはねー」

「婚約破棄……」

「そ。あのイヤミ男は『マルダン帝国』の皇太子よ。んで、帝国に何とか取り入ろうと必死だったミスmanaガンの先代が、勝手に婚約を取り付けちゃったのよ」

「そうなんだ」

「煩わしいったらありやしないでしょ。でも、決闘に持ち込んだからには、あなたが勝てばコレを円満に処理できるってワケ。これだけ証人もいるしね」

プルミエルは今まで見たこともないほど楽しそうだった。

「だが、決闘って……俺が負けちゃったら、どうするんだ？」

「うーん、あまり考えたくないけど、あいつと結婚するしかないわね」

「そ、そいつはマズいな……」

「そうね」

「な、何でそんなに落ち着いてるんだ？俺、負けるかもしれないだろ？」

「負ける？」

ブルミエルは立ち止まって、キョトンとした顔でこちらを見た。
あれ？何か変なこと言った？

「あなた、不死身なの？」

「あー、そうか」

わーお、こいつはとんだ出来レースだぜ！

俺は何も知らない皇太子様が不憫にさえ思えた。

ま、いいか。

超イヤな奴だし。

幻の巨大魚伝説

決闘の場は意外なことに船の甲板だった。

もっところ、草むらとか、酒場の前とかを想像していたが、ここは船の上なんだから当り前か。

「随分と面白いことになったじゃないか？」

俺の脇に立ったメイヘレンは、さも楽しそうに言った。

今日は青のポロシャツにタイトな黒革のスカートというちょいとラフだがお色気たっぷりな格好だ。

この人はいつも耳元で甘く囁くように話し掛けてくるから、心臓に悪い。

「まさかプルミエルの愛をめぐっての決闘とはねえ……………」

「泣ける話だろ？しかし、一国の皇太子相手にどこまでやっていいのかわからないんだが……………」

俺はジャッジマンによる決闘前のボディチェックを受けている最中だった。

おわあ、そんなとこ触っても凶器は出てこねえゾ！

「基本的にはどこまでやっても構わんのさ。相手の言い出したことだからね」

「うーん、でも、俺ってあんまり喧嘩したことないんだけどな……………」
「なあに、ドラ息子に折檻してやるくらいで丁度いい。少し手加減してやってくれ。私の船の上で死人を出すのは好ましくないしね」

この話しぶりを聞く限り、彼女もあまり皇太子のことを快く思っていないかつたらしい。

しかし、昨日はあんなにべったりしていたのに……やっぱり女つてのは怖い。

「さて、お集まりの皆様がた！」

メイヘレンはいつの間にか用意されていた壇に上がり、朝から何が起ころのかと興味津々の観衆に向かって、よく通る声で叫んだ。

「この度、リシエル皇太子殿下のご意向により、このメイベル・ルーズ号の上に決闘の場をご用意させていただくことになりました
！」

観衆から、おおーという大きな感嘆の声が漏れた。

「御存じの方もおられますでしょうが、リシエル皇太子殿下は卓抜した剣の腕のみならず、火の法術においても稀代の使い手であらせられます！今朝は、その腕の冴えを存分に御照覧ください！」

観衆から、今度はやんやの大喝采が起こった。
リシエルもそれに手を振って応えた。

「そして、殿下の哀れなる対戦相手は、ジン・ケンイチ！自らを勇者とうそぶく豪胆なる少年！正体不明、実力は未知数、さあ、その腕前や如何に？」

観衆から、凄まじいブーイングが起こった。
完全にアウエーでのプレイといった様子だ。
随分扱いが違うじゃないか？チクシヨウ。

「さてさて、決闘というからには、命がけの戦いを征した勝者に対して、当然与えられるべきものがあって然るべきですね」

ここでメイヘレンは言葉を切って、ぐるりと観衆を見渡す。

全員が、固唾を吞んで次の言葉を待っていた。

仕切り上手だな。

「……その荣誉とは、なんと、ミスmanaガンの当主、ブルミエル嬢の永遠の愛！」

それを聞いて、観衆が一齐にざわついた。

「な、なんと……」

「リシエル殿下とあんなみすばらしい少年を秤にかけるなんて……」

「おそろべき、ミスmanaガンの度量というべきか……」

ブルミエルはというと、よそいきの微笑を浮かべながら、俺と皇太子との間に用意されたイスにちよこんと座っている。

まるで不安は無さそうだ。

俺への信頼の表れと置いていいのか？

「では、決闘場を！」

メイヘレンが右手を天に掲げると、甲板中央部のプールの水がごぼごぼと音を立てて抜かれていった。

おいおい、まさかこの中でやるの？

目を丸くした俺の様子を見て、隣に立ったりリシエルが、鼻を鳴らして嘲笑った。

「フン、臆したか？下郎。泣いて詫びるならば、腕の二、三本で許してやるう」

「……俺の腕は二本しかないんだけどな……」
「む？」

こいつ、結構なアホと見た。

それとも、俺がアシユラマンにでも見えてんのか？

これ以上広がらなさそうな会話を切り上げて、俺は完全に水の抜けたプールへ飛び込む。

皇太子もそれに続いた。

互いに、ジャッジマンの指示に従って三メートルほど距離を置いて向かい合う。

そこで、俺は異変に気付いた。

「おいおいっ、ジャッジ、そいつ腰に剣を挿してるじゃないか！」

「ジン・ケンイチ選手。決闘というのは『何でもアリ』なのです。

凶器アリ、魔術アリ、流血も大歓迎です」

「おう、なんて物騒な……てか、じゃあ、さっきのボディチェックは一体何だったんだ？」

「私の趣味です。形式的なものです」

面倒くさい奴だ。

「ルールは簡単です。相手を完膚なきまでに打ちのめすか、『もうやめる』と相手に言わせるかすれば勝ちとなります。では、お互いにフェアプレーの精神で戦ってください」

手早く説明を済ませると、ジャッジはすぐにプールのへりをよじ登って、安全な場所へ退避した。

プールの、いや、闘技場の中には、俺とリシエル皇太子だけになっ

た。
奴は、こっちに余裕しゃくしゃくで声をよこした。

「選ばせてやるう」

「え？何を？」

「私の『無影剣』で痛みを感じずにあの世へ行くか？それとも、炎の法术『スワール・テグ』で紅蓮の炎に身を焼かれ、生涯に渡って苦悶の日々を過ごすか？」

「うーむ、まあ、どっちでもいいかな……」

「ふっ、そうか……では、くらえ！」

リシエルは口の中でもそもそと呪文を唱えると、こちらに人差し指を向けた。

おおっと、魔法を使う気だな？

俺は重心を落として身構えた。

いくら不死身とはいえ、やっぱり緊張するもんだ。

しかし、随分と詠唱に手間取ってやがるなあ、こいつ。

今から近づいていってもパンチの二、三発は入れられそうだ。

「はっ、いくぞ！スワール・テグ！」

しばらくしてから、皇太子が声高にそう叫ぶと、指先から、一本の炎の矢が飛びだして、こっちへ向かってきた。

「ははははは！燃える！」

わお、大したもんだ。

しかし、以前に森の中で見たプルミエルの魔法のほうがスケールも迫力も段違いだった気がする。

向こうは無尽蔵に噴き出す間欠泉といった勢いだったが、こっちは

一生懸命絞り出した歯磨き粉といった感じ。

その炎の矢は、へ口へ口と飛んできて、俺の体に当たると、力無く霧散した。

うっむ、これは俺が不死身だからなのか、こいつの魔法が非力なのか、どちらとも判じ難い。

「……………」
「……………」

さんざん前フリをかました後のあっけない展開。

互いに、無言で見つめ合う。

「バカな……………法王級の結界だというのか……………」

相手は何かワケのわからんことを口の中で呻いたかと思うと、今度は腰の剣を抜いた。

「よかるう！ならば切り刻んでくれる！この無影剣で！」

皇太子は素早くこちらに駆け寄ると、そこそこのスピードで俺を横薙ぎに斬りつけてきた。

「死ねッ！」

「うおう」

ガキン！

俺？もちろん無事だ。

剣は俺の身体に当たると、鋼鉄の衝撃音を発して、見事にへし曲がった。

「な……！」

皇太子は折れ曲がった剣を見て、真っ青になった。
観衆も大きくどよめく。

何人かの貴族は、とても信じられないといった様子で首を振っていた。

いいぞ、もっと驚け！

「ば、バカな……！一体、これはどういうことだ……！？」

「見たか。怒りは俺の体を鋼と化す」

「な、なんという……」

「プルミエルのことはあきらめろ。さもなくば俺はお前を殺さねばならない……」

「ひい！」

おっと、脅かしすぎちまったかな？

相手は腰を抜かして、その場へたり込んだ。

こいつは勝負ありと言ってもいいんじゃないか？

俺はジャツジマンのほうを見る。

ジャツジマンはその視線を、左にいるメイヘレンへ受け流した。

メイヘレンはニヤニヤと笑ったまま、少しだけ顎を動かした。

「リシエル様。続けますか？」

「わ、私は……」

その後に続く言葉は分かっている。

だが、こんな大観衆の前で恥をかくことになってしまったリシエル皇太子に、ちょっととした同情の気持ちも浮かんだ。

こっちは出来レースだった。

八百長だったんだ。

こいつはこいつで、本気でプルミエルが好きだったのかもしれない。なんだかその真剣な気持ちを踏みにじってしまったような気がした。少しは花を持たせてやったほうがいいかな？

『勝ち七分をもって良しとする』とも言うしな。

俺は、無様にへたり込んでいる相手に向けて、手を差し出した。

「ナイスフアイト」

と言った、その瞬間だ。

ドカン！という凄まじい衝突音とともに、甲板に出ていた全員が浮き上がるほど船体が大きく揺さぶられた。

「うおおおおお！」

「きゃああああ！」

あちらこちらで、大きな悲鳴が上がった。

さらに二度、三度と、船底に何か巨大な質量を持ったものが激しく打ちつけられるような、大きな衝撃が船を揺らした。

くそ、立ち上がることさえ困難だ！

「な、な、なんだ？」

俺は急いでプールから這い上がると、メイヘンとプルミエルのもとへ、転がるようにして駆け寄った。

「うむ」

メイヘンは、甲板の端の手すりから身を乗り出して、海面を見つめている。

「『オバダラ』だ」

「なんだ、それ？」

「深海に棲むとてつもなく巨大な魚だ。こんな浅瀬まで上がってくるとは珍しい……」

「メ、メイヘレン様……！」

手すりにしがみつきながら、ジャンさんが這ってきた。

「ど、どうなさいます？」

「お前まで慌てるな、ジャン」

彼女はすぐに壇上へ駆け上がると、両手を広げて、パニックに陥っている観衆の注意を引いた。

「皆様、どうか気を静めて船内へお戻りください！なあと、このメイベル・ルーズは戦艦の砲撃を受けても、びくともしませんよ。ジャン、船員総出でお客様をご案内しろ！」

そのよく通る、落ち着きはらった声。

乗客も船員も、全員が、そのおかげで冷静さをほんの少し取り戻し、船内への避難活動へ取りかかった。

「プルミエル、君も部屋へ戻りたまえ。そんなところに立っていると海へ投げ出されるぞ」

メイヘレンが、手すりにつかまって海面を凝視しているプルミエルへ声をかけた。

「やーよ、生きているオバダラなんてそうそう滅多に見られないわ

！」

おっと、学術的探究心というやつか？

「でも、危ないぜ！ここはおとなしく、船の中に避難しようぜ！」

俺が非常に建設的な意見を口にした途端、海中から、超巨大な尾びれが持ち上がり、したたかに船尾を叩いた。

再び、船全体を強い揺れが襲う。

甲板には水しぶきが降り注いだ。

「うおおおお……！！」

と、その時。

俺の目は、自分の真横から、手すりを飛び越えて海に投げ出される人影をとらえた。

うおーやばい！

俺は咄嗟に手を伸ばして、そいつの手首を掴んだ。

「うあー！」

それはリシエルだった。

恐怖によって大きく見開かれた目が、俺を見る。

俺はしっかりと右手で彼の手首を掴んだまま、左手で手すりの棒を掴んだ。

くそ、重たい！

「た、た、頼む！」

宙吊りの状態になったリシエルが叫び声をあげた。

「離さないでくれ！」

「離しやしねえよ！さあ、いいからそっちの手も……」

片手では到底引き上げられそうにない。

俺は腰を落として重心を低くしてから、左手を手すりから離してリシエルに向かって差し伸べた。

が、くそ、なんていうバッドタイミングだ！

もう一度、海中から巨大な尾びれが持ち上がったのが見えた。

おう……今はやめてくれ！

が、俺の願いも空しく、それは再び船体を叩いた。

「うわああああああああつ！」

船が、ひととき大きく揺れた。

そして、物理の定める法則にしたがって、俺とリシエルの体は海へ向かって投げ出されてしまった。

ああ……なんてこつた！

全てがスローモーションに見える。

水のしぶきの一滴一滴が、はっきりと識別できる。

プルミエルとメイヘレンが、二人同時にこちらへ手を伸ばし、むなしくその手が宙を掴むのさえ見えた。

くそっ！

ゆっくりと落ちていく感覚を味わいながら、俺は大きな不安を抱いていた。

俺の不死身はどこまで有効なんだ？

森の賢者、エステイアンドリウスの言葉を思い出す。

『不死身とはいえ、その身における物理法則は変わらない』とか、確かそんな感じだった。

ならば、肺に水が入って、呼吸が困難になったら？

窒息したら死ぬんじゃないか？

外からの衝撃はともかくとして、水の中に沈んだら溺死する可能性はありそうだぞ！

首を動かして、徐々にこちらに近づいてくる海面を見る。

海の中から、何かが上がってきた。

あれは何だ？

(……穴？)

黒い、大きい、穴だ。

バカな。

海の中に穴があるはずがない。

あれは……ああ、そうか。

超巨大な、口だ。

オバダラとかいう巨大魚の口だろう。

口だけで、ゆうに12、3メートルはある。

たぶん全長だったら30メートルくらいある魚じゃなからうか。

「う、おわああああああああ……!!」

海面でぱっくりと開いたその恐るべき深淵の中に、俺とリシエルは悲鳴ごと飲み込まれた。

La Coquette (メイヘレン視点)

オバダラは『異世界の勇者』と『皇太子』という実に贅沢な朝食を平らげると、上機嫌で海の底へ姿を消した。

つい先ほどまでの混乱が嘘のように、波は穏やかになり、海はもう平穏を取り戻している。

「うーむ……困ったことになったな」

「と言いつつも、全然困ったように聞こえないところはあなたのお能だと思っわ」

「いやいや、こう見えて本当に頭を悩ませているのさ、プルミエル」
働き者の船員たちが大忙しで甲板デッキにブラシがけをしているのを見ながら、私とプルミエルは大きな日除けのパラソルの下で紅茶を啜っていた。

決して虚勢を張って落ち着き払ったフリをしているのではない。

こういうことは慌てても仕方が無いものなのだ。

私の持論として……人生とは常に試練の繰り返しであり、その道程は苦痛に満ちている。

今回は、それがあの哀れな二人の男たちの上に降りかかったというだけのことなのだ。

(さりとして……)

心痛が無いわけでもない。

「一国の皇太子を死なせたとあつては非難は免れんなあ……」

「そっねえ。ご愁傷様」

「おやまあ、冷たいことを言っ……」

「私、関係ないもん」

「おいおい、決闘の原因は君だろう？二人の男の心を弄んで、焚きつけたんだからな」

「はぁー？あれは、あの二人が勝手に始めたことよ」

「ふふん、悪い女だな、プルミエル。私が気付かないとでも思っているのか？」

「知らない」

「あは、は……」

その実に白々しい態度を見て、私は思わず笑ってしまった。

プルミエル、つまりミスマナガンの当主と、こうして話すのは久しぶりだ。

ただ、ここまで打ち解けて話すのは初めてと言っていいだろう。

水の一族と火の一族はその操る属性が完全に相反するというだけのこと、自然と強い敵対心を抱き、いがみ合ってきた。

おまけに我々は互いに大きな家名を背負う身分なので、そう気軽に世間話に花を咲かせる機会などももちろん無かったのだ。

しかし、実に面白い娘だ。

「さて……これからどうするかな？」

「もう、性悪ねー」

プルミエルは横目でこちらをチラリと見て、呆れたように言った。

「ん？何がだ？」

「困ったフリして、もう頭の中でいくつか作戦を考えてるんでしょ」

「だが、どれもあまり面白くなってね……」

「面白くなくていいから現実的なヤツを頼むわ」

「焦っているのか？」

「まー……多少は、ねえ。勇者タイムが一時間しか保たないのは知

「つてるんでしょ」

「ああ、そうだったね。……しかし、随分とあの少年を気にかけるじゃないか？」

「当り前よ」

「あら……正直だね」

「ここまで苦労して連れてきた研究対象に、こんなところで犬死されたらたまらないわ」

『研究対象』とは随分と辛辣な。

こんな言葉を聞いたら、あの少年は抜け殻のようになってしまつてしまわない。

勇者ケンイチに幸あれ。

いや、君がこの場にいなかったことは幸運だったな。

「で、どうするの？」

「とりあえず状況を整理しようか」

「いいわ」

「オバダラは深海魚だ。おそらくはもうだいぶ深いところに潜つてしまっているだろう。しかし、あいつは巨体ながら消化能力が極めて弱い生き物でね。浅瀬で大食いをしたあとは、一か月近くは何も食べなくても海底で居眠りしていられるといった寸法だ」

「なるほど」

「さらに幸運なことには、その巨体の中身は大きな空洞になっているということだ。多少の空気もあるだろう。つまり、丸呑みにされた二人が生きている可能性はまずまずといったところだ」

「ふうん」

「だが……」

「時間制限つきってワケね。勇者タイムも、空気の量も限られている」

「いかにも。不死身の勇者が、オバダラの肛門から出てくるのを気

長に待っているわけにはいかないということさ」

プルミエルは頼杖をついて、溜息を洩らした。

「はあ、面倒なことになったわねえ」

「それらを踏まえたうえで、まずは『プランA』だ」

私が少し姿勢を正すと、プルミエルもこちらの正面に身体を向けてきた。

「はい、伺いましょう」

「私が水流魔術でオバダラを海上まで引っ張り上げる。君が爆炎魔術でオバダラを粉々に吹き飛ばす。その残骸からケンイチを回収する」

「そして皇太子はバラバラ、と」

「『プランB』はオバダラを引っ張り上げるところまでは同じだが、メイベル・ルイズ号につないで、救出部隊をオバダラの体内に送り込むといったやり方だ」

「人手と時間不足」

「そうだな。手っ取り早いのは『プランA』だ」

プランBは私にとっても願ひ下げだ。

何と言っても手間がかかるし、この船をそう何度も危険にさらしたくはない。

被害は最小限であるに越したことはないのだ。

その観点から考えれば、リシエル皇太子のことは早々に諦めてしまふのが最善だろう。

聞けば、本国でも彼の放蕩ぶりにはほとほと手を焼いているそうで、品行方正で勤勉実直な第二皇子のミハイルを後継者にと望む声も少なくないそうだ。

ある程度の弁明と慰留金さえ整えれば、さほどの非難を受けることもないだろう。

不憫ではあるが、これが現実というものなのだ。

歯車を一つ失ったところで、この世界の動きは何一つとして揺るがない。

さらば、リシエル皇太子。

私は同情の念を禁じ得ない。

世間知らずで、無類の甘ったれではあるが、彼はどこか憎めない愛嬌も持っていた。

だが、今は感傷に浸っている場合ではない。

悲しみも後悔も、この場では何の役にも立たないのだ。

「では、『プランA』で準備に取り掛かるとしよう」

「待った」

プルミエルが、こちらを射抜くような視線を向けてくる。

それを受けて、私の背筋に冷たいものが走った。

おっと、こんな感覚は久しぶりだ。

この娘……ますます面白い。

「何か？」

「『プランC』を提案するわ」

「よし、聞こう」

「別名『豪快！オバダラー一本釣り』作戦」

「……？詳しく教えてくれ」

それから彼女が口にしたその作戦の内容は、実に奇想天外であり、かつ、創意に富んだものであった。

私は全てを聞いた後で、大きく頷きながらそのプランに賛同していた。

「面白いね」

だが、この作戦には一点だけ、大きな懸念がある。

「しかし、ケンイチを頼みにする部分が多いな」

「そうね」

「確実性に欠ける気もするが？」

「五分五分……だと思っわ。彼、ああ見えてバカじゃないし」

「随分と買っているんだね、あの少年を」

「今の発言がそう聞こえたなら、そうかもね」

私は彼女の瞳を覗きこんでみる。

目は口ほどに物を言い、だ。

傲慢になるが、私は人間の心の動きを読むことに多少の才能を持っている。

そわそわしたり、汗をかいたりという表面上の細かい動きからは勿論のこと、人間の瞳の中に映る感情は決して私を誤魔化すことはできない。

歓喜、愉悦、興奮、悲哀、憎悪、憤怒……

瞳の中の光が織りなす感情の色彩は実に豊富なバリエーションを持っているのだ。

さて、目の前の小さな大魔道師はどうだろう？

この青い、美しい瞳の奥は。

「？」

「うーむ……」

そこには何の特別な感情も見受けられなかった。
情熱も執着も、勿論、親愛の情も無い。

なるほど、勇者はあくまでも学術的好奇心を満たすサンプルというわけだ。

君は研究者の鑑だ、プルミエル。
哀れケンイチ、完全に脈無しのようなだぞ。

「じゃあ、他の準備はよろしく。私は術戦車をとってくるから」

すつくと立ち上がって船倉に引き返していく彼女の後姿を、私はしばらく眺めていた。

(なんとまあ……面白い少女だろう)

勇者はもちろんのことだが、私は彼女に対しても強い興味を持った。共に大仰な家名を背負うシンパシーだろうか？

(これからの旅路が実に楽しみだねえ……)

私は航海士を二人呼び出してから、曳航に使う大縄と予備の鋼鉄錨を、船倉の底部にある物置から甲板に運び出すように指示を与えた。二人とも経験豊富なベテランの航海士ではあるが、さすがに不思議そうな表情を浮かべ、頭をひねっていた。

「あのう……一体、何を始められるんです？」

「すぐに分かるよ。さあさ、急いで仕事に取り掛かってくれ。ゲームはもう始まっているんだぞ」

ライフセービング勇者

窓の外では桜が咲いている。

桜といえば、春。

心躍る、春。

そう、春だ！

雪解け。

芽吹き。

日だまり。

全てが幸せを感じる、不思議な季節だ。

新学年。

新しいクラスメイト。

そう、俺は高校二年生になったんだ！イエイ！

さて、何を頑張る？

勉強？

そんなものはくそくらえだ。

もっと、こう、甘酸っぱい、アレ。青春。

二年生は素敵だ。

先輩も後輩もいるし、修学旅行もある。

学校生活にもイイ感じに慣れてきてるし、部活でも一番活躍できる

時期だし、進学や就職といった大きな人生の岐路に頭を悩ませるにはまだまだ早い。

本当に素敵な学年だ。二年生。

「高校三年生」なんていう歌があるけど、なんで二年生は無いんだ？
高校生活におけるピークといってもいいんじゃないだろうか。
もう一度言おう。

二年生は素敵だ！

「何だ、神。また英和辞典を忘れたのか」

村上先生（あだ名『ロボコップ』）は不機嫌そうに鼻を鳴らした。
重たいからイチイチ持つてくるのが面倒くさいんですよ、という
言葉は言わないでおく。

もう子供じゃないんだしね。

こういった分別のある忍耐ができるかどうか、一年生と二年生の
明確な差だ。

「じゃあー……隣の席の佐野に見せてもらえ。まったく……」

「へーい」

「あん？」

「ハイ、ワカリマシタ」

おおっと、危ない危ない。

こんな進級早々、『反抗的な生徒』のレッテルを貼られるのだけは
ご勘弁だ。

「佐野さん、申し訳ないが……」

「うん、いいよ。あ、机、少し近づけるね」

ああ、優しいなあ、佐野さん。

それとは対照的に、クラス中の男子の視線が殺気を孕んで俺に突き刺さる。

ふふん、睨め睨め！負け犬どもめ！

これは『出席番号が近い』という生まれながらの素養を兼ね備えた者だけが浴することのできる、神からの至上の恩恵なのだッ！

「どうしたの？」

「はっ、いや、何でもないよ」

「うふ、変なの、神君」

ああッ！もう！

好きイ！

俺の隣の席に座っているこの超絶美少女、名前は佐野さの 智美ちみ。

容姿端麗、頭脳明晰、運動神経も抜群、おまけにそれらを全く鼻にかけない、その人柄の素晴らしさたるや、もう古の守護聖人も真っ青だ。

週に五人の男子生徒に告白されたり、資産家の令嬢だったり、生徒会役員に自ら立候補したり、テニス部だったり、高嶺の花を地で行く、まるで美少女ゲームのラスボス（最初から好意的に接してくれるが、自分の全てのパラメーターを異常なまでに高くしなければ攻略できないキャラクターのこと）的な存在だが、それでもなお、「ひよっとして俺のこと好きなんじゃ……？」という甘やかな夢を見せてくれるほどに、誰彼なしに優しく接してくれる、非常に罪作りなお嬢さんなのだ。

そして、俺も例に漏れず、彼女の大ファンだった。

だから、二年になってクラス分けの載ってる貼り紙を見たとき、友人たちと抱き合って歓喜の雄叫びを上げたもんだ。

佐野さんの隣にいられるというだけで、胸の奥が熱くなってくる。

ああ、幸せ……

(あ、神君……)

「え?」

佐野さんが、先生に聞こえないように、小さな声で囁きかけてきた。うおう、近い!近いってばヨ!

(な、な、何……?)

(そのシャープペン……)

佐野さんは『シャープペン』などというふざけた、ガキじみた略語は使わない。

俺もこれから、終生使わないこととする。

(しゃ、しゃ、シャープペン、が、どうかした……?)

(ほら……)

佐野さんは、自分の持っているシャープペンを見せてくれた。

(あ……)

(おそろいだね……くすっ)

ぐはあ!その笑顔!

俺の純情ハートは、上下左右に、したたかに揺さぶられた。いくらなんでも、幸せすぎる!

いや、待てよ……ひよ、ひよっとして……これは……

まさか、佐野さん、お、俺のことが好きなんじゃあ……?

そうだ……………

そうに違いない……………

……………

身体が重い……………

はっと、目を覚ますと、俺はねっとりとした粘液のプールを漂っていた。

「……………」

俺は辺りを見回す。

周囲は暗かったが、粘液がそれ自体ぼんやりと、淡い緑色の光を放っていて、完全な暗闇ではない。

「……………夢か」

俺はぶかぶかと光の海を漂いながら、溜息をついた。

思い出というものはいつも優しい。

しかし、甘い夢は終わりを告げ、過酷な現実が目の前にある。魚の腐ったような悪臭が鼻をつく。

身体はヌメヌメ、ネチヨネチヨした薄汚い粘液まみれだ。

見上げる視線の先では、赤黒い天井が不気味に脈動している。

ああ、くそつ。

そうだったな、ここは『二年三組の教室』じゃない。

『オバダラの腹の中』だった。
まあ、臭えわ、汚えわで、まったく、最悪な寝起きだ。
おっと、勇者タイムを確認してみよう。

『20:12』

まあ、そこそこ余裕がある。
身体を起こすと、粘液は腰まで浸かる程度の深さしかないことが分かった。

よかった、溺れることは無さそうだな。
完全な真っ暗闇でないことも救いだ。

(しかし、この液体は何で光ってるんだ……?)

大いに気持ち悪いが、それを手ですくってみた。
おえ、すっげえプルプルしてらあ。
よく見ると、粉々に千切れた、寒天のようなものが混ざっている。

「……クラゲ？」

おお、そういえば、深海のクラゲが凄く綺麗に光っている映像をテレビで見たことがある。
おそらく深海魚であるこのオバダラは、そういったクラゲもエサにしているに違いない。
消化されきってない大量のクラゲ達が、こうして奴の腹の中に幻想的な光景を作りだしているんだろう。

「あ、そうだ。そういえば、一緒に呑みこまれた奴がいたはずだ」
二人して丸呑みにされたところまでは覚えている。

噛み砕かれてはいないはずだ。

まったく、あの世話の焼ける金髪野郎め。

まあ、イケメン風ではあるが、決闘の時に見せたあの腰抜けっぷりは、同じ男として恥ずかしい。

「おーい！リシエル！皇太子やーい！」

声が、空間に大きく反響する。

返事は無い。

俺はザブザブと粘液の海を進んで、何度か奴の名前を呼んだ。

「おーい、モヤシ！ヘチマ！スケコマシー！」

これだけ悪態をつけばカンカンになって飛び出してくるかと思っただが、反応は無い。

しかし広いな、こいつの腹の中は！

体育館くらいあるぞ！

俺は頭の中で『ピノキオ』の映画を思い出していた。

あれは確かクジラだったかな。

おじいさんと一緒に呑みこまれて、テンヤワンヤで……

おおっと、しかし肝心のところが思い出せない。

どうやってクジラの体内から脱出したんだっけ、あの二人。

（確か、イカダか何かを作って……）

と、少しだけ思い出しかけたところで、俺は、光の海を漂っている黒い影を発見した。

「おおー！」

粘液の海をかきわけながら、俺はそいつに接近する。
間違いない、リシエルだ。
ぐったりと気を失っているようだった。

「おい、起きろ！」

俺はペシペシと頬を叩く。

しかし、反応が無い。

ええッ！？

まさか……

俺は奴の鼻元に耳を近づけてみた。

「……」

まずい！

息をしていない！

(やばい！どうしよう……)

とりあえず、すぐ近くに小高くなっている場所があったので、慌てて奴の襟首を掴んで、そこへ引き摺り上げた。

こういう時は……？

チクシヨウ、人工呼吸以外の手段を思いつかない！

断腸の思いとはこのことだ。

だが、このまま死なせちまっても寝覚めが悪いし……だが……

(……いや、誰にも見られていなければセーフと言えるんじゃないか？)

しょうがねえなあ！くそッ！

俺は自尊心を心の奥底に押しやって、決意を固めた。
一人の命がかかっている場面で、逡巡している暇は無い。
誠に遺憾ながら、こいつに俺のファーストキスをくれてやることに
する。

ああ……無念だ。

まずは胸を強く押す。

ついで、鼻をつまんで、息を吹き込んでやる。

それを繰り返す。

勿論、実践は初めてだが、そう間違っではないはずだ。
だが、何度やっても、息を吹き返す様子は無い。

くそっ！

おい！

冗談はやめろ！

「息をしろ！息をするんだ！」

「……」

「頼む！息をしてくれ！」

「……くぼっ！」

おっ！

「くぼっ……げふげふげふ！」

ああ、よかった！

息を吹き返した！

もう少し、続けてみる。

「げふ！げほ！うごふ！」

「よしよし」

何とか持ち直したようだ。

俺は、水を吐き出して激しくせき込む奴の背中をさすってやった。

「ぐふっ……おえ……」

「大丈夫か？しつかりしろ」

「ぐう……」

「おい、こつちを見る。見えるか？」

リシエルはえづきながらも、何度か弱々しく頷いた。

「よし。よしよし、大丈夫そうだな」

「……ここは……どこだ……」

「巨大魚の腹の中さ……よっこいせ、と」

大きく胸を上下させて空気を肺に取りこんでいるリシエルの隣に、俺も仰向けに横たわった。

勿論、この先の展開に対する不安や恐怖はあったが、一人一人の命を救ったという達成感と満足感が、負の感情を大きく上回って、俺の顔に微笑を作る。

勇者タイムもチャージされた。

とりあえずは、安心だな。

まあ、あくまで『とりあえず』だが。

「うぐっ！何だここは……！臭あッ……！」

「おう、そうだな」

「うえ、ネチヨネチヨしてる……何だこれは……」

「胃液じゃねえ？」

「く、暗いッ……！」

「慣れればそうでもないって」

「ひいっ！じ、地面が動いたぞッ……！」

「うるせえなあ、もう！」

「ああ、なんで、こんなことに……」

しまいには頭を抱えてしまった。

実に騒々しくて、女々しい奴だ。

しかし、まあ、俺もこんなところで一人きりだったら、こんな風に

ジメジメと途方に暮れていたかもしれない。

こんな野郎でも、助けられてよかったと思う。

俺は肩を震わせているリシエルの背中をバン、と叩いた。

「元気出せよ！なっ」

「ひっ！な、な、何をする、貴様！」

「何て言うか……お互い生きてて良かったよな」

「ど、どういことだ……！」

「言葉通りだよ」

「な、何をそんなに落ち着いている……？」

「あー……なんでだろう……？」

自分でもわからない。

しかし、これは俺の予感だが……

漠然と、何とかかなりそうな気がしていたのだ。

エスケープ・フロム・巨大魚

「……だから、私はミハイルにこう言っただけだ。『お前は父上や重臣たちの機嫌取りをしているだけだ。お前には統治者としてのカリスマも無ければ、裁量も無い』とな。それを聞いた時の弟の顔と言ったら……」

長えなあ、こいつの話は……

まずは女にモテるとか喧嘩が強いとか、そういつくだらない自慢話から始まった。

続いて、聞いただけでもフィクションと分かるような、ホラにまみれた様々な武勇伝を聞かされた拳句、今度は出来の良い弟へのコンプレックスに裏打ちされたバッシングがもう10分も続いている。

俺は適当に相槌を打ちながら、勇者タイムを確認してみた。

『35:07』

おおっと、少し心許なくなってきたな。

そろそろここから助かる方法を考えても良い頃だ。

というか、心のどこかでプルミエルとメイヘレンが俺を助けに来てくれるものだと思えていたんだが、それも別に確固たる根拠があることではなく、俺の完全な思い込みでしかないのだ。

そもそも、この巨大魚の腹の中から、どうやって俺達を助け出せるというのか？

(うーむ……楽観的すぎたか……)

こういう時は自分で何かアクションを起こさないことにはどうにも

ならない。

俺はとりあえず腰を上げて、光るプールへと入っていった。

「ま、まで……どこへ行く……?」

「出口が無いか探してみる」

「そ、そっちにあるのか?」

「だから、それを調べに行くんだよ」

「そ、そうか。そうだな。そうしろ」

「見つかったら教えてやるよ。そこにいろよ」

「ま、までまで!わ、私も行く……お前は出口を見つけても帰ってこないかもしれん」

「はあ?帰ってくるって、ちゃんと」

「し、信用できん。私の為に、お前が戻ってくるはずが無い」

「……」

多少イラツとはしたが、こいつの卑屈さや他人に対する不信任感は、様々な劣等感や重圧から自分を守るための防衛本能なのだろう。そう考えると、少しだけ俺の中に同情の念が生まれてきた。

「分かった。じゃあ、行こう」

「うむ、行くぞ。……うあ、ネチヨネチヨしてる……」

「そろそろ慣れるよ……」

俺とリシエルは、ザブザブと淡く光る粘液の中を進んで行った。

靴の中に入り込んでくる粘液はえらく気持ちが悪かったが、それよりも気味が悪いのは脈動する肉壁、そして、静寂だった。

さっきまではリシエルがペラペラと女子みたいに喋りまくっていたおかげで気付かなかったが、本当にここは無音に近い環境だ。

波の音も聞こえないということは、相当深いところまで潜り込んでしまっているのではないだろうか。

俺の脳裏に、重大な懸念が浮かび上がる。

ここを飛び出した方がいいとして、深海だったらどうする？

俺と違って不死身ではないリシエルは水圧でペチャンコになっちまうだろうし、俺も海上まで息が続くかどうか。

状況は間違いなく俺たちに不利と思われた。

(くそう、ヤバいかも……)

俺の心に、大きな影がさした時だった。

「う、うお……！」

「ひぁ！」

突然、大きな揺れが起きた。

「な、な、なんだ!？」

「お、俺にも分からないよ！」

揺れはさらに激しくなり、俺達は粘液のプールの中で浮いたり沈んだり、ひっくり返ったりした。

「じぼぁー！」

「つぶー！」

「へぶぁー！」

「どわぁー!……つぶぁー！」

何だ何だ何が起きてるんだ!？

そうするまいと思っただけだが、無理だ。事態の急転に俺は激しく動揺した。

と、今度は大きく腹の中全体が傾いて、俺達は物理法則に従って、

上から下へと流される。

「うおおおおっ!?!」

「ひあああああっ!?!」

運よく、目の前にバカでかい骨のような突起物が見えたので、俺は必死に手を伸ばしてそれを掴んだ。

リシエルは俺の脚を掴んだので、二人ともそれ以上流されずにそこにへばりついていた。

「離すなよ!」

「ネチヨネチヨしてるから掴みづらい!」

「それはこっちも同じ……」

言いかけたところで、俺は目の前の光景に声を失った。

ゆっくりと、シャッターのように、大きな口が開いていったのだ。

どうやら俺が掴んでいたのは、ヤツの一番奥の歯だったようだ。

怒涛の勢いで海水が流れ込んでくる。

「うわあああああああッ!」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiッ!」

予想される展開は最悪だ。

このままじゃあ、オバダラの腹の中は海水で一杯になって俺達は溺死してしまう!

「うぶあ!」

「がぼあ!」

頭から大量の海水をかぶり、その奔流に、二人の体が翻弄される。

だめだ！

その場にしがみついていることが困難なほどの水圧が、俺に襲いかかる。

腕の力も無くなってきた。

だめだ！

俺はもう一度思った。

酸素が欠乏している。

俺の体が悲鳴を上げていた。

健一、呼吸をしろ、と。

そうだ、呼吸をしなくてはいけない。

だが、この水流の中だ。どうやって？

(くそ……)

肺が痙攣しそうになってきたときだった。

ぐん！と持ち上げられるような感覚とともに、水の勢いが衰えてきた。

(な、何だ……？)

身体の傾きも、やや水平に近くなる。

水は後方へ引いていき、幸いなことに、顔を上げると呼吸ができた。

俺は貪るように空気を肺に取り込む。

ああ、うまい！

「おい、大丈夫か？」

「ぐぶあー！げふうー！げほげほ！」

足にしがみついていた奴もとりあえずは大丈夫そうだが、しかし、一体何が起きているんだ？

俺はもう一度、顔を上げた。

すると、信じられないものが目に飛び込んできた。

光だ。

闇が水平に断ち切られたように、眩い光が口内に射しこんできたのだ。

光があるということは、そこは深海ではありえない。なんと、そこは海面だった。

「おおっ………！」

さらに素晴らしかったのは、その光の中に、見覚えのある大きな影が見えたことだ。

「あれは………！」

「な、な、何だ！？一体、何が………！」

「メイベル・ルイズだ！」

「な、何っ！？」

「しかし、どうして………ああっ！」

俺は、そこでようやくオバダラの身に何が起きたのか気付いた。

俺達のつかまつている場所と反対側の奥歯に、黒光りする剣呑な塊が引っ掛かっていたのだ。

いかり
錨だ。

そして、それはピンと張った太いロープに繋がれている。
なんと、メイベル・ルイズ号が錨でオバダラを曳航しているのだ。

(トローリングか……?)

何にしても、

「スケールがデケエなあ……」

俺が呆気にとられていると、メイベル・ルイズから、こちらに向かって真つすぐ飛んでくるものが見えた。
見違えるはずもない。

宙に描かれる、炎の轍。

アレだ。

プルミエルの『ブオナパルト』だ。

「やった……!!」

俺は歓喜の声を上げた。

「やったぞ! 助かるぞ、俺達!」

「ほ、本当に……?」

ゴオオオオオツという聞き慣れた爆音が、こちらに近づいてきて、
停止する。

「ケンイチ、いるー?」

ああ、その声が聞きたかった!

「ココだっ！ココにいるぞオ！」

「あー、いたわね。ちゃんと口元にいてくれて助かったわ」

ブオナパルトが、ブルンと音を立てて降下してきて、俺達の眼前に現れた。

黒光りするイカした空飛ぶバイクに跨っているのは、それよりもさらにイカした美少女魔道師だ。

彼女が振り向いて、叫んだ。

「無事ね？」

「ああ。皇太子もな」

「さあさあ、オバダラが引っ張られて口を開けてる間がチャンスなの。これを……」

ブルミエルが、鎖を投げてよこした。

あの、先に手錠のついたヤツだ。

俺はそれを手にとって、溜息をつく。

「あー、コレね……」

「使い方はもう分かってるでしょ？」

「イヤと言うほどな」

「じゃー、早いとこ準備して。ロープも切れかかっているし、低速で飛ぶのは疲れるんだから」

「あいよ。リシエル、こいつを……」

振り返って言った時、オバダラが最後の抵抗を見せた。

錨を千切ろうとして、ぐりんと身をよじったのだろう。

世界が激しく揺れた。

「おわ！」

「ぐっひい！」

悪いことはいつも突然やってくる。

俺は手錠を掴んでいたおかげで何とか流されずに済んだが、リシエルは後ろに大きく吹き飛ばされていた。

距離にして俺と10mほどだ。

「リシエル！」

「……」

おまけに、どこかに頭をぶつけたのか、倒れたままぐったりと動かない。

一難去つて、また一難だ。

くそ！手間のかかる奴め！

俺が野郎のほうへ足を踏み出した時、外からプルミエルの声が聞こえた。

「ケンイチ！ロープ切れそうよー！早くしなさい！」

錨のほうを見ると確かに、もう縄がほつれてきて、バツン！と危なげな音を立てて、一筋ずつ弾け飛んでいる。

もうこのロープは余命いくばくもない感じだ！

おわあ！ヤベエ！

リシエルを見る。

ヤツのところまでは大きく距離が離れてしまっている。

とても歩いて助けに行っては間に合わないだろう。

くそっ、万事休すか？

自分だけが助かるプランなら十分実行可能だ。
今すぐ手錠をかけてここから引っ張り出してもらえばいいだけのこ
とだ。

弱い自分が、頭の中で囁いた。

あいつは運が悪かったんだ。

俺は精いっぱい助けようとしたんだ。

しょうがないさ……

(……んなワケないだろ！)

俺は急いで手錠を自分の足首に繋ぐ。

そうしてから、リシエルの方へ向かって、思い切り勢いをつけて滑
りこんだ。

粘液が潤滑油がわりになって、よく滑ること。

精一杯、気絶しているリシエルのほうへ手を伸ばす。

あと少し！

ぬおお、届け！

「く、く、くぬ……」

腕がつりそうなほど手を伸ばす。
そして。

「届いた！」

リシエルの手首をしっかりと掴んで、俺は叫んだ。

「いいぞ！プルミエル！大丈夫だ、ブツ飛ばしてくれ！」

その瞬間、グン！と足首が引っ張られる。

「うぬおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！」

ズルズルズルつと滑って、俺とリシエルは、勢いよくオバダラの口から飛び出した。

それとほぼ同時にオバダラとメイベル・ルイズをつないでいたロープが切れ、リシエルの踵のすぐ後ろでバグン！と、大きな音を立てて口が閉じた。

おおっ！

やったぞ！本当に間一髪だった！あとほんの一瞬でも遅かったら助からなかっただろう。

だが、大成功だ！

ここでようやく俺は、オバダラの全体を見ることができた。

真っ黒なドームに、点のように小さな目玉が両端についている。身体の半分を占めているほど大きな口。

その醜い顔は、俺の世界で言うアンコウそっくりだった。

勿論、サイズは桁外れだが。

おう、こんな奴の胃袋の中におさまっていたのかと思うと気持ち悪くなる。

ともあれ、猛スピードで宙を舞う久々の疾走感に身を委ねながら、俺は歡喜の雄叫びをあげていた。

純情 ボーイズ

「まだ、身体が魚臭い」

自分の身体をスンスンと嗅ぎまわりながら、リシエルが口を尖らせて言った。

「私はもう三回も風呂に入ったというのに!」
「俺に言うなよ……」

俺は目の前でヒステリックにわめき散らしている、このめんどくさいヤツの部屋のベッドメイクをしていた。

おっと、ちぢれ毛発見。
バツチいなあ。

ちなみに、俺達がオバダラの腹の中から無事に生還してから、もう十時間ほど経過していた。

窓の外は日が沈んで、すっかり暗くなっている。

朝の喧騒が嘘のように海も穏やかになって、心地よい波の音色を届けてくれた。

ああ、生きているって素晴らしい。

「……で、貴様は何をしているのだ?」

おっと、今度はこっちに振ってきやがった。

めんどくせえなあ。一人でしゃべってりゃいいのに。

「……見ればわかるだろ?」

「何故、私のベッドをいじっているのだ?」

「仕事だからだよ」

「メイヘレンに聞いたが、貴様はこの船の船員ではないそうだな」
「ああ、そうだよ」

「この私に対しても無礼な口をきく……」
「媚を売るのは嫌いなんだ」

「プルミエルとも親密な仲だそうだな」

「あ……向こうは俺を利用してただけさ。気にしなさんな」
「貴様は一体、何者だ？」

いきなり核心を突いてきたな。

だが、誤魔化すのも面倒だ……

まあ、こいつなら話しても害は無さそうだし、いいか。

「コレを見せてくれ」

俺は左手の勇者タイマーを見せた。

リシエルは頭を傾げる。

「何だ、それは？」

「俺にも何かは良く分からないんだが、ここに数字が出てるだろう？」

「うむ」

「これは時間どおりに減っていったら、ゼロになったら、俺は死ぬ」

「な、何っ……」

「笑ってもいいぜ」

「……死ぬのか、貴様……」

「ゼロになったらね」

リシエルは、驚いた後に少し淋しげな顔を見せた。

少しは同情してくれるらしい。

根はいい奴なんだろうな。

「だが、生き延びる方法もある。このカウントダウンは、俺が人に對して何かしらイイことをしてやればリセットされるんだ。だから俺がお前さんをオバダラの腹の中から引っ張り出してやったのも、こうしてベッドメイクをしてやるのも、俺の寿命を伸ばすための大事な仕事なワケ」

「なんと……」

リシエルは、もう一度しげしげと俺の勇者タイマーを見詰めた。

「そうだったのか……」

「そうなんだよ。だから、俺に對して恩義を感じたり、負い目を感じたりする必要は無いぜ」

「下衆め。そのような感情は、初めから持ち合わせておらぬわ」

さっきの取り消し。なんて可愛くない野郎だ。

「まあ、いいや。じゃ、そういうことだから。俺は他の部屋のベッドメイクもして来なきゃなんから、またな」

「待て」

「何だよ、今度は」

「決闘のことだ」

「え？」

「決着はつかなかったな。そうだな？」

「あー……」

思い返してみると、確かに、こいつが「参った」と言う前にオバダラの襲撃があったので、勝敗はしっかりとついていない。

「まあ、そうかもな。え、でも、再戦とかはやめるよ、面倒くさい

から」

「再戦などせん！」

ムキになって、リシエルが叫んだ。

まー、何度やってもお前に勝ち目は無いぜ。

こっちは不死身だもんね。

「ただ、私がプルミエルに対して注ぐ愛を、放棄する理由は無いということだ」

「……ああ、いいよ。好き嫌いって、そう簡単に割り切れるものじゃないしな」

「うむ。それだけだ。行ってよし」

最後の偉そうな態度は少しカチンと来たが、ま、なかなかイジらしいじゃないか。

俺は手をひらひらさせながら奴の部屋を出た。

「ケンイチ」

「おっと、ジャンさん。あとはこの並びの三部屋だけで終わりです」

「ああ、ここから代わるよ。メイヘレン様が君を呼んでるんだ」

「へ？」

「さあ、行きなよ。うわ、魚臭あつ！」

「しょ、しょうがないじゃないツスか！」

甲板に出ると、空には綺麗な星が瞬いていた。

ダンスホールの中からは紳士淑女の賑やかな話し声と楽団の生演奏が聞こえてくる。

それに合わせて歌うような、波の音。

アーア、平和だなあ。

「ケンイチ。こっちだ」

振り返ると、甲板の中央にしつらえられたテーブルで、メイヘレンが手を振っている。

プルミエルも一緒だった。

しかし、甲板の上には他に誰もいない。

満天の星空の下。

俺と、プルミエルと、メイヘレン。

これはかなり贅沢だ。

「座りたまえ、勇者殿」

「お、おお……」

俺は勧められるまま、丸いテーブルをはさんで、三人がトライアングルを形成するように座った。

早速、山のように盛られているフライドポテトに手を伸ばして、口に放り込む。

とてつもなく腹が減っていたので、それはこの上ない美味に感じられた。

「うまつ！」

「好きなだけ食べるといい。ここは私たちだけの貸切さ。こっぴう夜会も良いだろう？」

「ああ、いいね」

「今日はお疲れ様。上出来だったわね、ケンイチ」

「お、おう」

プルミエルが、ちよいとドキドキさせてくれる笑顔で言う。

瞳が、熱を帯びたように潤んで見えるのは気のせいだろうか。

(な、何か、いつもと様子が違うゾ……?)

テーブルを見ると、すでに空になったいくつものグラスが……
ま、まさか、コレ、全部酒じゃないだろうな？

「本当に上出来だったわ。グッジョブ」

「……もしかして、酔っぱらってる？」

「はぁ！？私が？」

ブルミエルは途端に立ち上がって、芝居がかった仕草で両手を大きく広げた。

「なんで酔っぱらうの？私が？この、ミスmanaガンのブルミエルが！？」

おおっと、すごい剣幕だ！

だが、これで確信した。お前さん、酔っぱらってるヨ！

俺は助けを求めるようにメイヘレンを見た。

「酔っぱらってるよね……？」

「まさか！酔っぱらうわけがないさ。ミスmanaガンの当主が」

「そうよ！私、お酒なんか頼んでないし！」

「そうさ。少しばかり刺激の強いジューズを呑んで、感情的になっているだけだものね？」

オーケイ、分かった、あんたが犯人だな。

ジューズと偽って酒を飲ませたか？

どこぞの悪辣な合コンサークルみたいな手口だ。

「そーよ、ケンイチ。私、少しだけハイになってるんだわ。それだけよ」

どエラく据わった目が、俺を睨みつけてくる。
ひい、触らぬ神に祟りなしだ。

「そつでしょ？」

「ああ、そつだろうとも。すまなかった、変なこと言っちゃまって
「ん、分かればヨロシイ」

そう言つて、プルミエルは可愛らしい手で俺の頭をナデナデした。
ん、おおおおおッ！

むしろ、コレはコレでアリだ！

俺は激しく萌え上がった。

ああ、いつもこつなら良いのに！

「さあ、あなたも呑みなさいよ、この刺激的ジューズ……」

「あー……お酒は二十歳になってから……」

「だから酒じゃねっつの！」（眉間に肘打ち！）

「ごあー！」

「はい、乾杯しましょ。カンパニー」

「カンパニー……」

「元気が足らーん！」（脇腹に蹴り！）

「げぶふうー！」

「もう、不死身のくせにリアクション大きすぎだし！」

「……条件反射だ」

「えらそーに……てーい！」（こめかみにグーパンチ！）

「うへあー！」

「きゃはははははははー！」

な、なんてこった……

この娘、とんだ酒乱だぜ！

おまけに夕チの悪い『絡み酒』ってヤツ。

不死身だからいいけど、これが普通の男だったら、ミルコと3Rフルで戦ったくらいにアザだらけになってるだろう。

まあ、美少女にカラまれて悪い気のしないM気質の俺がいることも事実なだけだね。

むしろ、しっかり者のプルミエルの、意外な一面を見れたような気もして、俺は少し嬉しくなった。

「あー、何笑ってるのよ」

「いや、何でもない……」

「エロイこと考えてたんでしょ？」

「考えてない！」

「ちょっと、メイヘレン。気をつけなさいよー、このケンイチという男、かなりのエロスボーイ……」

「ほっ……」

「ち、ち、違えヨー！」

「ケンイチ、慌てることはないぞ。年頃の男なら誰でもそうさ」

メイヘレンがテーブルの上に肘をついて、ぐっと胸を寄せて谷間を強調する。

わーお、ヤベエ。

こちらをしつとりと見つめてくる眼差しも、実に挑発的な光を放っている。

「うっっ……！」

俺は狼狽した。

『女豹』とか『サツキュバス』とか、そんな単語が頭の中を乱舞する。

おーう、マジ、ヤベエ。

「むしろ健全だよ、君は」

「そ、そうか、な……」

「もちろん、そうさ。ココや……」

艶めかしい動きで、メイヘレンの指先が自分の胸を撫でまわす。

「ココも……」

その指先が、今度はヒップから太腿にかけての曲線をなぞる。

タイトなスカートから覗く脚線美は、夜の闇の中でぞくつとするほど白く輝いていた。

「んふふっ……触りたい……滅茶苦茶にしたいって……そう、思うことは健全なんだよ」

「（ごくっ……）あ、あ……あ、そう……そうか……そうだよね……」

「きゃはっ……」

突然、プルミエルがもう我慢できないといった様子で吹き出した。
な、な、何だ？

「ケインイチ、凄い鼻血の量よ……」

「へあ？」

俺は自分の鼻を触ってみる。

生温かい液体が、べっとりと指先を汚した。

ブルミエルの指摘通り、鼻血だ。

おまけにすごい量だ。

俺は、テーブルの上を覆い尽くすほどに滴り落ちる自分の血を、まるで他人事のように上の空で眺めていた。

「うへえ……血い……すげえ出てる……」

「あははははー、両方の鼻の穴から鼻血を出すのもなかなかできることではないぞ、ケンイチ」

「きゃははははははー」

「へ、へへへー……」

俺は二人の美女につられるようにして笑ったが、シャレにならんほど頭がぼーっとしてきた。

コレってヤバいんじゃない？

「血い、止まらないんだけど……うはあ……」

辛うじてそう言ったところで、俺は目の前が真っ白になって、仰向けに倒れた。

薄れていく意識の中で、最後に聞いた言葉はコレだ。

「なるほど。エロスボーイの素質充分だな……」

俺は……

俺はエロスボーイ……

なんだろうか……？

勇者の辿る道？

酒宴から一日が経ち、太陽が最も高い位置に昇っていた。甲板を焼くような強い日差しが降り注ぎ、水着のギャルたちがプールベンチに寝そべって、しどけない姿で肌を焼いている。俺達三人はその賑わいを遠いところで眺めながら、テーブルを囲んでいた。

「しつかりしたまえ、キミたち」

メイヘレンの言葉に、俺とプルミエルは気だるく唸るだけで精一杯だった。

かたや二日酔い酒乱少女、かたや寝不足貧血野郎。

二人ともがまさに、生ける屍そのものだ。

何度も言うが、お酒は二十歳を過ぎてからだぜ、みんな。

「うー……頭痛い……」

「俺はむしろ頭がマヒしてる感じさ……脳みそが半分ほど血とともに流れ出たかのような……」

「だらしないな、キミたち」

「おいおい、もとはと言えば全部あんたのせいだろ……」

「私？私が何を？」

「はあー……？あう……！」

白々しい態度のメイヘレンに対して、プルミエルは何か反論したそうにしていたが、頭痛が彼女の言葉を阻んだようだ。

「うー……気持ち悪ー……」

「同情するぜ……俺も昨日は鼻にちり紙を突っ込んだ状態で勇者タ

イム稼ぎに奔走していたよ……長い夜だった……」
「ま、全てはいい思い出になるさ。話を進めよう。日程の確認をさせてくれ」

メイヘレンは強引に話を断ち切って、テーブルに地図を広げた。手に持った赤ペンでその上に線を引いていく。

「明日の朝には『パルミネ』の港町に到着する。すぐに町を出れば、夜までには『ウルシュ』という小さな村に辿りつくだろう」

「ウルシュ……何か用でもあるの……」

「野宿をするか？私は嫌だな」

「てか、あんたついてくる気なの……」

「勿論」

ブルミエルが大きな溜息をついたが、反論をする元気は無い。ぐったりと俯いて、テーブルに額をこすりつけて脱力しているだけだった。

昨日の酒宴が、この有様を想定してのことだとしたら、メイヘレン、実に恐ろしい女だ。

「その後、山を越えれば『ベデヴィア貿易都市』だ」

「貿易都市……」

「うむ。商人の都市だ。土産物から女まで、何でも揃うぞ」

「女……」

「おっと、チリ紙を用意させようか？エロスボーイ。気絶せずに聞いてほしいからな。重要なのはここからだ」

「……大丈夫、続けてくれ……あと俺はエロスボーイじゃない」

「実はここから先は『反魔結界』という不思議な結界があつてな。

魔法は一切使えない」

「へ？」

「理由は分からないが、魔法が使えないようになってるんだ。魔道貴族であろうと、それは変わらない。したがって、術戦車もNGということになるな」

「そ、そうなんだ……」

「未知の遺跡である『ジャパテイ寺院跡』の地下を中心とした結果らしいんだが、まあ、厄介な代物だよ」

では、ベデヴィア貿易都市からは俺達は歩きで進むわけだ。

あの術戦車に宙を超高速で引き摺り回される悲壮感を考えると、俺にとってはあまりシヨッキングな内容ではない。

むしろ朗報、やったぜ！という感じだ。

「えー……めんどくさー……」

ブルミエルは不満そうだ。

「まあ、そうさな。馬車でも使って、気長に行こう」

「おおっ、いいねえ。いい旅夢気分……」

そういう案は大賛成。

楽しい旅というのは、誰も恐ろしい目に遭わないことが肝心だ。

「よし、決まりだな。では、諸君、思うさま気だるい午後を過ごすといい」

「ちよい待ち……」

「ん？」

「ベデヴィアで……人を一人探すわ……」

「誰だ？」

「『ヤツフォン・ダフォン』教授……勇者研究の第一人者で……エスティのアカデミー時代の同期らしいわ……」

「聞いたことはないな」

「相当な変わり者だから……ベデヴィアにある都市図書館の研究室から外に出ないんですって……」

「ほお」

「でも、『勇者典範』を最初に解読したのも彼で……神聖文字が読めるらしいから……寺院跡に連れてく……」

「断られたら？」

「拉致る……」

「ワオ、さらっとおっかないことを言ったな。」

「ヤッフォン教授にとっては災難そのものだ。」

「ヤッフォン・ダフォン……分かった、覚えておこう」

「うあ……んじゃ、私、部屋で寝てるし……」

「プルミエルがヨレヨレと立ち上がって、フラフラとしたおぼつかない足取りで、自室に向かって歩いていった。」

「うーむ、こう言つと何だが、孵化したての赤ちゃんペンギンのようだ。」

（なんとも、庇護欲をそそるな……）

「ああ、その背中、後ろから抱き締めてやりたい。」

「無論、実行には移せないがな！」

「では、今日一日しっかりな、ケンイチ。港に着いたはいいが、君が死体になっていては笑い話にもならないからね」

「最近の勇者タイムのタイムオーバーよりも過労死のほうが心配だ、俺は……」

「大丈夫さ、負けるな男の子」

「そこまで心のこもってない応援をされるのも初めてだ……」
勇者タイムを確認する。

『12:15』

確かに、ここで悠長に喋ってる暇は無いな……

俺は新たな仕事を求めて、キャビンへと向かった。

夜が来て、朝になった。

見張りに立たされていたマストの上で、眠りから覚めた俺は水平線から昇ってくる朝日を見ていた。

眠ってて大丈夫かって？

最近ではコツを掴んできて、『四十分睡眠』を体得してきた俺だ。

つまり、四十分ほど熟睡して、残りの二十分で勇者タイムをチャージ、再び四十分眠るという超速睡眠、超速起床法ってやつ。

これはもとの世界に戻った時にも非常に有用なスキルだろう。授業中に使ったりとかね。

通学中の電車の中でも使えそうだ。

「ふあゝあ……」

俺は大きく、あくびを一つ。

朝日が目に眩しいぜ。

しかし、その黄金に揺らめく光の彼方に、大きな影がそそり立っているのが見えてきた。

(……………何だ?)

それは船が進むにつれ、次第に輪郭をはっきりとさせていく。あれは……

「塔……?」

それは海原にひよっこり生えているタケノコのようにもあつたが、まさに塔だった。

超巨大な尖塔が、天を突かんばかりに立っているのだ。

そのお膝元には、青一色に統一された建物の数々が規律正しく並んでいるが見える。

あれが昨日の昼間に話題に上がっていた『パルミネ』の港町だということとは、俺にもすぐに分かった。

白を基調としていたルジエの港町とは、また違ったイメージだ。

しかし、随分とデカイ塔だな!

スカイツリーだ何だというのは目じゃないぜ。

俺はするするとマストを下りて行って、その下で大きく伸びをしているジャンさんに報告をした。

「おはよッス」

「ああ、ご苦労さん」

「ジャンさん、大きい塔がありますよ」

「おっ、じゃあもうパルミネは目の前だな」

「あの塔は何スか？」

「え、知らないの？あれは『アルヴァンの魔法塔』だよ。今は観光名所になってるけど、昔は『スハラム・アルヴァン』っていう大魔法師がこの地方を支配するために建てた、剣呑な遺跡さ」

謎の遺跡、現る！

おおっ、ここに来て久しぶりにファンタジーっぽい展開だ。

「それは……ちょっと行ってみたいつスねー」

「一般には一階から三階までしか公開されてないから、すぐ見終わっちゃうけどね。でも、まあ、さすがに大魔法師の住処だっただけあってちよいと立派なものだね」

「へー……何階まであるんですか？」

「伝承では120階まであるらしいよ」

「うへえ、じゃあ我々は1/40しか観光できないってことですか」
「他の階はいまだに魔道トラップがあったり、魔獣が放し飼いなつてたりして危険なんだってさ」

「トラップに、魔獣……スゲエ……」

「『スゲエ』だろ。さ、分かったら、着港の準備に取り掛かってくれよ」

俺は停泊用の舳網を渡されて、追い立てられるようにして船の舳先へ走った。

見上げた先には、黒い塔が、相変わらず不気味にそびえ立っている。その偉容に、俺はなんだか鳥肌が立った。

言葉にして表現しにくいけど、なんというか、イヤな予感がしたんだ。

別れと出会いの港町

メイベル・ルイズは、無事にパルミネの港に着港した。

タラップが降ろされて、大勢の乗客たちが観光を楽しむためにぞろぞろと船を下りていった。

パルミネはルジエと同じように美観地区として整備されているのか、壁も屋根も青一色のその街並みは、実に秩序正しく並んでいて、壮観だ。

そして、船を降りる前にも、ドラマが待っていた。

メイヘレンが船長や操舵士と、彼女が不在の間の打ち合わせをしている最中に、ジャンさんが俺のところへ来た。

「ケンイチ、聞いたよ」

彼は本当に残念そうに眉を寄せた。

「ここで船を降りるんだって？」

「はい。お世話になりました、ジャンさん。他の皆にもよろしく言っついてください」

「残念だよ、ケンイチ。君は良い船乗りになれそうなのにな」

「ありがとうございます。まあ、将来の選択肢に入れますよ」

「前向きに検討しておいてくれよ。君ならいつでも大歓迎さ……っ
と、ちよつと待ってなよ」

そう言うと、ジャンさんは胸ポケットをまさぐって、一つのバッジを取り出した。

百円玉くらいの大きさの、ちょっと立派なものだ。

「これこれ。これはさ、このメイベル・ルーズ号の船員全員がつけてるバッジさ。読めるかい？ここに『海の男の誇りとともに』って書いてあるのさ。選ばれた海の男の、専用アイテムだぜ？」

彼は、俺の手にそれを握らせると、ぐっと力を込めて握手をしてくれた。

「大事にしてくれよな」

そう言うてにつこりと微笑むジャンさんの顔が、まるで随分と会っていない兄貴の顔のように見えてきて、俺はまた、少し目頭が熱くなってしまった。

どうも、この世界に来てから涙もろくなっちゃったような気がする。俺はルジエでの、マドセンさんとの別れを思い出していた。

あの時もこんな風に、胸が熱くなっちゃってた。

俺の労働はいわば命がけのボランティア活動みたいなもので、給料は入らない。

こっちの都合でやってるところもあるから、感謝もあまりされないけど、金や地位なんかじゃなく、ずっと価値のある物を積み上げていってる気がする。

クサイ言い方になるが、それは多くの人との『出会い』であり、色々な仕事に触れる『経験』であり、人と人の『絆』だ。

そういうような目に見えないけれど、生きていく上では欠くことのできない大切なものを、俺はこの世界に確かに築くことができているはず。

「……………大切にしますよ。ほら……………」

俺はすぐにそのバッジを制服の襟につけて、見せた。

「似合います?」

「ああ。男前だ」

「……うつつ!」

俺はたまりかねて、思わず涙を拭った。

「どうしたんだい?」

「い、いえ、何でも無いツス。……お世話になりました」

「元気でな。メイヘレン様を頼んだよ」

「あの人には、俺なんか必要無いツスよ」

「そんなことないさ。あの方はやっぱり女性さ。だから、男が守らないとさ?」

「……はい。そうツスね……。よし、やりますよ!」

「よし。いい返事だ」

俺とジャンさんが、もう一度熱い握手を交わしていると、涼しげな笑みを浮かべたメイヘレンがこちらへ歩いてきた。

「おや、エロい会話?」

「……台無しだぜ……」

「ジャン、私の不在の間は君がメインホストだ。乗客を退屈させないように頼む」

「は、はいっ! ご無事のお帰りを、お待ちしております!」

「ありがとう。そろそろ行こうか、ケンイチ?」

「お、おう」

今日のメイヘレンは、初めて会った時と同じ、黒革のロングコートに、白シャツ、黒革のタイトパンツというスタイルだった。まあ、動きやすさ重視のファッションだろうが、お色気度がある程度抑えめになってくれたのは、こちらにとっては嬉しい限りだ。青春真っ盛りの俺の、行き場を失った若い情欲は、いつ、どんな些細なことで暴発するか知れたものではない。

「おや？プルミエルはどうしたかな？ケンイチ、一緒ではなかったのか」

「術戦車を降ろしに……ありゃ？」

俺の視線の先にはプルミエル……と、リシエル皇太子がいた。メイヘレンが顎をしゃくって、目で合図を送ってくる。

あー、なるほど、『物陰で盗み聞きヨ！』ってことだな。

こそつと積み荷の影に隠れながら、俺達は二人に接近した。

「……プルミエル、いつでも私の国を訪ねてきたまえよ。婚礼の儀も、盛大に執り行う準備がある」

「はあ……考えてきますわね」

「この場で返事を聞いても、私は構わないのだぞ？」

「えーと、申し訳ありません、殿下。今は私にとって、為すべきことを為す時なのです。それに、かの有名な大賢人ピセンテ・フラメルフスもこう言っておりますわ。『最大の幸福は、最大の忍耐と試練の後にのみ存する』と……」

「う、うむ……そう言えば、そうだな」

「つまり、そういうことです」

「そうか……そうだな。うむ、そうだ」

「ええ。では、また会う日まで、ごきげんよう」

「ああ、しばしの別れだ、我が妃……ああ、そうだ。これを」

「？」

リシエルは腰に下げていた剣を、プルミエルに差し出した。

「????？」

「あの、下衆……そうだ、ケンイチ。奴に渡しておいてくれ。実に遺憾ではあるが、あの者に私の未来の妃を護衛を任せようと思っ
な。丸腰では務まるまい」

「まあ……」

「憎い恋敵ではあるが、やむをえん……」

「ご自分でお渡しになったら？」

「ハッ！あのような下賤の者に贈る言葉など無い！オバダラの口の中でも散々に泣き喚いて、私に命乞いをするような情けない奴だ。」

『リシエル様、どうかお助けください、ここから出してください』
といった様子で……」

こ・の・野・郎……！

すぐさま飛び出して行って、その小生意気な横っ面をひっぱたいてやろうと思っただが、メイヘレンが俺の腕を掴んで、首を振った。
なんだよ、もう！

「たしかに……渡しておきますわ」

「うむ。私はいつでも待っているからな、プルミエル」

「もったいないお言葉ですわ。殿下もお元気で」

言うだけ言うと、リシエルは大股で、機嫌良く船へと戻っていった。
プルミエルはその後ろ姿を見ながら、口を開く。

「……で、その二人は何を聞きたかったワケ？」

アウチ！バレてたか……

俺とメイヘレンは潔く、彼女の前に姿を現す。
それを見て、プルミエルは頬を膨らませて不機嫌そうに唸った。

「覗きなんて最悪ねー、もう」

「うっつ！」

「なに、水を指しては悪いと思っつてね。なあ、ケンイチ？」

「いや、俺は、その、君が変なちよっかいを出されてないかと思っ
てさ……」

「何ができるのよー、あのボンボンに」

「まあ、そうなんだけどさ……」

「ところで、大賢人ビセンテナにがしというの……？私は聞いた
ことが無いぞ」

「思いつき」

「悪い女だな」

「あんたに言われたくないってば。あー、ほい、ケンイチ」

プルミエルが、思い出したようにリシエルの剣を差し出してきたの
で、俺はそれを受け取った。
おおっと、意外に重たいな。
結構しっかりした作りになっていて、いかにも頑丈そうな鉄拵えの
鞘には、非常に凝った唐草模様の彫刻が刻まれている。
試しに抜いてみる。

剣自体は予想以上に軽かった。

銀色の美しい両刃の刀身が、朝日を受けて鋭い光を放つ。

「ワーオ……」

「へえ、かなり立派なものねー」

「まあ、皇太子のものだからな。業物だ」

「こいつは……クールだ」

「大事にしてあげなさいよ」

「そりゃあ、もちろんんだけど……あいつ、俺のこと散々言っただけだよ、くそ」

「彼は口でそう言ってるだけだよ、ケンイチ。彼は君のことを相当買っているようだぞ」

「はあ？」

「教えておこうか。この世界ではね、剣を人に贈るといふのはその人間に対する友情を示す、最大級の行為なんだよ」

「え……」

「だから、その剣はリシエル皇太子からあなたへ、友情を込めた贈り物ってワケよ。どうしようもない甘ったれだけれど、なかなか粋なことをするわよねー」

「そ、そうだったのか……」

友情？

その言葉に俺は戸惑った。

あいつは甘ったれで、世間知らずで、卑屈で、高慢で鼻持ちならぬいキザ野郎だ。

向こうも俺を好ましくは思っていないだろう。

そんな俺達の間、いつ友情が芽生えたんだ？

(敵ならまだしも……)

だが、この……

なんだろう……

なんだか、また胸が熱くなってきた。

ええい、考えるのはやめだ！

俺は剣を鞘に納めて、ベルトに差した。

多少ガチャガチャするが、まあ、上出来だ。

『ゆうしやは りっぱなけん を てにいれた!』

たらららっ たっ たっ たー

なんていう場面だろうか？

だが、これは武器屋で200Gとかで買えるものじゃなくて、一応、友情の証にもらったものだ。

大事に使わせてもらおうとしよう。

「似合う？」

「普通だな」

「微妙ねー」

オーケイ、手厳しいご意見をありがとう、お二人さん。

「さて、では、行きますかー」

「術戦車タイムだな……憂鬱だぜ。あ、そういえばメイヘレンはどうすんの？一緒に手錠？」

「それも楽しそうだが、遠慮しておくよ。私には私の術戦車がある」

「えー!」

メイヘレンが顎をしゃくると、その先には銀色に光り輝く流線形のマシンが。

これは、アレだ。

まるでジェットスキーだ。

油污れ一つ付いていないシルバーメタリックなボディは、風の抵抗を受け流すように設計されているようで、全身に丸みを帯びた近未来的なシルエットになっている。

シートは黒革張りで、最高にクールだ。

しかし、術戦車ってのはどれも格好いいぜ!

「『テトラクテュス』だ」

「ワーオ」

「まさに『ワーオ』ね。ブランシユール家がメイベル・ルイーズの他に術戦車を持っていたなんて知らなかったわ」

「まあ、あまり人前で使う機会が無いからね。残念だったな。私を鎖で引き摺り回したかったんだろう？」

「そーね。いろんなアクロバット飛行を試してみたのに」

会話の内容はエラく物騒だが、二人とも薄い笑いを浮かべているから、本気じゃないんだろう。そうであってくれ。

「おお、そうだ。ケンイチ、勇者タイムは？」

「あと……『12:44』。今、チャージしてくる」

これだけ人がいれば、勇者タイムを稼ぐのは容易だ。

俺はとりあえず周囲を見回してみた。

積み下ろしをしている船員。

上客を待っている馬車。

それに乗り込む、立派な身なりの夫婦。

と、俺の目はそこで、明らかに困っている様子の人間の姿をとらえた。

女性だ。

シスターのような修道服を身にまとって、キョロキョロとせわしなく首を動かして、何かを探しているように見える。

おおっ、しかもかなりの美人！

君に決めた！

「もし。何か、お困りですか？」

俺は彼女のもとへ駆け寄って、ありったけの男前声で話しかけた。

「はい〜?」

間延びした返事とともに振り返った女性は、年のころ二十五、六だろつか。

睫毛が長く、目を閉じているんじゃないかなろつかというほどに細めた眼は黒眼しか見えないが、それが実に温厚そうな人となり語っているようだ。

目鼻立ちがしつかりしているので、その目の細さは、彼女の美貌をまったく害することなどなく、むしろ『笑顔美人』という称号を捧げたいほどに印象的だ。

異世界には美人しかいない、という俺の説はどうやら定説のようだぞ!

「え〜と、どちらさまですか〜?」

「あ、僕はケンイチと言います。困ってる人を放っておけない、さすらいの紳士……さ、何でも言ってお下さい。悪行非行、ボディタッチ以外なら何でもお引き受けしましょう」

「はあ〜……」

うーむ、不審がつている。

自己紹介がちよっと不自然すぎたか?

「ふふ、ケンイチさん、面白い方ですね〜」

おおつ、意外と好感触!

「実はですね〜、私、迷子の子供を二人、探しているんです〜」

子供だと……！？え、子持ちなの？

「ロビンとニナシスという男の子と女の子で、ロビンは七歳、ニナシスは五歳です。それ位の年頃の子供を見かけませんでしたか？」

「いや、見てないッスね……」

「そうですか……はあ、どこへ行ってしまったんでしょうね……」

気落ちした様子のシスターに俺が声をかけようとすると、後ろから声が飛んできた。

「もー、ホントにエロスボーイねー、ケンイチ。女の人にはっかり声をかけるんだから」

「うつつ、ち、違う！この人が本当に困っている様子だったから……」

「あら……？あらあら……？」

「へ？」

「プリミイちゃん？まあ、プリミイちゃん！こんなに可愛らしくなっちゃって……！」

そう言うと、シスターはプルミエルへと駆けよって、力いっぱい彼女を抱きしめた。

「むぎゅー！」

「プリミイちゃん！元気にしてた？」

「むーっ！むーっ！」

「ああ、もうあれから八年も経つのね……もう、すっかり貴族の仲間入りね」

「ふぐーっ！んむーっ！」

「ん〜、よしよし〜」

「あの……………」

「はい〜？ケンイチさん、なんですか〜？」

「彼女…………死にかけてますぜ」

「あら…………？あらあら！まあまあ！私つたら〜！」

「…………ぶはーっ！ぜえ、ぜえ……………」

顔をしっかりとシスターの胸に押しつけられていたプルミエルは、その殺人的な束縛から解き放たれると、大きく肩を揺らしながら夢中で空気を吸った。

真っ赤な顔が、窒息寸前だったことを物語っている。

「知り合い？」

「…………シスター…………メアリ…………クラリーネ…………よ」

息も絶え絶えに、プルミエルは帽子をかぶりなおした。

「あら〜、お二人はどういうご関係〜？もしかして恋人〜？」

「ツレ」

「そこだけは即答なんだな…………ところで、シスターとプルミエルはどういう……………」

「勇者タイムは大丈夫なの？」

「へ？」

『03:13』

おわあ！そういえば迷子の話を聞いただけで、具体的には何のアクションも起こしていない俺だ！

俺が額に冷や汗をかいた時、すぐ横手の船着き場で悲鳴が上がった。

「大変だー！モリソン爺さんが足を滑らせて海に落ちちまったぞー！」

やった！ツイてる！

いや、見ず知らずのモリソン爺さんには悪いんだが……やっぱりツイてる！

「お・れ・が・た・す・け・る・ぜえええええッー！」

不謹慎だが、誰かに先に助け出されちゃたまらない。

俺はわき目もふらずに悲鳴の上がったほうへ走り、躊躇なく海へ飛び込んだ。

潜入！アルヴァンの魔法塔

「聞け、レイハーブ。汝、氷海の主にして淀み無き深淵を治める者。我は欲す、その力の顕現たる真実の眼……」

メイヘレンが呪文を唱えると、水甕に満たされた水の表面が、まるで鏡のようにピンと張り詰めて、馬車が周囲を駆けまわっても、そこには波紋一つ生じなかった。

「おおっ……」

やがてそこに、二つの小さな人影が映し出される。

薄ぼんやりとしたモヤがかかっているのに、鮮明に表情を見ることができないが、シスター・メアリがハッと息を呑んだ。

「ロビンとニナシスです……！」

少年と少女は互いに固く手を握り合いながら、暗闇の中を恐る恐る歩いていた。

「洞窟かしら？」

「メイヘレンさん、ここはどこですか？」

「……っ！」

メイヘレンが一瞬、苦しそうな表情を浮かべると、すぐに水に映った人影は消えて、それはゆらゆらと揺れる水面に戻ってしまった。

「……はあっ……」

メイヘレンは天を仰いで、大きく息を吐いた。
額には汗が浮かんでいて、かなり体力を消耗したように見える。

「どーしたのよー、オバダラを見つけた時はもっとなん簡単だったじゃん」

「無茶を言う……あの魔法塔の中を覗いただけでも大したものだと褒めてもらいたいね」

「魔法塔？あの、アルヴァンの魔法塔ですか？」

「他に魔法塔と名のつくものがありますか？シスター・メアリ。おまけに都合の悪いことに、どうやらその二人は一般観覧エリアから離れてしまったようです」

「げ。それじゃ、三階から上にいるってことかよ？」

「間違いない。まあ、子供の足だ。四階のどこかにいるだろう。まだ生きているだけでも幸運と思ったほうがいい」

「大変です、急いで助けに行きましょう！」

シスター・メアリがパタパタと走り出した。

ブルミエルとメイヘレンもそれに続く。

俺も一緒に駆け出そうとした時、さきほど海から引き揚げてやったばかりのモリソン爺さんが俺の行く手に立ちふさがった。

アウチ！

なんていうタイミングの悪さ！

「どうも、さきほどは世話になっちまって……」

「いいんですよ。これからは気を付けてください。じゃー！」

「何か御礼を……」

「ああ、いいんです、いいんです。じゃー！」

「そうはいかんです。何でも言うてくれ」

「いや、ホントにいいんだって……じゃー！急いでますんでー！」

「では、これを……」

「おお、ありがとうございます！じゃ！」

俺はモリソン爺さんから布製の小さな袋を受け取ると、すぐに駆け足で皆の後を追いかけた。

しかし、目の前には大勢の人が行き来し、三人の姿はすでにその中に紛れてしまつて、どこにも見当たらない。

俺、迷子？

まあ、街の中央にそびえ立つあの巨大な塔が目的地だから、特に困つたことではない。

そっちに向けて走っていれば、間違いなく追いつけるだろう。

(しかし、少しは待つてくれても良いだろうに……)

俺は人混みをかきわけながら、塔へ向かって走つた。

その最中に、モリソンさんからもらった袋の中身を確認してみる。

もしや、金？

なんていう下世話な期待も無いことは無かつたが、袋の中には、琥珀色の玉がいっぱい詰まっていただけだった。

(何だ？コレ……)

取り出して、しばらく眺めて、ぺろりと舐めてみる。

甘い！

やっぱり飴玉だ！

俺は一粒、口の中に放り込んだ。

うーむ、美味。

甘すぎず、渋すぎず……砂糖を何杯も入れて溶かした紅茶を、濃縮して固めたような味だ。

俺はそれを口の中でレロレロと転がしながら、先を急いだ。

馬車を避けながら通りを抜けて、大道芸人がジャグリングをしている広場を突っ切り、恋人達がいちやつく泉の前の階段を飛び越えるのと、ようやく塔の入口が見えた。

豪壮という言葉がぴったりな、大きな鉄の門が開いていて、そこから多くの観光客が出入りをしていた。

その様子はまるで、尖塔の形をとった巨大な生物が、我から進んで口に入ってくる哀れな餌を貪っているようにも見える。

俺は思わず、オバダラの口を思い出してしまって、ぞっとした。

この塔は、やっぱりどこか気味が悪いや。

「遅い！何をやっていたんだ？」

「おわあ！びっくりした！」

俺はいきなり現れたメイヘレンに、思い切り腕を掴まれた。

「うお！」

「行くぞ！四階だ！」

そのまま問答無用で大門をくぐり、大廊下を奥へと引き摺られていく。

「シスターとプルミエルは先に向かった。私たちも急ぐぞ」

「お、おう」

塔の中は予想以上に華やかで、明るかった。

大廊下は上から等間隔でいくつものシャンデリアがぶら下がっている豪華絢爛なもので、しかも世界の果てまで続いているのではないかと思うほど長い。

そこを大勢の人間がパンフレットを手に行き来していて、本当に美

術館とか博物館みたいだった。

こんな緊急事態でなければゆっくりと鑑賞したいもんだ。

「わーお、すげえ……」

「『アルヴァン・コレクション』だ。スラム・アルヴァンは憎むべき世界の敵だが、その審美眼は実に確かだ。権力と魔力に物を言わせて世界中から美術品を収集していたんだよ」

「アルヴァンはどうなったんだ？」

「さあ？」

「え？」

「彼の最期は伝えられていない。二百年も前に忽然と歴史上から姿を消したそうさ。この魔法塔と、壮大なる野望の記憶だけを残してな……」

「野望ってやつぱり、アレか？」

「世界征服……はっ、子供じみてはいるがな」

メイヘレンは笑い飛ばすように言ったが、その眼鏡の奥の瞳に少しだけ不安の影がよぎったように見えた。

「？」

「……いや、何でもない」

彼女は俺の視線に気づくと、コートのポケットから中折れ帽を取り出して、目深にかぶった。

ワオ、まるで西部劇の女ガンマンだ。

「おしゃべりはここまでだ。急ごつ。そこを右に曲がると、塔の中心を貫く螺旋階段に出る」

「よし、行こつぜー」

なかば駆け足で、俺達二人は廊下を曲がり、観光客をかき分けて、ひととき大きな門をくぐった。

と、そこで突然現れた光景に、俺は思わず息を呑んでしまった。

「こいつは……」

まるで、超巨大な貝殻の中に閉じ込められたようだった。

巨大な塔の中心部と思われるこの場所は、全ての階層が完全に吹き抜けとなっていて、壁に沿って、まるで塔の内側に巻きついているような螺旋状の階段が取り付けられている。

それは、昇る者を天まで導くかのように果てしなく続いていて、その途中の壁の所々に各階層への入口のような鉄扉が見受けられた。

ジャンさんに聞いた通り、三階までは確かに観光地区となっているようで、それぞれの扉の傍の壁には松明が赤々と燃えている。

よく見ると、案内板のようなものもあった。

メイヘレンに解説してもらおうと、

『一階：美術コレクション』

二階：装具コレクション』

三階：魔道コレクション』

四階：封鎖地域！立ち入り禁止』

……だそうだ。

そうは書いてあるものの、螺旋階段に対しては、特に上位階層を封鎖してあるわけでもないし、監視員が立っているわけでもない。

割とずさんな印象だ。

「なるほどね。オン・ユア・リスクってわけか」

「ここには特に管理する団体もないからね」

これなら子供たちが迷いこんじまったのも頷ける。

「登るぞ」

「よし！」

俺とメイヘレンは、螺旋階段を勢いよく駆けあがっていった。

トラップ大佐

「遅い！何してたのよ、もう」
「うわぁ！」

四階の鉄の扉を開くと、いきなりそこに立っていたプルミエルの怒声を浴びせられた。

「び、びっくりした……」

「どこで道草食ってたのよー」

「港で助けた爺さんから飴ちゃんを貰ってたんだ。これ。いる？」
「いない」

「私も遠慮しておこう」

「あ、私は頂きます……ん、あら、とっても美味しいですね」

シスター・メアリだけが飴玉を素直に受け取ってくれた。

俺も一粒取って口に放り込んでから、辺りを見回した。

先ほど一階で見た豪壮な大廊下と違って、とにかく暗い。

プルミエルが持っている松明が無ければ、一寸先も見えないだろう。

床はひび割れ、天井には蜘蛛の巣が張り、空気はどんよりと重く、埃臭い。

いかにも前人未踏の遺跡ですよ、といった風情だった。

それでも、所々に見える柱や壁には、様々な幾何学模様の凝った装飾が施されていて、往時の繁栄を未練がましく物語っているようだ。

「……うーう、薄気味悪いな」

「はい、じゃあ、これが松明。先に行ってケンイチ」

「え、なんで俺が？」

「何よー、文句あるの」

「実はこの塔、いまだに様々なトラップが生きているかもしれないんですよ」

「アルヴァンの造った魔獣もいるかもな」

「ま、魔獣？」

そういえば、メイベル・ルイズ号の上でジャンさんにそんなことを聞いた気もする。

「あなたがこの世界に来て一番最初に見た、あれ、あのオークのような獣人と違って、純粋な狩猟本能と闘争本能しか持ち合わせていない超危険な獣のことよ。アルヴァンは禁断魔法で、自分好みの魔獣を造っていたらしいの」

「ワーオ……」

ろくでもない野郎だぜ、アルヴァン。

会ったことは無いが、友達にはなれないだろう。

「そこで、不死身の勇者の出番ってワケ」

「うつつ！お、俺だって怖いものは怖い」

「ほほう。か弱い女性をあえて前に立たせて、まがりなりにも勇者としての良心は痛まないかね？」

「うつつ！」

「意気地なしー」

「男じゃないな、まったく」

「ケインイチさん、タマナシですか？」

「はーん！」

女達はここぞとばかりに俺を責め立ててくる。

さりげなくシスターもそれに混じっているのはショックだったが、

長年に渡って放置されていたせいで、槍自体も少し風化しているよ
うだった。

「いきなり見事に引っかかったわねー」

「相変わらず見事な不死身っぷりだな」

「すごい！すごいですよ！ケンイチさん」

女性からやんやの喝采を浴びるのはやぶさかではないが、こんな超
危険なトラップが仕掛けられている塔に、年端のいかない子供たち
が閉じ込められていることを考えると、浮かれてももられない。

「ヤバい、ここはマジでシャレにならないぞ！急いで子供たちを探
そう！」

「あ、そうですね、行きましょー！」

「俺がここを一気に駆け抜けるんで、少し離れてついてきてくださ
い。いいツスカ？」

「はい。頼りにしてます」

「おー、勇者っぷりも板についてきたわね」

「あとで握手会を開くぜ。入場無料さ」

俺は三人に向けて親指を立てて見せる。

全員が同じ仕草で返してきた。

よし。もはや躊躇いは無いぜ。

「行くぜ！うおりゃあああああああああああああああああああ
ああー！！」

決然たる覚悟とともに一步踏み出した途端、足元でカチツと鳴る。

またかYO！

いきなり不穏なスタート！

前方の暗闇から、今度はグレープフルーツ大の鉄球が飛んできた。そのスピードたるや、バッテリーングセンターの「超速」並みだ！

「ぶぶふうふう！」

ズゴン！という壮絶な音を立ててそれが顔面に直撃するが、もちろん平気さ。

衝撃で大きく首がのけぞったが、大したことは無い。

「くそ、まだまだあああああああああ！！！」

怯むことなく、俺は闇の中をひた走る。

しかし、よほど運が悪いのか、俺はことごとく罠にかかった。

「ひあ！」

矢の雨が降ってきたり。

「うお！」

電撃を浴びせられたり。

「ひでぶ！」

巨大ハンマーに押しつぶされたり。

とにかくありとあらゆる苦難が牙をむいて襲いかかってきたが、俺は何とかそれらを不死身というチート能力で乗り越えた。

「おおおおおおおっ……！と、何だ、アレ？」

俺は前方の空間に、ひたひたと動く大きな影を見つけ、足を止めた。
最初は子供たちかと思ったが、違う。

(動物……?)

そいつは四足で静かに、ゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる。

松明を向けて正体を確かめようとした俺は、その姿を見て思わず息を呑んだ。

「うっ……」

そこにいたのは虎のように大きい四足歩行の生き物だった。

しかし、気味の悪いことに、そいつは全身の皮を剥いだように赤黒い筋肉組織が露出していて、身体を動かすたびにそれがヒクヒクと波打っていた。

おまけにこいつ、目玉が無い。

その部分は何かで埋めたように完全に塞がっていた。

さながら深海魚だ。

はーん！何？この生き物、超グロいんだけど！

(魔獣よ)

いつの間にか後ろに立っていたプルミエルが、聞こえるか聞こえないかの小声で耳打ちしてきた。

「ま、魔獣？アレが……！」

(しっ！声がデカイっての。あいつは目が退化してるけど、聴覚だけで狩りをする『フォービドゥン』っていう獣よ)

(聴覚だけで……)

(そ。その聴覚もすごく発達してるってわけじゃないから、静かに

してればやり過ぎせるわ)

(わ、分かった……)

(気をつけなさいよー、仲間を呼ぶこともあるから)

(そいつはご勘弁だな……)

(抜き足、差し足、忍び足でいくわよ)

おおっと、ずいぶん古風な表現が飛び出したもんだ。

俺達はとりあえずその言葉に従って、獲物を求めてウロウロしているフォービドウンの横を、細心の注意を払ってすり抜けることにした。

首を振ったり、耳をピクピク動かしたりしている魔獣も、何らかの気配を感じてはいるのだろうが、こちらに襲いかかってくることは無かった。

その低く唸る声は、周囲を警戒しつつも相手の出方を窺っているようにも聞こえる。

頼む、しばらく気付かないでくれよ。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

全員が忍者も真つ青の足取りでそいつの横を通り抜ける。

幸い、魔獣はこちらに気付いていないようだった。

ほっとしたのも束の間。

そこから少しも行かないうちに、俺達はすぐに新たな難問にぶち当たってしまった。

(あー、くそ……なんてこった。分かれ道だ)

目の前の道は、三つに分かれていた。

右の道。

左の道。

真っ直ぐの道。

しかし、思えばこの塔は不思議なことだらけだ。

尖塔の中にいるはずなのに、この廊下はどう見ても真っ直ぐな道に見えるし、おまけにその道が三本に分かれていることなんてあるだろうか？

(どうなってんだ……？)

(この魔法塔はアルヴァンの秘術が満載のデコレーションケーキよ。その中身が歪空間化しても不思議はないでしょ)

(いやいや、不思議だっつーの)

(でも、どうします？)

(時間をかけるのは危険だ)

メイヘレンが言った。

(三手に別れて行こう。私とプルミエルには自衛の手段がある。シスターはケインイチを盾にして行くといいでしょう)

(そーね。そうしましょう)

(ケインイチさん、それでいいですか？)

(俺は問題なしっす。あ、でも、松明は……)

答える前に、プルミエルは手ごろな木の棒を手に使っていた。

(どうしたんだ、それ？)

(これ？いきなりあなたが引っ掛かったトラップの槍の柄)

ああ、あの碎け散った槍の……準備が良いな。
彼女が手をかざすと、すぐに二本の棒に火がつき、盛大に燃えだした。

そういえば彼女、炎の魔法使いだったね。

（じゃ、行こう。シスター、俺についてきてください。二人とも気をつけるよ）

プルミエルは右へ。

メイヘレンは左へ。

俺とシスターは、一番子供たちのいる可能性の高そうな真っ直ぐの道へ。

それぞれが別々の道へ進んで行った。

（………それにしても、二人は随分と奥深くまで潜入したもんですね………）

俺は子供たちがあの薄気味悪い魔獣に襲われていないことを願いつつ、溜息をついた。

（ロビンもニナシスもかくれんぼが得意なんですよ。あ、そういえば、プリミイちゃんもそうでしたね〜）

（シスターは、プルミエルと過去にどんな………？）

（プリミイちゃんは私のところの孤児院にいたんですよ、って、あらあら、これは秘密でした〜）

「え！？孤児院に？」

俺が思わず大声を出してしまうと、前方の闇の中でボタン！と何かがかいっぱい開いたような大きな物音がして、続いてウ〜という、

低い唸り声がひたひたと近づいてきた。

おおっと、やべえ！

俺とシスターは息を殺して、立ち止まった。

恐る恐る、前方へ炎をかざしてみる。

すると……

「うっ……」

「ロビン、ニナシス！」

なんと、二人の少年少女が、しっかりと手をつないだままそこに立っていたのだ！

ああ、よかった！無事だったんだ！

二人はシスター・メアリの姿を見て、一瞬呆然としてから、すぐに目に涙をためて駆け寄ってきた。

「シスター！」

「あーん！怖かったよう！！」

「よしよし、もう、なんでこんなところに来ちゃったんですか？」

「ロビンが、宝探ししようって……あーん！」

「ごめんなさい……うわーん！」

「よしよし、よく無事でしたね？」

「その大きな絵の影に隠れてた……でも、声が出たから……」

「ああ、さっきの物音はそれだったんですね。よしよし、偉い偉い」

「うわーん！」

シスターが泣きじゃくる二人をしっかりと胸に抱いて、優しく頭をなでてやる。

それを見て、俺は胸をなでおろした。

「良かったっスね」

「ご迷惑をおかけしました」

「あーん！」

「うわーん！」

……うーむ。

「あーん！」

「うわーん！」

……イヤな予感がする。

「あーん！」

「そ、そろそろ、泣きやんでくれないかな、キミたち……」

「ケ、ケンイチさん、後ろ……」

ああっ！

やっぱりい！

振り向くと、そこにはあの魔獣フォービドウンがハッハッと息を荒くしながら立ちはだかっていた。

だが、それだけではなかった。

プルミエルの解説通り、仲間を呼んだのだろう。

なんと、その後ろには五頭、六頭と同じ獣が群れをなしていた。

くそっ！

「あーん！」

「シスター、ここは俺が囿になります。合図したら、二人を抱いて走って逃げてください」

「ええっつ、だ、駄目です、置いていけません」

「大丈夫、見てたでしょ？俺、不死身なんですよ」

「でも……」

「うわーん！」

「ハーイ、泣き虫のキミたちにはコレをあげるよ。超甘いし、美味しい。ほれ、口を開けなよ」

俺は袋から飴玉を取り出して、泣いたままの子供達の口に入れてやった。

するとどうだ、二人はすぐに泣くのをやめて、それを口の中でコロコロと転がし始めた。

やっぱり子供には飴だな！（？）

「……おいしい」

「甘い」

「だろ？ここから先はそれをしっかり舐めてるんだぞ。シスターが君たちを安全な場所まで連れて行ってくれるよ」

「ケンイチさん……」

「それじゃ、いいですね？」

俺は魔獣達の前に進み出た。

鋼鉄の番人

『僕を食べて』

頭があんパンでできてる超有名なヒーローのキメ台詞を、俺は思い出していた。

奇妙なヤツだと思っていたが、あれこそが自己犠牲の精神であり、見習うべき勇者の鑑だ。

そして、奇しくも今。

俺は似たような状況にあった。

(うぶ……ばつちいな……)

ザラリとした舌が俺の顔を舐め上げ、涎まみれにされる。

三頭ほどの魔獣にのしかかられて、身動きできない俺はいいように身体を貪られていた。

『食べられている』というよりは『嬲られている』感じ。

俺がなまじ不死身なもんだから、奴らの誇る鋭い牙も爪も、この身体を切り裂くことはできなかった。

向こうもようやくやくそれに気付いて、後は未練がましくべろべろと舌で俺の身体中を舐めまわしてやがる。

まったく、罪なボディーだ。

俺は、ペット用の骨の形をしたガム……そう、アレだ。「ほねっこ」。

アレになった気分だった。

あんなもん舐めてて何が楽しいんだと思っていたが、今はさらに強くそう思っている。

なあ、こんなことしてて何が楽しいんだ？

魔獣は当然、答えない。
同じ行動を繰り返すのみである。

(さて、どうしたもんかな……)

思案のしどころだ。

シスターと子供たちを逃がすために、口笛で『スリラー』を吹きながら魔獣たちを誘き寄せたはいいが、すぐに強靱な前足で床に押し倒され、今に至る。

幸い、シスターも子供達もその隙に逃げだすことができたようだ。

あとは、妙なトラップに引っかからないでくれればいいんだが、大方のトラップは俺が踏破しておいたから、問題は無いだろう。

問題は……

(この身動きできない状況にある……)

唾液にまみれながら、俺は思わず舌打ちを洩らしてしまった。

魔獣フォービドゥンの恐るべき六頭連携によって、俺の体は完全に床に押さえつけられていて、自由に動くのは右腕だけだ。

身体の上には三頭もの魔獣が覆いかぶさっていて、残りの三頭は俺の周りをうるついで、しきりに唸ったり、噛みついてきたりを繰り返していた。

はつきり言つて、不死身でなかったら相当悲惨な状態の死体になっているはずだ。

(何とかならないか?)

周囲を見回してみる。

何も無い。

腰に差した剣の上には、魔獣が一体のうのうと座りこんでいて、抜

くことはできなさそうだ。
くそ。

このまま待っていれば、あの魔法使いTai!が助けに来てくれる
だろうか？

そうだ、こんなに優秀なモルモットをみすみす死なせる手は無い。
きっと助けに来てくれるさ。

希望的観測のもとで、待ちの姿勢に入ろうとした時、俺の眼は床の
上のあるモノに気付いた。

目を凝らすと微かに分かる、あの突起。

スイッチ？

多分、トラップのスイッチだろう。

リロ&スイッチ、なんておサムいギャグが思い浮かんだ。

(……うーむ、どうしよう?)

押すか？否か？

正直、何が起こるかは本当に分からない。

まあロクなことは起きないだろうが、現状を少しでも改善できるか
もしれない。

いずれにしても、チャレンジしてみる価値はありそうだ。

なんせ不死身なもんだから、この博打にはリスクと呼べるほどのも
のも無い。

俺は、思い切って右腕を伸ばした。

「く……く……んおおおっ」

くそ、結構離れてるな。

脇が吊りそうだ。

「おおおおおっ」

それでも気合で腕を伸ばし、床を叩いた。
カチツと小気味良い音が鳴る。

さあ、何が起きる？

と、急に遠くでスパパパン！というやかましい破裂音が鳴り、広い廊下に響いた。
な、なんの音だ？

「？」

魔獣たちも、突然の物音にいつせいに顔を上げた。
その時。

ズン……ズン……

地鳴りのような音が遠い闇の先から聞こえてきた。

床を見ると、そこに積もった埃や細かい破片が、かすかに振動している。

これは……

イヤな予感がする……

ズシン……ズシン……

その音は力強さを増し、空気の振動が、圧倒的な質量を持ったモノの接近を知らせてくる。

危機を感じ取ったフォービドウン達が叫び、喚きながら、慌てて俺の体の上から飛び降りて、音のする方向とは逆の方向へ一目散に逃げていく。

ズシン！ズシン！

俺の発した言葉に、鉄人はピコピコと目を明滅させて反応した。

「侵入者……確認……侵入者八……排除……」

はーん！予想通りのベタな反応！

鉄人は鉈を振り上げて、ズシンズシンと近づいて来た。

こ、こんな奴と闘ってられるか！

迷子の子供を救うという目的は果たしたんだから、ここに長居する理由は無い。

俺は一目散に逃げ出した。

「侵入者……逃走……追跡」

『去る者は追わず』という歴史的な金言を知らないのか？このポンコツめ！

後ろを振り返ると、鉄人は予想以上のスピードでズンズン迫ってくる。

おおっと、けっこう素早い野郎だ！

俺は暗い廊下を全速力で走った。

だが、俺の不幸は続く。

「ケンイチさん」

闇の向こうで、シスターの声が聞こえたのだ。
何たるバッドタイミング！

「どこですか？」

「シスター、逃げて！」

「あゝ、ケンイチさん、そっちですか？」

呑気なシスターの音が、近づいてくる。
マ、マ、マズイ!

俺のすぐ後ろには殺人意欲に満ち溢れた古代の鉄人がいる!

「こつちに来ちゃダメツス!」

俺はなるべく意図が伝わるように、鬼気迫る声を出した。

「逃げてくださいッ!」

「え、何ですか?」

「俺、今、殺人マシーンに追われてるんですよッ!」

「あ、見えました」

闇の先で、松明を振るシスターが見えた。

俺も手を振る。

つて、そんな場合じゃねえぜ!

「に、に、逃げるオオオオオオオツ!」

「あらあら、でっかい鎧が動いてます」

「走って!早く!」

俺はシスターの腕を掴んで、さらに猛スピードで廊下を駆ける。

「侵入者……侵入者八二名……排除スル」

「あれはなんですか?」

「殺人マシーンツスよ!」

「あらあら、初めて見ました」

「子供たちは!」

「大丈夫、メイヘレンさんに預けてきましたよ」

その時、すぐ後ろで、ブン！と風を切る音が聞こえた。俺は咄嗟にシスターと一緒に地面に屈みこんだ。次の瞬間。

さっきまで二人の上半身のあった場所を、鉄人の鉞の一閃が凄まじい速度で通過した。

それはドカン！と壁にめり込み、大きな亀裂を作る。

天井からはその振動でパラパラと何かの破片が降ってきた。

「あ、あ……あぶねえ！」

「はあ、危機一髪でしたね……」

何だってこの人はこんなに落ち着いてるんだ？

「立って！」

俺は急いでシスターを引き起こすと、また走りだした。

「くそ！」

さっきは運良くかわせたが、次もできるとは限らない。

俺は不死身だからいいんだが、シスターは……

くそ！

この廊下、こんなに長かったか？

出口、出口はどこだ！？

俺は一心不乱にシスターの手を掴んだまま走り続ける。

すぐ後ろに、再びガシャンガシャンという機械音が迫ってきた。

その時。

松明の光が揺らめいているのが見えた。

あれは……プルミエルだ！

「プルミエルッ！」

「あ、戻ってきた」

「魔法、魔法を頼むッ！超強いやつを！」

「はぁ？」

プルミエルは怪訝そうな声を出したが、俺の後ろに迫ってきている奴を見つけて、ニヤリと笑った。

「すごい、魔芯兵器だわ」

「超危険な殺人マシンだ！」

「うーん、勿体無いなあ……」

こ、この娘は……

「いいから、やれ！」

「うるさいわねえ、分かってるって」

プルミエルが口の中で呪文を唱えて、指先をこちらに向ける。俺とシスターは巻き添えを喰わないように、プルミエルの後ろへ飛び込んだ。

「我は求める、万物を灰にする獄炎の砲撃！」

彼女の叫びとともに、小さい太陽のような火球が飛び出した！

それはまっすぐ鉄人に向かって飛んでいき、その頭部にドカンとクリーンヒットする。

鉄の巨体が大きいのけぞって……そして、ゆっくりと仰向けに倒れた。

「……やった！おおっ、やったぜ！」

「プリミイちゃん、すごいですう〜」

「うひょーい、ざまあ見る！ポンコツめ！」

俄然テンションが上がってきたぜ！

まあ、俺は何もしてないんだが、とにかくめでたい。

だが、俺達の浮かれっぷりとは逆に、プルミエルの表情は固かった。

「うーん……けっこう頑丈だわ」

おおっと、イヤな予感！

すると、案の定だ。

倒れていた鉄人の体がむっくりと起き上がった。

点滅する目が、再びこちらを見る。

「侵入者ニヨル攻撃……被害……無シ」

余裕ぶりやがって！

だが、それは虚勢ではなさそうだ。

煙の上がっている頭部は、少し焦げ跡がついてはいるが、傷はおろか、へこんだ様子も無い。

「よし、逃げよう。それが良いと思うぞ、俺は」

「そうですね〜、そうしましょう〜」

「うーん、それしかないわね」

意見がまとまったところで、俺達三人は一斉に走り出した。

「でも、どうしましょう〜？これを下の階まで連れて行ってしまおうとパニックになりますよ〜」

「それは確かにそうツスね……」

「もー、困ったわね。誰がアイツを起動させたの？」

「……お、俺だ。スマン」

「もう」

プルミエルが走りながら溜息をつく、という器用なことをする。

俺の心肺機能はもはや限界寸前なんだが、シスターもプルミエルも涼しい顔で走っている。

この世界の女性は本当にタフだ。

「アレをするかなー……」

「おおっ！さては切り札があるんだな！？人が悪いぜ！」

「まずはここを出てからね」

そうこう言っているうちに、鉄の扉が見えた。

あれをくぐれば、塔の中心部、あの吹き抜けの螺旋階段に出る。

だが、大丈夫か？

一抹の不安がよぎった。

すぐ階下は観光名所だ。

シスターの言う通り、あの殺戮マシンを人混みの中に連れていくのはマズいんじゃないか？

俺の逡巡を、プルミエルの声が遮る。

「とりあえず出るわよ！とう！」

「はいく、えい！」

「でりゃー！」

俺達は、順に扉から飛び出した。

すぐ後ろに迫っていた鉄人は扉に身体が合わず、ドカン！という音を立てて壁に激突した。

塔全体が揺れたような、超特大の衝突音だ。俺は慌てて鉄の扉を閉めた。

「おやおや、何を連れてきたんだ？」

驚いた表情のメイヘレンは、階段に腰掛けて、二人の子供を膝にのせていた。

意外と、女性らしいところもあるんだな……なんて感慨に浸っている場合ではない。

扉の向こうで、ガドン！ガドン！と壁を激しく打ちつける音が聞こえてくる。

鉄人が、力尽くで壁をぶっ壊そうとしているんだろう。

「何だ？」

「さ、さ、殺人マシンだ……狂気のマシンだ……」

俺は息も絶え絶えに解説するが、メイヘレンは首をかしげた。

「よく分からないな」

「魔芯兵器よ」

ブルミエルがかわりに解説してくれた。

「それも単純な土器兵でなく、鉄甲兵」

「おお……それは興味深いな」

「私もそうなの。でも、ご覧の通り、捕獲の余地は無さそうね」

さらにガドン！ガドン！という音が強くなる。

おおっと、まずい！壁にひびが入ってきたぞ！

「プ、プルミエル……そろそろヤバいぞ」
「見れば分かるっての。んで、メイヘレン。『相反魔法』を使いましょう」

メイヘレンはその言葉に、ハツとする。

「おいおい、一発勝負で？無茶を言うな」
「相手は超頑丈なの。まさにメタルよ。メタル・ゴッドよ」
「詠唱のタイミングがずれるとお互いにただでは済まないぞ」
「でも、放っておけないでしょ」
「うっむ……」

メイヘレンが低く唸って、天を仰ぐ。
よほど重大な決断を迫られてるらしい。

「大丈夫、できるって。私達、そんじゃそこらの魔道師じゃないんだから」
「……わかった。そのかわり、タイミングは私に合わせろよ」
「よし、そんじゃ、やるわよ」

二人は俺達に離れるように指示した。
階下の野次馬たちも、何が起きているのかと近づいてくる。

「おい、何が始まるんだ？」
「あゝ、近づいちゃダメですよ」
「あそこ、立ち入り禁止区域よ。どうしたの？」
「おお、何かアトラクションかな？」
「駄目です」

階段を上ろうとする野次馬たちを、シスターと子供たちが両手を広

げて押しとどめる。

俺も一緒に野次馬たちを階下に押しつけながら、シスターに尋ねた。

「何が始まるんです？」

「『相反魔法』を使っんです」

「何ですか？それ」

「属性の異なる精霊魔法を空間で衝突させると、凄まじい威力になるんです。ヘタに近付くと粉々です」

「ワーオ……」

俺は二人の魔道師を見上げる。

扉の前に立った二人は、いつになく真剣な表情をしていた。

「聞け、アグネイ。汝、太陽の子……」

「聞け、レイハープ。汝、氷海の主……」

二人が、あるうことが手をつないで、同時に詠唱を始める。

その瞬間、空気がピン、と張り詰めたようだった。

騒々しかった観衆もこのただならぬ気配を感じて、全員がぴたりと声を静めた。

「……その力の顕れるところに我あり、我が心の求めるところに汝あり……」

「……その身を沈めたるは無明なる深淵。されど我は見る、汝の雄々しき偉容……」

おっと、いつもより相当長いぞ。

二人とも、かなり気合が入っているようだった。額には汗が浮かんでいる。

しかし、扉の向こうの鉄人は待ったなしだった。

ひとときわ大きい衝突音とともに、鉄の扉が吹っ飛ぶ！
そして、その奥の間から、明滅する目が覗いた。

「シ、侵入者……多数……殲滅……」

「ヤバいぞ……くそっ……」

「あ、ケンイチさん〜！」

俺は二人のもとへと駆けだす。

いざとなれば、時間稼ぎの盾になるつもりだったが
だが

「ッ、ツイン！エクスプロード！！」

二人が同時に叫び、そのつないだ手を鉄人に向けて突き出す。

その瞬間。

世界が

真っ白になった

勇者の証明

目が眩むほどの閃光！

脳髓が揺すぶられるほどの轟音！

それは俺の脳裏に世界的な核戦争を想起させるほどのインパクトを
持っていた。アルマゲドン

「…………おお…………！」

俺は激しい眩暈を感じて、壁に手をつく。

不死身とはいえ、こいつはキツイ。

だが、意識はすぐに現実世界に引き戻された。

強力な魔法の反動だろう。

美女二人が宙に吹き飛ばされている！

それを見ては、おちおち意識朦朧とはしてられない。

「おあ、ヤバいッ…………！」

この吹き抜けは四階分の高さがある。

下まで落ちたら、もちろん無事では済まないだろう。

「うおおおっ…………！」

俺は彼女達を追って、慌てて宙へ身を躍らせた。

「プルミエルッ！メイヘレンッ！」

名前を叫ぶと、二人ともこちらに気がついた。

「ケンイチ？」

「手を伸ばせっ！」

俺は宙を泳ぐように、バタバタ手を動かしながら二人に近づいていた。

二人も、こちらに手を伸ばす。

俺は目一杯、手を伸ばして……伸ばして……

……届いた！

「うおおおおっ！！！」

固そうな床はもう間近に迫っている。

俺は空中で急いで二人を引き寄せて、身体を入れ替えた。

背中を丸めて、胸に抱いた二人にはできるだけ衝撃が少ないようにする。

そして、着陸。

というか、墜落。

ズドン！という衝突音が、尖塔の吹き抜けに大きく響いた。

「ぐへえ！」

背骨を圧迫されて、肺の空気が押し出される。

それで思わず情けない声が出てしまった。

だが、両手に花は悪くない気分だ。

あ……いい匂い……っと、それどころじゃねえ。

「無事か、二人とも」

「っ……無事よ。すっげえ疲れてるけど」
「右に同じく」

俺はほっとした。

「間に合ってよかった……」

「ああ、助かったよ。で、いつまで私達を抱きしめているつもりかな？」

「さっさと離しなさいよー、エロスボーイ。死ぬわよ」

「ええっ!?!」

おおっと！これも不純なボディタッチ？

勇者タイムは……

『45:12, 11, 10, 09……』

うおお……凄まじいスピードで減っていく！

俺は慌てて手を離し、米軍特殊部隊のように素早くゴロゴロと転がって二人と距離をとった。

「うつつ、俺、人命救助したのに!」

「邪念が発生した時点でアウトよ。どーせ『ワオ、両手に花だぜイエイ』とでも思ってたんでしょ」

「うつつっ!」

あながち間違っただけと悔しい！

っと、何か忘れてるような……

「そっだ！あの鉄人はどうなった?」

「さーね、あれで吹っ飛んでなかったら打つ手無しだわ」

おっ、だがその顔は自信ありと見た！

上からシスター・メアリの声が降ってくる。

「三人とも無事ですかっつ」

「大丈夫っス！」

俺は上に向かって叫ぶ。

「マシーンはどうなりました？」

「木端微塵、粉々ですよ」

「うむ、初めてにしては上々だったな」

「そうね。もうしばらくはやりたくないけど」

「私だってそうさ」

互いに憎まれ口を叩くが、うつすらと微笑んでいるところを見るとまんざらでもないようだ。

素直じゃないぜ、二人とも。

俺は微笑ましくその様子を見ていたが、周囲では別の問題が発生していた。

つまり、野次馬だ。

「おい、さっきの爆発、何だったんだ？」

「上で何があったの？」

気がつく俺達は観光客に取り囲まれて、怪訝な、そして好奇心に満ちた視線を送られていた。

「あの子、上から落ちてきて無事だったわよ……」

「うほっ、あの子、可愛い」

「あっちの女のほうがソソるぜ、へへ……」

こらこらっ、変な声も混じってるぞ！

しかし、ともかく長居は無用っぽいな。

目的は果たしたんだし、これ以上の厄介事はご免だ。

「ブルミエル、どうしよう？」

「早く出ましょ。メイヘレン、適当な言い訳考えて」

「おいおい、面倒事を押し付けるなよ」

言いながらも、メイヘレンは両手をあげて注目を集めた。

「皆様方、今の爆発は老朽化するこの塔の修繕作業の一環です。火薬を使って、古い大理石を剥がしていたんです。したがって、何の心配もありませんよ。引き続き観光をお楽しみください」

「しかし、何で落ちてきたんだ？」

「足を踏み外したんですよ。三人そろって」

な、なんて言い訳だッ！

超強引！

しかし、全員がフンフンと頷いて聞いている。

おいおい、この世界の人々、超素直じゃん！

「それなら合点がいくな……」

「よかったわ。私、てつきり魔法戦争でも始まったのかと……」

「ははははは、そんなバカな」

そこかしこで安堵のため息が漏れる。

メイヘレンは自慢げにこっちにウインクをして、親指を立てた。

だが、言つとくけど、あまり上手い言い訳じゃなかったぞ。

俺達はそそくさと魔法塔を後にした。

もうあんな物騒な建物はまっぴらだ。

不死身でなかったら、と思うだけでぞつとする。

「本当にありがとございました。ほらほら、ロビンもニナシスもお姉さんとお兄さんにありがとを言わないと駄目ですよ」

「あ、ありがと」

「ありがと」

シスターが深々と頭を下げる。

続いて二人の子供が照れくさそうに、そしてどこかばつが悪そうにもじもじしながら俺達に礼を言った。

「どういたしまして。もうシスターを困らせちゃダメよ」

プルミエルが二人の頭をワシワシと撫でながら念を押す。

うーむ、その優しさの半分ほどを俺にも分けてくれないだろうか。

ふわあふわあふわあふわあ〜ん（妄想の音）

『ケンイチ、女の子の体に触れられないなんて可哀想……………』

『しかたないさ。これも勇者として召喚された者の悲しい運命……………』
デステネイ

『ああっ、何という残酷な勇気なの！そして美しすぎる決意……………せめて私から熱いキスを……………』

『オーウ、モン・シエリ……………ジユテーム』

うおお……『夢のまた夢』とはこのことだ。

考えるだけ空しくなるから、この辺でやめとこう。

と、ここで俺はクイクイとブレザーの裾を引っ張られるのを感じた。

「?」

振り返ると、あの女の子、ニナシスだった。

少女は純真無垢な光を放つ、そのあどけない瞳で俺をじっと見上げている。

うつつ、やめろお、その光は俺には強すぎる……!

つい今しがたの不純な妄想を見透かされてるようで、俺は狼狽した。

「二、ニナシスちゃん……だよな? な、な、何だい?」

「おにーちゃん、ゆうしゃなの?」

「おっと、いきなり核心をついてきたな」

「かくしん?」

「いや、なんでもない。うん、そうだよ、お兄ちゃんは勇者なんだ」

うつつ、相変わらず自分で言うのと痛々しいこと、この上ない。

だが、事実だ。

「別の世界から来た勇者なんだ。すごいだろ」

「すごい!」

「うつつ……泣けてくるほど素直でいい子だね。飴ちゃんをあげよ

う

「わーい!」

「ニナシス、簡単に信じるなよなー」

振り向くと、少年がむくれっ面でこっちを睨んでいた。

「ロビンにいちゃん……」

「勇者なんているわけないだろっ」

「うっ……でも……」

ニナシスが何かを訴える目でこちらを見つめてくる。

勿論、何を言わんとしているかは分かっている。

俺は意地でもサンタの存在を子供に信じさせる父親の気持ちになっ
た。

「ロビン。信じられないのも無理はないだろう。だが、勇者はいる
んだ」

「お前がそうだっていうのかっ」

「そうだよ」

「証拠を見せろっ」

「うーん、困っちゃったな……」

ロビンは難しい年頃の子供にありがちな、大人への不信感をむき出
しにしてくる。

ニナシスのほうを見ると、彼女はまだ懇願するような眼差しをこち
らに向けていた。

その一切の疑念の無い、無垢な瞳の輝きと叫びたならどうだ。

さながら殉教者のようだ。

ありがとうニナシス、その期待には応えたいぜ。

俺は周囲を見回す。

何か使えるものはないか？

その時、話しこんでいるブルミエル達の向こうの広場で、大道芸人
がナイフのジャグリングをしているのが見えた。

おお、そうだ。あれで俺が不死身だということを見せてやろう。

「ちょっと待ってるよ」

そう言つて、通りへ出た途端

「うおおっ！危ねえっ！」

「へ？」

叫び声に、振り返る。

馬車だった。

勢いよく飛び出してきたそれに、俺は為す術も無く轢かれた。

ドン！と吹っ飛ばされ……

馬どもに踏みつけられ……

車輪に引つかかったまま少しの距離を引きずられた。

「きやあああああつ！！人よッ！人が轢かれたわッ！！」

広場に響き渡る悲鳴！

「大丈夫かッ！？」

「おい、早く医者を呼んでこいッ！」

「お、お、俺は悪くねえ！こ、こ、こいつがいきなり飛び出してきたんでさあ！チクシヨウ、何でこんなことに……！」

平和だった広場が、阿鼻叫喚、混乱の坩堝と化す。

うつつ、そんなつもりじゃなかったのに！

俺は慌てて起き上った。

「皆さん、大丈夫です。慌てないように。俺は無事です。まさに健康な男子そのもの」

「ひっ」

両手を広げて健在ぶりをアピールする俺に、軽く悲鳴が上がった。

「ほ、本当に大丈夫なのか……」

「ピンピンしてますよ。すごぶる快調です」

心配して、というよりも気味悪そうに尋ねてくる御者に、俺は笑顔を見せる。

「ほら、どこも怪我してないでしょ」

「そ、そうか……」

「はい。ご迷惑をおかけしました。では！」

「お、おう……」

呆気にとられている御者と観衆を置き去りにして、俺は小走りで子供たちのところへ戻る。

「見てた？俺の不死身っぷり」

「う、うん……」

「す、すげー……」

二人はちょっと引き気味だが、目の前で人が馬車にはねられたという事がトラウマにならないのを祈るばかりだ。

「本当に勇者だったんだ……」

「そうだよ。だが、よい子は真似しちゃダメだ」

「なーにが、『よい子は真似しちゃダメだ』よっ」

不意に後ろからゲンコツで後頭部を殴られる。

ブルミエルだった。

「また目立つこととしてっ、このとんちんかんっ。じっとしてられないの?」

「うつつ、最初はもっと穏便に済ませるつもりだったんだ。信じてくれ」

「もう」

「まあ、責めるなよプルミエル。勇者というのは目立ってしまう運命にあるものさ」

珍しくメイヘレンが助け船を出してくれる。

「まったく……ま、いーわ。ああ、あと、今日はシスターの孤児院で一泊することになったから」

「え、そうなの?別に俺はいいけど……」

「さっき二人してでかい魔法を使ったから術戦車を運転するのが面倒なの」

「ああ、なるほどね」

「プリミイちゃんと久しぶりに一緒にお風呂入っちゃいますよ」

「ふ、風呂……」

俺の脳ミソはシスターの放ったその単語に素早く反応して、再び甘い妄想に取り掛かるうとする。

しかし、ブレザーの裾を掴んだままのニナシスがその作業を喰いとめた。

「うちのおふろ、おっきいよ」

「あ、そうなの?」

「おにーちゃん、ロビンにいちゃんといっしょにはいねばいいよ」

何という、あどけない瞳!

「そつだ一緒に入ろう、にいちゃん」

ロビンも乗り気だ。

まあ、たまにはこつうのも良いかな。

将来の選択肢に、『保父』も増えそつだ。

勇者・アイデンティティ

畑仕事に夢中になっていた俺が顔を上げると、周囲はもうすっかり夕暮れになっていた。

小高い丘の上にあるこの孤児院からは、港町が一望できる。

規則正しく並んでいる屋根の群れが夕陽の鮮烈な朱色を受けて燃えるように輝いている。

それは俺にメイベル・ルーズ号の甲板で見た日暮れ前の美しい大海原を連想させた。

その中にそびえ立つ、不吉な魔法塔。

ここから見ても、その尖塔は強烈な存在感を放っていて、まるで落ちてくる夕陽を串刺しにしようとしているかのようにも見えた。

あんなモノを造った魔道師はやっぱり悪趣味だと思う。

「ケンイチさ〜ん、お疲れ様です〜」

呼ばれた声に振り返ると、十人ほどの子供たちに囲まれたシスターがこちらへ向かって歩いてくるのが見えた。

この人はいつも幸せそうに微笑んでいるものだから、俺までつられて笑顔になってしまう。

子供たちも皆、笑顔だった。

「すみません〜、お洗濯から大工仕事、果ては草むしりまでしてもらって〜」

「いやいや、そんな、俺は勇者タイムを稼がせてもらってるだけっス」

「勇者さんって大変ですね〜、頭が下がります〜」

シスターがぺこりと頭を下げると、子供たちもそろって真似をする。

「あー、何か照れくさいツスね……俺、自分の為にやってるだけですよ」

「いいえ、あなたは立派な勇者さんです。あ、そうだと、お風呂が沸いてますから夕食の前にどうぞ」

「行こう、にいちゃん」

ロビンが待ちきれないといった様子で俺の手を引っ張る。

その他の男の子達も加わって、風呂場へと俺の背中を押していった。

孤児院自体は古い教会をあり合わせの木材で改修しただけの非常に質素な造りなのにも関わらず、風呂だけはニナシスが言っていた通り、本当に広かった。

家の近所にあつた公衆浴場と同じくらいの広さがある。

俺は全部で六人いる子供たちの身体を丹念に洗ってやった後、全員で湯に浸かった。

ちなみに最年長がロビン。次いで、ドリー、ラス、アール、エムス、最年少はウィルで四歳だ。

「ぶはー、極楽極楽……」

「じくらくってなに？」

好奇心旺盛なエムスが聞いてくる。

「お？うーん、天国……？まあ、とてもいいところにいる気持ちっ

てことさ」

「ケンイチにーちゃんは彼女いるの？」

「おおっと、おマセさんだな、ラス。残念ながら、いない。湿っぽくなるから、この話はこれ以上は聞くんじゃないぞ」

「シスター・メアリも彼氏いないよ」

「ドリー、詳しく聴かせてもらおうか？」

「シスターはずーっと、彼氏いないんだって。でも、欲しいことは欲しいって言った」

「ぼ、ぼく、ケンイチにーちゃんがかれしになればいいとおもっ」

内気なアールが大胆な発言をした。

だが、ロビンが立ち上がってそれを否定する。

「ダメだー、みんな。ケンイチにーちゃんは彼女がもう二人もいるぞー」

「……あの二人は……彼女ではない」

「え？」

「そして、おそらく永遠にならない……」

「ケンイチにーちゃん、どうしてそんな悲しそうな顔をするの」

子供たちが心配そうに俺の顔を覗きこんできた。

おっと、いかんいかん。

「いや、なんでもないよ。何の話だったっけ？」

「へへ、ケンイチにーちゃん、いいこと教えてあげるよ」

「ん？」

「シスター・メアリってさ、普段は分からないけど、すっごくおっぱい大きいんだよ」

「な、なんだと……OPPAI……？おっきい……？」

「わあ！ケンイチにいちゃんが鼻血出してるぞっ」

全員が、手を叩いて喜んだ。

「どーせ、エロイことでも考えてたんでしょ」
「ち、ちがうつ！風呂でのぼせたただけだっ」

鼻にティッシュを詰めたまま反論しても空しいだけだ。
しかし、女達の湯上がりの姿というのはどうしてこども艶めかしいのだろう。

綺麗な金髪をわしわしとタオルで拭くプルミエル。

それとは対照的に、メイヘレンはタオルでぎゅっと押しつけるようにして黒髪を拭いていた。

二人とも、普段は透き通るように白い肌が、お湯に入ってほんのり赤みが差している。

俺も思わず前のめりだ。

「ところで、二人とも一緒に入ったのかい？」

「私は後でいいと言っただが……シスターに押し切られてね」

「せっかく広いんですから、皆で入ったほうが楽しいですよ。お互いをよく知る上で裸のお付き合いは大切ですよ」

台所からシスターの声が聞こえてくる。

「昔から変わらないわねー、そういつところ……」

プルミエルがぼそつと言った。

「ん？」

「何でもない」

「さう、みんな席に着きましたか？」

シスターが大きな寸胴鍋を抱えて出てきた。

「今日は特製シチューですよ」

彼女は子供たちと一緒にそれを手際よくそれぞれの皿に取り分けていく。

目の前に置かれたシチュー皿から立ちのぼってくる香りに、俺の腹の虫が雄叫びに似た鳴き声を上げる。

「おおっ、美味そう！」

「はい、お代わりもありますよ」。では、まず、神様に祈ってからいただきますしよ～ね」

女の子四人、男の子六人、計十人の子供達が席についたところで、両手を合わせ、黙祷を捧げる。

驚いたことに、四歳児のウィルでさえ皆と同じようにしていた。俺もそれに合わせて、神に祈りをささげてみる。

（今日はサンキュー、神様。明日もヨロシク頼むよ）

我ながらなんて不遜なんだと思ったが、俺の家は仏教徒だからしよ
うがない。

そもそも、この世界はどんな神様を信仰しているんだろう？

メイヘレンが魔法は精霊の力を使うなんて言ってたが、それとは別
のものがあるってことかな？

しばらくの間、静寂の時間が流れた。

「はい、では、いただきましょう」

「……いただきます！」「」「」

そこから再び静寂が訪れた。

全員が黙々と食事に取り掛かっているからだ。

何せ、美味しい料理を前にして雑談なんてものほどマズイものは無い。カチャカチャとスプーンが食器に当たる音だけが場を支配していた。しばらくして、全員の腹がある程度満たされると、少しずつ会話が生まれ出す。

「……ね、プルミエルねーちゃんは前にここにいたの？」

「んー？ヒ・ミ・ツ」

「プリミイちゃんはこんなに可愛らしいですけど、貴族のお嬢様ですよ」

「すげー！貴族だつて！」

「こつちのメイヘレンさんもそうですよ」

「すげー！超すげー！」

子供つてのは実に表情が豊かだ。

おまけにその反応がとても素直で純粋なので、俺もプルミエルもメイヘレンも思わず笑顔になってしまう。

俺にもこんな時代があったんだろうか？

いや、あまり自信が無い。

「ねー、シスター、さっきケンイチにーちゃんが彼氏になりたいって言ってたよー」

「ぶっ！」

「あらあら」

な、な、なんてキラーパスを放り込んできやがるんだ！
もういいよ！さっきの無し！子供なんて嫌いだ！

「ま、ケンイチさんつたら……」

「ち、違うんです、これには深い理由が……お、俺はハメられたんだッ……！小さい悪魔たちに……」

我ながら意味不明なことを喚いて、何とか取り繕おうとする。

その時、横目でちらつと二人の美魔女の反応を窺ってみるが、二人は全く気にもしていない様子でスープを啜っていた。
これはこれで淋しい。

「でも私、ケンイチさんならいいですよ。彼氏になってくれますか？」

「え？」

シスターはクスツと笑う。

な、なんたる予想外の反応！

「ビュービュー！つきあっちゃえよ！ケンイチにーちゃん、やっちやえよ！」

「ぼ、ぼくも、それがいいとおもうな……」

オマセな子供達が口々にはやし立てる。

「うつつ！お、俺、パトロール（？）に行つてきます！」

照れ臭さとしつ恥ずかしさとその場に居づらくなった俺は、慌て

て外へ飛び出した。

外は完全に夜になっていた。

見下ろすパルミネの港町の夜景は、見上げる星空にも負けないほど美しく輝いている。

こんな場所で育った子供達は、間違いなく感受性が豊かになるだろう。

だからあんなに無垢で、純粹なんだ。

心地良い夜の風が、俺の頬を撫でて、吹き抜けていく。リリリ、という虫の声が聞こえる。

そういえば、この世界で初めての夜も、森の中から夜空を見上げてこんな気分になったっけ。

あの時も、星空が綺麗で、虫が鳴いていて……

（本当に平和だ……）

溜息が出た。

いや、平和なのはいいことさ。

（だが、こんな世界に勇者なんて必要なのか……？）

一人になると、いつも浮かんでくるのはそんな疑問だ。

俺がいなくても、この世界は順調に回っていくだろう。

少なくとも今まで、勇者という存在が必要になるほどの困難に遭遇したことは無い。

炊事、洗濯、皿洗い、時計のネジ巻き、靴紐結び、甲板掃除……

巨大魚の一件だって、俺と決闘なんぞしなければリシエルが海に落

ちることも無かっただろう。

迷子捜しだつて、二人の魔法使いがいればあつという間に解決していた。

そして、この世界での自分の存在感があやふやになってくると、かわりにもとの世界への郷愁の念が心を締めつけてくる。

俺の家族、友達、学校、担任のザビエル、佐野さん、部活……

何もかもが懐かしい。

なあ、星空よ、答えてくれ……

俺はこの世界に必要な存在なのか……？

「ケンイチさん」

「おおつと？」

慌てて振りかえると、シスター・メアリがいつもと同じ優しい微笑みを浮かべて立っていた。

「すみません、調子に乗って嫌な思いをさせてしまいましたね」

「あ、いえ！とんでもないツス！俺としてはむしろ身に余る光栄というか、なんとというか……」

「……星、綺麗でしょう？」

「あ、はい、そうツスね……」

俺とシスターは二人でしばらく、星を見上げていた。
やがて、ぽつりとシスターが呟く。

「なにか、迷ってますね？」

「へ？」

「私、そういうのには敏感なんですよ」

「……」

凶星だった。

シスターは空を見上げたまま、ゆっくりと言い聞かせるように話した。

「もちろん、無理には聞かないですよ。でも、話して楽になることもあるかも知れませんよ」

「……勇者がこの世界に必要なのか、考えてたんす」

この際だ。

誰かに話してみるのも良いだろう。

俺はシスターの好意に甘えることにした。

「この世界は今のところ平和じゃないですか。わざわざ異世界から勇者が来て、何かをする必要は無いんじゃないかと思っんです。俺は不死身っていうだけで、なんの力も持ってないし」

「……」

「誰が何のために俺をこの世界に呼んだんですかね……ははは……」

俺は自嘲気味に笑って見せたが、シスターは何も答えずにじっと俺の眼を見つめてくる。

その、真剣な眼差しは俺の中のギリギリで堰き止められている感情を揺さぶるのに十分だった。

くそ……考えないようになってきたのに……人前では弱みを見せたくなかったのに……しかし、俺は自分を抑えきれなくなって、叫んだ。

「どうして俺なんだっ……!!」

ああ……

言っちまった……

一度、感情のタガが外れると、もうダメだ。

目から熱いものが溢れ出してきて、止まらない。

「あつちの世界には俺の家族がいて、友達がいて、好きな人がいて……全部あつたのに！」

「……」
「素敵な学園生活を送る予定だったし、修学旅行だって楽しみにしてたんだ！卒業したら大学に行ってキャンパスライフを楽しむかもしれない！綺麗な嫁さんをもらって、子供は三人くらい欲しくて……！」

「全部叶わないかもしれないけど、俺なりの人生があつたんだ……ちくしょう……！」

「ケンイチさん」

俺はたまりかねて、両手で顔を覆ってしまふ。

シスターはそんな風に惨めったらしく泣き喚く俺を、優しく抱きよせてくれた。

「大丈夫。大丈夫ですよ、ケンイチさん。きっと帰る方法は見つかります」

「でも、帰れないかもしれない……」

「勇者が諦めてはいけませんよ」

「シスター……俺は……勇者なんかじゃないんです……ただの高校生なんですよ……」

「いいえ。『勇者ケンイチ』さんですよ」

シスターのいつものへ口へ口した言葉遣いは完全に影を潜めている。俺は戸惑った。

当の本人が自信の持てないことを、何故この人はこんなに確信を持つて言えるんだろう？

「……？」

「この世界でも、もとの世界でも、ケンイチさんはケンイチさんです。すごく勇気と真心のある人」

「シスター、そんな……」

「聞いてください。ロビンとニナシスはケンイチさんのおかげで無事でした。私も危ないところを助けてもらいました。プリミィちゃんとメイヘレンさんが吹き飛ばされた時も、迷わず身体を張って助けに行きましたよね。お掃除も釘打ちも畑のお手入れもすごく一生懸命やってくれました」

「……」

「私、いつも子供たちに言ってます。『間違っていると思ったことはしてはいけません。正しいと思うことはしなければいけません』」

……言葉にすると簡単だけど、実際にするのは難しいことです。でも、私、ケンイチさんはそれができていると思います。凄いことですよ」

「……」

「私ね、ケンイチさんに会えてよかった。あなたがこの世界に来てくれて本当によかった、って思っています。今まであなたに助けられた人たちも絶対にそう思っていますよ」

「う、ううっ！」

……ダメだ。涙が止まらねえや。

こんなの格好悪い。

大の男が頭を撫でられながら泣きっぱなしだなんて、赤ん坊みたいだ。

……だが、シスターの言葉は俺の胸にずんと響いた。

もし、誰か一人でも……

たった一人でも、俺を必要としてくれるなら……

この世界に来た甲斐はある。

迷いが、消えた気がした。

女々しいホームシックは今日で終わりだ。

俺は、『異世界で勇者やってたんだぜ』と胸を張ってもこの世界に帰れるように、これからの一時間一時間を大切に生きようと思った。

セロリスト

早朝。

裁縫仕事を終えて外に出ると、世界はまだつつすらと霧に包まれていた。

静かだ。

しかし、見下ろす港町では早い時間でも、もう活発に動き回っている人たちがいる。

まあ、漁師の朝は早いもんだな。

「ふあゝあ……」

大きなアクビを一つ。

徹夜明けの肺に入ってくる新鮮な空気は、この世のものとは思われないくらい清浄で、美味しい。

「んゝッ……！」

身体を伸ばす。

ああ、気持ち良い！

『勇者タイム』のルールの中で夜を生き延びるといのは過酷なことだが、もう俺の体は『四十分睡眠』を極めたと言っているだろう。勿論、誤差もあるが、それでも四、五分程度だ。

睡眠中の落命のリスクは軽減されつつある。

それだけで、俺は強い達成感を感じていた。

水平線から少しずつ輝きを増してくる光が、それを代弁してくれているようだった。

(やっていけそうな気がしてきたぞ……)

この世界に来た時は、『勇者タイム』のルールに底知れない不安感と絶望を抱いたものだが、もう、そうすることが当たり前のような感覚になりつつある。

慣れっつのは恐ろしいものだ。

しかし、生物というのは、常に生存のために進化の道を模索する。つまり俺は進化したのだ。勇者に。

言うなれば『勇者体質』へと！

(ぶふっ、なんだよ、勇者体質って……)

俺が思わず一人笑いすると、後ろでドアが開く音が聞こえた。

「おはよ……」

「おはよう、プルミエル。ずいぶん早いな」

「そうねー、目が覚めちゃったからね……」

とは言いつつ、眠そうだ。

「寝直せば？」

「朝寝は主義に反するの」

プルミエルは井戸の水を汲み、タオルをそれに浸して、顔を「ぐし」しと拭いた。

「……昨日はありがとう、プルミエル」

「んー……？」

彼女はシスターに拉致られて、一緒の部屋で寝ていたが、真夜中でも四十分おきに俺を起こしに来てくれていたのだ。

『健気』というのも『律儀』というのも彼女には当てはまらない気はするが、俺を気遣ってくれていることは良く分かったので、思わず感激してしまった。

待てよ……

彼女、ひょっとして俺のこと……

なんていう甘やかな幻想や妄想も、長い夜を過ごす暇つぶしになってくれた。

「別に礼を言う必要無いでしょ。自分で起きてたんだから」

「でも、いちいち俺を心配して毎度毎度、見に来てくれたじゃないか」

「あなたが朝になって冷たくなってたら、純真無垢な子供たちにとって一生消えないトラウマになりかねないでしょ」

「ま、たしかに……でも、ありがとう。礼は言わせてくれ」

「どーいたしまして」

面倒くさそうに、お辞儀を返してくるツンデレ少女。

うぬぬ……そんな素直じゃないところも愛おしいぜっ！

「ま、誰かさんが勇者タイムを自力で稼げるようになった分、これからは良く眠れそうね」

「ああ、安眠してくれていい」

びっと親指を立てて見せると、プルミエルも同じように返してくれた。

普段はあまりにもそっけない彼女だが、たまにこういう仕草をしてくれると、少しでも心が通い合っているような気がしてなんだか嬉しくなる。

俺とプルミエル。
朝、二人っきりの世界。

「なんだか、久しぶりな気がするよ」

「何が」

「こうして落ち着いて君と話すのがさ」

「キモい」

「うつつ……き、キモくないっ!」

「いつだって話せたわ。あなたが一人で落ち着いてなかっただけで」

まあ、たしかに言われてみればそうかも。

「俺も生き延びるのに必死だったからなあ……」

「まあ、これからも頑張んなさい」

「ああ」

「うん」

しばらく無言になる。

不思議と気まずさはない。

次第に周囲が明るくなり始めた。

朝の霧が少しずつ薄らいでいって、世界の輪郭が明瞭になっていくのを二人で眺める。

とても清々しい気分だった。

「はー、なかなか悪くないわね。ここにいた時はあんまり早起しなかったから、こういう景色も見たこと無かったわ」

「そういえば、ここにいたんだっけ?」

「あー……」

プルミエルはしまった、という顔をした。

おっ、初めて見たぞ、そんな顔。

「不覚だわ……寝ぼけてたのかしら……？」

「でも、今は貴族だろ？養子にでも入ったのか？」

「まーね、そんなところ」

彼女は確かにメイベル・ルイス号に乗船していた貴族達と違って、お高くとまった感じがしない。

庶民派なのかな？とも思っていたが、養女であるなら納得の理由だ。

「もー、いいでしょ、この話は」

「まあ、話したくないなら聞かない」

「そうよ。それが礼儀よ」

彼女はそう言うと、すたすたと家の中へと入って行ってしまった。

朝食も全員がそろってからお祈りが始まった。

「いただきますしよー」

「「「いただきますーす！」「」」

目の前にはパンと山盛りのサラダと目玉焼き、それにトマトのスープ。

げ、サラダの中にはセロリが。

こいつは苦手だ。

多分、前世で何らかの因縁があったんだろう。
俺はそれをフォークでそつと皿の端によける。

「うへえ、セロリ。苦手だよ」

そう言ったのは、ドリーだった。
気持ちは分かるぞ！同志よ。

「ダメですよ、何でも好き嫌いなく食べなくちゃ」

「でも……」

「ほらほら、ケンイチお兄さんも好き嫌いしないでしょ？」

「へ？」

子供たちの視線が、一斉に俺に注がれる。

にっこりと微笑むシスターの瞳には何の悪意も無い。

きつと、本気で俺が好き嫌いしない人間だと信じているんだろう。
なんてこった……期待を裏切ることとはしたくない。

「そっ……そうだぞ、ロビン。好き嫌いはイケないな」

「(じゅっ)」

「セロリは美味しいよ。セロリ最高」

「(じゅっ)」

「うっつ！さ、さあ、セロリ食べちゃおう！あー、今日のセロリは
本当に美味そう。困っちゃうネ！」

俺は覚悟を決めて、セロリをかき集めていっぺんに口の中に放り込
んだ。

子供たちにも分かりやすいように、よく噛む。

口の中にセロリならではの苦みと香りと瑞々しさがいっぱい広がる
って、涙が出てきた。

「あー、美味しいッ！なんて美味しいんだッ！セロリはまさに野菜界の

跳ね馬(？)だネ……!!」

「すごいや!」

「あんなに泣きながら食べるなんて、ホントにセロリ好きなんだ!」
「ケンイチにーちゃんがああ言うなら、食べてみようかな……」

ドリーもおおずおおずとセロリを口に運び、意を決してぱくつとやる。

「う……」

「うつぶ、シャキシヤキして最高さ……そうだろ……ドリー」

「うん……そんな気がしてきた……」

よし!

俺の心のガッツポーズが炸裂したところで、頬杖をついたメイヘレ
ンの視線に気付く。

「君は安上がりでいいな。よし、そんなに好きなら、これから三食
セロリを用意しよう」

「な、なにっ……!!」

薄紅色の唇が意地悪く微笑んだ。

チクシヨウ!確信犯だな!

「それはそうと、プルミエル。食事が終わったら術戦車を取りに行
こう。ジャンたちが港の貸倉庫へ預けておいてくれたはずだ」

プルミエルはシャキシヤキ音を立ててセロリを頬張りながら、手を
挙げて肯定の意を表す。

「えー、プリミィねーちゃんとメイねーちゃんいつちゃうの?」

「ケンイチにーちゃんも?」

「ずっとここにいてよ！」

「こちらから、ダメですよ。三人とも、大事な用があるんですからね。」

全員がえーっという落胆の声を上げる。

うつつ、できれば俺もずっとここにいたいぜ！

「スマン、みんな。みんなのことは忘れないよ」

「また来てくれるよね！」

「……ああ」

こんなに胸の痛む嘘をついたのは初めてだった。

二人の魔法使いが港町へ向かった後、俺は勇者タイムを稼ぐべくベツドメイクをしたり、大掃除をしたりと、大忙しだった。

言うなれば、一宿一飯の恩義、最後のご奉公だ。

全てを終えたところで、俺は孤児院の前で風に吹かれながら二人が戻ってくるのを待っていた。

さわさわと木々が揺れて、なんてのどかなんだろう。

この後の『手錠プレイ』を考えると、ずっとここにいたくなる。

「お疲れ様です」

「ああ、シスター。こちらこそお世話になりました。あれ、子供たちには？」

「裏の林へピクニックですよ。男の子は虫捕り、女の子はお花摘み」
「そうですね」

「あまり子供たちに見つめられると別れ辛くなるでしょう？」

ああ、そういう気遣いをしてくれたのか……

「すいません」

「いいえ。頑張って御自分の世界に戻ってくださいね」

「はい……」

「そうだ、プリミイちゃんのお話をしましょうか」

「ええっ？なんで急に？」

「ケンイチさんにはお話しておいたほうが良いと思ひまして」

「はあ……」

シスターはやんわりと話し始めた。

「プリミイちゃんは子供の頃からすごく頭の良い子で、おまけに強い魔力を持っていました。御近所でも評判だったんですよ。でも、その噂を聞きつけて、ある日、先代のミスナガンの御当主であるグランゼル様が孤児院へいらっしゃったんです」

「グランゼル様はプリミイちゃんを見て、『有望だ。私がもらおう』と仰いました。あの方はお子様がいらっしゃらなかったため、自分の後継者になり得る者を各地でお探しになっておられたのです」

「でも、その為に課せられる試練は想像を絶する苦痛に満ちていると噂されていました。それを知っていたので、当時の院長であるマクミラン神父も私も、最初はお断りしました。だって、彼女はモノではないからです」

「すると、グランゼル様は『ならば、この孤児院を跡形も無く燃やす』と仰いました。あの冷たい瞳は今も忘れられません」

いつも微笑みを浮かべているシスターの柔和な顔が、不安に曇った。

「私たちは困ってしまいました。その時、プリミイちゃんはグランゼル様の前に進み出て、こう言いました」

「『私、養女になるわ。そのかわり、この孤児院に毎月、ミスマガンの名前で援助金を払って』」

「八歳ですよ、プリミイちゃん。皆が驚きました。でも、グランゼル様はそんなプリミイちゃんをとても気に入られて、そのまま連れて行ってしまいました。それから毎月、約束通りにこの孤児院宛てにお金が届くようになったんです」

「私、とても悲しかったし、落ち込みました……まるで、お金でプリミイちゃんを売ってしまったような気持ちになってしまったんです」

「でもプリミイちゃん、昨日アルヴァンの魔法塔へ走っている時に私に言ってくれたんです」

「『シスター、私、今すっごく面白い実験をしてるの。しばらく楽しめそうよ』」

「私……涙が出そうになりました。ああ、この子、まだ笑ってくれるんだ。ちゃんと人生を楽しめてるんだって……とつても嬉しかったです」

シスターはこつちを向いてにつこり微笑んだ。

「ケンイチさんのおかげですね。ありがとうございます」

「そ、そんな……」

俺は慌てて手を振った。

しかし、プルミエルにそんな過去があったとは……

すぐく壮大で、感動的なエピソードというわけではない。

でも、自分を顧みず、さりげなく他人を思いやったり、助けたりというのなかなか出来る事じゃない。

思えば、彼女は初めて出会った時からそうだった。

俺を化物から助けてくれたし、エステイ老師に引き合わせてくれたし、こうして旅にも付き合ってくれている。

「プルミエルのおかげで、今、俺は生きているようなもんなんですよ」

本当にそう思った。

だが、シスターは首を振って俺の手を握った。強く。

「いいえ。プリミイちゃんはあなたといるのが楽しいみたいですよ。あなたとの旅が、楽しいんです」

「そ、そう……なんですかね？」

「はい。ケンイチさん、これからもあの子をよろしくお願いします」

シスターが、また微笑む。

俺は強く頷いた。

振り向くと、港町からこちらへ向かって飛んでくる二つの光が見えた。

登場！SYS団

丘の上の孤児院がどんどん小さくなっていく。

（さらばだ、みんな。シスターと仲良くな……）

俺は万感の思いでそれを見つめながら、宙吊りになっていた。そう、いつものアレだ。手錠タイム。

今はやや速度を緩めにして、上昇している最中だった。

これから、術戦車『ブオナパルト』は猛スピードで空を疾走することになる。

さながら戦闘機並みのスピードで。

しかし、この緊張感はどうだ？

ジェットコースターの最初にガタンガタンと音を立てながら、頂点までゆっくりと昇っていく時のそれに似ている。

うう、久しぶりだから怖い！

「あはははは、勇者らしからぬ格好だな、ケンイチ」

高笑いとともに、美しい流線形をした、銀色のジェットスキーが浮上してくる。

メイヘレンの術戦車、『テトラクテュス』だ。（何という言い辛さ！）

燃え盛る炎を纏ったプルミエルの術戦車とは対照的に、それは青白い冷気を纏って宙に浮かんでいる。

「お気に召して光栄だ。これからもっとウケることになるぜ」

俺は精一杯の強がり言う。

「楽しみだな。では、先に行くよ」

メイヘレンがハンドルを捻ると、何も無い空間に突然、水しぶきが上がった。

それはキラキラと太陽の光の中で煌めきながら霧散し、虹を作る。

「ワーオ！すっげえ……！」

思わず感嘆の声を上げる俺をよそに、テトラクテュスは凄まじいスピードで空を疾走して行った。

その後ろ姿を眺めていると、前方でドン！という爆発音とブルルン！という排気音上がる。

おっと、来るぞ！

そして、ぐん！と手錠が引っ張られる。

来た……！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおっ……！」

この、肉体と魂を分離させるかのような風圧！

耳にはシュゴオオツ！という風を切る音しか聞こえない。

「うひあああああああああああああああああっ……！」

景色が後ろへすっ飛んでいく。

叩きつける風に為す術も無く、俺は身体をちんと伸ばして、なるだけ風の抵抗を受けないようにしていることしかできなかった。

やがて体の強張りが薄らいできたので、俺は立ち上がる。
おっと、まだ膝が笑ってらあ。

周囲は密林のように、鬱蒼と背の高い木々が生い茂っていた。
そついや、初めてこの世界に来た時も密林の中だったな。
よくよく森の中で迷子になる宿命らしい。

「ワーオ、困ったな……」

天に向かって溜息をつく。

だが、こうなった以上はプルミエル達が俺を見つけてくれるのを待つしかない。

あまり動き回るのも得策と思えなかったので、俺はとりあえず近くにあった切り株に腰を下ろした。

そして、視線を前に向けると……そいつらがいた。

「海が見たいのかね、君？」

俺は言葉を失って、呆然とそいつらを見つめる。

一人はムキムキの中年男だった。

黒髪をオールバックにびったりと撫でつけ、顎の下にはちよび髭。
プラモデルのように引き締まった筋肉質の体。

異常なのは、それをまざまざと見せつけるかのように、黒のブーメランパンツと黒ソックスだけしか身につけていないことだ。

全身がテラテラと光り輝いていて、大変気持ちワルイ。

もう一人は眼鏡をかけたミイラのような、七三分けの痩せ男だった。
ズボンの中にきつちりとシャツの裾をしまいこんでいて、その袖口から覗く腕は哀れなほど細い。

隣のムキムキマンに比べると、到底同じ生物とは思われなかった。

一番おつかないのは、どこを見ているか分からないような、妙に据わった目だ。

もう一人……と言っているのかどうかは分からないが、そいつらの隣には変な生き物がいた。

目も鼻も口も無いオバQ、とでもいえば早いだろうか？

真っ白な物体が、こんもりとそこにある、といった感じ。

端的に言うと、自立している抱き枕のような……

「な、何者だ……」

俺の質問を待ってましたとばかりに、中年男の目が鋭く光る。

「問うならば答えよう！ハッ！」

ムキムキとガリガリが、信じられないほど高く跳躍する。

「私は『ロレンス』！愛と美の伝道師！」

シャキーーーーーン！（効果音）

「マイ・ネーム・イズ・『ジーザス』！永遠のタフボーイ！」

シャキキーーーーーン！（効果音）

「そしてこいつの名は『ダビドフ』！謎の生命体！」「

シャツキィーーーーーン！！！！（効果音）

「そして誰が呼んだかこの私！」

とんでもないモノに出会ってしまった！

「ふ……あまりの美しさに直視できない、か……」

ロレンスが呟く。

そのポジティブさがなんかムカツク！

「この少年、見どころあり！」

「僕も感じますゾ、そのスメル……」

「多数決を採りましょう！」

「私はイエスだ。彼には可能性を感じる。ぜひ、乳首を見たい」

「僕もイエスですナ。異世界風のコスプレイヤー……」

「……」

「ダビドフもイエスね？おめでとう！満場一致で合格よ！」

「ま、待て待て待てッ！何の話だ！？」

俺は慌てて叫ぶ。

すると、息がかかりそうなほど近くにシルク・撫子の顔があった。

「どわぁ！」

「良いリアクションね。期待通りよ。+5点」

「あ、あんたらは一体……」

「呑み込みが悪い！-5点よ！」

「……だが、問うならば答えねばなるまい。私は……！」

「待て、それはさっきも聞いた」

俺は慌ててロレンス氏を制止する。

あんなモノを何度も見せられると、間違いなく精神を病む。

「で、君は入団希望者ね？ そうなのね？」

「はあん！？」

「クツクツク……恥ずかしがりボーイ……興味深いですナ」

「いいから、ちよつと待てイ！」

何だコイツラ？

異次元人？

同じ言葉を喋ってるはずなのに、まるで会話が噛み合っていないぞ！
頭が痛くなってきた……

「話を整理させてくれ……君達は……」

「「「S・Y・S・団！！」」」

「オーケイ、SYS団だな。で、俺は……」

「名乗るがいいわっ！」

「……俺はジン・ケンイチ。君達は……」

「「「S・Y・S・団！！」」」

「人の話を聞けッ！！」

「慌てるな、ケンイチ君……」

ロレンスがトラウマになりそうなほど艶めかしい腰の動きで、クネ
クネとこちらに近づいてきた。

「見たまえ……この、大胸筋から、腹筋にかけてのラインを……」

「……？」

「ハウツ、たまらなくセクシー」

「……スイマセン、あなたの言っていることがさっぱりワカリマセ
ン……」

「分かったわ、団長である私が話しましょう」

シルク・撫子がずいっと、前に出る。

自分で言うだけあって、確かに美少女だ。

ああ、これで言動がマトモだったら恋に落ちてたかもしれないのに。

「話を整理するところよ。今の世界は閉塞感に満ちているわ。悠久の平和がもたらしたのは気怠いまどろみだけ……」

「はあ」

「そこで、私は一念発起したのよ！愉快なパーティとともにセカイをユカイに！……というわけで団員募集中なのよ」

「へえ」

「一般人には興味ないわ！ガチホモ、オタク、謎の生命体、異世界人は私の所へ来なさい！」

一個だけ当てはまっているのが悲しい。

「以上よ。質問は？」

山ほどある。

「具体的には何を……」

「面白いことよ」

アバウトすぎる……！

「その生き物は……」

「ダビドフ。謎の生命体。特技は光合成よっ」

「こ、光合成だと……？」

「そして夜は月の光を浴びると、ドジっ子属性を完備した美少女メイドになるの」

「な、何っ……！」

それは聞き捨てならない！
このかまぼこみたいな生き物が？
俺は妙にそわそわした気分になった。

「ケンイチ氏……気持ちはこちらからまずゾ。僕も太陽が憎いッ！あの輝きッ！ああ、ずっと夜だったらよかつたのに！ハアハア、ダビたん萌えエ〜ッ」

鼻息を荒げたジーザスは、舌をレロレロと細かく動かしながら身悶え始める。

こいつも大変気持ちワルイ。
だが、夜のダビドフはマジで見たい！

「全く理解しがたいね。あんな小娘のどこがイイのか……人体の美とは、この生命の躍動感溢れる筋肉にあるッ！ケンイチ君、乳首を見せてみたまえッ！」

「違うッ！つるぺた、ぬくぬくこそが世紀末の覇者ッ！！そう、覇者ッ！」

「とまあ、こういったメンバーで面白おかしくやるワケよ。さあッ、ついてらっしゃい！」

「い、イヤだッ！どうしても言うならダビドフだけ置いていってくれ！」

「ナヌ！？ダビたんは渡さないゾッ！」

「君っ！乳首を見せたまえ、さあ！」

「今なら入団者特典で新曲『グッバイ流れ星』の生歌をプレゼントよ！」

『グッバイ流れ星』

作詞・作曲 シルク・撫子

その後を二人の変態が追っていく。
そして、先程までのカオスが嘘のような静寂が訪れた。

「……………」

呆然とする俺の前に、落葉を巻き上げながら、ブオナパルトがゆっくりと着陸した。

「いたいた」

「うつつ……会いたかつたぜ、プルミエル！」

「はあ？頭でも打ったの？」

「いいや……身体は無事だが……………」

「？」

「ひどい大怪我をした気分なんだ……………」

で、結局なんだったんだ、あいつらは。

大きな謎だけが残った……………」

悲しき姉妹

密林を超え、草原へ。

その広大な草原を抜けると、今度は丘陵地にさしかかった。

昼を過ぎ、太陽が西へ傾きかけてきている。

俺はそれをぼんやり見ながら、ああ、そろそろおやつの間かな、なんて考えていた。

密林での一件以来、俺は感情がマヒして、高速で空中を飛ぶことにあまり抵抗を感じなくなっていた。

もう叫び声を上げる気力も無い。

あんなイカレた連中に囲まれるのに比べれば、これぐらいはどつてことないだろう。

ただ単に『鎖に繋がれながら内臓がハミ出しそうなほどのスピードで空を飛んでる』ってだけのことだ。

(こつちに来てからずっとこんなのだよな……)

溜息さえも高速飛行が発生させる気流に吞まれ、誰にも知られることなく揉み消された。

俺って不幸体質なんだろうか？

ヤダヤダ、勇者だからってそんな不公平なのは無しだぜ！

と、ここで横を並走していたメイヘレンが、親指を下に向けて、ブルミエルに着陸を促しているのが見えた。

おおっと、何かあったのかな？

勇者タイムはさっき稼いだばかりだぞ。

草原で出会った羊飼いの少年の服を繕ってやった時だ。

グン、と術戦車ブオナパルトが高度を下げっていく。

(うえーっぶ……)

下降して行く時、胃の内容物も一緒に押し下げられていくような感覚があつて、俺は少し気持ち悪くなつた。

不死身とはいえ、乗り物酔いはするようだ。

これもプルミエルの『勇者研究ノート』に書いておいてもらおう。そうすれば、少しは俺の胃に優しい飛び方をしてくれるだろうか？

(……無理だな)

大人になるというのは諦めを知るということだ。

俺はもう立派な大人さ。

やがて、地面が近くなつてきて……着陸。

「ぐうおー！」

着陸の時はいつもそうだが、俺は頭から思い切り地面に叩きつけられた。

しかも今回は丘陵地だったので、反動を軽減してくれる土ではなく、剥き出しの固い岩が俺を出迎える。

ドカツ！グシャツ！というこのエグい衝突音は冷や汗ものだ。

「うごごは！……えーい、くそー！」

俺はなんとか立ちあがつて、メイヘレンとプルミエルのもとへ歩み寄る。

「よう、なにかあつたのか？」

「さあ？何かあったの？メイヘレン」

「うむ。実は相談がある」

「何？」

「当初の予定通りウルシュの村で一泊していかないか？」

「えー？」

プルミエルが不満そうな声を上げた。

「このペースでいけば夜までにはベデヴィアに着くのに！」

「すまん。だが、ちよつと私用があつてな」

「もー！」

「まあ、いいじゃん。俺は構わないよ」

「頼む、プルミエル」

「むー……貸しにしとくわ。あと、宿はお風呂の綺麗なところをとるようにね！」

プルミエルは口を尖らせた。

しかし、意外だ。

あの『女帝』メイヘレンがこんな風に頼み込むようにしての私用って何だろう？

「ところで、用って何だい？」

「……」

俺の質問にメイヘレンは答えず、術戦車にまたがった。

ウルシュは山間部にポツンと存在する小さな村だった。

この辺は標高が高いせいか、とても空気が澄んでいるように感じる。村自体はたいそう牧歌的な雰囲気で、村の入口では子供たちが羊に乗ったり、花冠を作ったりして伸び伸びと遊んでいるのが見えた。

「平和だなあ……………」

「こんな山間で血で血を洗うような争いがあると思った？」

「ち、ちがうつ。俺が言っているのは、このなんというか、落ち着く雰囲気は良いなあってことさ」

「諸君、この先の三軒目が宿屋になっている。私の名前を言えば部屋を用意してくれるだろう」

「ここには結構よく来るのか？」

「ああ。もう随分と昔からね……………」

ふつと遠いところを見ながら、メイヘレンが言う。

「海から離れた場所にも縄張りを持つてるとはね」

ブルミエルは意地悪な調子でつつこんだ。

「……………まあ、色々な事情があるのさ。そうそうブルミエル、少し宿からは離れてしまつが、温泉もあるぞ。美肌の湯ということでは有名だね。風呂好きならば、一度入浴するのを勧めするね」

「えー、あんまり離れてると湯冷めしちゃう」

「炎の魔道貴族が湯冷めを？……………ふふ、せいぜい気を付けたまえ」

私は寄るところがあるので、後で宿屋で会おう。ではね」

「お、おう。またな」

メイヘレンは言うだけ言うと、村の奥へと消えていった。

俺とブルミエルは特にすることも無いので、早速宿屋へ向かうことにする。

歩きながら、彼女は呟いた。

「なーんか、怪しいわね」

「な、な、なにが？温泉と聞いてもエロいことなど微塵も考えていないぞっ！」

「そっちじゃないわよう、ばーか。エロスボーイ。今言ったのはメイヘレンのこと」

「うつつ……そうかな？まあ、何か用事があるって言ってたし」

「面白半分でついてきたくせに、自分の都合で寄り道なんてするかしら？」

「気まぐれなんじゃね？」

「うーん、何か引つかかるわねえ……彼女、確かに強引なうえにフリーダム全開な性格だけど、常識でも礼儀知らずでもないわ」

「うーむ……じゃ、尾行するか？」

「んー……いや、詮索は無しにしましょう。一応、旅の仲間なんだしね」

「お、おう。そうだな。そうだよ」

『旅の仲間』という言葉がプルミエルの口から出てきたことで、俺はなんだか嬉しくなった。

やっぱり旅は楽しいほうが良いし、その為には仲間と仲良くやるのが一番良い。

プライバシーの侵害なんてのは言語道断だ。

「何よ、ニヤニヤしてキモいわねー」

「な、何でも無いよ」

「あ、ここかしら？『清風荘』……気取った名前だわ」

その宿屋はログハウス風の質素な造りだったが、中に入ると、天井が高く、建物自体に十分な広さがあることが分かる。

受付でメイヘレンの名前を出すと、宿の主はすぐに部屋を用意してくれた。

「当宿で、最も見晴らしの良い部屋でございます。三部屋、横並びにご用意いたしました」

ドアを開けると、目の前に大きな窓があり、そこから雄大な山並みが一望できた。

驚いたことに、案内された部屋はどこも隅々まで手入れが行き届いていて、清潔さと落ち着きを感じさせてくれる。

二人で宿屋を切り盛りしているという老夫婦も、とても感じが良い。正直言つて、山中の小さな村にある宿屋なんて……と思っていたが、バカにできない。

まるで、軽井沢とか那須高原とかの高級ペンションのようだ。勿論、一回も行ったことは無いけど。

「良いねえ…… 思えば、この世界に来てちゃんとした部屋に泊まるのは初めてかも」

「まあ、確かに悪くないわね」

「いやいや、すごく良いよ。五つ星さ」

「あ、そ。それじゃあ、私は温泉に入ってきてから、夜まで寝るから。あなたはテキストに勇者タイムを稼いでなさいよ」

「おう、了解。なあ、最後に優しい言葉をかけてくれ」

「死なないでね勇者様っ」

わざとらしい身振りですう言つと、プルミエルは自室のドアをぱたんと閉めた。

「それは優しいというより物騒なセリフだ……」

俺は空しくドアに向かってツツこんだ。

『22:19』

まだまだ勇者タイムはゆとりがある。

宿屋の仕事を手伝わせてもらっても良いんだけど、それは夜の為に
とっておこう。

せっかくなので、ぶらりと困っている人を探して外へ。

天気も良いし、最高の散歩日和だ。

しばらく歩くと、重たそうな荷物を背負って、よろよろと道を歩い
ているおばさんを見つけた。

おおっ、勇者チャンス！

俺は早足でおばさんに近付いていった。

「こんにちわ。荷物を運ぶの、手伝いましょうか？」

「はえっ？」

急に後ろから声をかけられたので、そのおばさんはびっくりしたよ
うだった。

「ああ、スイマセン。驚かすつもりは無かったですけど」

「なんだい？誰だい？」

「えーと、観光客……です。お荷物が重そうなので、お手伝いを、
と思ひまして……」

「そりゃあどうも、御親切に。そうだねえ……それじゃあ、お願い
しようか」

「ほいほい。よっ、と。おおっ、結構重たいな。よくこんなの担いでましたねえ」

「足腰を鍛えるには丁度いいのよ。あそこの家まで運んでくれる？」

おばさんが指さした坂道の先には、立派な白壁の家があった。

他の家と比べると、どう見ても金持ちの家だ。

「ワーオ、すげえ。おばさん、ひよっとしてお金持ちなんですか？」

「あ、は、は……だといいんだけどねえ。あれは私の家じゃないよ。ブランシユール様の別荘さ」

「別荘？」

「そうさ。生まれつき御病弱な妹君フェルミナ様の為に、御当主のメイヘレン様が建てさせたのさ」

「病弱……妹……」

どちらも初耳のエピソードだ。

俺は坂道を登っていく間に、様々な話をおばさん ジュニイさんから聞くことができた。

もともと、俺から訊いたわけではなく、相手のほうから一方的に聞かされただけだが。

「フェルミナ様はメイヘレン様と違って、魔力が弱くてねえ。でも、魔道貴族の血は魔力を求めてしまうのさ。だから、身体の内側から魔力を作りだすことのできないフェルミナ様は全身の血の巡りが悪くなってしまうって、立ち上がることもままならないくらい体が弱ってしまったのよ」

つまりは、ずっと貧血気味ってことだろうか？

「ここは魔法が使えなくなる『反魔結界』の手前だから、精霊の力

の吹き溜まりになっているのよ。ここなら、少しはフェルミナ様のお身体も楽になるだろうということ、メイヘレン様が別荘をお建てになったのよ。そうね、五年ほど前かしら？」

そういえば、これから向かうベデヴィアという街から先は、魔法が使えなくなるという説明を受けた気がする。

「あんなに仲の良い姉妹は見たことないわよ……それなのにねえ……」

ジュニイさんの大きな溜息で、話は終わった。

「あのメイヘレンに妹がいたとは……」

「あら？メイヘレン様を御存じなの？」

「あー、まあ、そうツスね。彼女と一緒にここに来たんですよ……」

「ええっ!？」

言ってから、俺はマズイ事態になりそうだと冷や汗をかいた。

なんだか、これじゃあ俺がメイヘレンのことを詮索しているみたいじゃないか？

さっきブルミエルが『旅の仲間のことは詮索しない』って言ったばかりなのに！

「じゃあ、フェルミナ様に会ってお行きなさいよ！メイヘレン様がお友達を連れていらっしやるなんて滅多に、というか今まで一度も無いんだから！」

「そ、それは、ちょっとマズイかもしれないんだけど……」

「いいから、いいから」

ジュニイさんは強引に俺の腕を掴んで、その家の門をくぐった。

「フェルミナ様？メイヘレン様？」

「私一人よ、ジュニイ。お姉様は私のお薬を貰いに行ってください
たわ」

ジュニイさんがドアをノックすると、中からすごく落ち着いた、優しい声が返ってきた。

「じゃあ、開けますよ」

「どうぞ」

ガチャリとドアが開くと、そこはまるで切り抜いた写真のように美しい部屋だった。

四方を囲む壁はシミ一つない純白で、同じく白のレースのカーテンが、大きな窓から抜けてくる清涼な風に吹かれて、ふわりと揺れている。

空間そのものが、とても澄んだ透明感を持っているようだった。

そして、部屋の中には大きなベッドがあつて、その上には、窓際の花瓶に生けられている白百合の花よりももっと可憐で美しい少女がいた。

淡い金色の髪と、透けるような白い肌。

まるで、精巧な白磁人形のようだった。

「まあ……」

彼女は身体を起こして、突然現れた来客に慌てた様子も驚いた様子

も無く、俺に向かってにっこりと微笑んでくれた。

「はじめまして。どなたさまでしょうか？」

「お嬢様、こちらはメイヘレン様のお友達だそうですよ」

「まあ、お姉様の……？」

「えーっと……俺、ジン・ケンイチっつていいいます」

俺のほうがあへどもどして、とりあえず初対面の相手に対しては定番の『当たり障りの無い自己紹介』を繰り出した。それを聞いて、もう一度少女は優しく笑う。

「ケンイチさん……とお呼びしても良いかしら？私はフェルミナ・ブランシユールと申します」

「ああ、どうも、よろしく……」

「いつもお姉様がお世話になっております」

「いえいえ、こちらこそ、お世話になってまして……」

お互いに頭を下げあって、まるで取引先でのサラリーマンの挨拶のようだ。

「私は下がっておりますよ。お客様にお茶をお持ちしなくちゃ」

「お願いね、ジュニイ」

ジュニイさんは大きな足音を残して部屋を出ていった。

「ごめんなさいね、ケンイチさん。こんな恰好で……」

「いや、とんでもないツス！そのままでもいいです。お邪魔だったらすぐ帰りますんで……」

「いいえ、ここにいらっしやう。ケンイチさん、よろしければその椅子に……」

フェルミナさんはベッドの脇の小さな椅子をすすめてくれたので、俺はそこに、埃の一つも舞いあがらせないように、なるべく静かに腰掛けた。

「聞いてもよろしいかしら？お姉様とはどういつ……？」

「あー、実はルジエという港町で出会いました……」

俺はこれまでの旅の経緯を、なるべく手短かに、簡潔に話して聞かせるつもりだった。

しかし、彼女は予想以上の聞き上手で、何度も頷いたり、目を輝かせたりしながら、俺の話を実に楽しそうに聞いてくれる。

そのうちに俺もついつい興が乗って来て、『オバダラ事件』や『メibel・ルイーズの酒宴』、『魔法塔の冒険』などを熱っぽく語ってしまっていた。

(な、なんて良い娘なんだ……)

俺は危うく恋に落ちてしまいそうになるが、なんとか持ち前の鋼の自制心で自分に鞭打った。

「……と、まあ、こんな次第です……」

「凄いわ……とっても面白かったです、ケンイチさん」

「あ、あはは……一応、ノンフィクションですよ、フェルミナさん」

「まあ！ダメよ。お姉様だけ呼び捨てなんてずるいわ。私も『フェルミナ』と呼んでください」

「は、はあ……」

「そうなのね……お姉様が先ほどお話になっていた勇者様というのは、ケンイチさんだったのね」

「ええっ！俺の話をしてたの？」

「ええ。『凄く面白い少年に出会った。異世界の勇者だよ』って、とても楽しそうにお話になっていらっしやったの。私、ああ、どんな方だろう。お会いしたいなって思っていたところだったのよ」

俺はなんだか気恥かしくなってしまった。

「あゝ、ははは。こんな感じのヤツで申し訳ない。幻滅させちゃっただろう?」

「いいえ」

フェルミナの細い指が、俺の手をぎゅっと握る。

その手があまりにも冷たくって、俺は少しびびくりした。

「想像通り……いいえ、想像以上に素敵な方よ、ケンイチさん」

「フェ、フェルミナ……」

ヤバい！好きになりそう！

俺は耳まで真っ赤になっただろたえる。

思春期の高校生なんだから仕方ないだろう？

と、ここで急にフェルミナは身体を屈めて、苦しそうに咳き込みはじめた。

「う……こふっ、こふっ……」

「フェ、フェルミナっ……！大丈夫か?」

「だ、大丈夫……大丈夫……」

俺はどうしていいか分からず、彼女の背中をさすってやることしかできなかった。

「ジュ、ジュニイさんを呼んでこようか……?」

「いいの……すぐ……おさまるから……」

しばらくそうしていると、少し落ち着いたらしく、フェルミナは俺のほうへ身を寄せてきた。

俺の胸にもたれかかるその細い肩は、医学の心得が全く無い俺でも分かるほど生気が薄い。

考えたくもないが、恐ろしい予感が心に走る。

この子は、もう……？

くそっ……

なんてやるせないんだろう。

こんなに良い娘さんが、こんな不幸な目に遭っているというのが心底、不条理に思えてしょうがない。

「ケンイチさん……お姉様をよろしくお願いしますね……私がいなくても良いように支えてあげて……」

「そんなこと言っちゃダメだ……！」

「お姉様は鳥なの……」

「鳥？」

「とても優しく、美しく、気高い鳥なの……でも、私が地上に繋ぎとめてしまっているのよ……自由に大空を飛ぶことができるのに、私が枷になってしまっ……」

「違う！メイヘレンは絶対に、そんな風には思っていないよ！」

「ふふ……」

フェルミナは顔を上げて、にっこりと、弱々しく微笑んだ。

「本当に優しい方。ケンイチさん……勇者様ね……」

「フェルミナ……」

俺は叫び出しそうになった。

この無垢な命を、何とかして助けてやることはできないんだろうか？
普通、勇者ならなんとかできるんじゃないのか？

人助けっていうのは、こういう時にするものじゃないのかよ！

とんでもない無力感が俺を襲う。

その時、ドアが静かに開いた。

「おいおい、妹にまで手を出すのはやめてくれないか？」

顔を上げると、悲しげな笑いを浮かべたメイヘレンが立っていた。

仕掛けられた罠……

外へ出ると、もう太陽が山際へ顔を隠そうとしていた。

二つの影法師が夕陽の朱色に染まる地面に揺れる。

俺とメイヘレンは『清風荘』へ向かって坂を下っていた。

フェルミナは皆で泊っていけばいいのに、と実に寂しそうだったが、メイヘレンがその申し出を遮ったのだ。

俺はというと、気まずい雰囲気になが折れそうだった。

「何をそんなに縮こまっているんだ？私が怒るとでも思ったのかい？」

「いや……」

一応否定はするが、凶星だ。

俺はメイヘレンに見つかった時、心臓が口から飛び出すほど驚いた。浮気の現場を見られたような、後ろめたい気分になったのは事実だ。『こんなところまで私を追って来て何様だ！』と、いきなり殴られるんじゃないかとさえ思った。

だが、メイヘレンは怒りもせず、理由も聞かなかった。

むしろ、普段よりも上機嫌な様子で俺達の会話に加わって、フェルミナを笑わせたり、俺をイジったりで、話題の中心になって場を盛り上げていたのだ。

俺は肩透かしを食らったように拍子抜けしてしまった。

だが、やっぱり親しき仲にも礼儀あり、だ。

ちゃんと謝っておいたほうが良いだろう。

「なあ、悪かったよ……その、余計な詮索はしたくなかったんだけど……」

「謝る必要は無いよ。まあ、確かに驚いたが……ジュニーに連れてこられたんだろ？彼女はいつも強引だからね」

「どうやら、本当に怒ってはいないようだ……」

しかし、それはそれで、俺にとっては少し気がかりだ。

なんだか、彼女らしくないんじゃないか？

ちよつとした不安が首をもたげた。

夜になった。

俺達三人は二階のメイヘレンの部屋で、和やかに食卓を囲んでいた。

「……と、いうわけだね。病気がちな妹の顔を見たかっただけなんだ」

「ふーん……」

「妹さんもすごい美人だったよ」

「エロスポーイならではの着眼点ね」

「うっっ！」

「おやおや。『も』ということは、私のこともそう思ってくれてくれるのかな？」

「うっっっっ！」

「メイヘレン、この『思春期真っ只中ボーイ』は女であれば誰にでも発情する危険極まりない動物なのよ。あなたも私も彼の頭の中ではどんなことをされてるか分かったモノじゃないわね」

「そ、そんなことは無いッ……（汗）」

「うん？語尾が弱々しいぞ、ケンイチ」

「はーん！四面楚歌だッ」

結局、俺は夕食の間中ずっとイジられ続けた。

食事が一段落したところで、宿の老主人がティーセット一式を載せたお盆を持って来てくれた。

「食後の紅茶をお持ちいたしました」

「ああ。御苦労様。後は私がやるよ。あなた達はもう休んでいい」

「では、メイヘン様。私どもは下の階におりますので、何かございましたらいつでもお呼びください」

「ありがとう。おやすみ」

宿の主はティーポットをメイヘンに渡すと、こちらへ軽く会釈をしてから部屋を後にした。

本当に感じの良い宿だな、ここは。

「小さな村だからね。客が来ること自体が珍しいから、こんな風におもてなししてくれるのさ」

「まさに隠れ宿だなあ……温泉もあるらしいし。そついや、温泉はどうだった？」

「悪くないわね。混浴っていうのが頂けないけど」

「こ、混浴だと……？」

「ばーか」

呆れたような眼で俺を見たブルミエルは、メイヘンからティーカップを受け取ると、それを一口啜った。

しかし、俺は気が気ではない。

「ま、まさか、男が入ってたのか！？チクシヨウ！混浴チクシヨウ！」

「んなワケないでしょ。私一人よ。立札に……」
「？」

途中で急に言葉を切ったプルミエルは、キッとメイヘレンのほうを睨みつけた。

メイヘレンも、冷めた目でそれを受け止めている。

な、なんだ？どうしたんだらう？

急に張り詰めた空気。

そして、緊迫感が場を支配する。

俺は二人のただならぬ雰囲気、うろたえることしかできない。

プルミエルは険しい表情で苛立たしげにドン！とテーブルを叩いた。

「……あなた……どうして？」

「茶番は終わりということだ」

「おぼえて……なさいよ……」

弱々しく消えかかる語尾でそう呻くと、プルミエルの身体はぐらりと傾いて……

そのまま床に倒れこんでしまった。

「えっ！？ええっ！？」

ど、ど、ど、どうしたんだっ！？

俺はたちまちパニックに陥ってしまった。

だって、ワケが分からない！

さっきまで、あんなにピンピンしていたのに！

「プ、プルミエルッ！！しっかりしろッ！！」

俺は慌てて跪き、彼女を抱え起こす。

幸い、息はしていたる。
だが、なぜ急にこんなことになってしまったのか、全く見当もつかない。

何かの発作か？

悪いものでも食べたのか？

温泉の成分が肌に合わなかったのか？

しかし、メイヘレンの落ち着き払った様子を見て、俺は彼女が何かしたのだと直感した。

「メイヘレン！どういうことだ！？何をしたんだ！？」

「騒ぐな、ケンイチ。言っただろう？茶番は終わりだ」

「何を言ってるんだ！？」

「これだ」

メイヘレンは懐から、ガラスの小瓶を取り出した。

その中には、光を浴びて緑色に透ける液体が満たされている。

「『ウイノセクター』……これは神経に作用する薬だね。苦痛も無く、眠りながら、静かにゆっくりと心肺機能が麻痺していくという、いたって平和な毒薬なんだ」

「ど、毒！？」

「明日の朝までに解毒剤を吞ませなければ、プルミエルは死ぬ」

「し、死ぬ……だって？」

「ああ。しかし、安心したまえ。解毒剤は私が持っている」

メイヘレンは冷たい表情で言い放つ。

そこには、先程まで和やかに談笑していた面影は微塵も無い。

しかし、俺はここに至ってもまだ、メイヘレンの言葉をうまく理解

できずにいた。

まるで現実味が無い。

なんでこんなことに？

さっきまでは、あんなに楽しくやっていたじゃないか！

「ど、どうしてなんだっ……！なんでこんなことを！」

「君の力を借りたくてね」

「そんなの言ってくればなんだってやってやるのに！」

「そももいかんだろうね。君の今までの善行とは比べ物にならないほど困難なとき。おそらくは……いや、間違いなく命がけになる。プルミエルも反対するだろう」

「……俺に何をさせるつもりだ？」

メイヘレンはにっと微笑むと、長い足を組み直した。

「『スハラム・アルヴァン』の名は覚えているな？」

俺は頷いた。

勿論、忘れるわけがない。

世界征服なんていう子供じみた野望を抱いていた古代の魔道師だ。ルジエの港町にそびえ立つ、あの物騒な尖塔のシルエットが俺の脳裏によぎった。

「そいつがどうした？」

「アルヴァンは恐るべき野心家であると同時に、偉大なる魔道研究家でもあった。彼はその研究の成果の一つである、『秘宝』をこの山中にある宝物庫へ封印した。それを、私と一緒に取りに行つて欲しいんだ」

「秘宝？」

「『深閑の霊薬』だ」

「靈藥……?」

「魔力を凝縮させた万能薬。万病をたちまち治癒するものだという……」

俺はそれを聞いて、ピンときた。

ああ……そうか……

「妹の フェルミナの為、なんだな……」

「……」

「気持ちは分かるよ……」

「……」

「でも、お姉さんがこんなことをして……あの子が喜ぶわけがないだろう」

「フェルミナが喜ぶかどうかは問題ではない！」

メイヘレンは立ち上がり、我慢ならないといった剣幕で叫んだ。

「『気持ちは分かる』だと!? いや、君達に分かるものか! 私はあの子の為に生きているんだ! あの子の為にだけに! 手段や方法など問うところではない!」

冷たい仮面の下の、驚くほど熱い、剥き出しの感情。

それが堰を切ったように吐き出される。

「私はあの子が生きて……ただ生きてさえいてくれれば……!」

「メイヘレン……」

「……」

一瞬にして燃え上がった激情を静めようと、メイヘレンは椅子にド

カツと座り直し、しばらく宙を見つめる。
その瞳には涙が浮かんでいるように見えた。
彼女は大きく息を吐くと、少し間をおいて、自分を落ち着けてから再び口を開く。

「……選択肢を与えたつもりはない。君は私と行くしかないんだ。
プルミエルを死なせたことはないだろう？」

「……行くよ」

確かに選択肢は一つ……俺がやるべきことは一つだけだ。
覚悟を決めた。

俺は驚くほど軽いプルミエルの身体を抱きかかえて、その身をソファに横たえる。

眠り姫の顔は背筋がぞくつとするほど美しいが、それを堪能している場合ではない。

「しばらくの辛抱だ、プルミエル……」

俺はブレザーの上着を脱いで彼女にかけてやると、メイヘレンに向かって振り向いた。

「さあ、どこでも連れていってくれ」

「よっ」

メイヘレンはしっかり頷くと、コートを翻して階段を下っていく。
俺もその背中について行き、外へ出た。
世界は、すっかり夜の闇に包まれている。
空の星さえも雲に覆われているのか、その光の瞬きが見えない。

(長い夜になりそうだ……)

俺は、寒くもないのに身震いした。

アルヴァンの宝物庫

空が厚い雲に覆われているせいで、地上には月の光も星の光も届かない。

ほぼ真っ暗な闇の中を、ランプを掲げたメイヘレンが先頭に立って歩き、俺はその光を頼りに彼女の後を歩いていた。

夜の山は恐ろしい。

高地のためか背の高い木は生えていないが、物言わぬ剥き出しの岩の群れは墓地を連想させる。

おまけにこの暗さだ。

腿の筋肉にかかる負荷のおかげで、今、自分は山を登っているんだなということが分かる程度で、前後左右に関してはイマイチはつきりしない。

足元も見えないので、何度も岩に足を引っ掛けて、その都度、盛大に頭を岩に打ちつけたりもした。

俺はじれったくなって、メイヘレンに声をかける。

「……なあ、どこまで登るんだ？」

「すぐそこさ」

「術戦車は使わないのか？」

「この暗闇の中を飛べというのかい？」

「もう足がパンパンだ……」

「我慢しろ」

どうやら俺の弱音に付き合ってくれるつもりは無いようだ。彼女も必死なんだろう。

たった一人の妹の命がかかっているなら、それも当然だ。
俺はその気持ち尊重して、黙っておくことにした。
そうして二人とも押し黙ったまま山を登り続けること、三十分余り。

『12:41』

(うつむ……)

俺は勇者タイムを確認して心の中で唸る。

この気まずい空気の中で、「ねえ、勇者タイム稼がせてくれない？」
と言うのもちよっとした勇気のいる作業だ。

それでも何も言わなければ俺はあと12分で死んでしまうので、意を決して口を開く。

「なあ……」

「着いたぞ、ケンイチ」

メイヘレンが振り返った。

と、ここでまるでタイミングを合わせたかのように空から雲がひいて、月光が山肌を照らした。

「ワーオ……」

俺は思わず息を呑む。

その高さ、約3mほど。

表面に細かい彫刻の施された、豪華な造りの巨大な石扉が、山肌に直接据え付けられていたのだ。

その前で、両手を広げてメイヘレンが言う。

「この中が『アルヴァンの宝物庫』だ」

ということとは、山をくりぬいてこの宝物庫を造ったということになる。

あの尖塔といい、アルヴァンというヤツはかなりスケールのデカイ魔術師だったようだ。

「お………?」

と、ここで俺は、扉の前に座り込んでいる人影を見つけた。近寄ってみる。

「おおっ………」

俺はもう一度呻いた。

姿勢正しく扉にもたれかかっていたのは、白骨だったからだ。だが、自分でも不思議なことに、それを見ても気味悪さや恐怖は全く感じなかった。

冴え冴えとした青白い月光の下、鎖を編んだ頭巾を被り、死してもなお剣を両手に抱いて屈みこんでいるその姿は、美しくさえ見えた。戦いの中で息絶えたのだろうか？

多分、名のある騎士か何かだったに違いない。戦士の魂に安らぎあれ。

あまりにも綺麗なその死に様に俺は胸打たれて、思わず手を合わせようとした時だった。

恐るべきことが起こった。

頭蓋骨がぐいと動いて、こちらを向いたのだ！

「おや………」

「ヒッ………」

「また来たのか、女………」

「今回は不死身の男だ。異世界から召喚されし勇者」

「ほう……?」

「じゃ、しゃべってるウ!! ガイコツがしゃべってるウ!!!!」

なんと、そいつはしゃべっただけでなく、ヨッコイセと立ち上がって、剣を握り締めたままこちらに歩いてくる!

ヒイツ! 迷わず成仏するべき!

失禁寸前の俺の耳元で、メイヘレンが囁く。

「怯えるな、ケンイチ。彼はこの宝物庫の番人だ」

「ば、番人……?」

「フム……随分と変わった格好だ……」

頭蓋骨が動いて、俺をじろじろと眺める。ような動きをする。

目の玉の入っていたであろう部分はすでに単なる穴になってしまっているのに、どこで俺を見ているのだろうか?

そっぴいや喉も無い。

この低いシワ枯れ声はどこから?

「両手を上げる」

と、唐突にガイコツが言う。

「はい?」

「両手を上げる」

なんだよ急にと思いながらも、俺は恐る恐る、言われた通りにバンザイをした。

「……」

「せつ！」
「うお！」

なんと！

いきなり剣を抜き、ガイコツが俺の身体を横一文字に薙ぎ払った！
だが当然、不死身の俺の身体。

ガキン！と鈍い音が鳴って、俺の腹はその凄絶な一太刀をはね返した。

「な、何すんだよ！あ、あ、あぶねえなあ！」

「フーム……」

ガイコツはぐにやりと曲がった自分の剣を見て、溜息を洩らした。

「なるほど……汝、相応しき者なり！」

彼が顎の骨をばかっと開いて天に叫ぶと、目の前の石扉がゴ、ゴ、ゴと音を立ててゆっくりと開いていった。

「ワオー……」

「さあ、中へ……道案内をしよう……」

「行くぞ！ケンイチ！」

「ま、待て待て、待ってくれ」

俺は待ちきれないといった様子で駆けだすメイヘレンの肩を掴んで引き戻す。

彼女はうんざりした表情でこちらを睨みつけてきた。

「何だ！？」

「スマン。だが、勇者タイムを稼がせてくれ。残りは五分を切つて

るんだ」

「ああ……」

メイヘレンは無造作に胸のボタンを三つほど開ける。

豊かな谷間が露わになって、思春期の俺の目は釘付けだ。

「留めてくれ」

「あ、ああ……」

俺はすっかりそこに触れないように、震える指でボタンを留めていく。

今、少しでも勇者タイムにペナルティを受ければ即死だ。

「……つと、で、できた」

「ありがとう」

勇者タイムは……『59:52』。

よしよし、また生き延びたぞ。

「では、行くぞ」

「ああ」

準備ができたところで俺とメイヘレンは、ぽっかりと口を開けている闇の中へ進んで行った。

内部は当然真っ暗だった。

メイヘレンがもう一度ランプに火を入れ、長い通路を照らす。

空気がジメジメしていて、足場も少しぬかるんでいる。

壁にはびっしりとコケが生えていて、この場所が随分長いこと侵入者を許していないことを物語っていた。

映画なんかに出てくるアレ、まさに秘境の洞窟だ。

豪華だったパルミネの尖塔に比べると、いかにも何かここに隠されていると言わんばかりの雰囲気。

「アルヴァンは道楽好きでな……………」

前を歩くガイコツ騎士が話し始めた。

「何かにつけて他人に試練を与えたがる。結果が気に入らなければ相手を存在ごと消す。奴にとって、他人の命はゲームの駒にすぎん

……………」

「……………ともかく、ひどい野郎だっというのはわかるな」

「ここにも試練が？」

メイヘレンが落ち着かない様子で尋ねる。

「無論。お前にもかつて話しただろう……………命がけになる……………」

「私の命など、どうでもいい。霊薬さえ手に入ればな」

「確かに、そう言う人間から死ぬ……………」

「ちっ」

メイヘレンは舌打ちを洩らす。

だが、それと同時に踏み出した足が、カチツと音を鳴らしたのを、俺の耳が捉えた。

こいつは聞いたことがあるぞ……………」

うお、超イヤな予感！

すると、ガタン！と天井から、何かが開くような音がした。

「ふ、伏せろっ！！」

俺は反射的に動いてメイヘレンを押し倒し、その上に覆いかぶさった。

次の瞬間。

ザアツと俺達の上に、雨のように矢が降り注いだ！

「うおおおおっ………」

背中に次々と矢が当たり、折れていく。

普通ならば全身を刺し貫かれて、ヤマアラシのような姿になって即死だろうが、背中にはシャワーを浴びている程度の感触しかない。ああ、不死身でよかったと思いつつ、不死身ではないメイヘレンに一本もそれが刺さらないように、俺は力強く彼女の身体を抱き締め続けた。

やがて、ひとしきり矢が地面を覆い尽くした頃、最後の一本がカラーンと落ちた音が聞こえて、俺はゆっくりと顔を上げる。ほっ、どうやら終わったようだ。

「君は………」

胸の中から声が聞こえて、俺はハツとして身体を離れた。よかった。メイヘレンには一本も矢は刺さっていない。

だが、彼女は仰向けになったままで、俺を見つめて悲しげに微笑んだ。

「君は……こんな時でも人の命を救うんだな………」

「……そこが勇者のツライところなんだ」
「ふ……馬鹿なことをしたな。私が死ねば、この懐から解毒剤を抜き取るだけでよかったのに」
「いらないよ」

俺は立ち上がってズボンの汚れを払ってから、メイヘレンも立たせた。

「プルミエルに盛ったのは毒じゃないんだろ」

「……！」

「睡眠薬か？」

「……気付いて……いたのか……」

「最初は驚いたけどな」

俺達は知り合ってから一年どころか、一週間も一緒にいない。互いを完全に知り尽くすことなんか、勿論できるはずもない。いいや、多分、知らないことのほうがまだ多いだろう。

それでも

それでも俺には、メイヘレンが毒を盛って他人を陥れるような、そんなことをする女性だとは思えなかった。

プルミエルもきつとそうだったんだと思う。

彼女は倒れる前に、『おぼえてなさいよ』と言ったから。

毒を盛られたなんてことは考えもしなかったんだろう。

「あんだ、実は優しい人さ」

「何を……馬鹿な」

「フェルミナが言ってたよ。『お姉さまは優しくて、強い鳥だ』ってさ……」

「……あの子はいつもそう言ってくれる……」

メイヘレンは瞳を伏せた。
そして、胸の奥から絞り出すような声で語り始める。

「……あの子の為にメイベル・ルイーズで世界中を回り、治療方法を探した。医学書も山ほど読んだよ。様々な文献を漁り、様々な人間に尋ねて回った。その中に、アルヴァンの秘薬の噂があった」

「そこからは死に物狂いだった。必死にその手掛かりを探して、ようやくこの場所を突き止めたんだ。すぐに治療に取り掛かれるように、フェルミナもここへ移した。ここは予想以上に良い土地だったよ。大気には精霊の力が満ちているし、空気も澄んでいる。そうして、準備万端整えた私は、この遺跡の発掘にとりかかるうとした」

「しかし、あの門番は『相応しき者がいなければ扉は開かれない』の一点張りだ。確かに彼の言うとおりだった。魔法で吹き飛ばそうとしても、力尽くでこじ開けようとしても、扉はびくともしなかった」

「落胆する私に、門番はヒントを与えてくれた。つまり……」

メイヘレンが俺を見る。

「不死身の身体……」

「そうだ。だから君が私の前に現れたときは……運命を感じた」
「……」

この女性は……

その余裕ぶった態度と美しい仮面の下になんて多くのものを抱えていたんだろう。

深い悲しみと重い葛藤、そして激しい情熱とすぎるような期待。

それらを隠しながら、俺達に接していたわけだ。
その思いは到底、他人に理解できるものではないだろう。
俺は彼女にかけるべき言葉が思いつかず、立ち尽くすだけだった。
メイヘレンはそんな俺の前に立って、顔を上げる。
その瞳からは涙が溢れていた。

「……………今日、医者に言われたんだ。妹はもう……………長くない。あと、
三ヶ月ももつかどうか……………」

「そんな……………!?」

「もう時間が無かった……………だから……………」

「そう……………だったのか……………」

「それなのにあの子は……………私に心配させまいと、顔色を誤魔化すた
めに薄く化粧までして……………」

ここまで語って、メイヘレンは両手で顔を覆ってしまった。
細い肩が震え、手の隙間からは嗚咽が漏れた。

「あんなに良い子がどうして……………!!」

俺は……………何も言わなかった。

この期に及んで、励ましや気休めの言葉が何の役に立つだろう？
今の俺に出来ることは……………やるべきことは一つだけだ。

霊薬を手に入れる。

フェルミナの命を救う。

メイヘレンの心を救う。

俺は静かに決意を固めた。

「やれやれ、泣ける話だ……………」

と、ガイコツ騎士がぬつと影から姿を現す。

おっと、そっぴや忘れてた。

彼は身体に引つかかっている矢を細い指（当り前だが）で取り除きながら、俺達の前に立った。

「だが、美談には悲しい結末がつきものだ……昔からな……」

「いや、そっぴやならない」

「……」

「いいから早く先に案内してくれよ」

「無論だ……」

そっぴや言って歩き出しかけたガイコツ騎士が、こちらを振り向いた。

「フーム……」

「ん？何だ？」

「こんなことを言うのは尚早だが……」

彼の頭蓋骨が何かに感心したように縦に揺れる。

「何か大事を為す男というのは……得てして皆、今のお前のような顔をしている」

「ん……」

果てしなく続くかと思われた闇。

それが不意に途切れて、目が開いた。

テーブル上のロウソクの灯がユラユラと頼りなげに揺れている。

その短さを見て、自分が少なくとも二時間以上は眠りこんでいたのだと気づいて、私は大きく溜息をついた。

まだ五感はぼんやりしている。

盛られたのは睡眠薬だったのだろうか？

いや、おそらく少しは弛緩剤も混ぜ込んであっただろう。

四肢にうまく力が入らないので、しばらくはこのまま薬の効果が薄れるのを待つしかない。

(あの女……)

私はぐったりと横たわったまま、舌打ちを洩らした。

(まんまと嵌められたというワケね)

不覚……いや、迂闊？

表現が違うだけで、どちらも意味は同じだ。

私は裏をかかれて、こうして置いてけぼりを食らったという結果だけが横たわっている。

さて、彼女はケインイチに何をさせるつもりだろう？

薄れゆく意識の中で、『妹の為に』という言葉だけはかろうじて聞き取れた。

おそらくはそれにまつわる問題だろう。

(……………それでも一言なりと相談があつてしかるべきじゃない?)

畏に陥れられた事実よりも、何故かそつちのほうに腹が立つ。

私は握力の戻らない手で、ぎゅう、と自分にかかっているシーツを握った。

(あら……………シーツじゃない……………ケンイチの上着?)

異世界製の物なので、火で炙ろうが水に濡らそうが、ごわつきさえしない不死身の衣服だ。

ちなみに、匂いは少しする。

やや生臭いのは巨大魚に呑みこまれた時の残滓だろうか。

(ともかく、彼には私を気遣うヒマはあつたつてわけね……………)

無理やりどこぞに連行されて、橋を造るだの船を造るだのといった強制労働に従事させられているわけではなさそうだ。

ま、意外に機転の利く男だから、たとえそうだとしても簡単には死ななさそうな気もするわね。

ここでようやく身体感覚が戻ってきたので、私はヨレヨレと上体を起こした。

う、まだ少し頭痛がする。

(うーん……………しばらく二人は戻らなさそうねえ……………)

あたりはシン、と静まり返っている。

(……………もう一風呂、浴びてこようかな)

我ながらなんと樂觀的な、とは思うが、こういうことは焦っても仕方がない。

メイヘレンがケンイチをどこへ連れて行ったのかも分からないし、どれくらいで戻ってくるかも分からない。

ただ、（これは自分でも不思議なのだけど）二人は間違いなくここに戻ってくるという確信だけはある。

信頼？いやいや、そんなモノではなく……強いて言うなら、『勘』。しかし、待つしかないという状況も癪なので、私は私で優雅に過ごさせてもらおう。

「よっ……と」

ようやく少し自由になった身体を起こす。

「おおっ……とっつと」

まだ、少しバランス感覚に難ありね。

それでも、よし、行ける！

私は洗面道具を用意して、さっさと宿屋を後にした。

雲が完全にひいて、青白い月光が地表を照らす。

うん、なかなか悪くない。素敵な月光浴ね。

せっかくの月明かりだし、術戦車を使うのも勿体無い。

少し遠いけれど、歩いていくことに決めた。

標高は高くても、不思議と肌寒くはない。

(それにしてもこの私が一杯盛られるとはね……)

思い出して、少し腹が立ってきた。

(あの女、どーしてくれよう)

犯した罪には何か、しかるべき罰を考えねば。

モノマネをさせる？うーん、ヒネリが無いわね。
裸踊りをさせる？ダメダメ、ケンイチが喜ぶだけだわ。

突如として奇声を発しながら、つま先立ちでぐるぐると回り続ける。
しかも、人混みの中で。

(おおっ、これはエグいわね)

貴族の面目、まさに丸つぶれ。

よし、それにしよう。

心の中でそう決めて、一步を踏み出した、その時。
道の先に人影が見えた。

(ん?)

私は目を細めて注視する。

それは鍛えられた体を剥き出しにして、月の下でピタッと両手をY
の字になるように上げて、静止して立っていた。

私は最初、それが彫刻だと思った。

「マリン、心の旅……」

あら、喋った。

テラテラと輝く裸体は実は全裸ではなく、ピッチリとした黒の海パ

ンを身につけていて、必要最低限な場所だけはなんとか隠してくれている。あ、ソックスも履いてるのね。

まあ、端的に言つと、キモい。

タイヘンなヘンタイであることは疑う余地も無い。

とりあえず道を塞ぐ形で立っているのだから、無視もできなさそうだ。

「グツ、イブニン、ガール……」

「……何者？」

「問うならば答えよう。私の名はロレンス……愛と美の伝道師！」

そいつはねっとりと腰をくねらせながら、よく通る声で自己紹介をする。

うーわ、見た目だけでなく中身もキモいわね。

というか、イタいというか。

「愛と美の伝道師……」

「いかにも。愛と美というのは」

「あ、間に合ってます。じゃ、ゴメンしてね」

「ノン！待ちたまえ、ガール」

ロレンスは速やかに去ろうとする私の前に、両手を広げて立ちふさがった。

「何よ、もー」

「今、私が愛について語ろうとしていたのだよ君ィ」

「また今度ね」

「なんとというツレなさ……！メンスかね？」

「黙れ変態」

「良い良い、そんな君のアンニユイをこの私が吹き飛ばしてやるっ」

「話聞きなさいよ」

「とつとつ！カツモクせよ！」

ロレンス氏は再び両腕を高々と天に掲げたかと思うと、クルリと後ろを向く。
そして……

「お尻ペロロンチーノオ！」

と叫ぶと、唯一の着衣である海パンをずり下ろし、こちらへお尻を丸出しにした。

「……」
「……」

静寂。

私は、いやん！きゃあ！と叫ぶ前に、呆然とそのかぐろい谷間を凝視することしかできない。

「……」
「……」
「やれやれ……」
「……」

「そんなに見つめられると、もう一つ穴があいてしまつよ」

「……ちよい」

「うん？何だね？」

「これ見て」

「ほう？Vサイン……ビクトリーのVだね！」

「てい」

私はその指を、こちらへ顔を寄せてきた変態の両目へ突き込んだ。

「せいっ」

私は足元にある頭を、躊躇なく踏みつけた。

「う」

パキユッと小気味の良い音がした。

そいつは二、三度ビクンビクンと四肢を震わせたかと思うと、すぐにぐったりと動かなくなった。

彼は一体何者だったのかも、問う暇は無い。

「……やれやれ、なんか変なのが多いわね」

思わず大きな溜息が出る。

一晩で変態に二度も出くわすなど、なかなか無い経験だね。

二度あることは三度あるとも言っけど……

「お待ちなさい！」

出た、三人目……

しかしその相手は姿が見えず、闇の中から声だけが響いてくる。

「その鮮やかな暗黒拳の数々……タダモノではないわね」

「どこ？出てらっしゃい」

「『どこ？』ですって？ここよ！とっつ！」

威勢のいい掛け声とともに、地面からドウッと土煙が上がった。

そして飛び出したシルエットは月に重なり、クルクルと木の葉のように回転しながら地面に着地する。

「シルク・撫子、参・上！」

「うわ……ぺっぺっ、口の中に……土が……」

「シルク忍法『ドトンの術』！」（ドババァン！） 効果音

土中から姿を現したのは、同い年くらいの女の子だった。
いつから埋まっていたのだろうか？

「ふーむふむ……」

彼女は私を頭のとっぺんからつま先まで、じろじろと値踏みするよ
うに見る。

「……何？」

尋ねるとしたらそれしかない。

しかし彼女はその問いには全く答えず、うんうんと一人で何かを納
得したように頷いた。

「そうね。『萌え』ってのも大事な要素なのよ」

「はぁ？」

「あなた、名前は？」

「……プルミエル・ミスmanaガン」

ミスmanaガンの名前を出せば少しは動揺するかと思っただけで、相
手は全く、それを意にも解していないようだった。

「プルミエル！可愛い名前だわ。素敵」

「あなたは何者なの？」

「私は『シルク・撫子』！」（ズバァン！） 効果音

とどころで入るこの効果音は一体……？

「で、そのシルク撫子は一体……」

「あなたがさつき鮮やかに屠ったのは『ロレンス』と『ジーザス』

！そして……あら？」

「？」

「ダビちゃん？……おい、ロレンスう！ダビちゃんはあ？」

「うつつ……」

「ダビちゃんは？どこ行つたの？せつかく月夜なのに」

「……さ、さつき、団長とジーザスが無理やり白ガーターを履かせようとしたから、『あうあう、はわわっ……』と泣きながら逃げて行きました……」（がくっ）

「あ、死んだ。まあいいや。もう一人、謎の生命体ダビドフ！合世界を愉快にするシルク撫子のせてS・Y・S団よ！」

「へえ……」

「プルミエル、合格よ。本来ならば団員で多数決を採るのだけど、団長特権であなを我がSYS団へ歓迎するわ！」

「あー……お構いなく。じゃあね、ごきげんよう」

「おおっと、予想以上のツンぶりね。+10点よ！」

ダメだわ……会話が成立しない。

「『放課後ティーバック』……」

シルク撫子は腕組みをしたまま、呟いた。

「『ガールズ・デッド・ポリスター』……略して『ガルデポ』。どうかしら？」

「へ？」

「ユニット名よ」

「ゆにつと……?」

「やれやれ……意外と鈍いわねえ。 - 5点ね」

「はあ」

「美少女が集まったらバンドを組む!近年の風潮では定説と言ってもいいわね」

「へえ」

「ダビちゃん、プルたん、そして私!うおー、燃える燃える……もとい、萌えるわねッ!よし、勢いをそのままに新曲いくわよ!」

『キャトル ミューテイレーション』

作詞・作曲 シル

ク・撫子

その話 妙にこだわるじゃない?

奥さんが オレンジ色の発光体に連れ去られたっていう話よ

虚ろな目をして帰ってきても

彼女には優しくしてあげるのよ

でもね その中身はね 変わってるかもね

意外と大事なシリコダマ しっかりガードしないとね

女の子ですもの 恋しながらでも メガ盛り食べるし

女の子ですから デート中でも 土俵入りできちゃう

あなた フライイング ヒューマノイド気取りね

くりかえし

今夜 キャトル ミューテイレーション日和ね

「……」

押し寄せる『?』の波の前に、言葉も無い。

「……あー」

「おっと！いけね、ダビちゃんを探しに行かなければ！」

「はあ」

「プルたん、今度会う時は衣装合わせよ！チャオ！」

ビツと親指を立てると、シルク撫子は疾風のような身のこなしで斜面を駆け下り、山間に姿を消した。

取り残された私。

と、二つの屍。

「だから一体何だったのよ、あんた達は……」

大きな謎だけが残った。

ジャスト・スタンドアップ！勇者

「見えるか……？」

骨ばった、というか骨そのものの指が、廊下の奥を示す。

「光ってる？何だ、アレ……」

永久に続くかと思われた暗黒の回廊の、その最奥部に光が見えた。もちろん、これは不思議だ。

朝には早すぎる。

おまけにこの遺跡は長いこと封印されていたはずだ。

では、何の光なのか？

不思議ではあるが、想像は難しくない。

メイヘレンの声が興奮で上ずった。

「もしや？」

「そうだ……『深閑の霊薬』……この宝物庫の一番の宝だ……」

「ワオ……アレが噂の……」

「ケンイチ、急ごう」

「おっと、待て待て、さっきみたいに焦ってトラップを踏んじやマズい。俺が先に行くから、離れてついてきてくれ」

「しかし……！」

「言う通りにしてくれ。フェルミナが元気になっても、あんたが怪我人になっちゃ本末転倒だろ」

「……」

不満そうなメイヘレンをぐつと後ろへ押しつけて、俺は前進する。彼女はそれでも、言われた通りに俺の三步ほど後ろからついてきた。しかし、あの光。

なんだかそら恐ろしいほど眩い。

近づけば近づくほど、その光は輝きを増していくようだ。

しかしそれは太陽のように燃えるようなものではなく、白く、冷たい光だった。

わかりやすく言うと、電球色でなくて昼光色といった感じ。

いや、わかりづらいか……？

とにかく、その光を頼りにしばらく進むと、大人二人くらいで両手を広げて歩けるほど回廊の道幅が広くなる。

そして、その姿が見えた。

「玉座………？」

それはまさに玉座だった。

壮麗で、荘重で、豪勢な金ぴかの台座。

翡翠色の美しい瓶が、まるでこの宝物庫の主であるかのように、その立派な玉座に鎮座し、眩い光を放ち続けているのだ。

あの瓶こそが、『深閑の霊薬』に間違いない。

「生意気な薬だな。よっぽどアルヴァンの野郎に甘やかされてたよ
うだ」

「ここからはお前が一人で行け………」

「ええっ？」

「馬鹿な！私も行く」

「それは無理だ………見る………」

そう言うと、ガイコツ騎士は足元の小石を拾い上げ、目の前の空間に放り投げた。

すると俺の眼の前で、バチン！と音を立てて、その小石が突然粉々になって弾け飛んだ。

「うおおっ！危なッ」

「これこそは『拒絶の輝壁』……」

「何だと！？アルヴァンは暗黒魔道の使い手だろう！？光輝魔道の上位結界を創り出せるはずが……」

「アルヴァンは魔道研究の大家……その潤沢なる潜在魔力をもってすれば、魔道属性などは些細な問題にすぎん……」

「馬鹿な……」

メイヘレンはごくりと息を呑んだ。

「それゆえに挑戦者には不死身の身体が必要だったのか……スハラム・アルヴァン……なんとという恐ろしい魔道師だ……」

「えーと、話が見えないんだが、ようはとんでもなく強力なバリアが目の前にあるってことだな？」

「しかり……」

「ケインチ……ここから先は君以外、踏み込めない領域のようだ……」

メイヘレンが口惜しそうに下を向いて、歯噛みする。

俺は彼女の肩をポン、と叩いた。

「なあに、見たところ30mかそこらの距離さ。スキップしながらでも行っちゃうぜ」

「すまん。頼りにしているぞ……」

「おう」

「待て……」

ここで、ガイコツ騎士が俺の前に出た。

「挑戦者にルールを説明しておこう……」

「ル、ルール？」

「このゲームのルールだ……一度しか言わぬぞ……」

「お、おう」

「お前はここから一人で玉座に向かい、あの瓶を取ってこなければならぬ……」

「ああ、『一人で』だな」

「しかし……そして、ここが大事なところだが……このゲームは一度きりだ……」

「え？」

「この宝物庫には強力な呪いが掛けられている……お前が一度でも負けを認めたり、秘宝を手にはせず、手ぶらでこの結界を再びくぐれば、この場所自体が永久に封印される……」

「な、なんだって？」

「一発勝負ってことか？」

「なんだよ、ケチ！」

大一番を前に、とんでもないプレッシャーが掛けられちまった。俺はきゆう、と胃が収縮するのを感じた。

「負けを認めるときは大声でそう叫ぶことだ……だが、挑戦は一度きりだ……いいな……」

「わ、わかった。そう何度も言わないでくれ……」

しかし、ここまで念を押すということはこのほぼ30mの距離の間に何かしらの罠が仕掛けられているとみてよさそうだ。

だが、ポジティブに考えようぜ、ケンイチ。

火あぶりだの水責めだの、想定され得る様々な罠を思い浮かべてみ

るが、どれも俺はこの世界で味わった経験があるし、その度に無傷で生還できたじゃないか？

不死身の身体で何を恐れる事がある？

ようはあの小さな瓶を取って引き返してくるだけのことだ。なんなら走ってもいい。

陸上部出身の俺の脚なら、往復で15秒はカタいはず。

俺は出来るだけ物事をシンプルに考えて、自分を奮い立たせた。

「よっしゃ、行くぜ！……っと、その前に……」

俺は尻のポケットから革のケースを取り出した。

「メイヘレン、コートを貸してくれ」

「？」

「いや、何が起こるか分からないから勇者タイムを稼いでから行くうと思ってる」

さつき矢の雨を浴びたときに、彼女のコートに少し穴があいてしまったのを、俺は見逃さなかった。

もう何度も針仕事には命を救われているので、慣れたもんだ。

これは孤児院でもらった裁縫セット。

大小の針が三本ずつと、十二色の糸がケースの中に入っているので、様々な裁縫仕事に対応可能だ。

俺は手際よく革のコートに針を通して行き、破れた部分を縫い合わせで補修した。

こういう厚手の生地は運針が大変だが、ごまかしはききやすい。

「……っと、できた！」

完璧な手際に、自分でも満足だ。

もとの世界に帰ったらお針子に転身というのもアリか？
異世界で職業訓練を積む俺……
勇者としてはなかなか斬新な存在なのではなかるうか。

「……すまん。ありがとう」

「あー、いや、どういたしまして……」

うーむ、仕方ないこととはいえ、何だか調子が狂っちまうな……
いつもの傲岸不遜な彼女が恋しくなる。

「まあいいや、よし、気を取り直して行くぜ！やってやるぜ！俺は
できる！イエス・ウィ・キャン！」

俺はセルフでハイテンションを注入する。

一人で盛り上がっているようで傍目には痛々しいだろうが、ええい、
知ったことか！

そんな俺を、ガイコツ騎士が呼びとめる。

「勇者よ……」

「お、おうよ！」

「一つ忠告を授けよう……」

「おう！アドバイスは大歓迎だ！」

「勇者たるもの、勇猛さだけではその価値があるとは言えん……よ
く観察し、よく考えることだ…… 思慮深さも勇者には不可欠なもの
なのだ……」

「思慮深さ……」

うーむ、それに関しては、はなはだ自信が無い。
前向きに検討するだけ言っておこう。

「まあ、分かった、よし、やるぜ！」

「うむ……では、行くがいい……」

「頼んだぞ……ケンイチ！」

「ああ」

俺は二人に向けてピースサインを見せて、結界の中へ飛び込んだ。バチン！という静電気が炸裂するような音がしたが、痛みは皆無。勇者の不死身をバカにしちゃいかんぜ、魔道師アルヴァン！

（だが、落とし穴やらでタイムロスを食らうのはご勘弁だな……）

そこから這いあがっているうちにタイムアップ、なんてこともあり得る。

俺は全速力で往復する、という当初のプランを捨てて、とりあえずは慎重に回廊を進むことにした。

足元にボタンが無いかどうか、確認しながらゆっくりと足を踏み出していく。

『思慮深さ』ってこういうことかな？

無闇にガツガツ秘室に飛びつかないのは分別のある証。

静かに、一歩ずつ。

泥棒気分の行進を続ける。

抜き足。

差し足。

忍び足。

（おお、だいぶ近づいてきたぞ……）

なおも慎重に歩を進め、今や眩く輝く小瓶まで、ほぼ15m。

あの中にフェルミナの明日が……メイヘレンの希望が……全てが詰

まっているんだ。

肺に溜めこんだ空気を吐き出して、もう一度吸う。
そうして俺が一步を踏み出した、その時だった。

「侵入者アリ」

「侵入者アリ」

どこかで聞いたような機械じみた音声が、回廊に響いた。

これは……

たしか……

俺が思い出すのと、そいつらが姿を現したのはほぼ同時だ。

「魔芯兵器！」

そう。

パルミネの尖塔内部で俺達を追い回した、恐ろしく頑丈で、恐ろしく執念深い、あの殺人マシーンだ！

覚えていない読者はバックナンバー参照をオススメする。
とにかく以前に現れたヤツと同様、そいつは剣呑なオーラを放っていた。

錆かけた埃まみれの巨体と、その手に輝く長大な鉞。

おまけに、それが二体！

(くそ、イヤな展開だな……)

事態に輪をかけて最悪なのが、その二体に前後を挟まれちゃまっていることだ。

「魔芯ナンバー028……『バチカル』臨戦態勢移行、迎撃用意完了」

俺の目の前のマシンが言う。

「魔芯ナンバー033……『ホリゾン』臨戦態勢移行、迎撃用意完了」

俺の背後のマシンが言う。

ご丁寧な自己紹介とともに、それぞれの目がギン！と光り、二体は明らかな戦闘態勢の構えを取った。

（おおっと！）

俺も身構える。

さて、どうしたものか？

不死身とはいえ、それ以外の特殊な力を持っていない俺にとって、こいつらの破壊はまず不可能だろう。

魔芯兵器の頑丈さは折り紙つきだ。

では、選択肢は一つ。

（うまいこと攻撃をかわして、その際にお宝ゲット……）

安直この上ないが、それ以外のプランを思いつかない以上はそれで行くしかない。

なにせよ、計画が無いよりはずっとマシだ。

「攻撃開始」

目の前の魔芯兵器

バチカルが、大きく鉈を振りかぶる。

さあ、来るぞ！

間を置かず、ゴッ！という音とともに、それが凄まじいスピードで振り下ろされた。

「うお！」

その一撃はかわすのが精一杯だった。

ドカン！という凄まじい衝撃音が回廊に響く。

俺の鼻先をかすめて地面に叩きつけられた鉈は、床に大きなクレーターを造った。

予想以上の威力を持つその一撃に、背筋を戦慄が走る。

う、お、お、お……こんなものをくらったら

「攻撃開始」

背後でヒュツと風を切る音がしたと思うと、唐突に俺は横薙ぎに吹っ飛ばされた。

「ぬお！」

パチンコ玉のように勢いよく身体が宙を飛び、全身がめり込みそうなほど強烈に壁面に打ちつけられる。

「くおお……」

何が起きたのかは一瞬理解できなかったが、一秒後には、背後にいたホリゾンが俺に凄絶な一太刀を浴びせたのだということが分かつ

た。
くそ！

思っていたよりもこのチャレンジは容易ではない。
まさに前門の虎、後門の狼というヤツだ。

「でーい、だからって何だってんだ！」

萎みかけた闘志を、俺は大声を出して奮い起す。

俺は不死身だろう？

ほら、どこも怪我していないじゃないか！

気を取り直してもう一度、間合いを詰めてきた二体と対峙する。

今度はホリゾンが先に仕掛けてきた。

ヤツは大きく腰をひねって

「つとお！」

ブン！と何の躊躇いも無いフルスイング。

その太刀を、今度は屈んでかわす。

あと一瞬遅ければ、そして俺が不死身でなければ、頭が削り取られていただろう。

すると、今度は頭上から、先程と全く同じブン！という音が聞こえた。

「うおおっ！」

俺は反射神経を総動員して、それを慌てて前転でかわす。

ほんの0.2秒ほど前まで俺の身体があった場所に、容赦ない一撃が降ってきて、再び地面を揺らした。

よし、この隙に！

と思った瞬間。

ブン！

「うあー！」

再び身体が吹き飛ばされる。

衝撃！

衝突！

今度はさっきとは反対の壁面に、大きなクレーターができた。

「っあ……っ！」

不死身の身体に痛みは無いが、内臓が揺さぶられる感触はある。

もちろん、背中を強く打ちつけられれば肺から空気が押し出されて、息も止まる。

それでも気を取り直して顔を上げると、すでに後ろから間合いを詰めていたホリゾンが、二撃目を加えんと大きく腰をひねっていた。

「うおおっ！」

俺は慌てて身を屈める。

だが、斬撃は襲ってこない。

かわりに頭上から音がして、今度はモロにバチカルの凄絶な一刀を脳天に食らった。

「うぶー！」

なんたる衝撃！

俺は頭が半分埋まるほど痛烈に床に叩きつけられ、それとは逆に下半身が大きく宙にはね上がる。

まるでシャチホコのような、無様な体勢になっているその横っ腹を、
間髪入れずにホリゾンの横薙ぎが襲った。

「うっごあ！」

再び身体が壁面に叩きつけられる。

そして、重力が俺の身体を地面に引き戻す前に……頭上でまたあの
風を切る音が聞こえた。

「ぶふ！」

来るのが分かっているにもかかわらず、その攻撃をかわすことができない。
俺は再び床に叩きつけられる。

こいつら……チームワークが抜群だ。

そこからは完全にワンサイドな展開になった。

ブン！

バキン！

再び壁。

ゴッ！

ズドン！

再び床。

ヒュッ！

ドカン！

またまた壁。

俺の身体は、文字通り縦横無尽に繰り出される二対の斬撃の嵐に、木の葉のように翻弄され、蹂躪され、床と壁にいくつものクレーターを造り続けた。

くそ……

なんとかしねえと……！

俺は打開策を見つけるべく、様々な体勢でその斬撃をかわそうとした。

攻撃の間隙を縫うように跳躍したり。

刃風を身近に感じながら這いつくばったり。

距離を置くために転がり回ったり。

だが……

ダメだ……

どうしようもない……

事態は好転しない。

何とか一撃二撃はかわせても、その先が続かない。

魔芯兵器どもは飽きもせず鉦を振るい、俺の身体に盗掘者への教訓を刻みこもうとする。

俺は俺で不死身なので、このゲームは膠着状態に陥りつつあった。

いや、膠着ではない。

俺にとつては、状況は悪化する一方だった。

相手は何年、何十年、いや、ことによると何百年もの間、この遺跡を守ってきた番人だ。

電池や燃料で動いていない限り、そのスタミナは無尽蔵と考えてもいいだろう。

一方の俺は不死身とはいえ超人ではない。

走る、転ぶ、かわす、這う、飛ぶといった行動を繰り返していくうちに、身体の筋肉は徐々に疲弊し、スムーズな回避行動をすることが困難になってきた。

やがて、俺は完全に、一方的に相手に叩きのめされるがままになった。

おい、俺はドツボにハマっちゃったぜ、と思った。

格闘ゲームなんかでよくあるだろう？

画面端に相手を追い込んで、体力が無くなるまで一方的に攻撃し続ける、アレだ。

ゲームなら多くの友達を失うリスクを恐れて、多少は気を遣うが、当然このマシーンどもにそんな躊躇は無い。

(無理だ……)

そう思った。

どれくらいの時間が経っただろう？

俺は精も根も尽き果て、まるで餅つきの餅のように、その暴力の嵐の吹き荒れるがままに身を任せてしまっていた。叩きのめされ、打ちのめされるたびに全身から力が抜けていく。

床に埋まりながら疲労感が押し寄せる。

壁に埋まりながら倦怠感がこみあげる。

何よりも心の中で大きくなっていったのは無力感だった。

不死身だというだけで何ができると思ってたんだ？

死にづらいというならクマムシだってそうだ。

俺はなんて無力なんだろう。

あれほど姉妹を助けたいと思っていたのに、何もできない。

心の中で、弱い俺がブツブツと言いつきを始めた。

『もういいだろ？一生懸命やったんだから……』

そうだ。確かに一生懸命やってる……

『無理なものは無理だ。お前にはこの二体を倒せない……』

ああ。俺もそう思う……

『見るよ、勇者タイムを……』

『06:19』

『マズいぞ、あと6分しかないんだぞ……』

ああ。確かにマズイな……

俺はこのゲームで何を証明したかったんだろう？

自分の正義感？勇者としての適性？この世界での存在意義か？

だが、何もかもがもうどうでもいい。

そんなものより、生き残ることが大事だ。

ほら、「人一人の命は地球よりも重い」って言うだろう？

フェルミナを助ける方法だって他にまた見つかるかもしれない。

でも、このままだと俺は時間切れで死んじまうかもしれないんだ。

大人になるつてのは、諦めを知ることだ。

しょうがないさ……

まあ、メイヘレンには責められるだろうが……

完全に心が折れかけた、その時だった。

彼女の声が聞こえた。

「ケンイチ！」

メイヘレンだ。

「時間が無い！」

だからもつと頑張れってか？

「もっ……いい！戻……っ……てくるんだ！」

「え………？」

「ありがとっ、もう十分だ。もう……いいんだ………」

絞り出すような声で、彼女は言う。

「……………」

「他にフェルミナを助ける方法はある。きっと、あるだろう。だから、もう戻ってくるんだ！」

「……………」

俺は……………」

俺は何を思ったか……………」

俺は気がつく……………」立ち上がって……………」そして、叫んでいた。

「駄目だッ！」

襲ってきたホリゾンの横薙ぎをジャンプしてかわす。

空中で壁を蹴って、振り下ろされるバチカルの一刃を宙でかわす。

そして、着地と同時に反対の壁際へ転がって、二体と間合いを取ることに成功した。

乳酸の溜まった足を地面に突き刺すようにして、立つ。

俺は口の中に入った土を、弱い自分と一緒に床に吐き捨てて、靴でそれを踏みにじった。

脳裏には、二つの影がよぎる。

「ずっと、二人で苦しんできたんだろ……………」？

妹の為に、世界を駆けまわっていた姉がいる。

「ずっと、二人で悲しんできたんだろ……………」？

姉の為に、気丈に微笑み続けた妹がいる。

「ずっと、二人で一緒にいたいんだろ！？だったら、諦めちゃ駄目だ！」

そんな二人が、いつまでも幸せに暮らす未来。

それが今、何よりも欲しい。

『もしも』はいらない。

「俺も、もう諦めない……ちくしょう！諦めないぞ！」

さっきまで床を舐めていたフヌケでマヌケな弱い俺。

あいつは5分ほど前倒しで死んだ。

今立っているのは、紛れもなく俺自身だ。

こうなったら、何が何でも、このゲームに勝つ！

なんと、時間はまだ5分もあるのだ！

勇者の粘り勝ち

(さて、どうする……?)

迫ってくる二対の殺人マシンを睨みながら、俺は必死に頭を動かすことに取り組んでいた。

もはや目の前の困難に立ち向かうことに対して、微塵の逡巡も躊躇もない。

だが、精神論だけでは埋まらない壁がある。

物理の定める法則は、俺の意志や根性では変化しない。

そんなのは漫画やアニメの世界だけだ。

魔芯兵器を、生身の俺が倒すことはできない。

それは悲しい真実ってヤツだ。

だが、俺は何かを閃きかけている。

あともう少しで……何か……

何かが閃きそうなんだ！

う、お、お、じれったいぜ！

その焦りのせいで手の平がじつとり汗ばんできた。

この腰に差したリシエルの剣も、抜いてみたところで、何の波瀾も巻き起こさずにへし折られちまうだろう。

あの分厚い刀身を持つ鉈の一撃を、受け止めることもできないだろう。

(受け止める……? いや、弾く……弾く?)

おおっ、今のは何だ？

天啓？

ああ、チクシヨウ！

喉まで出かかっているのに！

俺の煩悶をよそに、二体がゆっくりと得物を構えた。
その時。

(お……こいつらの構え……)

俺の脳裏に、ガイコツ騎士の言葉がよみがえってきた。

『よく観察し……』

『よく考えることだ……』

俺はその言葉に従って、瞳孔を見開き、前後から迫る二体を交互に観察する。

バチカルは武器を上段に構えている。
ホリゾンは武器を水平に構えている。

(おおっ！！わ、わかった……！わかった！)

さっきまでの展開を思い出してみよう。

バチカルは俺に振り下ろす攻撃、つまりは『縦』の攻撃しかしてこなかった。

ホリゾンは逆だ。横薙ぎの、つまりは『横』の攻撃しかしてこなかった。

つまり、二体とも精巧にできた殺人マシンではあるが、攻撃のパターンは一つだけだということだ。

(と、いつことはどういつことになるんだ……?)

縦と横。

縦。横。縦。横。縦横縦横縦横……

二つの線のイメージが、交互に頭の中でフラッシュバックし、そして、一つになった。

つまり、十字マークになったのだ。

(こ、これだ！)

閃いた！

閃いちまったぜ！イヤツホウ！

俺は相手に気付かれないように、少しずつ間合いを調節して、二体のちょうど中間に自分の身を置いた。この作戦はポジションニングが全てだ。少しでもズレたら成功しないだろう。

「さあ、来いよ！ポンコツども。俺をサンドウィッチにしてみる！」

奴らに挑発がきくか？

そうは思わないが、まあ、これは景気づけだ。

「へっへ、マスタードもたっぷり頼むぜ」

余裕ぶったアメリカンジョークも飛び出した。

だが、マシーンどもは小憎らしいことに、じりじりと先ほどよりも明らかに時間をかけて近づいてくる。

こ、こいつら、俺の考えを見抜いているのだろうか？

内心でイライラ、ハラハラしながら、俺は勇者タイムを確認した。

アヒー！……時間的な猶予はほとんど無い。
これがラストチャンスになるだろう。

できるか？

いいや、やるしかないぞ！

緊張でケツがきゅつと引き締まる。
額には汗が浮かんだ。

「侵入者八……」

二体は完全なハモリで喋っていた。
そうして、ぐつと力を溜めて……

「排除スル」

ブンツ！と上と横から同時に風を切る音が聞こえた。
うおう！

二体とも猛烈なフルスイングだ！
だが、俺はその一瞬を待っていた。

「ここだあああつー！！」

叫んで、俺は素早くひざまずいた。

ドガギイイイイイイツ！……イイイイン……

頭のすぐ上で、重量を持った鋼鉄同士がぶつかり合う、自動車の衝突事故のような轟音が響く。
鉄同士の摩擦がもたらす特大の火花が、カメラのフラッシュのよう
に一瞬だけ回廊を照らした。

何が起こったのか？

おいおい、説明するまでもないだろう。

俺を挟み撃ちにしようとした縦と横の攻撃が、完璧なタイミングで
宙で交差したのだ。

そして、物理の定める法則が起こる。

同じ力で、同じ質量を持つものが、同じ速度でぶつかるとうなる
か。

つまり、その衝撃は二体のマシンを大きくのけぞらせ、地面に仰
向けに倒れさせたのだ。

「うおおおおおおおおおおおっ！！！」

その瞬間を待っていた俺は、バチカルの身体が地面に触れるのとは
ほぼ同時に走り出していた。

奴の身体を踏みつけ、台座へ向かって走る。

走る。走る。

ひたすら、走る。

背後で、ウィーンとか、ガシンン！とか、マシンどもが立ち上がる
音が聞こえた。

おおっと、思ってたより立ち直りの早い奴らだ。

だがな……

「アルヴァン！このゲームは俺の勝ちだ！」

叫んで俺は手を伸ばす。

「んおおおおおおおッ！！」

さらに伸ばす。

……そして、掴んだ。

「よっしゃあ！とったどおおおおおおおッ！！」

我ながらあまりカッコ良くない勝ち名乗りだったが、今の心境をストレートに表すところなるんだ。

俺は小瓶を高々と掲げた。

そして、次の瞬間。

「うおおっ！？」

霊薬の入った小瓶が俺の手の中で一層強く輝きだして、そして……

「うわあああッ……！！」

その光は意志を持っているかのように渦巻き、宙にうねる。

そして最後には大きな奔流となって、回廊を包み、急流のようにとつと駆け抜けていった。

俺はそのあまりの眩さに目がくらみ、不意に意識を失ってしまった

……

「……ンイチ……ケンイチ！」

「……ん……？」

「ケンイチ！しっかりしろ！」

「……おお……」

身体を揺さぶられている。

ああ……そうだ。

俺は意識を失ってたんだ。

あの、光の波に押し流されて……

俺は薄く目を開けた。

すると、顔の前に絶世の美女の顔があった。

おお……すごく近い。

「う……ん？メイヘレンか……」

「ああ。私だ。大丈夫か？」

「おう……すこぶる元気だ……」

とはいえ、身体に力が入らない。

俺はメイヘレンに頭を抱かれたまま、目だけで周囲の状況を確認した。

二体の魔芯兵器は、まるで糸の切れた操り人形のようにぐったりと地面に倒れていて、再び動き出す気配は全くない。

回廊自体も、恐ろしいほど静かだった。

「どうなったんだ……？」

「……君が霊薬の瓶を手にした途端、光がこの回廊を駆け抜けていったらう」

「ああ……」

「その後、アルヴァンの全ての魔法が消えた。拒絶の輝壁も、魔芯兵器も、何もかもが魔力を失って、見ての通り……」

メイヘレンは俺の頭を傾けて、周囲がよりよく見えるようにしてくれた。

「おそらくは、このゲームをクリアする者が現れば全ての魔法が消えるようにしたんだろう」

「おー……」

俺は小さく息を吐いた。

さつきまで、遺跡ならではの威厳と秘境めいた神秘性に満ち溢れていたこの回廊自体も、今やただの洞窟のようにひっそりと静まり返っていた。

祭りの後……というか、本当に魔法が解けた感じた。

「……おおっと、いけねえ！勇者タイム！」

はーん！忘れてたよん！

何分くらい気を失ってたんだ？

アルヴァンの魔法は消えても、俺の制限時間は待ったなしだ。俺は慌てて身体を起こして、勇者タイムを確認する。

『58:14』

「あ、あれ……？」

「それは私の分だ……」

暗闇から姿を現したのは、ガイコツ騎士だった。

「よくやってくれたな……」

「ど、どういう意味？」

「私の魂は……アルヴァンによって呪いをかけられていたのだ……この宝物庫を守るように……」

「呪い？」

「この試練を乗り越える者が現れるまで……私の肉体は朽ちても魂はこの遺跡に縛られたままだった……もう何百年の間……」

「そ、そうだったのか……」

「だが……その永きに渡る呪いは今、解けた……これで往くべきところへ……妻と娘のもとへ往ける……」

話している途中から、低くしわがれた声が優しい声になる。

頭蓋骨の顔には徐々に輪郭が見え始めて、やがてヒゲをたくわえた凛々しい壮年の男性の顔になる。

骨の状態では分からなかった、とても優しい、綺麗なグレーの瞳が俺を見つめた。

「異世界の勇者よ……名前を聞かせてくれ……」

「お、俺は……ジン・ケンイチです」

「ジン・ケンイチ……良い名だ。私は『フェリド・ナバレス』」

そう言つて、フェリドさんは俺に手を差し出してきた。

俺はその手を握る。

さっきまで骨だったとは思えないほど、その手は力強く、温かかった。

「ケンイチ。見事だった……素晴らしい勇気を見せてくれたな……」

「あ……あなたのアドバイスです。そのおかげで、クリアできました……」

ああ、なんてこった。

つい二時間ほど前に出会ったばかりの相手だというのに、ずっと前から知っている親戚のおじさんを失うような……そんな寂しさがこみあげてきて、俺の頬にはなぜか涙が伝っていた。

「うつつ……！あ、あの世でも元気で……」

「ん？ハハハ……面白いことを言うな……おお……そろそろ時間のようだ……」

そう言うと、次第にフェリドさんの身体がうつつすらと透けてきて、再びもとのガイコツの姿へと戻っていつてしまう。

「最後にこれだけは覚えておいてくれ、ケンイチ……勇者の強さは『心の強さ』……」

「心の、強さ……」

「そうだ……お前が己を信じ、世界と繋がることができれば……魔王とて恐れるものではない」

「ま、魔王？」

「ああ……」

声がか細くなる。

もう、お別れの時なんだろう。

「フェリドさん……」

「フフ……忌々しい呪いだだったが……永い時を待った甲斐はあったな……」

「え？」

「私が最後に出会った男は最高の勇者だった……ありがとう……」

その言葉を最後に、ふっと力が抜けたように、目の前の骨はバラバラと音を立てて地面に崩れた。

残骸はすぐに塵になり、やがて洞窟の中に吹き抜けてきた風が、それをさらっていつてしまおう。

俺はその様子を見つめながら、気がつくのと合掌していた。

隣に立つメイヘレンも、瞑目しながら胸の前で手を組み、哀悼の意を表している。

「往つちまった……家族のところへ」

「……戦士の軀は風と共に去りぬ、か……彼はさぞ、名のある騎士だったのだろう……」

「ああ……でも、こんな俺が『最高の勇者』だってさ。褒めすぎだよな？」

「いや。私はそうは思わないよ」

メイヘレンの瞳が、まっすぐ俺を見つめる。

赤銅色のその美しい切れ長の瞳は、熱っぽく潤んでいるようだった。

「私はそうは思わない……」

彼女はもう一度言った。

おいおい、なんだよ、今日は……

感激やら感動やら、ワケの分からない感情で涙腺が緩みっぱなしになっちまう。

思わずこみあげてきたものを見られないように、顔をこじこじと袖で拭ってから、俺は照れ隠しに、手にしていた秘薬の瓶をわざとずい、とメイヘレンに押しつける。

彼女はそれを受け取って、大事そうに胸に抱いた。

フェルミナのもとへ向かったメイヘレンと別れて、俺は一人で清風荘へ戻った。

本当は最後まで結果を見届けたほうがいいんだろうが、プルミエルのことも心配だったし、たとえメイヘレンについていったところで、もう俺に出来ることもないだろう。

実際のところ、かなり疲れてもいる。

もう足がパンパンで膝が笑っちまっていた。

よろけながら、なんとか階段を上って清風荘のドアを開ける。

「おかえり」

そこには、リビングに腕を組んで仁王立ちのプルミエルがいた。

「……………」

俺はそれを見なかったことにして、扉を閉める。

う、お、お、お………！

こ、怖え……………何ださっきの目……………

いや、そりゃあ怒るのも分かるけどさ……………

だが、俺は人助けをしてたわけだし、別に負い目に感じることは無いぞ。

フェリドさんだって無事に成仏してもらったし、メイヘレンの為に秘薬だって手に入れたんだし、むしろ褒めちぎってもらっても良いくらいじゃないか？

そうぞ。

俺は何も悪いことはしてないぞ！
意を決して、再び扉を開けた。

「おかえり」

さっきの姿勢から微動だにしない彼女がいた。

ヒィ ツー!!

や、やめろッ！

見ないでくれッ！

俺はしろと言われたら躊躇なく土下座をしまいかねない。
とりあえず、刺激しないように……

「お、怒ってらっしゃる……?」

「別に」

嘘だあ、絶対怒ってるウ！

「どこ行ってたの」

「うつつ……こ、この山の中腹にあります、アルヴァンの遺跡へ……」

……

「何しに」

「うつつ……その、万病に効くという霊薬を取りに……」

「霊薬」

「うつつ……メ、メイヘレンの妹が病気で……その為に……」

「ほお」

「プ、プルミエルさん、お加減はいかがでしょう?」

「普通」

「あ、あはは……それはよござんした……我々が留守の間は何かございませんでしたか……？」

「……オシリペロロンチーノ……」

「は？」

「何でもない……メイヘレンは？とりあえずグーパンチで許してやるわ」

「あー……待ってくれ、今夜はそっとしておいてやってくれよ」

「ん？」

「大事な夜なんだ。二人にとって……」

「……」

プルミエルは舌打ちを洩らしはしたが、固く握った拳を緩めてくれた。

「もう！ケンイチ、部屋に来なさい。ことの次第を詳しく教えなさいよ」

「へいへい」

俺は結局一睡もせず、詳しい経緯をプルミエルに語って聞かせることになった。

異世界ヒルズ

翌日。

かなり早めの朝食後、俺とプルミエルは荷物をまとめ、この村を離れる準備をした。

そこにメイヘレンの姿は無い。

彼女は昨夜、宿には戻らなかったのだ。

まさか薬が効かなかったんじゃない？という、あまりにもネガティブな想像が脳裏をかすめたが、それならそれで何かしらの報告をしてくれる約束だった。

薬がちゃんと効いたことを信じたい。

一晩中まんじりともしなかった俺に、プルミエルが提案してきた。

「だから、霊薬が有効だったかどうか、それだけ聞いて出発しよう。早いに越したことはないでしょ。あまり長々と滞在してもメイヘレンも気まずいだろうし」

それに俺も賛同したというわけ。

メイヘレンとはここで別れることになるだろう、とプルミエルも俺も何となく予感していた。

彼女の旅の目的は達せられたのだから。

しかし、彼女には俺達に対して負い目を感じてほしくないし、あの姉妹が二人で幸せに暮らしてくれればそれでいいと思う。

旅の仲間と別れるのはとても寂しいことではあるが……

だが、人生は一期一会だ。

またどこかの空の下で巡り会うこともあるだろう。

ポジティブに行こうぜ、ケンイチ。

「よつと、支度できたぜ」

もたらほとんど手ぶらだった俺は、一宿一飯の恩義として自分の使った部屋を掃除していた。

「完璧だ……」

埃一つ落ちていない部屋。

食い物を落としても、何の躊躇もなく拾い食いできるだろう。

俺よ、クリーンキーパーとしての才能まで開花したか？

まったく、お前の将来性はどこまで天井知らずなんだ？

うつとりと自己陶醉に耽る俺の隣で、プルミエルは宿の老主人から日持ちの利く食料を受け取って、それをザックに入れる。

「お世話になりました。ほら、ケンイチもお礼を言いなさいよ。世間のマナーよ」

「お、お世話になりました」

「いえいえ」

老夫婦が二人とも柔和な微笑みを浮かべたまま、深々と頭を下げる。

「またいつでもお越しくださいませ」

「そうですね。ぜひ、そうさせていただきます」

プルミエルはこちらの網膜が火傷しそうなほど眩しい笑顔で言うと、それに見とれている俺の背中を小突いて「オラ、行くぞ」と言わんばかりの圧をかけてくる。

「うお……では、また！ありがとうございましたっ」

俺達は再び深々とお辞儀をする老夫婦を後ろに残して、外へ出る。高地ならではの清涼な空気が、徹夜の肺に優しく流れ込んできた。

「うぬっ……！あー……」

俺は大きく伸びをした。

なんて清々しさだ。

「それじゃあ、行きましようか」

「おう」

プルミエルは術戦車を押して、メイヘレンの別荘へと続く坂道を登り始めた。

「おいおい、そんなゴツイバイク……もとい術戦車を押すのは大変だろ。俺が押してくよ」

「はあ？いいわよ、そんなの」

「まあまあ、任せとけて」

俺はプルミエルの手からハンドルを奪おうとした。

「……どーなっても知らない」

彼女は呟く。

「へあ？……んぐお！お、重たあっ……！！」

信じられないことに、その車体はまるで巖のごとき重量を持っていた。

俺は坂道を転げ落ちないように股を広げて踏ん張るのが精一杯だ。

「んぐつ……！どえりゃあ！……ひい！プルミエル、代わってくれえ！」

「だから言ったでしょ、もう」

プルミエルは俺の手からハンドルをひったくる。

すると、さっきは10tトラック並みの不動感を持っていたバイクが、プルミエルの手の中では、まるで自転車を押すようにゆるゆるとスムーズに山道を登っていくではないか。

不思議イ！

「それも魔法か？」

「そう」

「つくづく便利だよなあ……俺も魔法が使えりゃあなあ……」

「何に使う？」

「もちろん世界征服だぜ！……いや、嘘だって……やめろ、そんな目で見んなッ！」

そんな会話をしながら坂道を上っていくと、ブランシュールの別荘が見えてきた。

相変わらず立派な門構えだ。

と、その門の前にいくつかの人影が見えた。

一つはメイヘレン。

もう一つはジュニイさん、とそれに支えられて立っているのは……

「フェルミナ！」

俺は思わず大声で叫んで、彼女に駆け寄った。

フェルミナは俺に気がつくのと、にっこりと微笑んだ。

「ケンイチさん、おはようございます」

「うおお、凄い、立てるようになったの!？」

「ええ。長いこと伏せていたので、すっかり足が萎えてしまっていましたけれど……あのお薬を頂いてから、急に身体が軽くなったみたい」

「よかった……よかったなあ……」

俺は彼女の手を取る。

フェルミナの瞳はしっとりと潤んでいた。

「ありがとうございます、ケンイチさん。全てお姉様から聞きましたわ。私、ケンイチさんのおかげで……」

「いいんだ……そんなのは、どうでもいいさ」

感極まる、というのはこの事だ。

かつてない達成感。

この上ない満足感。

自分の努力に対して、最高の報酬をもらった気分だ。

そして、手に手を取ってしきりに頷き合う俺達二人の後ろでは、プルミエルとメイヘレンが静かに言葉を交わし合っていた。

「プルミエル……今回は、その、すまないことをしたな……」

「本当にね」

「うむ。いずれ、何とかこの埋め合わせはさせてもらう」

「おー、言っただわね。私って結構忘れないタチなのよ」

「そうか……」

なおもばつが悪そうに苦々しく微笑むメイヘレンの肩を、プルミエルがポン、と叩いた。

「ま、いいんじゃない？人間らしくってさ」

「プルミエル……」

「妹さんと仲良くね」

な、なんて良い女なんだ……プルミエルッ！

俺はこのやり取りを聞いていて、ただでも涙が出そうになったが、それは何とかこらえて、フェルミナにプルミエルを紹介した。

「彼女はプルミエル。炎の魔術師さ。プルミエル、彼女はフェルミナ。メイヘレンの妹さん」

「はじめまして、プルミエルさん。姉がお世話になっております」

「いえいえ、こちらこそ。病気が治ってよかったわね」

「あの、プルミエルさんはもしかして火の魔道貴族でいらっしやる？」

「まー……そうね」

プルミエルの曖昧な返事。

それで俺は思い出した。

おおっと、そついや水と火の一族は相性が悪いとか何とか……

「凄いわ！」

「へ？」

「私、火の魔道貴族の方にお会いするのは初めてなんです。ああ、こんなに麗しい方が『火のミスmanaガン』の御当主でいらっしやるなんて……」

「あら、そつ……？」

フェルミナは目をキラキラ輝かせながら、プルミエルの手を握った。プルミエルも拍子抜けしたみたいだが、まあ、フェルミナの性格を考えると当然の成り行きともいえるかな。

それにしても、こんなにも素直で、純粹で、無垢な感性を持っている少女を助ける事が出来たのは本当にうれしい。

俺はメイヘレンと目が合って、ぐっと親指を立てて見せた。彼女も満面の笑みでそれに応えてくれる。

初めて出会った時の、あの冬の氷のような冷たい印象はどこかへ消え、春の日差しのような、とても人間らしい温もりに満ちた微笑みだった。

おそらくこれが彼女の本来の顔なんだろう。

「さて、それでは出発しましょうか、ケンイチ」

「お？おう、そうだな」

ブルミエルがジャラリと重たい鎖を手渡してくる。

うーむ、せっかく俺の株が上がっているのに、鎖で宙づりにされる姿を見られたらその株も大暴落しちまいそうな気がするんだが。せめて、人目の無いところでぶら下げてくれんだろうか？

「もう行くのか？」

メイヘレンが寂しそうに尋ねてきた。

「そうね。ゆっくりしていききたいところだけど、勇者タイムのせいでもうもいかないでしょ」

「うむ……そうか……」

「お姉様。そのことで私からお願いがあるんです」

フェルミナが、ジュニイさんに手を借りながら一步前へ出た。

「お願い？」

「お姉様、ケンイチさんと一緒に行ってくださいまし」

「な、なんだって？」

俺は自分の手首に手錠をかけながら、目を丸くしてしまった。だが、フェルミナはにっこりとまた、微笑んだ。

「これでも妹ですもの。お姉様の御心は分かりますわ」

「だが……」

「お姉様。私ね、あの部屋の大きな窓から外を見ながら、自分の身体が良くなったら、何がしたいかを考えていたんです」

「……どんなこと？」

「この草原を思いきり、自分の足で駆け回りたいわ。温泉にも入りたい。ジュニイはお料理の名人だから、彼女からお料理も教わりたい。そして……」

「そして？」

「そしてね……お姉様と二人でこの山を登りたいわ。山の一番高いところで、私の作ったお弁当を食べるの。そこで私はお姉様がメイベル・ルーズで見してきたもの……外の世界のことをすべて、聞かせてもらおうの」

「そうか……そうしよう。必ず、そうしよう」

「でも、それには時間がかかると思っています。まずは自分一人で立って、歩けるように練習しなければいけないし、お料理もそう。きっと、しばらくかかると思っています」

フェルミナは大事な物をしまい込むように、胸の前で手を合わせて頷いた。

「だから、お姉様にはその間、ケンイチさんの旅の手助けをしてさしあげてほしいんです」

おいおい、なんてことを言うんだ。

これは止めるべきだろう。
そりゃあ、メイヘレンが旅の仲間に戻ってくれば嬉しいけど……
しかし、こっちの都合で、再びこの姉妹を引き離すなんて、とんでもないことだと思った。
俺は慌てて口を開く。

「フェルミナ、そんなの駄目だ」
「ケンイチ」

俺の言葉を、メイヘレンが手で制した。
そして、姉妹はじつと見つめ合う。
静かに 二人にしか分からない、目だけの会話が交わされていた。
やがて、メイヘレンが口を開く。

「……いいのね？」
「ええ。お姉様は自由に……鳥のように自由に飛んで。その御心の向くままに……」
「フェルミナ……」
「だって、時間はたっぷりあるんですもの。ね？」

その言葉を聞いたジュニイさんがたまりかねて、目頭を押さえる。

「うつつ……メイヘレン様……フェルミナ様は大丈夫ですよ……
私も村の者も、皆でお守りいたしますよう」
「ジュニイ……ありがとう」
「お姉様、悔いの残らないようにね」
「うむ」

メイヘレンがこちらへパッと顔を向けた。

「いいかな？」

考えるまでもない。

そういうことなら、俺はもちろんイエスだ！

しかしプルミエルは術戦車の上で腕を組んだまま、片眉を上げる。

「うーむ……どうしようかしらねえ？」

「ええっ！？ここ、悩むところ！？いいじゃん、メイヘレンと一緒に
行こうぜ」

「……条件をつけましょう」

「何だ？」

「ここからの宿泊費、交通費、その他諸々の旅費は全部プランシユ
ール持ち。ってとこで手を打つわ」

「おいおい、なんだよ、そりゃあ」

「文無しは黙つときなさいよ」

「うううっ！」

全員の間でどつと笑いが起こった。

超打算的だが、こういうやり方はいかにも彼女らしい。

ようは、これで貸し借り無しってことだ。

メイヘレンもやれやれと肩を竦めたが、まんざらでもない笑みを浮かべている。

「まったく……君たちは本当に愉快だな。わかった。その条件を呑
もう」

「それなら結構。それじゃあ、行きましょうか」

プルミエルはぐい、と術戦車のハンドルを握る。

後尾の天を突く六気筒が、ズドドン！と雄叫びを上げ、炎を巻き上げながら鋼鉄の車体が宙に浮かび始めた。

そして、それに鎖で繋がれた俺の身体も、ゆっくりと空へ昇っていく。
まるでへりに引き揚げられていく遭難者みたいだ。
フェルミナが、最後に声をかけてくれた。

「ケンイチさん！旅のご無事を祈ってます！私、あなたが元の世界へ帰られても、忘れませんから！」

「ありがとう！俺も忘れないよ！」

「本当にありがとうございました……勇者、ケンイチさん……私……」

彼女の言葉の最後は風に掻き消されてしまった。
だが、十分だ。

最後に俺のことを勇者と呼んでくれただけで十分だった。

(フェルミナ、元気でな……)

足元のウルシュの村が、どんどん小さくなっていった。

勇者タイムを稼ぐこと、四回。

つまりはウルシュの村を発ってから、だいたい四時間後である。

とうとう次の目的地、『貿易都市ベデヴィア』が見えた。

周囲を密林に囲まれているその都市は、上空から見ると、大きな川が都市を分割するように横たわっていて、それを取り囲むようにして立派な城や白亜の建物が競うように乱立している。

一見したところ、そこはいかにも繁栄している様子だった。

商業で賑わってるってことは、俺の世界で言うところとヒルズってこと？

まあ、さすがは貿易都市というだけあるってことだ。
と、ここで術戦車は急降下を始める。
うえーっぶ、何度経験してもこいつは胃に悪い。

「んおおおおっ！」

ズン！

「ぶふ！」

今度の着陸地点は森の落ち葉が堆積している腐葉土だったので、俺は綺麗に頭から地面に突き刺さった。

スケキヨ風に足は綺麗にVの字になるように伸ばす。

これは着陸に際して、もっと気を使ってくれという俺からのプルミエルへのアピールだ。

たまには綺麗な姿で地上に戻りたいもんだ。

だが、プルミエルは……

「おー、着地も上手くなってきたわね」

届かないこの思い……

「ほれ、さつさと立つ」

俺は空しさを胸にしまいこみ、土から頭を引き抜く。

「うお……土が鼻やら耳に……」

「あ、もう、鼻ほじらないでよ、汚いわねー」

「しょ、しょうがないだろ」

と、そこへメイヘレンの術戦車が、降下してきた。
彼女は美しい顔に、意地悪そうな薄い笑いを浮かべている。

「毎回魅せてくれるな、ケンイチ。君のアクロバティックな着地のファンだよ、私は」

「おー、手に汗握るだろ？やるほうは大変なんだがな」

俺は身体に着いた土を払いながら、彼女に愛想笑いを作って見せた。
ブルミエルはそのやり取りを遮るように、パンパンと手を叩く。

「ま、雑談はおいといて、ここから『反魔結界』の領域に入るわよ」
「ああ、そういや、魔法が使えなくなるらしいな」
「うむ。それゆえに魔道貴族の介入を許さないこの土地で、束縛を嫌う商人連中は独自の繁栄を遂げてきた。そして生まれたのがこの貿易都市ベデヴィアだ」

メイヘレンが言う。

「ふーん、でも、それは別に悪い事じゃないんじゃないのか？民主主義の国っぽくてさ」

「まあ、それだけならば問題は無いんだがな……見方を変えれば、束縛が無いということは統制も規律も薄い、ということになる」

「要はとんでもなく治安が悪いってことよ」

「げ」

「まあ、そういうことだな。気をつけてくれよ。人心が荒んでいるこの都市では、勇者タイムを稼ぐこと自体が難しいかもしれないからな」

ううむ、物騒な話だ。

日本人である俺は、治安の悪いところが苦手だ。

法治国家万歳。

だが、女達はさらに畳みかけてくる。

「おまけに私たちも魔法が使えなくなるから、助けてあげられないだろうしね」

「うう、おつかねえところだな」

「普通に振舞っていれば問題は無いわよ」

「そ、そうか……」

「あ、そういえば、そろそろ彼が合流する頃ね。彼から詳しく聞けば？」

プルミエルがポン、と手を叩く。

だが、俺の耳は彼女の発した不可解なキーワードを聞き逃さなかった。

「『彼』？」

だ、誰だあ？そりゃあ！？

俺が激しい嫉妬に駆られそうになった、その時。背後でガサツと地面を踏みしめる音が聞こえた。

「おお、意外と遅かったのう」

聞き覚えのあるその声。

（え……？）

俺は振り返る。

なんと、そこに立っていたのは……

「久しぶりじゃのう、ケンイチ」

森の賢者、エスティアンドリウスだった。

貿易都市の甘い罠

「おい、兄さん、干物はどうだい？柔らかくて美味しいよッ！」
「あら、そのダンディなおじさま、素敵なローブがあるのよ。きつと似合うわ」

貿易都市ベデヴィアは噂通り、大変賑わっていた。
見渡す限りの人、人、人。

本来ならば三車線分はあるだろう広い石畳の通りには露店や屋台が長々と軒を連ねていて、そのせいで、行き交う人同士が肩をぶつけながらノロノロ進む、というほどの狭さしかない。

それにしてもこの活気は大したもんだ。

歳末のアメ横とか、原宿とか、そんな感じ。

唯一、俺の世界と違うのは所々に店を構えている武器屋の存在だ。

軒先にぶら下がりながら剣呑な光を放っている剣、槍、斧……おお、物騒なトゲトゲのついた鉄球まで！

ああいうのを見ると、ああ、確かにここは異世界なんだという実感が湧いてくる。

「ここは魔法の使えん『反魔結界』の中のお」

俺の前を歩くエステイ老師が、振り向くことなく言う。

「ああした得物が必要になることのほうが多いのじゃ」

「うーむ、物騒っスねえ……」

「ま、この地が反魔結界の中にあるということが、この繁栄を築いておるとも言えるのじゃがな」

「ん？どういことっスか？」

「この世界では魔法というのは非常に重要な力での。特にその力の象徴である魔道貴族は、その力の強大さに比例して、強力な発言権を持っておるのじゃ」

「へえ」

「しかし、魔道貴族には代々受け継がれてきた矜持がある。それは『この世界の均衡と調和を保つ』ということでの。したがって、彼らは世界の外交や通商、貿易に対して一定のルールを決め、それが守られているかを監視するという役割を担っておるのじゃ」

うーむ、国連みたいなものだな。

しかし、ブルミエルやメイヘレンがこの世界においてそんな重責を担っているなんて知らなかった。

そんな重要人物達をこんなブラブラ旅に連れ回しちまっても良いんだらうか？

「じゃが、ここにはその力も及ばない。なにせ魔法の力の源である精霊力が無いのじゃからの」

「なるほど」

「それゆえにこの地ではあらゆる商売を自由に行うことができる。

本来は固く禁じられておる奴隷売買もこの都市では日常茶飯事じゃ。

まあ、無法地帯とも言つべきか……」

「奴隷……それは良くないッスよ……」

「そう思わん者も多いということじゃよ」

ここで老師は通りを角へ曲がり、薄暗い路地裏に入っていた。

俺も人波をかき分けながら、その後を追う。

ちなみに今は、俺と老師の二人きりだ。

え？あの美女二人はどこへ行ったかつて？

あれは、この都市の入口でのことだ。

「エステイ、ちゃんとアカデミーの入館許可は取ってくれた？」

街の外に術戦車を隠してきたプルミエルが言う。

「ばつちりじゃ」

「なあ、アカデミーって何だ？」

「図書館併設の研究室のことね」

「そこに何の用が？」

「あのね……メイベル・ルイーズで話したでしょーが」

「え……何だっけ？」

はあく、とあからさまな溜息。

うつつ、そのジト目はやめろっ。

「『ヤツフォン・ダフォン』教授さ」

同じく術戦車を隠してきたメイヘレンが、森から現れた。

「この都市の大図書館の研究室にいる『勇者典範』の解読者にして勇者研究の第一人者。その彼を拉致してくるといっわけさ」

「人聞きが悪いわねー」

「おや？そう言っただのは君だぞ」

「ヤツフォンか……」

老師が舌打ちを洩らした。

そこには明らかな嫌悪感が見える。

「ヤツはわしの同期でのお……昔っから暗いヤツじゃった。わしや嫌い」

「あっそ。せいせい仲良くしなさい」

「……」

ブルミエルの素っ気なさに老師も思わずあんぐり、といった様子だ。気持ちは分かるが老師、それに慣れなければいけない。

「じゃ、私は行くわね」

「え、皆一緒じゃないのか？」

「ぞろぞろ行ったら怪しまれるでしょうが」

「確かに。では、女二人で行こうか？」

メイヘレンが、妖しく微笑んだ。

ブルミエルはそれを見て怪訝な表情を浮かべる。

「いやあね、何か企んでる？」

「まさか。君ともっと親睦を深めたいと思ったのさ」

「そいじゃあ、わしはケンイチを借りていくぞい」

「え!?!」

俺は驚いた。

このスケベな老師は、絶対に美女たちについていきたいと言い出すと思っていたからだ。

「え、なんで老師と？」

「お前にとつても必要なことじゃろっ……」

老師はそう低く呟いた。

何やらただならぬ雰囲気。

俺は黙って頷くしかなかった。

「あ、ちょっと待ちなさいよ。エスティ」

「あん？なんじゃ？」

「どーよ、ケンイチはまだ生きてたでしょ。賭けは私の勝ちね」

賭け……？

「おお、そうじゃった。くそ、案外しぶといヤツ……」

「ほれほれ、金貨三枚よ。出しなさい」

「ちィ！」

大きな舌打ちを洩らし、老師は懐から金貨を取り出してプルミエルに渡す。

俺の知らないところでそんなカルチヨが……

ちょっと、シヨックだった。

てなわけで、俺達はツーマンセルに分かれて行動することになったのだ。

しかし、老師の言った『俺にとっても必要なこと』が気になってしようがない。

それは一体……？

「老師、俺に必要なことって何です？」

「すぐに分かるわい」

おおつと、随分と焦らすな。
まあ、いいや。

別の話題を振ってみよう。

「……そういや、老師はどうやってここまで来たんです？」
「あん？」

そう、俺達はこちらまで、術戦車という稀有な乗り物を使って、それこそ音速とかいうレベルで移動してきたのだ。
あのスピードは繋がれていた身なればこそよく分かる。
多少のタイムロスはあったが、後発の老師が容易に追いつけるとは
どうにも思えないのだ。

「クフフ……」

老師の背中は愉快そうに揺れた。

「魔法じゃよ」

「ま、魔法……？って、老師、魔法使えたんスか！？」

「まあ、正確に言うと魔法の力を持つアイテムを使っただんじゃが…

…

「な、何です？」

「ヒミツじゃ」

「ええ！？また焦らし！？」

などとヤイヤイやっているうちに、路地が切れ、視界が開けた。

「見てみい、ケンイチよ」

「おおっ！」

俺は思わず声を上げてしまう。

目の前に広がっているのは、あの上空から見えた大きな河だった。水面は太陽の光を受けてキラキラと輝いていて、その色は驚くほど青い。

さらに驚くのはその川幅。

対岸がぼんやり霞んで見えるほどに広いのだ。

川だと言われなければ湖にも見えるだろう。

ただ残念なのは、何故か川辺に木製の柵が据え付けられていたことだった。

あれさえ無けりゃあ、もつと息を呑むような景勝地だったに違いない。

「こいつはすげえや……」

「この川は『ブナジャラ川』という。南の大国『ムウサ』と繋がっておるので、ほれ、あのように……」

エステイ老師は川に浮かんでいる何艘もの船を指さした。

帆船だったり手漕ぎ舟だったり、その型も大小様々だが、どの船にもたくさんの荷が積まれている。

「貿易船が行き来する交通網であり、この都市の商業の動脈とも言えるわけじゃ」

「へえ……」

なるほど、と感心もするが……

「で、これがどうしたんスか？」

「ふっふ……ちよいと船着き場のほうへ行こうかの」

不敵な笑みを洩らしてから、老師は再び俺の前に立って歩き始めた。船に何の用があるのだろうか？

俺達は土手を下って、屈強な男達が荷物の積み下ろしをしている船着き場まで近寄っていった。

エステイ老師が手を上げて、その男達に声をかける。

「ガシフ、連れてきたぞい」

「あん？爺さん、また来たのか？」

ガシフと呼ばれた一際マツチヨな男の反応から見ても、エステイ老師と仲良しってワケではなさそうだ。

「ま、待て待て、人手が欲しいとおったじゃろう。この若造はケンイチ。肉体労働をさせたらお手のものじゃ。おまけに給料は言い値で良いそうじゃ」

「はあん!？」

俺は凄まじい殺気を込めた視線を老師に向ける。

こ、このジジイ!

その為に俺を連れてきやがったのか!

ギリギリと歯ぎしりをする俺に向かって、エステイ老師が口を寄せ、てぼそぼそと何やら呟いてきた。

(まあ、そう怒るでないケンイチ……)

(怒らずにいられるかッ! 散々もったいぶってコレか! ? くそ、テメエ、覚えてるよ……!)

(そういきり立つな……実はの、お前にとっても嬉しいことがあるはずじゃぞ)

(何だと……?)

(見よ……)

エステイ老師が船の上を指さした。

俺は不承不承にそちらを見る。

(な、何っ!?)

俺は思わず瞠目してしまった。

なんと、そこにはセパレートタイプのビキニを身につけた、肌もあらわな水着ギャル達がいて、何やら愉快そうに談笑していたのだ! その数、三人。

俺の視線は当然、そこに釘づけ。

おっと、しかも全員なかなか可愛いジャン……

と、夢うつつな俺に、老師はドヤ顔を近づけてきた。

(ほっほっほ、左から順に71点、73点、70点といったところかのお……)

(マジ!?俺は全員85点平均はカタいっス!……い、いや、ろ、老師、これはどういうこと……?)

(よく聞け、ケンイチ。この川には『主』がおつての)

(主?)

(その名を『ケミィ・パシヤ』という。正体は大蛇なのじゃが……)

(大蛇!)

(その大蛇、気性の荒いオスでの。他のオスがこの川に立ち入ることを決して許さんのじゃ。それは人間の男も同様でな。したがって、ここの船乗りは皆、女なのじゃ)

(ワーオ、すげえ……)

(勇者タイムを見てみるがいい)

俺は言われた通り、勇者タイムを確認する。

『22:13』

(うーん、ちよつと心許ないなあ……)

(問題はそこではない。良いか、ケンイチ。ここで重要なのは『水着ギヤルを見ても勇者タイムは減らん』ということじゃ)

(な、何っ……!)

「そうじゃ！あの、下着とほとんど変わらん布地の少なさ！そしてエロさ！なのに、アレを穴があくほど凝視しても、お主の勇者タイムは一向に減らんのじゃあああああッ!!」

ドッキュウウウウウウウウウウウン!!

「ろ、老師……あんたって人は……」

「ケンイチ……水着ギヤル……好きか？」

「エステイ先生……俺、水着ギヤルが見たいです……」

「そうじゃろうとも。お主は思うさま水着ギヤルを見ながら、なおかつ勇者タイムを稼げる。わしは水着ギヤルを思うさま見ながら、小遣いが稼げる。これは皆がシャワセになれる最高のアルバイトッ」

「老師ッ!!」

いつの間にか大声になっている俺達を、遠巻きに見て呆れている水着ギヤルたちと屈強な男達。

おっと、いけねえ!

俺はその視線に気づいて、慌ててそちらへ向き直った。

「ジン・ケンイチです！お仕事、手伝わさせていただきます！」

「お、おう、そうか……」

ガシフさんは俺達の奇行に面喰っているようだったが、すぐに我に返って体裁を正すと、こちらに薄汚れたタオルを放り投げて寄こした。

「じゃあ、働いてもらっぜ。だが、まずはそいつで鼻血を拭け」

スネークイーター

「おらおら、どうした！そんな荷物的一個も運べねえのかあッ!?」

「ひい、ひい……」

「やーねえ、情けないわねえ……」(ヒソヒソ)

「さっきは私達のことイヤらしい目で見てたわよ……」(ヒソヒソ)
「うっっ……!!」

人生は苦悩に満ちている。

以前にもそう思ったが、今回はそれをさらに痛感するハメになっていた。

とんでもなく重い荷物を担がされ、手際が悪いと罵倒される。

その合間に船の船頭である水着ギャルを少しでも盗み見ようとすると、キツイ視線で睨み返される。

俺の心は次第に擦り減っていった。

ここは地獄か……?

そもそも、この仕事、俺に一体何のメリットがあるというのか?

(くそ、あのジジイ……)

少し離れた日陰で思うさま水着ギャルを凝視しながら、どこで買ったのか、アイスクャンディーをペロペロと舐めているエスティ老師を見て、俺は自分がまんまとこの老人に嵌められたのだということに気がついた。

俺の労働賃も、先払いである老人が受け取っている。

このジジイは何の労も費やさずして、美味しいとこ獲りというわけだ。

「おい！」

「は、はい!？」

「どこ見てやがる! さっさと荷物を運べ、このモヤシ野郎！」

「は、はい……」

「やい、川に落ちるんじゃないぞ! ボンクラがあ！」

「はい……」

ガシフ氏の心温まる叱咤激励の言葉の数々に、涙が出そうになる。死に物狂いで積み荷を引きずり、水着ギャル達の隣を脇目も振らずに通過して、ようやく最後の一個を運び終えた。

「ぜえ……ぜえ……」

「は、情けねえ野郎だぜ。今までどこの富豪に困われてやがったんだ? あん？」

「そ、そう言われましたもですね……」

俺が言い訳を開始しようとした、その時。

「おーい、ガシフ! この荷物で最後お？」

背後から、可愛い女の子の声がした。

すると、それを聞いた途端にガシフ氏の、顔面神経痛のゴリラみたいな強面がニユルン、と緩んだ。

「そっだよ、最後だよ、アリイシャちゃん」

うおう! 何その反応、気持ち悪ッ!

俺は声のしたほうに振り向いて、ガシフ氏の豹変の理由を見た。

「よっ……と」

俺が必死こいて引き摺ってきた積み荷が、軽々と持ち上がる。
おいおい、どんな屈強なマッスルガールだ？と思ったら

「な、何イ！？」

俺は思わず叫んだ。

なんと、おそらく50kgはあろうという積み荷を高々と頭の上に掲げて船の後尾まで運んで行くのは、プルミエルと同じくらいの背丈の、年若い女の子だったのだ！

「よいせつと……ん？」

彼女は、持ち上げた時と同じように軽々と荷物を降ろすと、こちらの視線に気がついてにっこりと微笑んだ。

「や、お疲れさまっ」

「うっっ……！？」

ぬわぁ！ま、眩しいッ！？

危険すぎる、その笑顔！

年のころは14、5才くらいだろうか？俺よりは年下に見える。

大きな白のベレー帽の下の、緑がかった黒髪は若々しい艶に輝いていて、それ自体が光っているように見える。

ショートカットが良く似合うぜ。

そして、印象的なグリーンの瞳に、文句無く整った顔立ち。

笑った時に覗く八重歯が、この少女のあどけなさ、無邪気さを表現しているようで、なんとも心憎い。

健康的な褐色の肌も実に魅力的だ。

彼女は他のギャルたちと違って水着ではなく、白の半袖ボタンシヤ

ツに蒼のネクタイを締めて、その下には膝丈程度の黒革ハーフパンツ、それにトレッキングブーツのようなゴツイ靴といった、実にスポーティな出で立ちだった。
うーん、文句無しだ。100点！

「いつちよあがり、だね？」

「アリイシヤちゃんは本当に力持ちだねえ。オジサンは感心しちゃったよオ。この愚図なモヤシ野郎とは大違いだ」

「そんなこと言っちゃダメだよ、ガシフ。彼だって頑張ってたんだから。ね？」

「お、おお……」

し、しかも性格も良いだと……？

うつつ、しかし、こんな風にフォローされると、それはそれで情けないぜ……

「じゃあ、ボクは行くね。ガシフ、朝ご飯、御馳走さま」

「あんなので良かったらいつでも食いに来てくれよ。今度はタダで良いから」

「ダメダメ、ボクは一宿一飯の恩義は返すのさ」

この娘はどうやら朝飯のお礼に積み込みを手伝っていたようだ。

「じゃあね。あ、キミも頑張ってたね」

「お、おう……」

彼女は呆然とする俺の肩をポンと叩くと、その隣をすりと風のように横切っていった。

その去り際のなんたる清々しさ……

俺もガシフ氏も、その後ろ姿をぼんやりと見つめてしまう。

「あーあ、行っちゃまった……」

「行っちゃいましたね……誰です?」

「アライシヤちゃんか?俺もよくは知らん。だが、今朝にな……」
「ボク、お腹が空いてます。お仕事手伝うから何か食べさせて」
『ってな感じでふらりと現れたんだ」

「へえ……」

「可愛いよなあ……おまけに力持ち。あんなにちっこいのになあ……」

「ギャップ萌えっスね」

「ああ、萌え萌えで……つと、ほれほれ、ケンイチ。てめえ、ぼさつとしてねえで……」

「キヤーツ!」

「!?!」

大きな悲鳴が上がったと思うと、背後でドボン!という水音が聞こえた。

慌てて振り向くと、三人いたはずの水着ギャルが二人しかいない。

「フラニー?どうしたの!?!」

「あつ、ここよ!踏み板が割れたんだわ!」

「ちよつと!フラニー?フラニー!」

おおつと!どうやら、ギャルが一人、川の中に落ちちまったようだ。不謹慎ではあるが、俺はちらりと勇者タイムを確認した。

『24:33』

おおつ、ギャルには悪いがなかなかグッドなタイミングだ。

これは勇者の出番だな!

「うおおおっ！俺が助けるぜえ！！」

俺は上着を脱ぎ捨てると、すぐさま船の舳先へ向かって走り、そのまま勢いよく川へ飛び込んだ。

おおっと、意外に深いな。まったく足がつかないぞ。

「あ、ため、この、馬鹿野郎！」

頭の後ろで何やら慌てているようなガシフさんの声がしたが、気にしてはいられない。

だって、女の子がピンチなんだぜ！

俺は水を手でかきながら、ギャルのそばに寄っていった。

「大丈夫か！？」

と、言いながらも、俺はその必要が無かったことを瞬時に悟る。

さすがは船頭をしているだけあって、ギャルは器用に水をかきながら、すでに水面に顔を出していたからだ。

「おおっと……泳ぎ上手っスね……」

「あ、あんた……」

「助けに来たんす……けど、お呼びでなかった……？」

「なんで来たの……？」

ギャルが目を丸くして言う。

ヤバい、好感度アップの流れか？

「俺、困ってる人を見ると放っておけないんで」

出た、殺し文句！

だが、ギャルの反応は全く予想外のものだった。

「バカ！早く、早く船に上がりなさいッ！！」

「へ？」

「この川は……」

だが、全てを聞く前に、俺の目にとんでもないものが映った。水中からせり上がってくる、巨大なその黒い影……そして、思い出した。

この川の船頭が、何故ギャルしかないのか、その理由を。

『この川には『ケミイ・パシャ』という主がおつての。その正体は……』

脳裏に甦る老師の言葉にリンクするように、水面にその頭が持ち上がってきた。

『大蛇じゃ』

そう。

超巨大な蛇。

その頭が、ざばっと水面を割って現れ、こちらに鎌首をもたげたのだ。

(で……でけえ……！！)

おう、なんてこった、その規格外のデカさに顎が外れそうだ。

こいつはニシキヘビとかアナコンダとか、そういうレベルではない。

(か、怪獣だ……)

頭の幅だけでも、ゆうに三メートルはあるぞ！
となると、その下にくっついていてる身体はさらに……
一枚の鱗がビート板ほどもあるその肌が、又メ又メと光っている。
満月のような大きな目玉が、こちらをギロリと睨む。

「うお……!!」

蛇に睨まれた蛙……ならぬ、勇者。

その圧倒的な威圧感と迫力に、俺は身動きもできず、なんとか溺れないように手で水をかいているだけで精いっぱいだった。

口からチロチロ覗く、真っ赤な緞帳のような先割れの舌が、そんな俺を嘲笑っているようだった。

チクシヨウ……オバドラといい、どうしてこの世界の水生動物はサイズが桁外れなんだ？

とにかく、この状況はヤバい！

どうすりゃいい？

『その大蛇、気性の荒いオスでの。他のオスがこの川に立ち入ることを決して許さんのじゃ……』

とくれば、次の展開は決まってるようなもんだ。

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

ケミイ・パシャが、ガパツと洞穴のような口を開いて、俺を威嚇した。

ひい！鼓膜がッ！

おまけに、その牙の鋭くて長いこといったらどうだ。

アレに噛みつかれたらと考えるだけで、俺の尻の穴がキュツと窄まった。

だが、いつまでも怖がってはられない。

俺は今だ水中にいて、同じように蛇の頭を見上げているギャルに声をかけた。

「先に陸にあがってください」

「……え？」

「あいつは多分オスだけを狙うんでしょう？」

「そ、そうね……」

「だったら、今のうちに陸に……」

「でもあんたは……」

「大丈夫っス」

「でも……」

「いいから！」

それでも遠慮がちなギャルを、俺はせかすように下がらせた。

こんな場面で遠慮しあってもしょうがないだろう？

こっちは不死身なんだから、とりあえずは何の心配も無いんだ。

「わ、わかったわ……」

ギャルは渋々といった様子でゆっくりと離れていき、船に上がる。

その間、幸いにも、ケミィ・パシヤは動く様子を見せず、じつと俺を見つめ続けていた。

女に甘いつてのはどうやら噂通りだ。

さて、あとはオスである俺がどれだけ穩便にここから退散できるかだ。

女体化でもできればいいんだが、もちろんできない。

「すまん、ケミイ君……すぐに出てくよ。ここは君の川だ。文句無し」

俺はそう言いながら、水面を波立たせないように、ゆっくりと後方へ下がってみた。

「……」

ケミイ・パシヤはまだ俺をじっと見つめている。

おお？逃がしてくれるのかな？

そうだ、話せばわかる。

平和が一番さ。

船の縁にトン、と背中が当たると、俺は急いで水の中から這い上がるうとして、くると大蛇に背を向ける。

だが、それがまずかった。

「キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！」

再び大きな威嚇音！

ヒイ！頭からカジられる！？

と思って咄嗟に頭をかばって身を固くすると、水面から飛び出してきた巨大な尻尾が俺をはね飛ばした！

「うおう！」

予想外の衝撃！

俺の身体はクルクルと回りながら弧を描いて飛び、盛大に水柱を立てながら、再び水中に没した。

「おぼっ……」

鼻に流れ込んでくる水。

「ぶぶっ……ぷはっ！」

俺は慌てて水面に顔を出すと、貪るように空気を吸った。だが、その最中に足にしゅるりと何かが絡みつ়く感覚が。

う、イヤな予感……

もちろん、それは的中した。

「どわあああああああぶっ！！！！」

今度は凄まじい力で、水中に引き摺りこまれたのだ。そして、見た。

大蛇の巨体が水中でとぐろを巻くようにうねり、こちらへ向かってくるのを。

俺の脚に巻きついているのは、奴の尻尾の先端だった。

(うわ……)

その身体の大きいことといったら、まるで水中を電車が突進してくるようだ！

そんな圧倒的質量の前では当然、為す術も無い。

俺は難なくその巨体に絡めとられ、締めあげられ、全く身動きが取れなくなってしまった。

頭だけはなんとかはみ出しているおかげで、水中の様子を見る事だけはできる。

ああ、水面のなんと遠いことか……

(やばい……)

相手は何の容赦も無く、全身をぐいぐいと締めつけてくる。そういや、テレビで見たことがある。

アナコンダみたいな大きな蛇は、噛みついて敵を殺すのではなく、獲物の身体を締めあげて窒息死させるらしい。

(な、なんてこった……)

勇者にとっては最悪の相手だ。

俺はあらゆる刺激に対して不死身である一方で、自然の定める物理法則には逆らえない。

つまり、大蛇に締めあげられて圧迫死することは無いのだが、肺に酸素を取り入れないと窒息死はする。

これはオバダラに食われた時に検証済みだ。

(ぐく……なんとかしねえと……)

だが、どれほど力を入れても、この巨体を跳ね返すことなど不可能なように思われた。

(くそ……げ、限界だ……し、死ぬう……)

肺に溜めこんでいた酸素が、ごぼごぼと口の端から抜け出していく。こうなったら、もう観念するしかない……のか……？

意識が薄れてきた、その時。

どおん……と何かが水中に飛び込む音が聞こえた。

(……?)

そちらに首を向けて見る。

(あ、アライシャ……!?)

なんと、さつき別れたばかりの、あの怪力美少女!?

それがこちらに向けて、まるで矢のようなスピードでグングン水中を泳いでくる!

その速さ……まるで滑空する燕のようだ。

(す、すげえ……)

ケミィ・パシヤもそちらへ首を向ける。

(だ、だめだ、危ないぞ……)

と、俺が思った時にはもう、勝負がついていた。

ぐっと握りこんだアライシャの拳が、ケミィ・パシヤの額を打ち抜いたのだ。

ズン……!と、重たい音が水中に響く。

すると、俺を拘束していた大蛇の巨体からフツと力が抜けた。

(おおっ……)

俺は死に物狂いでその分厚い蛇腹を押し分け、水中へ脱出する。ようやく手足が自由に……

(……う)

だが、それが最後の力だった。

もう酸素が身体のどこを探しても残っていない。
あとは口を開けば、水がいつぺんに肺に流れ込んでくるだろう。

もう限界だ……

もう息が続かない……

水面までは間に合いそうもない……

身体がゆっくりと沈みかけた時。

手首がガシツと掴まれ、そして、凄まじい力がグングン俺を引き上げていく。

そして、水面へ。

「ぶはっ！……」

まるでロケットで空に飛び出したかのように、一瞬で青空が広がり、陽光が俺を照らす。

呼吸が……呼吸ができる！

「ぜはー……ぜはー……」

おお、なんとという幸せ！

俺はがつついて、肺一杯に新鮮な空気を取り込んだ。

う、うまい……

今なら空気をオカズにしてご飯三杯はいけそう！

息ができる、というこの幸福は普通に生きてちゃ実感することも無いだろう。

「大丈夫？何とか間に合ったね」

声を掛けられて、俺は振り返る。
その命の恩人は、太陽の照り返しを受ける水面にも負けないほどの
眩しい笑顔を浮かべていた。

「た、助かった……ありがとう……」

「お礼はいいから、はやく陸に上がる。また大蛇に襲われちゃうよ」

「し、死んでないのか……アイツ？」

「気を失ってるだけだよ。ボクは殺生は嫌いな」

そう言うと、アリイシャは俺の手を引きながらスィーと滑るように
水面を泳いでいき、俺を船の上に押し上げてくれた。
そして、自分も上がる。

「いやー、よかったねえ、間に合って」

「き、君のおかげだ……」

「ボクはもうキミが死んじやってると思ってたよ。あんなのに締め
あげられてよく無事だったね？」

「人より頑丈なんだ、俺のこの……」

息継ぎがてら、腹を叩いてみせる。

「ボディー……だが、窒息するところだったんだ。危なかった……」

「ケンイチ！」

ガシフさんがこちらへ走ってくる。

おお、そんなに心配してくれていたとは……

「この馬鹿野郎！」

「しはぁ！？」

間髪いれずに、ガシフ氏の凄まじい右フックが俺の頬に叩きつけられた。

吹っ飛ばされ、危うく再び水中の人になりかけたところを、アリュシヤがはっしと俺の腕を掴んで止めてくれる。

「てめえ、あれほど川に落ちるんじゃないやねえと言っただろうが！って、おお痛えッ！どんな体してやがんだ！？まるでメタルだ！」

「す、すみませんっした……」

「ガシフ、許してあげてよ。彼、川に落ちた女の子を助けようとしたんでしょ」

アリュシヤがとりなしてくれる。

ああ、本当になんて良い娘なんだ。

嫁に来てくれないだろうか。

「ちっ、まあ、アリュシヤちゃんがそう言うなら……しょうがねえな……」

「うんうん。ガシフ、カツコイイね。罪を憎んで人を憎まず、だね」

「おう、そうとも。わっはっはっはっは！」

「あっはっはっはっは！」

二人で肩を組んで、何の脈絡も無く大笑いしている様子を、ギャルたちも、他の男達も微笑ましく見つめている。

今の会話のどこにそんなツボが？なんて思った俺も、気がつけば笑顔になっていた。

その時

「うっむ……」

「おわあ！エステイ老師！？いつの間に!?!」

「エステイ忍法じゃ」

「な、何だそれ……」

いつの間にか背後に立っていたこの老人。
何故か、じいっとアリイシヤを凝視している。
ただならぬ光が、その目には宿っていた。

「ど、どうした？」

「イイ……」

「はあ？」

「100点……ハアハア……」

そう来ると思ったぜ、スケベジジイめ。

Unroidomon (メイヘン視点)

ベデヴィア都市図書館へと繋がる『アデイ・チアゴ通り』は、商店の立ち並ぶ繁華街だ。

掘り出し物を血眼になって探す目利き自慢や、旅の思い出に個人的な土産物を探す観光客、そして、そんな彼らに自分の商品を売りつけようと必死に舌を動かす商人。

それらの人間達が集い、群れ、一つの大きな熱のうねりとなり、混沌とも呼べる活気をもたらしている。

『永遠の自由都市。自由に万歳！』

頭上にはためく横断幕には、大きな字で誇らしげにそう書かれていた。

ごった返す人混みの、その、むっとするほどの熱気の中で、私は溜息を吐く。

あの横断幕の意味するものは、自由への純粋な賛歌などではなく、通商を制限する魔道貴族へのあからさまな嫌悪でしかないのだ。

「やれやれ……私達の身分がばれてしまったら、あの横断幕の隣に吊るされそうだな」

「その前にマワされるかもね」

「ははは、そいつはいいね。マワされて吊るされる、か。ケンイチみたいだな」

私は術戦車に繋がれ、悲鳴を上げていた不幸な勇者の姿を思い出す。

「違うわ。彼は吊るされながらマワってるの」

「あまり違わない気もするな……」

そんな会話を続けながら、私達は押し寄せる人波をすり抜け、商人の呼び声を振り払いながら、ひたすら前へ 目的地へと進んで行った。

歩く速さというのは、通常は足の長さ按比例するものだが、目の前の小柄な少女はその物理法則を無視しているかのようになり、スイスイと滑るようにこの雑踏の中を歩いていくから不思議だ。

しばらくすると、商店街が途切れ、目の前に大きな広場と、そしてその先に巨大な正方形の建造物が現れる。

目が火傷しそうなほど燦然と輝く、金色の外壁。

豪華絢爛という言葉で辞書で引くと、この図書館の名が三番目くらいには載っているだろう。

『ベデヴィア貿易都市図書館』。

『貿易都市』という異文化交流の盛んである立地の性質上、東西南北の書物が様々な地方から集まり一堂に会する、まさに書物の博物館といえる。

「いつ見ても立派な佇まいだな」

「そう？成金つぼくて私は嫌い」

「まあ、確かにそんな風ではあるな。百年ほど前に、この土地の豪商連中が金を出しあって建てたらしいからな。おそらくは天文学的な建造費だったろうね」

何を象ったのか判然としない前衛彫刻の立ち並ぶ広場を抜け、妙に段差の高い階段を上り、正面のゲートをくぐって建物の中へ。

豪壮な金色の外壁と違って、内部は白一色の、実にシンプルで清潔感あふれる造作になっている。

それはおそらく、この図書館が『アカデミー』と呼ばれる研究機関も兼ねているからであろう。

それでも、床一面に高級な大理石を惜しみなく嵌めこんでいたり、さりげなく巨匠と呼ばれた名工の彫刻が飾られていたり、所々に豪商の潤沢な資金力が見え隠れしている。

私達は、まず受付に向かった。

ブルミエルはカウンターの前に立つと、そんな馬鹿なと思わず言いたくなるような、完ぺきな笑顔を作って見せる。

「ごめんくださいまし。私達、エステイアンドリウス氏の紹介で参りました。『プリミイ』と『メイ』と申します」

「はあ……………」

分厚い眼鏡をかけた、いかにもインドア志向という感じの、線の細い青年が顔を上げた。

彼は気だるそうな仕草で机から来賓ノートを取り出し、パラパラとそれをめくりはじめる。

「えーと？エステイアンドリウス氏の御紹介……………ああ、はい、お話は伺ってますよ。どういったご用件でしょう？」

「ヤッフオン・ダフォン教授はいらっしゃいます？教授の研究について、二、三、質問させていただきたいことがございまして……………」
「ヤッフオン教授……………」

青年の顔が曇った。

「どうかなさいまして？」

「ヤッフオン教授は……………一週間前からお戻りになられてません」

「……………どういうことですか？」

「教授は研究室にこもるタイプの方なので、滅多に外出なさらないんですが……………一週間前に来客があつて、その方が教授を外に連れ出したまま、戻られないんですよ。我々も心配して捜してはいるんで

すが……」

「来客？」

「立派な身なりの男でしたよ。丁寧な言葉遣いの、大柄な紳士でした。しかし、紹介状も無いので最初は面会をお断りしたんですがね。それでも『これを渡せば教授から会いに来る』と言って一枚のメモ紙を渡されました」

「そこには何と？」

「さあ？内容を確認せずにそのまま教授に渡しましたからね。でも、それを見た時、ヤツフォン教授は妙に興奮した様子で、すぐにその男と会って、そのまま蒸発してしまっただんです」

「……」

これはどういうことだろう？

誘拐？

しかし、わざわざ図書館の研究員をさらったところで、何かしらのメリットがあるとも思われない。

「うーん……」

私の隣で、プルミエルも顎に指を当てて深く何事かを思索している様子だった。

そして、口を開く。

「……ヤツフォン教授の研究室を見せていただけませんか？行く先について、何かヒントが見つかるかも」

「え、でも、それは……教授の許可無しには……」

「まあ、君。そう固いことを言うものじゃないよ」

渋る青年の前に、私は金貨を五枚、静かに置いた。

「あ……」

「恋人に何かプレゼントしてあげるといい。大丈夫。この事は決して『アカデミー』に漏れるようなことは無いし、私たちも何かを盗んで行こうという輩ではない。不安であれば君も立ち会ってくれていいし、なんならここを出るときに私達の身体を隅から隅まで調べても良いんだよ」

「隅から隅まで……」

青年は私達を覗きこんで、ごくりと生唾を呑んだ。
やれやれ、男というのは実に単純な生き物だな。

「わ、分かりましたよ……教授の研究室は研究棟の二階、27号です。……これが、鍵です」

彼は鍵を我々の前に置いて、そのまま流れるような手つきで金貨を自分のもとへ引き寄せ、胸のポケットにしまい込んだ。

「あまり人目につかないようにしてください」
「分かってるさ。では、また後でな」

私達は足早に研究棟へ向かった。
歩きながら、プルミエルが溜息を洩らす。

「……賄賂なんて、薄汚い手を使うわねー」

「おっと、人聞きの悪いことを言うなよ。『互いの利益を守る賢い取引』と言ってくれ。ここは商売の街だぞ？」

「まー、いいけどさ。でも彼があなたの言葉通りにボディチェックしたがつたらどうするのよ？」

「させてやるわ」

「私はイヤよ」

「もつと自分のボディーラインに自信を持ちたまえよ。君は十分、魅力的さ」

「別にボディーラインに自信が無いから嫌がってるわけじゃないんだけど」

長い渡り廊下を抜け、階段を昇る。

「ブルミエル、どう思う？」

「素敵なボディーラインですわよ、メイヘレンさん」

「そっちじゃない。ヤツフォン教授を連れだした男のことだ」

「うーん、今のところ考えてもしょうがないんじゃない？」

「まあ、確かにそうなんだが……目的は教授自身だったのか？それとも、彼の研究内容に興味があったとか？」

「後者だとして、どう考えるの？」

「そこだ。勇者研究の第一人者に用があるのは……勇者じゃないか？」

「ケインチ以外に勇者がこの世界に存在するということ？」

「そう考えることもできる」

「ふっん……」

手元に判断材料が少なすぎる今の状態では、全てが憶測でしかない。だが、勇者がこの世界に一人だけ、というのはこちら側の勝手な思い込みだったのではなからうか？

確たる結論も、そして推論さえも満足に出せないまま、私達は『27号室』の前に立っていた。

ここがヤツフォン教授の研究室……

「開けるわよ」

「ああ」

ブルミエルが鍵を差し込み、回し、扉を開いた。
彼女は中を覗いて一言。

「……………汚いわね」

同感だ。

その研究室は決して狭くはなかったが、部屋中に書物が山積みになっ
ていて、それが侵入者を妨害するかのようなささやかな壁となっ
ている。

そこをかるうじて避けても、至る所で、まるで氷柱のようにうずた
かく書物が積み重なっていて、実に歩きづらい。

この研究室はヤツフォン教授の、というよりは文献史料室、いや、
その倉庫のようだ。

「おまけにメモ魔だったと見える……………」

殴り書きをしたようなメモ紙が、びっしりと壁一面に貼り付けられ
ていて、実に壮観だ。

おまけに、そのメモの内容も意味不明なものばかりだった。

『不吉な銅像。三步分の余裕』

『次元の狭間で遊ぶ猫の噂』

「うーむ……………まるで詩人だな」

「……………無いわねえ」

私が感心している横で、ブルミエルは教授の机の上をガサガサと荒
らしまわる。

「おいおい、あまり散らかすと我々が物盗りのようじゃないか」

「無い」

「何が？」

「『勇者典範』に関する研究ノート。それが見つかれば教授本人には用が無いんだけど……」

「どこか別の場所に隠してあるんじゃないのか？」

「でも、勇者の研究なんてマイナーも良いところだし、誰かに盗まれる可能性は低いわ。おまけに研究室にこもるタイプの人が、自分の研究をどこか別の場所に隠すかしら？」

「ううむ。確かに」

「こんなに部屋を汚せる人間がそんなに几帳面だとも思われないしね」

「では、やはりヤツフォン教授を捜すしかないのか」

「まあ、教授抜きでもジャパテイ寺院跡には行けるけどね。勇者の研究について後で論文にまとめるときに、どうせなら専門家の意見も聞いておきたいと思って……おっと、これは……」

「何だ？」

「これ……どう思う？」

ブルミエルがこちらに一枚のメモ紙を見せる。

私はそれを受け取って、そこに書いてある文字を読んだ。
そこには

『魔王』

と、書いてあった。

その活字のように綺麗な字は、明らかにヤツフォン教授の書いた文字ではない。

では、誰が……？

「……一週間前に教授を連れだした男か？」

「そうね。その可能性は高いわね」

「『魔王』……？」

「勇者の研究をしていた人には確かに魅力的なキーワードかもね」

魔王……

つい最近、他人の口からその言葉を聞いたような気がする。

あれはどこだった？

あれはいつだった？

あれは誰から……

「プルミエル」

「何？」

「私は最近、その言葉を聞いたよ。『魔王』という名を確かに聞いたんだ」

「……詳しく教えて」

私はアルヴアンの宝物庫での出来事を話した。

そこの番人が語った、最後の言葉。

『お前が己を信じ、世界と繋がることができれば……魔王とて恐れるものではない』

「……彼は確かにそう言った」

「勇者……勇者のことを研究する学者を魔王……魔王がさらっていった……筋は繋がるわね……」

プルミエルは『魔王』の書き込みを見つめながら、じっと何事かを思案しているようだった。

「……」

「何を考えているんだ？」

「……ふ、ふふ」

不敵な笑みを浮かべて、彼女が振り返る。

「面白くなってきた……そんな気がする」

……同感だ。

アイアンモンガー

「欲しい……」

プルミエル達との待ち合わせの場所へ向けて路地を歩きながら、エステイ老師がしみじみと呟いた。

「何が？」

「アライシャちゃんじゃ」

おっと、どうやらこの爺さんはさきほど別れた美少女にまだ未練があるらしい。

「老師、発言に犯罪の匂いがするっス」

「違うわ！エロティックな意味合いで言ったのではないわい」

「へ？」

「あの娘の尋常ならざる腕力、膂力。この先の反魔結界の中では、超役に立つじやろう。おまけに超可愛いし。性格も良いし。良いとこ尽くしじゃ。あー、もう、何で誘わなかったんじゃ、バカ！」

「バカって……あの子だつて旅の途中だつて言つてたでしょう。何で『俺について来いよ』なんて言えるんです？」

「断られたら、その時はその時じやろうが……まったく、積極性が足りんというか……」

いや、無理。

そんなアグレッシブビーストモードを完備していたら、今頃は彼女の一人や二人いるつての。

年頃の男の子つてのはシャイなもんなんだ。

「だいたい、これ以上カワイ子ちゃんはいらないっスよ。こっちは禁欲中なんスよ」

「大変じゃのお」

ひ、他人事だと思つて……この野郎。

「ワシヤどこでも美女見放題、触り放題」

「……」

「イヤらしいこともやり放題。ふへへ、勇者でなくてよかつたわい

……」

「お、俺だつてイヤらしいこと色々してえよおおおおッ!!」

「……天下の往来で何バカなこと叫んでるのよ」

「おわああ!!」

突然後ろから声を掛けられて、俺は魂が肉体から押し出されたと錯覚するほど仰天した。

慌てて振り返ると、そこには美女二人　プルミエルとメイヘレンが立っていた。

「び、びっくりした……」

「もー、人を見てびっくりするなんて失礼ねー」

「ス、スマン……」

いつからそこに?と聞く勇気が持てなかつたので、俺はとりあえず頭の中で素早く別の話題を模索する。

「ヤ、ヤッフオンさんは?会えたかい?」

「会えなかつた」

「へ?留守だつたの?」

「行方不明中」

「へえ……つて、え！それって結構大変なことなんじゃ？」

「強引に誘拐されたわけじゃなくて、誰かに連れ出されて、そのまま戻らないみたいね」

「うーむ、入れ違いってことか？ツイてないな」

「そうでもないよ」

メイヘレンが言う。

「魔王と鉢合わせずに済んだみたいだからな。ツイてるんじゃないか？」

「ま、魔王？」

「魔王だ」

「え！？魔王つて!？」

「魔王よ」

「『バラモス』とか『デスピサロ』とかそういうヤツか？」

「ばらもす？」

「いや、何でもない。でも……マジ!？」

「まあ、魔王がヤツフォン教授を連れ去ったと断定はできないがな。

魔王に何らかの関わりがある者とみていいだろう」

「スゲエ……『魔王』って本当にいるんだ……」

「何をいまさら。あなただって『勇者』でしょう？」

「そう言われりゃそうなんだけどさ。そのことにはあまり自信が持てなくてな」

しかし、どうしよう？

俺は勇者だから、もしも魔王が現れたら俺が倒さなくちゃいけないんだろうか？

いや、そんなことは無いだろう……

だって、俺、普通の高校生だし……

備わっているチートな能力とえば『無駄に不死身』なだけだ。
ビームも出ないし、空も飛べない。

「それで？どうするんじゃ？わしゃヤツフオンのことはすっぱり諦めて先を急ぐのが吉じゃと思う」

エステイ老師が言う。

老師はよっぽどヤツフオンって人が嫌いなようだ。

「むづん、そうね。何の手掛かりも無いから、捜しようも無いというのが正直なところよ」

ブルミエルは思案顔で頬を膨らませながら、腕組みをした。

「あまりタイムロスをしてもケンイチが不憫だ。我々と違って彼の時間は限られているんだからな」

「なんか瀕死の重病人みたいだな、俺……」

「まあ、目的地ははっきりしてるんだし、とりあえずは『チャペ・アイン』に向かいましょうか」

と、ブルミエルが言ったところで

「おい！例の奴らがまた始めるらしいぞ！」

「マジか？うひょお、行こうぜ行こうぜ！」

突然、周囲が騒がしくなった。

特に男連中が、妙な興奮に目を光らせながら、道を我さきにと駆け出していく。

「ん？何だあ？」

「さーね……？」

「面白そうだ。行ってみようか」

「おいおい、さっき俺の時間が限られてるってあんたが言ったばかりだろ……」

それでも結局、メイヘレンの言葉に全員が促され、俺達は人々の流れを追ってみることにした。

「さあさあ、御来場の諸君！今日も『カンターダ商会』の自由競売の時間がやってきたぞ！」

うおお……！と地鳴りのような歓声上がる。

そこは貿易都市の大通りが東西南北に交わる十字路で、大きな広場になっている場所だった。

大小様々な屋台が立ち並ぶ様子はまるで縁日だ。

その中心には立派な舞台が設けられていて、壇上では派手な道化師のように着飾った男が、この場の雑踏に負けないほど、良く透る大きな声で客の呼び込みをしている。

その甲斐あってか、周囲には目をぎらつかせた男達で人だかりができていた。

「さあ、スケベな奴らは寄って来い！顔の良い女！体の良い女！背の低い女！背の高い女！痩せた女！太った女！選り取り見取りだよ！」

おおっと、これはつまり……

「奴隷オークションじゃ」

俺の隣で、エスティ老師が言う。

「しかも、女の競売らしいのぉ。まったく、見るに堪えんな……」
「奴隷つて……」

俺は壇上に目を移す。

バカみたいに下品な言葉をわめきたてている道化師の後ろでは、首に鎖をつけられた女達がぐったりとうなだれたまま一列に並ばされていた。

その全員が目が、不安と恐怖と、絶望に濁っている。

(くそ、ひでえな……)

俺は何ともやるせない気分になってしまう。

どうしてこういう商売があるんだろう？

ここには人間の尊厳なんてものは全く存在しない。

「さあ、早い者勝ち！購入希望の方は手を上げてくれ！まずは……この女！おら、こっち来い！」

右端に立っていた娘が、ぐいと腕を掴まれて舞台の中心に引つ張り出された。

彼女は緊張にぐっと体を固く硬直させて、周囲から寄せられる好奇の目に耐えているようだった。

「名前は『エレーナ』。ワアオ、ソソられる名前だろう？まあ、痩せてはいるが、ウブな田舎娘だから色々と教え込む楽しみつてのがある。それこそ、男の楽しみの最たるものだな。よし、金貨十枚か

らいこうか？」

「十二枚！」

「十五枚！」

一斉に観客から声上がる。

「……また、随分と安いのお」

「高い安いの問題じゃないツスよ……アイツもコイツらもどうかし
てるぜ」

くそ、だんだん腹が立ってきた。

「三十枚！」

「三十三枚！」

「おおっと、いいところまで来たな。おら！てめえ！もっと高く買
ってもらえるように、愛想を振りまかねえか！」

そう怒鳴って、道化師が腕を振り上げる。

その手には、短い革の鞭が握られていた。

「あ、あの野郎！」

俺が叫んだ瞬間。

事態は急展開を見せた。

観衆の中から飛び出した黒い小さな影が、素早く舞台に駆け上がり、
勢いをそのままに道化師野郎にタックルを食らわせたのだ。

「ぬお！」

道化師はその衝撃で舞台の端まで転がっていく。

「ぬ、くそ……な、何しやがる！この野郎！」
「タツクルしたの。気付かなかった？」

なんと 黒い影の正体はプルミエルだった！

彼女は舞台の上で腕を組んで、鞭打たれる寸前だった娘をかばうように仁王立ちしていた。

そのあまりにも凜々しく、堂々とした立ち姿は神々しくさえある。奴隷として並ばされている女達も、呆然とそれに見入っていた。

「女の子に暴力を振るうのはやめなさい。男として恥ずかしくないの」

「な、何だと……」

「この娘達はみんな私が買い取るわ。いくら？」

「は？」

突然の提案に、相手は呆気にとられたようだった。

「いくら？」

「へ……へっへっへ……」

男は顔に下賤な笑みを浮かべて、立ち上がった。

「いやあ、お嬢さんに払えるかな？そうさな……一人あたり金貨五十枚として、十人で五百枚になるわな」

「五百枚」

「びつくりしたかい？だが……」

男は卑猥な目つきでプルミエルの頭からつま先まで、全身を見つめる。

「あんななら……この女ども全員と交換で十分元が取れそうだな……
へへ、たまらんぜ」

「金貨五百枚ね。わかったわ。後で持ってくるから、娘達は裏で休ませてなさい」

「な、何だと……？」

「手付に金貨二十枚置いてくわ」

プルミエルはスカートの裾から魔法のように巾着袋を取り出して、道化師の足元に放り投げた。

男はそれを慌てて拾い上げると、中を確かめ、枚数を数えだす。

「じゃあ、またあとで」

プルミエルは踵を返し、颯爽と舞台を降りようとする。
俺はその威風堂々とした姿に、感動を覚えていた。

(か…… かつこいいぜ、プルミエル…… 惚れ直したぜ！)

同時に、奴隷制に憤ってはいたけれど、彼女のようにそれを実行に移さなかった自分が恥ずかしくなった。

何を躊躇していたんだ、俺は……

これは本当は、勇者である俺の役目のはずだ。

「ま、待てっ！」

道化師が彼女を呼び止める。

「何よ」

「へっへ……なあ、五百枚は女達に分だぜ、お嬢さん。俺の商売を

邪魔した慰謝料は別だ」

「はあ？」

「慰謝料は金貨百枚。そいつも合わせて持ってきてくんない……」

あの野郎、足元見やがって……！

「あの……」

舞台の中央に立たされていた娘が、なんとか男をなだめようとする。

「黙ってる！」

男はそう叫んで、あるうことが、その娘の頬を思い切りひっぱたきやがった！

ぱん！と乾いた音が響く。

くそつたれ！もう我慢ならん！

「この野郎！」

俺は今度こそ壇上に飛び上がる。

あの人でなしに、人の道を教えてやる！

しかし 先にプルミエルが動いた。

彼女は道化師に向かって素早く前進し、その顎に強烈なアッパーを叩きこんだのだ。

「ぐへえあ！」

的確にあごの先端を捉えたその劇的な一撃に、男の体が一瞬、宙に浮く。

浮いた足が地についた時には、男はもう完全に意識が地球外に飛んでいるようだった。

力を失った膝が体重を支えられなくなり、そのまま男は前のめりに倒れ、動かなくなる。

素人でも分かる、絶対に起き上がれない倒れ方だ。

またしても一歩出遅れた俺。

しょうがないので、プルミエルの後姿に向けて拍手を送った。

ううっ、情けない。

「い、いえーい…… ナイスパンチ……」

「暗殺拳法よ」

「え！ そうなの！？ スゲエ！」

「嘘」

「嘘かよ！」

と、俺達がちょっとした漫才を始めた時だった。

「あのアマ！ アンドレアを気絶させやがった！」

「困め！ 困んじまえ！」

「どチクシヨウ、ミンチにしてやるぜ！」

舞台の後ろのテントから、最高にガラの悪そうな男達が十人ほど飛び出してきて、あっという間に俺達二人を取り囲んでしまった。

おまけに全員が全員、手に斧やら剣やらの物騒な代物を握っている。舞台を囲んで成り行きを見守っていた観衆はそれを見て、悲鳴を上げながら散り散りになって逃げていった。

「うお……こんなに味方がいたとは……」

「意外だったわね」

「落ち着いてるな……」

「慌ててもしょうがないでしょ」

「男は切り刻め！女は『館』に連れてくぞ」

人相の悪い面が、じりじりとにじり寄ってくる。

と、ここで急に「ひぐっ」という短い悲鳴とともに、その面の一つがぐるんと白目を剥いたかと思うと、そのままサリと倒れ込んだ。な、な、何だ？

「ペ、ペトロ！？どうした！？」

「加勢するぞ、お二人さん」

涼しげな笑みを浮かべて立っているのはメイヘレンだった。

背後から哀れなペトロ氏の首筋に手刀を打ちこんで倒したらしい。

おいおい、この世界の女つてのはどうして皆こんなに強いんだ？

「仲間か！？」

「くそ！このアマ！やっちまえ！」

号令とともに、男達が一斉に襲いかかる。

だが、展開は一方的だった。

「せい」

「ぐふ！」

「てい」

「ごはあ！」

ブルミエルは大して機敏に動き回るわけでもなく、向かってくる男達の顔面にひたすら拳をまき散らす。

また、いいところに当てるんだ、これが。

眉間、鼻元、こめかみといった人体急所を的確に打ち抜いていく様

は、オーフレイムも真っ青だ。

「そら」

「げえ！」

「ははは」

「うごあー！」

メイヘレンはプルミエルとは対照的に優雅に舞い、その長い脚を振り回して、男達を薙ぎ倒していく。

彼女もまた闘い方というのをわきまえているようだった。

ハイ、ミドル、ローと実に器用に蹴り分け、正確に相手を倒していく様は、ヒョードルも真っ青だ。

「くそ！強えぞ！この女達！」

「女は後回しだ！野郎を刻んじまえ！」

スーパーガール達に恐れをなした男達は矢地回復とばかりに俺に向かって殺到してきた。

「死ねや！」

ブン！と一斉に振り下ろされる無数の剣と斧。

だが、当然この不死身のボディーの前では割り箸同然だ。

「ハッ！」

俺は全身でその刃の雨を受け止めた。

「げえっ！」

悲鳴を上げたのは男達だ。

振り下ろした剣は曲がり、突き刺した剣は折れ、頭を力手割ろうとした斧はよほど勢いをつけて振り下ろしたのか、柄の部分からボツキリとへし折れてどこかへ飛んでいった。

「な、なんだ！？この野郎は！？」

「まるでメタルだ！」

混乱する男達に向けて、俺は決め台詞を贈る。

「蚊でも刺したか？」

キマった……

「う、ぐ、チクシヨウ！おい！親分を呼んで来るぞ！」

「そうだ！親分が出て来たらテメエらなんぞ……」

「親分！来てくだせえ！！」

男達は逃げ出すようにして一斉に舞台を飛び降りると、我先にといった様子で、先ほど自分たちが飛び出してきたテントへと駆けこんだ。

どうやら加勢を呼びに行ったようだ。

「親分って？」

「ボスってことですよ」

「手下どもの様子から見て、よほど屈強なタイプのようなな。ここはケンイチに任せるよ。上手いこと戦意を喪失させてくれ」

「うつつ、あんまりおっかない人だとヤダなあ……」

「いいじゃん。ボッコボコに殴らせてやって満足させれば」

「ボッコボコに殴られるのだって結構疲れるんだぜ。不死身とはい

え……」

「おっと、どつやう登場のようだよ」

俺達はテントの入口に注目する。

ゆっくりと幕がめくり上げられ……そいつが姿を現した。

出た……謎めいた男

「んん……？」

「あら……？」

「ふうん……」

きつとムキムキの大男が鼻息荒くして飛び出てくるぞ、という俺たちの予想は裏切られた。

テントから出てきたのは、どちらかというとき長身痩躯といった体格の、落ち着いた雰囲気のものだったのだ。

上等そうなシャツと紺のスーツを身にまとい、ゆったりとした優雅な足取りで、急ぐでもなく焦らすでもなくこちらへ向かってくる。

三十代の半ばくらいだろうか？

綺麗に撫でつけられたグレーの髪は清潔感が漂うし、微笑を湛えた顔つきは相当ハンサムだ。

このままハリウッドのレッドカーペットの上を歩いていても全く違和感が無いほど、都会的な、洗練された雰囲気を持っている。

そっぴや、ちょっとジョージ・クルーニーに似てるかな……？

何にしても、この紳士がさっきの上品な連中の親玉、というのはどうにも現実味が無い。

「よッ……と」

彼は手をついて、ゆっくりと舞台上上がると、警戒している我々の前に堂々と立った。

「やあ」

そう言うてにこやかに笑いかけてくる様子には、敵意も害意も感じられない。

「あ……ども」

俺もそれにつられて、思わず頭を下げて挨拶してしまう。

日本人ならではの習慣だ。

頭を上げて、男はずっと微笑を浮かべたままだった。

「ども、あの連中は野蠻でいけないな。まったく　こんな美しいレディ達を相手に乱闘を演じるなんて、正気の沙汰じゃないね」

「はあ……」

男の眼は、プルミエルとメイヘレンに向けられる。

「それにしても驚きだ。これほど美しいお嬢さん方が、あの連中を手玉に取るだなんてね」

ううむ、どうやらこの人の眼には俺は映っていないようだ。

「あなたの部下ならちゃんとしつけておきなさいよ。私は平和的にあの娘達を買い取ると言ったのよ」

プルミエルがつん、と胸を張って言う。

この少女の辞書には『物怖じ』という単語は無い。

「ほう……そうなのか？」

男は、舞台の下で不安そうに成り行きを見守っていた手下どもに声をかける。

「へ……まあ……」

「おいおい、だったら悪いのはこちらのほうだろう？」

「へ、へえ……」

オドオドと、力無く答える手下ども。

そのやりとりを見て、俺は背筋に妙な悪寒が走った。

(なんだって、あの連中はあんなに怯えてるんだ……?)

さっきまであんなに目を血走らせていた連中が、どうしてあんな温厚そうな男一人に対して、必要以上にビクついているのか？
大体、あのハンサム男はなんだか違和感がある。
どこがどうとは言えないけれど、どこか常人とは違うような……

「君」

「は、はいっ？」

突然声を掛けられて、俺はハッと我に返る。

「な、何ですか？」

「すまなかつたな。どうも、こっちの誤解だったみたいだ」

「いえ、分かってくればいいんです。平和が一番っす」

「いいことを言う。……俺の名前は『ラーズ』。『ラーズ・ホールデン』だ」

「あ、俺、ジン・ケインチです」

「ケインチね……ケインチ、ケインチ……」

呪文のように俺の名前を呟きながら、ラーズさんは親しげに俺の首に手を回し、肩を組んできた。

「お、おおっ？」

おう、吐息がかかりそうなほど顔が近い。
まさか、モーホーの気があるのか？

貞操の危機！

俺はケツをきゅっと引き締めた。

「ど、どうしたんですか？」

「ケインチ……実はちよつと相談があるんだが……」

ヤベエ、来たよ……

俺はぐつと身構える。

残念だが、性的な相談には乗ってやれない。

「な、何ですか？」

「売りに出されていた娘たち……あの娘たちを君たちが可哀そうだ
と思う気持ちは良く分かる。そうだな、俺だって彼女達の親だつた
らきつと身も張り裂ける思いになるだろう」

「はあ……」

「でもね、俺たちのことも理解してほしいんだ。君らのように正義
感あふれる素晴らしい人々に、俺たちのことを単に人身売買を生業
にしている悪党連中だと思われたくない」

「……」

「俺たちは単なる仲介役なんだよ。娘の親に相応の対価を払って、
本人も納得の上でこういった競売に出てもらっている。彼女たちも
自分の体が良い値段で売れば、その分、家族に送られる金額も多
くなるという寸法だね。これは、実は全員が利益を得る商売なんだ。
分かるかな？」

語りかけてくる声は優しげだが、どこか言い訳めいた感は否めない。何よりも、俺の直感が告げている。この男は信用できない。

「でも、女の子を鞭で叩こうとしてたじやないですか」

「ああ、はっは！あれは演出さ。あいつ　アンドレアっていうんだがね。あいつは普段からああやって物事を大袈裟に見せて観客を煽るのが得意なのさ。ピシヤンとびっくりするほど大きな音は出るが、女の子が痛いと思うこともないほど上手に鞭を使える奴なんだ」

「……」
「おつと、疑ってるな？まあ、全てを理解してくれとは言わないよ。確かに、やってることは奴隷の斡旋なんだからね」

「……俺に相談ってなんですか？」

「それはこういうことだ。つまり、俺達は商売としてあの娘達を売っている。そこを　今回の責任がどちらにあるにせよ　ケチがついてしまうと、これから俺達は商売がしづらくなってしまおうというわけだ」

「まあ、分かります」

「おつ、そうか？君は賢いな、ケンイチ。素晴らしい男だ。そこで聞いてくれ。お互いに円満に物事を解決するためには、ちょっとした見せしめが必要になってしまふんだ。つまり、君に　痛い目にあってもらわなければならぬ。観衆の前で。今すぐに」

なるほどね。

つまり、奴隷商人としてのメンツを取り戻すために、俺に殴られてくれというわけだ。

「バカなことだと思っただろう？君のプライドにも傷がつくだらうね。だが、そうしてもらわないと俺達はこれから先も商売ができないんだ。寒村の人間は娘が良い値で売れないと首を吊るしかない」

「……いいツスよ」

「おおつ？本当か？」

俺は、この場をひとまず円満に切り抜けられるなら、それで良いと思っただ。

これ以上、ラーズ氏の詭弁を聞くのもうんざりだったというのもある。

どんな正当な理由があるにせよ、人身売買なんて最低だ。

「ただし、あの二人には絶対に手出しをしないでください」

俺は顎をしゃくって背後のプルミエルとメイヘレンを示す。

俺一人を痛めつけて気が済むならそうすればいい。

どうせ不死身のこのボディーだ。

百人乗っても大丈夫。

「わかった。約束しよう。これで決まりだな。大丈夫、ゲンコツ一

発でいいんだ。手加減するから、なるべく派手に倒れて見せてくれ」

「わかりました」

「ケンイチ、君は大した男だ」

パツとラーズ氏が身を離す。

そして、舞台の下で成り行きを見守っていた部下のもとへ歩いて行って、何やらゴニョゴニョと打ち合わせを始めた。

「あいつ、何だっつて？」

隣に立ったプルミエルが訊いてくる。

「俺を一発殴らせてくれと。それでキャラにしてくれるみたいだ」

「どつするの？」

「殴らせてやるさ」

「えー？」

「さっきは殴られるって言うてたじゃないか」

「そうだっけ？私は徹底抗戦も辞さない構えだったんだけど」

「ああ、確かに君の暗殺拳法なら可能かもな。でもさ、とりあえずはここを平穩無事に切り抜けたほうが良いだろ？」

「どうだかねえ……：奴隷商人を凶に乗らせるだけのようない気がするけど……」

「ここは我慢の場面だと思う。あの娘達を助けられるだけでも良しとしようぜ」

「……わかった」

「大丈夫、俺は不死身さ！イエイ！」

「別にあなたを心配してるわけじゃないんだけどね」
「……」

返せ！俺の『イエイ』！

せつかくわざと気丈に振舞ったのに……何という寂しさだ。
するとここで、打ち合わせが終わったのか、ラーズ氏がこちらを向いて、またにつこりと微笑んだ。

舞台上にさきほどブルミエルに昇天させられた道化野郎、アンドレアが這い上がり、最初と同じ調子で、再びがなり声を上げた。

「さあさあ、お立会い！さっきの乱闘は小粋な余興！今から我々のボス、その名も『魔王ラーズ』が乱入者にキツイ罰を与えるぞ！さあ、空前絶後のハードコアが始まるぞ！」

ここでも『魔王』？

今、ブームなんだろうか？

まったく、どんだけ魔王がいるんだ、この世界は。

人身売買の斡旋してる魔王なんて聞いたこと無いぜ。

「準備はいいかな？」

指をバキバキと鳴らしながら、ラーズ氏が俺の前に立った。その顔には、やはりまだ微笑が浮かんでいる。

「おお、観衆も戻ってきたようだな」

彼の声に振り返ると、舞台の周辺には野次馬どもが少しずつ集まってきた。

怖いもの見たさだろうか？

いずれにしても人間が殴られる様子を見に集まるなんて、マトモな神経じゃない。

「いいぞ！ やつちまえ！」

「殺せ！」

図に乗った観衆からはそんな物騒なヤジも飛んできた。

くそ、血に飢えたケダモノどもめ！

「おおっとお、『殺せ』ときたもんだ。やっぱりそういう観衆がいないと盛り上がらんわな」

「……俺は、いつでもいいスよ。ただし、俺を殴ったら約束を守ってください。あの娘たちは俺たちが買い取る。俺たちも全員見逃す。いいですね？」

「もちろんさ。さっ、始めるよ」

言いながらラーズ氏が俺の前に立ち……そして

「ふっ！」

それはまさに電光石火の一撃だった。
手加減する気など微塵も感じられない。

「じあっ！」

そのパンチのあまりの速さと鋭さに、最初は自分がどこからパンチを食らったのかもわからなかった。

目の前にパツと真つ白な火花が飛ぶ。

意識が体からハミ出し、それがするりとまた戻ってきた時には、自分の体が仰向けに倒れ込んでいる最中だった。

「っは……」

全てがスローモーションになった。

空が……

空が見える……

なんて青さだ……

倒れている最中にはそんなことをぼんやりと考える余裕はあったが、背中が地上に触れた瞬間には恐るべき事実と直面することになった。

……痛い！

この世界に来て、初めての感覚。

痛み……？

俺が痛みを感じている……！

打ち抜かれた顎に、そいつが猛然と襲いかかってきたのだ。
おまけに口の端の、ぬるりとした生温い感触。
手の甲で拭うと、それは紛れもなく血だった。

(ど、どういう……ことだ……?)

脳みそが強烈に揺さぶられたせいで、まともに物を考える事が出来ない。

だが、一つだけ確信した。

(ふ、不死身……が……きかない……?)

変な表現だが、他に思いつかない。

そんな……バカな……!

刺されても噛まれても押し潰されても火の中に飛び込んでも大丈夫だったのに……?

(そんな……そんなわけ、ないだろ……)

慌てて立ち上がろうと上体を起こすが、膝に力が入らなくて、無様に前のめりに倒れこんでしまう。

(う、嘘だ……嘘だろ……そんな……嘘だ……)

地面に頬をこすりつけ、焦点がうまく定まらないままで、それでも驚き、呆然とする。

そんな俺を嘲笑うように、観衆から大歓声が上がった。

「いいぞ！足にきてやがる！」

「小僧！出直してきな！」

「ラーズ！ラーズ！」

まだ芋虫みたいに倒れ込んだままの俺のもとへ、ラーズが歩み寄り、そして、こちらを覗きこむ。

その顔には、先ほどまでの余裕ぶった笑みは無い。

奴はまるで意外な物を見るように自分の拳をしげしげと見つめ、眉を上げ、口笛を吹いた。

「驚いたな……」

ぐい、と俺の髪を掴んで、無造作に頭を持ち上げる。

「うあ……」

「まさかお前も……異世界から来たのか？」

「あ……あなた……どうして……」

「『どうして』か。俺も知りたいぜ。どうして」

「親分、女どもはどうします？」

奴の子分が話しかけてくる。

「あん？ああ、『館』に連れてけ。全員だ。そして今日の商売はやめだ。面白いオモチャが手に入ったからな」

「へい！」

「や……約束が……違う……」

「ん？約束？おお、約束ね。あれはまあ　心構えみたいなもんだ」

「て……てめえ……」

「おおっと、そう怖い顔しなさんな。お前も連れて行ってやるから。少し寝てな」

ラースがそう言うと、視界の端で何かがヒュッと動き、同時に首筋に痛烈な痛みが走った。

「がっ……………」

延髄に手刀を打ちこまれたのだ、と気付いたのは、さっきと同じように地面に頭がついてからだ。
消えゆく意識の中で、声が聞こえた。

「……………ンイチッ！ケンイチ！」

ああ……………

あれは……………プルミエルの声だ……………

今度こそ……………俺のこと……………

心配……………してくれたか……………？

俺の意識はそのまま闇の中に沈んでいった。

恐怖の館

強引に気絶させられた人間が、夢なんか見るはずもない。

だが、意識が無いかというところなこともない。

脳味噌がどこから漏れ出してるんじゃないかというほどの激しい頭痛と、それがもたらす底なしの倦怠感。

そいつにさいなまれながら、俺はぼんやりと無明の闇の中を覗き続けていた。

「……………ンイチ……………」

おう、誰かが……………

「起きて、ケンイチ……………」

誰かが呼んでる……………？

「ケンイチ……………！」

「う……………あ……………？」

不意に目の前の闇が薄れていき、魂が現実に戻ってきた。

ここはどこだ……………？

俺の寝そべっている薄暗いこの空間は、せわしなくガタガタと揺れている。

「……………」

依然として定まらない焦点。

それを、強引に頭を振るって戻そうとするが、あまり効果は無かった。

今度は起き上ってみようとするが、手首には木杵の手枷がはめられていて、満足に身動きが取れない。

何だコレ……？

何でこんなことに……

「気がついた……？」

耳元で囁く声。

そちらに顔を向けると

「うわぁ！」

「わ」

息がかかるほどの距離に、プルミエルの顔が！

もう少し頭を上に戻らしていたら、間違いなく接吻コースだ。

くそ、何故そうしなかつたんだろう？

「もう、人を見てそんなにびっくりする？失礼しちゃうわねー」

ぷう、と頬を膨らませる様も本当に可愛らしい。

「すまん……えーっと……」

ここで少しずつではあるが、ようやく記憶が戻ってきた。

俺はあの男……ラース・ホールデンに、見事にノックアウトされたのだ。

不死身のはずの、この俺が……

(う……)

あの痛烈な一撃を思い出して、俺はぞっとした。

「だいじょうぶ？」

「だいじょばない……あいつ、何なんだよ……」

「異世界人だろうな……君と同じ……」

ブルミエルの頭の後ろから、メイヘレンの声が聞こえる。

「異世界人……？」

「異世界から来た人間だから、君の不死身が通用しなかったんだろ
う」

「あいつも『勇者』ってことか……？」

「さあ、それはどうだろうな……」

ここでようやく俺の焦点も定まってきて、薄暗い環境に目が慣れてくる。

ガタガタ揺れる、このやたらと狭い長方形の空間にはいくつも人影がうずくまっていて、それはあの広場で晒し者にされていた少女たちだった。

目の前にはブルミエル。そして、その奥にはメイヘレンが、やはり俺と同じように手枷をはめられた状態で座っていた。

「ここは……」

「馬車の中」

ブルミエルが答える。

「馬車……？」

そうか。

ここは馬車の中だったのか。

「その後、全員がこの中に押し込まれてね。『館』とかいう場所に
ご招待してくれるそうだ」

「館……？」

「……あそこは恐ろしいところよ……」

膝で頭を挟み込むようにしてうずくまっていた娘が、呻くように言
った。

「ガラの悪い男たちがいつも酔っぱらってる。いつも中から女の悲
鳴が聞こえる。とつても、恐ろしいところよ……」

「うーん、あまり楽しいところじゃなさそうねえ」

「男尊女卑とはね。前時代的だよ」

ブルミエルとメイヘレンが軽口を叩きあう。

しかし、この二人の魔道師はどうしていつもこう余裕シヤクシヤク
なんだろうか？

「さては何か秘策があるのか？」

「無いわ」

「無いな」

「即答だな……」

「魔法が使えればいいんだがな。まあ、しょうがないね」

「キミたち、ポジティブすぎる……」

「それよりケンイチ、手は動く？」

「ん？ああ、なんとか指だけはな……」

「はい、そんじゃあ、その指を使ってその娘さんの靴紐を結んで

あげなさい」

プルミエルの視線の先を辿ると、俺のすぐ後ろに、膝を抱えて座っている女の子がいた。

「……っ」

彼女は一瞬、怯えたような表情を浮かべたが、「大丈夫よ」とプルミエルが頷いてみせると、おずおずと俺のほうに足を伸ばしてきた。確かに、靴紐が解けている。

しかし、これは一体どういう……？

「えーっと……？」

「『勇者タイム』、そろそろマズいんじゃない？」

「おおっ！」

なんの羞恥プレイかと思ったが、そういうことか！

俺は勇者タイマーを確認する。

『08:29』

おお、結構危なかったな。

「事情を話して協力してもらったの」

「うつつ、ありがとう」

俺は震える指で靴紐をつまみ上げ、手枷のせいで動きを制限されている手首に代わって、指先の動きだけでゆっくりと紐を手繰る。

凄まじい集中力が要求される、なんとも骨の折れる作業だった。

それでも悪戦苦闘の結果、俺は何とかその靴紐を結び上げること

成功した。

「……っと、で、できた。超難しかったぜ……一世一代のチョウチヨ結び……」

「あ……ありがとう……」

女の子はまだ少し怯えているようではあったが、それでも小さくお礼を言ってくれた。

その純朴さに、俺は胸を打たれてしまう。

「いってことよ。イエイ」

「なに、カツコつけてんのよう。勇者タイムは？」

『59:44』

「うん、大丈夫だ。生き延びたぜ」

と、ここで馬車の揺れが止まった。

つまり、目的地に着いたってことだ……

全員が緊張に身を固くしていると、唐突にバン！と俺の背後の扉が開き、そこから漏れこんでくる眩しい光が空間を支配した。

俺は目を細めながら、首を回して振り返る。

くそ、やっぱりガラの悪い面が並んでやがる……

「オラ！着いたぞ！さっさと降りねえか！メス豚ども！」

「やれやれ、メス豚とはあんまりだな」

「あん？……おひょーお！こいつは振るいつきたくなるような上玉だぜ！」

カエルみたいな顔をした小男は、メイヘレンを見て下品な歓声を上

げる。

「ようこそ、お嬢さん。歓迎するぜ。ここは『魔王の館』だあ。男には地獄が、女にはお楽しみが待ってるぜえ！」

俺たちは馬車の荷台から引きずりおろされると、頭から汚いズタ袋を被せられ、視界を奪われた。

その向こうで男の口汚い罵声と娘たちの悲鳴が聞こえる。

「オラ！さっさと出やがれ！」

「いやあ！」

「てめえ！」

「きゃあ！」

「このアマー！」

ピシッ！バシッ！と何かを平手で打っている音が響く。

見えはしないが、間違いない、娘たちがさっきの力エル男に蹂躪されているのだろう。

「や、やめろっ……！」

俺は思わず叫ぶ。

「あん？」

「女の子を叩くのはやめろ……っ」

「おいおい、兄ちゃん、語尾が震えてるぜ？大体、オメエに人の心配をする暇があるのかアよ？」

ドン！と背中を蹴り飛ばされ、俺は地面にはっ倒される。

「うぐ」

「ブルーノ！親分の御命令だ！この二人のお嬢さんがたと、そこにうづくまつてる芋虫野郎を『VIPルーム』に連れて行くぞ！」

男の声と同時に、襟首がむんずと掴まれ、ズルズルと俺を引き摺っていく。

くそ。

VIPルームだと？

嘘つけ！

俺たちをどこへ連れてこうってんだ？

目隠しされているから、周囲の様子は他の五感で判断するしかない。しかし、それにしても全く情報は得られなかった。

耳に入ってくるのは、男たちの下卑た野次や笑い声。

鼻をつくのは、酒、タバコ、凝脂、加齢臭、それらが混然一体となった異臭。

ガツンガツンと頭に固いものが当たるのは、階段を下りているんだろつ。

不安は募る一方だった。

これからどうなっちまうんだ？

俺たちは何をされるんだ？

恫喝？拷問？一方的なリンチ？

あらゆる恐ろしい想像が脳裏を駆け巡る。

不安でたまらない。

気を緩めたら失禁しそうだった。

視覚を奪われるだけでこんなにも気弱になるなんて……

さっきまで他人の心配をしていた余裕は、もう微塵も残っていないかった。

「何か臭いわねえ」

その時、前のほうからプルミエルの声が聞こえた。

「ちゃんと家の掃除してるの？」

おう、この状況で聞こえる彼女の声の、なんと心強いことか！

俺は涙が出そうなほどの、大きな安心感に包まれた。

「……へっへ、臭い？そうだろうとも。下水に抜ける道だからな。

臭うのも当然だわな」

カエル男の声は、イヤらしく笑う。

「下水に抜ける道、か。大したVIPルームだ」

そう言ったのはメイヘレンの声だ。

彼女も実に落ち着いている。

なんてこった、二人ともこの期に及んで、いまだに冷静さを保っているなんて！

俺も負けてはいられないと思った。

「下水だけにゲスな奴らだぜ」

「つるせえ」

「つえつぶ！」

俺が小粋なジヨークをかますと、間髪入れずに、腹に思いつきり何かを突き込まれた。

見えないから分からないが、太くて固くて長い……棍棒か何かだろうか？

「少し黙ってな」

チクシヨウ、後で覚えてろ。

しばらく階段を下ると、今度は平坦な道をズルズルと引き摺られる。やがてその行進が止まると、前のほうでガチャガチャと鍵を開けるような金属音が、その後、ギィィ……と軋む音を立てながら扉が開く音が聞こえた。

「入りな」

再び引き摺られ、今度は立ち上がらされ、両手を頭の上へ上げさせられ、そこにカチャカチャと腕輪のようなものをつけられる。

ここでようやく、ズタ袋がぱつと頭から剥がされ、視界が開けた。

「つおう……」

そこは想像していた通りの、狭くて臭い、石造りの部屋だった。

積み上げられた石の隙間からは、ぬるりとした得体の知れない液体が滴り落ち、その湿気のせいでびっしりと苔が自生していて、清潔感などというものは微塵も感じられない。

天井に下げられたランプが、頼りなげな光を放ちながら揺れている。

(最悪だ……)

文字通りの『牢獄』と言っても良いだろう。

俺たちは全員、天井からぶら下がっている鎖に、手錠で繋がれていた。

扉の向かって正面に俺、右手側にプルミエル、左手側にメイヘレン。全員が、両手を上にあげた状態で吊り下げられていた。

俺とメイヘレンはなんとか地面に足がつくが、背の低いプルミエルは少しづらんと揺れている。

「だ、大丈夫か？プルミエル」

「うー、腕が痛い……」

「おい、台か何か用意してやってくれよ」

「へっへ、そのうち、それも気にならなくなっちまうだろうよ。そんじゃあ、親分が来るまでしばらく大人しくして待ってな」

カエル顔の男はにたりと笑うと、黒光りする重そうな鉄扉をバタン！と閉めた。

「……」

静寂だけが残った。

「……」

全員、黙っている。

だが、それじゃあ不安なだけだ。

俺は焦って口を開いた。

「こ、これからどうなるのかな……？」

「さあねえ……」

「まあ、あまり良いおもてなしは期待できないな」
「……」

二人は相変わらずだ。

しかし、俺はじわじわと恐怖心に襲われつつあった。

「ラーズ・ホールデン……」

その名を呟いてみる。

俺のこの世界での唯一の拠り所である能力　不死身が、全く通用しない相手。

そんな奴が現れてしまったら、もう、俺はただの高校生にすぎない。

「くそ……」

「ケンイチ」

俺の不安を見透かしたように、プルミエルが声をかけてきた。

「な、何だ？」

「ごめんね」

「ど、どうしたんだ？急に」

「今回は私の勇み足が原因だね。目立った行動を避けたほうが良いのは分かってたんだけど……」

「プルミエル……」

「軽率だった。ごめんね」

悔しそうに下唇を噛んで俯く彼女の横顔。

それを見ていると、俺は胸の奥から何かの力が湧き上がるのを感じた。

そうだ。

怖がってる場合か？

俺はこの女たちを守らなければならない！

そんな使命感が、俺の恐怖心を大きく後退させた。

「ブルミエル……君は間違ってる」

「え……？」

「君は正しいことをしたんだ。あの時、君が飛び出て行かなかったら俺が行こうと思ってた。どっちでも結果は同じさ。俺は君の行動に拍手を送るよ。まあ、今は手が不自由だから、後でな」

「ケンイチ……」

「全く……君は時々、とても魅力的に見える時があるよ、ケンイチ。女殺しだな」

メイヘレンが悪戯っぽく、微笑みながら言う。

「女殺しか……『女殺油地獄』……」

「はあ？何それ？」

「ん？俺の世界の文学で……」

「やだわ。タイトルがスケベっぽいわね」

「そうやって株を落とすところが君のいけないところだな……」

二人の白い目が俺に突き刺さる。

「ち、違っつ！こ、これは近松門左衛門の代表作で」

「分かった、官能小説だわ」

「『油地獄』か……なるほど、そういうめくるめくオイリーなプレイが……」

「ご、誤解だツ！」

「いやーね、もう！こんな時まで……エロスボーイ！」

「ち、ち、違う！俺はエロスボーイじゃない！……そ、そんな目で見えるな！あー、もう！いつもいつも泣き寝入りだよ！俺はよお！」

「何が泣き寝入りなんだ？」

「！」

全員がハツとして、その声のした方向に目を向けた。

「そんな……いつの間に……」

全員が驚きを隠せなかった。

そこにはあの男……ラーズ・ホールデンが微笑を浮かべて立っていたのだ。

俺は唾をごくんと呑み下す。

額には冷や汗も浮かんできた。

「い、いつの間に……？」

もう一度言う。

だって、不思議でしょうがなかったからだ。

さっきはあれほどやかましい音を立てて開閉していた鉄の扉が、いつの間にか開いている。

俺たちは目を閉じていたわけでも、別の方向を向いていたわけでもないのに、その気配に全く気付かなかったのだ。

まるで最初からそうであったか、魔法でも使ったとしか思えない。

「一体、どうやって……」

「オイオイ、同じことを三回も聞くなよケンイチくん。頭の弱い子

だと思われろぞ」

ラーズはニコニコしながら部屋に入ってきた。

その足取りは軽い。

その様子は、お楽しみを目の前にした少年のような、そんな無邪気ささえ感じさせる。

だが……

「楽しませてくれよ？色男」

そう囁いて俺の顔を覗きこむ目には、邪気以外の何物でもない光が宿っていた。

M・A・O・U く恐るべきその存在く

「さて……何から始めるかな？」

ラーズは部下に命じて椅子を用意させ、部屋の中央にどっかりと座りこんだ。

「おっと、その前に……」

奴が扉の向こうに合図をすると、燃えるような赤毛の、とてもセクシーな女性が部屋に入ってきて、ラーズの胸板にもたれかかるようにして、その膝の上に乗った。

「うふん、ラーズ……」

「おお、ルイーゼ。我儘なピーチちゃんだ」

「今日はどういいうお楽しみなの？」

「同郷の友人が遊びに来てくれてね」

散々、俺たちの目の前で淫らにいちやついて見せながら、ラーズはこちらへ視線を向けた。

「ケンイチ、さっきはすまなかった。なるだけ穩便に済ませようと思っただがね」

そんな言葉が嘘だというのは分かりきっていたので、俺は返事をしなかった。

「君は日本人だな？」

その質問を聞いて、俺はハッと確信する。
やっぱりこいつは、俺と同じ異世界の人間だ！

「正解だろう？無知な欧米人は何かとアジアンを一括りにする癖があるが、俺は違う。俺はハッキリ見分けられる。日本人は何というか 上品なんだな。顔つきにどこことなくプライドの高さがにじみ出てるんだ」

「ラーズ、ニッポンだのアジアンだの、よく分かんないわ」

ラーズの首に絡みつきなから、女が言う。

「うん？俺たちの地元の話だからな。お前たちが分からないのも無理はない」

そう言うとラーズは立ち上がって、俺の目の前に立った。

「まずは見せておこうか。……コレがなんだか分かるかな？」

奴が俺に左手を差し出して見せる。

そこには見慣れた形の、あの時計が……

「ゆ、『勇者タイマー』……？」

そう、俺の左手についているものと同じ、あの忌まわしい『死の宣告腕時計』だ。

だが、俺のとは少し違う。

俺のはシルバーメタリックなボディだが、デザインは同じでも、こいつのは金ピカの豪華なボディだった。

「アーーーウ、惜しいな、ケンイチ。こいつは」

ラーズの顔に、満面の笑みが浮かぶ。

「『魔王タイマー』で言うんだとさ」

「ま、ま、魔王……だと？」

俺は驚きに目を見開いた。

「え？魔王……なのか？あ、あんたが……？」

「おっ！いい顔だな、ケンイチ。正体を明かした甲斐があったよ」

「……あんたが魔王なのね？」

驚きのあまり二の句を告げられなくなっていた俺の代わりに、プルミエルが尋ねた。

「まあ、そうなるかな。だが、俺もそのことに関してはあまり自信が持てなくてね。空も飛べなきゃ、ビームも出ない。唯一の能力と
言えば……」

「不死身……なのか？」

「その通り！察しが良いじゃないか！うん？その点に関して言えば、ケンイチ、俺たちは同じ土俵の上に立ってるよな？」

「ねえん、ラーズ……」

甘ったるい声で、女が寄ってきて、豊満なその胸を押しつけるようにしてラーズにもたれかかった。

ラーズもニヤニヤと笑みを浮かべながら、彼女の腰を撫でまわす。
しかし、待てよ……

こいつと俺が同じ土俵なら、不純なボディタッチを繰り返したペナルティによって、あと五分もしないうちに天に召されるのでは？

「……そういえば、話には聞いてるよ。ケンイチ」

「え？」

「勇者つてのは、何かしら『他人にとって良いことをしなきゃ生き延びられない』そうだな。おまけに厳しい禁則事項も多いとか……女にも触れないんだって？……まったく、同情するよ」

余裕のその口ぶりに、俺は不安を感じる。

「あ……あなたは……？違うのか？」

「違う違う。俺のは君のと逆だ」

さも愉快そうにそう言って、ラーズは女の頭をぐいと掴んで反らせ、露わになっただうなじに卑猥に舌を這わせた。

「あん」

女が艶っぽい声をあげる。

そして、ラーズはズい、と再び俺に魔王タイマーを見せつけた。

『60:00』

なんと！

魔王タイマーのカウンターは、そのまま静止してる！？

俺でさえ『60:00』は見たことが無い。

「そ、そんな……」

「何となく分かったか？俺の魔王タイムと君の勇者タイムは……真逆なんだ」

真逆？

つてことは、この野郎は……

「そう、俺は『悪さをすればするほど長生きできる』んだ！」

「……！」

「なんと……！」

プルミエルも、メイヘレンも驚いていた。

俺も当然、顎が外れそうになる。

「腹が減ればその辺の屋台でタダ食いしても良いし、イライラした時は身近にいた人間を思いっきりぶちのめしてやるのも良い。そうするだけで俺は生き延びる事が出来てしまうわけだ」

ああ……

くそ、なんて野郎だ……

「ケンイチ、がっかりしたようだな？今まで必死になって人の為に尽くしてきたんだろう？そりゃあ、失望も脱力もするだろうな。君にしてみれば、不公平な話だ」

大げさに肩をすくめて見せてから、ラーズは再び椅子に腰かけた。

女も再び、その膝に飛び乗る。

「ケンイチ、中国の思想家で『孟子』と『荀子』の話を知ってるか

？」

「？」

聞いたことあるような、無いような……

「人間の生まれ持った性質が善であるとする『性善説』を唱える孟子。いやいや、逆に人間は生まれつき悪であるとする『性悪説』を唱える荀子。俺はこれが全く不毛な水掛け論だと思っていたんだが、魔王になってみて実感したよ。『性悪説』の荀子が正しい。人間は特に意識しなくても、本能の赴くままに生活していれば、悪事を重ねる事は何の苦にもならないんだ」

「あんたに入れ知恵したのは誰？」

ブルミエルが、横槍を入れた。

「うん？」

「異世界から来た人間にしてはあんたは知り過ぎてる。誰かがあんたに『勇者タイム』と『魔王タイム』の仕組みを教えたはずよ。それは誰？」

「可愛らしいだけでなく、鋭いお嬢さんだ」

ラーズは両手を広げておどけたポーズをとって見せた。

「紹介しよう。俺の知恵袋、『魔王教団』の教祖、『ゼータ』だ」

ラーズが指をパチンと鳴らすと、扉の影から、真っ白なローブを身に纏った、体格の良い初老の男が現れた。

金髪を綺麗に七三分けに整えていて、その顔には温厚そうな笑みが浮かんでいる。

『魔王教団』なんて恐ろしい名前には相反して、まるで聖職者のようだ。

その聖職者がラーズの前に膝をつき、深々と首を垂れる。

「魔王ラーズ様、この度の勇者捕獲の儀、誠におめでとございませう」

「……とまあ、こつこつ面倒くさい野郎なんだが、俺がこつこの世界に飛ばされてきた時に魔王のなんたるかを教えてくれたのがこの男なのさ」

「魔王教団……魔王を信奉する集団、ということか？」

「いかにも」

メイヘレンの問いに、ゼータが答える。

「我々、魔王教団はジャパテイ寺院跡より発掘されし『魔王文書』の内容に従って、来るべき魔王降臨の日に備え、人知れず地底深くで活動していたのです」

「『魔王文書』ですって？」

「かの『勇者典範』と対をなす禁忌の書です。これは我が『モラッティ一族』の秘伝中の秘伝である為、当然、あなた方は御存知無いでしょう」

滔々と、淀み無く、丁寧に語る口調は、まるで宣教師のようだ。

「『魔王文書』には何が書かれてるの？」

「その全てを異教徒である貴女にお伝えすることはできません。しかし、この世界が間違いなくラーズ様のものになるということだけは揺るがしがたい事実として述べられております。そして、それこそが魔王教団の悲願でもあります。おお……魔王の世に幸あれ……」

うつとりと目を輝かせながら語るこのオッサンは、あまりにも空想癖が強すぎる。

世界征服なんてのは確かに魔王っぽい野望だが、その魔王を名乗るラーズという男は、広場でいたいけな女の子たちを奴隷として売りさばこうとしていたケチな野郎だ。

「……イカレてる」

「黙れ！忌むべき者め！」

「うわっ！」

俺がぼそつと呟いた言葉に、ゼータが突然キレた。

「呪われよ！この、腐れ者めが！魔王様、この者はいかに力弱く見えても、仮にも『勇者』でございます。即刻、息の根を止めるのがよろしかろうと存じますぞ！」

な、何だ？

この人、怖ッ！

勇者のこととなると、超エキサイトし始めたぞ？

先ほどまでの威厳ある落ち着いた様子は見る影も無い。

「まあ、そういきり立つなよ、ブラザー・ゼータ。あんたは本当に

勇者が嫌いなんだな。だが、俺はもう少し彼と遊びたいんだ」

「しかし……！」

「待つて、もう一つ質問があるわ」

再び横槍を入れるプルミエル。

この機会に色々と探り出すつもりらしい。

「何だい？ハニー？」

「ヤッフォン教授を拉致つたのもあんた達ね？」

「ヤッフォン？ヤッフォン……ああ！ヤッフォン教授ね！」

ラーズはポン、と手を叩いて、今思い出しましたと言わんばかりのジェスチャーを見せた。

「拉致った、と言うのとは違うね。俺は異世界専門の研究者である彼に、異世界ライフのアドバイザーをお願いしたんだ。二つ返事でOKしてくれたよ。そろそろ来るころじゃないかな？」

ラーズがそう言うと、彼の言葉通りに一人の老人が息を切らせて部屋に飛び込んできた。

なんだよ、今回は新キャラ祭りか？

「ゆ、ゆ、勇者を……つ、つ、捕まえたというのは、ほ、ほ、本当かね……？」

肩で大きく息をしながら、その痩せこけた小柄な老人は言葉を続けた。

こちらに向けた、その後頭部が妙に張り出した頭は、見事に禿げあがっている。

「み、み、見たい……ど、ど、どこだ？」

「このケインイチ君がそうさ、教授。そしてハニー、彼がヤツフォン教授だ」

「お、お、おお、い、い、生きている個体を見るのはじ、じ、実に久しぶりだ」

このヤツフォン教授、びっくりするほど滑舌が悪い。

おまけにこの老人、俺にぴったりとくっつくくと、ハアハア言いながら俺の身体をまさぐり始めやがった。

「や、やめろお！」

「ゆ、ゆ、勇者……！そ、そ、そ、そ、そ、そ、ゆ、ゆ、ゆ、勇者ならば……」

ここでヤツフォン教授は突然ナイフを取り出して……

「えりあ！」

俺の胸にそれを突き立てた！

「うおう！」

バキン！と音を立てて、ナイフがへし折れた。

(あ……ああ、よかった。まだ不死身だ……)

俺はほっと溜息をついた。

実を言うと、あの痛烈な一撃をもらって以来、自分の不死身に関して自信を失っていたからだ。

しかし、どうやら、異世界から来た人間同士……つまり、ラーズにしか、俺を傷つけることはできないようだ。

ヤッフォンは折れたナイフの柄をしげしげと眺め、感慨深そうに息を吐いた。

「す、す、素晴らしい……！きよ、きよ、今日は素晴らしい日だ！ま、ま、魔王と、ゆ、ゆ、ゆ、勇者と一緒にいるとは……！」

「オーケイ、研究はまた後でな、教授。ゼータもとりあえず部屋を出てってくれ。こんな狭い部屋に七人もいちゃあ暑苦しい」

「かしこまりました、魔王様……！」

「こ、こ、殺してはならないぞ、ラーズ……こ、こ、殺してはいかん」

「わかってるよ。さあ、出た出た」

ラーズは二人の老人を追い出すと、鉄の扉を閉め、再び女を膝の上に乗せて椅子に座った。

「まったく、せわしないジジイどもだろう？君がうらやましいよ、ケンイチ。俺の取り巻きはあんなのばかりだが、君にはこんなにも美しい二人のピーチちゃんがかくつついてるんだからな」

「お、俺たちをこれからどうするつもりなんだ？」

「さて、どうしたものかな……？ゼータは殺せと言っし、教授はお前をバラバラにして不死身のメカニズムを解明したがってる。俺としては……そうだな、もう少し君と仲良くしたいと思ってるんだが」

「な、仲良く……？」

「実は告白するよ、ケンイチ」

「こ、告白？な、な、何を？」

や、やっぱりモーホーだったのか……？

おう、やめてくれ、こんなところでそんな話は！

耳を塞ぎたいが、生憎と手は頭上で手錠に繋がれている。

「君を広場で殴った時。あの、指の骨にずんと来る感じ。久しぶりだったんだ」

「？」

「この世界に来てから、人間を思いきりぶっ叩いたことはあるかい？一回やってみるといい。俺たちは不死身になっちまってるせいで、あいつらを殴っても蹴っても、何の手ごたえも感じないんだ。紙粘土を殴ってるようなもんだ。満足感も達成感も、まるで無い」

「……」

「だから、君の顎をスカッと打ち抜いた時、俺はジンと痺れる自分の手をしげしげと見て、そして思ったね。『ワオ！やっぱり人間を殴るならこうでなくちゃ！』ってね」

うっとりとして愉快そうに微笑むラーズの顔。

それを見て、俺は戦慄した。

……な、なんて危ない野郎なんだ！
ゼータもヤツフォン教授もイカしてるが、こいつはそれらを遙かに
上回ってる。

モーホーだったほうがまだマシだ！

「よっ……と」

「あん」

ここで膝の上の女をどけて、ラーズが立ち上がった。

そして、俺ではなく、プルミエルの前に立つ。

プルミエルはじろつとその美しい青い瞳でラーズを睨みつけた。

「……」

「ふうん、いいねえ、凄くイイよ」

さっとラーズの手が動き、なんと、プルミエルのお尻を撫でさすり
始めやがった！

「ああ……なんて形の良いピーチなんだ……」

恍惚とした表情で、ラーズが言う。

「や、やめろ！この野郎！」

「おおっとお！すまん、すまん……」

手錠を揺らしながら俺が叫ぶと、予想外にパツと素早くラーズは身
を引いた。

「君の彼女かい？そうか、それは随分と気の利かないことをしてし

まったね」

彼女、ではないがここで否定してもどうなるか分かったものじゃない。

俺は黙って奴を睨みつけた。

「そう怖い顔するなよ、ケンイチ。こっちが駄目なら……」

ラーズはメイヘレンの前に立った。

「こっちにしよう」

言うや、メイヘレンの胸をぐつと鷲掴みに！

彼女もプルミエルのように、悲鳴一つ上げずに、赤銅色の瞳でラーズを冷たく観察していた。

「おお……たわわに実った食べごろピーチ……」

再び恍惚とした表情でラーズが言う。

「そ、そっちもダメだッ！離れる！彼女たちから離れるッ！」

「なんだ、こっちもダメかい？わがままな奴だなあ……」

ラーズは俺の言いなりにパツと身を離し、今度は俺の前に立ちはだかった。

相変わらず、その顔には余裕の微笑が浮かんでいる。

「さて、ケンイチ君。君のリクエストに応えていたら両手が暇になっちまった。俺はどうしたらいいだろう？」

その薄笑いを見て、俺はこいつが何を期待しているか、すぐに分かった。

「お、俺を殴ればいいだろッ！他のヤツより殴り甲斐があるんだろ？」

「わはっ！」

我が意を得たり、という様子でラーズが嬌声をあげた。

「正解だぜ！ケンイチ！」

次の瞬間、脇腹に悶絶するほどの痛みが突き刺さった。

「ぐふう！？」

それが右フックだと気付いたのは、奴が次の左ジャブを俺のみぞおちに叩きこんだ後だった。

「げはっ！」

痛い！

痛い！！

あまりの痛みにも、意識が遠のきそうになる。

かつてこんなにも重たいパンチを食らったことは無い。

「もう一発行こうか？」

「ぐはあ！」

さっきと同じ個所に、再び右フックが突き刺さった。

あばらの骨がミシミシと軋む音が聞こえ、内臓がはみ出しちまいそ

うなほどの衝撃と、失禁しちまいそうなほどの痛みが全身を駆けまわる。

胃液がこみあげてきて、気分も悪くなった。

「うあああ……」

「おいおい、これでも手加減してやってるんだぞ？」

う、嘘つけ……この野郎……

「どれどれ……おおっと、ケンイチ、ほら、君が女の子たちの代わりに殴られたから『勇者タイム』がまた貯まったじゃないか？へえ、なるほどねえ」

くそ……白々しい奴め……

「痛いかい？目に涙が溜まってるぞ？そうだ、君が『もう降参だ、やめてください』と言えば、今日はこれきりにしよう。ちゃんと寝床も用意して、飯も食わせてやるよ。ただ、その場合は君の連れは二人とも俺がもらう。どうだ？我慢比べ大会だ」

「ちよっと、ラース……」

部屋の隅で見ていた、例のセクシーな女がおずおずとラースに話しかける。

「うん？なんだい？ルイーゼ？」

「もう……もう許してあげたら？よく見たら、まだ子供じゃない……」

「おおう、ルイーゼ、どうしたんだ？まさか、ここに来て女としての母性本能が目覚めたかい？それとも、思わず庇っちまいたくなるほどこの少年は魅力的なのかな？」

「ち、違う、違うわラーズ……そうじゃないんだけど……」
「いいから黙って見てな」

吐き捨てるように言うと、ラーズの拳が再び俺の腹にめり込んだ。

「ぐふっ!!」

「妬けるぜ、ケンイチ。あつという間にあの女の心を落としてしま
うとはね。もしかして彼女たちも君の不思議な魅力にクラクラ来て
るのかな？」

そこから二人は完全に、『ボクサー』と『サンドバック』と化した。
ボクサーは容赦ないパンチを俺に何度も叩きこんでくる。

左フックが、頬に。

「ぶっ!!」

右ストレートが鼻っ面に。

「がはっ!!」

猛烈な連打はみぞおちに。

「ぶぶぶっ!!」

最後は痛烈な頭突きだった。

「うはぁっ!!」

(も、もうやめてくれ……)

激しく脳みそが揺すぶられたせいで、膝に力が入らない。
今、俺を支えているのは天井の鎖だけだった。

(もうイヤだ……こんな痛いのはイヤだ……)

圧倒的な暴力の嵐の前に、心が折れる。

お願いします、もうやめてください、ごめんなさい、俺は勇者なんかじゃないんです、俺は普通の高校生なんです、生意気なことを言つてすみませんでした、もう痛めつけないでください、女達は好きにしてください、命だけは助けて下さい、もうあなたの前に現れません、本当にすみませんでした。

言葉の波が喉までせり上がってきて、でも、飛び出さなかったのは、二人の声が聞こえたからだ。

「やめなさい！もう、やめて！いいわよ、私達を好きにすればいいでしょ！」

「彼はただの少年だ！もういいだろう！？ケンイチ、いいから降参するんだ！」

……ふっ。

俺は思わず笑っちゃった。

笑わずにいられようか？

だって、彼女達が闘ってるのに、勇者の俺がギブアップするか？
あり得ないぜ、ケンイチ！

「ケンイチ、彼女たちはああ言ってる。お前はどつだ？」

ラーズの問いに、俺は何とか笑顔を作って答える。

「……うも……ろっ……」

「うん？何だつて？よく聞こえないな」

「……お気遣いどうも……もう一発頼むぜ、この野郎」

「……」

ラーズは驚いたような表情を作る。

おいおい、魔王がそんな間抜けな顔をするもんじゃないぜ。

俺はやっぱりほくそ笑んだ。

「こいつは……たまげたな……」

「……どうした？……早く殴ってくれよ……待ちきれないぜ……」

「お前は……いや、そうか……ううむ」

ラーズは一人でしきりに頷いた。

「あるいは 俺が思ってるよりもずっと優秀な男なのか？お前の
ようなのは海兵隊にもいなかったな」

ここで奴は何を思ったか、身を翻し、扉を開けた。

「想像していたよりもずっと楽しめそうだが、ケンイチ。俺はお前
のような奴から一つずつ希望を奪っていくのが大好きなんだ。今度
来た時は、お前の目の前でその二人の女のうちどっちかを可愛がっ
てやる」

「じ、この野郎……！！」

「そうそう、いい顔だぜ！……そうだな、三十分後にまた来るよ。
お楽しみに備えて、風呂に入って、小ざっぱりしなくちゃな。おひ

よーう！今夜は忙しくなるぞ……」

歓喜の雄叫びをあげながら、ラーズはセクシーレディーをぐいと力任せに引きよせて、部屋を出ていった。

後には、カツカツと、意気揚々と引き揚げる奴の足音だけが響く。

「ケンイチ……大丈夫？」

「大丈夫……」

「嘘をつけ。まったく……いいか、今度同じ目にあつたらすぐに降参するんだ」

「それは……しない……」

「ケンイチ！」

「俺は絶対に降参しない……へへ……全然効いてなかったぜ、野郎のパンチ……」

「君という男は……」

自力で立つこともままならず、鎖にぶら下がってるだけ、という俺の状態を見て、女二人は暗い表情を浮かべる。

だが、俺の頭は早くも次の問題を解決するために動き始めていた。もちろんそれは、どうすればここから全員無事に脱出できるか、ということだ。

それも三十分以内に！

（おお……）

こんな時でも希望は捨てない。

なんとなく、これは勇者っぽいんじゃないか？と思った。

国家の敵（パブリック・エネミー）

これは魔王ラーズが勇者ケンイチと異世界において邂逅する、約二週間前のことである。

彼女は当然、不機嫌だった。

不機嫌にならないわけがない。

激務から解放され、愛する家族と共に過ごすという、月に一度きりのとても大切な時間。

それを、國務次官であるジム・マイルスの緊急コールによって強制的に打ち切られてしまったからである。

「よほどの緊急事態なんでしょうね？」

彼女はリムジンで国防総省ペンタゴンに乗りつけ、その玄関で待っていたジムの顔を見た途端、ぴしゃりと言った。

「勿論です。私も本来であれば休暇をお邪魔するようなことはしたくなかったのですが……」

「まあ！私が休暇中ということは覚えていてくれたのね」

ジムは外交官としてのキャリアも長く、その天賦の才ともいえる処

世術は、多くの局面で対外交渉を有利に進めてきた実績がある。したがって、國務長官のことあるごとに放つヒステリックな皮肉に對しても、これだから女という生き物は！という侮蔑に満ちた内心を微塵も顔には表すことなく、そのうえ、やんわりと申し訳なさそうに微笑み返すことができる如才なさは当然持っていた。

「コールの内容が良く分からなかったわ。『第一級重要人物について』ということだったわね？」

「そうです」

「それはつまり 中東のテロ組織に関することかしら？」

「包括的な考え方をすれば、関わりが無いことも無いでしょう」

「遠回しな言い方は嫌いよ、ジム。国防に関わることにしてあなたと連想ゲームをする気は無いの」

「詳しくは議場でお話しします」

二人が国防総省の会議室の扉を開けると、その広い円卓にはすでに色とりどりの勲章を胸にぶら下げた軍部の幹部連中が難しい顔をして着席していた。

統合参謀本部議長のほか、陸軍、海軍、中央情報局長官、FBI 長官

当然、国家安全保障担当補佐官の顔もあった。

まさに合衆国の中枢と言っている、そうそうたる顔ぶれである。

國務長官もよほどの事態が起こったのだらうということを確認し、顔が強張った。

彼女は素早く着席し、手前に広げられているファイルを手を取った。部屋の中は張り詰めた空気が支配していて、資料をめくる音だけが空しく響く。

「『ラーズ・ホールデン』……？」

それは一人の男のプロフィールだった。

彼女の予想に反して、写真の顔はイスラム教圏の男のものではない。短く刈り上げたクルーカットの銀髪と、日焼けしてはいるが、その色素の薄い肌の色は紛れも無く欧米人のそれである。

そして、そのハンサムな顔には不敵な笑いを浮かべている。

またページをめくっていくと、そこには男の輝かしい戦績が3ページにも渡って延々と羅列していた。

「イラク、イラン、ソマリア、アフガニスタン……銀星勲章、青銅星賞、軍人十字勲章、パープルハート勲章……ワオ、素晴らしいわね。まさに国家の英雄だわ」

国務長官は列席している軍幹部達を見回した。

「まさか、彼にもう一つ銀星勲章を授与させるための打診に私を呼び出したんじゃないでしょうね？ 答えは聞くまでもないのではないかと？」

「国務長官。合衆国統合参謀本部、マーシャル准将であります。発言を許可していただけますでしょうか？」

手を上げたのは、大小様々な勲章を胸元に八つもぶら下げている、いかにも歴戦の古参兵という風貌の、おそらくは六十を半ば過ぎているであろう老軍人であった。

「どうぞ、マーシャル」

「お手元の資料に記載されております『ラーズ・ホルデン』のプロフィールは完全なものではありません。彼は1976年の生まれですが、初出征は13歳、パナマにおける『ジャスト・コーズ作戦』に参加しております」

「13歳ですって？」

自分の息子よりも若いその年齢を聞いて、国務長官は眉間にしわを寄せた。

「どういうこと？我が国は少年兵を容認したことはないはずよ」

「そこには当時の国家機密に関わる事情がありました」

「説明を」

「はい。時代は冷戦当時にまで遡るのですが 我が国の誇る諜報機関が、とある敵国の軍事研究の内容を奪取し、それをこちらの軍事技術として転用を図ったことがあるのです」

「『とある敵国』ね……」

「ここではそのように表現させていただきます」

「グラスノスチ情報公開はNGというわけね」

国務長官の軽率とも思われる言葉に対して、それをたしなめるかのようにジムが一つ咳払いをした。

「……まあ、いいわ。それで？」

「はい。実はその軍事技術というのは、端的にお話しいたしますと、遺伝子操作技術だったのです」

「遺伝子操作？」

「はい。人間の遺伝子における劣性遺伝子と優性遺伝子を人為的操作によって選り分け、優性遺伝子のみを培養し、人工的な天才を作り出す」

「待つて。そんな倫理を度外視した行為は今の法律でも許可されていないわ」

「時代が時代だったのです。冷戦というのは、直接的な戦闘こそ起こってはいませんが、あらゆる分野においての戦争でした。

経済力、生産力、技術力、軍事力、医学、工学……どれ一つをとっても社会主義国に後れを取るわけにはいかなかった。それこそ、倫

理感を優先する時代ではなかったのです」

「……」

「話を戻しましょう。1972年のことです。ヴェトナム戦争が泥沼化し始めた年に、我々はある一つの計画をスタートさせました。

その名は『パーフェクト・トルーパー計画』」

パーフェクト・トルーパー
「完璧な兵士？」

「先ほどお話ししました遺伝子操作技術を駆使して、戦闘のスペシヤリストを人工的に生み出すという内容の計画です」

「なんてことなの……」

「時代です。時代がそうさせたのです。ただでさえ、不穏な世界情勢でした。ヴェトナム戦争が長期化の様相を呈してきていましたし、社会主義国がアフガニスタンへの軍事介入を検討しているという噂もありました。事態は急を要したのです」

「『時代のせい』はもう分かったわ。でも、遺伝子操作で優秀な兵士を生み出すというのはどういうこと？」

「優秀な兵士の条件とは何か？それは『戦闘を恐れない』ことです。好戦的であればあるほど望ましいと言えるでしょう。我々はそうした戦闘的な傾向資質を優性、優しさや思いやりといった傾向資質を劣性として選別処理し、それに運動能力、知能指数の増付とも行いました。つまり、『先天的な兵士』としての遺伝子を作成したのです。そして、それを受精卵として培養し、代理母の胎内へ着床させたのです」

「そんなことが可能なの……？」

「もちろん、数多くの失敗を重ねました。何億という染色体パターンを解析し、百万以上に及ぶ培養サンプルを作成し、培養に成功したのは三百、母体に適合したものはそのうちの六つです」

「……」

国務長官は完全に言葉を失い、うなだれた。

倫理的な観念は抜きにしたとしても、女性としての生理的嫌悪感だ

けは拭い去ることができない。

生命の誕生とは、生物の営みの中で最も神聖で、そして崇高なものだったはずでは？

それが、国家間の利益や優越というだけの理由で、倫理観が駆逐され、研究材料として利用されていたのだ。

彼女は耳を塞いでしまいたかった。

もうこれ以上、自国の罪を直視することに耐えられない。

だが、マーシャルはさらに言葉を続けた。

それ自体が自らの贖罪であるかの如く。

「六体の胎児の中から、無事に生まれたのは三体のみでした。そして、その三体はすぐに軍施設へと引き取られ、厳重な管理下で育てられたのです」

「……話は大体読めたわ。つまり、この……」

国務長官は資料の男 『ラーズ・ホールデン』を指さした。

「彼がその完璧な兵士なのね？」
パーフェクト・トルーパー

「その通りです。彼は紛れも無く優秀でした。幼児の段階ですでに知能指数は平均の倍以上の数値を記録していましたし、運動能力も非の打ちどころがない。まさに完璧でした」

「それで？」

「我々は彼にあらゆる英才教育を施しました。学科教養はもちろん、フィジカルトレーニングにも専属のコーチをつけ、メディカルスタッフも三人配置して、彼の全ての成長記録を取っていました」

マーシャルはここでコップの水をあおり、喉を潤した。

「彼が八歳になった時に、我々は彼をアリゾナの軍事教練施設へ移キル・ハウスしました。そして、そこであらゆる戦闘テクニクを教え込んだの

です」

「八歳……」

「もちろん、当時の教官は良心が痛んだと証言しています。しかし、それ以上に重要だったのは、彼が素晴らしい素質を持った人材だったということですよ。一度教えたことはすべて吸収し、自分のものにする。そう、まるで水を吸うスポンジのように、あらゆる戦闘技術が彼のものになりました。銃火器の扱い方はもちろん、近接格闘術、ヘリや戦車の運用術、単独での潜入術、電子情報技術、諜報活動のノウハウに至るまで、ほぼ全てを十二歳までのうちに完璧にマスターしてしまいました。もしも……彼がその気になれば、ペン一本でもこの場の全員を抹殺できるでしょう」

「ペン？」

「彼に渡せば、何でも凶器になるということです」

「……そして、十三歳で初出兵というわけね」

「私が許可しました。事実、彼はめざましい戦果を上げています」「もういいわ。もう結構よ。それで？彼にまつわるどういう問題が起こっているの？国から彼に対して賠償金でも払うという相談なのかしら？」

「国務長官。合衆国統合特殊作戦軍所属、サベイジ大佐であります。発言を許可していただけますでしょうか？」

「どうぞ、サベイジ大佐」

「ラーズ・ホールデンは、2001年のアフガニスタン戦役における『不朽の自由』作戦展開時、我が合衆国陸軍第一特殊作戦部隊分遣隊に所属していました。もっとも、『デルタフォース』と呼ばば分かりやすいでしょう」

「ええ。聞いたことはあるわ」

「デルタフォースは誇りある部隊です。戦闘のプロ集団ではありませんが、人殺しの集団ではない。我々は常に鉄のように固い規律によって統制され、その矜持を持って活動してきました。ですが、あの男……ラーズ・ホールデンは違います。彼は殺しを楽しんでいます」

た」

忌むべき記憶を掘り出すように、サベイジは苦々しい表情を浮かべた。

「彼は間違いなく先天的に優れた兵士でした。それは疑いようもない事実です……しかし、その一方で、彼の中には何も無かった。感情を抑制し、慎み深く、謙虚に行動するような情操教育を満足に受けず、思いやりや優しさといった人間らしい心を持たない、文字通りの獣だったのです」

当り前だ、とマーシャルは心の中で呟いた。

彼はそのように創りあげられているのだ。

「あの男の戦績はともかくとして、当時から、彼はその残虐性の発露を隠そうとはしませんでした。ある時は、通りがかりの少年が壊れた銃の部品で遊んでいたというだけの理由で、近隣の集落一つを火の海に沈めました。一人のタリバン関係者を粉々にするためだけにプレデターミサイルの使用を要請し、村一つを完膚なきまでに破壊しました。後の調べでは、村人のほとんどがタリバンとは無関係だったのですが……」

「……」

「当時　もちろん、今もそうなのですが、我が国は何よりも他国メディアを警戒しており、そういった不慮の惨事をスクープされるわけにはいきませんでした。戦争の大義が何よりも大事な時期だったのです。世論の批判を浴びることは、即、権威の失墜に繋がるのです。したがって、我々としてはラースを野放しにしておくことはできなかつた。我々は事を秘密裏に処理すべく、ラース・ホールデンを拘束し、本国へ帰還させ、然るべき処罰を受けさせることにしました」

「当然の処置だわ」

「しかし、相手は完璧な兵士です。生半なことではおとなしく捕まらないでしょう。我々はデルタフォース、つまりは同僚にその役目を任じました。蛇の道は蛇、という例えもあります。そう、まずは一個小隊を送り込みました……」

ここで、サベイジの顔色が曇った。

それを見て、國務長官もおおよそのことが分かった。

「失敗したのね」

「……はい。一個小隊が一夜にして全滅させられました。そして、ラーズは何処かへと逐電したのです」

「なんてこと……」

「問題はここからです」

今度は中央情報局　CIAの長官が身を乗り出し、國務長官のほうへ一枚の写真を滑らせた。

「ご覧ください」

「？」

促されるままに写真へ目を落とす。

「う、これは……」

彼女は言葉を失った。

見間違えるはずが無い。

そこにはなんと、彼女の仕えるボス　つまり、紛れも無く合衆国大統領その人の、すやすやと気持ちよさそうに眠っている寝顔が写っていた。

そして、その顔の下には

『Sweet Dream! Mr. USA』 (良い夢を!大統領)

と油性のマジックで殴り書きにしてあったのだ。

「ど、どうということなの……?」

国務長官は顔を真っ青にして、訊いた。

「信じられないことに この男は夜間、ホワイトハウスへ侵入し、大統領の寝顔をカメラに収め、その写真を我々に郵送してきたのです」

「ホ、ホワイトハウスですって? ホワイトハウスは……」

世界で最も警備の厳重な施設だ。

そんなことはこの国の小学生でも知っている。

「無論、挑発です。奴から我々への」

「分かっているわ、ジム。そうじゃない、そうじゃなくて、ホワイトハウスには当然、宿直の者がいたでしょう? 彼らは何をしていたの!??」

「誰一人として職務を怠っていた者はいません。当日の警備にあたっていた職員全員の口頭審問も当然しましたし、館内全域をカバーする監視カメラでも、定刻通りに決まったルートを巡回する二十名の警備班の姿を確認しております。驚くべきは、その全員の目と監視カメラをかくぐつたラーズの潜入能力の高さです。侵入経路も脱出経路も未だに不明です。この写真が送られてくるまでは誰一人として気付くことさえなかった。しかし、彼はその気になれば……」

大統領を暗殺することも容易にできたのです！」

冷水を頭から浴びせられたような、そんな衝撃だった。議場を沈黙が支配した。

この国の中枢、とも言っているメンバーが、たった一人の男に対して、あからさまな恐怖を抱いているのだ。

自分達の生み出した怪物を相手に……
しばらくして、ようやく國務長官が口を開いた。

「……その後、ラーズは？」

「つい昨日までは、我々が完全にマークしていました」

立ち上がったのは、国家安全保障担当補佐官のドミトリである。

「昨日までは……？」

「彼の体内には、幼少期の外科手術によって特殊な発信機が埋め込まれています。それによって我々はある程度の彼の居場所を掴むことはできていたのです。もっとも、旧型の発信機なので、その範囲は対象物を中心とした半径10kmとやや広大ではありますが……」

「それで？」

「ところが、昨日のPM14:22:35をもって、その発信機の反応が途絶えたのです。完全に。ぶつりと。文字通り、消えただです」

「……まさか、発信機を取り外した？」

「いえ、それは世界中のどの名医にも不可能です。発信機は脳髄に直結していますので、第一次性徴期を過ぎるころには完全に発信機は脳に挟みこまれるようになります。外科手術での取り外しは不可能になるのです」

「では、発信機ごと粉々になって死んだのかもしれないわ」

「かもしれませんが。しかし、このラーズという男に関してはあらゆる

る事態を想定しておいて然るべきだというのが、我々全員の一致した意見です」

「……当然だわ」

国務長官は立ち上がった。

「只今より、ラーズ・ホールデンを『ハブリック・エネミー国家の敵』に認定します。ラーズの潜伏先については目星がついているのかしら？」

「そこが難しいところです、国務長官」

マーシャルが苦い顔で言う。

「彼はどこにでも現れ、どこへでも消える事の出来る男です。まさに幽霊ゴーストなのです。しかし、彼の行く先にはある程度の見当をつける事が出来ます」

「それはどこ？」

「戦場です。彼は戦いなしには生きていけない。遺伝子の構造からしてそのように創られているのです。彼は中東、北アフリカ、そういった『最前線』と呼ばれる地域に潜伏している可能性が非常に高いと思われれます。もしくはサンパウロのスラムでゴロツキどもを相手に乱闘を演じているかもしれません……とにかく、彼の生活は闘争無しには成り立たないのです」

「国務長官、こちらでは各セクションのエージェントに最優先事項としてラーズ・ホールデンの搜索、及び監視を通達します」

CIA長官が立ち上がってそう言った。

負けじとFBI長官も立ちあがる。

「こちらでは行動分析官を四名動員して、彼の行動パターンを解析し、何処へ潜伏しているかの目星もつけさせます。中東組織とのコ

ネクシヨンも洗い出してみましよう」

「迅速にね。こんな獣をいつまでも野放しにしておいてはいけないわ」

「はい、長官」

その言葉を区切りとして、全員が慌ただしく席を立ち、議場から飛び出て行った。

もちろん、彼らの働きは徒労に終わるだろう。

どれほど優秀な分析官を揃えても、まさか対象の男が『異世界で魔王になっている』などと、その中の誰が考えつくだろうか？

「勇者は殺すべきです」

「ん？」

意気揚々と自室に引き揚げてきた魔王ラーズに、開口一番でゼータが言った。

誰よりも熱心な魔王信奉者であるこの男が、勇者という存在に対してこれほどの危惧を抱いていることに、私は少なからず興味を覚えていた。

ゼータの反応を見るに、彼の秘蔵しているという『魔王文書』には、勇者に関する何らかの記述があり、そこには魔王を脅かす何らかの示唆が秘められているのだろう。

それは何か？

異世界から召喚される人間を研究する者にとって、これほど興味をそそられる物は無い。

(見たい……『魔王文書』……)

私は何度も頭の中でそれを夢想した。

遺跡から発掘された先史の遺産。

そこに記されている、異世界の記述。

預言書なのか？

それとも、何らかの確定要素に従って著された分析書なのか？

『勇者典範』だけではどちらとも断じがたい。

私の推測では、『勇者典範』と『魔王文書』は二巻で一つなのだ。

(この二つを照らし合わせてみれば、異世界召喚という不可解な現

象についても、何かしらの説明をつけられるだろうに……)

私は焦燥感に駆られ、身悶えした。

ゼータは決して『魔王文書』の内容を私に明かそうとはしない。

驚くべきことに、魔王本人にさえその全容は伝えていないという……
一体、そこに何が書かれているというのか？

「今すぐ首を刎ねましょう。魔王である貴方様ならば難しいことではありません」

「あんたはさつきからそればかりだな」

さも面倒くさそうに、ラーズは手をひらひらと振る。

「勇者を軽んじてはなりませんぞ！」

「……」

ラーズは私の目から見ても趣味が良いとは言えないような金飾の立派な椅子に腰かけ、目の前の机の上にダン！と両足を投げ出した。いつも顔にはゆったりとした笑みを浮かべているラーズが、珍しく不機嫌であることの意味表示をしたのだ。
当然、ゼータも少し身を竦めた。

「……なあゼータ、あんたのことが好きになりかけてたんだぞ。こんな些細な問題で俺達の仲が壊れてしまうのはお互いに望ましいことじゃないだろう？」

「こ、これは……差し出がましい口を挟みました。魔王ラーズ様……」

一歩下がって謝意を述べると、ゼータは深々と首を垂れた。
それでも、その目にはいまだに不満そうな光が宿っている。

「しかし、私は……」
「ラース様ア」

そこへ扉を開けて、背の低いカエル顔の男が部屋へ入ってきた。両手に、いくつかの荷物を抱えている。

「おっ、持ってきたな」
「まったく、驚きましたねエ」

カエル男はラースの前に抱えてきた品々を広げて見せた。

「女は二人とも小金持ちでさア。金貨は二人合わせて八十枚ほど持ってたやしたぜ。野郎は無一文でしたかね」

「ほほう……あの二人、よほど名のある家の御令嬢なのかな？」
「さあてねエ……？身につけてる服も上等なもんでしたからねエ」
「おいおい、コリンチャ。まさか脱がしじゃないだろうな？」
「そうしたいのは山々でしたがねエ」

カエル男　コリンチャ（私はその名を今日初めて知った）は下卑た笑みを浮かべて舌なめずりをした。

「ラース様の御命令通り、指一本触れちゃいけませんよ」
「そうそう。昔は裸でも良かったんだけどな。最近は脱がせる楽しみにも気付き始めたんだ」
「へっへ……おさすがで……」

何が「おさすが」なのかは私には判然としなかったが、どうやらあの勇者とともに囚われていた女二人に関する話のようだった。ふむふむ、なるほど。

つまり、忠実なる魔王の僕たるコリンチャはあの哀れな虜囚三人の持ち物を接收し、己が主のもとで検分しようとしてここへ持ち込んできたというわけだ。

「しかし、あのガキ、一丁前に剣まで腰に差してやがったんですぜ」「どれどれ……ほー、こいつは立派」

ラーズがすう、と抜いた剣は確かに美しい光を放っていた。

「未練がましく『返せ』なんて言ってやがりましたぜ。何でも友人から貰ったもんだそうで……」

「ううむ、そうか……なら大事に使ってやんなよ」

そう言うと、大して興味も無さそうに、ラーズはぽいとコリンチャに剣を下げ渡してしまった。

コリンチャはその剣をさっそく自分の腰に差す。

しかし、彼の足が極端に短いせいで、鞘先がカチンと地面について音を立てた。

「おおっ、なかなか似合うじゃないか」

「へっへ……おありがとうございます」

「で、後は？」

「小娘のぼうが上等そうなペンと手帳一冊、色っぽい女のぼうは手鏡、短剣、口紅……」

「ゆ、ゆ、勇者のも、も、持ち物は？」

私はじれったくなって訊いた。

コリンチャは小馬鹿にしたような目をこちらに向けた。

「筆先の無いペンが一本と、飴玉二つ。へっ、その辺のガキでもも

「う少しマシな物を持って遠足に行きやすぜ」

「よ、よ、よこせっ……」

私は彼の手からペンを奪い取った。

確かに、ペン先が無い。

一体これはどういう……

「教授。そいつは異世界のペンだ。胴体を回してみな」

「……お、おおっ」

なんとなんと、ラーズの言葉に従ってキリリと胴体部分を回すと、何と内部からペン先がひょっこり現れた！

「す、す、素晴らしい……！」

私は異世界の技術に驚嘆した。

この程度の細工は、勿論、こちらの世界の職人にも可能だろう。

しかし、たかがペンの如き小物に対してこれほどの余分とも思えるギミックを与えるということは、ラーズ、そしてあの少年がいた世界というのはよほど文明が進んでいたに違いない。

『異世界のペン』……いや、それだけでも十分に価値のある代物である。

「ふうん……」

私の隣から白い手が伸びてきて、机の上の手帳を取る。

振り返ると、ラーズの情婦だった。

ええと、名前はなんて言っただけ……

「ルイーゼ、何か面白いことが書いてあるかい？」

そうだ、この女はルイーゼ。

「……なんだか、小難しいことが書いてあるわ。おまけに紀行文みたい……」

パラパラとページをめくっていく指が、ふと止まった。

「……」

女はほんの少しの間、押し黙っていた。

(ん……?)

私は異世界の研究を始める前は、人間の思考機能論を専攻していたので、人間の細かな動作を読み取ることが得意だ。

したがって目の前の女の、ちょっとした顔色の変化を見て、その異変に気付いた。

瞳孔が少し広がり、舌で唇を湿らせる。

非常に小さな動きではあるが、これは明らかに動揺している証拠だ。

「どうした？何かあったかい？ハニー」

「……いいえ、何も無いわ。ラーズ。何も」

「うん？」

「ほ、本当に変なノート。『勇者の生態』なんていう見出しまで載ってるのよ」

「ゆ、ゆ、勇者の生態……！」

私はその手帳を女の手からひったくった。

「きゃっ、何するのよ!」

「ゆ、ゆ、勇者の生態……ふむふむ……な、な、なるほど……」

そこには正確な観察に基づく勇者の能力や特徴が、微細にわたって記されていた。

(うむむ、見事だ……見事な研究ノートだ……)

何者かは知らないが、これを著したのが、かなりの学術的知識と文才を持つ才媛であることは疑いようもない。

私が解読した『勇者典範』の内容を、奇しくも補完するような形で様々な注釈が付け加えられている。

(『勇者は他人に善行を施すことで勇者タイマーをリセットすることができ。しかし、それは人間でなくても有効である。実証済み。例えば、樹上から転落した鳥の巣を、再び元の位置に戻すだけでもそれはできた』)

ほう、これは新しい発見と言える。

別の動物でも勇者タイムのリセットが可能とは。

では、植物はどうなのだろうか？

花に水をやるというのは？

この点に関してはテストの余地がある。

(『女性の身体への不純な動機によるボディータッチは禁止。勇者タイムにペナルティ。これは強引に触らされたという場合でも有効である。ただし、邪な心が無い場合のボディータッチは無効。実証済み』)

ふむふむ。

では、女にまるで興味の無い勇者であれば、この点は問題無いということになる。

「ね、ラーズ」

私を手帳の内容に没頭している傍らで、部屋の隅に控えていた女が甘い声を出した。

「うん？何だい、ルイーゼ？」

「……私、その、ちよつとお化粧直しをしてくるわ」

「おや？珍しいな？今すぐ？何かのお楽しみの用意とか？」

「当ててみて」

「ダメダメ、どんなにいやらしい格好をしてきても今夜は可愛がつてやれないぜ」

「うふん……ば・か」

女ならではの奇妙な媚びを見せて、そそくさとルイーゼが部屋を出ていった。

うつむ、女というのは実に不可解な生き物だ。

泣いていると見せて笑っている。

悲しんでいると見せて怒っている。

なにやら困惑したかと思いきや、急に男に媚びて見せる。

俗情というものがあまりにも多い生き物に思えてしょうがない。

「ふーん……？」

ラーズはというと、女の消えたドアをしばらく見つめ、何やら色々と思案を巡らせているようだった。

この男も全く不可解だ。

俗情などというものを遙かに超越した、屈折した思考回路と強靱な意志、そして恐るべき実行力の持ち主である。

その点を考えると、確かに魔王に相応しい存在と言える。

(……では、あの少年は?)

ケンイチという名の、あのあまりにも若く、未熟な勇者。彼は勇者に相応しいのか?

とてもそうは思われない。

このラーズという男に比すると、あまりにも差がありすぎる。

(そのことに関しても研究の余地ありだ……)

私は再び手帳へ眼を落とす。

そこで気になる記述を発見した。

(『勇者の体は完全な不死身ではない。物理法則はそのまま適用されるため、空気が無くなれば窒息する。無理が祟れば過労死の可能性も。乗り物酔いもするようだ。実証済み』)

ほほう……

では、手足を拘束した後、海中に沈めるといったような手順を踏めば、勇者を殺すことも可能なのだ。

(……魔王も殺せるのだろうか?)

そんな考えが頭をよぎり、私はちらりとラーズのほうを盗み見た。

そして 戦慄した。

「アルヴァンの魔法塔だと!？」

ゼータが叫んだ。

「奴め! 一体何をしに魔法塔へ行ったのだ!？」

おや? これはどうしたことだ?

彼は一体何を興奮しているのか?

「ヤツフォン! 勇者はあそこで何をしたのだ!？」

「こ、こ、子供をた、た、助けたと書いてある……ふ、ふ、二人の子供を……」

「おのれ! 忌むべき者め!……よりによって魔法塔へ!」

ゼータは完全に我を失って怒り狂っている。

「ラーズ様! やはり殺しましょう! 勇者に死を!」

「いや、俺はもう少しあのケンイチで遊びたい」

「一刻の猶予もありません!」

「もう、うるさいね」

ラーズの手がヒュツと素早く動き、それと同時にゼータの声が止まった。

「…………ツ!」

私は茫然とその光景を見ていた。

(な…………)

まるで手品のようだった。

先ほどまで机の上にあったペン　それが突然消え、代わりにゼー
タの喉から生えたかのように見えたのだ。

そのペンがラーズの手によって突き刺されたのだと気付いたのは三
秒ほど後で、それはゼータがぐらりと力を失って倒れ込んだのと同
ほ同時だった。

魔王教団の司祭は床の上で二、三度大きく痙攣し、そのまま動か
なくなった。

(し、死んだ……)

間違いない……魔王が彼を殺したのだ。

一瞬、静寂が訪れ　それから私は、なんとか口を動かした。

「な、な、な……」

「んん？」

「な、な、なんとということ……！」

「おほほう、ご覧の通りさ」

そう言つて肩をすくめて見せるラーズの様子からは、罪悪感は何と
より、後悔の念さえも微塵も感じられなかった。

(な、なんと……)

なんと恐ろしい男だろう！

人を一人殺めた直後だというのに何事もなかったように平然として
いる。

逆に、その光景を目の当たりにした私とコリンチャの方が動揺して
いた。

カエル顔の小男に至っては　この手の暴力沙汰は見慣れているだ

ろくに カチカチとこちらにも聞こえるほど大きな音を立てて歯を震わせ、怯えていた。私は思わず声を荒げた。

「し、し、しかし、ぜ、ぜ、ゼータは……！か、か、彼は、お、お、お前のみ、み、右腕では……！？」

「右腕……うむ、右腕だ。確かに。惜しい人間を亡くしたもんだよ。俺も残念でならない」

ラーズはひとまず沈痛な面持ちというのをして見せたが、すぐにこらえきれないといった様子で相好を崩し、親しげに私の肩を抱き寄せた。

彼は耳元で囁いた。

「なあ、教授。例えばこう考えてみてくれないか。あんたが便所で用を足した後に自分の右腕が言う。『おい、こっちの手でケツを拭くんじゃないぞ』と、これだ。どう思う？」

「……？」

「煩わしいだろう？そう、『なんだよ、右腕の分際で指図しやがって！』と思うはずだ。まあ、つまり そういうことだ」

私は呆気にとられていた。

彼の発想の飛躍についていけなかったのだ。

「……？」

「ま、難しく考えないことさ。これはあんたにとってもラッキーなはずだぞ？」

「ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど……？」

ラーズは答えるかわりに、ゼータの亡骸の前に屈みこんでその懐を

まさぐり始めた。

「えーっと……うん？おおっ、そう、こいつだ」

そう言って取り出したのは、一本の鍵だった。

「そ、そ、それは……？」

「ゼータの部屋の鍵さ」

「？」

「これで」

ラーズは私の目の前でそのカギをブラブラと揺らす。

「『魔王文書』はあんたの物」

私の手の平の上に、鍵がポトリと落とされた。

「願ったり叶ったりだろう？」

「……」

お……

おお……

なんとということだ。

そこまで明確に私の心中が見透かされていたとは……！

「ラ、ラ、ラーズ……」

「善人になるなよ。俺の……魔王の傍にひっついてる以上はな」

低く冷たい声でそう言うと、ラーズは恐怖にまだ固まったままの私の肩をぱん、ぱん、ぱんと三回、軽く叩いてから、小男へ向き直っ

た。

「コリンチャ！」

「へ、へい……っ」

突然冷水を浴びせられでもしたように、小男の声は上ずっていた。

「手下を二人ほど連れてきなよ。ちょっと面白いゲームが始まるぞ」

「へ、へえ……」

「それじゃ、教授。後はごゆっくり」

それだけ言うと、ラーズはコリンチャと一緒に扉の外へ消えた。

「……」

取り残された私は、ぼんやりとゼータの亡骸を見下ろした。

顔は土気色に变じ、その虚ろな目は宙を睨んだまま、もはや何ものも映してはいない。

喉から流れ出る血は赤いカーペットに吸い込まれ、黒い染みをじわじわと作っていった。

（お前も私も、とんでもない男に関わってしまったようだな……）

その、あまりにも唐突で無意味な死に様には、哀れみすら覚える。

だが……

だが、私は手の中にしっかりと鍵を握り締めていた。

とうとう『魔王文書』が手に入る！

悔しいがラーズの看破した通りである。

学究心が倫理観を駆逐したのだ。

ゼータの死を悼む気持ちよりも、抑えきれない興奮が私の胸に渦巻いていた。

ああ……こうして人は、獣になっていくのだ。

プリズンブレイカー

ポツン……ポツン……

天井から何の汁か分からない雫が落ち、それが地面を打つ音が静寂を一層引き立たせる。

古からの死臭漂う密室。

そこに美女二人と閉じ込められてる俺。

ちよつとした18禁ゲームの題材にはうってつけだが、事態はそれほど樂觀的ではない。

俺は舌の先で奥歯に触れてみた。

……やっぱり少しグラついてる気がする。

(当分はゼリーしか食いたくない……)

なんて悠長なことを考えながらも、俺は天井に繋がれている鎖に全体重をかける。

「ふんっ……くおおおっ……！ていりゃあっ！」

手首をねじったり身体を回転させたり、ぶるんぶるんと思いつき振り回してみたりと縦横無尽の一人相撲だ。

天井の鎖が切れるとか手錠が壊れるとかを期待しての非常にポジティブかつ野心的な行動なんだが、傍からは『動物園にたまにいる躁病の気のあるゴリラ』にしか見えないんじゃないかと不安になる。

そんな俺の狂態に哀れむような視線を向けながら、プルミエルが遠慮がちに口を開いた。

「あー……なんて言うかケンイチ。あなたは一生懸命やってるんでしようけど、『躁病の気のあるビフビス』みたいよ」

「『ビフビス』……?」

「プルミエル……ビフビスは言い過ぎだよ。彼も頑張っているんだぞ」

「そうね、ごめんね」

ううむ……褒め言葉じゃなかったってのは分かったな。

「しかし、ふふ……あつはは、ビフビスとは！（笑）」

「えー、あんたまで、なに笑ってんのよう（笑）」

もうこらえきれないワ、といった様子で二人が笑う。

な、何だ？その（笑）は！

そこまで言われると見てみたいぜ『ビフビス』！

よほど素っ頓狂な生き物に違いない。

（いやいや、今は……）

今はそれどころではないのだ。

ビフビスの謎は追々解くとして、今はこの狭くてジメジメしたクソつたれの地下室から逃げ出すことが急務だ。

「ええい！くそっ！おらあああ！でりゃあ！……ちくしょう！駄目か……?」

俺の一人相撲はあつという間に千秋楽を迎えた。

くそう、やっぱりどう足掻いてもこの鎖は切れそうにない。

となると、他の手を考えなければならぬということだ。

(考える、ケンイチ……喧嘩はからつきしの三級品でもトンは一級品だろ?)

とはいえ、実際は焦りが募るばかりで上手いトンは閃かない。
おお、やべえなんて思っていた時

ガチャン

とノブが回り、ゆっくりと重たい鉄扉が軋む音を立てながら開いていく。

(おいおい、嘘だろ……まだ十分ほどしか経ってねえぞ……)

しかし、相手は天下無敵の魔王様だ。
約束を破るなんてのは朝飯前だろう。

まあ、三十分のはあいつのサジ加減だし、もともと約束したワケでもない……

(ああ、もう、ちくしょう……どうしよう?)

そこそこの絶望感が俺の心を覆い始める。

ギィィィィ……

あ、あれは終焉を告げる破滅の音……

しかし 鉄の扉の向こうからひょいと顔を出したのはラーズではなかった。

「……生きてるわね?」

「……え?」

おお……この人は、アレだ。
先ほど、俺が人間サンドバックと化していた時に少しだけ庇ってくれた、あのセクシーなお姉様だ。

彼女は部屋の様子を窺い、また顔を引つ込めると、今度は素早く部屋に入り、そつと音を立てないように扉を閉めた。

伊賀者も真つ青の、無駄の無い動き。

それはどう見ても、人目を警戒している動きだ。

しかし、何故？

ラーズの彼女ならもう少し堂々としていればいいだろう？

「……なにしに来たの？」

ブルミエルが警戒心剥き出しでつつけんどんに聞く。

「そんな目で見るんじゃないよ……ここからあんた達を出してあげるわ。ついておいで」

「ワオ……」

なんて言うか 待ちに待った急展開だ。

彼女は鍵の束をさつと取り出すと、俺達の手錠を素早く外していく。俺は腕が自由になった途端に支えが無くなって、その場に倒れこんでしまった。

くそ、思った以上に膝にキてるな……

「ちょっと、ケンイチ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫……けど、しばらくアルゼンチンタンゴは踊れそうにない」

「いい？無駄な話をしてる暇は無いわ。すぐにラーズがここに来る。一回しか言わないから良く聞いて」

屈みこんで、そう切り出した女性の顔は真剣そのものだった。もちろん、俺の眼はその圧倒的ポリユームの、深い谷間に釘付けになどなつてはいない。

「女子達はこの先の通路を真つ直ぐ進んで、突き当たりの階段を上る。そうするとラーズ専用の娼館の前に出るわ。そこは男子禁制だから、中に入り込めれば、裏口から簡単に外に抜け出せる」

「ん？ケンイチは別行動？」

「娼館に男は入れないのよ。彼は私が連れてくわ」

「どこに？」

「下水道を通つて行く。あそこは入り組んでるから、道を知ってる人間と一緒に入らないとすぐに迷う」

「私達も下水から行けないの？」

「それは無理。下水の出口には『アンビルカッター』っていう極悪な刃物のついてる水車が回ってるわ。奴隷たちの逃走防止にね。ラーズが言うように、彼が不死身の勇者なら通れるだろうけど……」

「あなたを信用する材料が無いな」

メイヘレンがぴしゃりと言う。

「それは……」

「メイヘレン、その気持ちも分からんでもないが、せつかく助けてくれるって言うんだから乗っかるうぜ」

「しかし、ラーズの女だ。これも彼を楽しませるためのゲームなんじゃないか？」

メイヘレンの目は冷たい敵愾心に満ち溢れていた。

正直言つて、背筋がぞつとするほどだ。

確かに、目の前に希望を与えておいて、それをさつと絶望に塗りか

える、なんてことは性悪説を標榜する、あの野郎の好きそうなことだけ……

「何とも言えないわ……信じる、信じないはあんたらの自由よ……」

女性はひどく齒痒そうに、そして残念そうに俯いた。

俺はその様子に、先ほどまでラーズに甘ったるい媚を売っていた時とは大違いの、ひどく無防備な、人間らしい感情を見た気がした。そんなのを見せられちゃあ、勇者として黙っていられないな。

「なあ、俺は……」

「何だ？」

「俺……この人を信じるよ」

「……」

「ほら、手錠も外してくれたしさ……いずれにせよ、少しは状況が好転したんじゃないかな」

「君は甘いぞ、ケンイチ」

「そう、俺は甘い。俺の正体はマシユマロマンなのかもしれない。でも、この人を信じてついていく。頼むよ、メイヘレン、プルミエル。疑うよりも信じてみようぜ」

俺だって根っからの善人じゃない。

裏切られれば傷つくだろうし、腹も立つだろう。

でも、俺の為に何かしてくれるっていう人には信頼で応えたい。

甘い考えだけど、たぶん後悔はしないだろう。

俺の言葉に、プルミエルとメイヘレンは互いに目を見合わせ、やれやれといった様子で肩を竦めた。

「……まー、このままじゃあこのままだしね」

「仕方ないな……君の賭けに乗ろう」

「よし、決まりだな。それじゃあ、えーっと……」

「ルイーゼよ」

「ルイーゼさん、よろしく頼みます」

「……ええ」

大脱走開始だ。

「……しかし、クサイツスね……」

「……下水だから当り前でしょ……」

「まあ、そうツスね……」

ブルミエル達と別れて、俺とルイーゼさんは地下へと潜り、暗黒の下水道を進んでいた。

足がようやく一つ載せられるくらいのやたら狭い道を、前を歩くイーゼさんの持つ松明の明かりを頼りに慎重に歩いていく。

ぬめりに足を取られて踏み外したが最後、脇を流れる黒く淀んだ汚水の流れに顔面から突っ込むだろう。

綺麗好きを自負する俺にとっては拷問に近い。

うっ、なんてスリル満点のゲームなんだ……

「そついえば……」

「何よ？」

「どうして俺達を助けてくれたんです？」

「……別に。気まぐれよ……」

「あー……そつスか……」

会話終了。

あまり聞くとご機嫌を損ねそうな雰囲気だ。
ま、急に仏心を出してくれたってことかな？
もしくは俺のいたぶられる姿が予想以上にセクシャルだったとか？

(へっへ、それはないだろうな……)

自嘲気味に笑う俺。

しかしこの世界に来てからってもの、女の人(しかも美女)に助けられることが多い。

プルミエルに始まり、メイヘレン、シスター・メアリ、アリイシャ、そしてこのルイーゼさんだ。

(フェロモン……？異世界フェロモン……？)

何考えてんだ俺、と思ったところでルイーゼさんが静寂を破った。

「……あんだ達の日記を読んだわ……」

「日記？」

「ほら、勇者の生態とか何とか……」

「あ……あーあー！そういえばプルミエルが書いてましたね、『勇者研究ノート』」

「パルミネで助けた二人の子供のこと……」

「え？ロビンとニナシスのこと？」

頭の中に、さつとあの二人の子供の顔が浮かんだ。

ちよっとおマセではあったが、可愛いわんぱくキッズ。

何だよ、そんな細かいことまであのノートに書き込んだのか。

ひよっとしたらプルミエルは、勇者研究の権威の座のみならず小説家デビューまで狙ってるんじゃないかな？

「……二ナシスはね、あたしの娘なの」
「え……」

予想外のルイーゼさんの告白に、俺は言葉を失った。
前を歩く妖艶で、グラマラスで、セクシーな女性が……

あの、少し内気だけど、はにかむと世界一可愛らしいあの女の子の
……

「お……お母さん……?」

そ、そうだったのか……と俺は口の中で小さく呟く。
そして、なんだか恥ずかしい気持ちになった。

俺はさっきまで偉そうなことを言っていたけど、それでもやっぱり
少しはこの女性を疑っていたのだ。

逃がすと見せてラーズのもとに連れていかれるんじゃないか?
もっとひどい拷問を食らわせられるんじゃないか?

このままこの臭い下水に閉じ込められるんじゃないか?
そんな不安が、やっぱり心のどこかに残っていた。

でも、ルイーゼさんは自分の身の危険も顧みず、助けに来てくれた
んだ。

(娘を　二ナシスを俺達が助けたという、あの手帳の書き込みを
見て……)

娘を思う母の愛、そして心の絆を感じて、俺は胸が熱くなった。

「あたしは十六の時に田舎を飛び出して、この街に来たわ。あんな
寒村で明日の食べ物心配をしながら細々と肩身を狭くして生きて
いくのが嫌だったの。まあ、とにかく若かったのよ……」

ルイーゼさんは歩みは止めずに、淡々と語り始めた。

「でも、世間の右も左も分からない田舎娘に現実は厳しかったわ。そうしてすぐに悪い男に騙されて、気が付いたら路地裏に立って客を取らされてた」

「……ひどいっスね……」

「苦痛の日々だったわ……何度も死を望んで、でも、死に切れなくて……そんな時だったわ。ニナシスを身籠ったのは……」

心なしか、ルイーゼさんの声がすこし明るくなった。

「私、嬉しかったのよ。父親なんて誰だか分からなかったけど、でも、その時に決めたの。この子の為に生きようって。私の希望になつてもらおうって……でも……私はもうこっちの世界に堕ちきつて……」

彼女の声が詰まった。

そこから先は聞かないでも、ニナシスが孤児院にいたことで大体のことは察しがつく。

「ニナシス……もう五歳になるわね……元気だった？」

「……はい。素直な、いい子でしたよ」

「そう……」

こちらから顔は見えないけれど、その肩が少し震えているのを見て、彼女が泣いているのに気づいた。

「会いに行っていないんですか？」

「会えるわけないわ……こんな女がいきなり会いに行つて『お母さんよ』なんて……言えるわけが無いわ」

そうかな……
俺はそうは思わない。

「会いに行つてあげてください。ニナシスは、絶対喜びますよ」
「無理よ」

「無理じゃないツス。あなたがニナシスのことを思っているように、ニナシスもあなたのことを思っているはずですよ」
「それは無いわよ。あの子は私の顔も覚えちゃいないわ」

ふ、と自嘲気味にルイーゼさんは笑う。

「でも、それでいいの」

「え……？」
「このまま、世の中の汚いことを何も知らないまま、あの優しいそんなシスターのところまで暮らすのがあの子にとって一番の幸せなんだわ」

「そんな……そんなわけねえよ！」

俺は耐えきれなくなつて、思わず叫んでいた。
暗闇の中に、声がこだまする。

「そんな……そんなわけないじゃないツスカ！何があつても、どんな理由があつても、親が恋しくない子供がいるはずないツスよ……」
「あんな……」

ルイーゼさんが足を止め、振り向く。

俺は気がついたら、泣いていた。

自分の親のことを考えちまうと、もう、駄目だった。

普段は厳しいけど、男らしい俺の父さん。
普段は優しいけど、口うるさい俺の母さん。

二人は、息子がいきなり消えちまってどう思ってるだろう？
どんなに心配させてしまってるだろう？

父さんの性格を考えると、毎晩夜遅くまで起きてて、俺が帰るのを
待ってるかもしれない。

母さんの性格を考えると、朝飯も弁当も晩飯も、毎日、俺の分をち
やんと用意してくれてるに違いない。

考えるだけで胸が痛んだ。

それだけで涙が止まらなかった。

「お願いだ、ルイーゼさん……二ナシスを迎えに行つてあげてくだ
さいよ……子供が親の顔を知らないで生きていくなんて不幸すぎる
よ……」

「ケンイチ……」

「うつつ……」

「……わかった。わかったよ、ケンイチ。ありがとう……あたし……
…二ナシスに会いに行くよ」

ルイーゼさんが慰めるように、俺の涙をハンカチで拭いてくれる。
う、なんか格好悪いけど、でも、どうしようもない。

いい香りのするハンカチは、俺の脳裏に母親を思い出させてくれた。

「ね、行こう、ケンイチ。今はここから逃げるんだよ。あたしもあ
んたを無事に逃がしたら、きっとこの街を出る」

そうルイーゼさんが言った時だった。

俺の背筋が、凍りついた。

(……！？)

彼女の背後で、『ボシュツ』と音がして、小さな火の玉がゆらゆらと動くのが見えたのだ。

俺は目を凝らして、前方の闇を見つめる。

火の玉はゆっくりと移動して……そして、一つの顔を照らした。

「ラ……ラズ……」

最悪だ……

火の玉に見えたのはマッチの火。

奴はそれで煙草に火をつけ、悠々とふかした。

その後ろには、大小の人影が蠢いている。

ち、畜生……なんて対応が早いんだ……

「随分と臭うところに 忍び込んだもんだな？」

俺達の逃亡劇に慌てた様子は微塵も無い。

奴は、そこでもう何時間も前から待ってましたと言わんばかりに、余裕の笑みを浮かべて壁に寄り掛かっていた。

「ラズ！？あ、あんた、どうして!？」

「残念でならないよ、ハニー。まったく、なんてことだ。お前には目をかけてやってたのに……」

口ではそう言いながらも、奴の顔には笑みが浮かんでいる。

「ち……違うの、ラズ。その、彼は、勇者なんかじゃなかったのよ。ただのガキよ。ほら、見たら分かるでしょう？」

「うん、うん」

「ほら、あんたがゲームだって言ってたじゃない？これはその延長みたいなもんよ」

ルイーゼさんの必死な言い訳を、ニヤニヤしながらラーズが訊く。その様子を見て、俺は確信する。

駄目だ、と。

どんな必死の言葉も、奴の底の見えない、ブラックホールのような心には全く届かない。

奴はあくまでも魔王らしく、自分のやりたいようにやるだけだ。

ここから先は、奴の気分次第でしか状況が動かないだろう。

(いや、ここは少しでもこっちがイニシアチブを取ってやる……)

俺は腹にくつと力を入れた。

「待ってくれ、ラーズ」

「ん？何だい？勇者ケンイチ」

「この人は関係ない。俺がそそのかしたんだ。俺の 異世界フェロモンで」

「ぶっ！」

おっ、どうやらツボにはまったらしい。

ラーズの大きな笑い声が暗い下水に響き渡る。

「はっはっはっは！……あー、面白い。最高だ、ケンイチ」

「センキュー、ラーズ。さあ、そこで提案だ」

「聞こう」

「一対一で勝負しようぜ」

そうだ。

のび太も、未来に帰っちまうドラえもんを安心させるためにジャイアンに立ち向かったじゃないか。
あいつがやったなら、俺にもできる。
根拠の無い自信だけが俺の支えだ。
俺に宿れ、全国のいじめられっ子の魂！

「俺が勝ったら、全員を逃がす。ルイーゼさんも自由にする。あんなが勝ったら、えーと……まあ、好きにすりゃあいい」
「……」

「返答や如何に？」

「ケンイチ……君は本当に最高だ。このボンクラどもなんぞよりもよっぽど男らしいぞ」

ラーズは自分の背後に立つチンピラどもを指さして言う。
それから、天を仰いで恍惚とした表情を浮かべた。

「アーーーーーア……その言葉　その言葉が聞きたかったんだ……！」

うお、全く、危ないヤツ。
だが、そんなことに動揺してはいけない。
ここはあくまでも冷静に……

「ラーズ、やるのか？やらんのか？」
「やるやる」

予想通りの二つ返事だった。

「やらない理由が無いよ、ケンイチ」
「よし。でも、ここは臭いし、狭い。どうだろう、外に出てからや

らないか」

「いいとも。ウワアオ！血が滾ってきたぞ」

ラーズは狭い道を、小刻みにステップを踏みながら、さも愉快そうに歩いていった。

チンピラどももそれにぞろぞろと続く。

ルイーゼさんは真っ青な顔でこちらを向いた。

「ケンイチ……あなた！」

「ここじゃあ、絶対に二人とも逃げられないツス。外に出れば、隙を見て何とかなるかもと思って……」

「バカ！あんたはあの男の怖さを知らないんだ」

「大丈夫ツス」

俺はルイーゼさんのまだ震えている肩に、そっと手を置いた。

「勇者が魔王を倒すのはお約束……というか、決まりみたいなもんですよ」

もちろん、強がりだ。

勝算は無い。

勝てる気もしない。

(だが、のび太もやったんだ……)

奴はジャイアンに『もういい、俺の負けだ』と言わせたんだ。

石造りの狭い通路を進むと目の前に扉が現れ、そこにはルイーゼの言っていた通り、『娼館』と書いてあった。

「ここを開けたら、多分、門番がいるな」

耳を当てて扉の向こうの気配を読みつつ、メイヘレンが言う。

「どっちが倒す？」

何処となく楽しそうだ。

「私。ブツ飛ばすわよ」

「待てよ、私だってそうとうストレスが溜まってるぞ」

「えー」

「じゃあ、ごうしよう。私より背が高かったら、私が倒す。低かったら君。どう？」

「ここ大男ばかりじゃない。不公平だわ」

「では、『ラーズよりも背が高い』だったら？」

「うーん……ま、いいわ」

「よし。開けるぞ」

メイヘレンは躊躇い無く扉を開けた。

「おおん？」

目の前に立っていたのは、頭からつま先までをガツシャガシャの重

装甲に身を包んだ、熊のように大きい男だった。

「……メイヘレン、あんたよ」

「うづむ、これは予想外」

二人でしばらくその男を見上げる。

さて、どうしよう？

「お二人さん、ここはラーズ様の許可無しには通せねえ……」

地獄の底から響くような野太い声が、ヤカンのような兜の隙間から漏れ出した。

「新人か？どつから出た？生憎、ここはお前らが通り抜けちゃならねえ路だぜ？」

「カタイこと言わないでよ、ねえ」

いかにも商売慣れしてますよ、といった風にすり寄ったメイヘレンの指が、分厚い鎧の輪郭をすす、と撫でる。

あの鼻にかかるような甘い声はどこから出しているのか？

「ここを通してくれたらさ、今度内緒でさ……」

「うへっへっへ……」

ヤカン頭が奇妙に動く。

「あんたみたいなお上玉がねえ……うづ、たまらんぜ。だが、残念だったな。俺は仕事熱心なんだ……それに、ラーズ様はここで捕まえた女は俺の好きなようにしていいと仰っているしな……つまり、あんたの色仕掛けにはあまり意味が無いつてこった」

「あら……」

うーん、意外と真面目な奴。
さりとてあんまり時間をかけたくないし、このヤカン頭は素手で殴るには痛そうだ。

(しゃーないか……)

色仕掛けは苦手だし嫌いだが、危急の折である。

私はメイヘレンを押しつけ、前に出た。

「なんだ？おチビさん……へっへ、俺はツイてる……今日はこんな上玉が二人も……」

「『油地獄』……！」

「は？」

ヤカン頭はポカンとした様だ。

「知らないの？油地獄。それは」

私は空想と妄想をフル回転させ、『油地獄』というキーワードから連想される、めくるめくエロスの祭典を微に入り細に入り、スペクタクル溢れる一大叙事詩として語り上げた。

その内容は、とてもここに書くのは躊躇われるので、各自勝手に想像するように。

「ワーオ、スゲエ……『油地獄』……」

私が語り終わると、大男は夢見心地で呟く。

ヤカンの向こうの鼻息はそうとう荒くなっていた。

「しかも、今日なら美女が二人一緒よ。スリーマンセルで『油地獄』
! 今日だけよ」

「すげえ……」

「そ。ここを通してくれれば、『油地獄』の秘儀すべてを手に入れることになる……」

「秘儀……」

「男ならちゃっちゃと決める!」

「分かった。分かったぜ。ラーズ様には内緒で、な」

「勿論」

「で、どうするんだ? 今、これから?」

「夜。準備がいるから」

「何時だ?」

「十二時ごろ」

適当に答える。

「よし、行け」

「じゃ、また後でね」

「へっへ……」

薄気味悪く笑いを洩らすヤカン頭を後ろに置いて、私達はそそくさと娼館の中へ潜り込んだ。

そこはまさに享楽の館だった。

フロアーのそこかしこに限りなく露出度の高い衣装を身にまとった女達がいて、甲高い笑い声をあげたり、互いの身体を弄り合ったりしている。

その狂態は、まるで強い酒にあてられたか、何かに取り憑かれているようだ。

隅のほうで身を硬くしているのは、新人達だろう。年の頃、十五、六だろうか……

(やれやれ……ロクでもない施設だわ)

これだけの数の女を集めて『ラーズ専用』というのだから、その権勢の大なることには驚くばかりだ。

女達だってどこかから無理やり引っ張って連れてきたに違いない。魔王の名に恥じない暴虐ぶりに、感心さえする。

(でも、許されるものじゃないわ、ラーズ……)

私たちはルイーゼの指示に従って、通用口を目指す。しかし、そこに予想外のアクシデントが起きた。

ガラの悪い男達が反対側の通路からドカドカと踏みこんできたのだ。

(あれ？ここは男子禁制のはずじゃなかったっけ？)

罅に嵌められた？という考えが、一瞬、頭をよぎった。

「おらあ！女ども！全員フロアーに並びな！」

「ピーピー喚くんじゃねエ！」

「とつとと出てこい！ぶちのめすぞー！」

粗野にしてガサツ、品性の欠片も感じられない怒号が飛ぶ。

女達は悲鳴を上げながら、その指示に従い、フロアーへ集まった。

「おおっと、ヤバいわね」

「倒すか？」

「どこで？」

「確かに、暴れると巻き添えが多すぎるな……」

さつと物陰に隠れた私とメイヘレンは、そこから男達の人数を確認する。

(四、五、六……なんと、七人もねエ……)

おまけに全員が太い棍棒と、剣呑な鉈を腰にぶら下げていた。

ようは人を痛めつけるのが得意な連中というわけだ。

ガシャガシャと音を立てて、先ほどのヤカン頭の大男も慌てて合流する。

これで八人。

「ど、どうしたんだ？」

「おお、バンプル。昼間にとっ捕まえた連中がここに逃げ込むかも知れんとラーズ様のお達しだ。いいか、待ち伏せるぜ」

大男はヤカンの中で、あつと驚いた顔をしただろう。

自分の通した女二人がそうだったのだと、今になって気付いたようだ。

せわしなく、キョロキョロと周囲を見回したり、鎧兜の位置を直したりしている。

(ばーか……)

とは思っても、さて、どうしよう。

「いいか！ここにルイーゼが逃げ込んでくるかもしれねエ！あのア

マ、ラーズ様を裏切るつもりだ！」

リーダー格らしきスキンヘッドの男が大声で喚き立てる。

その口ぶりからして、ルーイーゼが私達を陥れたのではないということが分かったので、少し安心した。

「怪しい奴が来たらすぐに俺達に言え！いや、もう忍び込んでるかもしれない！」

おお、鋭いわね。

「このメス豚どもが！隠し立てしたら痛い目に遭わせるからそのつもりでな！」

私は、その高圧的な物言いにムカっ腹が立ってきた。

(サイッターの奴らね……)

男と女という一つの括りだけで、まるで身分が違つとでも言つつかのようなその態度。

男がそんなに偉いつての？

女として、たとえ多少の傷は負つても、あの連中を痛めつけてやらないと気が済まない。

私が握り拳をつくり、飛び出そうとした時だった。

メイヘレンが私の袖を引っ張った。

(プルミエル……)

(なに?)

振り返ると、そこには少女が三人、顔を蒼白にして立っていた。

先ほど身を硬くして固まっていた少女たちだ。
この喧騒の中で、出て行きそびれたんだろう。

（あちゃー、マズイ……）

ここで大声を出されると、あっという間に男達に取り囲まれてしま
うだろう。

狭い空間では、私の暗殺拳法はなかなか本領を發揮できない……

私は彼女達の目を、まっすぐ見つめた。

三人が三人とも、怯えに濁りきっている目をしている。

私は辛抱強く、見つめ続けた。

私は敵じゃない。

私は怖くないわ。

そんな意志を込めて、三人を見つめた。

すると、どうだろう。

少女が三人ともこちらに向けて、無言で頷いたのだ。

そして、三人は小声で囁き合つと、そのうち二人がすう、とフロア
ーへと出ていった。

「何だア？今頃出てきやがって！この愚図ども！」

パン！パン！と乾いた音が二度、響いた。

二人に対して、スキンヘッド男が平手打ちを喰らわせたのだ。

（あいつ！）

もう許せない！

私が飛び出そうとしたのを、腕を掴んで、残った少女が止めた。

見ると、メイヘレンの手首も同じように掴んでいた。

「まだあつちに誰か隠れてやがんのか!？」

スキンヘッド男がなりたてる。

「誰もいません」

二人の少女の声は凜然としていた。

「本当か!？」

「はい」

「な、何だ、その目は!メス豚の分際で!」

「……」

「う、く……」

男達は、その堂々とした少女達の態度に圧され、明らかに怯んでいた。

(あの子たち……)

その誇り高い姿は、何と表現していいのか分からない。

理不尽な暴力の嵐の前に、人間の尊厳をもって立ち向かう少女達。とても……胸を打たれる光景だった。

(こつちへ……)

小声で囁いて、私達の腕を掴んでいた少女が歩きだした。

私とメイヘレンは彼女に導かれて、厨房を抜け、洗濯場を抜けて、とうとう通用口の扉までたどり着いた。

後ろを振り返る。

まだ、追手がここまで来る気配は無かった。

「ここから出て」

少女が言う。

「どうして……?」

私が訊く。

「……無事に逃げてね」

少女はそれだけ言って微笑むと、私とメイヘレンを外へ押し出して、バタンと扉を閉めた。

「……」

不衛生そのものといった路地裏に、私もメイヘレンもしばらく無言で立ち尽くしていた。

活気の良い屋台の声だけが、本通りから聞こえてくる。

これが『自由貿易都市』の姿だ。

表向きは明るく自由な商売の街。

だけど、裏小路に入れば、その暗部はただれきっている。

弱者と女達の涙と、尊厳を踏みにじって、繁栄していく都市……
やがて、ぼつりとメイヘレンが言った。

「……私の妹と同じくらいの年頃だったよ、あの娘たちは……」

彼女のほうを見ると、眼鏡の奥の瞳が悲しげに光っていた。

しかし、その拳は力いっぱい握りしめられている。
怒っているのだ。
私と同じく。

「……行くわよ、メイヘレン」

「どこへだ？」

「まずはエステイを捜す」

「それで？」

「ここを潰す」

エステイはすぐに見つかった。

私達が裏小路を抜けると、目の前には大きな川が。

彼はその川べりにしゃがみこんで、水面を見つめながらメランコリ
ツクな溜息を吐いていたのだ。

いい年をしたジジイがそんなことをすると、入水自殺でも考えてい
るんじゃないかとちょっと不安になりそうな光景。

「やい、ジジイ！」

「ヒイ！」

私の声にエステイは甲高い悲鳴を上げて反応し、無様に地に伏して
額を地面にこすりつけた、

「もうお金は持っておりません。わしゃ、ただの哀れなジジイですじ
ゃ……」

「……どっかのチンピラに巻き上げられたのね」

「へあ？」

顔をあげて私の姿を見た途端、ぱあつとエステイの表情が明るくなつた。

「プ、プルミエル！メイヘレンも！無事じゃったか！おお、神よ……」

「やたら神妙な顔をしてると思つたら……オヤジ狩りにでもあつたの？」

「ち、違うわい！ガキどもめが、小遣いが欲しいというから恵んでやっただけじゃ。フオフオフオ、わしが本気を出したら、あやつらの肉片一つこの世には残らんじやろつて……」

すはーつとワケのわからない構えをあれこれして見せるエステイ。思わず目を覆いたくなるほど無様な姿を晒した後に、こついったことを易々と言つてのけるその根性は大したものだ。

「あり？ケンイチはどうした？」

「彼は別行動。ちよつと心配だけど、今はどうしようもないわね」「むっ」

「それより、エステイ、『マギ・リンカー』を使うわ。出して」

「ええっ！もう!？」

「『マギ・リンカー』だと……?」

メイヘレンも驚いているようだった。

「おっ、知ってるのね。さすが魔道貴族……」

「待て待て、『マギ・リンカー』といえば神宝具だろう。なぜ、老師が持っているんだ？」

「フッフッフ。『マジコ・ミステル・エステイアンドリウス』とはこのワシのことよ。後で抱いてやっても良いぞ」

ドヤ顔でエステイが言う。

メイヘレンはそれを無視して、私に向き直った。

「私の分もあるだろうな？」

「うーん、とりあえず、五つほど持ってきてくるはず……」

「よし。ひと暴れしてやるっ」

そう。

この貿易都市を、真の自由貿易都市へ変革させる必要がある。
今日がその日だ。

アルティメットウォリアー

「完璧なシチュエーションだよな？」

ラーズが両手を広げて、満足げに言う。

「大空の下で、雌雄を決する魔王と勇者……ギャラリーが少ないのが甚だ残念だがね」

俺達は貿易都市の郊外の、林の中にいた。

人通りは全く無い。

外に出た途端にルイーゼさんの手をとって逃げだそう、なんて安易なプランも持つてはいたんだが、下水の階段を上ったところで屈強な男どもに両脇を囲まれて、否応なくラーズと向かい合う格好にさせられてしまった。

つまり、プランAは失敗に終わったってこと。

（となると、プランBだ）

これはいたってシンプルだ。

目の前にいる野郎　ラーズを倒して、堂々とこの場を去る。
それだけ。

（だが、それが難しいんだよな……）

俺は改めて、悠々と煙草をふかしているラーズを見つめる。

長身瘦躯、なんて言葉があるけど、ようは余分な肉が付いていない

だけで、この男が肉食メインの異国人ならではの、非常にがっしりした体つきをしていることは疑いようもない。腕力では到底かなわないだろう。

「どうする？そろそろ始めるか？」

ラーズが煙草をこちらに放り投げて言う。

「……」

俺はその煙草の火を足で揉み消し、拾って、ポケットへしまつ。

「？」

「吸殻は灰皿に」

不思議そうにするラーズに、そう忠告してやった。公共マナーの基本だ。

「ほほお、御立派、御立派。いやあ、さすが、ニッポン人だな」

「気をつけるよ。そういう小さな不注意が大火事につながるんだぞ」

「でも、『勇者タイム』を稼げただろう？」

ちら、と確認してみる。

『588・22』

おお、確かに。

「今ちょっと考えたんだが　ひよっとしたら俺達は共存できるのかもな、ケンイチ。俺が悪さをして、君がそれをなんとかする。そ

うしたら、俺達は意外と良いパートナーと言えるんじゃないか？」

「ずっとお前の尻拭いをしろってのか？ご免だね」

「あー、そうか。残念だ」

余裕ぶつた笑みが、その気は無いことを暗に示している。

こいつは俺を完全に舐めきっているのだ。

さっき一騎討ちを申し込んだ時も、『思う存分痛めつけてやるぜ』
という意志以外の何物も感じなかった。

俺は腹が立ってきた。

男として、舐められたまま引き下がれない。

一寸の虫にも五分の魂、という言葉がある。

「くだらん事を言うのはやめろ。始めようぜ」

「わはっ！いいぞ」

俺はさつと身構えた。

構えた、とは言っても、ロクに喧嘩もしたことが無いから、テレビ
なんかでよく見るK1ファイターの見様見真似だ。

バナナでもシユルトでもホンマンでもいいから、俺に宿れ！

いや、やっぱホンマンは駄目だ。

「あー……何だそれは？もうこの時点で君が不利になっちまったぞ」

溜息まじりで、急に妙なことを言い出すラース。

俺は少し面喰ってしまった。

「な、何だと？」

「今、少し隙を作ってやったのに気がつかなかったのか？」

「な……？」

「頭を使うんだ、ケンイチ。腕力でも体力でも負けている相手に勝

つにはどうするか？奇襲しかないだろう？君は身構える前に俺に向かって突進してくるべきだった。そうすればちつとは有利な状況で戦えたかもしれないんだぞ」

「う、いや、そういう気分じゃなかったんだ……」

「だいたい何だ、その構えは。脇を閉め過ぎだ。それじゃあ遠心力を生かした重たいパンチを打てないぞ。ジャブだけで俺と戦うつもりか？」

「うつつっ！」

「やれやれ……よし、君に特別に格闘術というものを教えてやるぞ。門外不出のグリーンベレー式コンバットだ」

ラーズはフツと力を抜いて、俺の前に無防備な状態で立った。

「ほら、打ってこいよ。ノーガードだぞ」

そう言って、顔をずい、と俺の前に差し出してくる。

(……バカにしゃがって！)

俺は完全にトサカに来て、渾身の一撃をその鼻っ面に向かって打ちこんだ。

……つもりだった。

「うおおおっ……おっ!？」

俺は勢い余って、前につんのめる。

つい一瞬前までそこにあっただははずのラーズの頭。

それがビュン！と消えたのだ。

魔法みたいだった。

「はずれだ」

後ろで声がしたかと思うと、ドン、と背中を突き飛ばされる。俺はそのまま、無様に地面に倒れこんでしまった。

「く、くそっ！」

負けてたまるか！

俺は跳ね起きて、スタープラチナの如く一心不乱にパンチを放ちまくる。

「オラ！オラオラオラオラオラアーツ！」

だが、その一つとしてラーズには届かない。

奴はずっと笑顔を浮かべたまま、俺の拳をさばき、かわし、受け止める。

「ケンイチ、分かったか？近接格闘に必要なのは腕力じゃないんだ。足。フットワークが命だ」

「うるせええええッ！オラオラオラアーツ！」

「どんなパンチも当たらなければ意味が無いんだ。ほれ、スウエイバック……これはダッキング」

だ、駄目だ……

一発も当たらない……

あいつの身体は空気できてるんじゃない……？

エンヤ婆……？

次第にスタミナが切れてきて、意識が朦朧としてくる。

打ち出すパンチも、へろへろと力無く宙を彷徨うだけになってしま

った。

「見るよ！あいつ、バテてやがるぜ！」

「あれだけ啖呵きつてたのに、情けねえ野郎だ！」

ラーズの取り巻きどもからヤジが上がる。

腹は立つが、今はそれどころじゃない。

「うおおおっ……」

渾身の力で大きく振りかぶったが、足がもつれて、その場にずっけてしまった。

「く、くそう……」

立ち上がるうとした俺の背中を、ダン！とラーズが踏みつけた。

「ぐへっ！」

「期待はずれだったな、ケンイチ」

「うあああああああっ！」

奴の靴が背中にメリ込んだ。

信じられないほどの力が加えられて、背骨がミシミシと音を立てる。空気も肺から押し出されて、息をすることもままならない。

「っ……はっ……っ……！」

「さて、どうしたもんかな？このままお前を殺してしまうのもな……」

「……っ……っ……！」

「お、面白いゲームを思いついたぞ！」

俺の背中がふつと軽くなった。

「ゼエ ……ゼエ ……」

俺は貪るように空気を吸って、吐いた。

もう、指一本動かす体力も無い……

正直言つて、気力も萎えてしまっている。

ここまで歴然とした差があるなんて考えもしなかったのだ。

俺は無様に地面に這いつくばって、ラーズが手下達に何らかの指示を与えているのを、ぼんやりと眺めていた。

(こ、殺すのか……俺を……?)

不思議と、恐怖は感じなかった。

なんだか全部、他人事のような感覚だった。

大男に腕を掴まれているルイーゼさんが、髪を振り乱して何か叫んでいるのが見える。

俺は心の中で彼女に詫びた。

すまねえ、ルイーゼさん。

俺はどうやらここまでのようだ……

「おっと、気絶されちゃ困る」

俺はラーズに思いつきり頬をひっぱたかれた。

「うぶ!」

「目が覚めたか?おい、縛れ」

「へい!」

声と同時に俺の身体にラースの手下がのしかかり、両腕を後ろ手にぐるぐると縛り上げ始めた。
両足も同じように縛られる。

「な、何を……!」

「ゲームさ。スリリングなサバイバルゲーム」

「できやしたぜ!」

パツと俺の身体の上から男達が退いた。

「な、な、なんだ……くそ!」

全身がぐるぐる巻きにされて、文字通りスマキの状態。

昔の漫画みたいだ。

かなり固く縛られたんだろう。

全く体の自由が利かない。

「おーおう、芋虫みたいになっちまったな?さて、ゲームのルールを説明するぞ、ケンイチ」

ラースが屈みこんで、俺の顔を覗き込んだ。

「俺達はこれから一時間後にあの女　ルイーゼを処刑する」

「な、なんだって……」

「おっと、怖い顔だなケンイチ。大丈夫、その前に君が彼女を助ければいいんだ」

「……?」

この野郎、何を言ってるんだ?

こんな状態で、どうやってルイーゼさんを助けるといつのか？

「もちろん十中八九、無理だろう。だが、勇者なら何とかなるかもな？万に一つってやつだが」

「ラーズ！お前は本当にサイターのくそつたれ野郎だ！」

「よく言われるんだよ。今では褒め言葉だと思つようにしてるよ」

「やめろ……殺すなら俺を殺せばいいだろ！」

「ダメダメ。君が言ったんだぞ？『俺に勝ったら好きにしる』ってな」

な、なんて野郎だ……

ゲームの中の魔王でさえ、もうちょっと温情つてのがある。

「おっと、その前に、君がきっかり一時間生きられるようにしておかないとな」

ラーズはそう言うと、立ち上がり、俺の鼻先に靴を突きつけた。

「さつき下水に入ってしまったから、汚れちゃったんだ。綺麗にしてくれ」

「な……」

「ほら、『勇者タイム』」

「テメエ……！」

俺は怒りで血管がブチ切れそうだった。

そんな屈辱的なことをするくらいなら死んだほうがマシだ。

「イヤだね！絶対ヤダ！」

「つくづく予想通りの反応だな、ケンイチ……だが」

ラーズは大男に合図してルイーゼさんを連れてこさせ、その首を掴んで、ぐいと仰け反らせた。

「あう！」

「自分の痛みは平気でも、他人の痛みはどうか？」

「な、何だと……？」

「お前が俺の靴を綺麗にしてくれないのなら、俺は魔王らしく癩癩を起して、この女を痛めつける」

ラーズはそう言うと、パン！と思いつきルイーゼさんの頬を叩いた。

「きゃっ！」

「やめる！」

「ア……靴が汚いとイライラするう。誰か綺麗にしてくれんかな？」

再び、パン！と音が鳴った。

「ひうつっ！」

「やめろっ！わかった！やるよ！綺麗にする！ピカピカにしてやるよ！」

「おっ！その言葉を待ってたぞ」

「くそっ、おい、早く縄をほどいてくれ……」

「ん？」

ラーズが意外そうな声を出した。

「縄を？」

「『ん？』って何だ。これじゃ、手が使えない」

「手？」

「お前が靴を綺麗にしるって……」

「あ、あーあー、そういうことか。君、勘違いしてるぞ」
「？」

俺は全くワケが分からない。

「海軍ではな、靴を綺麗にするってのは『舐める』ってことなんだよ」

「な……」

「文字通り、舌でな」

な、な、なんて野郎だ……

「イヤなのか？」

「……！」

断れば、こいつは再び、容赦なくルイーゼさんをぶつだろう。

(ええい！くそ！)

俺は覚悟を決めて、奴の靴にむしゃぶりついた。

「そうそう。綺麗に、丁寧にな」

AV男優か、テメエは……

「おひょーう！見るよ！あの野郎、本当にラーズ様の靴を舐めてやるぜ！」

「俺だったら死んでもあんなことはできねえぜ！まったく、プライ

ドってものがねエのかよ!？」

図に乗った取り巻きどもが辛辣なヤジを飛ばしてくる。

俺は目を瞑り、その言葉を軽く聞き流すようにしながら恥辱に耐えた。

怒りは役に立たない。

嘆いてもしょうがない。

(今は、耐えるんだ……)

苦みが口の中いっぱい広がっていく。

敗北の味だ。

(この野郎……絶対に忘れないぞ……!)

俺はラーズを見上げ、睨みつけた。

奴はその視線を堂々と受け止め、笑う。

「いい顔してるぜ。ソクツとくるよ、ケンイチ」

「おおっ?ラーズ様ア!『勇者タイム』がチャージされましたぜ!」

カエル顔の小男が、背後でさも楽しそうに声をあげた。

「勇者つてのは悲しいな、ケンイチ。君が好むと好まざるとに関わらず、こんな屈辱的なことでも生き延びちまうんだからな……おい、吊るせ」

「な、なにっ?……うおおっ!？」

ラーズの指示とともに、後ろからいきなり首に縄が掛けられ、ぐん!と引き上げられる。

そのまま俺の身体は地面から1mほど宙に浮いた。
つまり、首吊りの状態である。

縄がぎりりと首に食い込むが、不死身の俺は当然、そんなことでは死なない。

だが、両手足を縛られた上に吊るされたとあっては、本当に打つ手無しだ。

チンピラどもが木の幹に縄の端を何重にも巻いて括りつけ、高さを固定した。

「一時間だ」

悔しさに齒噛みする俺を見上げながら、ラーズが言う。

「一時間後にルイーゼを処刑する。君の寿命も順当にいけばあと一時間だな？」

「くそ……」

「だが、君ならこの困難をくぐり抜けられると信じているよ」「ラーズ！」

俺は悔し紛れに奴の名を呼んだ。

「何だ？」

「俺を殺さなかったことを後悔させてやるぞ！」

「おおっ、魔王みたいな口ぶりだな」

「ケンイチ……」

ルイーゼさんが大男に抱えられながら、不安と悲しみに光る瞳で俺を見上げている。

「ルイーゼさん、大丈夫、俺が絶対助けるから……」

「あんだって子は……！」

「あー……あ、なんてこった。この期に及んで、まだそんなことを言えるとは……君は文句無しに正真正銘の男だよ、ケンイチ。多分、明後日くらいまでは君のことは忘れないだろう。ま、そこで一秒一秒、命の重みというのを味わってくれ。俺達はなまじ不死身なもんだから、そういうことに関する観念が緩んでしまってるからな」

言いたいことを言いたいだけ言ってから、ラーズは踵を返し、仲間たちとともにぞろぞろと引き上げていく。

「また会おう。生きてたらな」

毒蝮三太夫みたいなことを言いやがって！

（絶対、ぶん殴ってやる！）

こちらを振り返りもしないラーズの背中を、俺はずっと睨み続けた。

ラッキー・ルチアーノ

誰もいなくなった。

手足を縛られ、無様に首を吊られて、文字通りの糞虫状態になった俺。

そんな哀れな人間を一人、林の中に残して、本当に誰もいなくなったのだ。

周囲には人影さえ無い。

夕方の風が木々の葉を揺らし、吹き抜けていくだけだ。

静寂。

沈黙。

孤独。

世界にはもう、俺一人だけじゃないかと思うほどの寂寥感だった。

(ここで一巻の終わり……なのか)

やれることはやり尽くした。

最初は、この手足を縛る忌々しいロープが少しでも緩まないかと、あちこちに力を入れ、手足をこすりあわせ、体をひねったり曲げたりを繰り返した。

だが、ダメだ。

麻布を寄り合わせたような太いロープはとても頑丈だった。

こいつはちよつとやそつとでは緩みもしないだろうし、切るにはチ

エーンソーが必要なんじゃないかというほどに固く縛り上げられている。

次に、この首が吊されている枝が折れて、何とか地上に帰還できはしないかと俺は全身を振り子のように揺らした。

ぶん！と大きく遠心力がついて、まるでブランコのように俺の体が宙に弧を描く。

しかし、これもダメだった。

とりわけ太い幹に引っかけられているせいで、俺の全体重を駆使しても、木はしなりもしていない。

俺の体は、風に翻弄される木の葉のように、ぶらんぶらんと大きく揺れるだけだった。

うえっぶ。

しかもちよつと酔ってきた……

最後に、大声で叫んでみた。

「誰かあ！助けて下さいいい！」

セカチューも真っ青の命がけのシャウト。

恥も外聞も捨て、何度も何度も叫んでみるが、林の中はシンと静まり返っているだけだった。

(ちくしょう……)

あと、他にどうしようがある？

無い。

何も思いつかない。

万策尽きた。

もうお手上げ。打つ手無し。

完全にドツボにはまっちゃった。
ゲームオーバーだ。
リセットボタンがあるなら今がそいつを押すタイミングだ。

手足が自由にならない、地上にも降りられない。

となると、もうあとは通りすがりの親切な第三者に命乞いをするしかない。

だが、それに関しても、人通りの全く無いこの林の中は絶望的なシチュエーションといえる。

周囲の事象すべてが、俺の確実な死を暗示していた。

(死ぬ……のか……)

そう、もう死を待つのみだ。

俺が勇者である以上、何もしないで一時間を過ごせば、確実に死ぬ。勇者タイムなんていう馬鹿げたシステムの犠牲になって、何の意味も無く、死ぬ、のだ。

(い、いやだ……)

大声を出して泣きたい気分だった。

そもそも、俺はあとどれくらい生きていられるんだろう？

ラーズ達がいなくなってるから、どれくらいの時間が経ったのか？

10分しか経ってないような気もするし、20分、30分……いや、あるいはもう59分59秒経ってしまっているかもしれない。

後ろ手にきつちりと縛られてしまっている今の状態では、勇者タイムの残り時間を確認することなどもちろんできない。

時間の感覚も、実にあやふやだった。

冷や汗が、額を伝う。

『一秒一秒の命の重みを、しっかりと味わってくれ……』

脳裏に、去り際のラーズの言葉が何度も蘇った。

あいつの考えたこの拷問は、実に効果的だ。

スリルがある、なんてもんじゃない。

確実に来る死。

そいつを、指をくわえて待つというのは、全く未知の恐怖だった。

あと五分はあるか？

いや、一分ほど？

ひよっとしたら、次の瞬間にも……？

だが、確実にそれは来る。

死ぬ。

(マジか……)

抑えようとしても、動悸が早くなる。

堪えようとしても、息が荒くなる。

(うつつ、やめる……うろたえるな……クールになれ、ケンイチ……)

俺はぎゅっと目を閉じて、迫りくる恐怖との戦いを開始した。

せめて、無様な死に方だけはしたくない。

どうせ死ぬならば豪の者らしく、凜然とした、実に穏やかな顔で死にたい。

そうだ。

それが日本男児の死に様だ。

武士道といふは死ぬことと見つけたり。
そうして、後で俺の亡骸を確認しに来たラースに、こう言わせてや
れ。

『バカな……笑って死んでいるだと……』

うん、それがいい。

奴の驚いた顔が目には浮かぶぜ。

俺はその光景を夢想して、無理やり、ほくそ笑んだ。

ネガティブなんだかポジティブなんだか自分でも良く分からないが、
もうどうだっていいや。

俺はとりあえず事態が何か好転しちやいないかと、もう一度、目を
うつすら開けてみる。

「……」

来た……急展開……

少年誌のようなご都合主義的好転。

俺は啞然としてしまう。

なんと、ぶら下がっている俺の目の前で、手を組んで、静かに祈り
を捧げている人影があったのだ。

あまりの急展開に喉がひきつって声が出なかった。

ん？待てよ……

この娘、見たことがあるぞ……

どこかで……

「おーおおっ！お、お、思い出したー！」

「ひゃあっ！」

「ア、アライシヤッ!!」

そう、昼間に大蛇に食われそうになっていた俺を助けてくれた、あの超力美少女だ!

だが、彼女は俺が死んでいたと思ってたらしい。

俺が声を上げた途端に、ひっくり返って屍餅をついてしまった。

「び、び、びっくりしたあ……生きてたの……」

「アライシヤ!頼む、助けてくれ……!」

「へ?なんでボクの名前知ってるの?」

「お、俺だ、ほれ、あの、川であのどっかい蛇から助けてもらった、あの、ケンイチだ」

「ケンイチ……?」

おっと、そういや俺はこの娘にちゃんと名乗ってなかったかもしれない。

だが、アライシヤはポン、と手を叩いて、無事に思い出してくれたようだった。

「あーあー、はいはい!思い出した!」

「そうそう!それ!多分!」

「で、キミは何をしてるの?」

「かいつまんで話すと、悪い奴らに縛られてこんな目にあってるんだ……」

「ええー?それは災難だったねえ」

「助けてくれると超嬉しい。できれば、すぐに」

「いいよ。待ってて」

天使のように、にっこり笑ってそう言つと、アライシヤは俺を繋い

でいる木の幹へと歩いて行って、縄を解く作業を始めてくれた。
それを見て、俺は叫びたくなる衝動に駆られた。

た、助かったぞオオオオオオ！J O J O オオオオー！ツ！（？）

（や、やった……！俺、もってる！）

もともと俺は強運の持ち主というわけでもない。

現世では宝くじが当たったことも無いし、ビンゴゲームでもリーチは出しても、一番最初に「ビンゴウ！」と叫んでドヤ顔をしたことも無い。

だが、こっちの世界ではどうだ。

行く先々で困った時には、こうして必ず何とかなっちまう。

（どうだ、ラーズ！俺はとにかく！最強に！ツイてるんだぜ！）

う、お、お、お、お！テンション上がってきたぜ！

さあ、早いとこ勇者タイムをチャージして、奴の驚く顔を見に行つてやるぞ！

そんなもって、ルイーゼさんを助けてみせる。

俺はやるぜ！

俺は男だ！

イエー！

……

……

………？

「……あー、アリイシャちゃん？」

「ん？なに？」

「……まだかな？」

ず、ずいぶん時間かかってないか？

俺はちよつと焦って、足元のアリイシャに声をかける。

彼女は指先でカリカリと縄の結び目と格闘していた。

「それがさー、玉結びになっちゃってさー」

のんきな声が返ってくる。

「誰がこんな雑な結び方したんだろうねえ？もう、ボク嫌いだな、
こつこつ」

「……解くのは諦めて、ロープを切るとかなんとか、そういう風に
したらどうだろうか」

「ダメダメ、ボクは物を大事にする主義なのさ」

待て待て、俺の命も大事にしてくれ！

「すまんアリイシャ、本っ当に申し訳ないんだが、できるだけ急い
でくれないか……」

「慌てない、慌てない」

「いや、頼む、本当に急いでくれ……」

「えー？キミ、ひよつとして、せっかちさん？」

「話すと長くなるけど、時間制限があるんだよ！それを過ぎると、
なんと、僕は死んでしまいます」

「わ、それは大変だ」

「だから、頼む！」

メガ級の焦燥感に思わず声が大きくなる。

こんな風に話している最中にも死んでしまつかもしれないのだから、
気が気ではない。

いやだぞ、こんなゴール目前で息絶えるようなのは！

「うーん、じゃあ、不本意だけど……」

そう言うと、アリイシヤは幹の前で軽く構えて、息を長く吸う。
そして

「せつ」

短い掛け声とともに、拳を打ち出した。

ズドン！

と大きな音が林の中に響いた。

「おおっ?」

だが、不思議なことに、その音の大きさに反して、木にぶら下がっ
ている俺の身体も、木そのものも全く揺れなかった。

葉っぱ一枚落ちてこない。

「…………?」

どういうことだ?と、俺が様子を確認しようとして首を傾けた時だ。
ふっ、と一瞬の落下感があって、気がつくとな俺は地面に頭から着地
していた。

「うべえっ！？ぺっ、ぺっ……」

俺はなんとか仰向けになって、口に入った落葉やら土を吐き出した。

「ほいほい、動かない動かない」

「おおっ？」

アレイシャが俺の身体の上にひよい、と飛び乗る。

不思議なことに、全く体重を感じないほど軽い。

しかし、一体、何を……

「じっとしてて」

言うとアレイシャは拳を握りしめ……

「はっ」

その拳を俺の身体に打ちつけた！

「うへええええっ！」

とりあえず目を閉じて、悲鳴は上げてみる俺。

再びズバァン！と大きな音が林に響いた。

(……)

幸い、痛みも衝撃も感じなかった。

しかし、あんな強烈な音のするパンチを食らってたら粉々になってたんじゃなかるうか。

こういう時には本当に不死身でよかったと思う。

問題は地中に何メートルほど埋まったかということだな。
俺は恐る恐る目を開いて見る。

「…………お？」

すると、あらびっくり。

俺の身体はそのまま、俺を縛っていた荒縄だけが弾け飛んでいたではないか！

手も足も、自由に動く！

「お？おおっ！？」

「はい、一丁上がり」

「すげえ！何、今の！？」

「周囲を傷つけず、対象のみを破壊する…………すなわち『不壊点芯功』
つてね。キミ、いいもの見たね」

「すげえ…………ふかいてんしんこう…………？北斗…………いや、蛙を『メメ
タア！』つてやった時のツエペリさんみたいなもの？」

「あつは、何それ？ありゃー、中途半端な長さになっちゃったね。
勿体無いなあ、凄く丈夫でいいロープなのになあ」

いかにも残念そうに呟きながら、ロープの残骸を回収するアライシヤ。
ヤ。

俺は跳ね起きて、その背中を拝んだ。

「あ、ありがとう、アライシヤ！君は命の恩人だ」

「いやだなー、もう。照れくさいよ、そんな風に言われちゃうと」

言いながらも恥ずかしそうに頬を染めるその可愛らしさに、俺は婚姻届の用意すら考えた。

ブルミエルともメイヘレンとも違う萌えがここにある…………

つと、そんな場合じゃねえ！

俺は慌てて勇者タイムを確認する。

『02:02』

ひあああああああつ！？

レッドゾーンだッ！！

カップ麺の完成を待たずして死ぬる、恐怖のデッドリミットに突入だッ！！！！

「ア、ア、アリイシャ！君！何か困ってないか！？」

「え？困ってたのはキミじゃないの？」

「困ったことが無いと困ったことになるから困ってるんだ！」

「えー……？よく分かんないなあ」

『01:48』

「ほら、靴紐が解けたとか肩揉んでほしいとか！」

「ボクはだらしのない嫌いな。ほら、靴紐もしっかり結んでるでしょ。肩もこったことないしなあ」

「特別な道具を使わない範囲で、俺を牛馬の如く使ってもいいんだぞ！」

「ええー？なんか変な人だねえ、キミ」

「そ、そんな目で見ると変なこと言ってるのは自分でも分かってる！」

『01:36』

「頼むツ！何でもいいから！」

「うーん……」

「……」

「……」

『01:22』

「ッ……！（汗）」

「あ、そうだ。キミ、お裁縫得意？」

「おおっ！得意！得意！俺、将来はお針子さんになるうと思っただんだヨ！」

「昨日さー、寝袋の端に穴があいちゃってさー。そういえば直すの忘れてたなあって……」

「俺に任せろおおッ！あ、裁縫セットは取り上げられちゃったんだった……」

「あ、あるよー。待っててね、えーと……」

『01:10』

俺は、アライシャがゴソゴソとナップザックから引っ張り出した寝袋と裁縫セットを山賊めいた動きでひったくると、神懸かり的なスピードで針に糸を通す。

『01:01』

そして、寝袋チエック。

こっ、これがアライシャの……

あーっと、女の子の香りだぜえー……なんてやってる場合かー！
あ、うむ、ココだな！

穴のあいている個所を見つけて、運針開始だ。

『00:49』

俺は人間ミシンと化した。

おそらく今の俺をポラロイド写真で撮ったならば、体から発散される強烈なオーラのせいでピントがぶれまくるだろう。

チクチクチク……

「うおおおおお！まつり縫いだ！おらあ！」

豪快にフィニッシュ！

俺はそれと同時にドサツと仰向けに地面に倒れ込んだ。

ああ……なんて広い空だ……

夕焼けが雲に反射して……ふっ……綺麗だぜ……

「おおーっ！すごいっ！ちゃんと直ってる！」

アリイシヤは仕上がりを見て歓喜の声をあげてくれた。

俺は横になったまま勇者タイムを確認する。

『59:52』

俺は大きく息を吐いた。

(どうだ……ラーズ……生き延びたぞ……)

ふへへ、と思わず笑いが漏れた。

「うわあ、何か気持ち悪い笑い方してるね」

「おっと、すまん、つい……」

ここで俺はハッと気が付く。

待てよ……

さっきのでギリギリ一時間だったってことは……

「ル、ルイーゼさんがヤバイ！」

俺は慌てて跳ね起きた。

「ん？どうしたの？」

「貿易都市の広場はどっちだ！？」

「えーっと、広場は……この道をまーっすぐ歩いて行って、右に曲がって……ここからだ四十分くらいかなあ？」

「よ、四十分！？」

やべえ、やべえぞ！

「くそっ！」

俺は大慌てで走り出した。

何てこった……間に合ってくれ！

「ね、何かあったの？」

一心不乱に全力疾走する俺の隣を、涼しい顔でアリュシヤが並走している。

お、俺、一応陸上部なの……！

「事情を聞かせてよ。何か力になれるかもしれないでしょ」
「は、話すと長くなるんだけど……走りながらでもいいかい？」
「いいよ」

俺は息も切れ切れになりながら、何とか事態をアリイシヤに説明した。

広場での奴隷の売り買いの事、ラーズの館からの脱出劇、そして、この理不尽な『走れメロス』ゲーム……

「ひどいやツだね、ラーズ！ボクも腹が立ってきたよ」

「はひい……はひい……」

俺は息が切れてきた……

会話しながら全力疾走すれば、まあ、こうなる。

気がつくともうほとんど歩いてるのと変わらないくらいの速度になっちゃってた。

「……だが、諦めるわけにはいかないんだ……」

「そうだね。一泡吹かせてやろうよ！」

「おっ……」

「あ、待って」

よれよれと再び走り出す俺の手を、アリイシヤが掴んだ。

「な、なんだ……？」

「ボクの『術戦車』使おう。広場までひとつ飛びだよ」

「じゅ、術戦車……！？」

俺は驚いて目を見張る。

「き、君、魔道貴族だったのか……？」

たしか、プルミエルは術戦車が貴族の乗り物だと言ってたはずだ。だが、アライシヤはぶんぶん首を振って否定する。

「違うよお、ボクの家には代々伝わるものだよ。お祖父ちゃんから貰ったんだ」

「そ、そうか……しかし、それを今から取りに行くのか？時間が……」

「え？ここに入ってるよ」

「……」

入ってるって……どういうことだ？

俺はさすがに怪訝な表情を浮かべてしまった。

「これこれ」

そう言うと、アライシヤはナツプザックを降ろし、それを取り出した。

「ロ、ローラーブレード……？」

そう、それはどう見てもローラーブレードだった。

黒地のフレームに何やら異世界の文字がレタリングされていて、結構ナウイ印象だ。

だが、プルミエルのアメリカンバイク型術戦車『ブオナパルト』やメイヘレンのジェットスキー型術戦車『テトラクテュス』といった物とはまるで違う。

「そ、それが術戦車……？」

「そうだよ。『ファディ・デサイ』って言うんだよ。カツコイイでしょ」

言いながら、アリイシヤは屈みこんで靴を脱ぎ、それを装着する。脱いだ靴はきちんと靴紐の両端を結び合わせてナツプザックの中へ。いや、確かにカツコイイけど……それが術戦車？

「よっ、と。じゃーん、装着完了」

「し、しかし、ここは魔法の使えない土地なんだから……術戦車も使えないんじゃない？」

「あ、ボクの魔法は精霊の力を使わないから大丈夫」

「精霊の力を使わない？」

「ま、あまり知られてないから分からないかもね。魔法は魔道貴族の使うような精霊魔術だけじゃないんだ。ボクのは太古の魔法で『内功魔術』っていう、術者の潜在魔力だけで使う魔法なのさ」

「へえ……」

「今ではあまり使い手がいらないらしいけどね」

分かったような、分からないような……

「あ、ほら、こんなこと話してる場合じゃないんじゃない？」

「おおっ！そうだ！」

「じゃあ、はい、ボクの腰に掴まってて」

「おう！……って、駄目だ、俺は女の子の身体に触れるのは御法度なんだ」

「えー？そんなこと言ってる場合なの？」

「いや、これにはいろいろワケが……」

「もう！まどろっこしいなあ！」

じれったくなっただ様子でそう言うと、アリイシヤは俺の手を掴んで、

引き寄せる。

「うお」

「そんなじゃ、行くよ」

アリイシヤがぐつと腰を屈めて力を込めた、その瞬間。

チユイイイイイイイイイイーン！！という甲高い金属音と共に、『ファディ・デサイ』のローラーが盛大に火花を散らして高速回転を始めた。

「おおおおおおおっ！！」

「それっ！ジャーーーーーンプッ！」

威勢のいい掛け声とともに、アリイシヤの足が宙を蹴る。

そして、俺達は空高く舞い上がった。

決戦都市 ?

「何である野郎を殺しちまわなかったんです？」

ラーズの歩く早さにあわせて、短い足を忙しく動かしながらコリンチャが訊いた。

「親分がその気になりやあ、今頃はあのガキ、目も耳も鼻も失くして地中に埋まってますぜ」

「その気にならなかったのさ」

ラーズは誰が見ても分かるほど上機嫌だった。

しかし、それが何故かは取り巻きの子分たちにもまったく分からなかった。

そもそも、彼の一举一動についての根拠というものなど、誰にも推し量れるものではないのだ。

彼は浮いたり沈んだりという感情の波がほとんど無いかわりに、突然突拍子も無い行動に出たり、部下に理不尽な言いつけをすることもある。

ある時は、街中を歩いている最中に突然部下の一人を殴りつけ、倒れこんだ相手の上に飛び乗って全身の骨をへし折り、散々にいたぶった後で「ちよつと朝の便通が悪かったから」とその理由を語った。暴行を受けた部下は半日ほど呻きながら死んだ。

またある時は、夕食の料理の中に毛髪が混入していたとして料理人が引つ立てられてきたことがある。

当然、その時は全員が凄惨な処罰を予想したが、ラーズはあっさり

とこれを許し、逆に調理の腕前を褒めあげさせした。料理人を含め、これには全員がしばらく呆気に取られていた。

このようにラーズ・ホールデンという男の無軌道さには、周囲にいる人間でさえ全く予想がつかないのだ。

だが、いつも共通しているのは、常に顔に微笑を浮かべたまま、という点である。

それが一層、他人の眼には恐ろしく映る。

自由気ままに生殺与奪の権利を悠々と行使するその姿は、まさに魔王の名にふさわしいものだった。

『酷薄』であるとか『残忍』であるとかいった言葉は、この男には意味が無い。

ただ、そのように生まれついているというだけなのだ。

「待てッ！！」

貿易都市の広場がもう目の前、というところで、ラーズとその部下達は背後から大きな声で呼びとめられた。

全員が声のしたほうを振り向き、そして目を丸くした。

なんと、重武装に身を包んだ装甲歩兵が五人、盾とメイスを構えて突撃体制をとっていたのである。

「な、な、何だ！て、テ、テメエらは！」

コリンチャは慌てふためき、大声で喚いた。

「ラーズ。ラーズ・ホールデンさんよ」

装甲兵の間から、身なりの立派な小太りの男が歩み出てきた。

いかにも脂が乗った成金といった様子の、くりくりとした目玉が印

象的な中年である。

「あ、アザール……！」

その男を見て、コリンチャがうめき声を洩らした。

ラーズは首を傾げる。

「誰だ？」

「アザールでさあ。この都市を治める豪商連合の筆頭ですぜ……！」

「へえ」

「おい、ラーズさん。もう我慢ならん。いや、今日こそは言わせてもらおうぜ」

「お？」

「いいかい？ここは貿易都市なんだ。この広場で商売をしてえつてんなら、俺ら豪商連合の仲介を通してからにしてもらおうかい？」

「ほーお」

ラーズは顔色を全く変えずに、その言い分を聞いていた。

ようは、奴隷売買で大きな利益をあげているラーズの商売にケチをつけにきたということである。

場合によっては、その上前をはねる事さえも視野に入れているのだらう。

装甲歩兵はそのための牽制の道具だった。

実に商売人らしい打算とも言える。

「勿論、ラーズ。ここは貿易都市だからな。あんたが求めるなら、交渉に応じる用意はあるんだがね？」

「……豪商連合のお偉いさんが何の用かと思えば……」

ラーズは顎ヒゲをぞり、と撫で、長い一本を抜いた。

そして、それをしげしげと眺め、ふっ、と吹いて宙に飛ばす。

「セコい奴だな」

明らかに相手を小馬鹿にしたその態度に、装甲兵たちの身体が、ざわ、と殺気に揺れた。

ガシャン！と重厚な金属音を立てて、彼らが一步前に踏み出したのを、アザールが手を上げて制止する。

「ラーズ、状況が分かって言ってるのかね？こいつらは難なくお前達を踏みつぶすよ」

「はぁ……そうかい……わかったよ」

ラーズは大きく肩を落として溜息をつく、つかつかと歩み寄り、おそらく五人の重装兵の中でも最も大男であろう兵士の前に立つ。その動きがあまりにも何気なく、自然だったので、重装兵はいとも簡単にラーズが間合いに入るのを許してしまった。

「ぬ……」

兜の隙間から狼狽の音が漏れるのと同時に、ラーズの手が動く。

「ぐえっ！」

ラーズは兜と装甲とのその隙間に無造作に手を突っ込み、その下の柔らかい喉笛を掴んだ。

「……ッ！！」

それは恐ろしい握力だった。

あつという間に気管が握りつぶされ、肺から空気が締め出され……
そして、喉骨がゴキーンと鈍い音を立てて砕ける。
重装兵は糸が切れた人形のように膝から崩れ落ち、大きな音を立てて地面に倒れ伏した。
鎧兜の隙間からはおびただしい血が流れ出し、路上に赤黒い染みを作る。

当然、倒れた巨体はすでにピクリとも動かなかった。

「な……」

アザールは驚愕に目を剥いた。

目に留まらないほど動きが早かったわけでも、特殊な戦闘技術を用いたわけでもない。

それでもラースはいとも簡単に、重装甲を着込んだ大男を一人、ものの五秒もかからないうちに始末して見せたのだ。

ラース以外の全員が言葉を失い、呆然とその場に立ち尽くした。

「よつと」

ラースは続いて、息絶えた重装兵の手からメイスを抜き取ると、間髪入れずにそれを近くに立っていた別の重装兵へブン！と投げつけた。

再び虚を突かれた形になり、兵士は手に持った大盾で自らを防御する暇も無い。

「うあ！」

短い悲鳴が上がる。

どれほど頑健な兜をかぶっていても、十分な速度と遠心力を加えられて飛んでくる鈍器の直撃を頭部に受けては無事でいられるはずが

ない。

金属同士の激しい衝突音が空気を揺らし、首を大きくのけぞらせた兵士は宙に鮮血をまき散らしながら仰向けに倒れて、そのまま動かなくなった。

醜くひしゃげた兜が、その内部の凄惨な様子を物語っている。

あっという間に、これで二人目が死んだ。

続いて三人目だ。

ラーズは、動揺と驚愕から棒立ちになっている装甲兵の背後にすりとりと回りこむと、そのヤカンのような頭に組みついて、ぐい、と捻じりあげる。

てこの原理によって不自然な方向にくきりと首の曲がった装甲兵は、いとも呆気なく首の骨が砕けて、その場に崩れ落ちた。

小山のような屍が、あっという間に三つ。

残る装甲兵は二人しかない。

「せっかくいい気分だったのにな」

そう言いながら、ラーズは顔面が蒼白になっているアザールへ歩み寄る。

相変わらず、微笑は顔に張り付いたままだった。

「う……」

装甲兵たちは自分の主人を守ることも忘れ、丸腰の相手に対してずりずりと後ずさる。

「な、な、何をしてる……守れっ、俺を守れっ！！」

アザールが必死に喚くが、兵士たちは一瞬にして仲間を三人も屠ったラーズに対して完全に恐れをなし、戦意を失っていた。

誰一人として、アザールを守るために飛び出して来る者はいない。

「お、お前たちっ!!」

「ア、ザザザザル」

「ひいっ!!」

ラーズはぐいつとアザールの肩を引き寄せた。

「困った奴だな。お前達はいつもいつも、俺にくだらない勝利しか与えてくれないんだ」

耳元でそう優しく囁かれ、アザールは恐怖に慄きながら身を固くする。

「ラ、ラ、ラーズ、いや、ラーズ様……!か、か、金なら払います

……お、お、俺は」

「金はいらない」

「な、な、何が望みだ?な、な、何でも言ってくれ」

「よし、覚えておけよ。俺が欲しいのは『スリル』だ。分かるか?命をすり減らすような、極限の緊張を味わってないと俺には生きていくという実感が無いんだ」

「す、す、スリル……?」

「そう。それが欲しいから俺は様々な戦場を渡り歩いてきた。くだらん奴らのくだらん指示に従ってな。だが、俺に命の危険を感じさせてくれるような奴はどこにもいなかったよ」

言いたいことを言うと、ラーズはどん!とアザールを突き飛ばした。

「今度は百人ほど揃えて来いよ」

あとは振り返りもせず、ラーズは広場へと歩み去った。その後を、ラーズの手下達が慌てて追いかける。アザールは一人、無様に地面に尻をつけたままで、魔王の颯爽とした後ろ姿を見ていた。言葉も出ない。

（あ、あいつはイカレてる……）

深い恐怖の中で、そう思った。

広場につくと、ラーズの指示に従って手下達が中央に薪を積み始めた。た。

それとは別の手下が、丈夫そうな棒板を運んで来て、それを十字に組み合わせる。

後ろ手に縛られた状態で座らされていたルイーゼはその様子をぼんやりと眺め、

（あたしを火葬にするつもりなんだわ……）

と思った。

何度か、ラーズに逆らった者の末路としてそれを見せつけられたことがある。

磔刑にされて、炎と煙でゆっくりと焼かれて死んでいく様は、その日の食事が満足にとれなくなるほど凄惨で残酷なものだった。

「へ、へ、勿体ねえよなあ……お前みてえなイイ女がよ」

コリンチャが舌なめずりをしながら、ヒョコヒョコと近付いてきた。

「どうだ？命乞いをすればラーズ様は許して下さるかもしれないねえ？へ、へ、へ、まッ、その場合はまず俺達全員に何かしらの謝意を示さなくちゃならんだろうがな」

「お断りだよ」

ルイーゼは侮蔑の意志を込めて、その小男を真っ直ぐ見つめた。

「うっ……」

コリンチャはその視線に怯み、息を呑んだ。

(こいつ、こんな目をする女だったか……？)

彼にとつての女とは、男に依存し、隷属するだけの存在でしかない。男の寵愛と庇護を得るために、女は精一杯着飾り、媚を売り、身体を差し出すのだ。

しかし、今、目の前にいる女はそんなコリンチャの認識の外にいる。不服従の意志を湛えた、強い眼光。それが、彼の背筋に悪寒を覚えさせた。

「テ、テメエ！」

コリンチャは思わず拳を振り上げる。

そう、不安を取り除くには暴力が一番だ。

徹底的に叩きのめして、どちらが優位かをお互いに再確認する必要がある。今すぐに！

「おい、コリンチャ。俺の女を痛めつけよつってのか？」

「ひいー！」

いつの間にか背後に立っていたラーズの手がコリンチャの腕を掴み、ねじり上げる。

「あ、あ、痛え！ラ、ラーズ様ア！う、腕が折れちまう！」

「持ち場に戻りな。勝手な真似はもう許さないぞ」

「へ、へい！ご勘弁を！！」

パツとラーズが手を離すと、コリンチャは逃げるようにその場を走り去った。

「やれやれ……」

ラーズはいつも通り、微笑を浮かべたままである。

「スマンね。怖かったかい？」

「ちっとも。あんたこそ、これから殺そうとする女を助けるなんてサービスが過ぎるんじゃない？」

「ふうん……」

ラーズはしげしげとルイーゼの瞳を覗きこみ、溜息を洩らす。

「ルイーゼ。正直に白状するよ。……俺は嫉妬してる。お前にこんな目をさせる、あいつに」

「ケインイチのこと？」

「そうだ」

「……そうね。あたしも白状するわ、ラーズ」

「何を？」

「彼、あなたなんかよりもずっといい男だわ」

「ほっ」

「ケンイチはあたしの今まで出会った男の中でも最高の男。彼の為になら死んでもいいって、そう思えるくらいにね。だからあんたがどんな言葉であたしを惑わせようとしても、あたしは悲鳴を上げやしないし、命乞いもしないわ。彼が死んだっていうんならあたしも一緒に死んでやる」

「アー……アーウ！」

ラーズは天に向かって奇声を発した。

落胆から出たものではない。

心底愉快でたまらないといった、そんな様子だった。

「『勇者ケンイチ』め！」

「……」

「だが、どうだろう？あいつがこのゲームに勝つ確率はものすごく低いぞ？なにせ俺達は一時間で死んでしまう特異体質だ。あの状態から抜け出すには、余程手の込んだ手品でも使わないと不可能だし、もしも幸運が重なって万が一に木の上から降りられたとしても、ここまで辿りつくには相当時間がかかる。お前が黒焦げになってしまった後で、呆然と立ち尽くすあいつの姿……俺には見えるようだ」

「よく喋るのね、ラーズ」

ふん、とルイーゼが鼻を鳴らして笑う。

「彼が怖いのか？」

「……」

一瞬。

何百分の一秒にも満たないような、ほんの一瞬だけだったが、ラーズの瞳の奥にパツと激情の炎がよぎったように、ルイーゼには見えなかった。

だが、ラーズはそれを表面には出さずに、すぐに笑顔を作ってみせる。

「おおっと、今度は俺を挑発するつもりか？まったく、油断ならん女だな」

「……」

「ラーズ様ア!!!」

ラーズの背後で、声が上がった。

「火あぶりの準備ができましたぜ!」

「おう。よし、じゃあ、ルイーゼ。これでお別れだ。残念でならないよ」

男が二人、ルイーゼの拘束を解き、今度はその両手を十字架に縛りつける。

ここで、ラーズがひょいと屈みこんで、ルイーゼの耳元で囁く。

「いいか？あいつはどっちみち死ぬ。あの木の上で無様に首を吊ったまま死ぬか、ここに辿りついてから俺に殺されるか。状況と場所がほんの少し違うだけで、結末は同じだ。それでもあいつに賭けるか？」

「……当り前よ」

「わはっ!」

ルイーゼの回答に、ラーズは満足そうに微笑んだ。

「立てろ!」

ラーズの号令で、ルイーゼの十字架が薪の上に立てられた。

広場で何のイベントかと、貿易都市の観衆も集まり始め、すでに大きな人だかりとなっている。

こういった時の野次馬というのは残酷だ。

状況を見れば、誰もがこれから行われることを十分に理解できようものだが、誰一人としてその非道をなじる者もいなければ、磔にさられている美しい女を助けようとする者もいない。

ただ全員が、事の成り行きを固唾を呑んで見守っていた。

その目には期待の色さえ浮かんでいる。

コリンチャが小走りで、火のついた松明をラーズのもとへ運んだ。それを受け取ると、ラーズはちらりと『魔王タイム』を確認する。

『42:35』

「あー、そうか。さっき三人ばかり殺しちまったから……」

ラーズは舌打ちをした。

一時間、とケンイチには宣言したのに、正確な時間が分からなくなってしまうのだ。

「ま、いいか」

ラーズは何の躊躇いもなく、薪に火をつけた。

「おおっ！ほ、本当に火をつけた！」

「マジか！」

「す、すげえっ！」

「きゃあっ！」

大勢の観衆から、様々な声が上がった。その中には悲鳴も含まれていた。

ラーズは観衆へ振り返る。

「お集まりの皆さん。さぞや驚かれた事でしょうが、なあと、お心を痛める事はありませんよ。あの女は多くの罪を犯した大罪人なんです。したがって」

「大罪人はあんたよ」

ラーズの声明を遮り、実に歯切れのいい声が野次馬の間から飛んできました。

「ん？」

モーゼの前の大海の如く、観衆の塊がざざつと割れた。そこに立っていたのは

「ほう……ケインイチのピーチちゃんか」

「やーね。そのスケベな表現」

それはプルミエルだった。

腕を組み、胸をつんと張って仁王立ちしているその小柄な美少女に、その場にいた全員の視線が集まる。

「おや？もう一人の食べごろピーチはどうした？」

「食べごろピーチはあんたの下品な館を潰しに行ったわ。……ん？何よ、私は食べごろじゃないっての？」

「ほほお……俺の館を潰しに、ね……で？君は何をしに来たんだい？」

「私はこの下らないお祭りを中止させに来たの」

プルミエルの全く物怖じしない態度を見て、ラーズは満面の笑みを

浮かべる。

「素晴らしい……！見た目だけじゃなく中身まで魅力的だな、君は」
「そうでしょうとも。握手会はまた後日ね」

「だが、どうするつもりだ？俺と俺の手下全員を相手にして、あのスモークになりかかっている女を助け出せるかな？」

足元からもうもうと立ち上る煙に咽込んでいるルイーゼのほうを、ブルミエルはチラと見て、しなやかな指をパチン！と鳴らす。

「!？」

観衆は瞠目した。

なんと、ブルミエルの指の音とともに、瞬時に火が消え、それに伴って煙も薄くなっていったのだ。それはまさに魔法のようだった。ラーズも少し眉を上げる。

「何だ？今のは」

「後で分かるわ。その前に……とう！」

ブルミエルは身軽に飛び上がり、高く積まれた薪の上に音も無く着地した。

その見事な身のこなしに、観衆からもどよめき上がる。

「ちょっと、なんで逃げなかったのさ!？」

ルイーゼが、首を動かして真横に立ったブルミエルを叱咤する。だが、ブルミエルはそれに答えず、逆に質問した。

「ケンイチは？」

「……街の外で、縛り首にされたよ……」

「殺されてはいない？」

「……」

「目の前で死んではないのね？」

「……でも、あのままじゃ危ないわ。私よりも彼を助けに行きなさい！」

「んー……」

プルミエルは腕組みをして少し考えた。

「……ま、大丈夫ですよ」

そう見切りをつけると、プルミエルは足元の観衆とラーズへ向き直る。

相変わらず仁王立ちである。

「お集まりの皆さん。重大なお知らせがあります」

決して大声で叫んでいるわけではないが、よく透る声。

今や広場一杯に詰めかけているギャラリーの最後列にまでその声は届いた。

「私の名前はプルミエル・ミスmanaガン。火の魔道貴族ミスmanaガンの当主です」

「ミ、ミスmanaガン！？」

「魔道貴族だって！？」

ギャラリーが大きくどよめく。

これは実に衝撃的なカミングアウトであった。

自由貿易都市を謳うこの街では、権威の象徴である『魔道貴族』の名は禁忌なのだ。

だが、そのどよめきを手で制して、プルミエルは先を続ける。

「で、非常に急ですが、貿易都市ベデヴィアは今日、この瞬間からミスmanaガンの監視下に置かれることになります」

さらに大きなどよめきが広場を支配した。

「何だつて!」

「あのアマ! ひきずり下ろせ!」

「ふざけやがつて!」

いくつもの罵声が飛んでくるが、プルミエルはどこ吹く風である。

「監視下、といつても、あなた達のまっとうな商売のお邪魔をするワケではありません。年貢をとることも税金をかける事もしません。ただ、この都市での貿易に関して、いくつかのルールを設け、それを遵守してもらえよう。心がけてもらえればいいだけのことです」

「ルールって何だ!」

ギャラリーから声上がる。

「はい、良い質問ですね。まず、大前提として『奴隷の売買禁止』」

これを聞いて、ラーズの部下達が殺気立った。

「あのアマ! ラーズ様、ひきずり下ろしてひんむいてマワしちまいますよ!」

「待てよ。最後まで聞こう」

コリンチャは縋りつくように言うが、ラーズは相変わらず微笑を浮かべたまま、プルミエルの演説に聞き入っていた。

「人身売買は人の権利を大いに害する悪しき商いです。これは駄目。認めません」

「ふざけんな！」

「ふざけてません」

「うっ……」

野次を飛ばした男は、プルミエルのあまりにも堂々とした受け答えに気圧され、二の句が告げられなくなる。

プルミエルはすう、と息を大きく吸って、こう続けた。

「知ってる？この世のどこを探しても『奴隷』という名前の人はいないのよ」

彼女は胸に手を当て、人々に訴える。

「一人一人に名前があるわ。一人一人に家族がいて、一人一人に未来がある。夢を見る権利も、希望を持つ権利も、幸せになる権利も全てが一人一人に平等にあるのよ」

私にもあった。

無いと思っていたけど、あったんだ。

心ある人々が教えてくれた。

プルミエルは孤児院に拾われる前の自分の境遇と、ラーズの館に囚われていた少女たちとを重ねていた。

本当に、運の差だけだ。
それ以外は何も変わらない、人間同士なんだ。

あの、不安に怯える少女達に、そう声をかけてあげたい。
言葉が届かなければ、せめて、想いだけでも。

「貧しい人もお金持ちもいるわ。ズルイ奴も清廉な人もいたっていい。でも、人の尊厳を奪ったり、汚したりすることを私は許さない。私はミスマナガンの名において、この都市を本当の『自由』貿易都市にする。文句は言わせないわ！」

そう、高らかに宣言した。

いつの間にか、広場は静まり返っていた。

全員がプルミエルの言葉を聞いていた。

一人一人が、眩しいものを見るように彼女を見上げていた。
もうどこからも、野次は上がらなかった。

その時

「最高だ！」

突然、声が上がった。

進み出てきたのはラーズである。

「もう、なんて言えればいいか……ウウ！とにかく最高だ！名演説だった！」

その演説に水を差したラーズを、プルミエルは冷たい視線で一瞥する。

「……………」

「おっと、怖い目だな、魔道貴族ミスマガンさん。ところで、君の理想は御立派だが、ここに奴隷商人の頭領がいる事を忘れてもらっちゃ困るな」

「忘れてないわ」

「それなら結構。で、どうするんだい？ここが『反魔結界』の中だということ忘れてるわけじゃないよな？君がどれほど強力な魔道師であろうと、この土地ではただの女の子に過ぎない」

「そうね」

「落ち着いたもんだな。今、俺の手下が豪商連合の本部に駆け込みに行ったよ。『魔道貴族がこの土地に侵入した！』と報告しにね。連中は目の色変えて大勢の兵隊を連れてくるだろう。そうになったら君は一卷の終わりだ」

「そうはならないわね。残念ながら」

落ち着き払った様子のプルミエルを見て、ラーズは満足そうに眼を細めた。

「いいぞ！よし、それじゃあ、君の切り札を見せてもらおうか？」

ラーズが顎をしゃくって合図をすると、手下達が四方八方から薪の山をよじ登り始めた。

困んで、取り押さえるつもりなのだろう。

「よし。それじゃあ、始めようかしらね」

プルミエルは大きく息を吐き、そして、右手を天にかざす。その手首には、金色のブレスレットが輝いていた。

「天の聖位。地の大観。高みにありて深きを望む者。汝は猛き炎の主……」

「……………」

その場にいた全員が、異変を感じた。

空気が張り詰め、妙な緊張感が心を騒がす。

少女の姿が、まるで陽炎のように揺らめいて見える。

おまけに、息苦しくなって……………暑い？

(いや、本当に暑いぜ……………)

コリンチャが額を拭くと、手の平がぐっしょりと汗で濡れた。

(な、なんだ……………？な、何かとんでもねえものが……………)

見えはしない。

だが、広場にいる全員がその存在を感じ始めた。

「来たれ！そして我が望みに答えよ！獄炎の獣王『マギ・ファルカオ』！」

プルミエルが天に向かって叫び、掲げた拳をぐっと握る。

そして、それが現れた。

決戦都市 ？

その場にいた誰もが、最初は幻覚を見ていると思っていた。うつすらと空間に霞む、見上げるほど丈高いその姿。

しかし、その身体が徐々に輪郭を露わにしていき、確かな質量をもつ実体として存在を感じる事が出来るようになった時、ようやく人々の口から悲鳴が上がった。

「な、何だ！？」

「ヒイイイツ！！」

腕組みをして仁王立ちするプルミエルの背後に現れたのは、金色の獅子であった。

ただの獅子ではない。

そのたてがみはめらめらと燃え盛る紅蓮の炎であり、その巨体は三階建ての家ほどもある。

低い唸り声を上げる口の端からは青白い焰が噴き出し、あたかも広場の大気を焦がすようだった。

太陽がすぐ間近にあるような、眩暈を催すほどの熱風が観衆に吹きつける。

なんとという、神々しきまでの偉容。

なんとという、戦慄するほどの威容。

「ば、化物だッ……」

誰かが、語尾を震わせながらそう呟く。

「違う。『マギ・ファルカオ』」

その言葉を受けて、プルミエルが言う。

「化物なんて言うって食べられちゃうわよ」

安直な脅しではあったが、観衆はざわめき、どよめく。

その大半はああ、とか、ううといった声にならない呻きだった。

それでも、恐怖に縛られたものか、はたまた、頭が真っ白になるほど動揺しているのか、誰一人としてその場から逃げだそうとする者はいない。

呆けたように、全員がただ立ち尽くし、その美しい獣を見上げているだけだった。

ただ一人の例外を除いて。

「面白くなってきたな」

そう言うて前に進み出て来たのは、もちろんラーズだった。

「俺は魔法って奴にはあまり明るくないんだがね……」

彼は神話的と呼べるほどの巨獣を前にしても、いまだに微笑をその顔に浮かべている。

「ここは魔法の使えない地帯だったはずだ。一体どういうことかな？」

「……これは『精霊』の力を借りる精霊魔法ではなく、より高位の『聖霊』を力ずくで呼び出す召喚魔法。ま、私も呼び出すのは初めてだけ」

プルミエルは背後の獅子を仰ぎ見て、ヒューウと口笛を鳴らした。

「上手くいったみたいね」

「つまり、そいつが君の切り札か？」

「そう。これが切り札よ。命の惜しい人は逃げなさい。命を捨てても私を止めたいという人だけここに残りなさい。猶予は十秒」

ブルミエルの声を聞いても、観衆はまだ心ここにあらずといった様子で立ち尽くしている。

「さっさと逃げる！」

彼女は苛立ちながら、一喝した。

「うお！？」

「ヒィ！」

「そ、そうだ！逃げよう！」

広場を埋め尽くしていた人間達が、ハッと我に返り、今度は我先に逃げ惑った。

悲鳴が空高く響き、雑踏が大地を揺らす。

「ラ、ラーズ様、俺達もズラかりましょう！」

コリンチャがラーズの足元に縋りつき、懇願する。

「逃げる？何で？」

当然、ラーズはそう言うに決まっていた。

この男が求めているのは常にスリルであり、『安全』などという屈な言葉は唾棄すべき禁忌なのだ。

自分の命を駒にして、生死を賭けた危険なゲームにどっぷりと浸る

ことを夢見ている倒錯志向の持ち主。

それこそがラーズ・ホールデンという男の本質である。だが、彼の取り巻き達はそうではない。

プルミエルを取り囲むために薪の上によじ登っていた男達は、転がるように地面に降りると、観衆達に混じってどこかへと消えてしまった。

「ラ、ラーズ様！逃げます！私や、逃げます！」
「駄目だね」

ラーズはにべもない。

コリンチャは泣きそうな顔をして、へたりこんだ。そんな彼の前に、ラーズが屈みこんで、顎をしゃくってみせた。

「ほれ、見るよ」
「へ？」

コリンチャがその先に視線を移すと、人混みをかき分けてこちらへ進んでくる大きな影が見えた。

それは、豪商連合の装甲兵団だった。

「どうだ？救援が来たぞ。いいタイミングだな」
「へ、へえ……」

コリンチャはその数を数える。

二十、三十……なんと、三十五人！

それが全身を重装甲に固めて、こちらへ向かってくる。

コリンチャは妙な安堵感を覚えて、大きな溜息を吐いた。

「こ、こうして見ると頼もしい奴らですね……」

「そうかな？ そうだな」

ラーズは顎ヒゲをぞり、と撫でて、意味ありげに含み笑いを洩らした。

「ラーズ！」

声をかけてきたのは、アザールだった。

先ほど教訓を得た彼は、今度はしっかりと兵士達の背後に隠れ、その隙間からラーズを睨んでいる。

「おう」

「な、な、何だ？ あれは？」

アザールは慌てた口調で、マギ・ファルカオを指さした。

「あそこのお美しいお嬢さんが呼びだしたらしい」

「し、し、しかし、おい、ここは反魔結界の中だぞ！？」

「そんなことは承知で……あー、もう、面倒くさいな。とにかく、あのお嬢さんが魔道貴族だ。そして、この都市を自分の管理下に治めると豪語してる」

「そ、そんなことは許されん！！」

「そうだろうとも。だから、あんた達はどつするんだ？」

「た、戦うしかねえだろう！ おい、アレを使うぞ！ あの化け物を吹っ飛ばせ！」

アザールの号令で、兵士達がザザッと道を開ける。

そこに、六人の男が踏ん張って曳く、いかにも重量のありそうな幌車が現れた。

「おい！お嬢さんよ！」

ルイーゼを磔から降ろしていたプルミエルに、アザールが怒鳴り声をかける。

「何？めんどくさそうなのが来たわね」

「あなた、魔道貴族だか何だか知らんが、この都市にはこの都市のルールがある。さつさと出て行けば見なかったことにしてやるぜ！」
「そうもいかないわね。あなたは聞き逃したかもしれないけど、この都市のルールは私が改訂するの」

「な、生意気言っんじゃねえ！」

「声が震えてるわよ」

「くそ！おい！これを見る！」

先ほど運び込まれた車から幌が外され、そこに黒光りする、巨大な筒が現れた。

なんと、それは砲門である。

「対要塞の火砲だ！その化け物でも、ひとたまりもねえだろう！」

恐ろしく剣呑な代物に、ヒューウとラーズが口笛を吹いた。

しかし、プルミエルは全く動揺を見せない。

美しい碧眼で、虚勢を張るアザールを、哀れむように見つめていた。

「『化物』と呼ぶのはやめなさい。『マギ・ファルカオ』。あなた達、少しは聖霊に敬意を払ったら？」

その不遜な態度は、アザールを不安にし、次いで困惑させ、そして、最後に苛立たせた。

「ちっ。おい、撃て！」

「ほ、本当に？」

言われて兵士が戸惑ったのも無理はない。

仮にも魔道貴族を名乗る相手である。

ここで殺してしまった後で、どのような罪を被るか知れたものではないのだ。

「いいんだよ！もともとベデヴィアに足を踏み入れた時点で、魔道貴族の優位性は無えんだ！」

ヤケクソになってアザールが叫ぶ。

それに圧されて、装甲兵は導火線に火をつけた。

「ファルカオ！とつちめなさい！」

ブルミエルが叫ぶのと同時に、マギ・ファルカオは宙に飛び上がっていた。

その巨軀が火砲の前にズドン！と降り立ち、大地を揺らす。

「ひ……」

射手が悲鳴を上げる間も無い。

マギ・ファルカオの振るう前腕の一撃によって、火砲は車ごと吹き飛ばされた。

明後日な方角を向いた砲身が、空しく宙に炸裂弾を放つ。

それは山なりに放物線を描いて飛んで行き、広場の隅に着弾して大きな爆発を起こした。

「な！？」

兵士達は驚嘆の声を上げる。

炎獣は大きく天に吠えると、さらに前腕を振るった。

「げわあ！」

「ぐっひい！」

重装甲を着込んだ兵士達が、木の葉のように宙を舞う。

それはあまりにも非常識な光景だった。

「ひ、ひええええ……」

アザールは這いつくばって、逃げ惑った。

その間にも装甲兵が吹き飛ばされ、噛み砕かれ、叩き潰されていく。マギ・ファルカオはタガが外れたように暴れ回っていた。

口から焰の玉を吐き、装甲兵の大盾をドロリと瞬時に溶かしてみせる。

大きな咆哮を上げると、その熱波が衝撃波となり周囲の建物を薙ぎ倒す。

目を覆いたくなるような破壊と惨劇がそこに展開されていった。それをプルミエルはじっと見つめている。

「満足かい？」

いつの間にもやらプルミエルの背後に立っていたラーズから声を掛けられても、彼女は動じない。

素早く振り向くと、ツンと胸を張ってラーズに対峙した。

「そうね。驕った商人どもには痛い目を見せないかね」

「ふふん、嘘つきだな、プルミエール」

「？」

「そんな悲しそうな顔をして言うセリフじゃないぞ」
「……………」

「本当は君は心優しい女の子なんだ。人が傷つくのを平気で見ていられる、俺のような冷血動物じゃない。だが、ここで魔道貴族の力の恐ろしさを深く、鮮明に人々の記憶に残しておかなければ、この都市を支配することができない……………そうだろうか？」

ブルミエルの眉がピクリと動く。

（やれやれ。恐ろしいほどカンの良い男ね……………）

ラーズという言葉はまさに凶星だった。

穏便に事が解決するならばそれで済ませておきたいところではあったが、ブルミエルにとっては今、この場で都市の主導権を掌握する必要があったのである。

その理由は右手に光る『マギ・リング』にあった。

本来、高位聖霊を召喚するという術法は心身ともに大きく負担がかかる。

だが、一時的に術者の内在魔力を倍加させ、その負担を軽減させるアイテムが『マギ・リング』なのだ。

（でも、この腕輪の力はもって三十分……………）

それ以上は自分の魔力も、もたない。

したがって、三十分という限られた時間の中で、魔道貴族ミスマンガンの力をこの貿易都市を牛耳る連中に誇示し、支配下に置く必要があったのだ。

今、広場で繰り広げられている苛烈な蹂躪は、その為のパフォーマンスである。

当然、プルミエルにとっては気分の良いものであるはずがない。

「なあ、プルミエル。俺と一緒に来ないか」

「はあ!？」

ラーズの突拍子も無い提案に、さしものプルミエルも、ずっこけそうになった。

「俺は君が気に入ったよ」

「冗談」

「冗談じゃないさ。君が望むなら、奴隷制度を廃止するのは勿論、世界を平和にしたっていい」

「……アホなの？」

怪訝、という言葉がぴったりなプルミエルの視線をラーズは堂々と正面から受け止める。

「ウウ、手厳しいな。いいか？難しく考える事は無いよ。ケンイチから俺に乗り換えると言ってるだけだぜ」

「……それはお断りだわ」

「何でだ？あいつと俺で何が違う？素行の違いか？だが、あいつは『勇者タイム』のせいで良いことをしているだけさ。自分が生き延びるためにな。俺だってそうさ。自分が生き延びるために、やむなく悪いことをしてる。お互いに縛られているものが『勇者タイム』か『魔王タイム』か、それだけの違いだ」

ラーズは両手を広げてアピールすると、その背後にゆらりと影が立った。

「ラーズ!この悪党!」

それはルイーゼだった。
彼女は太い薪を拾い上げると、背後からラーズの脳天にそれを振り下ろした。
バキィ！と小気味良い音が響く。

「おっ！とお……………忘れてたぜ、ルイーゼ。まったく、イケない女だな」

「……………!?」

ルイーゼは瞠目した。

へし折れたのは手に持った薪のほうで、ありったけの力で強打したはずのラーズは、よろめくどころか、微動だにしなかったのである。

「話の腰を折る……………悪い子にはお仕置きだ」

目にも止まらぬ速さでラーズの手が動き、ルイーゼの頬を張る。
パン！と乾いた音が響いた。

「あっ！」

勢い余って前方に投げ出され、倒れそうになるルイーゼの身体を、ブルミエルが手を伸ばして抱きとめる。

「おっと、大丈夫？」

「くっ……………」

「まったく、女の子に手を上げるなんてサイテーだわ」

ルイーゼを背後に庇うようにして、ブルミエルはラーズの前に一歩進み出た。

「ラース。今ので確信したわ。あんたはケンイチよりも『下』ね」

「……」

「『ケンイチとあんたと何が違うか』？いいわよ、あんたのバカげた問いに答えてあげましょうか。ケンイチはね。そりゃあ、普通の男の子ね。正義漢かと言われればそうでもないし、知力、体力も人並み、運に至っては良いのか悪いのかも判断しかねるわね。おまけにちよつとスケベだし」

ブルミエルはしみじみと、溜息まじりに言う。

「あんたの言う通り、彼はこっちの世界に来てから、生き延びるために『勇者タイム』のルールに従って善人をやってるわ。まー、成り行き任せでね」

ラースは黙って彼女の言葉を聞いていた。

「でもね。彼、成り行きだろうが何だろうが、今まで生き延びてきたのよ。それこそ、数えきれないほどの人を助けたり、世話をしたりしてここまで来たわ」

「……」

「人間らしく、弱気になったり、ヤケになったりもしてたわ。それでも、歯を食いしばってここまで生き延びた。気ままに暴力をふるったり女を抱いたりしてきたあんたとは大違いね」

「……」

「自分が生き延びるためでも構わない。成り行きでも構わない。それでも」

どこか満足そうに、ブルミエルはふっ、と微笑んだ。

「それでも、彼は人の為に生きていくでしょうね。一時間刻みで、これからも　ずっと」

その時、ラーズの目に灯った光を何と呼ぶのだろう。
嫉妬？憤怒？憎悪？

ただ、紛れも無く禍々しい殺意が、彼の瞳をどろりと染めた。

「いいだろう。どいつもこいつも……そんなにケンイチが良いなら、あの世で逢わせてやるぜ！」

そう叫んだラーズの手がプルミエルの首に伸びた瞬間。

「うお！？」

大きな火の玉が彼に直撃し、その身体を大きく横へ吹き飛ばした。

「ありがと、ファルカオ」

律儀に召喚士を守った炎獣に、プルミエルはウインクを贈った。
それに照れたのか、マギ・ファルカオは天に向かって大きく咆哮する。

「やれやれ……」

ぶすぶすと煙を上げる薪の山の中から、ラーズがむっくりと起き上った。

その身体には傷一つ無い。

そう、彼も異世界の人間であり、不死身の持ち主なのだ。

「不死身でなければ粉々になってただろうな。まさか、忘れてたか

い？」

「忘れてないわよ。そもそも」

言いさして、プルミエルは天を仰ぐ。

「？」

ラーズも同じく、天を見上げる。

「来た」

「……ほう」

見上げる先 茜色の空に、人影が踊る。

それはまっすぐこちらに向かって落下してきて

「ぐへえぼ……！」

二人からは少し離れた場所に頭から墜落した。
えげつない衝撃音が響き、土煙が巻き上がる。

「な、な……」

アザールは突如として目の前に墮ちてきたそれに腰を抜き、起き
上れないまま呻いた。

「こ、こ、今度はなんだア……？」

土煙が薄れ、人影が見えてくる。

そいつはあれほどの衝撃で地面に叩きつけられたというのに、なんと、何事も無かったかのように自分の足で立ち上がり、埃を払って

いるではないか。

アザールは戦慄し、情けない声で再び呻いた。

「な、なんなんだよお、テメエは……？」

「へ？」

人影がこちらに気付き、へこへこと頭を下げながら言った。

「あー、どうも、勇者ッス」

水の女王

「へへへ、おい、見ろよ。たまんねえな」

門番をつとめる三人の男が、思わず目を細める。

それは非常に目を惹く女だった。

中折れ帽を目深にかぶってはいるが、覗いている口元からこの女が類稀な美人であることを推測することはあまりにも容易なことだった。

ほっそりとした首筋は透き通るほど色が白い。

そして、簡素なシャツの上からでも分かるそのグラマラスな胸の隆起は、世の男ならば誰もがそこに埋もれたいと願わずにはおれないほど官能的であり、蠱惑的であった。

程よくくびれたウエストも、それに繋がる引き締まったヒップも、息を呑むほど妖艶な曲線を描いている。

そんな女が、風に揺らめくロングコートのポケットに手を突っこんだまま、娼館の前で不敵に仁王立ちしているのだ。

これはどういう意味を持つのか？

『ラーズの狂喜と悦楽の館』の留守を任されているヌーディオは、一抹の不安とともに二階のバルコニーから女を見下ろしていた。

彼は今でこそラーズの懐刀として用心棒まがいの立場で働いてはいるが、かつてはとある王国の王宮騎士団長であった。

様々な『予期せぬ不運』が重なった揚句、現況に身をやつしてはいが、それでも警戒心に裏打ちされた状況俯瞰能力、危機察知能力

といった戦士としての本能とも言える感覚を失ってはいいない。そして、その戦士の本能は今、警鐘を鳴らしているのだ。

(あの女、何か妙だぞ……)

胸騒ぎがしていた。

いつもならば、手癖の悪い門番どもの戯れなどに興味を惹かれることなど決してないのだが、ここは黙って状況を見守ることにした。

「よお、ネエちゃん！へっへ、遊びに来たのかい？」

「おほっ、こいつはなかなかお目にかかれねエ上玉だ！」

「こっち来いよ、しこたま可愛がってやるぜえ！？」

女に向かって、夜の火に群がる羽虫のように三人の男が近付いていた。

全員がその目に淫猥な欲情の光を滾らせている。

女の薄紅色の美しい唇が、フツと笑った。

「私と遊んでくれるの？」

「お？おおっ？」

予想外の色よい返答に、男達は一斉に鼻息を荒くした。

「うっ、たまらんぜ！おい！ラーズ様には後で報告だ。今はとりあえず俺達でこの女を……」

「私を？どうするの？」

「う、へ、へ……慌てなさんな。中に入ってからのお楽しみだ」

「そうね。では、案内してもらおうかな」

女の口元がさらに不敵に笑う。

「！」

ヌーディオはそれを見逃さなかった。
そして、はつきりと確信する。

間違いない。あの女は危険だ！

彼は剣を掴み、階下に声を投げた。

「お前達！その女を館に入れてはいかん！取り押さえる！」

ヌーディオは身をひるがえして館の中へ消えた。

突然の指示に驚いたのは男達である。

「又、ヌーディオさん？」

「いつたい……」

三人はヌーディオの言葉の意味を掴みかねて、呆然と無人のバルコニーを見上げるしかない。

その時。

女が動いた。

ひゅっと長い脚が竹のようにしなり、閃光のような速さで蹴りが飛ぶ。

それが一人の男の無防備な首筋に、強烈に叩き込まれた。

「うげえ！」

ミシリ、と頸椎の歪む音がして、哀れな男は白目を剥いてその場に崩れ落ちる。

驚いたのは残りの二人だった。

「な、何だ!？」

「こ、この女……!ぐほおっ!？」

予想外の奇襲に怒号を上げかけた二人目の胸元に、強烈な前蹴りが入る。

それはちょうど心臓の上部だったので、拍動のリズムを乱された男は瞬間的に呼吸困難に陥り、胸を押さえた。

「う……はっ……」

身体がくの字に曲がったことで、相手に差し出すような形になった下顎。

女は再び脚を振るい、そこを容赦無く蹴りあげた。

「ぶべえ!」

宙に前歯をまき散らしながら、男は地面に倒れ、細かく痙攣しながら悶絶する。

「ひ、ひっ!」

あっという間に最後の一人になってしまった男は短い悲鳴を上げた。すぐに考えつくことといえば、逃げる事だ。

彼は女がこちらへ振り向く前に、転げるように館の中へ逃げ込むと、内側から手首ほど太さのある鉄製の門をかけ、しっかりと施錠した。

「は　　ッ、は　　ッ……」

恐怖のあまり、呼吸が整わない。

二人の間が、目の前であっけなく倒された。

しかも、相手は女だ！

人生で初めてと言っているほど、ショックを受けていた。

さらに驚嘆すべきは、あの女が、結局ポケットから手を出さないままであれだけの格闘戦を演じたことにある。

「な、なんて女だ……」

「貴様、取り押さえろと言ったはずだぞ」

「へっ？」

背後の声に振り向くと、そこには剣を抜いたヌーディオが立っていた。

さらにその後ろでは、大勢の男達が手に様々な武器を持ってすでに臨戦態勢を整えている。

ぎらつく殺気が館の中に充満していた。

しかし、女一人に対してと考えると、あまりにも大仰な戦支度である。

「あ……」

「あの女は？」

「そ、外でさア……とんでもねえアマだ。あっちゅう間にジモンとガンドルが倒されちゃった！」

「そうか」

報告を聞いても、ヌーディオは驚きはしなかった。

あの女ならばやるだろう。

門番の恐怖にひきつった情けない顔を見て、彼は素早く思案を巡らせた。

(あの女は何者だ？何が目的だ？)

この娼館には百人を超える女が閉じ込められている。

奴隷として売りさばくための小娘達を入れれば三百は下らない。

ラーズの手下がどこからあれだけの女達を調達してくるのかは知らないが、円満な合意のもとでという事例はおそらくかなり稀なのだろう。

月に二、三度は、恋人を返せだの娘を返せだのと叫びながら討ち込みをかけてくる連中がいるのだ。

そうした場合の露払いはおもにヌーディオの仕事であり、老若男女を問わず、彼は何の躊躇いもなく敵を斬った。

それは、人を斬るという行為に一つの美学を見出している彼にとって、何の苦にもならない作業だった。

血に酔う、という言葉があるが、ヌーディオは剣士としてまさにその暗黒の境地に浸かり込んでいたのだ。

(しかし……)

あの女はどうだ？

あの落ち着き払った態度と、余裕に満ちた物腰は何だ？

とても、愚直な復讐心や妄信的な正義感を抛り所にして踏みこんでくるような手合いの一味とは思われない。

(嫌な予感がする……)

妙な悪寒、そして不安を拭いきれなかった。

ヌーディオにとっては常に無いことである。

それはラーズ・ホールデンという男と初めて会った時の感覚に似ていた。

「ヌーディオ様？どうなすったんで？」

「む、何でもなし。いいか、扉を開けると同時に」

ヌーディオが部下達へ振り向き、指示を出しかけた時。

先ほど門をかけた重厚な鉄の扉が、バン！と大きな音を立てて内側にへこんだ。

「……！？」

それは外側から、巨大なハンマーのような物で力いっぱい扉を打ちつけたような、そんなへこみ方だった。

断じて人力のみで、ましてや女の細腕でできるようなものではない。

「な、なんだ？」

男達の間には動揺が広がる。

すると、再び、バン！と扉がへこんだ。

間違いない！

外側から何かを、おまけにこっぴどく強烈にそれを打ちつけている！

明確な指示を出せないまま、ヌーディオと部下達は扉に起こっている異変を見守るしかなかった。

「や、破られるっ………！」

誰かがそう叫び出したのと同時に、バン！とひととき大きな音がして、鉄の扉が勢いよく吹っ飛んだ。

「おわあ!？」
「ぬおおっ!？」

武装した男達が思わず後ずさり、中には無様に尻餅をついた者までいた。

しかし、ヌーディオだけは微動だにせず、剣を下段に構えたままその開け放たれた扉の向こうを睨みつけている。
そして、女が現れた。

「随分とつれないことをするね。女に恥をかかせるものじゃないよ」
相変わらず、その口元には微笑を浮かべている。
彼女はゆっくりと入ってきて、館内を見回した。

「ほう、汚い顔がヨリドリミドリ……ずいぶん集めたものだ」
「な、なんだと!」
「挑発に乗るな」

いきり立つ部下をヌーディオは手で制した。
女はそれを見て、鼻を鳴らして笑った。

「ふふ、あなたが野良犬のボス？」
「……俺に挑発は無意味だ。お前は何者だ？」
「私か」

女は中折れ帽をくい、と引き上げ、その赤銅色の瞳を覗かせた。

「私はメイヘレン。メイヘレン・ブランシユール。水を司る、誇り
高き魔道貴族だ」

「ま、魔道貴族だと……!？」

ざわめく男達を、再びヌーディオが手で制する。彼はまたも驚きはしなかった。逆にすくと納得がいったくらいである。成程、やはりそれほど女だったか、と。

「魔道貴族が何の用だ？」

「先ほど少しだけここの世話になったんだが、そのもてなし方が気に入らなかつた。今日限りで、ここを潰してしまおうと思ってね」

「潰す、だと？」

「完膚なきまでにね」

「させると思うか？」

剣を向けて牽制しながら、ヌーディオはメイヘレンの全身をくまなく目でチェックした。

見たところ、武器は持っていない。

では、先ほどのアレは？

頑丈な門をかけた鉄の扉を吹き飛ばした、アレは一体何だったのか？

「……何を隠し持っている？」

「何も持つてはいないよ。見れば分かるだろう？」

「嘘をつけ」

「ふふ……疑うなら、私をねじ伏せてから、くまなく探してみる事だ」

「よし。そうしてやる。おい、五人で行け」

ヌーディオが指示を出すと、五人の男達が前に進み出て、武器を構えた。

「かかれ！」

「うおおおおおおっ!!」

号令とともに、男達がメイヘレンに向かって殺到する。

「ふん……」

メイヘレンは全く慌てた様子を見せずに、右手をすう、と宙にかざした。

その手首には金色のブレスレットが輝いている。

「天の聖位。地の大観。淀みにありて清浄を紡ぐ者。汝は尊き水の主……」

瞑目し、呪文を唱える。

そして、かざした手をぐつと握り込み、叫んだ。

「来たれ!そして我が望みを聞け!深淵の竜王『マギ・セルストレーム』!」

次の瞬間。

「うごあ!」

五人の男達は何か弾かれたように宙を飛び、広間の壁に横並びになつて叩きつけられた。

「な、何っ!」

さしものヌーディオもこれには驚いた。

一人ずつならともかく、五人いっぺんに吹き飛ばす技など、見たこ

とも無い。

おまけに、それが何によって行われたのかも見えなかった。

パンチか？

キックか？

それとも、ハンマー？

あるいは……火砲？

その答えを見せつけるように、メイヘレンは右手をこちらへ差し出す。

ヌーデイオはその手首に巻きついているものに気付いた。

「蛇……？」

それは紛れもなく蛇だった。

濡れ濡れと光る翡翠色の美しい肌と、金色に光る鋭い目。

だが、そこらにいる蛇とは少し様子が違う。

鎌首をもたげてこちらをじっと凝視する様子は、野生のものにはない、深い知性や品性といったものを感じさせた。

「『蛇』とは、月並みな感想を聞かせてくれるじゃないか。見た目は小さくとも、この子は『聖霊』だよ」

「聖霊……」

「そう。『マギ・セルストレーム』」

言うと、メイヘレンは無駄のない動きでロングコートを脱ぎ捨て、シャツの袖を捲った。

臨戦態勢を整えたのだ。

「さて、悔い改める時だ。邪悪なる者どもよ」

そうやって差し向けられたメイヘレンの右手。
蛇の瞳がカツと光ったかと思うと、今度はヌーディオの隣に立っていた男が壁に向かって吹っ飛ばされた。

「おや、外したか。さすがにコントロールが難しい」

そうやって、メイヘレンは再び右手をこちらへ向ける。

「うぬ！」

動かなければやられる！

感覚でそう悟ったヌーディオは、慌てて横へ飛んだ。

チュウン！と耳元を何かが高速で通り過ぎていく音が聞こえ、自分の後ろに立っていた男が吹き飛ばされる。

その瞬間に、冷たい飛沫が顔に当たった。

ヌーディオは理解した。

（水……水を飛ばしているのか！？）

メイヘレンの右手に巻きついた、あの蛇。

あれが口から凄まじいスピードで水流を撃ちだし、男達を吹き飛ばしているのだ。

（しかし、水ごときで……）

思ったところで、自分の認識が甘いものだということを知る。

咄嗟に盾にした鎧姿の大男が、チュン！という音とともに大きく弾き飛ばされ、そのまま倒れたのだ。

鎧に残るその弾痕が、水流弾の威力の凄まじさを物語っていた。

先ほど鉄製の扉を吹き飛ばしたのは、これだったのか。
ヌーディオの口から、舌打ちが漏れた。

「どうした？かかってきたまえ。女の私に一方的にやられたままで良いのか？」

蛇　セルストレームがチュン！チュン！チュン！と矢継ぎ早に水流弾を放ち、その度に男達が水浸しになって吹き飛んでいく。
ヌーディオはそれらを何とかかいくぐりながら、反撃の一手を思案していた。

剣の魔道に堕ちているとはいえ、彼もひとかどの剣士である。

(懐に飛び込めれば、何の問題も無い)

非現実的とも言える攻撃の前に、部下達は完全に臆してしまっているが、要は弓矢と変わらない。

飛ばす物が水だというだけなのだ。

間合いに入ってしまうえば、圧倒的にこちらが有利になるだろう。

(だが……)

それが難しいということもヌーディオは悟っていた。

厄介なのはその連射能力である。

弓矢のように矢をつがえたり、弦を引き絞るといった予備動作を必要とせずに、右手を向けた方向へ自由自在に水流弾を放つことができる点は、紛れも無く脅威である。

おそらくは、弾切れも無いだろう。

女がどこかに気を散らしたその隙に……というのが現実的な対策と思われた。

(いや、あの女は隙を作るまい。ならば……！)

ヌーディオは咄嗟の閃きを得て、近くに突っ立っていた手下を一人、力任せに引き寄せた。

「うあ！？又、ヌーディオさん！？」

「俺の為に死ね」

動揺する部下の耳元でそう囁くと、ヌーディオはその男を盾にしてメイヘレンへと突進していった。

(一瞬でいい。一撃だけでいい。それだけで俺はあの女を殺れる！)

盾にされた男は水流弾を身体に何発も受けながら、悲痛な叫び声を上げる。

「うごえ！やめてくれッ！助けてくれッ！！」

そんな声に耳を傾けるヌーディオではない。

彼はさらに前進し、そして

(間合いに入った！)

最後に一步、大きく踏み込んだその瞬間。

盾にしていた半死半生の男の身体を横へ放り投げ、ヌーディオは剣を垂直にメイヘレンに向けて振り下ろした。

狙いは右腕である。

肘から下を完全に、完全に切断するつもりだった。

(かわせるはずがないッ！)

その間合いを見誤るはずもない。
メイヘレンの右腕は振り下ろされる剣の角度にしっかりと入っていた。

どれほど素早く動いても手を引つ込めるのは不可能だ。

たとえ予想を超える速さで次弾を放ったとしても、ヌーディオの身体を吹き飛ばす前に、彼の剣は間違いなくメイヘレンの美しい白い細腕を斬り落としているだろう。

（勝負あった！）

勝利を確信し、ヌーディオの顔に笑みが浮かんだ、その時
メイヘレンの右腕が滑るように動き、その手がひゅっと宙を斬り上げる。

それはヌーディオが全く予想だにしない動きだった。

「な!?!」

ヌーディオは不思議な感覚を味わった。

かつて味わったことの無い衝撃が、刹那の間に己の体内を通過していく感覚である。

痛みは全く感じなかった。

しかし、身体は意に反してゆっくりと天井を見上げるように傾き、倒れていく。

その最中は、すべてが明瞭に見えた。

飛び散る水飛沫の一粒、一粒。

そして、宙を舞う、折れた剣先……剣先？

（あれは何だ……?）

ヌーディオはゆっくりと倒れこみながら不審に思う。
自分の眼に映るもの全てが、あまりにも現実感を欠いているような気がしていた。

だが、背中がばしゃりと水音を立てて地についた時、ようやく自分の身に何が起こったのかを悟った。

（斬られた……？俺は斬られたのか……）

何とか顎を引いて胸元を確認する。

ばつさりと袈裟がけにシャツが裂け、そこから赤い染みがじわじわと広がっていくのが見えた。

間違いなく、斬られている。

それも相当の深手だ。

絶対に助からないだろう。

少し唸ってから、今度は首を横に倒して、自分の手の中にある剣を確認する。

それは中程から折れていた。

いや、それにしても切り口が美しすぎる。

切断されているのだ。

（どうということだ……）

ヌーディオは目を見張った。

死ぬのは構わないが、腑に落ちない。

あの女は……刃物など持っていないはずだ。

「水のカッターだよ」

彼の疑問に答えるように、メイヘレンが言った。

「水というのは高圧で一点から噴射すると、この世で最も切れ味の鋭い刃になる。知らなかったか？」

「く……ぬ……」

ヌーディオの最後の呻きを、メイヘレンは何ととったのか。ふっと息を短く吐き出してから、

「高い授業料だったな、用心棒」

そう言つて、メイヘレンは脱ぎ捨てたコートを肩にかけ、館の奥へ進んで行った。

水浸しになったエントランスホールには、弱々しく喘ぐ重傷者、そして、無数の屍が残るだけである。

勝ち点3

俺に遅れること数秒の後。

「こらっ、もう！危ないじゃんか、途中で手を離したりして！」

ふわりと地面に降り立ったアリイシャは口を尖らせて文句を言った。それに圧されて、俺は反射的にへこへこと頭を下げる。

「す、すまん……つい、俺の中の戦士の血が昂ぶっちゃまって……」

「もう！」

「うっっ！」

「……ナルホドね。その萌え萌え健康美少女に助けてもらったのね」

「そう、萌え萌え……って、おおっ！そ、その声は！」

聞き覚えのある声に、俺は一瞬でテンションがMAXボルテージに慌てて振り返ると、薪の山の上で仁王立ちしているプルミエルを見つけた。

「ぶ、無事だったか！あー、よかった！」

「当たり前でしょ」

その愛想の無ささえ愛おしい。

「あっ、ルイーゼさんも無事だったんスね！よかった！」

プルミエルの背後にルイーゼさんの姿を見つけて、俺はもう一度、声を上げる。

「ケ、ケンイチ……あんたも無事ね……よかった」

「ご覧の通りっすよ」

「でも……バカね、なんで逃げなかったのさ」

「あはは……なんでだろう」

逃げる？

そうか、逃げる事もできたわけだ。

何でそれをしなかったんだ？

正直なところ、自分にも分からなかった。

戻ればまたラーズにボコボコにされるのは間違いない　いや、今

度こそ殺されるだろう。

それでもこうして戻ってきてしまった。

まあ、正直なところ理由なんてのは無いんだ。

正義感だの何だのとそんなモノに駆られて行動したわけではなく、ただ、そうするのが当たり前だと思った結果がコレだというだけで。

俺はそのところのニュアンスをうまく説明できる気がしないので、とりあえずやんわり笑って誤魔化した。

「ところで……」

俺は周囲を見回した。

「うーむ……」

倒壊した建物、弱々しく呻く無数の装甲兵たち。

所々で、小さな火災も発生している。

俺は広場の惨状に、思わず暗い気持ちになり、一声唸った。

「ずいぶん派手に……やったな……」

「何言ってるの。これでもかなり手加減したほうよ」

「そ、そうか……」

これで手加減って……本気を出したら世界規模のカタストロフが起きるってことか？

「って、うおう！な、何アレ！？で、でかいライオンがいるウ！？でかつ！超でかつ！」

「今ごろ気づいたの……？」

ブルミエルは呆れた視線を寄こしてくれる。

「どんだけ鈍いんだか……」

「いや、だって、夢中で気付かなかつたし……」

「あの子は私が召喚したの。あと、名前は『マギ・ファルカオ』よ。ライオンなんて言っちゃダメよ。ぐっちやくちやにされるわよ」

「ぐっちやくちやって……ゴクリ……あ、あれ？でも、魔法使えなかつたんじゃ？」

「その説明するのは面倒だから、後でヒマな時に教えてあげる。それよりも今はすることがあるでしょ」

おお、そうだ。

俺は目をラーズに向けた。

「よっ」

「お、おおっ！？近っ！」

俺は慌ててのけぞる。

くそう、相変わらず動きの読めない野郎だ。

いつの間にか、もう俺の眼の前に立ってやがる。

緊張でケツがきゅっと引き締まった。

「ケンイチ、俺も聞くぞ。なんで逃げなかったんだ？」
「あんたを倒すためさ」

内心のビビりは必死で抑え込みつつ、俺はしれっと答えてみせる。
自信の有る無しは関係無い。

とりあえず、勇者的には魔王であるこいつを何とかしなくちゃならないし、それができるのは俺だけなんだ。

「俺を倒せると本気で思ってるんだな？」

「日本には『三度目の正直』って言葉があるんだ」

「……くそ、ケンイチ。俺はだんだん腹が立つてきたぞ」
「？」

「俺は君に何回もチャンスを与えてやったつもりだったのに、君はそれを生かそうとしない。あれだけハッキリと力の差を見せつけてやったのに、またしてもこうして俺の前にバカ正直に立っている」

まるで塾の講師が何かのように、ラーズは大きなジェスチャーで俺に訴える。

「どうして背後から殴りかからないんだ？力で敵わないなら急所を狙えばいいだろう？目玉をえぐるなり、股間を蹴りあげるなり、死に物狂いでやってみろよ。何の工夫も無しに正攻法で戦って、まだ勝つつもりでいる……その君の楽観に俺は腹が立っているんだ」

腹が立っているなんて言いながらも、そんな講釈をたれる余裕がある。

俺にとっちゃその態度のほうがよくばどイラ立たしいぞ。

「あいにくと、奇襲はガラじゃない」

「何？」

「俺はセコいことはしない。勇者だから。アメリカン魔王には分からんだろうが、日出づる国の勇者にはプライドがあるんだ」

「勇者のプライドだと……？クソみたいな言葉だぜ」

ラーズは顔をしかめた。

「アー、もう……駄目だ。このままじゃあ、俺は君とのゲームを楽しめそうにない。どうすれば本気で俺を憎んでくれるんだ？君が心の底から俺を殺してやりたいという激情に駆られるようになるには、どういうきっかけが必要だ？」

言いながら、ラーズは俺に背を向けて去っていく。

「お、おい！」

いや、去っていくんじゃない……

「ま、待てよ！お前、まさか……」

「俺に考えつくことと言えば、このピーチちゃんを君から永久に奪っちまうことくらいだ」

「プ、プルミエルッ！」

俺は慌てて駆け出していた。

だが、それよりも早くラーズは薪の山の上にいるプルミエルの手を強引に掴み、地面に引き摺り降ろした。

「や！ちよつと、痛っ！」

よろけながらラーズの前に降り立ったプルミエルを盾にするように

抱きかかえて、ラーズは彼女の首に手を回す。

「これだけ近かったらあのライオンさんも御自慢の火を吹けんだろ
うっ？」

「うっ……この……」

「やめろ！てめえ、離せ！」

「駄目だ。君には本気になってもらわんと。このピーチはその為の
生贄だ」

あの野郎、本気だ！

「やめろ！」

俺が蒼ざめた時、横をビュンと何かがとんでもないスピードで通り
抜けていった。

「!?!」

「こらっ、大の男が女の子にッ！」

アリイシャだった。

彼女は信じられないスピードでラーズに飛びかかると、空中で鋭い
蹴りを放つ。

「おお？」

さしものラーズも不意を突かれたようで、ブルミエルを手放し、そ
の蹴りを手の甲で受け止めた。

「りゃあああっ！」

アレイシヤは宙に身体を残したまま、そこから蹴りと拳の乱打を雨のように放つ。

ラーズはそれをかわし、受け止め、さばいてはいたものの、やがて凄まじい連打についていけなくなり、次第に一発、二発と攻撃をモロに顔面に食らうようになっていった。

「おお……」

「ででででいっ！」

アレイシヤは攻撃の手を緩めなかった。

容赦無しと言ってもいいほどの乱打を、ラーズに浴びせていく。完全にラーズのガードが下がり、全ての攻撃が奴の身体にクリーンヒットするようになっても彼女は手足を振るい続けた。

これが格闘技のリングの上なら、もうレフェリー（角田）が身体をねじ込んで止めに入ってるだろう。

「てい！」

「ぶお！」

ひときわ鋭い拳が、ラーズの顔面を捉えた時だった。

「……つとお」

奴の手が素早く動き、アレイシヤの手首ががっしりと掴まれる。

「あっ！？」

「よし、捕まえたぞ。まったく、おてんばなピーチちゃんだ」

あの野郎、タイミングを待っていたんだ！

ガードを下げ、相手の良いように一方的にやらせておいて、少しだ

け心に油断が生まれたところをすかさず捕獲する。不死身であることを鼻にかけたような、あまりにも大雑把な戦い方だ。

「まだ若いわりにはケンイチなんぞよりもずっと戦いを分かっている、君は」

そう言うと、ラーズはアリュシヤを力任せに地面に引きずり倒し、その身体の上に跨って、完全に彼女を組み敷いた。

「あう！」

「最初の一撃で俺の不死身を見抜いたところは上出来だ。容赦無いラッシュも見事だった。だが、詰めが甘かったな」

ラーズはニヤリと笑うと、そのまま手を滑らせてアリュシヤのお尻をつるりと撫であげた。

「ひゃんっ！お、お尻触るなあッ！」

「ひょーお、いい声だ。おお……未成熟の瑞々しいピーチ……」

ばたばたと手足を動かそうとするアリュシヤを完全に抑えつけながら、ラーズは恍惚とした表情を浮かべた。

「ファルカオ……！」

「おおっと！」

ライオン丸に指示を出そうとしたプルミエルを、ラーズは手を伸ばして突き飛ばし、その猶予を与えない。

地面に倒れ込んだ彼女と、苦悶に顔を歪めているアリュシヤを見て、俺は完全にキレた。

(野郎……！)

だが、怒りに身を任せるのは良くない。

教訓を生かせ、冷静になれと俺は自分に言い聞かせた。

精神論ではなく方法論なんだ。

あいつを確実に仕留める為に大事なことだ。

「おい。その娘を離せ」

「ん？」

俺はラーズの前に立って奴を見下ろしていた。

奴は俺を見上げる。

「なんだよ、そんな顔もできるんじゃないか」

「立てよ」

「いいぞ。立とう。しかし、いいか？これが最後のチャンスだぞ。

今度こそ俺は君を」

「うおおおおおおおっ！」

「！？」

御託を並べながらゆっくりと腰を上げかけたラーズに、間髪入れず俺はタツクルをかましてやった。

両足を抱きかかえるような低空タツクルだ。

「おおおおおっ！」

「おお」

俺達はもつれあうようにして薪の山へと突っ込んだ。

ガラガラと薪が崩れ、二人の上に降り注ぐ。

その最中に、俺は奴のシャツの襟を掴み、足はしっかりと胴にホルドして、馬乗り　つまりマウントポジションをとることに成功した。

（おお、意外とやってみるもんだな！）

だが、ここからが肝心だ。

俺は拳を振り上げ……

「おいおい、隙だらけだぞ」

「な……うお！」

振り上げた拳を奴の顔面に落とす前に、ラーズの掌底が俺の胸板を突き飛ばした。

「っげっはあ！」

な、なんつー衝撃だ……

俺は強制的に肺の空気を押し出され、一瞬で呼吸困難に陥る。

その隙に、ラーズは俺の足首を掴みながら腰をひねり、器用に体のポジションを入れ替えてしまった。

（うわ、ま、まずい……）

俺の両腕はラーズの両膝によって押さえつけられ、身動きもままならない。

「形勢逆転だな」

こちらを見下ろし、ほくそ笑みながら奴が言う。

「だが、俺の与えた教訓を生かしたのは二重丸だ。よくやったと褒めておくよ」

「……まだ勝負は……くそっ……ついてないぞ」

「そうだな。いいことを言う。君か俺か、どちらかが死ぬまでは」

「でえいつー！」

会話に割って入ったのはアリイシャの蹴りだった。

ソニックブームが発生しそうなほど鋭いキック！

だが、その不意打ちさえも、ラーズは紙一重で見切り、少しだけ状態をひねるだけの最小限の動きでかわす。

「うそおっ！？」

会心の一撃だったんだろう。

それをいとも簡単に避けられたことで、アリイシャは驚きに目を見張った。

「おおっとお、元気の良いピーチ……」

ラーズがまた下劣なことを言おうとした時

「隙アリだぜ、ラーズ！」

俺は奴がほんの少し腰を浮かしたスキに、ポケットからロープを取り出して、素早くそれをラーズの右手首に引っ掛けることに成功した。

「！？」

「お前が置いてつてくれたロープだぜ！」

そう、つい一時間ほど前に俺を縛り上げ、木に吊るした頑丈なロープ。

その端を輪っかにして結び、俺は即席の手錠代わりになっていたのだ。

その手錠のもう一端は、俺の左手首に引っ掛ける。

これで俺達は一蓮托生の仲になったわけだ。

ラーズは怪訝そうな表情を浮かべた。

「……何の真似だ？ロープデスマッチでもするつもりか？」

「すぐに教えてやるよ！アライシャ！手筈通りに頼む！」

「う、うん」

俺が伸ばした右手を、アライシャが掴む。

そして、彼女は宙を蹴り

「うおおおおおっ？」

「おおおおおおっ」

数珠つなぎになった俺達三人は、アライシャの術戦車『ファディ・デサイ』の力によって一瞬にして空高く舞い上がった。

おお……地面が、プルミエルが、あんなに遠くに……ラーズもびっくりしているようだった。

だが、すぐにこちらへ顔を向け、ニヤリと笑う。

「やるな、ケンイチ。こいつは予想外だった」

「そうかよ！」

「どこへ連れてつてくれるんだ？」

「川だよ！」

「川……？」

俺は殴り合いでラーズを倒そうとは考えてなかった。気持ちの上では馬乗りになってボッコボコにしてやりたい気持ちはもちろんなあったが、勿論そんなのは上手くないだろう。

だから、作戦が必要だと思ったのだ。

そして、俺は神懸かり的な天啓を得た。

先ほどアリイシヤに助けてもらった時に、短く千切れたロープの端材を見て思いついたのだ。

「うおおおおっ！」

上昇、浮遊から一転、今度は猛スピードの落下感。

うえーっぶ、内臓が持ち上がるこの感じ、久しぶりだっ！ぜっ！

「くがああああっ！」

途中でアリイシヤが俺の手を離す。

そして、俺とラーズの二人は激しい勢いで水面に叩きつけられた。夕日の赤に染まる川に、大きな水柱が上がる。

「うぼおあー！」

鼻に、口に、耳に侵入してくる冷たい水。

俺は急いで水を掻き、水面に顔を出す。

くそ、片手が繋がれてるから動かしづらい！

「っぶはっ！」

「ぶー、ケンイチよ」

俺が一瞬溺れかけたにもかかわらず、ラーズは悠然と水面に顔を出して、微動だにしない。

こっちは必死で手足を動かしながら水面に顔を出してるってのに！あいつの身体は発泡スチロールでできてんのか？

「どんな素敵な奇策かと思っただが……」

「……」

「うん、俺達は確かに水に弱いな。外からの攻撃には無敵だが、窒息だけは避けられん。しかし、まさか俺を道連れにして入水自殺を図ったわけじゃないだろう？」

「もちろん、あんたと心中なんてごめんだね」

「ほう？では、これから何を見せてくれるんだ？」

「その前にいいこと教えてやるぜ、ラーズ。ここは『ブナジャラ川』」

「」

「？」

「この川の流れはどっかの大国に繋がってて、この都市の交通や貿易の生命線なんだと」

俺は喋りながら、あくまでもさりげなく手首に引っかけてるロープを外そうとした。

だが……

（は、外れないっ？か、固えっ！）

俺はかなり焦っていた。

急がないと作戦はおジャンだ。

だが、ラーズに気取られてしまつては元も子もない。

何とか話を繋げながら、急いでこのロープを外さねば……！

「……それはもう、カリスマ的な人気を誇る川なんだ。ちなみに岸

の方ではアイスクャンデーも売ってるぞ。お年寄りから子供まで幅広い層にニーズがあつてな、フリーバーは季節によって変わるそう
だ。お前、何味が好き？俺、チョコミント」

う、お、お、お……

本当にロープが外れねえ！

「……何を待つてるんだ？何か企んでるな？」

ギクウ！

俺が戦慄した、その時だった。

「ケンイチい！」

対岸から、一本のロープが俺の手元に投げ入れられた。
振り向いて見ると、アライシャと、そしてあれはガシフさんだ！
船着き場にいた水着ギャル達も、何かと駆けつけていた。

「ロープ！早く掴んで！」

アライシャが叫ぶ。

「で、でも」

俺とラーズが繋がったまんまじゃ意味が無い。

「いいから！」

声に押されて、俺は言われた通りに命綱を掴む。

すると、アライシャがそのロープに向かって拳を叩きつけた。

ばしいん！

という音がして、俺とラーズを繋いでいたロープが弾け飛ぶ。

「！？」

おおっ、これはアレだ！目標物だけを破壊する『不壊点芯功』！こんな使い方までできるとわっ！

「どっついうことだ？」

さすがに奴もびっくりしているようだ。そろそろ種明かしをしてやるぜ。

「ラーズ、実はこういふことさ。この川には主がいてな。そいつは」

足元。

話している最中に、黒い大きな影が水面にゆっくりと浮き上がってくるのが見えた。

「オスが嫌いなんだとさ」

「？」

不思議そうな顔をするラーズ。

「アライシャ！ガシフさん！頼むっ！」

「よっしやっ！いい？みんないくよっ！せー！せー！のぉっ！」

アライシャの掛け声に合わせて、対岸にいる人間達が全員で俺の掴んでいる命綱を引く。

ばくん！とその大口が閉じる。
だが、済んでのところで大蛇の跳躍は俺に届かなかった。

「うひよおおおおっ！」

ア、危・な・か・つ・た！

ケミイ・パシャは未練がましく宙で巨体をつねうねとくねらせながら、重力の法則にしたがって落下していき、大きな水柱を立てて水中へと姿を消した。

俺は大きく放物線を描きながら飛び、岸へ。

ああ、嬉しい！

大地に帰還だ！

「おぶおおっ！」

えげつない角度からの頭での着地となったが、もう慣れたもんだ。
俺はすぐに起き上がり、川面をじっと見た。

「……………」

駆け寄ってきたアライシヤも、川面をじっと見つめる。
ガシフさんも水着ギヤル達も、全員が同じように川面を見つめた。

「……………」

「……………」

何も上がってこない。

「か、勝った……………」

「……………うん、上がってこないね」

「勝ったのか……？」

「多分……」

「……ッ！」

俺は会心のガッツポーズを決めたが、緊張感が切れたのと同時に膝がかくんと折れて、その場にお尻からへたりこんでしまった。

「うおうつ……」

「大丈夫？」

「だ、大丈夫。ちょっと、疲れただけで……」

心配そうに覗きこむアリイシヤに、俺は親指を立てて見せる。

「また助けてもらったな、アリイシヤ。それにガシフさん達も、ありがとうございます」

「なに、いいってことよ。だが、ケミィ・パシヤに食われちゃった奴は……」

ガシフさんは気の毒そうに川を見つめた。

「気に病むことは無いっす。あいつは……悪い奴だったんです。この都市の『毒』と言ってもいいような」

「そ、そう、なのか……」

「そうだったんですよ。倒さなくちゃいけなかったんです、多分……」

ガシフさんにはそう言いながらも、冷静になった俺の心に影が差してくる。

ちくしょう、ゲームの世界とはやっぱり違うな。

今の俺には『魔王を倒したぜ！』なんていう満足感も達成感も無い。

むしろ、人一人を殺めちまったという罪悪感のほうがかげに大きかった。

だが、間違ったことをしたとは思わない。

あいつが生きているだけで、これから先も多くの人間が涙を流すことになるはずだったんだ。

俺は正しい選択をしたはずだ。

なのに、この後味の悪さは……

「ケンイチは間違ってないよ」

「え？」

「ボクは拳を交えたらその人の事が大体分かるよ。もちろん全部じゃないけど、どんな気持ちで戦う人なのか分かるんだ。素直な人なのか、ずるい人なのか、真面目な人なのか、不真面目な人なのか。でも、ラーズのこととは全然分からなかった。何にも無かったんだ」

「何にも、無い？」

「そう。何も。悪意も敵意も殺意も、何にも感情が無い。ボクはそんな人初めて。すごく怖かったよ。だって、そういう人は何も考えないで人を傷つけたり殺したりできるんだから」

多分、アライシャの見立ては正しいだろう。

俺は格闘家じゃないけど、ラーズに対して彼女と同じ感覚を持っていた。

あいつからは確かに、何も感じられない。

何をするにしてもゲーム感覚といった様子だった。

「だから、ケンイチは後悔も反省もしなくていいよ。正しいことをしたんだ」

俺の心を見透かしたように、アライシャがそう言ってくれた。

優しい言葉に思わず泣きそうになるが、それは格好悪いから、俺は

夕焼け空を見上げて目を閉じた。

（安らかに眠れ、ラーズ……）

俺は後悔はしないぞ。

だが、この罪悪感は忘れない。

それが俺からお前への　勇者から魔王への、追悼の念だ。

もっと勝手に自分を愛したい

俺とアリイシャが広場へ戻った時には、事態はもうだいぶ収束へと向かっていた。

ほぼ一方的な線で。

「……というわけで、以上が基本法案よ。これに違反した場合は然るべき罰則が与えられるからそこるところヨロシク。責任は連座制にするから、あんたら豪商連合はしっかりと目を光らせておくこと。第三者による監視委員なんてのもいいかもね」

ブルミエルは広場の真ん中で仁王立ちし、立派な身なりをしたオヤジ達が五人ほど、その前に土下座のような形でひれ伏していた。

ツンデレ系アイドルを神の如く崇めたてまつるカルト集団……のようには見えなくてもないが、どうやらこの街の有力者たちにブルミエルが何かしらの約束を取り付けているようだ。

「あと、毎月しっかりとした報告書の提出を義務付けるわ。市場の動向、治安強化、エコ活動に対する取り組みをレポートにして、月初めの週に必ずミスmanaガンの屋敷へ送付すること。いいわね？」

尊大にも見える美少女の言葉に対して一言の反論も無く、オヤジ連中は静かに了承の意味を込めて頭を深々と下げる。

「よし。では、解散！」

ブルミエルの言葉でオヤジたちはのそのそと立ち上がり、しずしずと一列になって引き揚げていく。

な、なんて悲しい背中なんだ……

俺はちよつといたたまれなくなる。

「あ、帰ってきたのね、ケンイチ」

「おう」

「ラーズは？」

「倒したよ」

「そう。お疲れ様」

「……」

「ん？何？」

「いや……」

な、なんて淡白なやりとりなんだッ……！

勇者が魔王を倒したんだぞ！？

普通は『すごいわっ！さすがは勇者様！……好き……』とか『ふん！今回だけは褒めてあげるわ！べ、別にあんたのことを認めたくわけじゃないんだからねっ！……でも……好き……』とかあつて然るべきだろ？

結構命がけだったんだぜ、俺。

せめてアメイジングとかマーベラスとかそういう枕詞をつけてもバチは当たらないはず。

「あれ？ところでさっきのメガ級ライオンは？」

「ファルカオ！」

「す、すまん。あうっ！蹴らないでっ！で、そのファルカオは？」

「消えたわ」

「き、消えたあ？」

あんなでかいモンが？

「魔法で無理やり召喚しただけだからね。時間が来たら帰ってた

わ

「しよ、召喚……ワオ、本当に魔法だな」

「だからそう言ってるでしょ。理解遅いわねー」

「うづっ！」

「ぶっ」

ブルミエルは右手首に引つかかっている錆色の輪を見て、溜息を吐いた。

それは指でチョンと触ると、まるで線香の灰のようにホロホロと崩れ落ち、残骸は地に落ちる前に風に吹かれて消えてしまう。

「マギ・リング……有効時間はだいたい三十分ってところか」
「？」

何のことかさっぱり分からないが、まあ、みんなが無事なら何より。

「って、あれ？メイヘレンとエステイ老師は？」

「メイヘレンはお礼参りに。エステイは屋台村に食い倒れの旅」

「へー……って、君たち自由すぎる！世界の趨勢がここで決まるかのようなギリギリ限界バトルだったんだぜ！？」

「うるさいわねー、イチイチ私に怒鳴らないでよ」

「まあまあ、ケンイチ」

アリイシャが優しく俺の背中をポンと叩いてくれる。

「勇者が魔王を倒してハッピーエンド。おまけに皆も無事ってことで二重丸だよ」

「あら！若いのにいいことを言う子ね」

「わ、若いって……ボクはキミと大して変わらないよっ」

「ケンイチ、紹介してよ」

「お、おう。彼女はアライシャ。えーっと、武者修行の旅をしている子で俺の命の恩人だ。そんでもってアライシャ、こちらはプルミエル。火の魔道貴族で……」

「命の恩人」

「そう、命の恩人。しかし、自分で言うか……」

「じゃあ、ボク達はケンイチの『命の恩人』仲間だねっ」

「そうなるわね」

「うっつ！何か俺の肩身が狭いつ！」

というようなりとりをしていると、広場の入口に長身の美女が現れた。

「おおっ、メイヘレン！」

俺の呼びかけに、右手をすっと上げて応えたメイヘレンはどこか疲れた様子だった。

「揃ってるね。無事だったか、ケンイチ」

「ああ。あんたは大丈夫だったか？」

「ご覧の通り」

両手を広げて健在ぶりをアピールする。

と、ここで彼女は俺の隣に立っているアライシャの存在に気付いて、首を傾げた。

「おや？可愛い娘がいるね。誰だい？」

「か、か、かわいい？ボ、ボ、ボクがつ？」

や、や、やだな、もうっ！とか言いながら動揺し、赤面するアライシャに俺は……思う存分、萌えた。

「ボ、ボクはアリイシャ。アリイシャ・アルナーチャラム。お姉さんには？」

「私はメイヘレン。メイヘレン・ブランシユール。しかし……『お姉さん』とは……ふふふ、新鮮だね」

……お、俺のことは……『お兄ちゃん』とは呼ばないのか……？

「ラーズの館はどうなったの？」

プルミエルが訊いた。

「ああ。綺麗に掃除してきたよ」

「掃除？」

「『汚物は下水へ』。大事なことだな、うん。というわけで、全部流してきたよ」

汚物？流す？

ワオ、危険な香りのする言葉だ……

「流すって……」

「ん？文字どおりさ。ロクデナシの男達を無力化した後、水の聖霊の力で下水に押し流した」

「下水……？下水には『アンビルカッター』が……まさか……」

眉をしかめて呟くルイーゼさんの言葉で、俺は思い出す。

そうだ、下水の先には高速で回転する刃の水車『アンビルカッター』があつて、脱走者はあそこで切り刻まれるはずだ。

(うお……)

俺は下水に流れていった男達の末路をまざまざと想像し、気分が悪くなった。
くわばらくわばら……
これについては深く考えないようにしよう。

「館にいた女の子達はどうしたの？」

ブルミエルの質問に、メイヘレンの顔色が少し曇った。

「ううん、まあ、どうしようもないしな。故郷に帰るなり、この都市で商売を始めるなり、思うがまま、好きに生きてみなさいとだけ言ってきたよ。まあ、男の庇護の下でしか生きられない女がいるのも事実だ……」

「ふうん」

「大丈夫、女つてのは意外と強い生き物なのよ」

ルイーゼさんが言う。

「あんた達に礼を言うよ。あたし達はようやく、自分で道を選んで自分の足で歩いていけるようになったんだ」

「ルイーゼさん……」

「ケンイチ、あんたもありがとう。あたし、あたしも自分の足で歩いていくよ。自分の足で歩いて、ニナシスに会いに行く。そしてさ、あの娘が許してくれたらさ……もう一度……一緒に……」

言いながらルイーゼさんの瞳からぼろぼろ涙がこぼれ、最後はもう言葉になっっていなかった。

だが、何を言いたいかは皆まで聞かずとも分かる。

「それがいい。ニナシスも喜ぶよ」
「うん、うん」

文句無し。素晴らしい大団円じゃないか？
俺がひたすら感無量に浸っている横で、メイヘレンがプルミエルに二冊のノートを手渡した。

「『勇者研究ノート』とヤッフオン教授の『勇者典範解析書』だ。教授の部屋と思われるところで見つけたよ。ヤッフオン教授本人は見つからなかったがね」

「おおー、グッジョブだね、メイヘレン」

プルミエルはメイヘレンの手からその二冊をひったくり、パラパラとめくっていく。

「ふむふむ、ほー、これは……」

彼女は感嘆の声を洩らし、なおも読み進める。

メイヘレンは苦笑しながら、低く押し殺した小さな声で囁いた。

「ただ、魔王教団のあの男……ゼータ、だったか？私がラーズの部屋に踏み込んだときには、彼はすでに死んでいたよ。誰がそれをやったのかは分からないが……」

「ラーズでしょ。あの男が自分に指図する人間を生かしておくはずがないわ」

プルミエルにはさして驚いた様子も無い。

「うむ。まあ、そうだろうが……ゼータの言っていた『魔王文書』はどこへいったんだろう？全ての部屋を探してみたが、どこにも無

かったんだ。ヤツフォン教授が消えたことと併せて考えると、嫌な予感がするな」

「大丈夫さ！」

釈然としない様子のメイヘレンに、俺は胸を張ってみせた。

「なぜなら魔王は俺が倒したからナ！」

「そうか。頑張ったな」

「……」

な、何だ、その淡白さはっ！

『ガンバツタナ』って……ゾンビハンターかヨ！

チクシヨウ、もういいよ！

俺はふてくされた。

「んで、これからどうするんだ？」

「そうねー、とりあえず豪商連合の連中に特上の豪華馬車を用意させる段取りをつけたから、ゆるゆるジャパテイ寺院跡への旅を続けるわよ」

「ジャパテイ寺院……」

「ん？」

おや？気のせいかな。急にアライシャの顔色が変わったような気がした。

「アライシャ？」

「……」

「おーい？どうしたんだ？」

「へ？あ、う、ううん、何でもないよっ」

「大丈夫か？」

「……ねえ、ケンイチはジャパテイ寺院を目指してるの？」
「お、おお、まあ、一応」
「……」

アリイシヤは何か言いかけて止め、ぐつと俺の肩を掴んだ。

「おお！？」

俺は思わず声を上げた。

だって、息がかかりそうなほどアリイシヤの顔が近くにあるんだぜ！
こちらを真っ直ぐ見つめてくるエメラルド色の美しい瞳が、じんわりと熱を帯びている。

(な、な、なんだ……？)

うお、何コレ！？すごい照れるんだけど！

俺のように、恋人とか彼女とかいう言葉とは二万光年(？)ほど縁
遠い人間にとって、この状況はあまりにも刺激が強すぎるのだ。

「う……な、なんだ……どうしたんだ？」

「ケンイチ、ボクもジャパテイまで連れてってくれない？」

「え……？」

「お願いっ！力仕事でも雑用でも、何でもするからっ」

その必死とも受け取れる懇願にどんな意味が隠されていようとも……

…『お願い』されて断られるワケがない！

よし、わかったあ！

……と言ってやりたいところだが、悲しいかなこのパーティの順列

では、俺は最下位。
与えられた権限は非常に少ない。
よって、俺の一存では決められない……

「プルミエル、メイヘレン、話がある……」

俺は二人にお伺いを立てることにした。

「えーっと、アリイシャと一緒にジャパテイ寺院まで行きたいって
言ってるんだけど、良いかな？」

「良いわよ」

「私も構わないよ」

早っ！

「アリイシャ、いいてさ」

「ホントっ!？」

「おう！」

「やった!ばんざーいっ」

「ばんざーいっ」

妙にテンションの上がった俺とアリイシャは、ランランラとその
場でぐるぐると円を描くように回った。

旅の仲間（しかも美少女）が一人増えたのは喜ぶべきことだし、何
と言っても彼女の活人拳は俺達にとってかなり心強い。

魔王も退治したし、言うこと無しだ。

よし、この調子で『異世界勇者の冒険』にスパートかけるぜ!

「スパークンツ! (Sparking!)」

「?……何それ」

「あー、アリイシヤ、気にしないでいいわよ。彼、たまにそういう感じになるの」

……冷たい視線もなんのそのだ。もう慣れちまったぜ！（涙）

もつと勝手に自分を愛したい（後書き）

くもつ一つのエピローグ）

とつぷりと日が暮れ、月が夜空にポツンと出ていた。

人気の無くなったブナジャラ川岸に、ぽつりと一人、たたずむ影がある。

誰あろう、ヤッフォン教授であった。

彼はせわしなく視線を動かして、川面を観察しているようだった。

（死ぬはずがない……あの男が……）

そう確信していた。

『あの男』というのは魔王ラーズの事である。

この世界の為を考えるのであれば、死んでいたほうが良い。

しかし、それでは彼の中に渦巻いている、飽くなき学究心を満たすことはできない。

ヤッフォン・ダフォンという人間にとつては、その学究心こそが何をおいても第一に優先すべき事項であり、尊重すべき真理であり、世界の全てであった。

もちろん人間らしい感情に乏しいというわけではないが、正義も悪もその前では何の意味も持たないのである。

勇者が世界を救うにしても魔王が世界を滅ぼすにしても、異世界学というジャンルにおいては学術的に同義であるとも考えていた。

そういった極論を、正邪の観念に囚われて煩悶するでもなく、純粹な信念として己の内に抱えている点に、この男の恐ろしさがある。

(死なれては困る……ようやく『魔王文書』を手に入れたのだ……！)

胸にしつかりと抱いた古文書にチラリと目を落とした時。

「よう」

背後から、声がかかった。

「ひっ……」

待ちに待った男の声だというのに、ヤツフォンの背筋は凍りついた。やはり、この男には底知れぬ恐怖……言い換えれば、魔王の資格が備わっている！

「ラ、ラ、ラーズ……い、い、生きていた、か」

「ああ、全く、ひどい目にあっちまった」

そう言いながらも、月明かりに照らされるラーズの顔には大きな笑みが浮かんでいた。

「ケ、ケ、ケミィ・パシャに、く、く、喰われたと聞いたが……」

「ああ。あんなのはもう二度とごめんだね」

「ど、ど、どうやって……」

「なあに、生き物ってのはどんなに図体がでかくてもだいたい同じところに急所がぶら下がってるもんだ」

ラーズの言葉は、ケミィ・パシャを葬ったということを示唆している。

その話ぶりから察するに、おそらく、何の苦も無かったに違いない。

「しかし……出迎えはあんただけか。まったく、殺風景なもんだ」
「お、お、お前ので、て、手下は、ぜ、ぜ、全員やられた……」

ヤッフオンはラーズの館が女　メイヘレンによって襲撃され、壊滅させられた一部始終を二階の自室で見ている。

そして女が二階に上がってくるときに、急いで『魔王文書』だけを抱えて、窓から飛び出したのだ。
一世一代の大脱出だった。

「そうか、俺の館はやられたか」

そう言うラーズの顔に、落胆の色は全く無い。
むしろ、どこか嬉々としているようにも見えた。

(それでこそだ、魔王ラーズ……)

ヤッフオンは目の前にいる酷薄な男を、頼もしくさえ感じた。

「さて、どうするかな？魔王文書にはなんて書いてあるんだ？」

ラーズはヤッフオンの心の内を見透かしているように笑った。

「パ、パ、パルミネ……」

「ほう？」

「ア、ア、『アルヴァンの魔法塔』に行く……」

「よし。そうしよう」

ラーズは詳しいことも聞かずに歩きだした。

ヤッフォンも慌ててその後を追う。

「も、も、もう出発するのか？」

「いや。ゆっくり行くさ。急ぐ旅でもない。ただ、『魔王タイム』を稼がせてくれるような女を調達してこようと思っただけ」

調達、という言葉はこの場合、誘拐や強奪を意味する。

ラーズが喜色を満面に浮かべながら、ぞり、と顎を撫でた。

「長旅を退屈させない女でないと。五、六人もいればいいかな……？」

「そ、そ、そんなに……？」

「うん？ けっこう少なめに見積もったつもりだったんだがな」

「……」

二人は夜の貿易都市に消えていった。

勇者の辿る道？

俺達はベデヴィアに一泊し、出発は次の日ということになった。

そして、朝。

「これが馬車……」

俺は目の前にある乗り物に唖然とした。

いや、乗り物と言うより、建物と呼ぶ方がいいかもしれない。

十人ほどは乗り込めそうなほど大きな、白い、玉ねぎのような形をしたドーム。

それに馬が三頭、おまけでくつついてる感じだった。

「これって、完璧におとぎの国の馬車だぜ。俺の世界では大抵カボチャだったけど」

「はん、普段ならてめえらのような平民の乗れる馬車じゃねえ。このクソガキが……」

俺の隣に立ったオッサンが、機嫌悪そうに言う。

何怒ってるんだ。カルシウム摂れよ。

とりあえずクソガキ発言が気に入らなかったので、向こうにいるミスmana様に報告しよう。

「プルミエル、この人が何か言ってるー」

「げえっ!?!」

「んっ?何を?」

「な、な、何でもございませぬ。皆様に相応しい、最高の馬車を」

用意させていただきました、と、そう……」

「あ、そう」

「へ、へい……」

おおっと、プルミエルに対しては驚くほどの腰の低さだ。

よほどこっぴどく懲らしめられたに違いない。

でも、世の中そんなものだよな。

より良い明日を目指して強く生きてほしい。

俺は心の中で優しくエールを送りながら、玉ねぎに乗りこんでみる。

「うおお……すげえ」

玉ねぎ内部は想像通りの広さだった。

落ち着く深いブラウン色の、革張りの内装。

天井からは小さいが高そうなシャンデリアが吊下がっている。

部屋、と言っていていいか分からないが、その中心には大きな円卓があ

り、それをソファアがぐるりと囲むような形になっていて、かなり

座り心地がよさそうだ。

大きな窓も四方についていて、採光も眺めも抜群。

これなら長旅も全く苦にならないだろう。

「すごい玉ねぎだ……」

「どれどれ、ほー、これはいいね」

「うおう！メイヘレン！」

いつの間にか背後にいた彼女は、俺の肩に顎を載せるようにして室内を見渡し、満足そうに頷いた。

ち、近い……必要以上に……

金縛りに硬直する俺の横をすり抜け、メイヘレンはソファアに腰を下ろした。

「座り心地もいい。うむ。気に入った」

「お、思った以上に広いよな」

「そうだね。今までは船舶メインだったが、今度はこういう陸運をプロデュースするのもいいだろう」

そう言いながらも、しどけない姿でソファァーにゆったりともたれかかるメイヘレン。

(うお……)

何とも悩ましくも艶めかしい光景だ。

こちらの視線に気付いたメイヘレンは、ふふんと挑発的な含み笑いを浮かべる。

それがあまりにもエロい雰囲気を持っていたので、俺は思わず鳥肌が立った。

この女……サツキュバス……

「おおー、広いじゃん!」

「うおっ!」

突然の背後からの声に、俺は思わず悲鳴を上げた。

しかし、今日はバツクアタクばかり受けるな……

「あ、アライシャか……」

「なんだよー、そんなに驚くことないじゃん。うわ、すごいねえ。なんだかボク達だけで使うのがもったいないねっ」

目をキラキラさせて車内を見渡すアライシャ。

その無邪気さが、さっきまでの俺の邪気を丸ごと洗い流してくれる

ようだった。

「窓も大きくていいねっ。あ、メイヘレンさん。おはようございまーす」

「メイヘレン』さん』はやめてくれ。旅の仲間だ、呼び捨てで構わないよ」

「ええっ、いいの？……うーんと、じゃあ、遠慮なく……メイヘレン、おはよう！」

「おはよう、アライシャ」

アライシャを見てると、物怖じしないってのは長所だと思う。

本人の許可なしにタメ口つてのは無礼千万だが、この場合は全く問題無しだろう。

「みんないる？」

「おおっ、プルミエル先生。全員、揃っております」

「ふ、点呼でもするかね？」

「じゃあボク一番っ！」

「二番」

「三番！先生、全員いるようです」

「エステイ老人がいないじゃない」

おっと、そっぴや忘れてたぜ。

昨日の夜は散々だった。

俺はあの老人と同室だったが、いびきと歯ぎしりがうるさすぎて寝られたもんじゃなかった。

おまけに「ダイバーはいつまで続くんじゃ……ダイバーは……」とかいうワケの分からん寝言も連発してた。

（これから長旅になるとアレをまた聞かされる羽目になるのかなあ

……)

俺は嫌気がさした。

どこの深海に潜ってるんだか知らんが、『勇者タイム』のせいで睡眠時間を確保することが困難な俺にとっては、レムだろうが何だろうが、睡眠の一分一秒さえ惜しいのだ。

「どっか徘徊してるんだろ。いいじゃん、置いてこうぜ」

「そうね。置いてこうかしらね」

「構わないよ、私は」

「ええーっ！？みんな冷たいっ！？」

アリイシャだけが大声を上げた。

素直ないい子だな。

「よっと、ふう。おまっとさん」

おお、老師！なんてタイミングなんだ。

「朝のお通じが悪くてのう……」

き、聞いてねえヨ！

老人はすぐにソファに腰掛けると、ぐるりと車内を見渡して、「まあまあじゃな」とか「思ったより悪くないのお」とか「まあ、乗れるかな」などという、やや上から目線な発言を連発した。

「ん？ケンイチ、何じゃその目は？ははーん、わしに何かを期待してるな？確かに、この旅はエステイアンドリウス抜きでは到底無事に終えられなくて」

「いや……」

「じゃが、安心せい。このわしがおるからには、この旅はよりスペクタクルとロマン溢れるものになること請け合いじゃ」

そんなの誰も期待してない……

とは思いつつも、俺は黙って頷いてやった。

「老師、期待してるよ……」

「うはは！シャバイ若造めが！ところでまだ出発せんのか？」

「あんたを待ってたんでしょーが、もう」

しれっとブルミエルが言う。

嘘つけえ！置いてく気満々だったくせに！

だが、そうとは知らずに鼻の穴をふくらませてテンションを上げる老師。

「おお、そうか。そうじゃのう。ま、女を待たせるのは色男の宿命
よ」

その勘違いが、いつそのこと可哀想！

俺達が哀れみに満ちた視線を送ったところで、窓の外から一人の青年がひよっこりと顔を出した。

「あの一」

「うおう！びつくりした！」

だ、誰だ！？

「もう出発してもいいでしょうか？」

「あ、ちよい待ち。紹介するわね。彼、御者を務めてくれるイグナツィオくん」

「どうも」

そう言つて頭を軽く下げて会釈する、驚くほど色白な美青年。高い鼻、ブルーの瞳。

日に透けるような金髪といい、どこから見ても御者でなく王子様つてな感じた。

(白色人種め……)

俺は彼のルックスに軽い嫉妬を覚えた。

「で、出発していいんですか」

表情を全く変えずに、イグナツィオが聞く。

イケメンはイケメンなんだが、その様子はどこか茫洋としていて、掴みどころがない感じだった。

声には抑揚が無く、表情からは感情の起伏が読み取りづらい。

そのせいで、なんだか無気力そうにさえ見えた。

「待ちたまえ。こっちの自己紹介は聞かないのかね？」

メイヘレンが少し意地悪な笑みを浮かべて言う。

それに対してイグナツィオは、首を少し傾げてみせた。

「はあ……聞かないといけないんですか」

なごご……

(ど、どんだけ無礼だよ……コイツ……)

俺は思わず呆れてしまう。
無気力、無感動、無関心……典型的な今時の若者だ。

「でもさ、せつかくこれから一緒に旅をするんだからさ、お互いに挨拶しておこうよ。ね？」
「じゃあ、そっちからしてください」

アリイシャのフレンドリーな歩み寄りさえも無碍に斬り捨てる、戦慄のイグナツイオ。

無碍・ゾルバドス……

だが、奴には悪びれた様子も無い。
俺はたまらず口を開いた。

「おいおい、そういう言い方は無いだろう」

「ん？誰です？」

「俺はジン・ケンイチ！」

文句があるならかかって来い！という具合に俺は胸を張ってみせた。

「……」

イグナツイオはぼんやりとした顔はそのままに、俺をじーっと見つめ、やがて何かに納得したように頷いた。

「なるほど、あなたがケンイチさんですか」

「？」

「へえー、なるほど。あなたとは仲良くできそうですよ」
「な、なんだ？」

『俺とは仲良く』って、どういうことだ？

「ボクはアレイシャ。よろしくねっ」

「メイヘレンだ」

「わしの名はエステイアンドリウス。敬意をこめて『老師』だの『尊師』だのと呼ぶがいい」

「どうも」

他の面々へは、実に淡白な対応をかましてみせるイグナツィオ。分厚いATフィールドだ。

「もういいかしらね。じゃあ、イグナツィオ、馬車を出すよーに」
「わかりました」

ブルミエルに命じられて、イグナツィオは軽く頭を下げて姿を消す。その時、奴は去り際に、意味あり気にこちらへ流し目を飛ばして来た。

「……………」

「……………？」

俺は首を傾げる。

(な、なんだ？さつきから、あいつめ……………)

なんだか不思議な雰囲気を持っている奴だ。

「ずいぶんと愛想の無い青年だね」

メイヘレンがソファーにもたれかかって、溜息をつく。

「あんなのに御者を任せて大丈夫か？」

「ま、大丈夫だと思うけど」

「照れてるだけかもよ？初対面だもん、緊張もするよね？」

「アライシヤちゃんマジで天使みたいな娘じゃのお。わしゃ、あ
あいう礼儀知らずな若者は嫌い」

と、ここでゆつくりと馬車が動き始めた。

「おおっ、動いた！」

「うわあ、なんだかわくわくするねっ！」

「俺達の新たな旅立ちだっ！行き先はトウモロロー！」

「はい、そこ、テンション上げ過ぎないように」

ブルミエルが俺達の熱狂に水を差す。

なんだかクラスの委員長みたいだ。

「まず、これからの旅の行程を説明するからよく聞いて」

彼女は円卓の上に地図を広げた。

「ここが現在地、ベデヴィアね。そして、南へ下っていくわ。『サ
スの森』、『カーントの渓谷』、『シヨジャイの保存集落』を抜け
れば『チャペ・アイン』に入る。後は目的地の『ジャパティ寺院跡』
まですぐに着くわ。予定の日数としては大体七日くらいかしら。オ
ーケイ？」

「ん？待ってくれ。『カーントの渓谷』を出てからは、『ラワン・
デラン街道』を抜けていった方が近いんじゃないか？」

「ところがどっこい」

メイヘレンの指摘に、ブルミエルはふふんと鼻を鳴らしたかと思う

と、机の上にドン、と分厚い本を載せた。

「何だ、それ？」

「『勇者典範』」

「お、おおっ！こ、これがっ！あの、勇者について詳しく書いてあるという……！」

俺は思わずエキサイトした。

「そうよ。ここには、勇者が自分の世界に帰る為のヒントが隠されているわ。まあ、ヒントといっても嫌がらせとも思われるくらいに断片的な情報しか書いてなかったんだけどね」

「ど、どうやったら俺はもとの世界に帰れるんだっ？」

「それはまだ分からないわね」

「え、ええっ!？」

「ちよっと、話聞いてた？断片的にしか書いてないと言ってるでしょーが。もう」

「お、おお、そうか……」

「結局、私達はこの『勇者典範』を参考にしつつ、『ジャパティ寺院跡』に行くしかないのよ」

うおお、じれったいぜ。

だが、『とりあえず』ジャパティを目指していた頃から比べれば、大きな前進と言えるだろう。

そこへ行けば、間違いなく何かが分かるというのだから。

「で、『勇者典範』には『シヨジヤイの保存集落』を通れと書いてあるのかな？」

メイヘレンが訊いた。

「そう。そこに『勇者たる証』が隠されているらしいわ。それを持つていなければ、ジャパテイ寺院に行っても意味が無いみたいね」

「『勇者たる証』？」

「そうとしか書いてないわ」

「一体、何じやるう？」

「うーん……聖剣とかかな？」

「ベタねー」

「モノとは限らないんじゃないか？」

「うーむ……」

「ま、こればかりは考えても仕方ないわね」

確かにプルミエルの言うとおりだ。

案ずるより産むが易し。

(なるようになるさ……)

ガタン、ゴトンと穏やかに揺れながら、馬車は森へと入った。

森 ミツコ

「ケンイチ？ケンイチ君や？」

突然、気持ち悪い声を出したのはエステイ老師だった。

（嫌な予感がする……）

俺は身構えた。

この人がこういう声色を使うのは大抵ロクでもないことを俺に押しつける時なのだ。

「何スカ」

「勇者タイムの具合はどうじゃ？」

俺はちらりと勇者タイマーを確認してみた。

『25:14』

「まだ大丈夫ッス」

「ならん！」

「う、うお……」

「見せてごらん！？ホラぁ！もう35分も減っちゃってるでしょオ
が！樂觀もほどほどにせい！」

エステイはカツと目を見開き、突如として気がふれたかのようにわめき散らす。

哀れな老人の内面に何が起きたのか、俺には知る術もない。

「で、その勇者タイムをチャージするためにわしが用事を言いつけてやる。喜ぶがいい」

まあ、そんな事だろうと思ったぜ。

「何スか」

「昼飯じゃ」

というわけで、俺は木の枝に穂先を括りつけただけの貧相な槍一本を持たされて、薄暗い森の中を獲物を探して徘徊するハメになった。駆け出しのモンスターハンターでももうちょっとマシな格好をしているはずだ。

しかし、生き物の生命をむやみに奪うというのは勇者的にどうなんだろう？

清廉潔白な勇者の中の勇者を目指すのなら、精進潔斎をして、肉や魚といった動物性のタンパク質を取らないような修行僧めいたエコロジカルライフを送らなくてはいけないのではなからうか。

(いや、そもそも何で俺一人で……)

だんだんムカつぱらが立ってきた。

ちなみに、馬車を止めて狩りに行く旨を伝えると、御者であるイグナツイオは

「そうですか」

とだけ言って、あとは知らん顔だ。

「一緒にどうだい」
「あ、お構いなく」

そういう意味で言ったんじゃねえヨ！

別にお前に対して何らかの気を使って誘ったワケではないんだがなでも、こんな線の細い奴を連れて行ってもどうしようもない気がしたので、俺は一人で行くことを決めたのだった。

(しかし、何の気配も無いな……)

そもそも何を獲ればいいのか。

魚は森にはいないだろうし……鳥類か？

あまり大きな獣は俺の手に余る。

俺が色々と思案を巡らせながら野道を散策していると、木々の向こうで、バキバキッと何かの小枝を踏みしめる音が聞こえた。

(おおっ、何かいる！)

少しテンションが上がる。

俺は低い姿勢で音のする方向へ走った。

相手はすぐに見つかった。

茂みの中をもぞもぞと蠢く影。

それは俺の背丈の半分ほどしかない、小さい熊だった。

熊は茂みからちょこんと顔を出して、フンフン鼻息を荒くしながら、周囲を飛び回る羽虫とじゃれているようだった。

(か、可愛いな……)

その愛らしい姿に俺は完全に毒気を抜かれてしまった。

あんな生き物を食べるなど俺にはできない。
そんなことができる奴は人間じゃねえ！

熊さんの平穩を乱してはいけないと思い、俺はその場を離れようと立ち上がった。

「フゴッ?」

「お、おおっ」

敏感に異変を察知した熊と目が合ってしまった。

そのつぶらな瞳が、俺をじっと見つめてきた。

うつつ、なんて可愛らしいんだ。

俺も思わずニヤけながら熊を見つめた。

と、その時。

「フーツ！フーツ！」

突然、熊の鼻息が荒くなり始め、その瞳が凶暴な光を宿してギュッとつり上がった。

(な、なんだ……?)

さらに驚いたのはその後だ。

なんと、メキメキと音を立てながら、熊の身体が瞬く間に肥大していき、あれよあれよという間に俺の身長の数倍ほど膨らんだのだ。牙が口から突き出し、恐ろしく尖った爪も肉球から飛び出す。

(モ、モンスターだ……)

俺は完全に臨戦態勢となったその熊を見上げて、呆気にとられるしかなかった。

さっきまでリラックマだったのに！
今はもう、『100%中の100%』って感じた。

「ゴルア！」

牙獣は短く吠えた。

うおう、おつかねえなあ。

だが、不死身の俺に出会っちゃったのが運のつきだ。

ここはおとなしく俺達の昼飯に……とここで熊って食べるのかな？
俺はとりあえず、牽制するつもりで手に持った槍を熊の方へ突き出
してみる。

「せい」

「ゴルア！」

熊がそれを払いのけようとして、丸太のように太い腕を振るう。

バキヤツ！

小気味良い音がして、槍はいともあっけなく穂先からへし折れた。

「あ・お・お・お……」

今……全てが終わった……

俺は戦慄した。

この熊の腕力が凄いのか、槍が脆いのか。

ともかく、これで狩りは終了だ。

不死身とはいえ、素手で熊を殺す手段を俺は持っていない。

マス大山ならできるかも知れんが、俺は無理。

キノコでも採集して帰ろう。

「ゴルア！」

「悪かったよ、クマさん。今は君を試しただけだ。結果は合格だよ、文句無し。おめでとう、そんじゃ元気です！」

なんとかいきり立つ熊をなだめすかしながら、俺は一步步後退してみる。

だが、熊もバカじゃない。

肉食獣の鋭敏な狩猟本能でもって、俺との距離をじりじりと詰めてくる。

うう、頭の二つや二つ（一つしかないけど）カジらせてやらんと駄目かな？

俺が悲壮な決意を固めた時だった。

「ゴルア！？」

熊が大きく嘶いたかと思うと、こちらに向けてヨタヨタと前のめりによるけた。

な、何事だ？

見ると、なんと、その背中に大きな槍が深々と突き刺さっているではないか！

「おおっ！？」

俺が驚きの声を上げるのとほぼ同時に、木陰からさらに二本の槍が飛んで来て、その全てが熊の巨体に突き刺さった！

「ゴルルアアアアアアア！」

熊は大きく天に向かって断末魔の叫びを上げると、そのままズシンと大地を揺らして倒れ、動かなくなる。

俺は馬鹿みたいに茫然と立ちつくすことしかできなかった。

「な、何が起きたんだ……」

俺の問いに答えるようにして、木陰から五つの影が飛び出した。

「おおっ!？」

「ん?なんだ、小僧か」

五人はそれぞれが中世の騎士のように立派な鎧を身にまとっていた。身体を動かすたびにガシャガシャと金属音が鳴る。

「小僧だな、どう見ても」

「なぜ、こんなところに小僧がいる?」

「怪しい奴だな」

顔を全面覆う兜のせいで、その表情は全く窺い知れないが、彼らはどうやら俺を怪んでいるようだ。

「ま、待って下さい、俺、怪しい者じゃありません」

「怪しいヤツは皆そう言うんだよな……」

「隊長、どうします?」

「連行しよう。この小僧が何であれ、アガシ様の退屈を紛らわせるネタにはなるかもしれん」

「ええっ!?!いや、ちよっ、待って……」

慌てる俺の腕を両サイドから二人の鎧騎士が掴み、逃げられないように拘束される。

「待つて下さい！俺、ベデヴィアから馬車で来てですね……今は昼飯を捜して彷徨ってただけで……」

「言い訳はボスの前でするんだな」

「ちよ、なにをする、やめ……う、うおおおおっ」

俺は為す術も無く、森の奥へと男達に連行されていった。

暴虐のダーク・エルフ

鎧男達に左右から両腕を掴まれ、無理やり連行されていったのは、森の奥だった。

木々が急に少なくなったかと思うと、突然開けた場所に出て、俺はそこにいくつも設置されたテントの中の一つに放り込まれた。両手を頭の上に乗せたまま跪かされ、しばらく待て、と言われて一人にされる。

脱出の隙が無いかと背後をチラリと確認してみるが、天幕の向こうに監視の兵士が二人立っているのが見えた。

うーむ、逃亡は困難だろうな……

しかし、そもそもここは何だ？

外に馬が何頭もつないであったし、ここに連れてこられるまでに何人もの鎧騎士を見かけたので、ここがどこかの軍隊の駐屯地らしいということは何となく分かった。

(いや、軍隊って……)

なんだかエライことに巻き込まれそうな気がして、俺は生唾を飲み込む。

昼飯を探しに來ただけだったのに……

(おおっと、いけねえ。そう言えば、勇者タイムは……)

あちこち撫でまわされて危険物を持っていないかを確認されはしたが、手を拘束されなかったのは幸이었다。

俺は左の手首をチラリと確認する。

う・あ・あ・あ……これはマジでヤバい！

このままでは死んでしまおうゾ！

だが、どうすりゃいい？

天幕の向こうの兵士に「何か困ってませんか？」と聞くのも不自然だし……

(な、何か、誰か……)

俺はパニックに陥った。

と、その時、外がガシャガシャとうるさくなる。

兵士達が動きまわる音だろう。

ひとしきりガシャガシャ鳴ってからピタッとそれが止まったので、

ははあ、整列したんだなというのがなんとなく察せられた。

そして、声が響く。

「アガシ司令！ご報告がございます！警戒探索中の部隊が不審者を一人連行してまいりました！」

おい！俺は不審者じゃねえヨ！

と叫び返してやりたかったが、寝た子は起こすのが俺の流儀。

日本人ならではの自制心でもって、ここはぐつと耐え忍ぶ。

それから二言三言、こっちは聞こえない程度の声で何か話しあっていたようだが、すぐに天幕の中に鎧騎士が一人、駆け込んできた。

「アガシ様がお会いになるそうだ。くれぐれも御無礼の無いようにな」

「誰です、アガシって？」

「おい、こら、いきなり呼び捨てにする奴があるか、バカモン」

こつんと俺の頭を軽くゲンコツで叩くと、鎧騎士は耳もとに顔を寄せて来て囁いた。

「いいか、アガシ様は恐ろしい方だ。ご機嫌を損ねるなよ」

「え、マジツすか……やだなあ、怖いのだ嫌ですよ、ああ、もう……」

「そんな顔するな。へたに齒向かわなければ、悪いようにはせんだらう。だから、おとなしくしておれ」

「さっきから超おとなしくしてますって。あのおう、もう帰してもらえないツスカ」

「それはアガシ様がお決めになる事だ。あの方は目が利くんだ。ハイエルフだからな」

「エルフ！」

俺は思わず叫んでしまった。

エルフって、よくファンタジーに出てくる、あのエルフ!?

おまけにハイ?

「ワオ、すげえ……」

「いいか、妙な真似はするなよ」

「……はあ」

鎧騎士が出ていき、いよいよエルフ様とのご対面。

エルフといえは説明するまでも無いだろうが、金髪サラサラの超美形、おまけに上品で聡明なんていうイメージが皆にもあると思う。

俺もそうだ。

それにツンデレだのクーデレだのといった属性がつけば、もう、エライことだ。

(うお、緊張してきた。生エルフ……)

その瞬間に向けて、高まる期待。
すると後ろでばさつと天幕が捲り上げられる音が聞こえ、人間が複数入ってくる気配がした。

エルフ か！？

だが、いきなり振り向くような無粋な真似はしない。
俺はとりあえず体勢はそのまま、泣きつくような声を出してみる。

「あの、俺は不審人物じゃないんですよ。俺はベデヴィアから来た旅行者なんです。森の中で偶然、こちらの方々と出くわしてしまっただけで」

「……」
「そう、全ては邪なる天の配剤。不幸にして交わってしまった二つの宿星が、今、世界に大乱をもたらす　なんて、俺、何言ってるでしょうねえ、ハハハ」
「……うるせえな」

げしっ！

「じあー！」

容赦無い不意打ちの打撃が俺の後頭部を襲い、俺は頭に手を乗せたまま地面に顔から突っ伏した。

「うつつ、い、いきなりなんてことを……」

俺がヨレヨレと顔を上げると、目の前には一人の大女が腕を組んで仁王立ちしていた。

腰まで届くほどの黒髪に、日焼けした肌。
顔立ちは超がつく美人なのだが、きりつと吊り上がった太い眉と俺
を見下ろす切れ長の瞳が、強気そうなこの女の性格を代弁している
ようだった。

彼女が身に纏っている、肩や肘の部分がピンと張った、旧ドイツ軍
のような鋭角的なフォルムの漆黒の軍服も、実に剣呑で、高圧的な
オーラを放っている。

耳、耳はどうだ？

おおっ、ちゃんと尖ってる！

輪郭の両端からにゅっと黒髪を割って突き出ているその長い耳は、
紛れも無くエルフの証！

だが、俺の抱いていたエルフのイメージとはかなりベクトルが違う

……

「あ、あのお……」

「何モンだ？」

鋭い殺気がビシッとこちらに突きつけられる。
うお、こ、怖え……

「名乗りな」

「俺はケンイチ……」

「こら！」

「うお！」

背後に立っていた兵士が、俺に大喝を入れた。
いきなり大声出すなよ。
びっくりするなあ、もう。

「このお方は『ムウサ辺境監督司令部』の筆頭司令、アガシ様だぞ

！敬意をもって答えんか！」

「け、敬意って？」

「語尾に『サー』をつけんか！ほれ、もう一回！」

サーって卓球少女じゃあるまいし……

だが、背に腹は代えられん。

「自分はジン・ケンイチであります、サー」

「ジンケンイチ？珍しい名前だな」

「まー、よく言われますね」

「サー！」

「サ、サアーツ！」

「まあ、いいや。ケンイチか。覚えてたぞ」

そういうと、アガシ司令は俺の前に椅子を引いてきて、どっかと腰を下ろした。

「で、ケンビシ」

お、覚えてねエじゃん！どこの清酒だYO！

だが「ケンイチです」と訂正することなど俺にはできない。

この場はとりあえずケンビシでいいや。

「何ですか、サー」

「……お前、何か芸はできんのか？」

「ゲイ？」

「何かやってみせろ」

「……は？」

俺はサー・アガシの突然の無茶ブリに一瞬、思考が停止した。

「は？じゃねえ。さっさとしゃがれ」

アガシが長い脚を伸ばして俺の顔をげし、と軽くこづく。

「う、でも何をすればいいんです？……サー」

「何でもいい。面白ければな」

ニヤリ、とその美しい顔に浮かぶ意地の悪い笑み。

当惑している俺を嘲笑っているのか、俺の爆笑ネタへの期待か。

いずれにしろ、何かしないことにはこの場を穩便に切り抜けることは不可能そうだった。

やむを得ん。

俺は立ち上がり、さて、何をしようかといろいろ思案を巡らせた。

(アレだな……)

まずはジャブだ。

俺は身構えて

「ゲッツ！」

「……」

「……」

「おひさしブリーフ」

「……」

「……」

駄・目・だ。

やればやるほど雲行きが怪しくなっていく。

まあ、確かに俺の世界でもこれで爆笑がとれるかという疑問では

あるが。

ケツの谷間に冷や汗が伝った。
スベった芸人というのは皆こんな思いをするのだろうか。

「おい、どう思う?」

アガシが不機嫌そうに俺の背後の兵士に聞いた。

「はっ! まったく面白くなかったであります! サー!」

「だよ。残念だったな、ケンビシ。おい、さっさと連れ出して適当なところで首を刎ねろ」

な、なんつー暴虐!

この女、ファシズムの申し子か?

俺は恨みがましい目でアガシを見つめた。

エルフって、もっとこう、上品でおしとやかなんじゃないの?

そんで、線が細くて……

まかり間違っても、俺の『心のエルフ』(?) はこんなゴッド姐ちやんではない。

(あ……)

アガシがこつちを睨み返してきたので、目が合わないように少し足元に視線を落とした時だった。

(靴紐……解けてる……)

ゴツイ編み上げブーツの紐が、右足の方だけ解けていたのだ。
僥倖というべきなのだろうか。

俺はふう、と一息を吐いてから、チラリと勇者タイムを確認して

みる。

『01:28』

おう、もう躊躇っている時間は無いぜ、ケンイチ。

Do It! (やれ!)

「うおおおおおっ!」

「な、なにっ!?!」

俺は勢いをつけてアガシの足元に飛び込んだ。

「てめえ!何しやがる!」

「貴様!アガシ様に何を!?!」

大きな靴底がげしげしと俺の頭を何度も力いっぱい踏みつける。

だが、不死身の俺はそんなストーンピングもCHARA-HEAD-

CHARA。

頭上の喧騒に構わず、無心に靴紐を手に取り、素早くチヨウチヨ結びにした。

よし、完璧!

勇者タイムは?

『59:58』

こっちも完璧。

「ぐへあ!」

安心したところで、背中にドン!と衝撃を受け、倒れ込んだ俺の上

に凄まじい質量を持った物体がいくつも覆いかぶさってきた。

「な、な、何だ!?!」

「この小僧!アガシ様!ご無事でしたか!」

「お、おう……」

「くそ、なんてガキだ!」

おお、なんてこった。

俺はテントの中に殺到してきた兵士達によって五体を地面に押しつけられていた。

「小僧!アガシ様に何をするつもりだったんだあ!」

「暗殺か!?!暗殺者なのか!?!」

「いや、靴紐がですね、解けていたので、結んであげたんですよ。他意は無いツス!サー!」

「く、靴紐だと……」

兵士達が絶句した。

な、なんだ?

「靴紐が何か……?」

結び方が悪かったとか?

「我が国では男が女の靴紐を結ぶのは、求婚の証……」

「え!?!」

「まさか、この小僧……最初からそれが目的で?」

「ち、ち、ち、違いますっ!し、し、親切心からっ!決して邪な気持からではない!そんなバカな!」

「いや、しかとお前の気持ちは受け取ったぞ、ケンビシ」

意地悪な笑みを浮かべて、アガシが俺の顔を覗き込んできた。
うっ、美人は美人なんだが……

「目が高いな、ケンビシ。アプローチも情熱的だったぜ。今のは面白かった」

言いながら、アガシの尖った靴の先が俺の顎にグリグリと押しつけられる。

「だが、アタシはそんな安い女じゃねえ。いきなり現れた小僧に操を捧げるほどウブでもねえ」

「そ、そうでしょうとも……サ……」

「それでも、ケンビシ。どうしてもアタシが欲しいってんなら……」

いや、いい、いらない……

「力づくでアタシをモノにしな」

そう来ると思った！

「いや、あの、そんなつもりじゃなかったんです。どうしても靴紐を結ばなければいけない理由があったんです。えーと、そう、俺、靴紐が好きなんですよ。靴紐・フエチ」

「うるせえな」

「うっ」

アガシは必死の言い訳を展開する俺の顔をげし、と踏んだ。

「表に出な。てめえの真意はともかくとして、アタシに勝ったら自

由の身にしてやるぜ」

彼女は身を翻すと、振り返りもせず、テントを出て行った。俺を抑えつけている兵士の一人が溜息を洩らす。

「あーあ、お前、バカなことしたなあ。アガシ様は細剣の使い手なんだぞ。凄腕なんだぞ」

「細剣ツスカ……」

「おまけにあの方はハイ・エルフ。『虚影の邪眼』もある」

「コエーノジャガン？何スカ、それ？」

「見りゃあ分かるよ。でも、穴掘るの面倒くさいなあ」

「穴？」

「お前の墓穴だよ。最低でも3mは掘らないと、後で臭ってくるからなあ」

「そういう生々しい話はやめてくださいよ……」

この会話の間にも、俺の身体は兵士達に担がれ、外へと運び出されていた。

まんじゅう じわい

「こんな森の中だ。一つや二つの酔興が無いとやってられねえだろ
う?。」

俺の前に立ったアガシが、お楽しみを目の前にした子供のような顔
で言った。

ヒョン、と振るった細剣が、宙に銀光の弧を描く。

「頭でっかちのジジイどもに命令されて、こんな辺境に押し込めら
れて、もう二カ月。二カ月だぜ? 全く、やってられねえ。」

ヒュヒュン! とさらに細剣が風を切る。

彼女の目には、どうやら憎むべき敵 頭でっかちのジジイども
が見えているようだった。

「それは、大変でしたねえ……サー。心から同情します。でも、自
分は本当にただの旅行者なんです。」

「駄目だ駄目だ。てめえ、タマついてんのか? 求婚までしといてト
ンズラか? アタシに恥をかかせようつてのか?。」

その切れ長の目から発せられる光が、全く退く気が無いことを伝え
る。

ああ、エライことになったもんだ……

俺は途方に暮れて、天を見上げた。

一面に広がる青い空が、俺の心を少しだけ落ち着かせてくれる。

(だが、まあ、相手が悪かったな、サー・アガシ……)

不死身の人間をどうやって殺すことができる？

答えは不可能、そう、不可能なのだ。

間違いなくこの勝負は俺が勝つ。

(しかし、問題はその後だ……)

ヘタに勝ったら、このゴッド姐ちゃんを嫁にしなればいけないフラグが立っちまう。

俺は目の前に立っているコスプレイヤー然とした軍服女を見つめた。

(……どうだ?)

自分に問うてみる。

粗雑で高慢ちきな女ではあるが、黒髪でエルフで、おまけに美人だ。

(なあ、悪くないんじゃないか?)

と言うブラック・ケンイチと、

(ダメダメ、女にうつつを抜かしている場合か?)

と言うホワイト・ケンイチと、

(『一晩だけの嫁』って手もあるぜ、フヒヒ……)

と言うピンク・ケンイチの間で、俺は悶々と葛藤した。

「何をじろじろ見てやがる。どうだ、そろそろ始めようぜ?」

アガシがもう待ちきれないといった様子で、目を光らせながら言った。

本当に危ない女だな……やっぱり嫁にするのは考えものだ。

「武器は何を使う？好きな得物を使っていいぞ」

「武器はいりません、サー」

「何？」

おっと、怖い目だ。

「俺は誰も傷つけないんです」

「誰も傷つけないでどうやって勝負になるんだ？」

「うーん、何て言えばいいんでしょうねえ……あなたは俺を傷つけられない。俺にもあなたを傷つける意志が無い。だから、決着なんてつかないんだ。それなら武器は使う必要が無いってことで……」

「……アタシをバカにしてるのか？」

「いいえ、バカになんてしてないツス。でも、俺を攻撃すれば分かります。不死身なんです」

「意外にムカつく野郎だな、ケンビシ」

額に青筋立てて、アガシが言う。

「この場面で言うには笑えねえ冗談だ。場合によっちゃ軽く痛めつけるだけで許してやろうと思ってたが、気が変わったぜ」

彼女は細剣の切っ先を俺の喉元に突き付けた。

「泣いて許しを乞いな。そうしたら助けてやる」

おおっ、そうすればいいのかな？

そうすれば、すぐに解放してもらえるかもしれない。

できるだけ惨めだったらしく泣き喚いて、ごめんなさい、もう許して下さいって言えば、それで終わりにしてくれるんじゃないか？

そうしろ、それがいい、今すぐそうしたほうが良いぞ、ケンイチ。

「イヤだね」

思いとは裏腹に、俺はアガシに正面切って反発の言葉を口にしていった。

ああ、まったく、どこまでも俺の邪魔をする男のプライド。

「斬りたきゃ斬れ。突きたきゃ突けよ。でも、俺は倒れないぞ。力づくで脅されたって、俺は絶対にあんたに頭を下げねーぜ！」

おおっ、と俺とアガシを取り囲む兵士達からもどよめき上がる。絶対に状況が悪化すると分かってはいても、言わずにいられなかった。

一寸の虫にも五分の魂。

公衆の面前でバカにされて黙っていられるほど、俺は大人じゃない。権力を傘にきて威張り散らしているような女に下げる頭もない。

アガシは俺の言葉に一瞬、面喰ったようだったが、すぐに怒りの感情に駆られて、尖った耳の先まで顔を真っ赤にして震えた。

自分の部下達の前で公然と俺のようなガキに怒鳴られたんだから、まあ、当然の反応だ。

「もういい、よっくわかった。死にたいってんなら殺してやるぜ、ケンビシ」

「ワオ、お手柔らかに、サー」

「うるせえ」

アガシが素早く手首をひねりこむと、いとも簡単にズン！と俺の胸に剣先が食い込んだ。

かわそうとか、よけなきゃとかいう考えが整う暇も無い。

その迅速な動きだけで、この女がかなりの使い手だということが素人の俺にも分かった。

だが、こっちも普通の人間ではない。

「あふうっ」

不死身の身体に痛みは感じなかったが、ちょうど乳首の先端が刺激されたので思わず艶っぽい声が口を突いて出てしまった。

「？」

アガシの顔に怪訝な色が浮かぶ。

確かに今の一撃なら、一般人は心臓から血を噴き出しながらもんどりうって倒れていただろう。

「……………てめえ、その服の下に何か着込んでやがるな」

「いや、タネも仕掛けも……………」

言いかけたところで、今度は耳に何か当たる感触があり、一瞬遅れて鋭い刃風が俺の髪を揺らした。

「うお」

どうやら俺の右の耳をそぎ落とすつもりだったらしい。

だが、どこまでいっても不死身のこの身体。

アガシの振るった細剣はその目的を果たすことができず、競馬場のおっさんが耳に差している赤ペンのように俺の耳に引っかかっただ

けだった。

「!?!」

アガシの目が驚きに見開かれる。
生身の部分を狙っても、なお刃を跳ね返すこの俺の魅惑のボディに驚愕しているのだろう。

「てめえ、メタルか!?!」

ぐい、と手首を返すと、アガシはそのまま細剣を横薙ぎに振るった。
俺の喉笛をかき切るうというのだ。

ガキーン!

鈍い音とともに、折れ曲がった細剣の切っ先が宙を舞った。
当然、俺の身体がそれをしたのだ。

「どうです?言った通りでしょ?俺、不死身なんです」
「……………」

アガシは信じられないといった様子で折れた剣の断面と俺の顔を交互に眺め、大きく首を振った。

「バカな……………」

オッホホウ、驚いてる、驚いてる!
だが、おっと、ヤベエなあ。

俺の中で、ちょっととした不安が鎌首をもたげてきた。
このまま勝っちゃったらどうなるんだろう?

『アタシを負かしたのはテメエが初めてだ……す、好き……』

てなことになって、嫁にするだのしないだので收拾のつかないてんやわんやになるんじゃないかなろうか？

『うる星』かYO！

それはそれで悪くはないシチュエーションではあるが、ツレのいる異世界冒険中の勇者の身にはちよいと厄介な面倒事になりそうだ。

おまけに相手は一軍の指揮官。

あまり執着されれば、人海戦術を駆使して何をしてくるか分かったものじゃないぞ？

(モテるってのも考えもんだな……)

おっと、ほら見る、アガシがこちらを見つめる目が変わってきたぞ。紫色の綺麗な瞳が熱を帯びて……

(な、なんだ……?)

俺の背筋に冷たいものが奔った。

こちらを見つめるアガシの瞳

それが、まるで爬虫類のように瞳孔が縦に収縮し、煌々と恐ろしい殺気を放ちながら光り始めたのだ。

俺はその目に射すくめられ、身動きができなくなる。

(くお……)

光は次第に強くなり、俺はその中に呑みこまれていった。

気がつくと

照りつける強い日差しの中に

俺はいた

周囲には何も無い

眩しすぎて

何も見えないんだ

ここは

ここはどこだ……？

「遅かったじゃない、もう」

なんだって？

「あなたが一緒にお弁当食べたと言って言ったのに」

お弁当……？

「待たせるなんてどうかしてるわ」

突然

俺の視界が開けた

「っ……っ」

俺は驚いていた。

(ここは……俺の学校の……前庭じゃないか……)

雲一つ無い青空の下。

生徒達がせわしなく行き交うその前庭の中心に、俺は立っていた。

何が起こったのか？

理解が追い付かなくて、呆然と立ち尽くす。

間違いなく、ここはあまりにも見慣れた俺の学校のようにだけど……

なぜだ！？

ここは校内でもカップルに人気のスポットだ。

日当たりの良い場所にベンチが五つも並んでいて、昼休みになれば浮かれきったアベックどもがイチャイチャと寄り添って昼飯を食う。俺のようなイケてない男子生徒にとっては忌むべき禁足地だ。

特に花壇の傍の通称『花園ベンチ』はアベックどもの間でもとりわけ競争率の高い、ゴールデンシートだった。

その花園ベンチの前に……

彼女が、つんと胸を張って、立っていた。

「ほら、謝罪の言葉は無いの？」

「プ、プルミエル!？」

「何を驚いてんのよ」

プルミエルだ！

なんで！？

おまけに彼女は俺の学校の制服を着てる！

なんで！？

いや、それ以前に、いつの間に俺はこっちの世界に帰って来たんだ？
そして、なぜ彼女までこっちの世界に？

完全に頭が混乱して、俺は呻くことしかできなかった。

「な、なんでここに……」

「はー!?」

「うっ……」

お、怒っているのか……？

「『ナンドココニ』って言ったの?」

「う、いや、その」

「もっつ、いいわ。一人でお昼食べれば?」

ぷう、と頬を膨らませて横を通り過ぎようとする彼女の腕を、俺は
反射的に掴んでいた。

「す、すまん。ちょっと気が動転してて……お昼?」

「お昼」

「お……お昼ね。よし、食べよう、お腹ぺこぺこのペコキッシュユサ
ンダーさ」

「何それ?」

言いながらも、何とか機嫌を直してくれたらしく、プルミエルは花
園ベンチに腰を下ろした。

ちよいちよいと手招きされたので、俺は慌ててその隣に座る。

「はい、お弁当」

プルミエルは、ピンク色の可愛らしい包みを俺に手渡した。

「お、ありがとさん……って、まさか手作り!？」

「失礼ねー、当り前でしょ。あなたが食べたって言ったんじゃない」

「お、俺が……そうか……」

「早起き大変だったんだからね。まあ、男の子って女の子が皆こう
いうの作るのが好きだと思ってるのかしらね？」

「……ど、どうだろう……」

言いながら、俺は体が震えていた。

信じられるか？

花園ベンチに座って、女の子の手作り弁当を広げてる俺……

おまけにその相手がプルミエル……

夢なら覚めてくれるな。

「あら？やーね、なに泣いてるのよ？」

「な、泣いてない、これは、心の汗……」

「キモいわね」

「うつつ、な、何とも言え!だが、この弁当は返さないぞ!いざ、
万感の思いを込めて、オープンッ!」

クパアアアッ!

「で、出た……ハートマークのでんぶ……そして、タコさんウイン
ナー……」

「浸っていないでさっさと食べちゃいなさいよ」
「ま、待ってくれ、心に刻みつけてから……」
「もう！」

よっぽどまじまじと見られて恥ずかしかったのだろう。

ブルミエルは耳まで真っ赤にして俯き、それを誤魔化すみたいに自分のお弁当をぱくつき始めた。

な、なんて可愛い反応なんだ……いかん、このままでは萌え死んじまう……

「い、いただきまーす……」

こんなに可愛いハートマークに対して掘削作業を断行するのは実に遺憾だが、食べなければ弁当に悪い。

俺は箸を持ち、とりあえずハートマークは回避して、卵焼きを一つ、口に放り込んだ。

「ど、どっ……」

心配そうにブルミエルが俺の顔を覗きこんでくる。

「ウ……」

「うっ……」

「ウマ……」

「わ」

「うまつ！何コレ！スゲエうまい！」

「そ、そう？本当？」

「本当！ノンフィクション！うむー、なんというウマさだ、ブラボ

ー

「もう、大げさすぎ……もう」

いかにも呆れた風な口ぶりだが、俺の『ウマイ』の言葉にホッと胸をなでおろしたようだ。

そんな彼女を見て、俺は天に向かって天将奔烈を放ちそうになる。大丈夫、もう刹活孔は突いてあるぜ……

「ね、ねえ……」

「ん？」

「その、あなたが、食べたいっていうんならさ……」

「？」

「また、明日も……作ってきてあげよっか……？」

ああ

なんて

幸せなんだ……

暖かい光が……

俺を包み込んでいった……

「っ……！！」

突然、視界が開けた。

花園ベンチもプルミエルも跡形も無く消え去り、周囲にはニヤけた面の男達と、木々の生い茂る薄暗い森があるばかりだ。

「ここはどこだ……？
さっきのシヤワセな空間は……？」

「良い夢見れたか？」

背後で声が出たかと思うと、振り向く間もなく、アガシの腕が俺の首に巻きついた。

そして、そのままスリーパーホールドの体勢に。

「ぐへっ……！」

「見えたか？感じたか？今のが『虚影の邪眼』だ」

ギリギリと俺の首を力強く締めあげながら、アガシが耳元で囁いた。

「こ、こえいのじゃがん……？」

「てめえの心の中の欲望や願望が一瞬だけリアルに見えるっつー実に穏やか、かつ慈悲深い瞳術だ。甘やかな幻の中で死んでいくなんてのは贅沢すぎると思わねえか？ケンビシ」

「ま、幻……あんなにリアルだったのに……」

お、おっかねえ技だ、『虚影の邪眼』。

俺は自分の心象世界に囚われちまっていたらしい。

それにしても幸せだった……

「さあ、どうする？もう待った無しだぞ」

グイツとさらに強く俺の首を締めあげ、アガシが勝ち誇ったように言った。

「こ・ろ・せ！こ・ろ・せ！」

俺達を取り囲んでいる兵士達も、自分の大将を応援するために実に物騒なチャントを始めた。

ここは暗黒武術会かつーの。

(やれやれ……分らない人達だネ……)

俺は周囲にそれと悟られないように溜息をついた。

不死身の体にチヨークスリーパーなんぞ聞くはずもないだろうに……

さて、どうやってこの茶番に決着をつけたものか

俺がぼんやり思案を巡らせ始めた、その時だった。

「う、うおおおっ！な、なにイ!？」

俺は思わず大声を上げてしまった。

それを聞いて、周囲からどっと歓声があがる。

「ははっ、もう終わりだな！」

「アガシ様のスリーパーは虎でも仕留めるんだ！観念しろ！」

と、虎を……?ゴクリ……

って、いや、ちがう！そうじゃない！

俺が悲鳴を上げたのは、別の理由からだ。

(む、胸っ……!!)

そう、背後から密着してスリーパーホールドをかけているアガシの

胸が、俺の背中にモロに押しつけられているのだ！

背中に感じる、二つの豊かな膨らみの感触……

男なら誰もが登頂を夢見る双丘の喜望峰。

普通ならラッキー！と思ってしばらくこの感触を味わうのもアリだが、俺の場合はそうもいかない。

(い、異性のボディータッチ……)

俺は慌てて勇者タイムを確認する。

『35:12、11、10……』

カタタタタタツ！と凄まじいスピードで俺の勇者タイム、すなわち寿命が失われていく！

「うわああああっ！！し、死ぬっ！！このままじゃ死んじゃまうっ！！」

「ほお、どうやらメタルの体でもこいつはキクらしいな？」

アガシが耳元で楽しそうに囁いた。

そういう意味と違えヨ！

どっちかと言うとその逆で、俺のメタルな体のさらにレアメタルな部分が超合金化しそうなんだよ！

恐るべき、淫獄の罠……罠！

「負けを認める。そして泣いて許しを乞いな」

それはしたくない！

「こ・ろ・せ！こ・ろ・せ！」

殺されたくもない！

だが、このままではそうなるだろう。

(くそっ……)

俺は選択を迫られていた。

プライドと命。

男にとつちや、どつちも大事だ……

『12:03、02、01……』

無情にもカウントは高速で進んでいく。

ひ、あ、あ、あ……もう一巻の終わりか？

俺が悲痛な叫びを天に向かって届けようとした、その時。

「あ、こんなところにいた」

森の中からひよっこりと姿を現した一つの人影が、緊張感の欠片も無い声を上げた。

全員の注意が、一斉にそちらの方向へ向けられる。

俺もそいつを見て思わず声を上げてしまった。

「い、イグナツィオ！」

そう、あの白面の美青年、イグナツィオだった。

ニンジャウオリアー

「なんだ、てめえわ」

アガシが不機嫌そうな声を上げた。

突如として現れた闖入者にお楽しみを邪魔されたからなんだろう。だが、俺にとっちゃラッキーだ。

イグナツイオの方に意識が向けられたことによって、アガシの腕から力がふつと抜けたのだ。

俺はその好機を逃さず、するりと首を抜いて、淫獄の罟から抜け出すことに成功した。

「あ、この野郎っ」

アガシの声を背後に聞きながら、俺は呆気に取られている兵士達をかき分けてイグナツイオのもとへ走った。

「い、イグナツイオ！」

「どうも、ケンイチさん。楽しそうでしたね。いいなあ」
「どこがだよ！っていうか、お、おまえ、どうしてここに？」

「プルミエルさん達があなたの帰りが遅いとかなんとか言ってるさく騒ぎ出したんで、面倒くさいけど探しに来たんです」

相変わらずのぼんやりした表情で、イグナツイオは言った。

発言の内容に本音がチラチラ見えて、ありがたみが三分の一ほどに薄まったが、まあ、ありがたいことではある。

だが……

「また侵入者か！」

「くそ、二人ともひつとらえる！」

我に返った兵士達が、口々に騒ぎだした。

まずいな。不死身の俺一人なら何とかなっただかもしれないけど……

「ケンビシ、お前のツレか？」

アガシが声を投げてきた。

うつむ、ここで否定はできんよな……

「えーと、まあ、そうツスよ」

「そいつは何かできんのか？」

アガシは細剣で自分の肩をポンポンと叩きながら、ニヤリと笑った。

「何言ってるんです？あの女は」

「イグナツイオ、気をつける。何か面白い一発ネタをあの女に見せないで、ここから帰してもらえない。ちなみに俺は失敗しました」

「一発ネタですか」

「おい、優男。何でもいい。とりあえず何か見せてみな」

「うーん……そうだなあ」

言つとイグナツイオはゆっくりと両手を頬にあてて、無表情のまま

……

「すつとごどつこいだよーん」

「……」

「……」

俺はたまりかねて、両手で顔を覆う。

……いますべてがおわった……

やっちまったな、イグナツイオ。

俺は不死身だから何とかなるかも知れないけど、お前はもう、この場で首を刎ねられて死ぬしかない。

3m以上の地下深くに掘られた墓穴が今日からお前の揺りかごになる。

せめて後腐れなく、ライフストリームに身を委ねて、この星に優しい存在になれ。

俺もいつかそこに行くよ……

「ブ、ブフーツ!!」

「ワツハハハハハハハハハハ!」

え、ええツ!?

「ウヒョヒョヒョヒョ……ヒーツ、ヒーツ、は、腹痛い……」

予想外の大爆笑!!

「お前、『ペーソス・モンジ』のモンジか! (笑)」

「しかも今のは兄貴の方だぞ! (笑)」

何ソレ!?

『ペーソス・モンジ』って!?!しかも兄貴!?

「お、お前、じゃあ、アレはできんのか、あの、モンジがお尻に手を当てて……」

「お尻トウルーリ」

「ブハ ツー！（爆）」

森が、大爆笑に揺れる。

ど、どこにそんなツボが……？

だが、あのアガシさえも思わずその場に膝をついて、肩を震わせて笑っている。

『ペーソス・モンジ』を知っている人間にとってはよほど愉快的なネタなんだろう。

俺は全くついていけなかったが、一人だけ白けているのも変だ。

とりあえずその場に合わせて愛想笑いを浮かべながら、イグナツィオの横に立っていた。

「う、ウケてるぞ、イグナツィオ……」

「ウケたみたいですね」

イグナツィオは周囲の大爆笑などどこ吹く風で、しれっと俺に言う。相変わらずの無表情。

まったく、何を考えているか本当に分からない奴だ。

だが、この場ではそれも頼もしい限り。

「でかしたぞ、イグナツィオ。よし、この隙にトンズラしちまおう」
「はあ」

二人でこそつと後退しかけた時だ。

「待ちなっ」

涙を拭いながら、アガシが立ちあがった。

「何です」

「今のは面白かった。ツボったぜ。おい、優男、てめえは許してやる」

「それはどうも。じゃあ、僕らはこれで」

「いやー、ヨカッタネー。行こう、イグナツイオ」

「待ちな。ケンビシ」

「は、はい」

「てめえは別だ。てめえはアタシと決着をつけなきゃならねえ。面と向かってこのアタシを小馬鹿にしたんだからな」

「はーん！やっぱり！」

女の執念とは実に恐ろしきものなり。

だが、それよりも恐ろしい男が俺の隣にいた。

「……めんどくさい女だなあ。頭おかしんじゃないですか」

「ちょ、おま……!!」

イグナツイオは、あるうことか舌打ちしました。

き、聞こえてるよおー……ッ!!あの人聞ってるよおー……ッ!!

「い、イグナツイオ……今のはアガシさんに謝ったほうが良い……」

俺は真っ青になって何とかこの場を取り繕おうとしたが、時すでに遅し。

「……いい度胸だ、この野郎……」

ゆらりとアガシの背後に修羅の影が見えた。

お、お、怒ってるウ！それもおそらく烈火のごとくに……!!

突きだした耳が、ぴるぴると上下にひきつった動きをする。
紫色の瞳が、全身に鳥肌が立つほどの殺気を放った。

「ひっ！ア、アガシさん、すみません、今そこに正座させますんで」
「え？正座なんてしませんよ。変なこと言っなあ、ケンイチさん」
「お、お前は黙ってなさい」
「……二人ともいっぺんに始末してやるぜ」

アガシの細剣が、ヒュン！と風を切る。

うお、もはや議論の余地無し……

「いいか、イグナツイオ。何があってもあの女の見ちゃダメだ。
甲賀忍者も真つ青の瞳術を使うぞ」

「コーガってなんですか」

「深くツツこむなよ……くそっ、それよりも何とか逃げ出さない」と

「ケンイチさん、目を閉じててください」

「え？」

イグナツイオはズボンのポケットに手を突っ込むと、正露丸をビー
玉くらいの大きさにしたような玉を取り出した。

「……？」

俺が呆気に取られている間に、彼はそれをぱーんとアガシの方に放
り投げる。

「えっ！」

「なに！？？」

全員がその玉の行方を注視してた。

すると……

カツ!!

とその玉が凄まじい閃光を放った。

それはまるで小さな太陽爆発!

「うああああっ!!」

「目が、目があッ!!」

全員がその光に目を打たれ、場はパニックの渦に。

俺も脳髓を焼かれたような錯覚を受けて、一瞬目がくらみ、完全に前後不覚に陥ってしまった。

だが、すぐに腕を掴まれ、ハッと我に返る。

「閃光玉です。走りますよ、ケンイチさん」

イグナツイオはそう言うと、猛烈な勢いで森へダッシュした。

「あ、ちょ、待ってくれ!」

強烈な光のせいで、視界の全てが虹色に滲んでしまっているが、俺もイグナツイオを追いかけて走り出す。

背後で、「あ、あいつら逃げるぞ!」という声が聞こえた。

うお、もう追いかけてくる!?

俺は必死に木をよけ、草をかき分け、ひたすら足を動かして走る。

途中で倒木に足が引っ掛かってよろけたり、草を踏んで滑って転んだりしたが、それでも背後に感じる怒涛の追跡集団の気配が俺を休ませてくれない。

『こけつまるびつ』というのはこういうことだ。

不死身の体でなかったら擦り傷だらけになっていただろう。

だが、イグナツイオは俺とは対照的に、軽い身のこなしでスイスイと森の中を駆け抜けていった。

おまけに時々俺を待つ、という上級者のスキルを見せつけたりもする。

あいつ、何だ？

さっきの閃光玉といい、孤高の忍者なのか凄腕のモンスターハンターなのか。

普段はあんなにぼーっとしてたのに……

俺は息も絶え絶えになりながら、負けじと足を動かした。

「あ、馬車が見えましたよ」

「おお……本当だ……」

ようやく、あのタマネギ馬車が見え、俺はほっと一息つく。

そして馬車の前には金髪美少女……

「ぶ、ぶるみえるっ」

「あ、ケンイチ、どこ行ってたのよー、もう」

「話せば……長くなる……ぜーっ、ぜーっ」

「しかも、あなた手ブラ？もー、森で何してたのよ」

な、なんつー冷たい対応だ。

俺の妄想世界ではあれほどいじらしく、可愛らしかったのに！
現実の厳しさがここにある。

「って、そんな場合じゃねーぜ！ボク達、追われています！なう！」

「何に」

「おっそろしいゴッド姐ちゃんとその一味に！」

「はあ？何で？」

「えーと、それも話せば長くなる……」
「？」

と、ここで窓からアリイシヤとメイヘレンが顔を出した。

「あ、ケンイチだっ！おかえりっ」

「遅かったな。おや、手ブラか」

「手ブラで悪かったなッ！後で土下座でも何でもするから、今は逃げるのを勧めします」

「え？逃げる？何で？」

「変な集団に追われてるらしいわ」

「ええーっ？」

「そう、おっかねえエルフの女に……」

言いかけたところで、凄まじい勢いでエステイ老師が馬車から転がり出てきた。

「うお、老師！？」

「エルフじゃと！？」

「（な、なんて目の輝きだ……）老師、残念ながら俺達を追っかけてくるのはあんたが期待しているようなエルフではない……」

「じゃあ、どんなエルフじゃ」

「黒髪の大女で、ガサツで乱暴でとんでもない無茶ブリをかましてくるよーな……」

「バカ言え！そんなエルフがおるか！そんなのわしのエルフじゃないね！」

「俺も信じたくなかったんですが、本当ッス。ってゆーか、何やっつてんだ俺達わ！急いで逃げなきゃ！」

「ふん、お前の言う偽エルフの顔を拝んでからに」

言いかけたエステイ老師の足元に、ズン！と勢いよく手槍が突き刺さった。

「っ！？」

前方に目をやると、兵士達がこちらに向けて槍を投擲する態勢に入っているのが見えた。

「うお、ヤベエ！」

「ビーンッ！」

あまりの衝撃に、失禁しかねないほどすぐみあがっている老師。

俺は慌ててその前に身体を投げ出して、飛来する槍を全部、腹で受け止めた。

「うばぁーっ！」

しかし、この槍が予想以上に重く、威力があつて、俺は大きく後方へ吹っ飛ばされる。

うつつ、本当に殺る気だな。

「皆さん、馬車に乗ってください」

「おお、イグナツイオ！」

そういえば、さっきまで無駄話をしていた俺達の横で、あいつだけは黙々と馬に鞍を乗せたり轡をはめたりして出発の準備をしていた。

マイペース野郎だが、仕事のできるイグナツイオに、俺は頼もしさを覚えた。

「ま、待ってくれえ、わしゃ、腰が抜けちまって……」
「ああ、もう、めんどくせえなあ！」

俺はへろへろと地面を這うエステイ老師を抱え上げて馬車に飛び乗った。

ブルミエル、アリイシャ、メイヘレン、うむ、全員いるな！

「イグナツィオ！出していいぞ！」

俺が御者台に声をかけると、ピシイっという鞭の音とともに馬車は猛烈な勢いで走り出した。

暗殺者、あらわる

夜になった。

昼間の喧騒が嘘みたいに静かだ。

窓の外からは、傍を流れる小川の水音と虫の声だけが聞こえて、ちよつと風流なもんだ。

追手の気配は無くなったが、念のため火は焚かないことにした。

こういう時に馬車は便利だ。

野宿と違って、火を焚かなくても獣に襲われる危険は無いし、ランプに火を灯すだけで、明かりが室内を満たしてくれる。

その安心感からか、エステイ老人とアリイシヤは早々にソファに横になって、寝息をたて始めた。

ちなみに老師はやつぱり少し漏らしていた。

勇者タイムを稼ぐためとはいえ、その下着を手洗いはしたことは俺の人生に大きな爪痕を残しそうだ。

「もー、結局何だったのよ、昼間のあいつらは」

プルミエルは不機嫌そうに頬杖をつきながら言う。

「どっかの国の边境監視部隊らしいけどなあ」

「ムウサか？」

メイヘレンが眼鏡をくい、と上げて会話に加わる。

「おお、確かそんな感じだったような」

「なんか……キナ臭いわねえ」

「いや、前から噂はあったんだ。ムウサがチャペ・アインの領土を

少しずつ削りつつているという……」

「無粋だわ。辺境は辺境だからいいのに」

「都会人っぽい発言だなあ。都心からちよつと離れた奴が『ここには我々が忘れてしまった大切な何かがある』みたいなことを言うようなもんだぞ」

「闘神？」

「都心です。どんな奴だよ、『闘神からちよつと離れた奴』って……」

「あ、そうそう、そう言えば『ペーソス・モンジ』って知ってる？」

「『ペーソス・モンジ』？えー、超有名よ」

「そ、そうなのか……」

「私は兄の方が好きだな」

(兄……『すつとこどつこいだよ〜ん』の方が……)

「ええ？私、家政婦の方が好き」

(え、対になるのは弟じゃないの？)

「でも、一番面白いのはあのキャラメルばかり欲しがる奴かな」

「え、そんなのまでいるの!？」

「いったい何人登場人物がいるんだ『ペーソス・モンジ』！」

「ていうか『キャラメルばかり欲しがる奴』って……？」

「もうシニールを通り越して不気味ですらある。」

「お取り込み中に失礼します」

「ここで、イグナツィオが木製のバケツを手に提げて車内に入ってきた。」

「水、置いときます。さつき汲んできたばかりだから、飲んでも大丈夫です」

「おお、サンキュー。お疲れさんだったな、イグナツィオ」

「普通です」

ほんつとに対応がイチイチ現代風な奴。

『普通』って何だ。

「って、あれ？どこ行くんだ？」

バケツをテーブルに置いて、また馬車を降りようとするイグナツイオに、俺は驚いて声をかけた。

「寝るんですけど」

「寝るって、どこで？」

「その辺で」

何でそんな当り前のことを聞くのか、というような様子だ。

「いやいやいや、中で寝ればいいじゃん。スペースも余ってるし」

「は？」

「だって、お前だけ外で寝るのは変だろ。もう旅の仲間なんだし、
一つ屋根の下」

「仲間ですか……」

「そうしなさいよ。ほらほら、ここ座って」

「それがいい。イグナツイオくん、君のことを色々と聞かせてほしいね」

「はあ……」

ブルミエルとメイヘレンに促されて、イグナツイオは渋々といった様子でソファに腰を下ろした。

「いいぜいいぜ、何かサ、こうして夜にヒソヒソ話すのって修学旅行みたいだよなあ。テンション上がった……」

「ソワソワしないの。猥談なんてしないわよ、エロスボーイ。下ネタは禁止ね」

「ちっ、違うッ！そのことでソワソワしたわけじゃない！」

「わ、大声出すんじゃないわよ」

「へえ、ケンイチさん、エロスボーイなんですか」

「違うっ！言いがかりだっ！」

「もー、だから大声出さないのっ」

プルミエルの握り拳が、ポカッと軽く俺の頭を叩いた。

「うっっ！」

「イグナツィオくん、話を君に戻そう。君はベデヴィアの豪商連合のお抱え御者なのかな？」

「いいえ」

「じゃあ、今回の為にわざわざ雇われたの？」

「そうです。まあ、御者としてではないんですけど」

「？」

「僕、殺し屋なんですよ」

「へえ、そーなんだ……」

.....

「つて、な、何イイイイイアッ!？」

「こら！また大声、もう！」

「いやいやいや、大声出るでしょ!?!こいつ、今、サラッととんでもないこと言っただぞ!?!」

だが、俺の驚愕と混乱をよそに、プルミエルとメイヘレンは涼しい顔だ。

「殺し屋ねえ……豪商連合が依頼主ね？」

「はい」

「私達を旅の途中で消すようにか」

「はい」

「やっぱりね」

「やれやれ、恨まれたものだな。それにしてもヒネリが無い」

「おいっ、何でそんなに落ち着いてられるんだよ……！」

「ん？何で君はそんなに落ち着かないんだ？」

「ええっ！？だって、こいつがその気になったら……えーと、例え

ば、アレだ、俺達は馬車ごと崖下に転落したり、暗い森の中にとり

残されたりしてたかもしれないだぞ！？」

「そうなんなかったから良いじゃない」

「えええええっ！？」

あ、アバウトすぎないか？

「そっ、そのバケツの中の水も毒入りかもしれないじゃん！？」

「うっ……ん、うるさいのっ……」

と、ここで老師が目を擦りながらのっそりと立ち上がった。

「ふわぁ……あー、まだ寝れる……うー……お、水」

そう言うと老師は無造作にバケツの中にコップを突っ込んで水をすくい、ごくごくと美味そうにそれを呑みほしていく。

「じゅるっ、ぷぷ……さ、もう一回寝よ……よっくらせつと……」

寝起きならではのやけに説明してみた独白とともに、老師は再び元の位置に戻ると、ごろりと寝そべってまた大きなイビキをかき始めた。

(でも、そうか……殺し屋だったんだ……)

俺はしげしげとイグナツイオを眺めた。

あの森をスイスイと駆け抜けた体術、ポケットに忍ばせた閃光玉、妙に人間らしさの欠落した人格……

それら全てが、こいつが殺し屋だと考えれば、違和感無く、すくと納得できる。

「ケンイチさん。エロスな目で僕を見ないください」

「見・て・ねえええええよっ!!」

こいつ、一回殴ってやろうか!?

だが、いきり立つ俺をメイヘレンが押さえた。

「ま、それはさておきだ。これから先、イグナツイオくんは私達の仲間。そう考えていいのかな?」

「『仲間』は言い過ぎですよ。僕も気が変わるかもしれないし」

「えー?めんどくさいヤツだなあ、お前」

「殺し屋にしてみれば『殺しても死なない』あなたは魅力的なんです。挑んでみたい気持ちがあるんですよ、ケンイチさん」

不死身の俺と、殺し屋のイグナツイオ。

確かに、故事成語に出てくる矛と盾のような関係と言える。

しかし『挑む』か。

そう言われるとあまり悪い気はしないから不思議だ。

「ま、いいや。俺個人にならいつでも挑戦してこいよ。でも、他の連中は駄目だ。特に女の子達は巻き込まないようにしてくれ」

「考えときます」

「いや、考えるなよ……そこはさらっと『分かりました、男同士の

勝負ですね』くらい言えよ」

「そんなに肩肘張らないでください。僕は気ままに仕掛けますから」
「気ままに仕掛けるって、お前な……」

俺は苦笑してしまった。

呆れたヤツだが、言うことがイチイチ殺し屋っぽくなくて憎めないところがある。

朝になった。

「……」

寝起きの俺の頭の中には『？』マークが飛び交う。

いつの間にか外にいて、木に首を吊った状態で目覚めたからだ。

(……?)

つい四十分ほど前に勇者タイムを稼ぐために、馬達に水を飲ませてやったのを覚えている。

そして、次第に周囲が明るくなっていつて、『何だよもう朝か、もう一眠りしようぜ』なんてことを考えて馬車の中に戻ったのも覚えている。

だが、そこからどうやって今の状態になったのかはまるで覚えていない。

俺はぶら下がったまま、ぼんやりと考えてみた。

(夢遊病の気でもあるんだろうか……?)

それとも急に生きているのが嫌になったのか？
乖離性二重人格？

自分の深層心理がそら恐ろしくなる。

「う、わわわっ！…ど、どーしたのっ!？」

「おお……」

朝一番で馬車から下りてきたアライシャが、俺を見上げて大声を上げた。

「アライシャ、おはようさん」

「お、おはよー……び、びっくりしたあ……な、何やってるの？新しい健康法？」

「いや、朝起きたらこうなった」

「ええ！？そう言えば、前も首吊ってたよねえ……デジャヴだよ、ボク……」

「あの時は悪い奴らにしてやられたんだが、今回は何故こうなったのか……見当もつかないよ。俺はひよつとしたら自殺願望があるのかもしれない……」

足元のアライシャを見下ろしながら、俺は溜息をつく。

「そんなあ……強く生きようよ。生きていればいいことあるよ」

「本当に君はいい子だな……俺……君に会えてよかった……」

「あ、ケンイチ、おはよう」

シャコシャコと歯を磨きながら馬車から下りてきたのはプルミエルだった。

ぶら下がっている俺を見ても、全く慌てた様子が無い。

「新しい健康法？」

「朝起きたらこうなっていたんだ。俺はひよっとしたら封印された記憶の奥底に死にたくなるほどのトラウマを抱えているのかもしれない……」

「それはご愁傷さま」

あっさりそう言うと、ブルミエルは川べりに行って、口をゆすぐ。

「なんだ、冷てえなあ……」

「おはよう、皆。いい朝だね」

続いて馬車を下りてきたメイヘレンに至っては、軽くスルーだ。

俺、大変なことになってるのに！

『酔拳2』で悪酔いしたジャッキーが翌日に見つかった時の姿（ふんどし一丁で『酔拳の王』と書かれて吊るされていた）みたいになってるのに！

「メ、メイヘレン……」

「おはよう、ケンイチ。新しい健康法か。首が伸びて気持ちよさそうだね」

「朝起きてたらこうだったの！皆で同じ反応しやがって！大体こんな普通の人間がやったら健康になる前に死ぬっつーの！」

俺が木の上で喚いていると、今度はイグナツィオが馬車から下りてきた。

「おはようございます、皆さん。あ、ケンイチさんも」

「おはよう、イグナツィオ。ちなみにこれは新しい健康法じゃないぞっ」

「わかってますよ。僕が吊るしたんですから」

.....

「おつ、おまつ、お前かアーーーーーッ!」

「いやだなあ、『いつでも挑戦してこい』って言ったじゃないですか」

「こんなにすぐだとは思わねーだろっ!」

「でも、やっぱり死なないんですね。すごいなあ。殺したいなあ」

「アブねー……こいつ、予想以上に危険な獣だ……」

「ケンイチ、降りられる?ボク、手伝おうか?」

「あ、ありがとう、アライシヤ。大丈夫、自分で降りるよ」

俺は縄からスポツと首を抜くと、そのまま地面に飛び降りた。

「よ……つと」

華麗な着地。

決まった!

だが、誰も俺を見てはいなかった。

「ねー、イグナツィオ、あの建物は何?」

ブルミエルが突然、川の向こうに遺跡っぽい建造物を発見したのだ。

「あれは……何ですかね。僕にも分かりません」

「おいおい、道の途中に何があるかぐらい知つとけよ。御者なんだから?」

首吊りの仕返しだ。

ここぞとばかりにイヤミを言ってる！

「あんな立派な遺跡を知らないなんて、どうかしてるぜ！」

「いえ、実は昨日、がむしゃらに馬を走らせたせいで、本来のルートから大きく逸れてるんですよ」

「まあ、あの投げ槍の雨から逃げるのに必死だったからな……って
いうか、そういうことはもうちょっと早く言うべきじゃね？」

「今言ったからいいじゃないですか」

「お前って……」

俺は呆れてしまうが、プルミエルはなんだか目を輝かせている。

「遺跡……未知の遺跡かあ……」

まるで恋する少女のように、キラキラしてる……

ああ、可愛いなあ……けど、嫌な予感がする……

「ね、ちょっと探索してみましょーか」

「やっぱり！」

「いいね。私も興味があるよ」

「あんたもかヨ！」

「ボクも！ボクも行ってみたいーいっ！」

「でも、先を急がないと昨日の軍団がいつ襲いかかってくるかも……」

……

だが、三人娘は俺の制止など全く聞かずに、意気揚々と遺跡へ向かって歩き始めた。

「い、イグナツイオ……何とか言ってやってくれ」
「あ、おかまいなく。僕は馬を見てますんで」

そついう意味でお前に声をかけたんじゃないヨ！
だが、女子達を放つてもおけない。

俺は舌打ちをしてから、三人を追いかけた。

遺跡コンバイン

まさに遺跡だ。

夜は気付かなかったけど、それは随分と大きな建物だった。

苔生した石造りの外壁、ツタが絡まり放題の蔵つい顔のモアイ風石像。

観音開きの鉄扉は赤黒く錆びついていて、ここがもう何十年、いや、ことによると何百年も放置されていたことを示している。

(なんかこの雰囲気……デジャヴ……)

どこかでここに似た場所を見たことがある。

「俺、あまりこの雰囲気が好きじゃないナー」

などと、とりあえず主張してみるが、

「あっそ」

と、プルミエルはにべもない。

分かってる、男はいつも女の奴隷さ。

「アライシャ、この扉、開けられる？」

と、プルミエルが声をかけると、

「どれどれ、やってみるね。よっ……と」

アリイシヤは重そうな鉄扉に手をかけて、ぐつと腰溜めに力を入れる。

「んんんんん」

すると、どうだ。

ぎしっ、ぎしっ、と軋む音を立てながら、分厚い鉄扉が少しずつ開いていく！

「すっ、すげえ……」

こんな細い体のどこにそんな怪力が？

これが話に聞いた『内功魔術』か……

俺は改めてこのスポーティ美少女の潜在能力に驚嘆した。

「うううんんん……！はいっ、開いたよ」

「おおー、すごいすごい」

「実にすばらしい」

「えへへ……」

パチパチと拍手を送るブルミエルとメイヘレン、それを受け、照れてぽつと赤面するアリイシヤ。

だが、俺は仄暗い遺跡内部を覗いて、さらに悪い予感を募らせていた。

「なあ、本当に行くのか？中は広そうだし、朝飯までに帰ってこれるかどうか分からないぞ。引き返すなら今。まさに、今だっ」

「そんな隅々まで見るわけじゃないわよ。ぶらっと探検してみて、面白いものがあれば拾っていく、面白くなければ帰る。どう？分かりやすいでしょ？」

「聞けば聞くほど、これが盗掘と呼ばれる作業なんじゃないかという疑念を禁じ得ないんだが……」

「禁じなさい。そんな疑念は」

マッチの『けじめなさい』みたいなポーズで俺に圧力をかけるプルミエル。

ギンギラギンにさりげないその所作に、俺の心はザンバラバラバラだ。

へへ、もう自分が何言ってるのか分からねーや。

「よし、それじゃあ、もう、さっさと行こうぜ」

「その意気やよし。じゃ、あなたが先頭ね」

「え、ええエッ!？」

「そんな声を出すなよ、ケンイチ。何があるか分からないだろう？ 私達は君を頼りにしてるんだ」

「都合良いこと言っつて、何かトラップでもあつたら俺が食らえばいいと思ってるんだろっ」

「そ、そんなことないよ、ケンイチっ。ボクはどっちかって言うと通路にいっぱいクモの巣が張つてたらヤダなあって思ってるだけだよっ」

「そうかあ……っつて、俺だつてイヤだよ!朝っぱらからクモの巣まみれになるのはよお!」

「もー、ウダウダ言わない!頑張れ男の子!」

プルミエルはいつの間にか用意していた小さなランタンを押しつけてくると、そのままドン、と俺を遺跡の中へ突き飛ばした。

「カビ臭いな……」

俺はランタンを掲げながら、通路を進む。

後ろはプルミエル、メイヘレン、アライシヤと続く。

不測の事態に備えて、後詰に戦闘力の高いアライシヤを配置するあたりはさすがに抜け目ないぜ、プルミエル。

だがな、俺の体はもう早くもクモの巣だらけで真っ白になっちゃまってるぜ……

「う、ぺっぺっ……口に入ったっ……」

「いーから歩きなさい。前進あるのみ！」

「ん？待て、プルミエル。目の前に看板みたいのが引っ掛かって……」

俺は頭上にランタンを掲げてみた。

天井。

天井から太い鎖でサーフィンボード大の鉄板が吊り下げられていたのだ。

長年の風化により赤錆びた鉄板には、ミミズののたくっているような文字が焼き付けられている。

「読めねえ。なんて書いてあるんだ？」

「えーと、どれどれ……『アルヴァンの魔芯兵器研究所』」

「ほお……」

って！

「ア、アルヴァンだとう！？」

俺の頭の中で全てが一本につながった。

どこかで感じたことのある悪寒、不吉な邪気。

そのデジャヴは気のせいなどではなく、かつて、パルミネの魔法塔やウルシュの山の麓にあった宝物庫……それらの場所で味わったものと同じ息苦しさだったのだ！
俺は思わず唸った。

「わーお、やっべえ予感がするぞ。ここはさっさと引き揚げたほうがいいと思います、隊長オ！」

「はあ？引き揚げるう？」

何言ってるんのアンタ？的な冷たい光が彼女の青い瞳に浮かぶ。

「あなたね、アルヴァンの魔芯兵器は特別よ。ただの機械人形じゃない、芸術なのよ。そして、ここはその研究所。これは凄い発見よ！」

「待ってくれ、アレがどんなにヤバいものか知ってるだろう？」

俺は過去に二度、それと対峙したことがある。

頑健な装甲と恐るべき機動力、いや、何よりも恐ろしいのは機械ならではの容赦無さと執拗さにある。
思い出しただけでも膝が震えるようだ。

「そんなのとまた顔を合わせる事になったら……」

俺は露骨に悲壮感を見せてみる。

すると、信じられない事が起こった。

なんと、プルミエルが　あの絶対硬度を誇る鋼鉄の美少女が、俺の頬を優しく両手で包み、息がかかるほど近くまで顔を寄せてきたのだ。

しかもその瞳は熱く潤んでいて……

「ぶ、プルミエルっ!?!」

「何かあったらあなたが守ってくれるわ……私、信じてる……信じ
てるから……」

「……」

かつて、誰かが言った。

『逆に考えるんだ。“あげちゃってもいいさ”と考えるんだ』

ん、お、お、お、お、お……!

俺の脳髄は完全に焼き切れた。

「行こうぜっ!?!」

「うんうん。さ、先行くわよ」

騙されてる?

今はそれでもいい……

俺達はさらに奥へと進んだ。

「完膚なきまでの破壊の跡だな……」

メイヘレンが後ろでぽつりと呟いた。

確かに酷い。

あの看板から先は、惨憺たる有様だった。

石壁には弾痕のように深く抉られた傷跡。

通路には天井から剥がれ落ちた瓦礫の山が積み上がっていて、なん

とか人が一人通れるくらいの隙間しかない。

研究所、とは言うものの、そんな面影はどこにも無く、無残に破壊

されつくした廃墟でしかなかった。

一体、何があったのか?

「あ、見て。あそこ」

ブルミエルが指さした先には、丸い、小さな赤いボタンがあった。

「ボタン……?」

「押してみて」

「お、俺が?」

「男の子でしょ」

「こ、こんな時だけ……」

「ね、お願い」

「うつつ、その目は反則だあ!」

チクシヨウ、ままよ!

俺は萌え心に後押しされ、勢いをつけてボタンを押した。

ぼちっ

うはあく、押しちまったよ……

さあ、落とし穴か? 矢の雨か? それとも殺人マシンの起動スイッチだったとか?

上から来るようでもあり、下から来るようでもある……

俺はあらゆる最悪の事態に備え、身構えた。

しかし、その予想は裏切られた。

ブーン……という低い機械音が遠くでしたかと思うと、なんと驚くべきことに、パツと建物内が明かりで満たされたのだ!

「うおー!」

突然頭上から照らされたもんだから、俺はその光量に順応できず、思わず目を細めてしまう。

何の光だ？

一瞬、頭が混乱する。

それは松明やランプのような、炎が持つ暖色の明るさではなく、実に無機質な、昼光色の蛍光灯のような色の明かりだった。

「な、な、なんだ……？」

「わ、明るいつ。すごいねえ」

「どうやらこのスイッチだったようだな……」

け、蛍光灯……なのか？

あまりにも不自然な、そして懐かしささえ感じる文明的なその明るさに、俺は違和感を感じてしまう。

ここは異世界で、ファンタジー世界で、魔法があるかわりに電気なんていうのは未知のテクノロジーのはず……

「あ、奥に扉があるわ。あそこ」

「扉？」

たしかに、そこにはとても頑丈そうな真っ黒な鉄の扉があった。

その表面には窪みや傷が無数についていて、明らかに何者かが力づくでこじ開けようとした痕だと分かる。

見ようによつては、銀行なんかにある巨大な金庫室みたいだ。

輪っかを啜えたライオンの頭の彫刻が扉の真ん中についていて、それが取っ手なんだろう。

しかしスゲー重そうな扉なので、こいつを開けるのはなかなか骨が折れるはずだ。

「ふむ……おそらく、この奥が要所なんだろうな。侵入者、というか破壊者もそこを指摘していたに違いない」

メイヘレンが進み出て言った。

「要所って？」

「分からないよ。だが、アルヴァンの遺した研究所の、さらにその奥に嚴重に封印された場所だ。何が眠っているのか……否が応にも期待が高まるね」

「いやあん、テンション上がってきちゃうわねっ」

「うお、そ、そうか……」

こんなプルミエルを見るのは初めてだ。

いつもどこか斜に構えていて、ポーカーフェイスで、マイペースでどこか冷めきっている女の子だと思っていたが、こんな風に目をキラキラさせて期待に胸を膨らませている姿を見ると、ああ、やっぱり年相応の女の子なんだなあと思う。

彼女のこんな一面を見られただけでも、この遺跡探索にはかなり意味があったと言っていていいだろう。

「開けましょう!」

「や、ヤル気満々だな」

「じゃあ、ボクがやってみるねっ」

「待て」

扉の前に向かおうとしたアレイシャの腕を、メイヘレンが掴んだ。

「え？何っ？」

「ここはアルヴァンの造った建物であり、あそこはそこの中でも重要な部屋なんだろう」

「それはそうでしょ」
「確かめる必要がある」

そう言うと、メイヘレンは足元の瓦礫からゲンコツくらいの石塊を掴み上げ、それを扉の方に向かって勢いよく投げつけた。すると、バシン！という金属音とは程遠い、まるで電流がスパークしたような音とともに石が粉々に砕けたではないか。

「おおっ！」

俺は思わず声を上げてしまった。

「あ、あれは何だっ？バリアか？」

「おいおいケンイチ、忘れてしまったのか？以前二人でアルヴァンの宝物庫に足を踏み入れたことがあっただろう。その時にも、最奥部の部屋には魔法で封印が掛けられていたじゃないか」

「おおっ、そういえば……」

俺は思い出した。

不可視の結界。

「『拒絶の輝壁』が、その扉にも施されている」

「ええ！？『拒絶の輝壁』？なんで？アルヴァンって暗黒魔道師でしょ？」

ブルミエルが驚いたような声を上げた。

「ところが、アルヴァンは勉強熱心だったようだね。様々な魔道を研究し尽くして、そのほとんど全てをマスターしていたらしい」

「えー、なんか腹立つ奴だわねえ……」

「でも、どうするの？これじゃあ先に進めないよねえ」
「うーん……」

全員が腕を組んで眉間にシワを寄せる。

もう諦めて帰っちゃおうぜ！と切り出したかったが、どうもそんなことを言える空気ではない。

俺はすることが無いんで、勇者タイムを確認してみる。

『02:17』

う・お・お・お・お・お・お・お・お・お……！
何気にヤバいじゃん！

「なあ、何か困ったことないか？」

「今困ってるわよ」

「いや、その、そうじゃなくて、勇者タイムがヤバいんだけど……」

「もー、めんどくさいわねえ。あとにして」

「あとにしたら僕は多分死んでしまいます……」

「生きてる間は不死身なんだからいいでしょ」

「そんなあ！」

「あ」

と、ここでプルミエルが、いかにも何か閃きましたというように、
ぼん、と手を叩いた。

「それよ！」

「ど、どれだ？」

「あなた、あの扉の取っ手を掴みなさい」

「そ、それで？」

「それをアライシャが力一杯引つ張る。どう？」

「あ、そうか、ケンイチって不死身なんだもんねっ」

「うん、それは良さそうだな」

「そっ、その前に、『勇者タイム』をっ……………」

「しょうがないな……………」

やれやれといった様子でメイヘレンが眼鏡を外して、ハンカチとも差し出してきた。

「埃っぽいからね。眼鏡が汚れてしまったんだ。勇者くん」

「お、おおっ！サンキュー！ピツカピカにするぜ！」

俺はそれをひつたくるようにして奪うと、素早くレンズ部分に息を吐きかけ、ハンカチでゴシゴシやる。

そして、天井の明りにかざして汚れがすっかり落ちたのを確認してから、またメイヘレンに返した。

『59：59』

おおっ！やったぜっ！！

「勇者タイムは？」

「完璧！」

「はい、じゃあ、さっさと開ける！」

「ひ、人使いが荒えなあ……………」

俺は渋々、取っ手へ手を伸ばす。

途中でバチン！とスパークキングな音がしたが、不死身の俺には傷一つ付かなかった。

罪なボディーだ。

「いい？じゃあ、引っ張るよっ」

アリイシャが俺の腰に手を回し、そして

「どっせええええええいつ！！！」

「うひいっ！」

それは引っ張る、というよりもゴツチ先生も真っ青な、完璧なジャーマンスープレックスだった。

視界がぐるんと回り、気が付いたら頭上には固そうな地面が……うへえ、こりゃ受け身は無理だあ……

「うぶあー！」

俺は脳天から地面に叩きつけられた。

「おおー！やった！開いたわよ！」

「おや、取っ手も外れてしまったようだね」

「やりすぎちゃったかなあ……」

薄情な女達の声ってのは地中でもよく聞こえてしまうもんだ。

だが、俺はめげないぜ！

両手を踏ん張って地面から頭を引き抜くと、彼女達に向かって『俺は大丈夫』のVサインを作ってみせる。

「何？もう一回やりたいの？」

「ち、ちがうっ！』二回目も頼む』のサインじゃないっ！」

「それは後でいくらでもやってももらえるよ。とりあえず中に入って何かあるか見てきてくれ」

「え？俺一人で！？」

「だって、別に『拒絶の輝壁』が無くなったわけじゃないんだもの。あなたが通り抜けるしかないのよ」

「マジか……一人は、なんだかイヤだなあ……」

「もう！私だって中に入りたいわよっ！いい？何かスイッチがあったら適当に押してみることに。何か珍しげなものがあったら必ず持つてくること」

でも、そんなの持ってきてても、ここを通り抜けるときに粉々になっちまうんじゃない？

とは思ったが、今の状態で水を差すのは良くないかも。

とりあえず彼女達の気が済むならそれでいいだろうと思いついて、俺は扉をくぐった。

「ワーオ、すげえ……」

俺はあんぐりした。

そう広くない部屋の中は、ファンタジーとは程遠い、まるでコンピュータールームだった。

壁に埋め込まれた大小のモニター群。

キーボードのようなパネル。

そして、手術台のような台の上には、埃を被ったあのマシンが……

(ア、アルヴァンって一体何者なんだ……？)

実は異世界から召喚されたNASAの関係者とかか？

とりあえず、外界とはケタ違いの文明度の高さだけは窺い知ることができる。

(そ、そうだ、とりあえず、何か……)

ブルミエルの言いつけどおり、何か珍しいものが無いか探してみる。
うーむ……何も無いな……

(となると、手当たりしだいにボタンを押すか……?)

俺はコンソールパネルの前に立った。

(しかし、気が進まねえなあ……)

だって、このボタンを押した事によって何が起きるか分からないんだぞ？

この手術台の上のマシンの起動ボタンかもしれないし、ことによると、この施設の自爆ボタンかもしれない。

後者だったらどうすりゃいいんだ。

三人の女の子の亡骸を抱きかかえ、涙を流しながら燃え盛る廃墟の中に立つ不死身の勇者。

図柄としては超格好良いけど、そんなバッドエンドはごめんだ。

(うーむ、押すか？それとも色々押したけどやっぱり動かなかったってことに……ん?)

大いに逡巡しながらパネルを見つめていると、一つだけ、緑色にぼんやりと光っているキーを見つけた。

それは本当に淡い、今にも消えてしまいそうな弱い光で、まるで長いこと誰かに押されるのを待っているようにも見えた。

俺は引き寄せられるようにそこへ手を伸ばし……押してみた。

押してからちょっと自分の軽率さを後悔したが、爆発は起こらない。

代わりに、目の前の小さなモニターに、ブン！と画像が現れた。

「うお！」

『アリアス。これが妾の、最後の言葉になるじゃろっ……』

画面に現れたのは、一人の少女だった。

鮮明な画像ではないが、見た目は十二、三歳の、とても可愛らしい黒髪の少女。

だが、一番目を惹くのは、悲しげだが強い意志を湛えている大きな瞳だった。

彼女は、画面を通して切実に訴え始めた。

『ここはとうとう奴らに嗅ぎつけられてしまったようじゃ。妾は一つの希望とともにここを封印することにした。アリアス、そなたがこの場所を訪れ、これを見てくれることを祈っておる』

少女の切迫した物言いから考えて、どうやら、この施設が誰かに襲撃されているらしい。

この部屋の外の、あの無残な破壊の痕はどうやらその名残なんだろう。

『妾も生きて逃げられるかどうか分からぬ。再びそなたに会えることも、おそらく無いじゃろっ』

少女は必死に涙が零れるのを堪えているようだった。

見ているこちらの胸も、ギュッと締め付けられるようだ。

『ゆえにアリアス、そなたにはこの場を借りて礼を言わせてもらっぞ。ありがとう……』

少女はそこまで言うと、気丈にぐいっと目元を拭って、真剣な顔に戻った。

『……良いか。機械オンチのそなたにも分かりやすいように、起動コードは簡単にしてある。目の前のコンソールパネルの最下段のキーを、右から順に押していくだけで良い。簡単じゃろ？それである子が起動する』

あの子？

『起動した後のことは、妾にも分からぬ。あやつを止められるかどうかは……』

少女は遠い目をしていた。

強気な言葉遣いとは裏腹に、不安の滲み出るその顔。全く知らない少女なのだが、俺は気がつくやうに画面に手を伸ばしていた。

この手が届くはずなどないのに、守ってやりたい、支えてやりたいと、そう思ってしまう。

と、少女がふつと微笑んだ。

どこか満足そうな、それでいてこちらを慈しむような、そんな優しい笑顔だった。

『アリアス。私のアリアス。ずっと一緒にいたかったよ。過去も、未来もずっと……』

画像はそこで消えた。

(……………)

最後のはすごく個人的な言葉だったし、俺に向けられたものではないのも分かっている。
でも、何故だか俺の瞳は潤んでいた。

ここは封印されたままだった。

じゃあ、この思いはアリアスに伝わらなかったのか？
だとしたら、あまりにも悲しすぎる……

俺に出来る事はなんだろう。

そんなことを考える前に、指先が動いていた。
最下段のキーを、右から順に。

ピッ、ピッ、ピッ……

全て押してやったぞ。

さあ、何が起こるんだ？

お粗末くん

壁に据え付けられた色とりどりのランプがテカテカと発光しはじめる。

すげえぞ、昭和のスーパーヒーローの基地みたい！

キュインキュインだのピピピッだのという機械音が聞こえ、俺の期待はいやでも高まっていった。

『最終コンディション確認』

機械的な音声が聞こえ、手術台の上のマシーンが額のランプをテカテカと明滅させる。

天空の城を守っていそうなのこのロボット兵士が、何らかの切り札だったのだろうか。

果たしてどんな能力を……ゴクリッ……

『起動シマス』

おおっ、よし、来い！

と身構えたところで、いきなり背後の壁がゴーン！と開いた。

そ、そっちかよっ！

じゃあ、何？ここに寝そべってるロボット兵はフェイク？

俺が慌てて振り返った時だった。

「……………」

俺は見た。

そいつの姿を。

背の高さは2mくらいだろうか。

金色に輝くそのボディ……

光る大きな目……

中古のワイパーを繋ぎ合わせたような貧弱な手足……

「ぶふうっ！」

俺は耐えきれず吹き出してしまった。

何コイツ!?クオリティ低うっ!!

中国製のトランスフォーマーみてえ!!

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ! な、何コレ……ヒーツ! ヒーツ! は、腹痛ッ……!」

俺は腹を抱えて笑い転げてしまった。

さっきまであんなに悲壮感漂う映像を見せられたのも、この爆笑を引き出す為の大いなる前フリだったとしか思われないほどにそいつの姿は素っ頓狂だった。

こいつが最後の希望だと……? ううっ! ま、また笑っちまいそう!

「問オウ……」

「は？」

「アナタガ私ノマスターデスカ？」

「……ぶっ!」

ア、アリアアアアアアアスッ!!

もう助けてくれッ!!

こんな痛々しい外見なうえに中身はサーバント気取り!?

もう異次元過ぎて腹筋がねじ切れるウ……!!

「マスターデスカ？」

「マ、マスターかそうじゃないかって言ったら俺はマスターじゃない……ヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「マスターデハナイノデスカ？」

「うん、まあ、そうだ」

「デハ、撃退行動へ移行シマス」

「へえ……って、な、何っ!？」

俺は見た。

シャコツ!とロボット兵の股間部が開き、そこからよっきりと小型のミサイルらしきものが顔を出したのを……

「お前、それは下品……!」

「『ハイペリオン・ミサイル』。発射シマス」

「うおおおおおっ!？」

そのハイペリオン・ミサイルはボシュウ!という噴汽音とともにへ口へ口とこちらに飛んできて……

「ぬお!」

ドパン!と俺の目の前で爆発した。

しよばい見た目のミサイルだった割には結構派手な爆発で、俺の身体は爆風で大きく吹っ飛ばされ、石の壁を突き抜ける。

「ぐっはあああああ!」

「うわ、ケンイチ!びっくりしたあ!」

気がつくと、俺は瓦礫とともにプルミエル達の足元に転がっていた。

腹のあたりからはまだブスブスと煙が上っている。

「もー、どうしたのよ？部屋の奥でアホみたいな笑い声が聞こえたかと思っただら……」

「や、やられたっ……ハイペリオン・ミサイルに……」

「はいペリオんみさいる？」

「だが、気をつけるっ！奴の真の武器はそれではない……」

「さっきから何を言ってるんだ、君は？」

「あいつを見れば分かるぜ……そら、来た！」

もうもうと垂れこめる煙の向こうから、ガシャコン、ガシャコンとゆっくりとこちらへ向かってくる奴の足音が聞こえる。

おおやべえ、思い出しただけで笑っちまいそうだが、厄介なのはあの猥褻物陳列ミサイルだ。

この狭い遺跡の中であんな物が何度も爆発したらエライことになる。やむを得ないな……

「待てッ！俺だ！俺がお前のマスターだっ！」

「！」

煙の向こうでロボット兵の動きが止まった。

「マスター……ヤッパリアナタガ私ノマスターダッタ」

「そ、そうだ」

ゆっくりとロボット兵は姿を現した。

俺はまた笑っちまわないようにしっかりと下唇を噛んでそのビジュアルシヨックに耐える。

金色のヤカン頭が見え、続いてドラム缶のような胴体、アメンボのような細い手足。

うつつ、やっぱり『変形金剛』（中国語でトランスフォーマー）にしか見えない！

「マスター、御命令ヲ」

「すごーい！格好良いつ！」

アリイシャが突然叫んだ。

俺はその言葉に思わず耳を疑ってしまう。

冗談で言っているのかと思ったが、その目の輝きはマジだ。

「え？か、格好良い……だと？」

「すごいですごーいつ！ね、触ってもいい？いい？」

「ドウゾ」

「うわー、すごーい！おおっ、カッチカチじゃん！」

「ほう、これは大したものだ」

「待ちなさいっ、私にも見せなさいよー」

な……？

意外な女子人気……

俺は呆然とした。

「ま、待ってくれ、これのどこが……」

「これは魔芯兵器の中でもかなり異質だよ、ケンイチ」

メイヘレンがロボットの関節部を覗きこみながら言った。

「実に珍しい。こんな魔芯兵器は見たことが無い」

「ああ、分かるぜ。今までの奴らはもっとしっかりしてたけど……

こいつはヤバイよな」

今までのマシーンは各部が胴体と足腰がガツシリ頑丈で、無機質なイメージだったが……

「あ、お前、名前なんていうんだ？」

「固有機体名八登録サレテイマセン」

「呼び名は無いのか……」

「登録ナンバーデスカ？」

「おお、それでいいや」

「『R-18』です」

「……ぷっ」

俺は口を押さえて必死に笑いを堪えたが、もう、腹筋が限界に近づいている。

『R-18』って……お前はポルノ映画かつ！

そっぴゃさつきは股間からミサイル出してたし……確信犯か？

「R-18は何の為にここに？」

R-18の股下に潜り込んでいたプルミエルが、そこから這い出しながら尋ねた。

「マスターヲ待ツテイタノデス」

「？」

「私ハマスターニ従ウヨウニトダケプログラムサレテイマス。アトハ自律行動ニヨリソノ命令ヲ補完シマス」

マスターってのはアリアスって人の事なんだろう。

だが、この研究所の風化具合を見ると、もうそいつも生きてはいないだろう。

「ケンイチ、とりあえずこの子を連れて行きましょう。馬車の中でじっくり検分させてもらおうわ。自律した思考を持つ魔芯兵器ですって……？うおお、燃えてきたぁーッ！」

「おいおい、私にも見せてくれよ。素晴らしい素材だよ、これは」「あ、ずるいつ！R-18は皆の物だよっ」

な、何だ……この敗北感は……

あんな粗末な見てくれのロボットがハーレム状態に？

俺はあのヤカン頭を思いきり引きちぎってやりたい衝動に駆られたが、そんなことをすれば女子連中からの激しいバッシングに晒されることは請け合いだ。

「マスター、御命令ヲ」

「あん？そうだな、さっさと表に出ようぜ」

「了解シマシタ」

「俺がマスターだぞ。忘れるなよ」

「ハイ」

「だから、ちょっと女子人気があるからって抜け駆けするなよな」

「……」

「だ、黙ってんじゃねえよっ！」

俺達は出口に向かって歩き始めた。

外に出ると、最悪の事態が待っていた。

「よう、ケンビシ。いらねえ道草を食ったもんだな」

「ア、ア、アガシッ！！！」

「『サー』はどうした」

「サ、サー・アガシツ!!!」

そう、あのGOD姐ちゃんとその部隊が遺跡の入口を取り囲んでいたのだった。

「ケンイチさん、追いつかれちゃったみたいですよ」

イグナツイオが呑気に言う。

鎧兵によって喉元に剣を突き付けられながらも、奴は相変わらずだ。

「あちゃー、めんどくさいことになっちゃったわねえ」

「執念深い女だな」

「ね、あの人、耳尖がつてるよっ！エルフだよねっ？すごいよねっ」

……女達もいたって冷静だ。

ただ一人、エステイ老師だけが馬車の前で地面に額を擦りつけながら兵士達に命乞いをしているのが遠目に見えた。

「マスター、コレハドウイウ状況デシヨウ」

「おおっ、R-18!」

そういえばこつちには新戦力がいるじゃん！

よし、ここはこいつに働いてもらおう。

「今、けっこう困ったことになっている。お前、この状況を何とか打開できるか？」

「具体的ニドウスレバイデシヨウカ」

「全員が無傷で、なおかつ火急的速やかにあの馬車に乗り込んでこの場を脱出できれば百点満点だ」

あのハイペリオン・ミサイルでも敵陣の中に一発放り込んでくれれば、それだけでも大チャンス到来だ。
馬車にさえ全員が乗り込みさえすれば、何とかなるだろう。

「ミサイルは？」

「ハイペリオン・ミサイル八残弾ガアリマセン」

「ええっ!？」

何コイツ!

そんな貴重な一発を俺に使ったの!?

後先考えろよ、もう!

「ほ、他に何か武器は無いのか……?」

「『デストロイド・モード』」

「おおっ!そつ、それだっ!デストロイしてやれ!」

「シカシ、コレ八禁断ノモード……」

「俺は大丈夫、さあ、いけ!」

「ケンビシ!おい!テメエ、何をコソコソと話してやがる!」

俺達の内緒話に、アガシは眉をひきつらせていた。

怒り心頭といった様子だが、そんな態度も今のうちだ。

「アガシ、不運だったな。この最終兵器R-18が、あんた達に優しい眠りの旅をプレゼントするぜ」

「あん?」

「さあ、今こそ見せろ!『デストロイド・モード』!」

「発動シマス」

ペカツ!とR-18の目が光ったかと思うと、その体が大きく天に

仰け反った。

「アパウウウウウツッ!!」

ぶわつと巨体が宙を舞い、ズシンと大地を揺らしてアガシの前に降り立つ。

「な!?!」

「スキャン開始……」

「な、なんだっ?」

アガシは完全に面喰ったようで、目の前に立つロボット兵に圧倒されて、二、三步後ずさった。

R-18は目をピカピカと明滅させて、アガシを素早く分析しているように見える。

「スキャン完了」

「お、おおっ」

そして、R-18はこちらに振り返ると……

「身長182cm、体重66kg、B91、W63、H88……経
験人数……ゼロ」

「……」

「……」

「……」

「へえ、意外だなあ」

最後に間抜けな感想を洩らしたのはイグナツィオだったが、その他の人間達は完全に凍りついていた。

やヴあい、これはやヴあいよ……

「ちよ、おま、何してんだよツ……!!」

「『デストロイド・モード』デス」

「はああああ!?そ、それが!？」

「プリントアウトシマシヨウカ？」

「い、いらねええええええよつ!!」

スリーサイズに関してかなり思うところはあったので、ちょっと気になったが、今はそれどころじゃねえ!

「アガシ様……結構あるな……胸」

「経験人数、ゼロ……だと……?ア、アガシ様って、確か今年で3

0……」

「す、すげえ……アガシ様すげえ……いろんな意味で」

兵士達がざわつき始めた。

当のアガシはというと……

「……」

俺はその時、彼女の後ろに、揺らめく鬼の影を見た。

あ、あれは魔闘気……

僕達は多分、殺されるだろう……

「逃げるわよっ」

と、ここで突然ぐいっとプルミエルに腕を掴まれ、俺達は馬車に向かって走り出した。

アライシヤは軽やかに飛ぶと、ひょいとR-18を担ぎ上げて走る。

イグナツイオは大きく後ろに倒れ込みながら、気の逸れた兵士の剣先を蹴り飛ばすと、クルリと宙返りをして素早く御者台に飛び乗った。

メイヘレンはその長い足で二人ほど兵士を薙ぎ倒してエステイ老師を救い、そのまま老師を馬車の中へ押し込む。

「す、すげえっ……な、なんつー好連携！」

彼女らの一連の動きはまるで何度も練習してきたかのように手際が良く、かつ、迅速だった。

「てめえ！逃がすかよッ！！！」

うお、怖ッ！

乙女の秘密を公衆の面前で暴露されたアガシが、鬼の形相で剣を抜き、こちらに迫ってくる！

兵士たちも我に返って、それぞれ手槍を掴み、こちらに向けて勢いよく投げつけてきた。

それがブスブスと足元の地面に刺さっていき、まさに槍畑だ。

「おわぁおっ！」

「ほれ、早く乗る乗る！」

思わずのけぞった俺を、プルミエルが馬車の中へと押しやった。

「うへえ」

「アライシヤも！」

「出していいよっ！屋根に乗るからっ」

「イグナツイオ！」

「はい」

ぴしいと鞭の音がして、馬車は森を猛然と駆け出した。

俺達 BEAST

疾走する馬車の中で俺は、はあく深く溜息をついた。

「最近いつつもこんなのはつかだな。たまにはのんびりしたいもんだ……」

「君が勇者である以上しょうがないな」

意地悪な笑みを浮かべてメイヘレンが言う。

まったく、他人事だと思って……

「勇者ト八何デスカ」

R-18がピコピコと目を光らせて聞いてきた。
その問いにプルミエルが答える。

「異世界から召喚された人よ」

「異世界デスカ」

「そう。そして、勇者は一時間おきに世のため人の為になることをしないと死んでしまうの」

「マスター、死ヌノデスカ」

「何もしなければね。働きアリみたいでしょ」

勇者「働きアリ、という身もフタも無い構図に俺は思わず涙が出そうになった。

勇者に対する敬意や畏怖の念などこの世界には無い。

それでも生きていく……

「と、いうわけで『勇者タイム』が切れたらケンイチは死ぬの」
「ナルホド、時限式ノ寿命トイウコトデスネ」
「そつだ。見る。これが俺の命を蝕む時の鎖だ」

俺はR - 18に向かって勇者タイマーを見せてやった。

「『18:25』……」

「お、そろそろ残り少なくなってきたな」

ああ、面倒くせえなあ。今度は何をしよう……

この煩悶は主婦が晩御飯の献立を考えている時のそれに似ていると思う。

いや、似てるからどうということはないんだけどね。

「……マスター、私ハ『勇者タイム』ヲ同期シマシタ」

「え？どういこと？」

「コレニヨリ、『勇者タイム』ノ制限時間10分前ニ、マスターノ『勇者タイム』更新ヲ手助ケシマス」

「？」

「おおー、よかったじゃない」

「いや、イマイチ意味が良く分からないんだけど……」

意味が分かったのは8分後だった。

「シエイ！」

急にR - 18が立ちあがったかと思うと、ひよる長い手を突き上げ、ボスつと馬車の天井に穴を開けた。

「うおーど、どうしたっ！？とうとうイカれたかっ！？」

「……マスター、天井二穴ガ……」
「見りゃ分かるよ。あーあー、雨降ったらどうするんだよ。ちゃんと直しとけよ、もう」

その言葉にゆっくりと首を振ると、R・18はポン、と俺の肩に手を乗せる。

「アナタガ直スンデスヨ」
「は、はあー!？」

な、何言ってるんだ!？
喧嘩売ってるのか?コイツ!ぶっ壊すぞ!
驚きのあまり、啞然とする俺にアリイシヤがそつと耳打ちしてきた。

「ねえ、天井を直して『勇者タイム』を稼げってことじゃないかな?」
「な、何い……?」

俺が睨むと、R・18は肯定を示すようにピカピカと目を光らせた。

(な、なんか腹立つ……)

だが、俺の為に、という熱意は伝わった。
ここは素直にその厚意を受け取ることしよう。

「ありがとうな、R・18。じゃ、直すぜ」

俺はほんの少しだけ馬車を止めてもらって、その間に急いで応急の端材になりそうな物を探す。
ちようど大きな木があったので、その皮を引っぺがして、それを馬

車の天井に上つて二重三重に釘で打ちつけた。
これで雨風はある程度しのげるだろう。

『59:50』

よしよし。

勇者タイムの更新を確認してからイグナツィオに声をかけると、また馬車は激しい勢いで走り始めた。

「結構役に立つじゃない。R - 18」

と、プルミエルが言う。

「まあ、そうだな……」

俺はとりあえず曖昧に返事しておく。

ううむ、何だ？この釈然としなさ。

今まで自発的にやっていたことを、他人からやりなさいと言われると妙に抵抗を覚えてしまう。

俺って天邪鬼なんだろうか……

その後もR - 18はさまざま面倒を起こしては俺に解決させた。

股間部分からモクモクと煙を出して俺に換気させたり、腕の関節部分のネジ締め直させたり、突如として謎の液体を吐き出して、ビシヨビシヨになった机の上を拭かせたり……

まったく、とんでもないトラブルメーカーを抱え込んだしまった。

これじゃ俺は勇者じゃなくてクリーンキーパーみたいだ。

自分一人で勇者タイムを稼いでいた時に比べて、半端じゃない忙しさだった……

森に入って、二回目の夜になった。

「皆、さらばだ……俺はもう疲れたよ……」

「だらしないわねー」

「マスター、シツカリシテクダサイ」

「オメエが言うなっつーの！」

「もう明日の昼には森を抜けますよ」

イグナツイオはそれだけ言うと、水の入ったバケツを置いて馬車から出て行こうとした。

今日も外で雑魚寝するつもりなんだろうか？

変なところで真面目な奴だ。

そんな勤労青年をエステイ老師が呼びとめる。

「あー、イグナツイオくんや、君はどこで寝るのかね？」

「外で寝ます」

「へっ？あのポンコツをどかせば君も寝られるじゃろっに」

「でもケインイチさんと一緒にいるとムラムラ殺したくなってくるんですよねえ」

「……」

やっぱさっきの無し。

こいつはただの変人だ。

レクター教授も真つ青の殺人狂なのだ。

「私ハポンコツデハアリマセン。R - 18デス」

「何でもええわい」

「違っでしょ、R - 18。こっいつ時はなんて言っか、さっき教え

たでしょ」

プルミエルがソファアの上に立ってR・18の頭部をいじくりまわしながら言う。

「ガタガタヌカスナ、タコヤロー」

「な、なんじゃとおっ!？」

い、いつの間に教えたんだ……君はジョン・コナーなのか。

俺が心の中で突っ込んでいると、ポン、と何かを思い出したようにイグナツィオが手を叩いた。

「そういえばケンイチさん。この近くにアレがあるらしいですよ」

「ん?何だよ。お墓とかそついうのだったら聞きたくないぞ。肝試しキライなんだ」

「メイド喫茶ですよ」

その単語が出た瞬間、R・18と口論を繰り広げていたエステイ老師が、急にむつつりと黙り込んだ。俺は驚いてイグナツィオに聞き返す。

「メ、メイド喫茶あ!？」

「はい」

「こ、こんな森の中につ!？」

「みたいですね」

「な、なんで!？」

「知りません」

「……」

と、ここでエステイ老師が静かに立ち上がると、そのまま無言で馬

車を出て行った。

「?????」

「行ったわね……」

ブルミエルが呆れ顔で言う。

「行ったって……メ、メイド喫茶に!？」

「君も行きたいなら行ってきたらどうだ。ほら、お姉さんがお小遣いをあげよう」

メイヘレンは愉快そうに眼鏡を鼻の上に押し上げると、懐から金貨を五枚取り出して俺の前に置いた。

俺の心は激しく揺すぶられる。

(ほ、本音を言えば……い……行きたいっ……異世界のメイド喫茶っ!)

「やだなあ、ケンイチ、なんか目が怖いよう」

「アライシャ、男はいついかなる時も一匹の獣なのよ。覚えておいた方がいいわよ」

「マスター、ゴ一緒シマシヨウカ」

「あ、ダメダメ、あんたは私にその身体の隅の隅まで見せるのよ」

女達は気にも留めていないようだが、俺は金貨を見つめながら煩悶していた。

こ、ここで出て行ったら、何かに負けた気がする……

「行けばいいじゃないですか、ケンイチさん」

イグナツイオがしれつと言つ。

「金貨が五枚もあつたらオムライスの上にケチャップで字を書いてもらえるかも」

「ええっ！？こ、こつちの世界でもそうなの？」

「そんな話を聞いたことがありますよ」

「ま、まさか、オプシヨンも……」

「任意で『ご主人様』か『お兄ちゃん』で呼んでくれるとも聞きませんでした」

「そうかあ……」

俺の腹は決まつた。

海は死にますか

山は死にますか

メイドはどうですか

俺は金貨を大事にポケットにしまつと、静かに馬車を降りた。
誰も俺を止めなかった。

そう、男は誰もが一匹の獣なのだ。

メイド喫茶 『深夜から夜明けまで』

「覚悟はできておるな、ケンイチ」

エステイ老師の言葉に、俺は力強く頷いて見せた。
もはや退路は無い。

俺の決意に、老師も満足そうな笑みを浮かべた。

「して、お主どうするつもりじゃ」

「?……と、仰いますと?」

「『呼び名』じゃよ」

「呼び名……?」

「『ご主人様』か『お兄ちゃん』かという事じゃろうがあっ!」

「!……」

俺は身体に電撃が走ったように立ち竦む。

同時に自分あまりにも迂闊だったことに気付いた。

(それは考えてなかったな……)

そして、改めて目の前の建物がどういふ施設なのかを思い出した。

そう、ここは例のメイド喫茶の店前である。

洋風のこじんまりとした一軒家だったが、決して貧乏くさくは無い。
白塗りの壁に赤い屋根、という、森の中では一際目立つ外観である。
ハート形にくり抜かれた窓から漏れてくる光は、周囲の夜の闇を暖
かく和らげているようだった。

「わしは『ご主人様』でいこうと思う……」

エステイ老人がそう呟いた。

俺も思わず唸る。

ベタではあるが、良いチョイスだ。

相手がメイドである以上、それより他に最上と思われる呼ばれ方は無い。

『ご主人様』か……男の征服欲と嗜虐心を満たす魔性の言葉だ。だが……

「俺……『お兄ちゃん』でいきます」

「な……!？」

俺は『妹萌え』の錦旗を掲げ、茨の道を行く……

単純にエステイ老人と同じ呼ばれ方が嫌だったというのもあるが、それ以上に『お兄ちゃん』という言葉の持つ神韻を踏むかの如き妙なる響きに抗えなかったのだ。

主従の関係にあるはずのメイドに馴れ馴れしく『お兄ちゃん』と呼ばれるという、二律背反の精髓がそこにはある。

「ケンイチ……」

「『お兄ちゃん』でいきます」

改めて言う。

「そうか……いや、何も言つまい」

「老師……」

俺達は互いに頷きあって、扉のノブに手をかけた。

木が軋む音をたてながらゆっくりと扉は開いていく……
来い、メイド！

「よお、よく来たな」

「……」

『おかえりなさいませ ご主人様』を期待していた俺達は、完全に凍りついた。

罵声と怒号が飛び交い、むせ返るような酒の匂いと煙草の煙が立ち込める店内。

そこで俺達を出迎えたのは、ツンデレでもドジっ子でもなく、ましてやメイドですらない。

敵ついムキムキ男たちだったのだ。

おまけに全員、恐ろしく人相が悪い。

顔中にピアスを開けたジャンキー風のモヒカン野郎や、たった今地獄から生還したような傷だらけのスキンヘッド男、その他、様々なコワモテの博覧会だ。

どいつもこいつも、その首にそこそこの賞金がかかっていることだけは間違いない。

俺と老師はあまりの恐怖に、ドアの前に突っ立ったまま、互いの手を握り合っていた。

「まあ、入れよ。そこに座って一服しろや」

リーダー格らしき男が進み出て言う。

黒革の眼帯をつけたノッポのマッチョだ。

メイド喫茶で言うところのメイド長なのかも……って、んなワケあるか！

毛皮を腰に巻いてはいるが、上半身はほぼ裸に近い格好だ。

その毛皮の蔭からはおそらくは血であろう赤錆のこびり付いた鉈が

見える。

俺達二人は生きた心地もしなかったが、とりあえず言われた通り、席について身を固くする。

向かい合って座った老師は、顔面が蒼白になっていた。

口の中で何事かブツブツ吹き、現実逃避に取り掛かっている。

「あの……ここは……」

「あん？決まってるだろう。ハミ出し者の楽園、『冥土喫茶』だぜ」

はー！ー！ー！間違ったあー！！

イメージしてたのと全然違うよん！！

イ、イグナツイオの野郎……！！

「こんな夜中にこの辺をうろついてるってことは、テメエらもお仲間だろう？」

「は、はあ……」

「ほれ」

と、ここで眼帯マツチヨはすつと一枚の羊皮紙を俺の前に広げた。そこには何やらミミズののたくったような字が書きなぐってある。

「こ、これは……？」

「喫茶だからな。何か頼めや」

「あ、あー、はいはい、メニューッスね……」

「オススメは『ガダラハランの葉巻』と『タングル・パオの純製酒』だ。キクゼ、こいつはよ……」

ち、違うッ！！

俺が期待してたのは『みつくちゅじゅーちゅ』とか、『萌え萌えオムライス』とか、『にゃんこの憂鬱パフェ』とかッ！！

「早く頼め」

「は、はいっ……えーと、じゃあ、『タングル・パオ』？それ一つ」
「ほお……若いのに豪気だな。気に入ったぜ」

男はニヤリと笑うと、店の奥へゆっくりと引っ込んでいった。

うつつ、何が出てくるんだ……？

暗澹たる気持ちでその広い背中を見送る俺に、隣の席に座っていたジャンキー風の男が身を乗り出して話しかけてくる。

「へ、へ……こんなとこに何しに来たんだ、ボーイ」

誰かにぶん殴られてもしたのか、そいつは前歯がごっそり抜け落ちていた。

そんな面でヘラヘラ笑いながら身を乗り出し、長い舌をチロチロと動かしながら喋る。

「わかつてるぜえ。『冥土喫茶』の名前に惹かれてきたんだろお。

本物のメイドに会えると思ってなア？ヒッヒ、ホッホ、年に三人はそんな野郎が来るぜ」

「は、ははは……」

悲しい事に、俺はその指摘を否定できない。

「見るよ、あいつを……あいつもメイド目当てで来た馬鹿野郎だぜ」

俺は指さされた方向を見る。

そこには一人でグラスを傾けながら、寂しげな瞳を宙に彷徨わせている壮年の男がいた。

日焼けした肌がっしりとした体格の持ち主で、傍のテーブルには

大きな斧が立て掛けられている。

「あいつの名は『千人砕きのジャガー』。あの野郎が通った後はペンペン草も生えねえ」

「せ、千人砕き……」

「おおつと、あつちを見な」

男の指先に促されるままに、俺はその奥のテーブルへ視線を移す。

「あそこだ。ほうら、あの黒髪の野郎だ。『鋼斬りのマナベ』だぜ。へっへ、話によると剣を持たせた途端、踊るような身のこなしで敵を切り刻んじまうってよ。あいつとは関わらねえほうが身の為だ」

枯草色の着物を懐手にして、思案顔で煙管を啜っているその男は、痩せてはいるが眼光鋭く、その佇まいには隙が全く無い。

「おおう、見ろよ。あつちにいるのは『有明のジーザス』だぜ。あいつに『ロマンス』されちゃあ、もうお終いよ……」

「ジーザス……?」

その名前、どこかで聞いたことがあるような……

「!」

俺はその男を見て、思わず立ち上がってしまう。

ガリガリの身体に、分厚いメガネ。

相変わらずきつちりとズボンの中に押し込まれたチエックのシャツの裾。

……そう、あいつの名前はジーザス!

俺の心にトラウマじみた苦い回想が渦を巻く。

『S・Y・S団』……

あのイカレた軍団に属していたイカレ野郎の中の一人がジーザスだ。

「メイドがないいい！メイドがないいい！」

そのジーザスは自分の席でメタル信者か駄々っ子のように長髪をブン振り回しながら叫んでいる。

奴もおそらくこの冥土喫茶の罠にハマってしまったのだろう。

あまりにもその様子が痛々しかったので、俺はあえて見て見ぬフリをすることを心に誓った。

あの頭のネジが弾け飛んでた団長はどこへ行ったんだろう……？

「へっへ、可哀想にな」

「そっツスね……」

というか、さっきまで紹介してもらってた『千人砕き』とか『鋼斬り』とか言われてた人たちも単純にメイド見たさにここに来てたってこと……？

「メイドはどこにいるんじや……」

悲しげに老師が呻いた。

「メイド？メイドはもうすぐ出てくるぜ」

「え？」

「ま、楽しんで行けよオ」

歯抜け野郎は気味の悪いウインクを残して、また自分の席に着き、

でかい葉巻を吹かす。

恍惚とした表情で虚空を見つめるジャンキーには、もう何の質問をしても無駄そうだ。

それにしてもメイドがもうすぐ出てくるってのはどういいうわけだろうか？

「老師、注文したのが来たらすぐにここを出て行きましょう」

「それがええ。それが吉じゃ。ここにはメイドはおらんかった。いや、本当はどこにもいないのかもしれない……」

「老師、諦めたら駄目だ。この世界のどこかに必ずメイドはいるはず……」

「そうじゃな……わし、膝枕してもらおうじゃ……」

「俺は耳掃除……」

とどまるところを知らない二人の妄想に水を差したのは、前方からワツと起こった歓声である。

それと同時に、ムーディなギターの音が店内に流れ出す。

「?」

俺は歓声の上があったほうに目をやると

「な、何っ!」

大声を上げてしまった。

そこにいたのは、メイド服に身を包んだ妙に色っぽい女が……

「ろ、老師!メイド!メイドですよ!」

「な、何じゃとオ!」

と、ここで先程の眼帯マツチヨが一段高い演台に上がった。

「てめえら、よく見る！そしてひれ伏せ！妖艶なるメイドの中のメイドにして虚ろなる王……その名も『地獄のベロニカ』！」

うおおっ！と地鳴りのような男たちの歓声上がる。

すると、演台に上がったベロニカはクネクネと淫らな腰つきで肢体を揺すり、踊り始めた。

宙に振り乱す燃えるような赤い髪。

むっちりとした量感を持つお尻。

メイド服がはちきれんばかりの豊かな胸の谷間。

真っ赤な唇からは時折チロチロと舌が出て、卑猥に蠢く。

俺と老師はそのエロチシズムに釘づけになっちまう。

こ、これってストリップ……？

「ワーオ、すっげえ……う、鼻血が……老師、ティッシュ持ってますか」

「ほれ。まったく、ヤラシイのお……あ、もうちょっとでパンツ見えそう……」

「ノン！あれはメイドではないのデス。メイドの名を汚す紛い物ナリ！」

「うおう！ジーザス！？」

い、いつの間に俺達の傍に！？

「んん？？吾輩を知っているキミ達は吾輩の知っているキミ達ですか？」

「い、いや……初対面……だぜ……」

「左様でござるか。それにしても嘆かわしいですナ同志」

ジーザスは眼鏡をクイツと上げて、鼻息を荒げた。

「メイドとエロスは相反するもの……言うなれば水と油。そう、清楚、貞淑、従順こそがメイドの真髄！それをあのよう……！吾輩は断固拒否する！抗議する！」

「うーむ、まあ、その主張は分からんでもないかな」

「そうでしょう。そもそもデスな……」

ジーザスのメイド講義が始まりそうになった時、前方で絶叫が上がった。

「うひひひひひひひあつ！！」

それは断末魔に近い、魂が途切れるような悲鳴だった。

「な、な、なんじゃっ？」

「いや、俺にもさっぱり……！！」

「アウチ！アレを見るデス！」

ジーザスの指さした先にはなんと、先程まで踊りくねっていたベロニカが口から鮮血を滴らせながら仁王立ちしているではないか！その異様に赤い口がにと笑い、それと同時にメキメキと音を立ててベロニカの身体が変形していく。

「う、うおっ、なんだありゃあ!？」

「『ナイトストーカー』じゃ！ここは奴らの巣だったんじゃあ！」

老師の声とともに、その魔獣は雄叫びを上げた。

まるで地獄の底から突き上げるような、凄まじい咆哮だった。

ストレンジ・ナイト

阿鼻叫喚。

まさに店内は地獄絵図の様相を呈していた。

店の店員達が至る所でバキバキと変形して、そこから現れた毛むくじやらの獣たちが咆哮する。

熊のように大きな身体。

頭だけが頭蓋骨を剥き出しにしたようにつるりとしていて、その落ち窪んだ眼窩には冷たい光がチロチロと燃えていた。そいつが近くにいた男の喉に噛みつき、低く唸る。

「ウ、ウ、ウマウマ……！」

当然、あのダンスの事ではなく、獲物の味についての感想だ。

逃げ惑う客達が、次々とその牙や爪に引き裂かれ、悲鳴をあげる。

俺と老師は、素早く机の下に滑り込んだ。

「な、な、なんだ、こりゃ!？」

「えらいこっちゃ……!!」

「ろ、老師、ナイトストーリーカーって何です?」

「奴らは夜の獣じゃ!人間どもをここにおびき寄せて食らってたんじゃないあ!」

「ど、ど、どうしましょう!?!」

「知らん!わしが聞きたいわ!」

二人で喚きあっていると、ひよい、とテーブルの下を覗きこんでくる奴がいた。

「よ、お二人さん」

先ほど親しげに話しかけてきた、ジャンキーだった。

「ツレないじゃないか。一緒に夜を楽しもうぜエエエ」

言いながら、目の前でそいつの顔がめくれあがり、身体がバキバキと変形していく。

「うお！」

「ひい！」

素早く襲いかかってきたそいつは、鋭利な爪で俺の顔を引っ掻いた。
ズバツ！

「おうつ」

俺の顔は血まみれに……はならなかった。

逆にそいつの爪がバキンとへし折れて、どこかへ飛んでいく。
おっと、そっぴや俺、不死身だったな……

「又ア！？オマエ、メタル！？」

「おらああ！」

狼狽した獣に、俺は痛烈なタツクルを浴びせた。

もう出たとこ勝負だ。

死なないと分かっているなら、これほど気楽なバイオハザードも無い。

俺は机の下から転がり出て、身構えた。

「コゾウ！」

慌てて立ち上がりかけた獣だったが……

「頭下げな、小僧」

声とともに、ぶん！と風を切る音がした。

俺は危機を感じて反射的に頭を下げる。

すると、目の前にいた夜の獣がグシャツという鈍い音とともに、横に吹っ飛んだ。

頭を上げると、そこには厳つい大男が、大斧を肩に担いでつつ立っている。

こ、こいつは……『千人砕き』のジャガー！

「あ、ありがとうございます。助かったツス……」

「いいってことよ。ちょうどイライラしてたところだしな」

メイドに会えなかったから？とは聞けないので、とりあえず俺は「そうですね、わかります」とだけ答えておく。

ジャガーは跳びかかってくる獣たちを、次々と斧を振るって吹き飛ばしていく。

その凄まじいまでの強さはまさに『千人砕き』の名に何ら恥じるどころが無かった。

「す、すげえ！強え！」

だが、感心したのも束の間。

ちょうどジャガーの背後の死角から、獣が一匹、凄まじいスピードで突進してきたのだ。

ま、まずい、あれはかわせない……！

そう思った瞬間。

獣は突然頭から真つ二つになり、勢いはそのままに壁に激突した。

「つまらぬ物を斬った……」

あ、あいつは『鋼斬り』のmanaベ！

その美しく反り返った刀身は、鮮血に濡れてなお冴々と光っている。

「なんだあ、俺に貸しを作ったつもりか？」

「ふ……今宵はこの刀が無性に血を吸いたがっついていてな……」

ここがメイド喫茶じゃなかったから？という質問は後回しにしておこうじゃないか。

気がつくくと、店内は完全に沈静化していた。

俺達はどうやら助かったようだ。

「す、すげえ……全部倒しちゃった……」

「あたりめえだ。俺を誰だと思ってたんだ？」

「しかし、どうやら生き残りは私達だけらしいな……」

「あ、そのテーブルの下に一人、ジジイが隠れてます」

「では、そのジジイを入れて四人か……」

「いや、待て！誰だ!？」

ジャガーの指さした先には、テーブルに一人で座り、悠然とお茶をすすっている男が……

「吾輩ですヨ、同志たち」

「ジ、ジーザス！」

俺は思わず目を丸くする。

こんなにヒョロヒョロな奴がどうやってあの修羅場を生き残ったんだ！？

「お、お前、無事だったのか……」

「愚問ですナ、同志。吾輩ほどの一流プレイヤーになれば気配を消すなど朝飯前の夜食のようなもの……」

「け、気配を……？」

「便利ですゾ。吾輩が若い時には多用したものです。多少、遅刻して教室に入っても『あれ、いなかったんだ？』などと」

そ、それって気配を消すって言うより存在感無いつてことじゃん！！これ以上悲しいエピソードを聞くのが耐えられなかったので、ジーザスの言葉を手で制してから、とりあえず窓から外を覗いてみた。外は安全か？

安心してこの店を出た途端に、背後からバツサリ襲われるなんてのはごめんだ。

「……？」

窓の外で、何かが動いた気がする。

それは素早く視界の外に消えたので、ハッキリと姿は見えなかったが……

「わお、ちょっとヤバいかもしんないツス」

「ん？どうした？」

「外にも何かいるみたいっスわ」

「なに……？」

全員が一斉にハート形の窓に張り付き、外の様子を窺う。だが、周囲の闇は濃く、森は不気味に静まり返っているばかりだった。

「……見えねえな……おい、そっちはどうだ？」

「こちらからも見えん……」

「気のせいッスかねえ……」

「いや、ここは大事をとるべきじゃと思う」

エステイ老師が恐る恐る窓を覗きながら言った。

「ナイトストーカーは夜にしか行動できん。奴らは朝日を浴びると消滅する魔獣じゃからな。したがって、朝までここにいた方が安全じゃろう」

「籠城か」

マナベがぼつりと言う。

ジャガータも頷いた。

「外に出てビクつきながら夜道を歩くよりあ、堂々と朝帰りって方が気楽でいいわな」

「同感だ」

しかし、こんなに死の匂いが充満してるところで一夜を明かすなんて……

血だらけのカウンターを見て、さっきまでは恐怖で一杯だった胸にとたんに後悔や反省がこみあげてくる。

俺がもつと勇気を出していれば、何人が助けられたんじゃないか？ どうせ不死身なんだからやってみるだけの価値はあったはずだ。

こんなんじゃあ、勇者失格だぜ……

俺の暗い顔を見て、全てを悟ったようにマナベが肩に手を乗せた。

「少年、気に病むことは無い。ここに集まっていたのは全員が凶状持ちだったのだ。ナイトストーカーに殺されずとも、いずれは何処かで捕まって同じ目に遭っていただけの事……」

「でも……」

「真に人を救うことなど、誰にもできん……この俺がそうだったように」

「マナベさん……あんた……」

「湿っぽい話をするのはやめろよ。朝までは長いんだぜ」

ジャガーはカウンターの向こうへ入り込んで、そこにあった酒の栓を抜くと豪快にラツパ飲みする。

「ふう、うめえな。化け物たちにはもつたないぜ」

「あとはメイドさえいれば……」

ジーザスが余計なことを言っただけに、全員が俯いて黙り込んでしまう。

そう、すべてはメイドから始まったことなのだ……

「メイドならいるわよ」

「!?!」

店の奥から聞こえてきた声に、全員が身構えた。

そこに立っていたのは……

「べ、ベロニカ!」

そう、先ほど妖艶な媚態を見せていた化物女だ!

もう人間の姿に戻ってやがる！

「俺達が見てえのはお前みたいな化物メイドじゃねえ」

「そのような開けっ広げな脚でメイドと言えるか。絶対領域はどうした？」

「吾輩のメイドはコーヒーをふうふうしてくれるのデス！」

「わしのメイドは耳搔きもしてくれる」

言ってることは揃ってオタク臭いが、全員がベロニカに対して尋常ならざる敵意を向ける。

「あら、そう？男は皆こういうのが好きだと思ってただけど？」

「ふざけんなアバズレが。そもそもメイドのくせにタメ口じゃねえか」

「ニーソックスを履け。とりあえず」

「吾輩は白ニーソ希望ナリ！」

「わしは蝶ネクタイをキボンヌ」

「いいわよ、ただし……私のダンナを倒してからネエエエエツ！」

言うや、ベロニカがベキベキとあの薄気味悪いコウモリ怪人に変形し、カウンターの上に飛び乗った。

全員がそれに向かって身構える。

だが、ベロニカは一足飛びに襲いかかってこなかった。

「？」

その時、俺はズン、と店が揺れる錯覚を覚えた。

いや、錯覚じゃない！

ズン！ズン！と、とんでもない質量を持ったものが店の奥からこっちへ近付いて来ているのだ！

やがてそれが現れた時。

俺達は思わず口を開けてそいつを見上げてしまった。

「イキノイイエモノダゼ」

ニンマリと笑うそいつは、身長が3mはあろうかという超ヘビー級だ！

いかにもこの店が窮屈そうに首を傾けて、頭がぶつからないようにしている。

隆々とした毛だらけの身体、他の怪物どもとは比べ物にならないほど突き出した、鋭い牙。

規格外の化物の登場に、全員が言葉を失った。

「外だ！」

一瞬だけ他の面々よりも早く我に返ったマナベが叫ぶ。

それを合図に、全員が弾かれたように窓を割って外へ飛び出した。

俺とエステイ老人も四つん這いになって何とか着地する。

すると、巨大生物も俺達を追って天井を突き破って飛び出し、大地を揺らして着地する。

化物は俺の前に立った。

くそ、巨体のくせに身のこなしが軽い！

逃げ出してもすぐに追いつかれちゃうだろう。

「坊主、逃げろ！」

ジャガータが叫ぶ。

だが、俺が逃げたら腰の抜けちまってるエステイ老人が食われちゃう。

逆にジャガータとマナベに向かって叫び返す。

「俺が食われてる隙にこいつを倒せますか!？」

「何!？」

「……任せる。お前の死は無駄にせん」

マナベが剣を抜く。

「くそ、坊主、恨むなよ!」

ジャガータも覚悟を決めた様に斧を構えた。

俺は二人に向かって頷き、化物へ向き直る。

「へい、カモン!腐れゴリラめ!ジャングルに帰……ぬおおお
おおおおっ!？」

言ってる傍から俺はでかい手に掴まれて、頭をカジられる。

だが、不死身の俺の身体は奴の牙などものともしない。

顔中がヨダレでべとべとになっちまったのは痛恨だが、俺は息を止めてそれに耐えた。

「!？」

化物はうるたえているようだった。

おじいちゃんが濡れ煎餅と間違えてゲンコツ煎餅を食っちゃった時のような衝撃を受けているに違いない。

「おらあ!」

「せいや!」

二人の男の掛け声とともに、俺の身体を締めつける力が弱まった。

俺は身をよじりながら化物の手の中から抜け出す。

それと同時に、化物は喉と胸から血を噴き出しながら仰向けに倒れ込んだ。

ズウン、と大地が揺れる。

「うえっぺっぺ……ばっちいなあ……」

「坊主、無事だったか！」

ジャガーが駆け寄ってくる。

その間にマナベは跳び上がり、ベロニカを両断していた。

「くう……っ」

だが、マナベも宙で体勢を崩し、頭から地面に落下してくる。

ま、まずい！

俺は慌ててそこに飛び込んで、マナベの身体を受け止めた。

「だ、大丈夫っすか……！？」

手がじつとりと濡れる感触があつて、そこへ眼をやると、なんと、マナベの脇腹から血が流れていた。

「し、しっかりして下さい！」

「ふ、不覚をとった……」

「そんな、チクショウ！マナベさんっ！」

ジャガータもジーザスもエステイ老師も、全員が集まってきた。

「くそ、傷を見せろ」

「いいんだ……どのみち俺はもう長くない……肺を病んでいてな……」

……
「な、なんてこった……」

全員が彼を囲んでうなだれる。
そんな時だった。

「なあ、『萌え』を……」

かすれた声で、マナベが言った。

「『萌える話』をしてくれないか……」

「へ？」

「頼むよ……萌えながら死にたいんだ……」

「？」

一瞬、マナベ氏が何を言っているのか理解できなかった。
萌え？

萌えって言ったのか？

「ジャンルは？」

ジーザスが訊く。

す、するのか、萌える話……

「何でもいい……だが、ありきたりなのはイヤだな……」

「『ツンデレメイド』は？」

「あ、ありきたりすぎる……うっ、ごぶっ、ごぶっ……」

「『血の繋がらない妹』でどうだ！おい！」

ジャガーが言う。

「そ、それもありきたり……………」

「くそっ！」

「『腐れ縁の幼馴染』はどつじゃ!?!」

「だ、駄目だっ……………」

ああ、こんな時になかなか思いつかない!

もうマナベ氏の生命は風前の灯……………」

「ケンイチ! お前も何か言わんか!」

「あ、あう、えーと、えー……………」

俺はテンパって、とりあえず適当な事を言う。

「『三白眼の巫女』……………」

「なに……………」?

マナベの目が見開かれる。

全員の視線が俺に集中した。

「巫女なのに三白眼だと……………」?

(だ、駄目か……………)

「詳しく聞かせてもらおうか……………」

い、いいのか……………」

だが、俺はとりあえず一生懸命説明してみることにした。

「可愛いし、性格は悪くないし、近所の評判も良い。でもちよっ

と目つきが悪いせいで、それをコンプレックスに感じているフシがある娘なんですよ。だから、男子をちょっと避けてしまっているんです」

「学生か!？」

横からジャガーが食いついてきた。

「はい。放課後はまつすぐ帰ってきて境内を掃き掃除してます。先祖代々の巫女さんです」

「家事は……」

「全部完璧にできます。でも、恥ずかしいから周りに吹聴したりはしませんね」

「妹がおるな!」

設定をつけ足して来たのはエステイ老師だ。

「いますね。姉と違ってのんびりした風貌です」

「ドジっ子デスカ!？」

興奮を隠せない様子のジーザスに、俺は頷いて見せる。

「その通り」

「姉妹巫女かア……」

マナベもジャガータもジーザスも、全員が豊かな顔になってうっとり眼を閉じる。

「靴下は紺だな……絶対、紺だぜ」

「姉は学校ではおとなしいんだけど私にだけは妙に嘔みついてくるんだよ。コンパスとか物騒な物を投げてきたりしてさあ」

「買い物に付き合わされた時に、ブティックの前で立ち止まる彼女。内心ちよつとオシャレしたいんだけど、家が厳しいからできないんデスよ」

「お祭りのときとか色々お手伝わされるんだ。姉と掃除をしたり、妹と一緒に買い出しとか行ったりしてよお！」

「で、結局、妹もわしの事を好きになっちゃう。それで姉は身を引こうかどうか迷っちゃうの」

「そう！そう！」

「仲良くなったらアレですよ……」

「『『『手作りお弁当・イン・屋上』！』『』『』」

全員の声が揃い、Yeah!とハイタッチを交わす。いつの間にか盛り上がりを見せる萌え話。

ああ、な・ん・て・楽・し・い・ん・だ！

ちなみに顔が赤みを帯びてさえいるマナベ氏は死にそうにない。

「巫女さんの服に着替えてる最中にはったり遭遇しちゃうの、私」

「『ば、ば、ばかあっ！早く出ていきなさいよっ！』『』」

「しばらくして、真っ赤になって部屋から出てくる彼女……」

「『み、見た……？』『』」

「『『『見た！』『』『』」

「『ば、ばかあ……』『』『』」

「『うっひょー……！』『』」

「『頭ポカポカされる俺』『』」

「『身悶える巫女』『』」

全員が異様なテンションになる。

そうして夜は更けていき、俺は勇者タイムを稼ぐために、一時間お

きに犠牲者の墓を作ってやった。

気がついたら、もうあたりは真っすら白んできていた。

もう、朝か……

変な夜だったな……

溪谷がヤバいらしい

朝帰りというのは男にとって非常に気まずいものらしい。

確かにそうだ。

俺も今、奇妙な後ろめたさを感じながら、老師と二人で藪の中から馬車を遠巻きに眺めていた。

朝早いから、まだ全員あの中で寝ているんだろう。

「ワシはあくまでもさりげなくやり過ごした方が良いと思う」

老師が言う。

「こつこつというのは隠し立てしたりすると逆に修羅場になるもんじゃ」

一理あるな。

「『メイド喫茶に行って朝帰り』などと……白い目で見られる事は必至じゃが、真摯な気持ちでもって事情を説明すれば、きっと我々の誠意は伝わるはずじゃ」

「そうツスね。そもそも本物のメイド喫茶じゃなかったんだし……」

俺と老師は藪の中からすつくと立ち上がり、覚悟を決めて馬車へ向けて歩き始めた。

その時

「あ、メイド喫茶に行っただま朝まで帰ってこなかった人達だ」

「うひいー!」

俺達は突然背後からかけられた声に驚いて、3mほど垂直に飛び上がる。

声の主はアライシャだった。

「うわあ、あつはは、すっごい飛んだねえ」

「び、び、びっくりした……」

「なんで？」

キョトンとした彼女の顔を見るのに、どうやら先程の言葉に特別な悪意は含まれていなかったらしい。

俺はひとまずホツとして、アライシャに近寄った。

「ずいぶん朝早いんだ」

「へへ、まあねっ。ボクは早寝早起きがモットーなの」

「……ところで昨日の夜、プルミエルやメイヘレンは何か言ってたかな？」

「へ？」

「ケインチはスケベだとかエロスの申し子だとか淫獣の牙だとか、そういう罵詈雑言の限りを尽くして俺を貶めたりはしていなかったか？」

「うーん、言っていなかったと思うなあ。ずっとあのR-18をいじってたみたいだよ」

「あいつか……」

俺は本日二回目のホツと同時に、R-18へのちょっとした嫉妬に襲われた。

あんなポンコツロボットのとこが良いんだ？

俺のほうが男前だし、なんたって異世界の勇者だぜ！

「おお、メイド喫茶に行つて朝まで帰つてこなかった異世界の勇者じゃないか」

「うひい!?!」

俺は再び3mほど飛び上がった。

今度の声はメイヘレンだ。

「ふふ、まったくエロスボーイめ。私の渡したお金でずいぶんと楽しんできたようだね」

「ち、違つツ! 決してやましい事は何一つしていない! ね! 老師!?!」

「そつじゃ! 結局メイドはおらんかったし!」

「泣き寝入りだよ! 俺達はよお!」

「ま、そついうことにしておこうか。ふふ……」

そ、その意地の悪い微笑みときたら……くそつ!

「あ、メイド喫茶に行つて朝まで帰つてこなかった性の虜囚たちだ」
「はーん! やつぱり!」

絶対この一連の流れでプルミエルが出てくると思つたんだよ!
そしてその予想は当たる。

「プルミエル、信じてくれ! 俺達にやましい事は無い!」

「どうでもいいーわよ、そんなの。昨日は完徹でR-18をいじくり回したから眠い眠い……」

「ど、どーでもいい!」つて……」

それはそれで寂しい言葉だ……

馬車は順調に走り、森を抜け、溪谷にさしかかる。

眠い眠いなんて言いながら、プルミエルは熱っぽく俺に昨日の成果を語り続けていた。

「……と、いうわけでこのR - 18はアルヴァンの作り出したものではない可能性が高いのよ。これは凄いことよ。コントロールする人間無しで自律的に行動するようなハイスペックの魔芯兵器を、スハラム・アルヴァン以外の人間が作ったなんて！」

「……」

俺も老師も一応ウンウン頷いては見せるが、寝不足の頭では彼女の語る内容の半分も分かつちやいない。

「では、誰が作ったのか？それが問題ね。なにせ当のR - 18自身が分からないという以上はどうしようもないわ。でも、私はそれを解明して見せるわ！」

俺の脳裏によぎったのは、R - 18を起動させた時に画面に映ったあの少女。

あれがたぶん製作者なんじゃないかな。

でも、それを話すと長くなりそうなので、その話題は次の機会にしたい。

「凄いぜ……頑張れよっ！ところで俺と老師は昨夜から一睡もしてないから寝たいぜっ！」

「マスター、オヤスミニナル前二、勇者タイムヲチャージスルコトヲオススメシマス」

「ん？もうそんな時間か？」

「まあ、そうだな……」

「セイ！」

「な!？」

俺が頷くと同時に、R・18は素早い突きをプルミエルに向かって繰り出した。

「うおおおっ！」

俺はすんでのところで身体をねじ込み、プルミエルの代わりにR・18の重たい正拳突きを脳天に受け止めた。

「うはああ……んっ!？ん、おおおおおっ!？」

ヒットと同時にR・18の拳が唸りを上げて高速回転を始め、ガリガリッ!と俺の額を削っていく。

「うおおおおおっ……!」

首を危険な角度にのけぞらせる俺の背後で、プルミエルが勝ち誇ったように胸を張る。

「どーよ、ケンイチ。自律した判断能力で勇者タイムのチャージを手伝ってくれる魔芯兵器!すごいわねー?」

「いや、その凄い兵器に今まさに君は殺されようとしてただけど……ぶふう!？」

R - 18はもう片方の拳をズドン！ズドン！と俺の脇腹に叩きこんでくる。

そこには一切の容赦も遠慮も無い。

コイツは俺をどうしたいというのか。

「ぐふっ！……なあ、プルミエル、げはっ！……コイツ、何でこんなにマジなの？うぼっ！」

「やーねえ。手加減したら勇者タイムがチャージできないかもしれないからでしょ？」

「うげっ！……だが、こんなにマジだと、ぐふっ！……俺が一瞬でも遅かったら、今ごろ君はミンチになってたぜ？って、うおおおお！やめろ！目玉はやめろっ！ボディーにしろ、ボディーに！」

「勇者の腕の見せ所ね」

「マスター、勇者タイムハイカガデスカ」

『58:20』

「大丈夫だ。お前の殺戮行為を阻止することによってしっかりチャージされたぜ……やめろっ！そのドリルのようなパンチをこめかみに打ち込むのはやめろ！うへあ！」

俺を思いっきり殴り倒してから、R - 18は停止した。

「ヨカッタデスネ」

「……何がだよ……軽く二分以上も余計に殴り続けやがって……」

「デスガ、コレデアト五十分八眠レマスヨ。今度八老師ヲターゲツトニシマス」

「ワ、ワシ！？ケンイチ、こいつマジ危険！」

慌てふためく老師をよそに、俺はソファーに寝っ転がった。

ま、老師ならいいか。

次に目覚めた時に、グロい死に方だけはしないでいてくれ。そんなことを考えながら、俺がうつらうつらと夢見心地になり始めた時だった。

ギョーン！と馬車全体が揺れ、急停止した。

「うおおっ！あぶねえな！」

「何かしら？」

俺達はぞろぞろと外へ出てみた。

渓谷はいつの間にか霧が深く出ていて、どこか遠いところで水の流れる音がする。

よくもまあ、こんな視界不良な場所であんなスピードの馬車を操れるもんだ。

「どうして止まったの？イグナツィオ」

御者台へ向かってプルミエルが訊く。

「……前方に何かいますね」

返ってきたイグナツィオの声はいつになく真剣だ。

「どー？」

「この先です。あ、たぶん皆さんには見えなと思います」

濃霧のせいで隣に立っている人間の顔も良く分らないくらいの状態だ。というのに、イグナツィオは絶対的な確信を持って言う。暗殺者の目ってやつだろうか？

「何がいるんだ？」

「へんな生き物です」

「はあ？」

何だよ、それ。

あまりにも漠然とし過ぎてるだろ。

「どうへんなんだよ」

「一口では言えないですね……とにかくへんですよ」

とんちみたいな会話になってきたな。

ま、ウダウダ言っても仕方ない。

「へんなだけなら無視して先に進もうぜ」

「いやあ、でも道を塞いでるんですよ。ケンイチさん、あのへんなのをどかしてきて下さい」

「は！？なんで俺が！」

「いーじゃん、ケンイチ。どかしてきなさいよー」

「不死身なんだから気楽だろう？」

「はよ行け、小僧」

「マスター、ファイトデス」

テメエが行けよ！ちくしょう！

ロボット三原則ってのを知ってるか！？

「ほれ、ゴー！」

無責任な掛け声に背中を押され、俺は泣く泣く霧の先へ足を進める。まさに五里霧中。

トボトボと霧の中を歩いていくと、やがてその『へんな生き物』の

影が見えてきた。

やべえ……結構デカイぞ……

次元の狭間で遊ぶ猫だと？

そこにいたのは本当にヘンな生き物だった。

どうヘンなのか、どこから説明したものか……まず、道にどっしりと寝そべっているその巨体はまるで毛の生えた小山のようだ。

だが、まるきり未知の生物という風情でもなくて、こっちにだらしなく放り出している手足の裏についている肉球と、時折ぶるんと揺れる大きな尻尾を見るかぎりには、この生物のベースは猫のようでもあるように思われた。

(だが、こいつは猫じゃねえ……！)

なぜなら、その身体には異様に長いキリンのような首がついていて、その先に乗っている小さな頭は鹿のような立派な角を生やしているのだ。

顔は猫だ。

でも、見た感じは全然猫じゃない。

(うへえ、気持ちワルイな……シシ神様か?)

と、その時、そのシシ神様がこちらへクルリと首を向けた。

「うおー！」

「……………」

じーっと金茶色の瞳が俺を見つめ、そして、口元がにやりと笑った。その不気味なること筆舌に尽くし難し。

俺はこのまま命を吸われてしまいかもしれない…………

「お前……」

「!?!」

「しゃ、喋った……だと……!?!」

「俺はうなじの毛がざわっと逆立つほど戦慄した。」

「猫？は気にせず続ける。」

「お前は勇者か……?」

「その老女のような声は妙に落ち着いていて、澄んだ響きを持っていた。」

「お前は誰にこの地の事を聞いたのだ……?あの酔いどれか?」

「は?」

「それとも……カーツ!」

「うおおっ!?!」

「カーツ!という凄まじい喝を真正面から受けて、俺の身体は大きく仰け反った。」

「まるで肉体から魂を押し出されたような衝撃!」

「感覚としては重たい岩をぽんと胸元に投げ渡されたような感じだ。」

「俺はヨレヨレと後ずさって、その場にぺたんと尻餅をつく。」

「ふむ……踏みとどまるほど豪胆でもなければ、逃げ出すほど小心でもないか……」

「猫？は一人で勝手に納得しながら、また目を細めて笑った。」

「あの……」

「カーツ！」
「うへあああつ!?!」

再び腹にずしりと響く衝撃に吹き飛ばされて、俺は地面に這いつくばった。

「何だ、異世界の勇者よ」

「あ、あなた様は一体……」

頭を地につけるような格好で、猫?に対して恐る恐る敬語で接する俺を無様だと思わんでくれ。

あの内臓を直撃するようなカーツ!を食らうと、こんな風に低姿勢になるのも無理はないのだ。

それでなくても、この猫?には神のような恐るべき威厳が漂っていて、傍にいただけでも妙な息苦しさを感じる。

「私か?私の事を知りたいのか?」

「い、いや、仰りたくなければ全然OKっス!余計な詮索は一切無しってことで、ネ!……ハハハ」

「知りたくないのか」

「し、知りたいと言えば知りたいですけど……」

「カーツ!」

「おあああああつ!?!」

「はつきり言え」

「知りたいっス」

「もう一度言え」

「知りたいっス!」

「ならば教えてやろっ……」

猫?は遙か彼方の追憶の海へ思いを馳せるかのように、その瞳を閉

じた。

「あれは今から二千年以上も昔の事……天と地は二つに分かれ、神族と魔族の間では血で血を洗う戦いが繰り広げられていた……」

「はぁ……」

な、何だか壮大な話になってきたな……

「戦いはいつ果てるともなく続き、その戦禍の拡大につれて世界は崩壊の危機に瀕していった。だが、ある日、その戦いに終止符を打つ者がついに現れる……それが神勇者ヒューバートだったのだ……」

「……」

「後は何か聞きたいことはあるか」

「え……？」

い、今ので終わり!?

こっちの質問に全く答えてねえじゃん!

ヒューバートって一体!?

そもそも誰がそんな厨二っぽい設定を聞かせてくれつつあったんだよ!?

そして結局、お前は何者なんだ……

だが、そんなことは言えるワケがないので、俺はぐつと堪えて無理やり笑顔を作った。

「凄いッスね。ヒューバートは」

「よせ。ヒューバートを軽々しく語ってはいけない」

ヒューバートの話を軽々しく振ってきたのはデメェだろうがあああああ!

とも言えないので、俺は頷いて見せた。

「ス、スイマセン……」

「カーツ！」

「どわあああああつ!? 何故っ!?!」

「理由は無い。これをやるとスッキリする」

「り、理不尽にも程がある!」

猫(?)は俺を見てニヤニヤと笑い続ける。

くそう、いいからそこをどけよ、この野郎!

「あの、実は僕達、この道を通りたいんで……」

「どけというのか」

「いや! 決して、そんなワケでは……」

「どかなくてもよいのか」

「えーっと、それも困ります……」

「はつきりしろ」

やべえやべえ、はつきりしねえと、またあのカーツ! が来るぞ!

「どいて下さいー!」

「よかるっ」

あれ、やけにあっさり……

猫? はゆっくりと起き上がり、俺の方を向く。

「勇者よ、私の名を覚えておけ。私の名は『次元の狭間で遊ぶ猫』

……」

「じ、次元の狭間……?」

「お前がその資格を持つ者ならば、いずれまた会うことになるだろう……」

言いながら、猫の身体はゆらりゆらりと少しずつ透けていって、やがて、その巨体は完全に見えなくなってしまうた。まるで、霧の中に溶け込んでしまったかのようだ。そして、声だけが霧の中にこだまする。

「お前は選択をすることになる…… 人生を決める選択を…… 命の選択を……」

「ど、どういふことだ!？」

「時を待て…… 時を……」

声は完全に聞こえなくなつて、俺はその場に呆然と立ち尽くした。それと同時に霧が徐々に晴れていって、自分が今、そり立つ断崖に囲まれた渓谷にいることに気付く。

「な、なんだつたんだ…… 一体……」

「結局何だったの?」

「さあ…… って、うおお!」

気がつけばすぐ後ろにマイ・ファニー・プルミエルが。

「み、見てたのか? さっきの気味の悪い生き物を」

「ちらつと影しか見えなかったわ」

「超ヘンな生き物だったよ。『次元の狭間で遊ぶ猫』らしいぜ。ハハ、何ソレって感じだよな」

「次元猫ですって!？」

「うお!??ど、どうした!？」

急に彼女が大きい声を出したので、俺はびっくりしてしまった。危うく腰が抜けて転びそうになったのは、さっき散々食らったカイツ！の後遺症だろう。

「次元猫って！『勇者典範』に書いてあった！」
「な、何いっ！？」

あ、あの気持ち悪い生き物が勇者典範に！？
そんな重要なキャラだとは……
だが、思い当たるフシもある。
俺がそうだと名乗らなかつたというのに勇者であることを一発で見抜いたことといい、未来を予見するような意味深な発言を残して去ったことといい、まるでこっちの事を知り尽くしているかのようでもあつた。

「そ、その次元猫は一体、勇者の何なんだ？」

「……さあ」
「へ？」

「勇者典範には『次元の狭間で遊ぶ猫がいる。それは時忘れの庭で勇者を待つ』としか」

「時忘れの庭……？」

「たぶん、ジャパテイ寺院にあるんじゃないかと思つてたのよ、私は」

「……でも、ここで出会つてしまった……つてのはどういふ事だ？」
「どういふことかしら？」

「俺にその資格があれば、また会うことになるとは言つていたけど……」

「……ああつ！不覚だわ！見たかつたなあ、次元猫……」

プルミエルは地団太を踏んで悔しがる。

探究心の強い彼女には気の毒だが、めんどくさい事を俺に押しつけた罰だ。

「次元猫は他に何か言ってた？」

「実のある会話は一切していないよ。神勇者ヒューバートがどうのとか……で、最後には予言みたいのをしていった……」

「予言？」

「俺は決断しなければならぬって……人生を決めるとか、命の選択だとか……」

命の選択……実際に口にすると、とても不安になる言葉だ。

今まで深刻に考えなかったけど、この世界に来てから俺はいつだって綱渡り状態だ。

一時間おきに更新する余命。

手探りで進む目的地。

いや、その目的地に着いたって実際のところ何かあるかも分からないんだ。

命の選択？

何を？

何をしなきゃいけない？

選択？

選択を間違ったら死ぬとか？

死ぬ……？

……とても、不安になった。

「……何だよ、命の選択って……」

「ケンイチ」

「え？」

「せいっ」

呼ばれて顔を向けると、目の前に凄まじい勢いで拳が飛んできて

「おぼおっ!？」

それが俺の鼻骨をへし折らんばかりの強さで叩き込まれた。
グシヨオアッ!という鈍い音。

手加減など微塵も無い。

俺が不死身だから良かったが、そうでなかったら昏倒して一週間ほど生死の境を彷徨っていただろう。

「な、何故だっ……!？」

「いや、暗い顔してたから」

「それだけで!？」

「……ま、あまり真剣に考え込むんじゃないわよ。ケンイチのくせに」

「へ?」

「いつだって人は選択をしながら生きてるのよ。結果としてそれが運命だの人生だの呼ばれるだけでしょ」

「……」

「あなたが今、ここで自分の舌を噛み切って死ぬのも『命の選択』よ。でも、しないでしょ?それはあなたがそう選択してるから。時と場所が違っても同じことよ」

「プルミエル……」

「あなたは自分で選択して、今、ここにいる。ちゃんと生きてる。自分の意思で。何も不安なことなんてない」

すごく簡潔な言葉の数々だけど、説得力があった。

そっだよ。

俺は何度か死にかけたけど、それでも、いつだって何とかうまくやってきたじゃないか。

自分の意思で。

自分の力で。

皆と一緒に。

「そっだよな……ありがとう。元気になったぜ。俺は俺だ！ イッツ・マイ・ライフ！」

「よるしい」

そっ言っつてツンと薄い胸を張るプルミエルは、俺の目にとっても眩しく見えた。

彼女はいつも俺を正しいフォースへと導いてくれる。

その献身ぶりはまるで……いや、まさか……本気で俺の事を……？

「ていつ（みぞおちにエルボー）」

「うぶうぶ！ 今度は何だっ！？」

「不埒な事を考えてそっだったから」

……彼女はエスパーなのか？

「ほれほれ、馬車に乗る！ 先に進むわよ！ こっなったら何としても次元猫に会っつてやるんだから！」

「お、おっ！」

人生の決断？ 命の選択？

おっ！ 上等だ！

とりあえず景気づけに勇者タイムを更新してやるぜ！

そう思った矢先に

「た、助けてくれエ！ケンイチ、殺人マシンじゃ！奴が来るんじやああああ！」

そう叫びながらこっちに向かって必死に走ってくる老師の背後に、目を光らせながら拳を高速回転させているR-18の姿が見えた。まったく、しょうがないな……

一体どこから調達してきたのか分からない大きな馬車に、一体どこから連れてきたのか分からない大勢の女達を乗せて、ラーズは御者台で手綱を振るう。

この男は馬の扱いも人並み外れて上手い。

私はその隣に座り、流れていく景色をぼんやりと上の空で眺めていた。

「おい、何を暗い顔をしているんだ？教授」

「……」

「当てるやろうか？勇者の事を考えてるんだろう？あいつ　そう
だ、ケンイチの事を」

「！」

ずばりと言い当てられて、私は息が詰まる思いがした。

この男は、何故こうも人の思考を読み取ることにかけているのだろう？

「凶星だな？おいおい、魔王の隣で勇者の事を考えるなんて、とんでもない浮気者だぜ」

「わ、わ、私の研究……勇者典範の解読……お、お、お前が現れるまでは人生そのものだった……」

「未練がましいな。いいじゃないか。勇者のことなんか忘れちゃえよ。魔王と一緒にいるほうが楽しいだろう？有り余るほどの女、持て余すほどの自由！退屈さだけを除けばバラ色の人生じゃないか？」

そう。

その持て余す自由こそが、この男の魔王たる所以なのだ。
ただ己の欲するところを為す。

他者への慈悲や思いやりの心など微塵も無い。

事実、ここへ至るまでにすでに五人もの女を馬車の外へ放り出して
いる。

可哀想に、他の女達はそれを目の当たりにして、今ではラーズの一
拳手一投足にすっかり怯えきっていた。

「親分」

「んん？」

「さっきの話ですがね……」

馬車の窓から、カエル顔の男が浮かぬ顔を見せる。

彼の名はコリンチャ。

貿易都市ベデヴィアにおいてラーズの手下として働いていた男だ。
ラーズの館から大量の金貨を持ち逃げしようとしていたところを、
不運にもラーズ本人に見つかってしまい、無理やりこの旅に同道さ
せられる事になった。

「あつしあ、どうにも上手くいく気がしねえんですよ」

「俺もそう思う」

「そ、そんな！バレたらぶち殺されますぜ！？」

「お前がな」

「お、親分……」

「だ・か・ら！バれないように上手くやれってことさ。大丈夫、死
ぬ気になれば何でもできるもんだ」

泣き出しそうな顔のコリンチャを振り返りもせず、ラーズはニ
マリと笑みを浮かべて馬の尻に鞭を入れる。

この男が一体何を企んでいるのか、私には皆目、見当もつかない。

それが彼なりの退屈しのぎの一環であることだけは疑いようの無いところだろう。

己の命も他人の命も、興味が向けば簡単にチップに換えて、くだらないことに賭けてしまふ。

巻き込まれる方は気が気ではない。

と、ここで急にグーン！と馬車は進路を変え、南西の方角へ向かい始めた。

「……ま、ま、待て……ま、ま、魔法塔へ行く道はそちらではない……」

「知ってるよ」

「な、な、何をしている？よ、よ、寄り道は避けた方がいい」

「『急がば回れ』って言葉があるだろ？昨日、もっと早く魔法塔へ行く方法を思いついたんだよ」

「そ、そ、それは何だ……？」

「今に分かる。あんたは黙って俺に合わせてるんだ。いいな？」

念を押されて、私は頷くしかなかった。

そこは大きな屋敷だった。

馬を止めたラーズが、門兵二人に近付いていつて、しばらく話しこむ。

すると男達は互いに首を傾げながらも屋敷内へ向かい、やや時間を置いて戻ってきてから我々を敷地の奥の、石造りの狭い部屋へと案内した。

その部屋の雰囲気からして、どうやら歓待されることは無さそうである。

そこでしばらく待っていると、見上げるほどの大男が舌打ちをしな

がら入ってきた。

「ちっ、使えない門兵どもが……」

「やあ、どうも」

ラーズが立ちあがって、にこやかに握手を求めたが、相手はそれを完全に無視する。

「で？何なんだ、お前達は？ここがムウサ帝国の北方進駐軍本部だと知ってのことなのか？」

大男がこちらに恐ろしい睨みを利かせながら言う。

黒いアンダーシャツの袖から覗く丸太のような腕には、歴戦の兵ならではの大小様々な傷が刻み込まれている。

何故だ……？

よりによって、何故、こんなところへ……？

私はラーズの考えが全く理解できず、ひたすら身を固くして大男の凝視に耐えるしかなかった。

「もちろん存じてますよ」

ラーズはその威圧に一切怯むことなく、いつものように余裕めいた笑みを浮かべたまま応じた。

相手はそれが気に入らないようで、眉間に皺を増やししながら、熊のように巨大な手をバキバキと鳴らす。

「だったらここが観光名所じゃないことも理解しているわけだな？ペテン師野郎が物乞いに来るにはふさわしい場所じゃないってこと

も理解できているか？」

「ま、そのようですな」

「帰れ！今すぐにな。それとも悪名高いムウサ帝国の拷問法を堪能していくか？命乞いをしていたはずの囚人が五分後には殺してくれと懇願する、あれを？」

「まあまあ」

ラーズは両手を広げて害意の無いことを示した。

「とりあえずお話だけでも聞いてみてはいかがですか？その上でこちらの軍の提督様に取り次いでいただきたい」

「その必要はない。提督はご多忙だ」

「とりあえず優先的にこちらの用を済ませたほうがいいと思いますかね」

「遠回しな物言いはやめろ。自分の立場を分かっているのか？」

「では、単刀直入に申しましょうか。こちらにおわす、この御方……」

ラーズは少し身を引いて、コリンチャを示す。

コリンチャは額に大粒の冷や汗を浮かべながら、大男に向けてひきつった笑いを作っけて見せた。

「そのチビが何だと？」

「これ、口を慎まれよ。この御方こそはマルダン帝国、カステイエリ皇帝の御落胤。コリンチャ様であらせられるぞ」

な、何という……

私は目の前が真っ暗になるような眩暈を覚えた。

本当に、この男は何を考えているのか？

大男はラーズの言葉を聞いて、私と同様に呆気にとられたようだった

だが、まじまじとコリンチャの顔を見つめ、続いてもう堪え切れな
いと言った様子で大声を上げて笑いだした。

「うはははは！面白い！俺はてつきりお前達がイカレた自殺志願者
の集団かと思っていたんだがな？まさか、サーカス団だったとはな
！うはははははは！」

「コリンチャ様、かくなる無礼者をいかがいたしましたしょうや？」

「あ、ああ、えーと、う、うむ、よきにはからえ」

「貴公、コリンチャ様はその海よりも深い慈悲によって貴公の無
礼を許すと仰られる」

「うははははは！まだクサイ芝居を続けるのか？度胸のある奴らだ
な？わかった、では、証拠を見せる！」

ラーズはニヤリと笑い、コリンチャの腰に差してあつた剣を恭しく
受け取り、それを大男の前に掲げて見せた。

「これこそは皇帝様がコリンチャ様の御母上に授けられた剣であ
る」

「何？」

「貴公も軍人ならば、それがどれほどの拵えの剣であるかはお分か
りでしょう。剣の柄をご覧よ。マルダン帝国の紋章であるアラベ
スクが輝いておりましょうが」

「……」

「加えて、こちらの御仁をどなたと心得るか。ベデヴィア・アカデ
ミーの名誉教授、ヤッフオン・ダフォン殿であるぞ。ヤッフオン教
授はコリンチャ皇子の後見人でもあらせられる」

「……しばし、しばし待っておれ！」

大男は剣を掴み、慌ただしく部屋を出ていった。
おそらくは上官へ指示を仰ぎに走ったのだろう。

こんな途方も無い話についてほんの少しでも真偽の判別を戸惑うということは、あの男もさして頭の回る方ではないようだ。だが……

「マ、マ、マルダン帝国……」

「おいおい、嘘だよ。剣は本物だがね」

「わ、わ、分かっている……し、し、しかし一体、どうやって？あ、あの剣は何だ？」

「あれはケンイチの置き土産さ」

「な、な、なぜ、彼がそんな剣を持っている……？」

「さあね。だが、ガキのくせに人徳のある男みたいだからな。意外と本当にマルダン帝国の皇太子と知り合いなのかもしれんぜ」

いや、問題はそれ以前のところにもある。

「い、い、異世界の住人であるお前が……マ、マ、マルダン帝国の紋章を何故知っているのだ？」

「あん？ゼータの部屋に積んであった山のような本を見なかったのか？」

あ、あれを……読破したというのか！？

ざっと見積もっても三千冊はあった、あれを？

「『世界貴族名鑑』もあつたし、『マルダン帝国史』もあつたな。おまけに昨日読んだ新聞に『ムウサ帝国の边境侵略、ドラゴン騎士団の脅威』の文字が躍ってたんでね。コイツは面白そうだと思ったのさ」

「……も、も、文字を読めるのか？こ、こ、この世界の文字を……」
「そこがこのラース・ホールデンの凄いとこでね。どんな難解な文字でも三日もその国にいれば自然と覚えちゃうのさ」

な、なんという恐ろしい男なのか……
腕力も胆力も必要以上に持て余しながら、その上、恐るべき知能をも兼ね備えている。

こんな男が魔王になってしまったという事実には、私は今更ながら、背筋の凍る思いがした。

アルヴァンの魔法塔……あそこへ……

あそこへこの男を案内してしまって、本当に良いのだろうか……

私の煩悶を遮るように、バン！と扉が開いた。

「こちらです、ハルジャ様」

「ん」

大男を従えて部屋へ入ってきたのは、立派な顎鬚を蓄えた初老の軍人であった。

胸にジャラジャラとぶら下がっている大小様々な勲章は、この男の持つ戦功の豊富さと階級の高さを雄弁に物語っている。

彼は席に着くこともなく、じろりと私達を見回し、大きく溜息を吐いた。

「わしがムウサ北方進駐軍提督のハルジャである」

なんと！本当に現れるとは！

あの軍事大国の提督が……！

「御目通りが叶い、恐悦至極でございます、閣下」

「話はこのランシブから聞いた。マルダン帝国の何とやらだと？」

「ここにおわすコーリンチャ様が、マルダン帝国皇帝の御落胤……」

「ふん」

ハルジャ提督の反応を見る限り、どうやら部下の話を鵜呑みにしているわけではなさそうだった。

むしろ、マルダンほどの大国の隠し子を名乗る連中がどういった手合いかを興味半分で見に来たという程度だろう。

「で、何が望みだ？金か？」

提督は単刀直入に切り出した。

「話が早くて助かりますな。こちらの要求はこうです。そちらの御自慢、ドラゴン騎士団……」

「何……？」

「コーリンチャ様はわけあって旅路を急いでおります。つきましてはパルミネの港町まで、瞬く間に千里を飛ぶと言われるドラゴンの背に乗せて頂きたいのです」

馬車ではなく、ドラゴンを使ってパルミネに行くことなのである。先程の言葉……『急がば回れ』とはこういうことだったのか。しかし、おお、なんとという突拍子もない考えであることか！

「ふざけるなよ！ペテン師風情が！」

大男が額に青筋を立てながら叫んだ。
当然の反応である。

「我が誇り高きドラゴン騎士団を、旅の足に使おうというのか！？」
「おや、よろしいのですか？国際問題になりますぞ？いずれは世界に覇を唱えようという貴国といえども、今の時点でマルダン帝国と

事を構えるは得策とは言えますまい？」

「黙れ！いつまでその猿芝居を続ける気だ！！」

「やれやれ……」

ここでラーズが動いた。

何でもないような緩やかな歩みで大男の前に立ち、にやりと笑う。次の瞬間。

「げえっ……！！」

まさに電光石火の一撃であった。

ラーズが、大男の喉に深々と手刀を突き込んだのである。

意識を失い、白目を剥いて崩れかける男の頭をラーズは手で掴み、それを勢いよく石壁に叩きつける。

グシャツ！という不快な破裂音とともに壁一面に血が飛び散って、大男はズルズルと床に力無く倒れ込み、ピクリとも動かなくなった。無駄な動きの一切ない、完璧な手際であった。

「な……」

提督は目を見開き、後ずさる。

ラーズはそちらへ向けて、ニヤニヤと笑いながら一歩ずつ歩み寄った。

「分を弁えぬ部下をお持ちになると、さぞ、ご心労も多いことでしょう。お察しいたします、閣下」

「う……誰ぞ！誰ぞある！」

提督は悲鳴にも似た声を張り上げる。

ラーズはそれを聞いて慌てた様子も無く、腕を伸ばして提督の襟を

掴まえると、ぐいと引き寄せて部屋の扉を閉めた。

「あつ、な、な、何をする!?!」

「あなたがこつちの要求を呑めば、この部屋から生きて出ることができるぞ。交渉決裂なら、その大男と同じ目に合わせる。どうする?」

「よ、要求?」

「もう一度言うぜ。俺はドラゴンに乗りたいたいんだよ。せつかく異世界に来たんだしな」

「ドラゴン……」

「そうさ。それだけさ。減るもんじゃないし、良いだろう?」

「ほ、本国の正式な宣戦布告も無しに、私一人の権限で他国にドラゴン騎士団を飛ばすことはできん」

「お忍びで陣中を訪れたマルダンの皇太子が、それを望んだってだけさ。あんたは外交上の摩擦を回避するために、止むを得ずそれに応えた。どうだ?これだけの言い訳が整えば、あんたの尻には火はつかんだらう?」

私も、横に突っ立っているコリンチャも、口をあんぐり開けて事の顛末を見守ることしかできないでいた。

すると部屋の外にガシャガシャという金属音が近付いて来て、扉の前で止まった。

兵士が、先程の提督の悲鳴を聞きつけて走ってきたのだ。

「ハルジャ提督、どうなさいました?」

扉の向こうから、兵士が問いかけてきた。

ラーズは顎をしゃくって、提督に言葉を促す。

「……ド、ドラゴンを手配せよ。マルダンの皇太子殿がドラゴンを

「所望だ」

「ドラゴン、ですか？しかし……」

「いいから、早くしろ！」

「はっ！しかし提督、ドラゴンライダーは本国に帰還しております。召還するには三日ほど……」

「何……いや、アガシがおるだろう！アガシを呼び戻せ！今すぐだ！」

「は、はっ！承知いたしました！」

扉の向こうでガシャガシャという音が慌ただしく去っていき、静寂が訪れた。

「そう、それでいいんだよ、提督。やればできるじゃないか」

「お、お前たちはいったい何者だ……？何が目的だ……？」

提督は震える声で言った。

ラーズはその問いにニヤツと笑う。

そして、万雷の喝采を一身に浴びる役者のように、両手を大きく天に向かって広げた。

「俺は『魔王』……魔王ラーズ……魔王の目指すものは一つだけ……

…そうだろう？」

「？」

「世界征服さ」

世界征服……

その言葉を、ラーズは今まさに、はつきりと口にした。

実に陳腐な言葉だが、この男ならば、それは決して不可能ではないだろう。

やる時はやる、の心得

「俺はイヤな予感がするんだが……どうか」

と、どっかのスレみたいに主張してみたが、誰一人としてその意見に耳を貸してくれる者はいない。かろうじてこちらを振り向いてくれたブルミエルも、眉間にしわを寄せて渋い表情を作っていた。

「何か言った？」

「いや……」

俺達は『シヨジャイの保存集落』の入口に立っていた。

保存集落と謳うだけあって、崖沿いにポツンポツンと建っている質素な茅葺き屋根の民家は、そのどれもが古い歴史を持っていそうな佇まいだった。

だが、雰囲気としては歴史情緒漂う古都というよりは寂れた寒村といったほうがいいかもしれない。

おそろしく静かだ。

村の奥では焚火か何かをやっているようで、白煙がゆらゆらと空に向かって立ち昇っている。

ここからは人影一つ見えないのも、非常に薄気味悪い。

「……なんか雰囲気がヤダ」

「そう？なんでよ？」

「村の雰囲気もそうだが、極めつきはその看板……」

それは村の前に立っている看板のことだ。

俺には読めない文字で、かなり勢いよく書き殴つてあるが、その筆圧の強さには恐るべき情念、というか怨念めいたものまで感じる。

「なんて書いてあるつて?」

「さつきも教えたでしょ」

「聞き間違えたかと思いたいんだが……」

「この先、勇者は立ち入り禁止。許可なく踏み入つた場合は容赦なく抹殺する」。挑戦的だわねー」

「挑戦的っつーか、殺る気マンマンだろ! 『抹殺』つてどーゆーこと!? それを聞いて不安にならない人間がいるか!？」

「何よ、バレなきゃいいだけでしょ」

「バレたら抹殺されちゃうんだぜ!？」

「抹殺されなきゃいいだけでしょ」

なるほどネ! 俺の身の安全に関しては全く心配してくれていないことだけは分かつたぞ。

「でもさ、この『シヨジヤイの保存集落』は勇者典範にも書いてあるくらい勇者と関係ある土地なんだろう? なのに何でいきなり『勇者KILL』なワケ? 『抹殺』つて……勇者に恨みでもあんのか?」「さーねえ……ま、そのところは集落の中で聞くことにしたら?」「本っ当に気が進まないんだが……俺だけ外で待つてるつてのは駄目かな……」

「勇者典範には、この保存集落に『勇者たる証』が隠されてるつて書いてあるんだから、あなたが来なくちゃ意味が無いでしょ」

「『勇者たる証』つて?」

「知らない」

「知らないつて……」

「くどい! (顎にアッパー!)」

「うべれえっ!?!」

ブルミエルの強烈な一撃に俺は宙を舞った。

「何事も案ずるより産むが易し！（みぞおちにジャブ連打！）」

「ごはあぁっあぁ！おっしやるとーりでッ！」

「『俺は殺られる前に殺る主義』くらいのポジティブかつアグレッシブな心意気がなくてどーする！（脳天に力カト落とし！）」

「おごおッ！スンマセンッしたッ！」

地面に上半身メリ込んだ俺のほうは何故かワビを入れるという、この不条理。

痛むのは身体じゃない。俺のこの心……

「おい、置いて行くぞ」

愉快的俺達を尻目に、前方を歩くメイヘレンは悠々と村へ入っていた。

村の中は静まり返っていた。

だが、人の気配が全く無いわけではない。

物陰や窓の向こうから感じる、身体にまとわりつくような不気味な視線の数々。

風に乗って微かに聞こえる、小さく囁きあう声。

基本的には勇者に限らず、余所者は歓迎しない風習があるようだ。

「なーんか、静かな村だねえ」

そう言ったのは俺の隣を歩くアライシヤ。

今は二人つきりだ。

とりあえず手分けして情報収集よ！というプルミエルの鶴の一声でもって、各自がバラバラに行動することになるはずだったのだが、彼女は不安がる俺を見かねてボディガードを引き受けてくれたのだ。

マジ天使。

婚姻届の準備はいつでも出来てるぜ……

「あ、あそこにお店があるよっ。ケンイチ、何か聞いてみようよっ」

「え？」

「ほらっ、行くよっ」

返事をする前に、アライシヤは駆け出していた。

「お、おい！」

俺はとりあえず追いかけるが、メチャクチャ足が早い！

ロンドン五輪が楽しみです……なんて思っている場合ではない。

慌てて彼女の後を追いかけて、その薄暗い店に飛びこんだときには、すでにアライシヤはカウンターの向こうにいる陰気そうなロン毛の親父にいつもの快活さで話しかけていた。

周りを見回すと、狭い店内には酒瓶がずらりと並んでいて、天井からは大きな肉の塊がぶら下がっている。

酒場かな？ま、何はともあれ、客が一人もないのは幸いだ。

「ね、おじさん、勇者のこと何か知らない？」

な……！？

俺は思わず悲鳴を上げそうになる。

オイオイ、勇者をジエノサイドしようって連中に対して、その質問

はストレートすぎるだろ!?

「……………」

ほら、聞かれたおじさんも困惑してるじゃん。
だがアライシヤも退かない。

「ね、勇者のことっ」

「………… オメら、観光客か？」

「うーん、ま、そうかなあ？うん、そう」

「んだら、教えとっけどよ。早くこの村を出たほうがええズラ」
「なんで？」

「まず、勇者の話はこの村では禁止ズラ。看板、見ねだか？」

わお、すつげえ訛ってるぜ…………

「看板？あ、村の外のこと？」

「んだ。勇者なんつー言葉だけでも、誰かに聞かれたら、タコ殴りズラ」

「えー？なんで？この人はなんでそんなに勇者のことが嫌いなのです？」

「それは……………」

店のオヤジは言いかけて止め、首を振った。

「言いたくねえズラ」

「お願い、聞かせて」

「駄目ズラ」

「誰にもおじさんから聞いたなんて言わないよ」

アリイシヤは誠心誠意をこめた瞳で、オヤジの手を握った。相手は手を握られたまま、目をあちこちに泳がせて、しばらく逡巡していたようだったが、やがて諦めたように溜息を吐き、頷いた。そういう心理的な駆け引きとは全く無縁そうなのに、いとも簡単に村の秘事を引き出すその手腕……
す、すごいぜ！

「……ここは『勇者を試す村』だったズラ」

「試す……って？」

「勇者つっ―のは異世界から送られてきた人間のことズラ。だども、奴らは命に制限があるズラ。ほっときや、すぐに死んじゃう。命懸けで他人様に奉仕活動をしねえと異世界の人間はこの世界では長生きできねえズラ」

勇者タイムの事だ。

何回聞いても傍迷惑な話なただけどな……

「だども、勇者が生き続ける方法がある。この村で、この世界に相應しい人間である証を立てつと、こつから先にある『ジャパテイ寺院』で願いを叶えてもらえるんだ。そんな言い伝えがあるズラ」

そ・れ・だ！

俺が、俺達が探し求めているのはまさにソレ！

「あ、証って、何スか？」

俺は食いつくように店主に向かって身を乗り出す。しかし、向こうはゆっくりと首を振った。

「そいは分からねえズラ。だども、この村はずーっと昔からその言

い伝えを信じて、異世界から来た人間を歓迎してきただ」

「え？歓迎？でも、『勇者は抹殺』って……」

「あれは……」

店主のオヤジは力無くカウンターの向こうの椅子にもたれ、天を仰いで大きく溜息を吐いた。

「あれは『魔王教団』の奴らが立てたズラ」

「魔王教団？」

おや？その名前には聞き覚えがある。

確か、貿易都市で……

「ああ、思い出した！魔王を崇め奉る、あのカルト教団……」

「しっ！そんなん聞かれたら八つ裂きにされるズラ。この辺は勇者の聖地だもんで、魔王教団にとっちゃ『異端の呪われし地』なんだと。奴らは五年ほど前からこの村に居座って好き放題やってるズラ……」

店主はがっくりとうなだれた。

よほど酷い目に遭ってきたんだろう。

「あいつらはひでえ奴らだ。盗みや脅しは毎日のことで、立ち小便だってそこらで平気でするズラ」

「た、立ち……って、ええ！？う、うわわ……」

耳まで真っ赤にして、あわあわ動揺するアリイシヤ。

おおっ、なんか、その反応は新鮮だなっ！萌えっ！

「えーと、と、とにかく、その魔王教団の人たちがいなくなれば、

「また勇者を歓迎してくれる？」

「当り前ズラ」

「ケンイチ……！」

アリイシヤがこつちを見て、力強く頷く。

オーケイ、言いたいことは分かってるぜ。

そのカルト集団をボコボコにしてこの村から追い出そうってことだよな！

もちろん異議なし。

「その教団の人たちと話し合ってみようっ」

「へ？」

「それで、もうこの村から出て行ってくれるように頼んでみるっ」

おっと、そう来たか。

しかし、話し合い、か……うーん……

「どうかな？」

「どう、と聞かれてもなあ……うっむ……相手はこつちを抹殺しようって物騒な相手だし……」

俺は気が進まない。

果たして話し合いの余地があるか？ということだ。

前に遭遇した魔王教団のオッサンは、こつちへの悪意も殺意もムキ出しだったし。

どう考えても穏便にコトが進むとは思われない。

そもそも俺個人の裁量ではどうにも決めかねるので、ここはプルミエルなりメイヘレンなりに相談したうえで……

「よしっ、決まりっ！じゃ、行くっ！」

「え！？もう決まっちゃったの!？」

じゃあ、なんで俺に一回聞いたんだ……

「いやいや、でも、とりあえずブルミエルたちと落ち合ってから
ほうが……」

「話すだけだもん、大丈夫だよ」

「話すだけじゃ済まないと思うけどなあ……」

「その時は、拳で語り合おうよ」

おっと、この娘は思ったほど平和的な性格じゃないのかも。

だが、それはそれでいい事だと思った。

俺は好戦的な人間じゃないけど、こっちを抹殺するつもりで向かっ
てくる相手に友愛を説くなんていうのはどうにも好きになれない。

相手の博愛精神に期待する前に、最低限の自己防衛だけはするべき
じゃないか、と思う。

その点、アレイシャが『やる時はやる』という気構えを持っていて
くれたのは良かった。

ま、俺は不死身だから、気楽なもんだ。

彼女は自分の身だけ守ってくれればいいんだからな。

「よし、それじゃあ、ちょっと行ってみるか？魔王教団の奴らに会
いに」

「うんっ」

「お、オメさん達は、一体、何モンだ……?」

店主が顔を上げた。

「ま、まさか……勇者?」

その声を背後に聞きながら、俺達は颯爽と酒場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1174/>

勇者タイム

2012年1月14日01時03分発行